チートじゃ済まないinネギま

雨季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートじゃ済まないｉｎネギま

【Ｎコード】
Ｎ３８７９Ｏ

【作者名】
雨季

【あらすじ】
『リリカルなのは』の世界でハーレムを作ったチート主人公、一条要。
型月最強『ＯＲＴ』の力を持った彼が次に飛ぶ世界は『ネギま』だった。
しかも今回は一人じゃない！！
原作崩壊確実の黒歴史をご覧あれ。
前作の黒歴史『チートじゃ済まない』を見ていればより楽しめます。
コラボは今回も大募集。

リア充御臨終（前書き）

遂に始まった『チートじゃ済まないｉｎネギま』
オリジナル設定もあるのでご注意を。

リア充御臨終

一条要

階級・・・大将

享年・・・９４

要ｓｉｄｅ

・・・・・何処だ此処？川？

「むっ、体が若い」

大体２０代前半といった所か。懐かしいな。この頃は一番いろいろあったな。チートに会ったり、チートと殺し合ったり、チートと遊んだり。

「しかし若いとなると、死んだか」

死んだら全盛期の姿になる者もいるそうだからな。俺もその類なの

だろう。さて、そうなるとこの川は三途川かな。

「こまっちゃーん!!こまっちゃんは何処だー!!」

サボってんのかな?映姫っちに怒られるぞ。・・・・・ふむ。

「後ろにいるのは誰かな?俺の知らない気配のようだが」

「気付いておられましたか」

翼があるな。天使か?翼人か?まあどちらでも構わんか。

「ゼウス様の遣いの者です」

「おぉ、神様のか」

懐かしい人にまた会えるとは。嬉しいね。

「なら連れてってくれ」

「わかりました」

俺らの足元に魔法陣が現れ転移した。

「お久しぶりです」

「元気そうだね」

この人も変わらないな。神様がそう変わったら困るけどな。

「俺の輪廻転生に何か問題でも？」

「あのね、トリッパーがまともな転生出来るとでも？」

「確かに」

「君には『ネギま』の世界で生活して貰うよ」

・・・・・ネギま？どんな世界だっけ？

「忘れたかい？まあ行けば思い出すよ」

「ですね」

さて、それじゃあさっさと飛ぶとするかね。

「そうそう、一緒に世界を飛ぶ人もいるから」

「ほう、誰ですか」

「彼らだよ」

そう言って神様が創った魔法陣から出てきたのは、眼に包帯を巻いた青年。金髪赤眼の女性。ツリ目で赤茶髪の剣士の男性。そして・・・・・

「要～」

「久遠！？」

なんで久遠が。まだ死んでないのに。

「彼女が望んだんだよ」

「そうなのか」

「うん！！家族だもん」

嬉しいね。涙ちょちょ切れそうだよ。っと残りの紹介してもらわないとな。

「神様、紹介お願いします」

「うん。包帯巻いたのが志貴くん。通称『殺人貴』。死徒だよ」

「よろしくお願いします。一条さん」

「敬語じゃなくていいぞ」

まっ、実はというとこの全員に並行世界や異世界で何度も会ってるから別に紹介はいらないんだけど、礼儀だよな。向こうは初対面だし。つか俺の名前知ってるんだな。久遠が話したか？

「隣は彼女のアルクェイド・ブリュンスタッドちゃん」

「よろしくね、要」

「よろしく、アルク」

どの世界でも変わらない性格。好感が持てるな。

「こっちの剣士はクラトス・アウリオンくん」

「よろしく頼む」

「こっちもな」

うん、硬い。でもこれがクラトスだな。にしても全員の力が高いな。こんなに力を持ってたか？

「彼らには修行を受けて貰ったんだ。次は君」

「成る程」

神様の修行か。そりゃ強くなるな。

「ちなみに、まーくんとまーちゃんは『牧原舞人』『牧原舞花』と言う名前で先に飛んでるよ」

あの二人もか。魔界のオジギソウだったのに擬人化しちゃって、遂に異世界で生活か。

「じゃあ修行しようか。そうそう、そのうち君の奥さん達に会えるよ」

「えっ？それってどういう「飛んでけ」」

ちょっと待て！人の話を聞けよ！！

神ｓｉｄｅ

さて、次は彼らを飛ばすか。

「君達は同じ世界の別時代に飛んで貰うよ」

「あの、要は」

「いいんです」

部下に任せてあるからね。

「そうそう、修行に耐えたご褒美だ」

そう言って僕は指を鳴らす。目に見えた変化があったのはクラトス

くんの剣だ。

「むっ、剣が」

「今の君に以前の剣は合わないよ。その剣はまだ無銘だから自分で考えてね」

「そうですか。感謝します」

次に自分の変化に気付いたのはアルクェイドちゃんだった。

「あれ？吸血衝動が、ない？」

「ない訳じゃない。極限まで抑えたんだ。志貴くんもね」

「あっ、本当だ」

あんまり無茶しなければ吸血衝動が再発する事もないだろう。

「志貴くんは直死の負担も抑えておいたよ」

「えっ！？」

志貴くんは包帯をずらして確かめている。とりあえずやる事は終わったし、三人を飛ばすかな。

「君達が何をしようと自由だ。新しい人生を楽しみも良し、何事に介入しないも良し。君達の道は君達で決めろ」

僕はそう言って三人を『ネギま』の世界に飛ばした。さてと、次は

一条婦人達の修行だ。頑張ろ。

要ｓｉｄｅ

「で、此処は？」

「一条様の修行場でございます。久遠様はこちらです」

そう言って天使は久遠を別の部屋へ連れていった。戻ってきた天使は次は俺を案内した。

「一条様はこちらです」

「ＯＲＴ、か」

部屋に入るとＯＲＴが見えた。なんでＯＲＴがいるかは知らんが、とりあえず修行相手なんだろう。ただ・・・・・・

「なんでＯＲＴも俺も鎖に縛られてるんだ？」

動きに支障はないが、鎖に縛られてる。実に不思議な状態だ。

「それは枷です」

「枷？」

「いかなるモノも枷に縛られています。その枷はモノによって違いますが、全てのモノに関係し、最も強くモノを縛るのが、星との関係です」

成る程、修正力みたいなものか。

「今見えている鎖は星との関係です。これがなければ強大な力を得る事になります」

「そうか。じゃあ頼む」

「了解しました。枷が解けたらＯＲＴと戦って、彼を認めさせて下さい。それが一条様の修行です」

すると俺とＯＲＴの鎖が解ける。体が軽い。これならどんな相手でも

「Ｇｙｕｉｉｉｉｉｉ！！！」

「はっ？」

パァン

神ｓｉｄｅ

おお弾けた弾けた。要くんが一瞬で肉片だよ。

「頑張ってね」

要くんには伝えてないけど、ＯＲＴ達アルティメット・ワンは二つの強力な枷に縛られてる。自分の星と地球の二つのね。強大な力を持つモノ程、枷の力は強くなる。それから解放されたＯＲＴは危険極まりない。

「ＯＲＴが折れるか、要くんの心が死ぬか」

永遠に蘇生を続けるあの空間でどんな結果が待っているかな。

「神様、私達の修行は？」

「今やりますよ」

まっ、今は彼女達の修行をやりますか。要くん、妻達の為にも壊れないでよ。

リア充御臨終（後書き）

＜続・アリシャの部屋＞

ア「前作からの人はこんにちは！！初めての人は初めまして！！アリサです！！」

シャ「同じくシャマルです。二人合わせて」

ア・シャ「「アリシャです！！」」

ア「始まったわね」

シャ「まず前作を見てない人の為にあらすじを」

ア「主人公『一条要』はトリッパーです。死んだら神様から能力を貰える事になり『ＯＲＴ』を貰いました」

シャ「それから『リリカルなのは』の世界でいろいろ軽く過ごしたのよね」

ア「最終的にはなのは、フェイト、ヴィータ、すずか、スバルと重婚した変態よ」

シャ「ちなみに完結後は異世界や並行世界に知り合いが出来て、いろいろな世界を旅したりしたそうよ」

ア「管理局員の仕事しなさいよ。大将になったからって怠けるな」

シャ「そうそう、実は今回飛ぶ『ネギま』世界に一人知り合いがいるのよ。もちろん原作キャラね」

ア「ならネギまを忘れるな！！」

シャ「次回は志貴・アルクェイド組の話よ」

ア「初めて異世界に飛んだ二人はどの時代に飛ばされ、何をするのか」

シャ「志貴が死徒になってる理由も軽く説明されます」

ア「スナック菓子の如く軽く進む物語。これからよろしくお願いします」

シャ「さようなら～」

初異世界　志貴・アルクェイド組（前書き）

早速書き上げました。
前作から考えてたからスラスラ書けるね。

初異世界　志貴・アルクェイド組

志貴ｓｉｄｅ

・・・・・着いた、のか？地球とは聞いてるけど、どんな世界なのかはわからないから探索する必要があるな。

「う～ん」

「大丈夫か？アルクェイド」

「ん～、平気だよ」

「そうか」

「それにしてもこんな事になるなんてね」

「ああ、全くだ」

あの時はこんな風になるなんて考えもしなかったからな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

俺は千年城で眠り続けるアルクェイドを守り続けていた。そのためにアルトルージュに頼んで死徒にして貰ったり（その時に一悶着あったんだけど）、アインナッシュの実を取りに行ったりもした。

「フッ！！」

「ギャア！？」

その日も千年城に入ってきた侵入者である死徒を殺していた。今更こんな事に何も感じない。

・・・・・・・・・・・き

「ん？」

何か、誰かの声が・・・・・・

・・・・・し・・・・・き

「アルクェイド！！？」

俺は急いでアルクェイドの眠る玉座に走った。到着するとそこには目を開けたアルクェイドがいた。

「起きた・・・・・のか？」

「うん」

よかった・・・・・・やっと・・・・・・

「志貴、私を殺して・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・えっ？」

アルクェイドが何を言っているのかわからなかった。殺す？誰が？俺が、アルクェイドを？

「嫌だ！！」

「お願い・・・・・・志貴、だけなの」

アルクェイドと一緒にいたい。だけど、このままだとアルクェイドが堕ちるかもしれない。それがアルクェイドを苦しめるというなら。

「ごめん」

トスッ

俺はアルクェイドの死点を突いた。アルクェイドは笑顔のまま死んだ。

千年城が崩れだす。主を失ったのだから当然だ。俺は動く事が出来ない。真祖であるアルクェイドを殺すのに無理をし過ぎたんだ。だけど、動けたとしても俺は逃げる気はない。アルクェイドを殺した今、生きる意味がない。

「さようなら、アルクェイド」

最後に君の笑顔が見れてよかった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さようなら、アルクェイド。ププッ」

「うわー！！止めてくれ！！」

「ごめんなさいね。でも嬉しかったわよ」

実は俺が殺したアルクェイドは魂のない抜け殻だったらしい。神様が魂を抜いてアルクェイドは神様と一緒に俺の最後を見てたらしい。そして俺は死んだ時神様に連れてこられたって訳だ。

「とにかく街を探しましょ」

「ああ、そうだな」

さて、しばらく歩いて街を見つけた訳だが、雰囲気的にはそこそこ古いな。俺のいた時代ではないな。

「しかし、殺気立ってるな」

「ええ、嫌な雰囲気」

いったい何があるんだ？おっ、お婆さんがいるな。あの人に聞いてみるか。

「すみません」

「おや、あんた見かけないね。包帯なんて巻いて」

「あー、盲目なんですよ。それよりこの街で何かあるんですか？」

「ああ、知らないんだね。この前魔女が捕まってね。今日処刑なんだよ。あんな童女の姿で、恐ろしいもんだね」

「・・・・・魔女狩り」

そんな時代に来るなんてな。

「志貴」

「わかってる」

きっとその子に罪はないはず。魔女狩りなんてそんなもんだ。俺らが何しても自由なら、その子を助ける。あの正義の味方みたいで嫌だけど。

???ｓｉｄｅ

よもやこんな奴らに捕まるとは。

「御主人、大丈夫カ？」

「黙れ！！悪魔の人形め！！」

「！？　貴様！！」

よくもチャチャゼロを殴りおったな。封印の術式で縛られてなければ引き裂いてやるものの。だが百年程度しか生きていない私では・・・・・

「皆の衆、これより魔女の処刑を始める」

私とチャチャゼロは十字架に縛り付けられる。このまま火あぶりか。

「なっ!?貴様ら、グアッ!?」

「な、何者、ブハッ!?」

「その子を放して貰おうか」

なんだ、あの男女は。一瞬で二人を倒した上に私を放せ、だと?周りが魔女と言っている私を。

「こやつは魔女だ!!」

「それがなんだ。その子がお前達に何をした。大方異能だからって魔女なんて言ってんだろ」

「黙れ!!貴様らも魔女の仲間だな!!」

「はぁ、困ったもんだ」

周りの奴らが男女に襲い掛かる。しかし二人は軽く捌いていく。これだけで十分わかる。あの二人には私も勝てない。あれほど強い奴

らは見た事がない。

「シカシ、イキナリ助ケニ来ルナンテ、正義ノ味方ダナ」

「悪いけど、正義の味方は止めてくれないか？」

「「！？」」

いつの間に後ろに。速過ぎる。

「よっ」

男が手に持ったナイフを振るうと、それだけで十字架はばらばらになった。

「あれ？君は・・・・・・吸血鬼？」

「！？」

ばれただと！？流石に吸血鬼だと知ればこの男達も

「なーんだ、同族じゃない」

「・・・・・・はい？」

この女もいつの間に。それより同族？こやつらも吸血鬼なのか？

「同族、だと？貴様らも魔女か！！」

「あーあ、もっと怒った。志貴、お願い」

「わかった」

「お、おい！！大丈夫なのか！？」

「大丈夫じゃない？志貴だし」

とはいえ百人以上いるのに一人で戦うのか？この女も全く心配していないし。

『うおぉぉぉぉ！！！』

「この程度、白翼公の軍勢や神様の修行に比べたら」

男は本当に一人で倒してしまった。大規模な魔法を使った訳でも、強力なアーティファクトを使った訳でもない。ナイフと体術のみで殺さずに倒しきった。

「何なんだ、お前ら」

「俺は志貴。死徒だ」

「私はアルクェイド・ブリュンスタッド。真祖よ。ねぇ貴女は？」

名前を聞いた訳ではないんだが、まあいい。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ。こっちは従者のチャチャゼロ」

「ケケケ、ヨロシクナ」

「「へ〜、って真祖！？」」

何かおかしな事でも言っただろうか？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

これが私の師であり、家族である志貴兄様とアルクェイド姉様との出会いだった。

初異世界　志貴・アルクェイド組（後書き）

＜続・アリシャの部屋＞

ア「アリシャの部屋、始まるよ～」

シャ「今回は本編に出た志貴さんとアルクェイドさんをゲストに喚んでます」

志貴「どうも」

アルク「よろしく」

ア「帰りなさい」

志貴・アルク「「いきなり！？」」

ア「ここは地味キャラの聖地よ。それにアが被る」

アルク「フルにしたら？」

ア「基本これなの」

シャ「はいはい、そこまでにして」

ア「むぅ」

志貴「そういえば聞きたい事があったんですけど、なんで俺らは現地の人と話せたんです？」

シャ「いい質問ね。まず自分の手を見て」

アルク「指輪ね」

志貴「いつの間に」

シャ「それは神様の創った道具。その名も『翻訳指輪』（某青狸風）」

ア「それがあればいかなる言語の読み書き、会話、スラングまでわかるわ」

志貴「スラングはいいんじゃ」

アルク「ねぇねぇ、次回の出演はいつ？」

ア「しばらくないわね」

アルク「え～」

志貴「まあいいじゃないか。待とうな」

シャ「では次回もお楽しみに」

初異世界　クラトス（前書き）

このクラトスは強いです。
今回全力は出してないけど、ラカンに勝つレベルかもね。

初異世界　クラトス

クラトスｓｉｄｅ

一瞬だったな。まぁ転移などそんなものか。さて、ここは何処だ？地球というのは私の世界とは全くの別物だからな。まぁ常識的な事は神様に一からご教授頂いたから問題ないが。しかしこのような事になるとはな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

森の奥の小さな小屋のベッドの上、私はその時既に虫の息だった。病だった。まさか天使の病に『永続天使性無機結晶症』以外が存在するとはな。しかし・・・・・・

「・・・・・・満足だ」

私はこの人生を満足に生き抜いた。仲間の最後も見届ける事が出来た。もちろん、ロイドのもだ。私には十分過ぎる人生だった。だがその時、突然声が聞こえた。

『こんにちは、クラトス・アウリオンくんだね？』

「・・・・・・何者だ？」

『神様です』

神、だと？そんなものが実在するのか？

『君、僕の下で働きなさい』

「・・・・・・はっ？」

いきなり何を言っているのだ。第一私はもうすぐ死ぬというのに。

『死んだら迎えを送るから。バイビー』

・・・・・いったいなんだったのだ？死ぬ前の幻聴？それならロイドやアンナの声を聞きたかった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

死後、実際に神様の遣いが来たからな。断る訳にもいかんからな。

だが着いて行ったら地獄のような修行をやらされるわ、書類を任されるわ。

「・・・・・・はぁ」

ついため息が出てしまったが、しばらくはあれから解放されるのだ。生を謳歌するとしよう。

パン　パン

「むっ」

今のは、銃声か。かなり近いな。行ってみるとするか。

？？？ｓｉｄｅ

くっ、まさかこんな事になるとは。

「二人じゃもう無理だろ。うちの組織相手によくやったが、諦めな」

「まだまだこれからだよ、なあコウキ」

「ああ、もちろんだ！！」

とは言ったものの、残った相手はほとんどが上位の魔法使いで私達を囲んでいる。こっちに残っているのは魔法処理が施された弾丸が少々と通常弾のみだ。

「旦那」

一人の男が対峙していた男に近づき耳打ちをする。

「ん？なんだ・・・・・ほう、あの娘は魔眼持ちか」

ちっ、ばれたか。

「君達の待遇を変えよう。私達に付くのなら今のまま。付かないのなら催眠でも掛けて売ろう。なぁに、少女、君は魔眼持ち。高く売れる。男も能力が高い。いい待遇が待っているだろう」

「お断りだね。僕らはＮＧＯなんだ」

「悪に手を貸す気はさらさらない」

パパパパパパパパパパ

私達はサブマシンガンを乱射する。しかしそれは男の障壁に防がれる。

「実に残念だよ。では、やれ」

くっ、ここまでか。

「多勢に無勢だな。手を貸そう」

「えっ？」

なんだこの男は随分と奇妙な格好をしているが、腰の剣と盾を見る限り剣士なのか？

「・・・・・何者だ？何故そいつらに手を貸す」

「傭兵だ。手を貸す理由か？」

剣士の男は白銀の剣を抜きながら言った。

「肩慣らしだ。的は多い方がいいだろう？」

「やれ！！」

ターゲットの男の合図で周りの魔法使いが、剣士の男と私達に向かって魔法の射手を放つ。全く隙間のない弾幕、逃げる事は出来ないだろう。

「フッ、守護方陣！！」

だが剣士の男が剣を掲げた瞬間、男を中心に私達も囲む魔法陣が出来た。魔法陣はたやすく魔法を防ぎ、私達も癒した。

「なんだその魔法は！？」

「魔法ではない。魔法とは、こういうものだ！『サンダーブレード』

！！」

『うわあぁぁ！？』

宙に現れた雷の剣が地面に突き刺さり、周囲に雷撃を発生させる。
なんだこの魔法は！？見た事がない！！だが、今がチャンスだ！！

「コウキ！！」

「準備万端だ！！」

パパパパパパパパパパ

「ギャア！？」

「うわぁ！？」

私達は残っている魔法処理された弾丸を確実に当てていった。剣士の男はその間にも剣技で敵を薙ぎ払っていた。

「まさか、お前のようなイレギュラーが出るとはな」

「戦場では常にあらゆる可能性を考慮するべきだ」

「くくっ、確かに。だがこれは耐えれるか！？
ミョル・ニル・ドラン・グングニル！！
来たれ雷精、風の精！！
雷を纏いて吹きすさべ、南洋の風！！
『雷の暴風』！！！」

これはマズイ!!
私は剣士の男に逃げろと言おうとした。しかし男は僅かに笑みを浮かべていた。

「剛」

男が軽く跳び、剣を振り上げる。魔法はすぐ目の前に迫っている。

「魔神剣!!!!」

男が地面に剣を叩き付ける。すると凄まじく強力な衝撃波が巻き起こり、あの魔法を掻き消した。

「・・・・・化け物か」

「人は理解出来んものをそう呼ぶ。私からすればお前は弱すぎただけだ」

ターゲットの男は戦意をなくしたのか崩れ落ちた。

あの後応援が到着し、ターゲットの男達を連れていった。

「ありがとうございます。助かりました」

「構わん。肩慣らしだ」

「感謝、しています」

コウキはそうでもないようだが、私は警戒していた。あれだけの力を持ち合わせていれば多少は噂があるはず。だがこんな男は聞いた事がない。

「あの、お願いがあるのですが」

「何だ」

「僕らの手伝いをしてもらえませんか？」

「コウキ！？」

いったい何を言っているのだ。こんな得体の知れない変な格好な男を引き入れるなど。

「彼は悪人じゃない。瞳を見ればわかる。それに傭兵ならお金を払うだけでいいだろう？」

「・・・・・いいだろう。しかし金はいらん」

「何故？傭兵なのだろう？」

「衣食住。それと裏についての資料を。山篭もりしていてそこいらについてはよく知らんのでな」

山篭もり・・・・・・嘘だろうな。こんな変な格好で山篭もりをする人間がいるか。・・・・・・・・・さっきから格好についてしか言ってないな、私。

「わかりました。僕はコウキ、よろしくお願いします。ほら、マナも」

「・・・・・・マナだ」

「クラトス・アウリオンだ」

・・・・・確かに悪人の瞳ではないか。だが信用した訳ではないからな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

これが後に僅か数年で最強の傭兵の名をほしいがままにしたクラトス・アウリオン。・・・・・・クラトスおじさんとの出会いだった。

初異世界　クラトス（後書き）

＜続・アリシャの部屋の時間です＞

ア「さあ始まったわよ」

舞人「続・アリシャの部屋の時間です」

シャ「まーくん！？」

舞花「司会は私達(わたくし)四人で進めますわ」

ア「まーちゃんもか！！認めない！認めないわよ！！」

舞花「お父様に言い付けますわよ」

ア・シャ「「ごめんなさい」」

舞人「今回のゲストはクラトスさんです」

クラトス「よろしく頼む」

舞花「随分理不尽な誘拐方法でしたわね」

クラトス「あの神様だからな」

ア「成る程」

シャ「確かに」

舞人「やっぱりクラトスさんも『翻訳指輪』（某青狸風）を付けてるんですか？」

クラトス「ああ、私の場合は事前に知っていた」

ア「そうそう、次回は新たなクロスキャラ登場！！そして要の修行終了！！」

舞花「修行シーンがありませんでしたが」

シャ「じゃあちょっと見せてあげる」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「Giiii！！！」

「くそっ！！」

グシャ

３４１８段目

「Ｇｙｕａａａ！！！」

「ちぃ！！」

ザンッ

「ぎっ！？脚が「Ｇｉｉｉｉ！！！」ヤバッ！！」

パァン

３４１９段目

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

シャ「こんなの延々と流すわよ」

舞花「申し訳ありません」

クラトス「これは、修行か?拷問より酷いのでは」

舞人「一瞬で死ねるだけ、毒殺とかよりマシですよ」

ア「では次回も見てね」

風神少女現代入り　そして真打ち登場（前書き）

今回も新たにクロスキャラが登場。題名でわかるよね。
そして二話ぶりに主人公の登場。

風神少女現代入り　そして真打ち登場

幻想郷

今日も空を高速で翔ける少女がいた。

「ふふふ、あの八雲紫の部屋がここまでファンシーだったとは。これは明日の朝刊の一面に」

学生服を着てカメラを手に持った彼女の名は『射命丸文(しゃめいまるあや)』。幻想郷で新聞記者をしているパパラッチ、もとい烏天狗である。

「あら、そんなに急いで何処へ行くのかしら？」

「げっ、八雲紫」

突然空間の裂け目から出てきた紫色でコーディネートされた服を着て、日傘を持っている彼女は『八雲紫(やくもゆかり)』。幻想郷の賢者である。

「そのネガ、寄越しなさい」

「ハハハ、お断りします」

「そう、『紫奥義「弾幕結界」』」

「いきなりそれですかー！？」

文の周りに無数の光弾が現れ襲い掛かる。しかし文も伊達に幻想郷最速を名乗ってはいない。その弾幕を見事に避け続ける。だがそれ

にも限界はあった。

「きゃあ！？」

一発の光弾が当たり、その隙に無数の光弾が当たってしまう。そのまま文は落ちていった。

「反省なさい」

紫がそう言うとスキマが現れ、文は地に落ちず、スキマに吸い込まれた。

『ゆかり～ん』

「あらゼウス様、どうなさいました？」

『あやや貰ってくよ』

「・・・・・・はい？」

その時、紫はスキマの中から文が消えたのを感じた。

「ちゃんと幻想郷に戻して下さいよ」

『うん。要くんも一緒の場所に送るから大丈夫だよ』

「それは・・・・・・」

確かに彼なら大丈夫だろうが、別の意味で大変ではないか。そう思った紫だった。

文ｓｉｄｅ

あいたたた。こんな森に人を落とすとは、あの少女臭め。

「少し怪我が深いですね」

これではスペルカードが使えませんね。

「せっちゃーん、こっちこっち」

「このちゃん、危ないよー」

おや、子供の声がしますね。さっきの落下が見られたのでしょうか。

「ふぇ、お姉さん何しとるん?」

「！　何奴!!」

出てきたのは黒い長髪の幼女と、木刀を持った黒いサイドポニーの幼女。後者は大分警戒しているようですね。こういう時は・・・・・

パシャ

「天狗の新聞記者です」

写真を撮ってしまえば良いのです。ほら二人共ポカンとしちゃって実に可愛いらしい。

「お姉さん天狗さんなん？」

「ええ」

「ふぇ～。うち初めてやわ～」

「ちょっ！このちゃん！？」

長髪の子供が近づいてきます。サイドポニーの子供はそんなに警戒しなくても良いものを、別に取って食べる訳では

「危ない！！」

「えっ？」

私は天狗の団扇を取り出し、弾を放つ。狙いはサイドポニーの子供の後ろで金棒を振りかぶっていた鬼。

「ぐえっ！？」

弾が当たった瞬間、鬼は消えた。幻術？いえ、確かにいました。力は下級妖怪程度でしたが。

「おいおい、ねーちゃん。やってくれるやないか」

「ひっ、な、何なん」

「私の後ろに。貴女も」

「は、はい」

いつの間にかいた鬼達、一瞬見えたのはあれが突然現れたところ。召喚でしょうか。私一人であれば逃げるのもスペルカード無しで倒すのもたやすい強さ。でも子供を守りながらとなると・・・・・・

「上司の鬼に逆らうのは気が引けますが、子供を襲うのは見逃せません、ね！？」

ガキィ

「ほぉ」

上に気配を感じたので咄嗟に団扇を掲げると、剣を持った顔が烏の烏天狗が襲い掛かってきた。

「お姉さん！！」

「大丈夫」

この程度の妖怪にピンチに晒されるとは。応援があれば・・・・・・

神ｓｉｄｅ

さて、要くんの修行はどうなったかな。

「ゼウス様、一条様と久遠様、お二方の修行が終了いたしました」

「ご苦労」

早かったな。久遠ちゃんはともかく、要くんがもう終わったか。部屋に入ると、座禅している要くん。その膝の上で寝ている久遠ちゃん。そして隣に居座るＯＲＴがいた。

「時間だよ」

「了解しました」

要くんとＯＲＴが一瞬で一つになる。確かにＯＲＴを認めさせたようだね。

「そうそう、刹那くんからプレゼント」

そう言って僕はクローク『朔夜』と腕輪『マジックキラー』を渡した。クロークは魂と融合するタイプなので要くんに取り込まれた。

「あいつか、毎度有り難い」

「じゃあ飛ばすよ」

「了解しました。久遠」

「ん～、時間？」

「ああ」

「飛んでけ！！」

僕は二人をあややがいる場所へ飛ばした。これからどんな物語を紡いでくれるかな。

「ではゼウス様、お仕事です」

「・・・・・クラト「いません。飛ばしたでしょう」ｏｒｚ」

木乃香ｓｉｄｅ

始めはお空から人が落ちてきたんが見えたのが始まり。森に入ったら怪我をしたお姉さんがおって、なんや鬼さんが出てきて、よーわからん。

「お姉さん!!」

「大丈夫」

烏の顔したんがお姉さんに剣を振る。お姉さんは守ったけど、苦しそう。誰か助けて。

「・・・・・ぉーぃおーい、危ない、ぞ!!!」

「グボッ!!」

ま、また人が落ちてきた!?今日はどうなっとんや!?

「か、要さん!?」

「ん?文か。久しぶり」

このお兄さんとお姉さん知り合いなんか。

「な、なんで此処に」

「そんな事簡単だ」

お兄さんはその青白い髪を煌めかせながら言った。

「助けにきた。そんな理由じゃ不満か?」

「・・・・・えっ／／／」

うわー、かっこええ。お姉さんの恋人なんかな？羨ましいなぁ。

「本当は文がいるのは知らんかったけどね！！」

「私のドキッを返せ！！」

ありゃ、ボケかいな。

「まあいい、久遠、守ってやってくれ」

「うん」

お兄さんの肩に乗っとった狐さんが女の子になった。なんや今日はいろいろあるなぁ。

要ｓｉｄｅ

まさか文がいるとはな。紫か？まあどうでもいいか。今はこの鬼共を潰す。

「嬢ちゃん、木刀借りるぜ」

「え、あ、はい」

「なんや兄ちゃん、剣士かいな」

鬼がそんな事を言ってきた。

「そうだな～」

俺は考え込むような振りをしながら懐から取り出した魔導式ハンドガンを撃った。

パン　パン

「ぐえっ！？」

「ガハッ！？」

これで二人を倒したな。

『卑怯だー！！』

なんかみんながそんな事言ってきたけど、何がいかんのか。

「兄ちゃん！！あんた剣士やないんかい！！」

「強いて言うなら格闘家だな」

『銃使いでもなかった！！』

問題あるか？　格闘家が銃使ってもおかしくないだろ。

「喰らい！！」

「遅いな」

金棒を振りかぶった鬼より速く木刀を振るい、首に叩き付ける。鬼の首は折れ、消え去った。木刀も折れたけどな。

「凄い・・・・・・」

おいおいサイドポニー少女、この程度に関心するなよ。

「まだや！数で攻めんかい！！」

『うおぉぉぉぉ！！』

あれがリーダーが。まあその前に周りから襲ってくる雑魚を蹴散らすか。

俺はデバイスの『アリストテレス』を起動させる。

「アリストテレス」

《了解です。魔力弾精製》

「ニードルマシンガン」

ダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダン

『ギャアァァァ！？』

魔力弾を針のようにして乱射する。

しかし弱い。この程度しかないのか。

「最後はお前だぞ」

「ええやろ。やったるわ」

ふむ、確かに他に比べたら強いんだろうが。

「ほらよ」

ドゴン

「ガッ!!?」

俺の拳を一撃喰らわせてやっただけで沈む程度じゃあな。まだ能力解放もしてないってのに。

《主》

「ああ、シールドスライサー」

俺は森のある場所を狙ってシールドスライサーを投げる。シールドスライサーは木を切り裂いていき・・・・・・

「ぐあっ!?」

一人の男を切った。非殺傷だから傷付いてはないだろうが、こいつが召喚主かな。

「終わった終わった。お前達大丈夫か?」

「要さん、更に強くなってませんか?というか若く」

ああそうか、初めて文達に会ったのは三十代だったからな。

「気にすんな、文。ああ嬢ちゃん、木刀弁償するよ」

「いえ、守ってもらいましたので」

「お兄さん強いなぁ」

「まあな。で、そこにいるのは誰だ?」

俺がそう言うと一人の男が出てきた。なかなかの強さだな。強キャラといったところか。

「お父様!!」

「長!!」

なんだ親か。

「ありがとうございます」

「感謝される覚えがないが」

「貴方達が木乃香と刹那を守ってくれたのでしょう」

んだよ、見てたのか。まあ気付いてたけどな。

「名前を聞いてもいいですか?」

「俺は一条要、この娘は久遠。そこの烏天狗が射命丸文だ」

「よろしくね！！」

「よろしくお願いします」

「私は近衛詠春です。娘達を助けて頂き本当にありがとうございます」

そんな何度も感謝しなくても・・・・・・ん？近衛？

「あんたの親族に近衛近右衛門ている？」

「？　義父ですが」

義父・・・・・・ハハハ、そうか、成る程な。

「お兄さん、おじいちゃんと知り合いなん？」

「そうだぞ、木乃香ちゃん。あの馬鹿は

俺の弟子だ」

風神少女現代入り　そして真打ち登場（後書き）

＜続・アリシャの部屋＞

ア「アリシャの部屋、スタート」

舞人「今回も僕、舞人と」

舞花「私、舞花も一緒ですわ」

シャ「では今回のゲスト、射命丸文さんです」

文「あやや～、皆さんこんにちは。清く正しい射命丸です」

シャ「クロスキャラの中で唯一のノンチートキャラです」

ア「そういえばそうね」

文「言わないで下さいよ」

舞人「しかし要さんと近右衛門さんが師弟関係だったなんて」

舞花「昔この世界に介入したのですね」

シャ「ちなみにその時は要くんが四十代。近右衛門さんが二十代だったそうよ」

ア「そうなの」

文「そういえば次回からの話は全く考えてないと聞きましたが」

舞人「大丈夫じゃない？」

舞花「馬鹿作者ですわね」

シャ「あっ、クローク『朔夜』の説明が必要ね」

ア「本当ならこの作品から読んでる人のために全ての説明がいるんでしょうけど」

文「感想で聞きたい事を書いてもらえれば解答しますよ」

シャ「では説明、どうぞ」

クローク『朔夜』

要の魂に寄生している黒いクローク。

絶対的な物理防御を持ち、魔力攻撃も百分の一にする。更に空も飛べるため、デバイスでバリアジャケットも張れず、空も飛べない要にピッタリ。

要が必要とした時に現れる。（女性関係のみ）

シャ「簡単に書くとこんな感じかしら」

ア「では次回も見て下さいね」

子供の意思（前書き）

てけとーに考えた話なんです。
だから中身もてけとーです。

子供の意思

詠春ｓｉｄｅ

侵入者が出たというのでその場に行くと、そこには木乃香と刹那。
天狗の少女に狐の少女、そしてお義父さんの師匠などと名乗る青年。
いったいこれからどうなるのだろう。

「それで、本当にお義父さんの師匠なのですか？」

「そうだ」

信じられませんね。私より若そうなのに。もしかして

「不死の類じゃないぞ」

先読みされましたか。しかし先程の戦いを見る限りその強さは確か。

「要は凄いからね」

「要さんはどこかおかしいですからね」

「文、後でシバく」

「あやや、地雷でした」

こうして見ていると実に普通なのに、中身が普通じゃないからタチが悪い。

「しかし詠春とやら、あの写真に写ってるのが本当に近右衛門か？」

「はい、そうですが」

「信じられん」

「私からすればそちらの写真が信じられませんよ」

さっき一条くんに、先月辺りにお義父さんが木乃香と撮った写真を見た瞬間、一条くんは固まってしまった。そして私は一条くんに見せて貰った若かりし日のお義父さんの写真で固まってしまった。あれはない。何故あんな美男子がぬらりひょんなんかに・・・・・・

「そういえばさっきの写真、一緒に写っていたのは君ですよね」

「そうだが」

「どうみても今より老けていましたが」

「そりゃそうだ。最近死んで若返ったからな」

「・・・・・・はい？」

死んで若返った?何を言っているのかわからない。ならば彼は生き返ったとでも言うのか?

「成る程、輪廻転生ですか」

「文、残念だ。どちらかと言えば蘇生に近い」

蘇生・・・・・彼は本当に何なんだ?

「俺が何か知りたそうだな」

「当然です」

「なら教えてやろう。俺らは異世界人だ」

「・・・・・はい?」

なんだか今日は頭がおかしくなりそうだ。

刹那ｓｉｄｅ

あの人達は何なんだろう。特にあの男の人。凄い強さだった。よくわからない魔法を使うし卑怯だし、それでも実力は確かだった。

「せっちゃん」

「何？このちゃん」

「あのお兄さん達ええ人やね」

「えっ？」

確かに助けてはくれたけど、それだけでええ人なんて、このちゃん人が良すぎるんじゃ。

「お兄さん達な、目が優しかったんよ。だからうち怖くなかったもん」

「・・・・・そやね」

あの人達が現れた瞬間、恐怖はなくなった。その事考えたらええ人なんかも。

「そや！お兄さん達に会いに行こ！！」

「ちょっ、このちゃん待ってぇな！！」

要ｓｉｄｅ

「本当に異世界人なのですね」

「正確には並行世界。文は幻想郷だからまた別物だな」

説明疲れた。こういうのはいつまで経っても慣れんな。やっぱり肉体言語の方がやりやすい。

「お父様、失礼しまーす」

「長、お邪魔します」

「木乃香に刹那。どうしたのです？」

「お兄さん達に会おう思って」

ほう、俺にか。子供に好かれるのはいいね。気分がとてもいい。

「よし木乃香ちゃん。魔法を教えてあげよう」

「ほんまに！！」

「一条くん！！」

ん？なんか悪い事言ったか？

「この子には裏に関わらせるつもりはないんです」

「・・・・・何？」

こいつ何言ってやがる。裏に関わらせるつもりがない？これだけの魔力を保持していて、尚且つあの戦いを見た子を？どうせこいつの勝手な考えだろう。

「何甘い事言ってやがる。表に出ろ」

「・・・・・何故」

「現実を教えてやる」

そう言って俺は外に出た。

「そうそう、どうせならギャラリーも用意しろ。ついでに俺の力も見せてやる」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「なんかうち悪い事したんかなぁ？」

「大丈夫だよ」

「えっと、久遠ちゃん？」

「要はね、貴女の意思を尊重したいと思ってるの。貴女はどうしたい？」

「・・・・・うちの、意思」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ギャラリーがゾロゾロ集まってきたな。ほとんどが俺がやられると考えてるようだな。声に出てるぞ。

「お待たせしました」

やっときたか。詠春の武器は野太刀か。

「一撃勝負だ」

「いいでしょう」

そう言った詠春の野太刀が帯電を始める。

「神鳴流奥義！！極大雷鳴閃！！！！」

野太刀が雷を纏い俺に襲い掛かる。威力はそこそこ、速さもまあまあ。だがその程度だな。

「でぇい！！！」

パキィン

「！？　夕凪が！？」

俺は腕一本で雷撃を掻き消し、野太刀をへし折った。ギャラリーも呆然としている。

「理不尽な事が起きる。これが現実だ。特に力を持つ者には相応の理不尽が起きる。その時、力無き木乃香はどうする。護衛に守って貰うか？それとも部屋に閉じ込めて守るか？」

「それでも・・・・・・」

はぁ、こりゃ駄目だ。俺が言ってもしょうがない。

「俺も子持ちでな。お前みたいに悩んだ事もあった。そんな時必ずした事がある。木乃香ちゃん、ちょっと来なさい」

「うん」

「それはな、子供自身の考えを聞く事だ。親があれこれ押し付けてもしょうがないからな。木乃香ちゃん、君はどうしたい？」

「・・・・・・うち、自分の事は自分でやる！！」

くくっ、まだ小さいのに強い娘だ。これなら大丈夫だろう。

「詠春、娘の意見はどうだ？」

「・・・・・・堪えますよ。全く、君は汚いですね」

「汚い結構。戦場じゃ汚いは褒め言葉だ」

「木乃香、やるからにはしっかりやりなさい」

「！　はい、お父様！！」

文ｓｉｄｅ

パシャ

うーん、いい写真が撮れました。しかしあの詠春という男性も実に強い。近接戦に限定すれば風見幽香も苦戦するのではないでしょう

か。

「しかし強くなりましたね」

「そうでしょ」

隣に座っている久遠さんがそう言う。確かに久遠さんも強くなっています。しかし要さんは別格。どんな修行をしたのやら。

「流石は私が認めた男性」

有り難く思って下さい。女性ならともかく、男性で私が認める人は貴方ぐらいなんですから。

とりあえずこれがきっかけになって私達がこの近衛家にいるのを認められた事をここに記しておきましょう。

「ねぇ、文って要が好きなの？」

「ブーーーーッ！！！？」

子供の意思（後書き）

＜続・アリシャの部屋＞

ア「1、2、3、スタート」

シャ「アリシャの部屋です」

舞人「寧ろ僕ら牧原兄妹の部屋です」

舞花「読者もそう考えてますわ」

ア「違うわよ！！」

シャ「まあまあ、彼らが本編に出たら忙しくて出れないはずよ」

ア「・・・・・我慢ね」

舞人「それにしても、夕凪折っちゃったね」

舞花「その場のノリで大変な事しでかしますわね」

ア「なんか考えがあるんじゃないの？」

雨「何も考えずに折りました。サーセン」

四人「「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」」

シャ「次回は？」

ア「要、麻帆良に行く」

舞人「志貴さん達や僕らも出ます」

舞花「では次回も見て下さいまし」

麻帆良へ行こう（前書き）

原作？なにそれおいしいの？
それでもＯＫな人は先に進んで下さい。

麻帆良へ行こう

要ｓｉｄｅ

「ほら木乃香、集中力が途切れてるぞ」

「はい！！」

「刹那はもっとしっかり踏み込め」

「はい！！」

今俺は木乃香と刹那の訓練に付き合っている。木乃香を指導しながら刹那の剣を受ける、慣れれば簡単な作業だ。ちなみに今木乃香が習っているのはデバイスを使った魔法。こっちの魔法は知らんし、多分使えん。

「よし、休憩だ」

詠春に説教した後いろいろあったな。神鳴流の奴らが不満だからって試合仕掛けてくるし。雑魚だったけど。それを見た刹那が稽古し

て下さい言うし。

「そうそう、木乃香、近右衛門は麻帆良の学園長やってるって？」

「そやで」

・・・・・・ふむ。

「ちょっと出掛けてくる」

「「いってらっしゃい」」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「木乃香、刹那、一条くんは何処へ？」

「出掛けたよ」

「お爺様の事を聞いてました」

「あやや、これはもしや」

「麻帆良に行きましたね。あいたた、胃が痛い」

「胃薬いる？」

「ありがとう、久遠くん」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

は〜るばる〜来たぜ麻帆良〜♪

空を飛べるっていいね。こんなに速く着けるなんて、刹那に感謝。

それにしても・・・・・・

「なんで囲まれてる？」

「黙れ侵入者！！」

これは事情を説明しないとな。ああ、めんどくさい。

近右衛門ｓｉｄｅ

「王手」

「うむむ」

相変わらずエヴァンジェリンは強いの。伊達に６００年生きてないという事かの。

「弱いわね～、近右衛門」

「アルクェイド、あれはエヴァが強すぎるんだ」

うむうむ、志貴殿はよくわかっておる。

「学園長!!侵入者です!!・・・・・・貴様らいたのか」

「ガンちゃん久しぶり～」

「黙れ吸血鬼」

相変わらずガンドルフィーニくんは硬いの。さて、侵入者とは穏やかではない。

「どんな奴かの」

「二十代くらいの青白い長髪の男です」

青白い長髪、じゃと？いやまさか、あの方とは歳が違う。

「それって要じゃない？」

「ああ、あの人か」

「なっ！二人はあの方をご存知か！？」

「え、ええまあ」

だとしたら本当にあの方かもしれん。世界を移動するのだから若返りすら朝飯前かも。・・・・・・マズイ。

「今すぐ捕縛を止めなさい！！」

「し、しかし学園長」

「わしの命に関わるかも「もう遅い」・・・・・・し、師匠？」

窓の方から聞こえる声。見ると若返ってはいるものの、見間違える事のない姿。我が師、一条要はそこにいた。

「久しいな、近右衛門。学園長とは、偉くなったな」

わし、終わった。

「侵入者！！」

ああ、ガンドルフィーニくん、それ以上は止めてくれ。寿命が縮まって死ぬかもしれん。

「うっさい。俺は近右衛門と話してんだ」

「貴様いい加減に「いいんじゃよ」学園長！？」

「お久しぶりです師匠。この度は何用で？」

「「「「・・・・・・師匠！？」」」」

そこにいたわしと師匠以外の全員が叫んだ。

志貴ｓｉｄｅ

びっくりしたな。久しぶりに要に会ったと思ったら学園長の師匠って。

「志貴、アルク、元気？」

「お前！志貴兄様とアルク姉様に馴れ馴れしいぞ！！」

「いいよ、エヴァ。久しぶり、要」

「元気よ。貴方も元気そうね」

それにしてもかなり強くなってるな。俺もうかうかしてられないな。

「おい近右衛門」

「はい、なんでしょう」

うわー、学園長へこへこしてるよ。アルクェイドとエヴァが大爆笑だよ。

「お前んとこの生徒に『牧原舞人』と『牧原舞花』ってのいるか？」

「おりますよ。有名な兄妹ですから」

「何処だ？」

「園芸部かと」

あの魔法生徒か。知り合いなのかな？

「じゃあ会いに行く。教師共に俺の事は教えておけよ」

あれ？そういえば侵入者扱いなんだから魔法先生達に囲まれてたんじゃ。

「いちいち肉体言語で話すのも面倒だ」

・・・・・タカミチがいたらどうなったかな？瞬殺だろうな～。

要ｓｉｄｅ

園芸部園芸部、何処にあるかな。広すぎるんだよこの学園。近右衛門に言って小さくしてやろうか。

「ちょっと貴方！」

「んあ？」

「ここは部外者立ち入り禁止ですわよ！！」

規律に厳しいね。俺が学生時代なんてそんなのあってなかったようなもんなのに。

「牧原舞人と牧原舞花の知り合いだ」

「お姉様達の？信じられませんわ。貴方のような野蛮そうな人など」

酷いじゃないか。野蛮なのは認めるが、それが知り合いかどうかは関係ないだろ。というかお姉様とは、流石まーちゃん。

「どうなさいました？」

おっ、まーちゃんじゃないか。やっと見つけた。

「お姉様！！この部外者が「まーちゃん久しぶり」「あら要さん、お久しぶりですわ。こちらに来ていらしたのね」え？」

「まーくんは？」

「部室にいますわ。案内しましょうか？」

「頼む」

「要さん！！」

「久しぶり、まーくん」

まーちゃんに連れられて部室に行くと、まーくんが植物の世話をしていた。しかし豪勢な部室だな。普通に暮らせそうだ。

「ちょっと外を歩かないか？」

そう言って俺は二人を連れ出した。

「ですからね、まーちゃんたら・・・・・・」

「あら、それならまーくんも・・・・・・」

仲が良いな。二人から学園生活を聞いてるけど、とりあえず二人が元気なのと、モテるのはわかった。ゼフィリスも安心だな。

「そういえばなんで外に出たんですか？」

「ああ、それはだ、なっ！！」

「！？」

ズドン

不意打ちで拳打をまーくんに叩き込んでみたが、突如生えてきた蔦の壁に防がれた。蔦の壁を貫きはしたんだが、まーくんには届かなかった。

「いきなりですね」

「強くなってるな」

「そちらも」

あーあ、５０％でやったのにな。ショックでプライドボロボロだわ～。

「ま、二人が元気でよかったよ。じゃあ帰るわ」

「またいらして下さいね」

「待ってますよ」

何するかな。そうだな、あいつらを借りてくか。

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

「・・・・・・という事なんじゃ」

爺から昔話を聞いた限りだと、あの一条要とかいう男、凄まじい強さだな。

「おーい、帰ったぞ」

む、来たか。もしかしたらこの男なら。

「おい一条とやら、私の呪いを解けるか？」

「無理。その手の才能はない。志貴に殺して貰うか、近右衛門に治して貰え」

即答か。まあ志貴兄様に殺して貰うのは考えたが、兄様は失敗したら嫌だと言うし、爺は・・・・・・爺？

「あれ？近右衛門て治せたの？」

「まあ、やってみんとわからんぞ、アルクェイド殿」

「待て爺。やってみんと、という事は可能性はあるのか？」

それに対して一条が答える。

「近右衛門はその手の事は得意だぞ。俺が叩き込んだからな」

まさに灯台下暗しだな。爺が解けるとは予想外だった。

「なら爺「ちょい待ち」なんだ！？」

「条件がある」

条件？普通爺が出すべきだろ。なんでこいつが・・・・・・爺の師匠だからか。

「解呪に成功したら木乃香に魔法を教えて欲しい」

「フォ！？木乃香は魔法を習っとるのですか！？」

木乃香、確か爺の孫娘だったか。まあその程度呪いに比べたらマシ

か。

『じゃあ僕からも』

「!?　誰だ!!」

聞こえるのは声のみ。姿も気配も魔力も感じない。

「神様じゃん。久しぶり」

『久しぶり、アルク、志貴』

こいつが兄様達の言っていた神様とやらか。想像以上にフランクだな。

『あっ、条件、というかお願いだけどね。木乃香ちゃんが中学卒業まで麻帆良にいない？』

「意味がわからんな」

『その時期辺りにスプリングフィールドが来る』

何だと？つまり、ナギの奴か？いや、敢えてスプリングフィールドと言ったという事はナギではないのか？

『どうする？君が生きた年月に比べたら些細な時だろう』

「面白い。いいだろう」

『じゃあ近右衛門くん、頑張って』

そう言って声は聞こえなくなった。

「ではやるぞい」

「うむ」

アルクェイドｓｉｄｅ

エヴァの解呪は意外とあっさり終わった。なんか期待ハズレ。

「爺にこんな技術があるとはな」

「無理矢理、馬鹿魔力で適当にやった術式じゃからの。こんがらがった毛糸をほぐすようなもんじゃ」

ふーん、ならエヴァでも・・・・・魔力がないか。

「じゃあ行くぞ」

「「「おー」」」

京都か。私はよくわからないけど、志貴は修学旅行っていうので行った事があるみたいだし、エヴァは歴史マニアだからな。楽しみかも。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「木乃香、刹那、お前達の新しく先生だ」

「お前が詠春の娘か。まだガキだな。だが約束は約束。しっかり着いて来い！！でなければ切り捨てる！！」

「はい！！」

「よろしくな、刹那ちゃん」

「いっぱい特訓するわよ」

「よろしくお願いします！！」

「なんでエヴァンジェリンに殺人貴。真祖の姫君まで・・・・・・胃が」

「あやや、大丈夫ですか？」

「胃薬、飲む？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

麻帆良へ行こう（後書き）

＜続・アリシャの部屋＞

ア「今回はまーくん達はいないわよ！！」

シャ「本編だものね」

ア「今回は
詠春胃痛キャラ襲名
まさかの解呪
牧原兄妹強し
かしら」

シャ「いろいろと原作崩壊よね」

ア「そういえばこの時クラトスはまだこの世界にいないのよね」

シャ「真名ちゃんが十歳程度の頃だから、同い年の木乃香ちゃんが一桁の時はいないわね」

ア「そうそう、作者から連絡よ」

雨「アクセスも三万越えたし、軌道にも乗ってきたんで、コラボ解禁！！香崎様、好きなタイミングでどんな風な事をしたいか連絡下さい。すぐに書きます」

シャ「その次は水橋様とのコラボね」

ア「そしてアリシャの部屋にはシルフさんが来るわよ」

シャ「忙しくなるわね」

ア「では次回もお楽しみに」

修行　刹那の秘密（前書き）

何が起こったのか俺にもわからねぇ。
こんな展開予想外過ぎると思った人は挙手してみないか？

修行　刹那の秘密

要ｓｉｄｅ

エヴァンジェリン達に頼んでからも、エヴァンジェリン達がいない時や俺にしか出来ない事は俺が稽古を付けてやってる。

「刹那、お前には格闘は合わん。補助程度にしとけ」

「うー」

なんでか刹那は俺との修行に限って格闘を習おうとする。そりゃどんな状況下でも対応出来るようにいろいろな技術を習うのは大事だ。だけど刹那位の年齢なら長所を伸ばした方がいい。

「要さ～ん。いつまでこれ持ってたら・・・・・・」

「後３０周」

「ひーん」

今文は重りを持って近衛家の敷地を走り回っている。飛ぶのは禁止。

「アリストテレスさん、ここどうしたらええん？」

「その術式ですか。それはですね・・・・・・」

今木乃香の指導はアリストテレスが人になってやっている。俺が根性論でやっていたらアリストテレスが自分がやると言ってきた。ま

ああいつ自身がデバイスだし、今まで俺の補助をやってきたからな。教えるのは上手いんだよな。俺が管理局で指導してた時もアリステレスの方が人気だったしな。

「というか今思ったんだが、刹那は詠春に習えばいいじゃん」

「そうやけど・・・・・・」

うーん、やっぱり俺の戦いを見たせいか。あんな圧倒的な戦いをすれば子供は憧れるよな。

「刹那、もうちょっと大きくなったら教えてやる」

「ほんまに？」

「ああ、だからそれまでは剣の鍛練をしような」

「うん！！」

「いい子だ」

俺が刹那の頭を撫でてやると、刹那は気持ち良さそうにしていた。

「あー、せっちゃんばっかりずるい！！」

「じゃあ木乃香も撫でてやろう。うりうり～」

「えへへ～」

木乃香の髪はさらさらしてるな。でも撫でて欲しいなんて、まだ子

供だな。

「それで、そこな二人は何故並んでいる」

「私も頑張りました！！」

「要、撫でて」

「・・・・・・久遠だけ撫でてやろう」

「あやっ！？何と言うえこ贔屓！！」

文ってこんなキャラだっけな？

「そういえば要ってかんかほーとかいうの出来た？」

「いや、まだだな。片手に魔力、片手に気というのがどうもやりにくい」

こないだエヴァンジェリンに教えてもらったんだが、自分流に改良してやりやすくしてみるか。

「私は出来たよ」

「ほー、って何！？」

「見ててね」

そう言った久遠の右手に魔力、左手に気が集まっていく。それを合わせた瞬間、膨大な力が発生した。

「はぁー、久遠は天才だな」

「えっへん」

妬ましい。実に妬ましい。パルパル。

時間は流れて夜。部屋で瞑想していると文がやってきた。

「どうした？」

「少し、お話よろしいですか？」

珍しく神妙な顔をしているな。これはかなり重要な事と見た。

「いいぞ」

「刹那さんについてですが、彼女半妖ですよ」

「ふーん」

「まあ驚きませんよね」

そりゃな、半妖とか獣人とか翼人とか、そんな知り合いいっぱいいるしな。

「問題はそこではないんです」

「何？」

他に何か問題が？まさかもう生理が！？

「ボケはいいですから真面目に聞いて下さい。彼女の気、霊力と同質のものを感じた事があるんです」

「ほぅ、つまり刹那の親か。幻想郷にいるという事か。で、誰だ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・天魔様です」

「ブーーーーッ！！！？」

て、天魔だと！？あのタラシ、いつの間に外界に子供なんて作りやがった！！馬鹿か！？鳥頭なのか！？

俺は懐からケータイを取り出し、とある場所に連絡した。

『・・・・・はい、八雲です』

「よう藍。俺だ、要だ」

『ああ、お久しぶりです。どうなさいました？』

「紫を出せ。早く！！」

『は、はい。紫様～』

早く出ろ。早く出ろ！

『ん～、何よ』

「天魔をこっちに出せ。神様に頼んでエリオの魂を白玉楼に送ってやるから」

エリオは何故か八雲家と一部の幻想郷住民にみょんに好かれてるからな。

―ちょっ！兄さん！？―

何か幻聴が聞こえたが無視だ。今は天魔が先だ。

『わかったわ♪じゃあ送るわよ』

そう言って電話が切れる。そして俺らの目の前にスキマが現れ、天魔が放り出されて来た。

「な、何だ！？」

「久しぶりだな、天魔」

「おお、要。射命丸もおるではないか。して、どうした？」

どうした？とは・・・・・ふふふ、こんの色男め。

「お前、ここ数年で外界の女とやらなかったか？」

「ギックゥ！！さ、さて、何の事だか」

「バレバレですね。こんなのが私達のトップとは」

「し、仕方なかったではないか！！向こうから誘ってきたのだ！！俺は悪くねぇ！！」

何処の赤毛ヒヨコだ。だがこれでこいつが刹那の親の可能性が出てきたな。

「お前の娘みたいのがいるんだよ」

「・・・・・何？その娘の名は？」

「桜咲刹那だ」

「桜咲、刹那・・・・・・」

天魔は噛み締めるようにその名前を呟いた。

「確かに私と一夜を共にした女子は桜咲という姓であった」

やっぱりか。こんの馬鹿野郎め。

「子供を作って何勝手に幻想郷に帰ってやがる！！相手の事考えたのか！？」

「・・・・・全くだ。私は最低な男だよ」

「だったらせめて刹那に会ってけ」

「しかし・・・・・私にそんな権利など」

「権利うんぬんじゃないんだよ。お前は親として刹那に会わなければならん」

子供が親の顔を知らない。それほど悲しい事はないだろう。たとえこんな駄目親だとしても、刹那の親には変わりない。

「・・・・・わかった」

刹那ｓｉｄｅ

「今日も疲れたね」

「そやね」

毎日いろんな鍛練しとるけど、やっぱ要さんは凄いなあ。どんな頑張っても全然攻撃が当たらせん。

「刹那、ちょっといいか？」

「要さん？ええよ」

「ん、木乃香もいたか」

要さんと一緒に文さんと知らん男の人も入って来た。男の人は嬉しそうな、悲しそうな顔をしてた。

「刹那、お前の生まれについて話がある」

！！　まさか、うちが鳥族とのハーフって・・・・・・

「どうする？木乃香に外れて貰うか？」

このちゃんには知って欲しくない。知られたら嫌われてまうかもしれん。そんな事になったらうち、ここにおられへん。

「どうしてなん？うちがおったらあかんの？ねえせっちゃん！！」

「・・・・・ごめん、このちゃん」

「そうか、それでいいんだな」

「どうして！うちが嫌いになったん！？」

「そんな事あらへん！！寧ろうちが嫌われへんか・・・・・・！？」

あかん！口滑らせてもた！！

「・・・・・せっちゃん。うちどんな事あってもせっちゃんを嫌いになるなんてあらへんよ。親友やもん」

「だそうだが」

嬉しかった。このちゃんがそう言ってくれるんが。この先、もしかしたらばれる事があるかもしれん。それでもきっとこのちゃんは親友でいてくれる。そう思えたんや。

「わかった。このちゃんにも教えたげる」

そしてうちは白い翼を出す。忌ま忌ましいこの翼を。

「このちゃん、これがうちの「ふかふかや～♪」ひゃあ!?」

い、いつの間に後ろに!?あ、そこ、駄目!!

「あや～、天然の羽毛ですね～」

「暖かいだろな」

ちょっ!そんな事言ってないでこのちゃんを、あん!!

「すまない木乃香嬢、少し刹那嬢と話したいのだが」

今までずっと黙っていた男の人が漸く口を開けた。このちゃんはまだ堪能したりないのか、不満そうに離れた。

「・・・・・すまない!!」

「えっ!?」

いきなり男の人が顔を擦り付けるくらい深くうちに土下座した。いったいなんで・・・・・・

「父でありながらお前の事を知らずのうのうと生きていた私を許してくれ!!」

「・・・・・・え?」

父、この人が?お母様は少しは記憶にある。でもお父様については全く知らん。だからこの人が父言うても本当かどうか。それに、本当にお父様なら、この人は妖怪?

「そいつは本当にお前の父親。さっきアリストテレスに頼んで調べてみたが、気や霊力の質がほぼ同じだった。ここまで同じなのはクローン、もしくは血縁者。親子ぐらいしかいない」

じゃあ、本当に、この人が私のお父様?でも・・・・・・

「まさか一夜で子供が出来るとは」

「一夜でも関係持つんじゃねえ!!」

「ブハッ!?」

「・・・・・・クスッ」

こんな風にされたらいろいろ言ってやりたかったのに、何も言えへ

んやないか。

「あの～」

「なんだ？」

「ずっと言いたい事がありました。何で今までうちの前に現れなかったのか、何で半妖にしたのかとか」

「・・・・・・」

「でも、もういいです。はじめましてお父様、うちが刹那です」

うちがそう言うとお父様は静かに涙を流した。

「う、く・・・・・・」

「お父様泣かんといて」

「すまない・・・・・・初めましてだ刹那。私が父だ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「せっちゃんよかったね」

「ええ、全くです」

「・・・・・・」

「どうしました？」

「今思う事じゃないが、刹那が天魔の娘だとすると凄い才能があるんだろうな、って」

「そうですね～」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「う～ん。うわ、10時や」

昨晩はいろいろあって遅くに寝てもうたからな。今朝はお寝坊さんやね。まあ日曜日やからええんやけど。

「おはようございます」

「うむ、お早う」

居間に行くとお父様達が朝ご飯を食べてた。

「なんで天魔様まで朝食食べてるんですか」

「娘と一緒に食べるのがいかんのか？」

「帰れよ」

そう要さんが言った瞬間、お父様の下に穴っぽいものが空いた。

「八雲めー！！刹那！また来るぞー！！」

お父様・・・・・・

「せっちゃん、ご飯無くなってまうよ」

「ちゃんと残して～」

「ハハハ、二人は仲良しだな」

「「親友やもん」」

修行　刹那の秘密（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「ねぇシャマルさん」

シャ「わかってるわ。＋わんについてよね」

ア「いったいなんなのよ」

椛「初めまして皆さん！！犬走椛と言います！！」

ア・シャ「「お前か！！」」

椛「わふっ！？」

ア「作者がいくら妻だって言ってるからって調子に乗るんじゃないわよ」

椛「調子に乗ってなんか・・・・・」

シャ「アリサちゃん、本編の解説やりましょう」

ア「そうね」

シャ「今回は刹那ちゃんと最低天狗天魔のお話」

ア「天魔ファンの方ごめんなさい」

椛「普段はそんな事するようなお方には見えないのに」

シャ「酔った勢いだそうよ」

ア「なのに相手の名前しっかり覚えてるなんて」

椛「天魔様は部下の名前全てを覚える程記憶力が良いのです」

ア「へー」

シャ「次回は木乃香ちゃん達が麻帆良小学校へ入学」

ア「そして要は魔法界へ」

椛「私は評判が良ければレギュラーだそうです。次回も是非是非見て下さい」

ア・シャ「「お前が締めるな！！」」

椛「わふっ！？」

入学式（前書き）

予定では魔法界に入るはずが、入学式が長引いてしまった。

入学式

要ｓｉｄｅ

「要兄ちゃん、どうや？」

「要さん、どうでしょう？」

「二人共可愛いぞ」

「「えへへ」」

今日から二人は小学生。つまり今日は入学式である。おめかしして実に可愛いらしい。

「射命丸よ！！刹那の晴れ姿だ！！しかとそのネガに収めよ！！」

「射命丸くん！！最新の機材ならいくらでもあります！！木乃香をしっかり写して下さい！！」

「私はカメラマンではなく記者ですよ～」

馬鹿親共は実にうざったい。まあ気持ちはわからんでもないんだが。待てよ、という事は昔の俺も他人から見ればうざったかったと？

「元気じゃのぅ」

「お義父さん」

「よう近右衛門」

「お主がこの学園の長か」

ん？天魔の雰囲気が変わった？いや、変わったというより強くなったという感じか？

「よいか！刹那に何かあってみろ！！この学園は消滅だ！！」

・・・・・・親馬鹿が強化された感じだったか。

「刹那はな、繊細で可愛いらしく、それでかつ強さも秘めている！！それに惹かれた羽虫共が刹那に・・・・・・・・・・・・・！！」

突然天魔の声が聞こえなくなった？サイレント？違うな。

「刹那、恥ずかしいのはわかるが能力を多用するなよ」

「うー／／／」

やっぱり刹那か。天魔と出会って以来開花した能力、『空気を操る程度の能力』で天魔の周りの空気の振動を止めて、声が聞こえないようにしたな。この能力は使いようによっては危険なんだが、まあ天魔ならいいか。

「！？　・・・・・・・！！」

あ、気付いた。とはいえ何言ってるかは聞こえないけど。

「師匠、彼は？」

「天魔、刹那の父親だ」

「ほぉ～、刹那ちゃんの」

非常に残念な奴だがな。

「騒がしいな」

「よう、今日から高校生のエヴァンジェリンじゃないか」

そう、なんとエヴァンジェリンも今日から高校生なのだ。エヴァンジェリンが自分から望んだ事らしい。

「志貴達は？」

「千年城にいる」

千年城とは志貴とアルクが経営している骨董屋の名前だ。アルクは昔からいい物を見てきたから意外と目利きだし、志貴は・・・・・・普通に店員だな。まあアルクだけじゃなくてエヴァンジェリンもいるから店の品は確かな物ばかりだ。

ドンッ

「キャッ！？」

「・・・・・・」

「ちょっとあんた！このちゃんに謝りぃ！！」

何やら騒がしいので木乃香達の方を見ると、木乃香が倒れ、刹那が女の子に怒鳴っていた。女の子はオレンジ色っぽいツインテールとオッドアイが特徴的だが、それ以上に無感情な雰囲気がする。

「・・・・・ふん」

女の子は何も言わずに歩いて行ってしまった。

「大丈夫?このちゃん」

「うん、怪我もないし大丈夫やぇ」

「しかし失礼な子やな」

刹那が怒るのもわかるな。親はどんな教育してんだか。

「あの子は・・・・・」

「なんだ近右衛門知ってるのか?」

「ええ、その「学園長!!」おやタカミチくん」

「タカミチ、久しぶりだな」

「詠春さん!そういえば娘さんの入学式でしたか。あっ!学園長、明日菜くんは来ませんでしたか?」

「向こうに行ったぞい」

明日菜。それが彼女の名前か。見た目は似てないから、親子ではないのかな?

「ありがとうございます。では「待てぃ」何か?」

「貴様、あの娘の保護者であろう。あの娘は木乃香嬢にぶつかって謝まりもしなかったのだぞ」

「それはすみません。ですが彼女も「よいよい、子供を怒る気はない。保護者の責任なのだからな」・・・・・・えっと、つまり」

「貴様を粛正する!!」

天魔・・・・・お前・・・・・・

「何年も子供ほったらかしにしたお前が人の事言えるか!!!」

「グボッ!!?」

『おー』

俺の回し蹴りが天魔の腹に直撃する。あまりに見事な一撃に周りからは感嘆の声が上がる。

「ほれ、さっさと行け。ちゃんと注意はしろよ」

「あ、ありがとうございます」

全く、天魔の馬鹿野郎め。

「そうだ要。お前に伝える事があったのだ」

そうエヴァンジェリンが切り出してきた。

ふむ、いったいなんだろうな。

「今日、入学式の後私の家に来い。他の者も連れて来ても構わんぞ。ではな」

そう言ってエヴァンジェリンは歩いて行った。

エヴァンジェリンの家か。まあ楽しみにしておくか。さて、誰を連れて行こうかな。

舞人ｓｉｄｅ

今日は始業式に入学式。僕とまーちゃんは花屋を経営する事になった。

「よろしくお願いします、志貴さん、アルクェイドさん」

「よろしくな」

「お互い頑張ろうね」

実は隣には志貴さんとアルクェイドさんのお店があるので、今回はそのご挨拶って訳だ。

「まーくん、私達にお客様ですわよ」

「わかった。それでは」

お客様って誰だろ。今日はさっきから後輩達が来たりしたから、そこら辺かな？
まーちゃんがいる場所に行くと、そこにはアリストテレスさんがいた。

「お久しぶりです！」

「ええ、お久しぶりです。元気そうですね」

アリストテレスさんに会うのも本当に久しぶりだな。

「今日はどうしたんですか？」

「主に言われまして」

「要さんにですの？」

「今日入学式が終わり次第エヴァンジェリン様のお宅に参るようにと」

エヴァンジェリンさんの・・・・・・いったいなんだろ？僕らでいいのかな？

「それでは」

「あら、もう行きますの？もっとゆっくりなさればよろしいのに」

「主のお傍にいるのが私の仕事ですので」

相変わらずだな。でもそれがアリストテレスさんだし、要さんもアリストテレスさんを頼りにしてるしね。

要ｓｉｄｅ

「いや～、最高の入学式でしたね」

「うむ、娘の晴れ姿程素晴らしいものはない」

「何枚撮らされたでしょう。疲れましたよ」

たかだが入学式ごときで興奮しやがって。全くもって恥ずかしい。

文はお疲れ様だな。

「要、人の事言えないよ・・・・・」

「何？」

久遠にそう言われる。

それじゃあ何だ？俺もあの親馬鹿共のように興奮してたと？

「凄く」

うーむ、自分ではわからんものなのかな？

「まあいっか。エヴァンジェリンの所に行くぞ」

とりあえずここにいる全員は連れて行くとするか。

エヴァンジェリンの家に着くと、殺人人形（チャチャゼロ）がお出迎えしてくれた。

「よう殺人人形（チャチャゼロ）」

「ヨウ、殺シ合オウゼ」

くくっ、潰してやろうか？

「チャチャゼロ！！」

「ゲッ、兄貴」

志貴が出てきたか。助かったな。

「みんな、よく来てくれたな。まあ上がってくれ」

『お邪魔します』

志貴に着いて行って到着したのはボトルシップ、エヴァンジェリンの別荘の前だった。成る程、ここでやるのか。
そして俺らが別荘に入ると、なんだか苛々したエヴァンジェリンと寝てるアルク、そしてまーくんとまーちゃん、タカミチがいた。

「遅い！！」

「なら何故先に入った」

ここでは一時間が二十四時間なんだから長く感じるのは当然だ。

「まーくんにまーちゃんや、久しぶり～」

「久しぶりだね、木乃香ちゃん」

「お元気ですわね」

木乃香は二人に懐いてるな。あの二人なら懐くのも当然か。

「タカミチくんもおったのじゃな」

「エヴァに誘われまして」

ふーん、まあどうでもいいか。今は何でエヴァンジェリンが俺らを呼んだかだ。

「エヴァンジェリンよ、俺らに何の用だ？」

「今日は弟子の木乃香と刹那の入学式。そして私が高校に入った記念パーティーだ。さあパーッとやるぞ！！」

なんだそういう事か。なら楽しくやるか。

「「「酒が呑める酒が呑める酒呑めるぞ～♪」」」

「要！！文！！天魔！！多少は自重しろ！！うちの酒を飲み干す気か！！」

細かい事は気にすんなよ。幼女の体なんだから酒呑むなんて非常識だぞ。

「そういえば要って仮契約しないの？」

「相手がいない」

アルクは志貴とやってんだっけ？確かアルクがマスターで志貴が従者だっけ？

「なら要兄ちゃん、うちとやる？」

「お父さんは認めんぞ！！」

別に俺としては誰とやっても構わんのだけどな。俺のアーティファクトも気になるし。

「なら私が魔法陣を描いてやろうか」

「エヴァンジェリン！！」

「いいじゃないか。要のアーティファクトなんてどんなものか気になるだろ」

「なら久遠とする？」

・・・・・なんで仮契約の事なんか話してたんだっけ？

「では今回のメインイベント、要ＶＳ兄様だ」

「「何！？」」

そんなイベントを考えていたとは・・・・・

「面白い」

「要!?いいのかよ!!」

「ここで俺と対等に戦えそうなのって久遠と牧原兄妹と志貴とアルクくらい・・・・・・意外といるな」

「まあ兄様も鍛練と思って」

「・・・・・・そうだな」

タカミチｓｉｄｅ

志貴さんと要さんの戦いか。志貴さんの強さはよく知っているし、要さんは学園長の師匠らしいからな。

「せっちゃん、どうなる思う?」

「難しいね。要さんも志貴さんも強いし」

この子達、こんな雰囲気に慣れてるのかな?大分普通に話してるし。

「じゃあやるぞ。手合わせ程度だから、７０%でいいな」

「それがどの程度かわからないけど、構わない」

「双方準備はいいな。では、始め!!」

エヴァの合図と共に、二人の姿は消え、一瞬何かが見えたと思ったら二人の位置が入れ代わっていた。

「いてて、腕斬れたぞ」

「寧ろよく腕だけ、しかもその程度で済んだな・・・・・・」

何て速さだ！殆ど見えなかったぞ！！志貴さんの速さは知っていたが、要さんもここまでとは。あの一瞬でどんな攻防があったんだ？

「あや～、よくあれを防ぎましたね」

「手合わせだからな。本来なら要の首は飛んで、いや、要も全力ならばあの程度は防げるか」

射命丸くんも天魔さんも見えたのか！？エヴァもアルクェイドさんも見えただろうし、もしかして・・・・・・

「師匠は相変わらずじゃのう」

やっぱり学園長でも見えたか。ここで見えてないのって僕と子供達ぐらいじゃ・・・・・・

「まーちゃん、さっきのを見る限り、次はどんな攻防になるかな」

「そうですわね。先程まで防戦一方だった要さんが攻めに入るのは間違いありませんわね」

なんだか自信をなくしそうだ。これでもそこそこ強いと思ってたのに。

「ほらよ、ミニスライサー、十連！！」

「遅い！閃鞘・八点衝！！」

今度は見えた！！要さんが何かを投げて、志貴さんが高速でそれを打ち落とした。・・・・・結局どんな動きかは見えてないじゃないか！！

「蹴り、砕く！！」

志貴さんが真っ直ぐ蹴りを打ち放す。単純ではあるが、その速さは異常。しかしそれを要さんは片手で受け止めた。

「フンッ！！」

要さんは志貴さんの脚を掴んだまま地面に叩き付けた。

「オラオラ！！」

「くっ！？この！！」

ザンッ

志貴さんは要さんの腕を斬って逃れた。その際、要さんの腕は殆ど皮一枚という所まで斬れた。子供にこの光景は・・・・・

「スッパリやね」

「でも要さんやし大丈夫ちゃう？」

普通だよ！どんな教育したのさ！！

「よいしょ」

要さんは普通に腕くっつけてるし。常識ってなんだろ。

要ｓｉｄｅ

「こんくらいでいいか」

「そうだな」

やっぱり志貴相手だと面白いわ。思わず全力出しそうになっちまったよ。

「やるではないか」

エヴァンジェリンがそう言ってくるが、あの程度ならこいつも出来そうだがな。

「まあな。それより酒だ！！」

「待て！そっちに隠した酒があるのを何故知っている！！」

「酒が俺を呼ぶからだ！！」

さあいっぱい呑むぞ。底のないドラム缶と言われた実力見せてやろう。

「要くん、その前にいいかな？」

「どうした？詠春」

「魔法界に行ってみないか？」

魔法界・・・・・・まあ俺なら十分帰ってこれるだろ。しかし何故突然？

「ナギの手掛かりを探して欲しいんだ」

「・・・・・・いいぞ」

どうせ仕事をしてないしな。たまには家主のお願いも聞いてやらないとな。それより今は酒だ。

そして俺はそれから数日後、魔法界へと入った。

入学式（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「こんにちは」

シャ「今日もアリシャの部屋始まるわよ」

椛「今回は木乃香さんと刹那さんの入学式とその他諸々です」

ア「ちょっと、なんであんたがいるのよ」

椛「雨季さんからいていいよって」

シャ「感想で貴女に触れたの二、三人だったじゃない！」

椛「一人でもいればいいって」

ア「贔屓反対！！」

シャ「私達の苦労を知ってるの！？」

椛「え、あぅ・・・・・・」

ア「まあいいわ。今回、刹那の能力判明や要ＶＳ志貴などいろいろあったわね」

シャ「次回は魔法界よね」

椛「そんなに長くなる予定はないようです」

ア「じゃあ次回も見てね」

椛「そうです！要さんが仮契約する際のマスターは誰がいいでしょう？意見をお待ちしてます！！」

魔法界入り（前書き）

要が魔法界に入ります。
短めです。

魔法界入り

要ｓｉｄｅ

魔法界、か。噂ではそこそこ危険があるって聞いたけど、どの程度なのかね。同じ何とか界だから、グルメ界並？

「要兄ちゃん、手紙ちゃんと書いてよ」

「そやで、週一は絶対や」

「はいはい」

こいつらは、そんなに俺が心配か？頼りがないのは元気な報せとか言うだろ。

「まあ要くんなら大丈夫でしょうが、気をつけて」

「要！お土産よろしく！！」

「暫くゆっくりしてきて下さい」

詠春はいいとして、久遠に文、バカンスじゃないんだぞ。まあ危険でもない限り遊ぶけどな。

「行ってきます」

『いってらっしゃい』

さて、来てみたはいいものの、たいした発見はなかったな。初日だから当然か。

「マスター、バーボンかテキーラでもくれ」

「あいよ」

とりあえず今日は呑むか。

「しかし兄ちゃん、さっきからあのナギ・スプリングフィールドについて調べてるらしいな。もう死んだってのに」

「依頼でな。それに死んだ瞬間も、死体も誰も見ていないんだ。埋蔵金探しみたいで楽しいじゃないか」

「ハハハ！面白い兄ちゃんだな！！」

このマスターは話が実にわかる人だな。さっきまで会っていたのが不良っぽい奴らばっかりだったから気分がいいな。不良っぽい奴はどうしたかって？情報料情報料五月蝿いから眠ってもらったよ。

「マスター、どんくらい掛かるかね」

「まっ、ナギ・スプリングフィールドが出て来るか、死体が見つかるまでだろ」

「同感だ」

明日は森にでも向かってみるか。どうせなら一番危険な森にでも。

という事で次の日、俺は森に入っていったんだが、このレベルがこいつらで一番危険な森かよ。

「見当違いだ」

「「「グオォォォォ！！」」」

「グアァァァ！！」

森の獣達が俺に向かってくる。一匹はケルベロス、一匹はドラゴン。

「抜骨・首抜き」

ゴキ　ゴキ　ゴキ　ゴキ

「「「ガゥ・・・・・・」」」

「オォ・・・・・・」

はぁ、警戒して損した。ケルベロスやドラゴンだから油断しないようにと思ってたのに。グルメ界並と考えた俺が馬鹿だった。

「やるじゃねぇか」

「ん？」

後ろから声を掛けられたので振り向くと、どう見ても筋肉馬鹿がいた」

「誰が筋肉馬鹿だ」

「っと失礼、そんであんたは？」

「最強の傭兵、ジャック・ラカン様だ」

なんでだろう。近いうちにその最強の傭兵の座が誰か取られそうな気がする。ん？ジャック・ラカンって確かナギ・スプリングフィールドと詠春の仲間じゃないか？

「おいジャック・ラカン「ラカンでいいぜ」そうか、ではラカン、お前ナギス・プリングフィールドと近衛詠春て知ってるか？」

「おうよ！俺様の仲間だからな」

ビンゴ！まさか二日目にして関係者に会えるなんてな。

「確かお前、昨日街でナギの情報を集めてたな」

「詠春に頼まれてな」

「詠春の知り合いかよ。あいつまだナギに執着してたのかよ」

「そう言うあんたもそうなんじゃねぇか？じゃなきゃナギ・スプリングフィールドの情報を集めてた俺の後ろを着いてこないだろ」

「なんだ気付いてやがったのか」

俺に気付かれないようにしたいなら志貴並の気配遮断は欲しいな。つーかあんなに闘気を撒き散らしてたら誰でも気付くわ。

「で、俺と戦わねぇか？」

「それが目的か。残念、あんたの相手は俺じゃあ役不足だ」

「何？役不足？」

「ああそうだよ」

こいつの実力は見ればわかる。事実俺じゃあ役不足だ。

「・・・・・・ハハハ！自分の実力をわかってるじゃねぇか！！」

・・・・・・はい？もしかしてこいつ、意味わかってないのか？

役不足・・・実力のある人に簡単な役目などをやらせる事。その人の役に合っていない事。

まあつまり

「お前なんかじゃ俺に勝てねぇよ」

って言ったつもりなんだが、あいつはそれを

「貴方様のお相手など弱小の私が出来る訳ありません」

と解釈したのだ。日本語って難しいな。

「気に入った!!酒を呑みながら俺様の知ってるナギの話をしてやろう!!もちろん俺様の奢りだ!!」

「マジか!!」

やったね!タダ酒が呑める!!ついでに情報まで手に入るなんて。

「行くぞ!!」

「おう!!」

ラカンｓｉｄｅ

「う、うぅ・・・・・・・ここは？」

「大丈夫かい？旦那」

酒場か・・・・・・なんでこんな所に？あったまいって～。

「その調子だと覚えてないね。連れの人と遅くまで呑んでたじゃないか」

！！　思い出した！あいつと酒場に来てナギの事を話してたんだ！！そしたらあいつの飲みっぷりが思った以上によかったから飲み比べしたんだ！！ただそこからの記憶がねぇ・・・・・・

「旦那ら大分呑んでたんだよ。先に旦那が潰れても連れの人は呑むの止めなくてね。うちの酒を殆ど飲み干して帰ったよ。これ手紙」

何々・・・・・・

『有益な情報ありがとう。なかなかいい飲みっぷりだったぜ。お勘定はそっち持ちで』

なん・・・・・・だと・・・・・・？

「マスター、あいつ、どんだけ呑んだ？」

「うちの酒を殆ど。暫く店じまいだよ」

「ドチクショー！！！」

あの野郎！次会ったら絶対にぶっ殺す！！そして酒代を奪い返す！！

魔法界入り（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「もう＋わんが定着したわね」

シャ「諦めましょう」

椛「どうなさいました？」

ア・シャ「「あんたのせいよ！！」」

椛「キャイン！？」

ア「はぁ、今回はウワバミ要とラカンの出会いね」

シャ「要くんよく呑むわね」

椛「ラカンさんのお財布大丈夫でしょうか？」

ア「少なくとも残ってはいないでしょうね」

シャ「次回はどうなるのかしら？」

椛「麻帆良に帰るそうですよ」

ア「魔法界編短っ！！」

シャ「元々思いつきだったしね」

椛「次回で要さんは仮契約するそうです。ではお楽しみに」

ただいま麻帆良　これからの方針（前書き）

仮契約始めました。
お相手は大人気の彼女です。
そして今回も皆さんの予想を裏切りましょう。

ただいま麻帆良　これからの方針

要ｓｉｄｅ

初めて魔法界に入ってから三年。結局たいした情報はなく、いい修行にもならなかった。まあ体が鈍るよりマシか。しかし・・・・・・

「見つけたぞ要！！今日こそお前をぶっ殺す！！」

「よう、『元』最強の傭兵さん」

「『元』、じゃねぇ！！」

ラカンうぜぇ。いったいどれだけ引きずるつもりだよ。それに最近漸く来たクラトスがあんまりに強いもんだから、こいつの最強の傭兵が取られたし。

「斬艦剣！！！」

ラカンが馬鹿でかいだけの剣を投げ付けてくる。俺はそれを白刃取りで受け止める。

「うおりゃあぁぁぁぁ！！！」

そこへラカンが拳打を放ってくる。だが甘いな。

「失礼いたします」

「グオッ！？」

人になったアリストテレスがラカンの横から崩拳を叩き込み、ラカンを吹き飛ばす。俺は斬艦剣を片手に持ち、ラカンに投げ付けた。

「ほら、返すぞ」

「チクショーーー！！！」

ズドオォォーーーン

あー終わった終わった。さっさと帰ろう。

文ｓｉｄｅ

私達は今、麻帆良にある学園長室にいます。

今日漸く要さんが帰ってきます。三年とは、毎週手紙を送ってくれたとはいえ長かったですね。というかよくあの人は三年間、毎週欠かさず手紙を送りましたね。

「文姉ちゃん、何そわそわしとるん？」

「そわそわしてましたか？」

「うん」

あやや、自分の状態にも気付けないなんて、どうしちゃったんでしょうか。

「みんな～！要が帰って来たよ！！」

ドアの外から久遠さんの声が聞こえる。ああ、やっと帰って来ましたか。

「要兄ちゃんおかえり」

「おかえりなさい、要さん」

「元気そうで何よりです」

「木乃香、刹那、文、ただいま」

久しぶりに会うとなんと言っていいかわかりませんね。昔はそんな事なかったのに。

「そういえば要さん、私木乃香さん達に合わせて麻帆良の中等部に入る事になりました」

「文が、そりゃ安心だな」

まあ二年後になりますがね。でもちょっと楽しみです。学生生活というものも気になりますし。

「さて師匠、早速ですがお話よろしいですか？」

「なんだ？」

「射命丸くんと同じタイミングで師匠にも教師として学園に入って貰いたいのですが」

・・・・・という事は私が生徒で要さんが教師で、その間に生まれる禁断の、って何考えてるんですか私は！！

「いきなり悶え出してどうした射命丸」

「な、なんでもないですよ、エヴァンジェリンさん」

全く、それもこれも要さんのせいです。間違いありません。

「ねえねえ要」

「どうした？久遠」

「仮契約しよ」

な、なんですと！？勉強したので知ってますよ。仮契約ってキ、キ、キスするんですよね。そんなの認められません！！

「いいぞ、なら早速準備するか」

何あんたも許可出してるんですか！！ロリコンですか！？

「ええな～」

「・・・・・・（じーっ）」

「木乃香と刹那もやるか？」

「ほんまに！！」

確定です！この人ロリコン確定です！！明日の朝刊はこれメインにしますよ！！

「くくっ、では早速やるか」

エヴァンジェリンさんが手際良く魔法陣を作り出す。その上に要さんと久遠さんが立って、要さんは自分の指を傷付けた。・・・・・・なんで？

「随分古いやり方をするんだな」

「わざわざキスなんてしねぇよ。こっちの方が相手に気を使わないしな」

「あの～、仮契約ってキスなんじゃ」

「それは当っているが間違ってもいる。仮契約とはようするに体液交換な訳だ。それが唾液でも血液でも変わりない。寧ろ血液の方が繋がりは強くなる」

エヴァンジェリンさんがそう説明してくれる。よかったのだけれどもなんか残念な気もしますね。

「じゃあやろっか」

「おう」

久遠さんも指を傷付け血を出す。そして二人がそれを合わせた瞬間、光が溢れた。

「これが俺のカードか、ってゲッ、こんなのまで写るのかよ」

「なんだ？・・・・・・何だこれは」

要さんとエヴァンジェリンさんがカードを見て不思議な反応をしている。私達も見てみると、カードの要さんの後ろによくわからない生物が写っていた。

「要、これは何だ！！」

「秘密。久遠も言うなよ」

「わかった」

これは気になりますが、言っても教えてくれないんでしょうね。

「まあとりあえず見てみるか。徳性は信仰。合わんな」

「うるせー」

「方位は中央で、色調は青。星辰性は水星か」

「無難だな。特に星辰性」

何か水星に思い入れでもあるのでしょうか？

「称号は究極の一、大層な称号だな。アーティファクトは・・・・・・ない？」

『ない？』

「アーティファクト欄に何も記入されていない。これはいったい」

「とりあえず出してみるか」

そう言って要さんはエヴァンジェリンさんから仮契約カードを取って呪文を唱えた。

「来れ（アデアット）」

仮契約カードが光り、そして現れたのは・・・・・・

「やっと来れたの」

「要、元気？」

「おせぇぞ」

「まあいいじゃない、ねぇ要くん」

「お腹減った～」

五人の女性だった。

「・・・・・アベア「帰そうとするな!!」ゲリョス!?」

パリーン

ああ!要さんが幼女に窓から吹っ飛ばされた!!ってよく見たらこの人達って。

「なのはにフェイト!!ヴィータにすずかにスバルも!!」

ああやっぱり、要さんの奥さん達だ。どうして仮契約カードから?

「・・・・・お姉さん達、誰?」

『今吹っ飛ばされた人の妻』

『・・・・・なんですと!?』

私と久遠さん以外が驚く。当然ですよね。普通一夫多妻なんて見ませんもんね。初めて会った時は私も驚きましたもん。

「そういえばなんで文がいるの?」

フェイトさんがそう聞いてくる。まあ当然の疑問ですよね。

「紫に飛ばされたんだとよ」

要さんが帰ってきた。

「あっ、おかえりなさい」

「ただいまスバル。ヴィータ、びっくりしたぞ」

「お前が悪いんだろ」

「ごもっとも。とりあえずなんでお前らがいるか」

「それは私が説明するね」

そう言ってすずかさんが説明を始めた。
まず死んだ彼女達は神様の所で修行をしました。そしてどうやってこの世界に来るかとなった時に、サプライズにして要さんが仮契約カードを使ったら召喚されるように設定されたそうです。そうすれば誰と契約したかもすぐ見れますしね。まあ今回は久遠さんだったから残念だったでしょうけど。

「ちなみに受肉した英霊みたいな感じだから不老長寿だよ」

「よく考えたら俺も不老長寿だったな」

そうだったんですか。

「しかし師匠の奥様とは」

「要、なんだこの爺さんは」

「俺が昔この世界に来た時の弟子だ」

『へー』

これからどうなるんでしょうね。とりあえず大きすぎ壁なのには間違いないですが。

要ｓｉｄｅ

びっくりしたな。いつか来るとは思っていたが、まさか仮契約カードから出て来るとはな。

「そんで何処で生活する？」

『要（くん）（さん）と一緒の所』

今居候なんだけどな、俺。どうせ数年後にはこの学園の教師なんだから、ここで生活するかな。

「近右衛門、この学園の空き家くれ」

「横暴だな」

「まあまあエヴァンジェリン、この人はこういう人じゃ。わかりました。探しましょう」

これで家の問題は解決したな。

「要さん！私もそこで暮らします！！」

・・・・・はい？

「要兄ちゃん、遊びに行ってもええよね？」

「うちもいいですか？」

いや、遊び程度なら全然ＯＫだが、文のあの発言は何だよ。

「要くん」

「またオトしたの？」

「お仕置きだな」

「神様の所でいい機械造ったんだよ」

「やっぱり浮気は駄目ですよね」

「いや待て！話し合おう！！人は争いを話し合いで解決出来る唯一の生き物なんだから！！」

『問答無用！！！』

なんでこうなるんだよ！！

ただいま麻帆良　これからの方針（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「遂に妻達の登場」

椛「相変わらず凄い奥さんですね」

シャ「椛ちゃんも会った事あるのね」

椛「一応は」

ア「しかし文もどんどんオチてるわね」

シャ「そうね」

椛「それにしてもラカンさんの扱いも酷いですね」

ア「ここだとそういう要員だからね」

シャ「次回はどうなるのかしら？」

椛「木乃香さんと刹那さんの実力を確認するそうですよ」

ア「三年でどれだけ成長したかしらね」

シャ「では次回もお楽しみに」

腕試し（前書き）

とりあえずこんなもんでいいかな。

書いてる時、作者はある事に気付いてしまった。

腕試し

要ｓｉｄｅ

俺が帰ってきてから数日。麻帆良の一等地に家を手に入れた。近右衛門、いい恩返しだ。さて、現在は朝食中なんだが。

「ん」

「はい」

「要」

「ほい」

「・・・・・・以心伝心ですか」

何故か一緒に暮らしている文にそんな事を言われる。
確かに長年一緒に暮らしてきただけあって、相手が何をして欲しいかとか、俺が何をしたいかとかは一文字でも伝わるな。ちなみにさっきのは、俺がお茶をくれというのになのはが反応し、ヴィータの醤油が欲しいというのに俺が反応した訳だ。
熟年夫婦の会話が少なくなるのがよくわかるな。

「すずかは？」

「別荘ですよ」

「時間が増えたからって無理しないように伝えてくれ」

「はーい」

あいつ吼太から別荘を貰ってからもう１２時間は篭ってるな。つまり１２日。いい加減に戻ってこいよ。

「呼んだ？」

「うおっ！？いきなり出てくるな」

「だって要くんに抱き着きたかったんだもん。ぎゅー」

「はいはい」

驚いたが、戻ってきたなら良しとしよう。

ピンポーン

ん？朝から誰だ？まあ飯も殆ど終わってるから別にいいんだけど。

「久遠、頼む」

「わかった～」

そう言って久遠は玄関に向かって行った。

「あ、木乃香に刹那、いらっしゃい！！」

「「お邪魔しまーす」」

ああ、あの二人が来たのか。そういえば遊びに来るとか言ってたっけ？

「おはよう、要兄ちゃん」

「おはようございます、要さん」

「おはよう二人共」

「朝から元気ね。おばさん眠くて眠くて」

「それはお前がずっと別荘に篭ってたからだろ。後おばさん言うな。それじゃあ俺もおじさんになるし、今はそんな歳でもないだろ」

転生してからは二十歳前後だっつうのに。以前の感覚でいたら周りに変に思われるだろ。

「で、今日は何しに来た？」

「手合わせして欲しいんや」

「うちらかて三年間遊んどった訳やないからね」

「言うじゃないか。とりあえず」

「プリン食べる？」

「「ありがとうございます」」

なのはのプリンを食べてからにしよう。

木乃香ｓｉｄｅ

プリン美味かったわ～。さてと、要兄ちゃんとの手合わせや。三年で手に入れた力見せたるで。

「刹那、その刀どうしたんだ？」

要兄ちゃんがせっちゃんの刀に気付く。以前までは木刀やったもんね。

「志貴さんとこで貰ったんや」

「いい武器貰ったな」

ほんま志貴さん達はよくあれをタダでくれたわな。さて、うちも準備しよか。

「来て！前鬼！！後鬼！！」

そう言ってうちが召喚したのは金髪でマントを羽織った男の人。前鬼と、黒い長髪で和服を着たうちくらいの女の子。後鬼や。

「私を喚ぶとは、どのような相手だい？」

「あ、あれって一条要って人じゃない？木乃香と刹那が好きな」

「「ちょっ！？」」

何をさらっとばらしとるんや！！怒るで！！

「ハハハ、じゃあやろうぜ」

要兄ちゃん全く気にしてないな。やっぱり子供だからやろか？

「まあええ、前鬼！後鬼！お願い！！せっちゃんもね」

「いいだろう」

「任せなさい！！」

「行くで！！」

前鬼は槍を持ってせっちゃんと一緒に突撃して、後鬼は後ろで呪文を唱え始めた。うちもデバイスを起動させる。

「ディバインバスター！！」

要ｓｉｄｅ

木乃香が白い砲撃を撃ってくる。

「ルーフシールド」

「そこ！斬鉄閃！！」

「おっと」

ふーむ、予想外だ。刹那の動きも木乃香の魔法もこの三年でここまで成長するとはな。

「そちらばかりに気を取られないで欲しいな！！」

「っと」

木乃香の召喚した男の槍を捌く。槍をここまで使えるとは、さぞ名のある騎士なんだろうな。しかし・・・・・・

「温いぞ！！」

「グッ！？」

隙を見つけて蹴り飛ばす。なんだか上手く動けていない印象を受けるな。

「お嬢が未熟だと動き難いね」

「うちが悪いんかー！！」

「っと失礼」

「ほらどきなさい！！」

木乃香の後ろに控えていた少女がそう叫ぶ。さっきまで詠唱していたが、何をしてくるのか。

「狐火・業火砲!!!」

なっ!?狐火だと!?ならこいつも久遠と同じ妖狐か!!だけどこの狐火、何かおかしいな。巨大なんだけど。
そして狐火は俺を飲み込んだが、熱くもなんともない。・・・・・・見かけ倒し?

「ちょっと!ダメージ受けてないじゃないか!!」

「仕方ないでしょ!木乃香が未熟なんだから!!」

「またうちかー!!」

結局この二人は木乃香の力不足で本来の力が引き出せてないという事か。特に少女。

「斬空閃!!」

いけね、刹那忘れてた。ってこいつは危ない!!

《シールド》

アリストテレスが数枚のシールドを張ってくれるが、それを斬り裂かれた。斬空閃は刹那の『空気を操る程度の能力』が存分に発揮出来る技だな。

「今や！！」

木乃香が無数の魔力弾を撃ってくるが、この程度は防がなくてもどうにか出来る。なら別に何、か！？

「うおっ！？」

「ちっ、外したか」

地面から槍が生えただと！？あの男はいったい・・・・・・思い当たるとすれば

「串刺し公」

「そうだよ、私がヴラド・ツェッペシュさ」

「鬼違いだろ」

ヴラドは吸血鬼だろ。鬼が付いてたらなんでも良いって訳じゃないんだぞ。それにこんな奴どうやって喚んだ。

「まあいい。身体能力８０％解放」

一気に終わらせて話を聞かせて貰おうか。

刹那ｓｉｄｅ

要さんの雰囲気が変わる。

「さあやるぞ」

その瞬間、要さんが消えた。いや、消えたように見えるだけで空気の流れを読めばどう動いているかはわかる。でもわかっても対応出来ない。

「そこ！！」

「ガッ！！？」

ヴラドさんが殴り飛ばされる。なんとか防ぎは出来たようだけど。

「ほいほい！！」

「きゃん！？」

「あう！？」

このちゃん達も気絶させられる。次はうち。でもただじゃやられへん！！

うちは懐からカードを取り出した。

「スペルカード！！空砲『エアロブラスト』！！！」

お父様と一緒に創ったこのスペルカード。圧縮した空気を砲撃として撃ち放つのだが。

「ルーフシールド」

要さんは簡単に防ぐ。結構威力あるはずなのに。なら次や。

「スペルカード！！空圧『ダウンバースト』！！！」

「グオッ！？」

要さんに強大な空気の塊が叩き込まれる。正直普通の人に放ったら潰れて死んでしまうだろうけど、要さんなら死にはしないはず。

「効いた～」

「嘘だ！！」

全然ぴんぴんなのに！！

「終わり、っと」

「へっ？」

気が付いたら目の前にいた要さんにお腹を殴られ、うちは気絶した。

要ｓｉｄｅ

いやはや成長してたな二人共。とりあえず起きたら前鬼、後鬼につ

いて聞かないとな。

「う～ん」

「起きたか？」

「ほぇ？要兄ちゃん？ああ、うち負けたんや」

「負けたが見事だったぞ」

俺は木乃香の頭を撫でてやる。

「いきなりだが聞きたい事があるんだが」

「ええよ、みんな起きたらね」

という訳で、全員が起きて居間に揃った。なのは達もいる。

「まず前鬼がヴラド・ツェッペシュなんだな？」

「そうやで」

「どうやって前鬼に？」

「現地調達や」

「お嬢、それは酷いんじゃないかい？」

つまりはわざわざこいつの魂を捜しに行ったと。ご苦労なこって。

「じゃあその子は？久遠ちゃんと同じ妖狐？」

なのはがそう聞く。答えたのは木乃香ではなく少女だった。

「ただの妖狐じゃないもん。玉藻前だもん」

何？あの玉藻前か。だとしたらこいつもまたとんでもないな。しかし少女の姿とはな。

「ぷっ」

「笑ったわね！！チンチクリン！！」

「チンチクリンでも要に愛して貰えるならいいんだよ。しかし玉藻前ってあれだろ？絶世の美女だろ？それが・・・・・ぷっ、くくっ」

「ムカーッ！！」

「ヴィータ」

「はーい、ごめん」

全く子供じゃないんだから。いくら小さくなって力が弱くても相手は大妖怪の一角・・・・・・

「玉ちゃん、アイス食べる？」

「ありがとスバル！！」

なのか？なんか別人なんじゃね？

「とりあえず木乃香は当面の間あの二人の力を引き出す事」

「はい！！」

「刹那は技と能力の練習」

「わかりました！！」

さて、後やる事はあったかな？・・・・・・ああそうだ、大切な事忘れてた。

「すずか」

「何？」

「木乃香のデバイスを造ってくれ」

そろそろストレージじゃ木乃香に着いてこれなくなってるからな。早いとこ専用デバイスを造らないと。

「みんな、ご飯だよ」

フェイトの声が聞こえる。もうそんな時間か。

「じゃあみんな食ってけ」

『はーい』

フェイトの飯は今日も美味かった事をここに記しておく。

腕試し（後書き）

＜花屋『月下美人』＋わん＞

舞人「遂にうちの店が後書き進出」

舞花「名前も初披露ですわね」

椛「おめでとうございます」

舞人「ありがとう」

舞花「さあ始めますわよ」

ア「ちょっと待て！！」

シャ「ここは本来これ←よ！！」

＜続・アリシャの部屋＞

舞人「大丈夫です。誰も望んでません」

ア「育てた恩を忘れたか！！」

舞花「忘れました」

シャ「酷い！！」

椛「そろそろ始めましょう」

舞人「そうですね。まず作者が気付いた事とは、ヴラドも玉藻前もＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡに出ているという事です」

ア「作者やってないもんね」

舞花「作者は『前鬼、鬼が付いてる吸血鬼にしちゃえ』とまず考えたそうです」

シャ「それでヴラドね」

舞花「そして質問で可愛いのがいいという意見があったので『可愛いのか。とりあえず大妖怪でググろう。あ、三大悪妖怪なんていいのあんじゃん』という事があったそうです」

椛「それが玉藻前さんですね」

シャ「つまり全くの偶然と」

舞人「だからＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡのとは別物ですよ」

椛「次回は１０万アクセス記念になりそうです」

ア「早っ！！」

椛「ではお楽しみに」

１０万アクセス記念企画（前書き）

１０万アクセスありがとうございます！！

10万アクセス記念企画

雨「やったね」

要「早いな」

雨「早いのはいい事だよ。クーガの兄貴だってそう思ってるさ」

要「今回は何するんだ？」

雨「噂の彼とみんなが好きな彼を出すよ」

要「誰だよ」

雨「見ればわかる」

要「そうか、ではスタートだな」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

志貴ｓｉｄｅ

今日は店も定休日だからアルクェイドとエヴァと一緒に買い物に来てるんだけど。

「そんな引っ付くなよ」

「いいじゃない、ねぇエヴァ」

「そうです。兄様は気にしすぎです」

とはいっても二人に両側から抱き着かれたら動き難いし、周りも見てるし。

「あ、志貴、あれ見よ」

「姉様!!今度は私の番です!!」

「いいじゃない」

「まあまあ、今回はエヴァの番で」

「えー」

「流石兄様!!」

エヴァが腕に思いっきり抱き着く。あー、柔らかいのが当たってるんだけど、気にしてないんだろうな。

「ん？」

前を歩いていた人がペンを落とす。気付いてないみたいだな。

「落としましたよ」

「これは失れ「「ワラキア！？」」ワラキア？」

俺とアルクェイドが同時に叫ぶけど、この人違う。雰囲気も違うし退魔衝動も働かない。並行世界なんだから吸血鬼でないワラキアもいるか。

「すみません、人違いでし「まあ待ちたまえ」はい？」

「君達の反応を見る限り私とワラキアという人物は似ているというレベルではないのだろう？これは極めて愉快な題材だ。もしドッペルゲンガーなる存在が実在するとしても私と違う名を名乗るだろうか？私は小説家と演出家をやっているのだが、次回作に詰まっていてね。良ければそこでお茶でもしながら話を聞かせて貰えないだろうか？もちろんお代は私持「何しているのですか！！」グハッ！？」

マシンガントークを始めた男性がいきなり女子高生に踵落としをされる。その女子高生はどう見てもシオンだった。

（ねぇ志貴）

（ああ、並行世界のシオンだな）

「エルトナムではないか」

「おやマクダウェル。彼らは貴女の知り合いで？」

エヴァの知り合いなのか！？いや、エヴァはこの前まで高校生だっ

たんだから、どう見ても女子高生のシオンと知り合いなのは十分にありえるか。

「こちらは私の家族の志貴兄様とアルク姉様だ」

「貴方達が噂の『千年城』の店主夫妻ですか」

「夫妻って訳じゃ」

「いいじゃない別に」

「婚姻届出してないだろ」

「事実婚って事で♪」

全くこいつは。・・・・・エヴァ、そんな睨むな、殺気飛ばすな。

「ふふふ、仲がよろしいのですね。っと自己紹介が遅れました。私はシオン・エルトナム・オベローン。そこで頭を抱えているのが、父のズェピア・エルトナム・オベローンです」

「「父!?」」

「ええそうですが、何か?」

「いや、あんまり似てないな、って」

「う、うんうん」

「有り難い事に私は母に似ましたので」

「それは酷くないかい？シオン」

いやまさかシオンの父親がワラキア、ここではズェピアさんか。とりあえずその人だったなんて。

「エルトナム、お前の父は外国で大学教授をしてたのではないか？」

「まあそうなのですが」

「数学教師をやってみないかとお誘いが来てね。元々この学園にも興味があったからやる事にしたのだよ。今日は視察だな」

うーむ、この学園にまた濃い人が増えたな。

「志貴くんにアルクェイドくんだったかね？良ければ先程の話を聞かせて「いい加減にしなさい！！」ゲフッ！！」

また踵落としを喰らい、今度は気絶したみたいだな。

「それでは失礼します」

シオンはそのままズェピアさんを引きずって行った。これからも会う度にあの掛け合いを見そうだな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

雨「みんな待ってたズェピアさんでした」

要「小説家に演出家、大学教授。随分と多才だな」

雨「ズェピアさんだし」

要「これからも暇があれば出すそうだ」

雨「ではお次をどうぞ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

クラトスｓｉｄｅ

「任務完了だな」

「ですね」

「ぐ、強すぎる」

私は今、マナと共に魔法薬の密売組織を潰したところだ。

「さて、連絡を頼む」

「わかりました、おじさん」

いつからかマナにはおじさんと呼ばれるようになってしまった。まあ歳も歳だから気にしてないのだがな。

ドゴォォォーン

突如私達がいた建物の壁が壊される。

「な、なんだ!?」

「落ち着け、マナ」

かなりの魔力を感じるな。今までこの世界で戦った者の比ではない。まるで最上級の魔物だ。

「ここにいるのか!!クラトス・アウリオン!!」

出て来たのは巨漢の男。どうやら私が目当てらしいな。

「私がクラトス・アウリオンだが」

「貴様か。貴様を倒して最強の傭兵を取り戻す!!」

「はっ？何を言って「問答無用！ラカンパンチ！！」ちっ！」

「おじさん！？」

いきなり攻撃してくるとは無礼な輩だ。ここではマナを巻き込むかもしれない。一旦表に出るか。

「逃がさんぞ！！」

男は私を追って表に出る。しかし何者だ？

「貴様、名は？」

「俺様はラカン！貴様を倒す男だ！！」

力がある分厄介だな。私を倒すだの最強の傭兵だの、迷惑にもほどがある。

「早く終わらせてもらう。ジャッジメント！！」

「当たるかよ！！」

無数の光の柱が降ってくるが、男は易々とジャッジメントの隙間を抜ける。だがそれでいい。

「そこ！！」

「！？」

ザンッ

私の剣が男を捉える。ジャッジメントは倒す為ではなく、相手の動きを制限する為に放ったのだ。

「この程度か？」

「ざけんじゃねぇ！！来れ（アデアット）！！」

男が無数の剣を召喚する。アーティファクトか。男は剣を投げまくり、私はそれを捌き続ける。このままいけば少々まずいか。

「終わりだ！！聖なる鎖に抗ってみせよ！！」

「んだこりゃ！？」

巨大な魔法陣が現れ、男を拘束する。見せてやろう、我が秘奥義を！！！

「シャイニング・バインド！！！！」

「ぬおぉぉぉぉ！！？」

光の奔流が魔法陣上に存在するもの全てを飲み込んだ。

「・・・・・ほぅ」

光が収まった後、男はまだ立っていた。あれを喰らって立っていられるとはな。

「ハァ・・・ハァ・・・」

だがこれ以上戦ったとしても結果は見えている。あれほど消耗した状態では私には勝てん。しかしシャイニング・バインドはここまで威力のある技だったろうか？

「まだだ！！」

「終わっている。これ以上戦っても無駄なのはわかっているだろう」

「うっせぇ！！斬艦剣！！」

男が巨大な剣を取り出す。仕方ない。

「喰らえぇぇぇぇ！！」

巨大な剣が振り回されるが、私はそれを避け男に近付き

「フンッ！！」

「ぐあっ！？」

男を殴り飛ばした。

「今のお前相手では剣を使うまでもない。退け」

「クソッ！！」

「・・・・・久しくいい戦いが出来た。感謝するぞ、ラカン」

「!?　ハッ! 俺様が相手してやったんだ、当然だろ!」

ふっ、口だけは達者だな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

雨「ラカンのクラトス襲撃でした」

要「何やってんだあいつ」

雨「ラカンだからね」

要「とりあえずこれで終わりかな」

雨「そうだね。後は俺と椛のイチャパラが「やるかよ」えー」

要「ではこれからも『チートじゃ済まない・i nネギま』をよろしくお願いします」

１０万アクセス記念企画（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

椛「皆さん１０万アクセスありがとうございます」

ア「なんであんたが最初なのよ！！」

椛「わふ？」

シャ「どうせ作者の贔屓よ」

ア「全く」

椛「今回はズェピアさんとクラトスさんでしたね」

ア「ズェピアは早くから出演決まってたからね」

シャ「並行世界だから一般人なのよね」

椛「雨季さんがだんだんＭＵＧＥＮっぽくなってきた、ってぼやいてました」

ア「あれね」

シャ「ニコ動とかでよく流れてるあれね」

椛「よくわかりません」

ア「とにかくカオスなのよ」

シャ「まあいいわ。皆さん『チートじゃ済まないｉｎネギま』を応援して頂きありがとうございます」

ア「次回からも是非見て下さい」

椛「それではさようなら」

教師就任（前書き）

要くん、教師になる。の巻

教師就任

要ｓｉｄｅ

ただ今始業式中。非常に怠い。近右衛門の話長いんだよ。まあそれは置いといて

「なんでお前がいる。クラトス」

「その言葉、そっくりそのまま返そう」

「知り合いの娘の為」

「同じようなものだ」

「「はぁ」」

一年前くらいに麻帆良に来たんだが、こいつも苦労してんな。しかしこいつが入るなんて聞いてないぞ。ちゃんと連絡しろよ。

「では今回就任する二人の教師に出て来てもらおう」

やっとか、適当に挨拶済ますか。近右衛門の挨拶で疲れてるだろうから。

「それでは一条先生、アウリオン先生、よろしくお願いします」

ステージに上がると歓声と妙な視線をいくつか感じる。視線は生徒と教師。大方魔法関係の奴らだな。

「初めまして、一条要だ。担当科目は体育。いろいろ言いたかったが、学園長の話が長かったのでここで終わる。聞きたい事があるのは直接来い。どんな事も答えてやる」

まあこの程度でいいか。どうせクラトスはもっと短いし。

「クラトス・アウリオンだ。担当科目は歴史。以上だ」

ほらやっぱり。生徒もあまりに短い挨拶に呆然としてるな。

「あ、えー、ありがとうございました。みんな拍手」

パチパチ

司会進行がそんな事を言うが、拍手はまばらだった。これでどんな印象になったかな。学生時代の俺ならめんどくさがりと堅物が来たと思うだろうな。

「師匠達、あの挨拶はどうかと」

「お前が長いからだ」

「今後気をつけよう」

俺とクラトスは学園長室で近右衛門と話している。俺の場合は出番待ちなんだが。

「そういや文は？」

「先に行っておりますよ」

コンコン

おっ、来たな。

「「失礼します」」

入って来たのは木乃香と明日菜ちゃんだった。

「よう」

「要兄ちゃん、行こか」

「要さん、あの挨拶はどうなのよ」

「初めて会った時の明日菜ちゃんよりマシだが」

「やめて！掘り返さないで！！」

昔に比べて柔らかく、元気になったもんだ。まあ少しお転婆が過ぎるが、成長すれば大丈夫だろ。

「さて行こうか。１－Ａだったかな？」

「そやで」

「名簿借りるぞ」

近右衛門の机に置いてあった名簿を引ったくり歩き出す。・・・・・・なんだこのクラスは。

「外人多っ！！」

「そうかもね」

これが日本の学校のクラスか？いやはや時代は変わったもんだ。しかしこの中の数人、さっきの視線の奴らだな。木乃香と刹那がいる時点で普通ではないと思っていたが、やはりか。

「要兄ちゃん何処行くん？」

「このクラスよ」

「おおスマン」

いかんな考え込み過ぎた。

「ほなね」

「頑張って」

そう言って二人は後ろの扉から入って行った。前の扉を見る。黒板消しとは古典的な。

「よし」

俺は扉を開ける。落ちてくる黒板消しを掴み前に進む。足に糸が引っ掛かりバケツが落ちてくる。バックステップでそれを避け、バケツトラップと連動して発動した玩具の矢を黒板消しで防ぐ。

「温い」

雛見沢クラスを期待したんだが、まだまだだな。俺が教壇の上に立つと様々な視線が浴びせられる。

「今日からこのクラスの副担任をやる一条要だ。まずこのトラップだが」

クラスに緊張が走る。大方怒られると思ってんだろ。

「精進しろ」

『・・・・・はい？』

「堅っ苦しいのは嫌だからフランクに話すぜ。俺が以前いた学校のトラップはこの十倍は凄かった。ド田舎なのにだ。こんなに道具があるんだからもっと凄まじいトラップを作れ」

マジであれは殺しに掛かってたんじゃないか、ってレベルだったからな。

「えっと、一条先生」

「いたのかタカミチ！？」

地味で気付かなかったぞ。

「酷い」

「落ち込むな。で、何だ？」

「生徒も貴方の事が気になるでしょうし、質問タイムでもやったら」

「いいな。よし質問ある奴！！手を挙げろ！！」

ハイハイハイハイハイハイハイハイ

なかなかに多いな。では最初に

「パパラッチ！！」

「何故その名を！？」

「麻帆良における俺の情報網を舐めるなよ」

木乃香や刹那や近右衛門や志貴やアルクやエヴァンジェリンや牧原兄妹。とにかくいろいろな情報源があるからな。

「では先生！プロフィールを！！」

「一条要、２２歳！趣味はトレーニング！特技は野菜炒め！！スリ

ーサイズと体重は秘密!!」

「なんでやねん!!」

木乃香、いいツッコミだ。

「次は、中国!!」

「古菲アル!!」

「で、質問は?」

「先生強いアルか?」

「おうよ!」

「試合って欲しいアル!!」

「だが断る!!次!!」

何で生徒と試合ないといけない。木乃香と刹那?弟子だからいいんだよ。

「では龍宮!」

「おや、名前を知っていたのですか」

「一応此処に来るまでに顔と苗字だけは記憶した」

「へぇ、じゃあ質問ですけどクラトス先生と知り合いですか?」

クラトスとか、成る程、彼女がクラトスの知り合いの娘か。刹那とルームメイトとも聞いたな。あいつよく俺と会うけどプライベートは話さないからな。

「知り合いではある。ただそれだけだ」

「そうですか」

クラトスの奴、あの娘にもあんまり自分の事話してないな。まあ俺が言えた事じゃないが。

「他に質問は「はい！！」文」

「付き合って下さい！！」

『オーッ！！』

「外に出ろ」

「デートですね！わかりま「バケツ持って立ってろ！！」ショボーン」

こいつ俺らと生活し始めてから性格変わったな。昔のすずかみたいになってきたな。今のすずかはどうだって？更に激しくなったよ。

「じゃあ授業始めっぞ」

「要さん、私は「立ってろ」酷い・・・・・・」

授業も終わって放課後、俺は職員室でクラトスとお茶を飲んでいた。

「龍宮だっけ？お前の知り合い」

「ああ」

「なんか疲れてるか？」

「初めてがあのクラスだからな」

そんなに疲れるか？いやまあ元気が有り余ってる感じだったが。

「失礼します。一条先生とアウリオン先生はおられますか？」

「おぉ刹那、どうした」

「あの、このあとクラスに来て貰いたいのですが」

クラスにか、ふむ、何かイベントかな？

「わかった。クラトスは？」

「行かせてもらおう」

「という事だ」

「ありがとうございます」

という事でクラスの前に来たんだぜ。トラップはないようだな。

「入るぞ」

『どうぞ～』

中から声が聞こえたので入るとクラッカーの音が鳴り響き、生徒達が一斉に言った。

『一条先生、クラトス先生、ようこそ麻帆良へ！！』

「歓迎会か」

「・・・・・ふむ」

こういうのは初めてだな。生徒から歓迎されるってのは存外気分が

いい。

「ほら主役は真ん中に」

そう言って俺らは真ん中の席に座らされた。机には菓子やらジュースやらが所狭しと並べられている。

「じゃあ一条先生、音頭を」

「おう、この度は俺らの為に、って堅苦しいのは嫌いだから乾杯！！！」

『乾杯！！！』

楽しいねぇ、酒がないのは残念だけど。

「明日菜ちゃん」

「何ですか？」

「クラトスストライクゾーンだろ」

「な、何言うんですか！！／／／／」

おうおう、顔真っ赤にしちゃって可愛いね。

「要さん！私は要さんがストライクゾーン「黙れ」」

文が俺を好いているのは十分にわかった。だから以前の文に戻ってくれ。

「ん？」

クラスの隅っこでちびちびジュースを飲んでるあいつは、確か長谷川千雨だっけ。

「みんなと飲まないのか？」

「・・・・・騒がしいのは苦手なんです」

「こりゃ失礼。無理に誘って悪かった」

「！　普通は無理に参加しろって言うと思いますけど」

普通、か。まあ確かにこういう場合は参加させるべきだろうけど。

「人には得手不得手があるからな。無理に誘って気分を悪くさせるのは気が引ける」

「・・・・・変わってますね」

「お前さんの言う通り普通じゃないんだろ」

「クスッ」

「おいおい笑うなよ」

「ラヴ臭が！！ラヴ臭がするよ！！」

「ハルナは黙って下さい」

「私の要さんを、妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい」

「文さん、黙って下さい」

オマケ

文ｓｉｄｅ

今日からこのクラスの生徒ですか。ドキドキしますね。

「では射命丸さん」

「はい」

教室に入ると視線を感じて少し緊張するが、木乃香さんや刹那さんという知り合いがいてそれも解れる。しかしいろいろな人がいるものです！？

一人の生徒と目が合う。その瞬間何かが繋がった。

「「同志！！」」

『・・・・・はぁ？』

がっしりと握手をする。これが我が同志にして麻帆良のパパラッチこと、朝倉和美との出会いであった。

クラトスｓｉｄｅ

さて、今日は始業式だが、二時間授業があるらしいな。私が担当するのは１－Ａか。確かマナがいるクラスだな。予習復習をやっておくか。

「おやアウリオン先生、勉強ですか」

「オベローン先生ですか。生徒の手前、間違える訳にもいきませんから」

私に話掛けてきたのはズェピア・エルトナム・オベローン先生。教師の他にも小説家や演出家もやっている。彼の書く喜劇はなかなかに面白い。

「いやはや素晴らしい。今の時代、ちゃんと勉強してから授業に望むとは」

「いえ、当然の事です」

「その当然が出来るのが素晴らしいのですよ。さて、貴方が教師デビューを飾るクラスは・・・・・これはこれは」

オベローン先生は私が今日担当する１－Ａの名前を見た瞬間、表情を変えた。

「どうしました？」

「貴方の教師デビューはなかなかの波瀾万丈のようだ。では」

よくわからんが、やるしかないな。
このあと、私は非常に疲れたのは言うまでもない。

教師就任（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「はいスタート」

シャ「シンプルね」

椛「今回は要さんが先生になって、クラトスさんも先生になって、文さんが壊れた話ですね」

ア「実にわかりやすい」

シャ「クラトスさんどうしたのかしら？」

ア「質問攻めでしょ」

椛「大変ですね」

ア「今回話す事ないから早く終わって遊びに行きましょう」

シャ「何処に行こうかしら」

椛「美味しいもの食べたいです」

ア「なら北海道辺りに行きましょ」

シャ「では次回もお楽しみに」

茶々丸を造ろう（前書き）

茶々丸誕生！！

そして今作初コラボ。
チートを造るならチートだよね。
香崎様ありがとうございます。

茶々丸を造ろう

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

やはり、必要か？いやしかし・・・・・・

「うむむ」

「ドーシタ御主人」

私が悩んでいるとチャチャゼロが話し掛けてきた。どうせだから話すとするか。

「チャチャゼロ、ロボットをどう思う？」

「・・・・・・ハァ？」

「いや実はな、兄様が言っておられたのだ。ロボットは浪漫だと。そんな兄様の為に是非ロボットをプレゼントしてあげたい！！」

「兄貴・・・・・・」

呆れているのか？いや確かにあんまり兄様を甘やかすのは私もどうかと思うが、普段頑張っておられるのだ。たまにはプレゼントしても悪くない。私の株も上がるしな。

「マアイッカ、ソレデソノロボットハドウスンダ？」

「ふーむ、要にでも頼むか」

要ｓｉｄｅ

ふう、休みの日は家でのんびりするのが１番だ。文は部活だからゆったり出来る。

「要、お茶菓子食べる？」

「頂こう」

フェイトが持って来たクッキーを一口食べ、お茶を飲み、膝の上で寝ている久遠を撫でる。最高の休日だ。

ビーッ　ビーッ

「おい要！別の世界からの転移反応だ！！」

「わかってるよヴィータ」

全く、人が休日を満喫してるっていうのに。

そして上空に穴が現れ、二人組の男女が降りてきた。

「ユリに鈴か、久しぶりだな」

「要久しぶり」

「落ち着いてんな」

「おかげさまで。それで今日は何だ？久遠か？楔か？それともうちの子か？」

「「うちの子？」」

なんだこの反応は・・・・・・ああそうか、多分こいつら俺ら時間で昔から来たのか。

「ちょっと話そうか」

「・・・・・・という事だ」

「「ふーん」」

ま、この二人ならこんな反応かな。

「じゃあここはネギま！な訳だ」

「しかも志貴やアルクェイド、クラトスや文までいるなんて面白そうじゃない」

面白そうね。確かに十分面白いな。

「要いるか？」

「おっ、エヴァだ」

「エヴァね」

「なんだ貴様ら」

「俺の友人だ。それで何の用だ？」

エヴァンジェリンから俺の所を訪ねて来るなんて大層な事かくだらない事かのどっちかだろ。

「ロボットを造りに来た！！」

なんでやねん。

「実は兄様がロボットが好きだからプレゼントしようという事だ」

志貴ってロボット好きだったのか。とはいえいきなり来られてもな。

「鈴やりましょ！！」

「ｏｋ」

なんでこいつらがやる気を出してんだ。まあこの様子じゃ止めても無駄か。

「ラボとすずかと材料は貸す」

「サンキュー」

「よくわかってるじゃないか」

「おお、では」

「エヴァンジェリンは外で待ってろ」

どんなチートロボットが出来ても責任は負わんからな。

すずかｓｉｄｅ

木乃香ちゃんのデバイスはこれで良し。後は木乃香ちゃん自身が使って微調整すれば完成だ。

「すずか～」

「あ、要くん。って鈴さんにユリさん、久しぶりです」

「おひさー」

「元気？」

この二人に会うのもホントに久しぶりだな。でもわざわざラボに来るなんてなんの用だろう？

「すずか、ロボット造る気ないか？」

「ある！！」

「即答かよ」

だって好きなんだもん。ロボット造りなんて浪漫だよ浪漫。でもどんなロボット造ろうかな。巨大ロボットもいいし、合体ロボもいいよね。

「ロボット案ならあるぞ」

そう言って鈴さんが取り出したのは一枚の紙。そこには女性の姿が描かれていた。耳がアンテナになっているのでロボットなんだろう。

「女性型か。志貴の奴メカヒスイ思い出したりしないか？」

「全く型が違うから大丈夫じゃない？じゃあすずか、案内して」

「わかった」

どんな武装にしようかな。あんなのやこんなのもいいな。

鈴ｓｉｄｅ

まさかこの手で茶々丸を造り出せるとは。くー、要で遊ぼうと思ったら棚ぼただよ。

「材料はどうします？」

材料か。フレームとかは強固なのにしたいし、武器も強く、チートと渡り合えるレベルを目指したいな。

「どんなのある？」

「オリハルコンにヒヒイロカネ、賢者の石にモンスターの素材、あとＯＲＴの脚が残ってたかな」

「「ＯＲＴけてーい」」

どう考えてもそれじゃん。どんな攻撃の反動にも耐える最高の素材じゃん。しかし他のも凄いな。武器の材料にしよう。

「じゃあ始めるぞ」

「「おー」」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「関節はどうする？」

「原作は球体関節だけど」

「この子も漫画キャラなんだ」

「「すずか、そこまで馴染むかｗｗｗ」」

「ロケットパンチは必須でしょ」

「目からレーザーもな」

「ビームサーベルもいるよ」

「他には？」

「ハイパー・メガ・ランチャーとミーティアどう？」

「ｗｗｗｗ」

「ユリさんの発想は神だね」

「一番の問題だな」

「そうね」

「難しいわね」

「「「性機能」」」

「必要？」

「必要」

「寧ろ必須」

「「ですよねー」」

「さあ仕上げのＡＩだ」

「長かったね。五日？」

「時間なんていいわ。これで最後の入力おしまい！！」

「茶々丸、起動！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

要ｓｉｄｅ

「オラァ！！」

「ほっ！」

あいつらが閉じこもって五日程経った。俺は暇なんでヴィータと特訓中だ。

「「「いやったーーーー！！！」」」

おっ、完成したみたいだな。

ラボから出て来た三人にはやり遂げた感が溢れ出していた。そしてもう一人、三人の後ろに着いて来たあの女の子がロボットなんだろう。

「お疲れ、早速エヴァンジェリンに報告するか」

「その前に最終テスト」

「要！茶々丸と戦え！！」

はっ？・・・・・ああ成る程。エヴァンジェリン達と暮らすならある程度戦えないとな。

「よしわかった。やってやる」

「あんなのに負けるなよ、要」

「むむ、あんなのとは失礼だよヴィータちゃん」

「そうよ！私達の最高傑作なんだから！！」

「舐めて掛かると痛い目に合うぞ」

舐めて掛かる気は毛頭ない。どんな相手にも本気で戦おう。

「よろしくお願いします、要さん。絡繰茶々丸と申します」

「よろしくな、茶々丸。じゃあ早速、身体能力６０％解放」

あいつらが作ったんだ。油断ならん。どんな事をしてきてもおかしくない。

茶々丸が取り出したのはビームサーベル。この程度なら想定内だ。

「シールドランス」

シールドを丸めて槍のようにし、迎え撃とうとした。しかし茶々丸は思ったより動きがよく、シールドランスは弾かれた。

「ふむ」

「ハァッ！！ヤァッ！！」

動きも悪くない。太刀筋も既に上級者のものだ。

「フッ！！」

「おっと」

ロケットパンチか。浪漫兵装だな。

俺はそれを受け止めたが、即座にその場から離れた。俺がいた場所

目掛けてレーザーが飛んできたのだ。

「危ない危ない」

「流石です。ではこちらはどうですか？」

茶々丸は何処からか巨大なランチャーを取り出す。転移か？まあどうでもいい。

「ハイパー・メガ・ランチャー！！」

「ルーフシールド」

ビーム砲をルーフシールドを使って受け流す。なかなか威力があるようだな。

プ～ン

・・・・・ん？虫？こんな所にか？

腕を見ると小さなものが付いているいるのが見えた。虫などではなく、小さな機械が。

ドゴオォーン

百合姫ｓｉｄｅ

「成功！！」

超小型の爆弾炸裂！！作るの苦労したんだよね、あれ。だけど多分大丈夫よね、要なら。

「茶々丸、気をつけなさい」

「はい、お母様」

私は茶々丸にお母様と言うようにしている。というか起動した時に茶々丸から聞いてきたのよね、お母様って呼んでもいいですかって。ちなみに鈴はお父様、すずかはマイスター。

「あたた、爆弾かよ」

やっぱり無事か。まあこの程度でやられたらチートじゃないわよね。

「はー、強いな」

「ありがとうございます」

「だが、まだまだだ。ミニスライサー、十連！！」

要は小さなシールドスライサーを飛ばす。茶々丸はそれを避けて要に接近する。

「ニードルマシンガン」

しかし要は茶々丸に向かって無数のニードルガンを撃つ。茶々丸はそれを避けているが、巧みに誘導されているのがわかる。そしてさっきのスライサーが戻ってきた。

「！！　シールド！！」

茶々丸はそれをレーダーで感知したのかシールドを展開した。あのシールドは、アンチ・マジック・シールド。たいていの魔法なら掻き消す事が可能だが、まだ展開時間は短い。

「ほら、隙ありだ」

「あっ！？」

茶々丸が防いでいる間に要は近付き、脚を払って茶々丸を地面に伏せさせた。

むぅ、やっぱり生まれたてじゃ勝てないか。武装を十分に生かせなかったし、戦闘経験も足りないし。

「これでいいか？」

「十分データは取れたよ。じゃあ外に出よ」

「流石要だな」

「申し訳ありません。負けてしまいました」

「気にするなよ、茶々丸」

「そうよ、相手が悪いわ」

次来るまでに新しい武装を考えておこうかしら。

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

「ふぅ」

「どうかな？」

「見事な紅茶だ」

あやつらが別荘に入って5時間。久遠の相手をしたり、フェイトが入れた紅茶を飲んだりと、ゆったり時間を過ごした。ヴィータとも少し会話をしたが、さっさと別荘に入ってしまった。

「ただいま」

「ん？終わったのか」

「初めまして、マスターエヴァンジェリン」

ふむ、こいつがロボットか。どう見ても人だが、まあロボットなんだろう。

「結構強いぞ」

「俺らが造ったんだから当然」

「凄いわよ」

この二人が何故こんなに自身満々かは知らんが、何故か説得力があるな。

「とにかく助かった。感謝する」

「いやいや、俺達こそ感謝したいぜ」

「茶々丸造れたもんね」

そうなのか？この二人はそんなにロボットが造りたかったのか？

「満足したし、帰るな」

「じゃあね、要」

「またな」

すると二人は消えた。転移したのか。

「茶々丸、と言ったな」

「はい、絡繰茶々丸です」

「我が家へ連れていってやる。それと私の事はマスターと呼べ」

「わかりました、マスター」

「ではな、要」

「また遊びに来い」

「茶々丸、たまにはメンテに来てね」

「わかりました、マイスター」

兄様はどんな反応をしてくれるかな？今から楽しみだ。

ちなみに志貴は、茶々丸のロケットパンチやら目からレーザーやらその他諸々を見た瞬間、興奮のあまり茶々丸に抱き着き、エヴァンジェリンとアルクェイドにぼこられた。

茶々丸を造ろう（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「北海道！！」

椛「さ、寒いです」

シャ「じゃああったまりましょう」

ア「ズルズル」

シャ「やっぱり札幌ラーメンよね」

椛「ラーメン美味しいです」

ア「次はデザート！！」

椛「これが生キャラメルですか」

シャ「とろけるわ～」

ア「美味しい～」

椛「次はどうします？」

シャ「観光っぽい事しましょう」

ア「市場は活気があるわね」

そこの美人さん達！！試食はどうだい？

椛「じゃあちょっとだけ」

ア・シャ・椛「「「イクラウマー！！」」」

椛「ハフハフ」

シャ「スープカレー美味しいわね」

ア「そういえば今回の解説してないわね」

椛「香崎様、コラボありがとうございます」

シャ「茶々丸は原作とは違い、限りなく人に近い見た目よ。耳のアンテナも飾りだし」

ア「武器とかは基本転移させるんですって」

椛「次回もコラボだそうです」

シャ「水橋様とのね」

ア「では次回もお楽しみに」

とあるヴェザードのリベンジ（前書き）

水橋様の二つの属性を持つ男とのコラボです。

水橋様、ありがとうございます。

とあるヴェザードのリベンジ

要ｓｉｄｅ

今日も今日で夜の学園警備だ。雑魚ばっかりだが体はちゃんと動かさんとな。

「ほらよっ！！」

「ぐえっ！？」

これでおしまいだな。今日も他の奴らより大分早く終わったな。さっさと帰って寝るかね。

「やっと見つけた！！」

「ん？」

そこにいたのは以前とある世界で戦った男とユニゾンデバイスとシグナムだった。

「あー、なんて名前だっけ？変な奴？」

「炎小路火斐だ！！」

「貴様！炎小路を侮辱するな！！」

未熟だな。この程度の挑発に乗るとはな。

「はいはい、どうせリベンジだろ」

「わかってるじゃねぇか」

「今回は私も参加するぞ」

「私もよ」

「で、場所は？」

「ちゃんと用意してある」

そう火斐が言い、俺らは転移した。

火斐ｓｉｄｅ

転移した場所はモンハンワールドの旧火山。

「いい場所だ。お前達の火力だったら密林とか火事になりそうだしな」

「言うじゃねぇか」

「勝たせてもらう。コルト！！」

「はいはい」

「「ユニゾン・イン！！」」

シグナムとコルトはユニゾンし、俺はヘルを構える。要はこちらを見ず、どこか遠くを見ている。

「貴様！何処を見て「来るぞ」何？」

要がそう言った瞬間、マグマの中からグラビモスとその亜種が出てきた。

「厄介なのが来たな」

剣の類じゃああいつの甲殻を砕くのは面倒だ。だけど片付けないと要との死合ができない。

「下がってろ」

「は？お前一人でやるのかよ」

「あの程度ならな。７０％でいいかな」

そう言った要はグラビモスの方へと歩みを進める。まあ本人がやるってんなら見てみるか。要の手の内も少しは知っておかなきゃな。

「おいデカブツ」

「「グオォォォォォ！！！」」

「失せろ！！」

要がジャンプしグラビモスの顔を蹴る。するとグラビモスはまるでサッカーボールのように跳ね飛ばされた。

「グアァァァァァ！！！」

それを見た亜種が熱線を放つがそこに要の姿はなかった。要は既に亜種の下に潜り込んでいた。

「オラァァァ！！」

要が拳を突き上げると亜種は宙に舞い上がり落下した。

「「グウゥゥゥ・・・・・・」」

二体のグラビモスはそれだけで相手は敵わない敵と判断したらしく、逃げ出した。

「根性無しが」

要がそう吐き捨てる。要ってあんなに強かったのか。

「炎小路」

「ああ」

ちょっと、いやかなりマズイかもしれん。

「【バーニングパラダイス】」

半径５ｋｍに及ぶ炎陣が周りを囲む。さっきみたいな邪魔が入ってこないようにするためだ。

「ここって魔法使えないんじゃなかったか？」

「レアスキルだからな」

「成る程」

さて、初っ端から全開で行くぜ。俺はソウルカードを取り出した。

「《我がカードに集いし龍よ、我の声と共にその姿を表せ》炎龍ファイライド」

「グオォォォォォ！！！！」

呪文を唱えるとファイライドが現れる。

「《我！炎龍の主なり！龍の力よ！我の鎧となれ！》」

そしてファイライドとソウルカードが俺を赤く包み込み、俺は赤いリオソウルに龍の羽が生えた状態になった。

「それが全力か。なら試合を始めよう」

「試合じゃなくて死合だ」

そう言った瞬間、要から膨大な殺気が溢れ出した。

「・・・・・後悔するなよ？身体能力１００％解放」

次の瞬間、要は一瞬にして俺の前に現れ、俺を殴り飛ばした。

シグナムｓｉｄｅ

「炎小路！？」

「大丈夫だ！！」

何者なんだ一条要という男は。私達に勝てるのか？

『シグナム！何弱気になってるの！！』

「すまない」

そうだ、やる前から弱気になってどうする。今はこの男に勝つことのみを考えろ。

「そら行くぞ」

「こちらこそ！！ハアァァァ！！！」

私は一条に向かって剣を振り下ろすが、たやすく避けられる。

「ほらほら！！」

「クッ！？」

一条が連続で拳を放ってくる。始めはなんとか防げたものの、徐々に速くなっていき、私の腹に入った。

「ぐふっ！？」

「追加！！」

顔面に向かって拳が放たれる。避ける事も防ぐ事も不可能。だがここで炎小路がやってきた。

「うおぉぉぉぉぉ！！！」

「おっと」

炎小路は腕目掛けて剣を振り下ろすが、一条は後ろに跳んで避けた。

「炎小路流奥義弐ノ型！！爆発斬（エクリスプロージョン）！！！」

ドオォォーン

「どうだ！！」

炎小路の剣が一条の体を斬り、一条は爆発した。しかし何故一条は避けなかった。今までの動きを見る限り避ける程度たやすかったはず。

そして案の定服が燃えただけの一条が煙の中から出てきて言った。

「興ざめだ」

「んだと？」

「死合だからどれだけ自信があるかと思ったが、この程度の実力で挑んでくるとは、全く変な奴だ」

「てめぇ！！ぶった斬る！！」

「あまり調子に乗るな！！」

『痛い目に合わせてあげる！！』

私と炎小路は剣を構える。コルトとのユニゾンも高まる。この男、必ず斬る！！

要ｓｉｄｅ

本当に挑発に乗りやすいな。まあ楽だけど。しかしさっきの爆発はなかなかだったな。アルティメットワンを思わず使っちまった。これ以上やっても意味ないし、終わりとするか。

「喰らえ！！龍奥義！！炎龍獄匠！！！！」

「斬る！！紫電一閃！！！！」

二人共剣に炎を纏わせて斬り掛かってくる。そして剣が俺の体を斬る。火斐の五連撃にシグナムの全力の一撃。どちらも見事だが・・・・・・

「無駄だったな」

「そんな・・・・・・」

「有り得ん・・・・・・・」

実際は無駄じゃなかった。アルティメットワンの防御を超えて俺の体を斬ったが、浅い傷だったのですぐに再生したのだ。

「吹き飛べ」

「ガハッ!!?」

俺はシグナムを蹴り飛ばした。この感覚だと肋骨が砕けて内臓破裂したな。

「シグナ「他人の心配か?」しまっ」

ドス

「カ・・・・・ハ・・・!!?」

俺の腕が火斐の胸を貫く。腕を抜くと火斐は崩れ落ちた。ぎりぎり生きてるはずだが。

「神様ヘルプ」

『僕を呼ぶなら最初からやらないでよ』

「喧嘩売る相手を間違えたという事で」

『全くもう』

そう言いながらも治してくれる神様。流石だな。

『ついでに元の世界へ帰しておくよ』

「お願いします」

火斐とシグナムの体が光に包まれ消えた。

「あ、俺どうしよ」

まあ神様に帰してもらえばいいか。どうせ旧火山にいるんだ。さっきのグラビモスを食材として狩ってこ。

とあるヴェザードのリベンジ（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「味噌煮込みうどんウマー」

シャ「味噌カツもいいわよ」

椛「今私達は愛知にいます。なんでかって？雨季さんの地元だからです」

ア「この前は北海道、今回は愛知。次何処行く？」

シャ「端、真ん中ときたら、もう片方の端にも行きたいわね」

椛「沖縄ですか、いいですね」

ア「椛、ひつまぶしちょっと頂戴。味噌煮込みあげるから」

椛「はい、どうぞ」

シャ「今回は火斐くんのリベンジだったわね」

ア「完敗だけどね。ひつまぶしもいいわね」

椛「前作の要さんならそこそこな勝負になったそうです。味噌煮込みもなかなか」

シャ「そうね、神様の所で修行したからね。私にも頂戴」

椛「それに火斐さんはまだ伸びそうですしね。では私もカツを一切れ」

ア「次回のコラボで、コラボは一時終了。次は海人様のね。私にもカツを」

シャ「水橋様、気に入らない点があれば言って下さいね。じゃあ味噌煮込み頂くわよ」

椛「では次回もお楽しみに。名古屋飯美味しいです」

今と昔と未来（前書き）

海人様とのコラボ。

未来はこの雨季が勝手に創る！！

今と昔と未来

鈴音ｓｉｄｅ

「ふぅ」

今日の訓練はこの位でいいでしょう。あまりやり過ぎても効率が悪いですし。

「あ、そうだ」

最後にディケイドライバーの練習をしておきましょう。

「ん？あっ！しまっ・・・・・・」

スバルｓｉｄｅ

買い物頼まれたんだけど、何を買うんだっけ？

「スバルちゃん！肉まんいるかい？」

「頂きま～す！！」

「スバルちゃん、林檎食べてかない？」

「ありがとうございま～す！！」

商店街の人は優しいな～。

「！？」

今、どこかで魔力が・・・・・・

「ごめんなさ～い、用事出来ました」

こっちかな。魔力を感じた方へ向かって行くとそこには鈴音ちゃんがいた。

「鈴音ちゃん、なんで此処に？」

「スバルさん？此処は何処ですか？」

あれ？此処が知らないで来たんだ。というか若くなってるよね。・・・・・私が言える事じゃないか。

「とりあえず要さんの所に行こ」

「はい」

「ただいま～」

「おかえり～」

家に帰ると要さんが居間でテレビを見ていた。

「おっ、鈴音じゃないか。久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです」

「・・・・・・スバル、買い物頼んだはずだが」

「・・・・・・行ってきます！！」

いけない！忘れてた！早く行かないと！！

要ｓｉｄｅ

スバルが慌ただしく家を出て行った。全くあいつは。

「あの、なんで要さんは此処に？ミッドチルダにいたのでは？」

「それならこっちが聞きたい。何故麻帆良にいる？」

「此処、麻帆良でしたか」

ん？知らずに来たのか？・・・・・・ああ成る程。

「ディケイドライバーをミスったな」

「うぐっ」

図星か。しかし今更ディケイドライバーをミスるか？もう随分愛用したろうに。それに妙に若いし。

「鈴音、娘達は元気か？」

「はい？娘？」

ああやっぱりか。この鈴音も過去から来たのか。

「面白い話をしてやる。座れ」

「はぁ」

鈴音ｓｉｄｅ

「・・・・・という事だ」

言葉が出ない。まさかこの要さんが未来の人だなんて。見た目も変わってないし。あ、でもスバルさんはちょっと大人っぽくなったかな、見た目だけ。

「いや～最近過去の知り合いばっかりに会ってな。懐かしい限りだ」

「年寄り臭いですよ」

「事実年寄りだ」

そう言ってもしっかり若返ってるくせに。そういえばさっき娘達って言ったっけ？

「あの、娘達って」

「お、聞きたいか？飛翔とお前達の未来」

「いえ、未来については聞きたい訳ではないのですが、結婚出来たのかなって」

「そりゃ未来について聞いてるのと同じだよ」

う、確かに。でもやっぱり気になる。父様と結婚出来たのか。

「飛翔とお前は結婚したよ。まあそうでもないのに娘がいたら問題だが」

「そうですか」

よかった。父様は私を子供に見てる部分もあるから。

「でも今考えると本当にびっくりしたな」

「何がですか？」

「そうだな。お前らが結婚報告に来た時の話をしてやろう」

そう言って要さんは語り始めた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

あれは初夏の事だった。

「パパ～♪」

「よしよし」

「要くんは子供に甘いね」

「それはみんなだろ」

久しぶりの休暇を取った俺は家族団欒を過ごしていた。

ピンポーン

「客か」

「私出るね」

そう言ってなのはは玄関に向かった。

「飛翔さん！鈴音ちゃん！」

「ほう、あの二人が来たか」

「だーれ？」

「パパの胃に優しい人だ」

「そんな事言ってもわからんだろ」

「事実だ。久しぶりだな飛翔。老けた？」

「お前がな、要」

確かに俺は老けた。この世界はどうやら他の世界より時間の流れが早いらしいからな。

「うちの娘の一人、みずはだ。みずは、ご挨拶」

「はじめまして、いちじょうみずはです」

「不破飛翔だ。よろしくな」

「不破鈴音です」

「そんで、何の用だ？」

「報告があってな」

「報告？」

「んー、何と言っていいか。・・・・・・鈴音と結婚した」

「お腹には子供もいます」

「「・・・・・・・・・・・・近親相姦！？」」

「「違う（います）！！」」

俺となのはの絶叫が家中に、いや、町内に響き渡った。

「どうしたの！？」

「事件か！？」

「要さん！子供が寝てるんですよ！！」

「近親相姦と聞いて！！」

「ついに3Pですね、お父様！！」

「フェイト、ヴィータ、なんでもない。スバル、スマン。すずか、すずめ、黙れ」

「相変わらずだな、要の家族は」

「相変わらず過ぎて困る。しかし近親相姦のお前よりか」

「だから違う！！鈴音は養子みたいなもんだ！！」

「そうですよ、要さん。それに愛があればいいんです」

「「うんうん」」

「だからすずかとすずめは黙れ」

誰がどう見ても似た者親子だな。外でもこんなだから実に困る。

「ま、とりあえずおめでとう。みんな飛翔と鈴音が結婚だとよ」

『へー、近親相姦じゃん』

「・・・・・もういい」

「じゃあ飛翔、後ろ向け」

「ん？わかった」

「おめでとう！！！」

バシィン

俺はおもいっきり背中を叩いた。

「グハッ！？いきなり何を」

『おめでとう！！！』

バシィン　バシィン　バシィン　バシィン　バシィン

その後も妻達が叩いた。

「何故に・・・・・・」

「大丈夫ですか！？」

「しばらく動きたくない」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「・・・・・なんで叩いたんですか？」

「めでたいから」

「意味がわかりません」

でも本当に結婚したんですね。結婚までの経緯はよくわかりませんが、ちょっと安心。

「わかってると思うが未来は変わる。結婚しないかもしれないし、結婚してもできちゃった婚じゃないかもしれない」

「でも私は結婚出来るように頑張ります」

「そうかそうか。じゃあ結婚式楽しみにしてるぞ」

「はい」

「そうそう結婚に至る経緯は教えてもらえなかったんだよな。俺の予想ではお前が押し倒して告白、飛翔がその責任を取ったと見る」

なんでそうなるのでしょう？それではまるで私が痴女みたいじゃないですか

「お前年齢詐称薬って使った事あるか？」

「・・・・・何故？」

「その様子だと使ったみたいだな。いやはや大胆じゃないか、自分

を成長させて遊園地デートとは」

「な、何故それを!?」

「未来のお前が話してくれたぞ」

未来の私は一体何を話しているんですか!!

「そんな事する奴が押し倒さないと何故言える」

「うぅ」

「ついでに教えると子供は三人。女の子二人と男の子一人だ。アリサ達との子供は・・・・・・まあ言う必要ないか。だが俺の子の方が可愛いがな!!」

三人・・・・・妥当な人数でしょうか。

「よいお話ありがとうございました」

「何か知りたくなったらまた来るといい。俺が話せる範囲なら話そう」

「はい」

「ただディケイドライバーが完全に制御出来るまでは飛翔に連れて来て貰え」

「あう」

確かにそうかもしれないけど、そんなにきっぱり言わなくても。

「ちゃんと一人で帰れるか？」

「大丈夫です！」

私はちゃんと、ちゃんと一人で帰った。大事なことなので二度言いました。

今と昔と未来（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

椛「わー」

ア「流石に大きいわね、ジンベイザメ」

シャ「皆さんこんにちは、私達は今、美ら海水族館にいます」

椛「お魚いっぱいですね。普段海のお魚なんて見ないので新鮮です」

ア「妖怪の山だもんね」

シャ「じゃあそろそろご飯にしましょう」

ア・シャ・椛「「「ズルズル」」」

ア「ソーキそばなかなかね」

シャ「うん、美味しいわ」

椛「それじゃあ今回のお話に入りましょう」

ア「今回は、今の要と鈴音。要からすれば昔の話。鈴音からすれば未来の話」

シャ「だからこんなタイトルなのね」

椛「それにしてもできちゃった婚ですか」

ア「作者が勝手に考えたけどね」

シャ「私としてはすずかちゃんの娘が」

椛「すずめちゃんですか」

ア「すずかはどんな教育したのかしら」

シャ「遺伝かしら」

椛「そういえば次回は熊本らしいですよ。麻生さんがいきなり談合でどうとか」

ア「阿蘇山といきなり団子ね」

シャ「では次回もお楽しみに」

ネギ？ああ野菜、えっ！？人名！？（前書き）

てけとーに書いたよ。
後書きで本気を出す。

ネギ？ああ野菜、えっ！？人名！？

木乃香ｓｉｄｅ

なんや今日から新しい教育実習の先生が来るらしい。もう二年の三学期やのに。

「木乃香、どんな人が来ると思う？」

「うーん、楽しい人やとええな」

「そりゃ予想じゃなくて希望よ」

明日菜にツッコまれるとは、明日菜もそういうのに慣れてきとんな。

「とりあえずお迎えに行こか」

「そうね」

おじいちゃんの知り合いの紹介やから魔法関係なんは間違いないやろな。

もうすぐ駅に着くけど、こんな事になるなんてな。

「こんのクソガキ!!」

「ひぃぃ!?」

周りから見れば明日菜が子供を虐めてるみたいやけど、実際はあの子供が明日菜に失恋の相が出てる言うたから明日菜が怒っとるんやけど。しかしあの子供、魔法で占いをしおったな。じゃあもしかしてあの子が・・・・・・

「ハ、ハ」

いきなり魔力の高まりを感じる。

『マスター!あの子っす!!』

『わかっとるわ!』

今、念話で会話したんはうちのデバイス『ホープムーン』。どっかであの語尾聞いた事ある?木の精、もとい気のせいや。それよりも・・・・・・

「明日菜!!こっち来て!!」

「?　いきなり何「ハックション!!!」キャー!!?」

遅かった。あの子がくしゃみをすると魔力が暴走したのか、明日菜の服が吹き飛んだ。

『あーあ、タカミチも見てたのに、災難っすね』

『やっぱりこの気配は高畑先生やったか。明日菜、ご愁傷様』

要ｓｉｄｅ

「・・・・・・で？」

いきなり学園長室に呼ばれたと思ったら、俺に子守をしろと？何を考えてるんだ。

「ナギの子なんです。一応見てやってくれませんかの？」

「英雄の子供だからといって俺は容赦せんぞ」

「当然です。わしもその気はありませんが、周りが・・・・・・」

成る程な。英雄の息子、それだけでちやほやされる理由は十分だ。

それでは本人が成長しない。ま、本人にその気があるかどうかも問題だが。

「それ以前に子供が教師というのは無理がないか？」

「それを言ってしまえばおしまいですのぉ」

「学園長ーーーー！！！！」

「フォ？明日菜くん、どうしたかね？」

いきなり明日菜ちゃんが学園長室に突っ込んで来た。手には子供。
あれだな。しかし何があった？

「明日菜ちゃん、とりあえず坊主を落としてやれ」

「・・・・・・はい」

「あいた！？」

本当に落としたな。まあ降ろしてやれと言われても落としたろうな。

「坊主、名前は？」

「ネギ・スプリングフィールドです」

ネギ？それ本当に本名か？野菜だろ、野菜。・・・・・・ネギって
外国語でなんて言うんだっけ？

「木乃香、何があった？」

「あの子が占いで明日菜に失恋の相が出てるって」

「僕親切で教えたのに」

ふむふむ、成る程。

「学園長、本国に帰したらどうです？」

「えぇっ！？」

「いやいや、まだ何もやっておらんじゃろ」

何を言うか。俺の生徒に失恋の相なぞ、失礼もいいところだ。しかもそれが親切？日本語勉強し直せ。

「まあまあ要兄ちゃん。これからやから、ね」

「むぅ」

仕方ない。我慢してやろう。

そのあと、ネギ坊主が教育実習生なのに明日菜ちゃんが反対したり、それを近右衛門が無視したりして、ネギ坊主は正式に教育実習生となった。

「そこにいるのが君が担当するクラスの副担任、一条要先生じゃ」

「一条要だ。一切甘やかす気はない。本当にスプリングフィールド実習生が出来ない事以外はフォローはせん。わかったな」

「は、はい！」

「では一条先生、よろしくお願いします」

「クラスに行くぞ」

「はい」

返事だけは一人前だな。あのクラスの洗礼を受けてどうなるか楽しみだ。

「あの、一条先生。どんなクラスなんですか？」

「ああ、クラス表を渡してなかったな。これは失礼。ほら」

「ありがとうございます」

クラス表を渡したら見入り出した。名前くらいはしっかり覚えろよ。

という事でクラスの前に来たんだが、いきなり黒板消しが準備してあるじゃないか。しかもネギ坊主は気付いてない。

「お前ら、聞こえるか？今から新しい教育実習生が入るぞ」

『はーい』

「ほら、もう入っていいぞ」

「わかりました。・・・・・失礼します！！」

勢いよくドアを開けると黒板消しが落ちてきて、ネギ坊主の頭の上で止まった。

（マイナス１０点）

すぐに解除したようだが、常に障壁を張る馬鹿がどこにいる。ああ、此処にいるか。

そのあとは皆さんの予想通り全てのトラップに掛かってくれた。

「えー！子供！？」

「一条先生！新しい教育実習生の先生じゃないの！？」

「その通り、彼が新しい教育実習生だ。挨拶出来るか？」

「は、はい。教育実習生のネギ・スプリングフィールドです。皆さ

んよろしくお願いします」

『か』

っと、耳栓耳栓。

『可愛いーーー！！』

やはりな。いつの時代も女子は凄まじい。

「ちょっとあんた！今黒板消しに何かしなかった！？」

ほう、明日菜ちゃんが気付いたか。まああれはばれるよな。

「一条先生も見ましたよね？」

「スマン、本読んでた」

もちろん嘘だが。

「じゃあ朝倉と文。適当に質問やっとけ」

「「了解」」

この先どうなるかね。

業後、木乃香と刹那が職員室に来た。

「一条先生いますか？」

「いません」

「おるやん！！」

「冗談だ。歓迎会か？」

「なんでわかるんですか」

まあ俺の時もやったしな。パターンだよ。パターン。

「まあ後で行くわ」

「「はーい」」

書類整理やらないとな。仕事面倒だな。

仕事を済ませて２－Ａに行く途中。うちのクラスの宮崎が階段から落ちる瞬間を見た。

「神速！！」

俺は一気に走り、宮崎を掴もうとしたが、僅かに手が届かない。

「・・・・・・ほっ」

だが下にいたネギ坊主が宮崎を受け止めてことなきを得た。

「大丈夫か？」

「は、はい。ネギ先生のお陰で」

「そうか。スプリングフィールド実習生、お手柄だ」

魔法を使ったみたいだが、今回のようなのなら問題ない。

「えへへ、ありがとうございます」

このあと明日菜ちゃんに連れていかれたけど、どうしたんだ？

『見られたのでは？』

認識疎外使ってなかったのか。まあ今回は緊急事態だったから見逃そう。

ちなみに歓迎会で、読心術の魔法を使ったために俺の評価は下がっ

たのは言うまでもない。

ネギ？ああ野菜、えっ！？人名！？（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん風＞

椛「やってきました麻生さん！！」

ア「だから阿蘇山！！」

シャ「今回はゲストのシルフさんがいるわよ」

シ「山の上は風が心地良いですね」

椛「お弁当にしましょう！」

ア「いろいろ作ったわよ。私が」

シャ「手伝いすら禁止されました」

シ「ご愁傷様です」

ア「では早速」

ア・シャ・椛・シ「「「「頂きまーす」」」」

ア「山の上で食べるご飯はいいわね」

シャ「ちなみに作者は高校時代、ワンダーフォーゲル部という部活で、数々の山を登ったそうよ」

椛「1番高かったのは北岳っていう日本で二番に高い山だそうです」

シ「そうなんですか」

ア「そんな事どうでもいいわ。デザートよ」

椛「お団子ですね」

シャ「中は、輪切りのサツマイモ？」

ア「これがいきなり団子だそうよ」

シ「美味しいですね」

シャ「次は熊本城に行って下さいって」

椛「では行きましょう」

ア「・・・・・・疲れた」

シャ「人多過ぎよ・・・・・・」

椛「観光の余裕がありません・・・・・・」

シ「人気なんですね・・・・・・」

ア「まあ外観だけでも写真に撮りましょう」

シャ「じゃあ撮るわよ。タイマーセット」

椛「急いで急いで」

シ「さ、此処に」

シャ「はいはい、ってあ!?」

ベチャ

ア・椛・シ「「「こけた!?」」」

パシャ

ア・椛・シ「「「撮れちゃった！！」」」

シャ「う、うぅ」

ア「・・・・・・通行人に頼みましょう」

椛「シルフさん、ありがとうございました」

シ「いえいえこちらこそ」

椛「では次回もお楽しみに」

教師として（前書き）

これをどう考えるかは皆さん次第。

教師として

要ｓｉｄｅ

「それで、どうだったのだ？」

「全然駄目だ」

俺は今、クラトス、志貴、アルク、そして久遠と共に喫茶店、アーネンエルベにいる。
今はネギ坊主についての話をしている。

「結構噂になってるぞ」

「まだ今日来たばっかりなのにね」

「子供だからな」

そんなものが教師をやれば噂にもなる。ただ噂になるだけだが。

「ご注文は？」

「濃いブラックコーヒー」

「私は普通のブラックコーヒーを」

「じゃあ俺は紅茶にしようかな？」

「なら私も志貴と同じで」

「久遠はココア！」

「畏まりました」

・・・・・何故今の店員はパンダの着ぐるみを着ていたのだろう。いや、それ以前に何故この店は俺が行く世界に必ずあるのだろう。店長も変わらんし。

「・・・・・・まあいっか」

「お待たせしました」

流石に早いな。・・・・・うん、美味い。

「要、ネギくんってこれからどうなりそうだ？」

志貴がそう聞いてくるが、まあ俺としては。

「興味ないな」

「なんで？」

だって対した関係のない他人だからな。ただ俺のクラスの教育実習生ってだけだ。俺の弟子や家族って訳じゃないし、志貴達のように友人って訳でもない。要するに・・・・・

「面倒なんだよ」

「アハハ、それでいいの？」

「気にすんな、アルク。あいつがどうなっても関係ない。ただ」

「ただ？」

「生徒をくだらん事に巻き込むのは許さん」

一年とはいえ、あいつらの教師として生活してきたのだ。変な事をするようなら許す気はない。

「生徒想いだね、要」

「そうでもない」

正直心配なんだよ。お節介かもしれんけどな。

今日はネギ坊主の授業を観察しないといかん。面倒だが、そう頼まれたからにはしょうがない。

にしても明日菜ちゃんがネギ坊主を睨んでるな。

『なあ木乃香、明日菜ちゃんぴりぴりしてないか？』

『朝ネギくんがベッドに潜り込んどったからとちゃう？』

『このちゃん、要さん、授業中に念話はあかんよ』

『『サーセン、って刹那もじゃん（せっちゃんもやん）』』

まあとりあえず理由はわかった。ネギ坊主はまだ人肌が恋しいお年頃ってか？ならこんな所にいないで本当の姉の所に行けよ。姉はいるって聞いたぞ。

おっと、そんな事より今は授業の評価だな。

「・・・・・はこうなって、・・・・・と訳します」

ふむ、まあ普通だな。可もなく不可もなく。基本を押さえた模範的な授業だ。学生時代の俺ならつまらんと思うだろうな。だが自分の授業スタイルを確立するにはまだ早いか。十分に及第点だ。

「じゃあこの問題を・・・・・明日菜さん！」

「ちょっと！？普通はあいうえお順でしょ！？」

「明日菜さんは『あ』で始まるじゃないですか」

「名前じゃない！！」

「ならお世話になったお礼という事で」

「そんなお礼いるかー！！」

明日菜ちゃんは勉強が苦手だからな。こういうのは駄目だな。

しかし渋々ながらも答え始める。めちゃくちゃな解答。もちろん当たっていない。だがこんな事はこのクラスではよくある事。

「明日菜さんは英語ダメダメですね」

・・・・・・・・・・・は？このガキ、今なんと言った？

クラスの奴らが明日菜を笑い始める。この時、俺の中には怒りが溢れた。

明日菜ｓｉｄｅ

あんのガキ。よくも私を当てたわね。お陰でクラスの笑い者よ。ほらみんな笑って

「黙れ」

その一言が聞こえた瞬間、周囲の音が消えた。

今の要さん？学校での一条先生とも、日常での要さんとも違う。聞いた事がない、怒りに満ち溢れた声。普段でも要さんは怒る。学校で私達が悪い事や危ない事をして叱る時、日常でどうでもいい事で怒る時。でもそのどちらにも優しさや、ちょっとしたお遊びが含まれていた。でも今のは違う。

恐怖

それが私、いやクラス全体が感じたであろう感覚。ただただ怒りだけの声。

「スプリングフィールド実習生」

「は、はい。なんですか？」

「本国へ帰れ」

要さんがそう言う。確かにこいつは馬鹿で変だけど、そこまで言わなくても。

「一条先生！何故そのような事をおっしゃるのです！！」

いいんちょが言う。強気に見えるけど、震えているのがわかる。

「雪広。何故俺が怒っているかわかるか？」

「・・・・・私達が明日菜さんを笑い者にした事？いえ、それではネギ先生は関係ありませんから、ネギ先生が私達を静かにさせなかった事？」

「残念、そのどちらも違う」

そして要さんは話始める。

「お前らが神楽坂達をバカレンジャーとして笑い者にするのは日常茶飯事だ。今更どうこう言う気はない。スプリングフィールド実習生が静かに出来ないのも仕方ない。まだまだ未熟だからな。問題は、神楽坂を笑い者にする発端を作ったのがスプリングフィールド実習生という事だ」

どういう事？確かにネギは私が英語が出来ないって言ったけど。

「教師というのは生徒を教える者。教育実習生であろうと変わらん。

だがスプリングフィールド実習生は間違っている神楽坂に教えようともせずダメと言った。それで教師を目指す？実に不愉快だ」

・・・・・確かに要さんは私達が出来なくても笑う事はなく教えてくれた。のどかちゃんが鉄棒が出来なかった時、いろんなやり方で出来るようにしてあげてた。

「もうこんな授業見る価値もない。じゃあな」

そして要さんは教室を出ていった。その後の授業は、まるで通夜のように静かだった。

要ｓｉｄｅ

・・・・・みっともねぇ。何やってんだか。

「アリストテレス、俺間違ってたかな？」

《考えは十人十色。先程のが主にとって最善の答えなのでしょう？》

「そうだがな」

心配なのは生徒に嫌われてないかだ。というか今まで積み上げたものが崩れさるのが嫌なだけだな。

《次、主の授業ですよ》

「だな」

あーあ、気分が重い。

グラウンドで生徒を前にする。やっぱりなんか重いような暗いような感じがある。

「お前らに一言言わねばならん」

生徒達に緊張感が走るのがわかる。

「すまなかった。教育実習生相手にお前達の前であんなに怒るなんて、どっちが駄目なのかわからんな。本当にすまなかった」

俺が頭を下げると、何と言うか、さっきとは違う感じで静かになった。

「一条先生、私達は先生がいつも周りを想っているのは知ってます。あれもネギ先生に厳しさを教える為なのでしょう?だから、謝らないでいいですよ」

雪広がそう言う。生徒達の顔を見る限りみんながそれに同意らしい。

「あー、俺はいい生徒を持ったよ。今日の体育は自由!好きにしろ!!」

『やったーー!!』

「ただし古、俺と試合は駄目だ」

「な、なんでバレたアルか!?」

『アハハハハ!!』

教師として（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん融＞

ア「今回は宮崎よ。どげんかせんといかんの県よ」

シャ「世間じゃそれで通るのが凄いわね」

椛「ゲストもいるそうでし食べ物もあるようですよ」

ア「椛は食べ物好きね」

椛「はい♪」

シャ「じゃあこっちよ」

ボル「ぱくぱく」

シャル「ムシャムシャ」

コルト「地鶏おいしー♪」

アルド「チキン南蛮いいな」

リン「マンゴーもいいわね」

シャ「あら、先に食べてたの」

椛「ズルイ・・・・・・」

ア「水橋様の二つの属性を持つ男より、ユニゾンデバイスの皆さんよ」

ユニゾン『お邪魔してます』

椛「私にも下さい！」

ボル「はいどうぞ」

椛「もぐもぐ、宮崎料理美味しいです」

シャ「食いしん坊キャラね」

ア「別にいいんじゃない？セリフがもうないユニゾン達より」

ユニゾン『な、なんだってー！？』

シャ「次回は何処に行こうかしら？」

椛「美味しい所がいいです」

ア「募集してるわよ。では次回もお楽しみに」

惚れ薬　胃薬（前書き）

あれ復活！！

惚れ薬　胃薬

要ｓｉｄｅ

ネギ坊主を怒ってから少し経った。あれ以来ネギ坊主には少し怯えられているようだ。まあしょうがないといえばしょうがないか。

「しかしどうなってるんだ？」

なんだかさっきからネギ坊主がいろいろな女性に追われている。何があったのか。

「刹那、大丈夫か？」

「・・・・・・はい」

ふむ、少し様子がおかしいな。だが刹那なら大丈夫だろう。

「何があったんだ？」

「ええと、確か・・・・・・」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ちょっと時を遡ろうか。
まず朝、うちがこのちゃんと明日菜さん。そしてネギ先生も一緒に登校している時やったんよ。

「明日菜さん、出来ましたよ」

「あんた本当に作ったの？」

「明日菜さんにお詫びしないと」

「だったら要さんにしなさいよ」

「あう」

何かはわからんけどネギ先生は明日菜さんの為に何かを作ったらしい。しかし要さんに詫びないといかん思ったんはうちだけじゃないようやな。

「なあなあせっちゃん、なんやろね？」

「さあ？でも明日菜さんは作る思ってなかったようやけど」

「大体なんで惚れ薬なの「わーわー！！二人もいるんですよ！！」あっ」

「「・・・・・・ほほう」」

惚れ薬とは、随分なものを作ったもんやな。しかし・・・・・・

『せっちゃん、惚れ薬って』

『うん、犯罪やな』

魔法の法律やと惚れ薬を個人で作るんは犯罪やったはず。ネギ先生はそれわかっとんかな？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・・・・・・はぁ？

「つまりあれはネギ坊主が惚れ薬を使った結果と？」

「うん、なんでネギ先生があぁなっとるんかわからんけど」

そうだよな。明日菜ちゃんへのお詫びのはずなのに、どう見てもネギ坊主が使用してるのか。

あれ？・・・・・なんだか・・・変な感じが・・・・・

ズキィ

「ぬおぉぉぉ!!?」

「か、要さん!?」

ああなんと久しい痛みか。この痛みは、間違いない。

「胃痛」

「はい?」

まさかチートに会わずとも胃痛になるとは、大発見だ!!学会に発表しなくては!!

「という訳で俺は早退する」

「え、えぇっ!?」

「サラダバー!!」

エヴァンジェリンの奴魔法薬作ってくれないかな?胃薬の。

明日菜ｓｉｄｅ

全くあのバカネギ、あんな惚れ薬なんか作って。あれじゃ高畑先生だけの誘惑なんて出来ないじゃん。まあ元々使う気なんてなかったけど。

「何処行ったのよ」

あいつったらみんなに追われていなくなっちゃったのよね。何処で見失ったのかしら。ん？あそこにいるのって

「文！ちょうどよかったわ！」

「おや明日菜さん、どうなさいました？」

「ネギの奴知らない？」

「ネギ先生なら図書館に行きましたよ。いろいろな女性に追われてましたが」

そういえば文は大丈夫なのよね。木乃香や刹那さんも無事だったし、個人差かしら？

「ありがとう、助かったわ」

「いえいえ、こちらも文々。新聞を配達してもらってますから」

そうそう、新聞配達のバイトで文の文々。新聞ってのもついでに配達してるのよね。最初はどうかと思ったけど意外と人気あるし。主に人気なのは記事じゃなくて新聞の連載小説。内容はどうみても要

さんと文のラブストーリー。これが面白いからタチが悪い。

「おっと」

そんな事考えてたら図書館に着いたわね。むむっ、鍵が掛かってる。

「セイヤッ！！！」

何故か体育の時間に要さんから教えてもらった後ろ回し蹴りでドアをぶち破る。

「ネギ！いる？」

「あ、明日菜さん！？」

そこにはネギと気絶してる本屋ちゃんがいた。

「ああ、こんな所にいたのか」

後ろから声がしたので振り返ると、そこには高畑先生がいた。

「ネギくん、学園長先生がお呼びだよ。明日菜くんは宮崎さんを保健室に運んで。なんでか知らないけど気絶してるからね」

「わかったよタカミチ」

「は、はい！」

高畑先生に言われたんだ。早く本屋ちゃんを保健室に連れてってあげよう。

ネギｓｉｄｅ

まさかあんな事になるなんてな。もしかして学園長先生に呼ばれたのもこの事かな。

「失礼します」

そう言ってドアを開けると、いつも通り椅子に座っている学園長先生がいた。

「ネギくん、何故呼ばれたかわかるかね？」

「えっと、惚れ薬、ですか？」

「その通りじゃ。あれが犯罪と知っておるかの？」

「犯罪！？」

そ、そんな、僕そんな事知らないよ。

「その様子じゃと知らんかったようじゃの。よいか？無知とは罪で

はない。しかし知ろうとしない事は罪じゃ。とはいえ無知であっても罪を犯せば罪人じゃ。知らなかったから万引きをしたと言っても駄目じゃろう?」

じゃあ、もしかして僕、帰されちゃうの?立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる前に。

「まあ今回は被害がほぼなかったから注意だけじゃ。これから同じような過ちをしたら帰ってもらうがの」

よかった～。まだ修行を続けれる。

「しかしよかったの、説教したのがわしで。一条先生じゃったら・・・・・」

一条先生の名前を聞いた瞬間、僕の体が震えた。あの怖い先生。あんなに怖いのになんでみんな好きなんだろう?それに今学園長先生が言おうとしたのって。

「学園長先生、一条先生だったらどうなるんですか?」

「・・・・・・一条先生じゃったら問答無用で帰されたじゃろうな」

やっぱりあの人は怖いんだ!なんで副担任があの人なんだろう。タカミチがよかったよ。

「まあもしもを話してもしょうがない。もう戻りなさい」

「・・・・・・はい」

近右衛門ｓｉｄｅ

ふう、まさか惚れ薬を作るとはの。材料はスタンか？後で苦情を言わんとな。学園生活に何故そんなものを持たせるのか。

「・・・・・ちと甘かったかの」

師匠が今の説教を見ていたら「まるで砂糖のような甘さだな、近右衛門」そうそう、こんな風に

「って師匠！？」

「よう」

窓から部屋に入って来る師匠。一体いつから？

「あんなもん帰せばいいだろ」

「では今からネギくんを帰すのですか？」

「お前が終わらせた事を蒸し返す気はない」

・・・・・ふむ。

「師匠はネギくんが嫌いなのですか？」

これは前から気になっていた事。師匠は人に厳しい部分もあるが、ここまでだったろうか？

「嫌いだ。無理に背伸びをし、でも子供であるあいつが嫌いだ。背

伸びをしても自分を主張しない、昔のなのはのような存在なら解放してやろうかと思ったかもしれない。逆に完全に子供なら守ってやろうと考えたかもしれない。だがあいつは違う。全てが中途半端だ。魔法も常識も覚悟も、全てがだ。だから俺はあいつが嫌いだ」

こう言ってはあれじゃが、師匠も人なんじゃな。あの化け物じみた強さのせいでそんな事思った事もなかったが。

「全く、体が若返って心まで若返ったか？くだらん事を話した。じゃあな」

そう言って師匠は窓から出ていった。今まで見た事のない師匠を見た瞬間であった。

惚れ薬　胃薬（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「ここが、鹿児島」

シャ「あれ？椛ちゃんは？」

椛「さつま揚げ３０個下さい」

はいよ

ア「３０・・・・・・」

シャ「食べるの？お土産なの？」

椛「あと黒豚まん１０個」

ア「食べる気ね」

シャ「なんで？」

ア「目が輝いてるもん」

シャ「・・・・・・次の場所に行きましょう」

ア「屋久島だ！」

シャ「自然がいっぱいね」

椛「落ち着きますね」（ぱくぱく）

ア「食べ過ぎ」

シャ「そういえば今回、要くんがネギくんを嫌いと言ったわね」

ア「子供が無理をしてるのが嫌なんじゃない？」

椛「それより皆さんは胃痛に歓喜だと思います」

ア「確かに」

シャ「では次回もお楽しみに」

ドッジボールは戦争だ（前書き）

タイトルと内容は必ずも比例しない。

ドッジボールは戦争だ

要ｓｉｄｅ

今日も授業が大変だったな。
さあ昼食の時間だ。しっかり食べて午後に備え・・・・・・

「どうしたかな、一条先生」

「ワラキアせんせ～」

「そんな変な声を出さないでくれ。それに私はズェピアだ」

そんな事はどうでもいい。問題はもっと重大だ。

「お弁当が～」

「忘れたのかね？」

ああ、どうしたもんか。そうだ、クラトスにたかろう。もしくは木乃香か刹那に分けてもらおう。いや、迷惑だから学食にするか。あんまり好きじゃないけど。

「一条先生、お客さんですよ」

「要さ～ん」

「ん？スバルか」

「えへへ、お弁当持ってきました」

「サンキュー！」

これは助かる。ちょうど迷ってたしな。というかよく弁当忘れたの気付いたな。

「ちゃんと食べて下さいね」

「ああ」

「彼女かい？実に羨ましいな。私も妻に頼むかな」

「いや、そんなんじゃ「一条先生、お客さんです」おっ？」

次は誰だ？でも少し嫌な予感が。

「要、弁当だ」

「ヴィータか。実はさっきスバルが「知ってる」はい？」

なんですと？ならどうして弁当を。

「いい機会だからみんなの弁当食べてもらうぞ。一人づつ来るからな。じゃあ」

・・・・・あれ？おかしいな。妻達に愛されて嬉しいはずなのに、胃が痛くなってきたぞ。

というかいい機会ってなんだよ。

「要くん、来たよ」

「・・・・・すずか、お疲れ様」

「あれ?元気ないね。ならこの媚薬を「いらん!それに元気がないなら栄養ドリンクにしろ!!」ブー、じゃあ今晩使うよ」

「んなもんいらん。さっさと帰れ」

「はーい」

全く、すずかは公共の場でも相変わらずか。

「要、お待たせ」

「待ってないぞ、フェイト」

「そう?」

すずかが出てってから数分も経ってないぞ。帰りに絶対に会ったろ。

「じゃあ、はい」

「ん」

フェイトの弁当は美味いんだが、流石に四つ目となるときついかな。

「それじゃあ、後はなのはだね」

「五人分も食えるかな?」

「うーん、頑張って」

頑張って、ってそれならこの弁当を半分くらい減らしてくれ。

「じゃあね、お仕事頑張って」

「ああ」

さて、最後はなのはだな。

「要くん、来たよ」

「来たな、じゃあ弁当プリーズ」

「はい」

なのはから渡されたのは普段より一回り小さな弁当箱。まさかこれは・・・・・・

「みんなが作ったから私は少なめ「ありがたい！！」あ、うん」

流石のなのはさん。いないはずの俺の気持ちをよくわかっておられる。ありがたやありがたや。

「じゃあ頑張ってね」

「おう」

そう言ってなのはも帰って行った。

「あの、一条先生、彼女達は「家族です」でもどう見て「家族です」浮ｋ「家族です」・・・・・・」

なかなかにしつこいな。まああれを見たら仕方ないか。さて飯にするか。

（相変わらずだな、一条）

「なんか思ったか？クラトス」

「何も思ってない」

木乃香ｓｉｄｅ

ん～、なんでこんな事になったんやろ。

「ふざけんじゃないわよ！オバサン！！」

「黙りなさい！ガキンチョ！！」

今うちらのクラスと、高校生が喧嘩しとる。遊ぶ場所の争いでここまで発展するとは、驚きや。

「あやや、どうしましょうね」

「さっきネギ先生を呼びに行ったみたいやで」

せっちゃんがそう言うけど、正直どうなんやろ。ネギくんにあれを止められるなんて思われへんけど。

「何やってるんですか～！！」

あっ、ネギくん来た。でもたぶんネギくんじゃあ。

『キャー！！可愛い！！』

「あわわ！？」

やっぱり高校生達に囲まれて揉みくちゃにされてしまった。それにうちのクラスが怒ってまた喧嘩が広がる。

結局高畑先生に止められてしまったんやけど、要さんはどうなったんやろ。普段はこういう時出てくんのに。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「うおぉぉぉ・・・・・・」

「あんなに弁当食べるからだ」

「黙れクラトス。くっ、まさか物理的に胃痛になるとは」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

なんや今は頼りにならん気がする。うん、高畑先生がおるからネギくんも大丈夫か。

今から体育の時間や。今日は要さんが別の所で授業やからネギくんが代わりや。それで屋上に来たんやけど。

「なんであんた達がいるのよ！！」

「黙りなさい！こちらが先よ！！」

なんでまた高校生達と鉢合わせるんやろ。

「スプリングフィールド実習生、どうする？どっちが譲る？」

「ええと、一緒じゃダメですか？」

「あの現状でか？」

『ギャーギャー！！』

『ワーワー！！』

「・・・・・無理ですね」

「だろう？あたた、胃が」

要さん達も大変やな。特に要さんは胃痛が再発したとかなんとか。

「じゃあこうしましょう!!スポーツ対決!!」

「悪くないな。よしお前ら、今のは聞いたな!!」

「では一条先生、バレーボールで」

「ちょっと待ちなさいよ!!あんた達の方が年上で背も高いんだから別のにしなさいよ!!」

「ならドッジボールで。人数もこちらが11人、そちらが22人でいいわよ」

「それでやってやろうじゃない」

あーあ、ドッジボールで人数が多いのなんて不利にしかならへんのに。それに身長差なんてあんまないやろ。たつみーとか楓とか。

「ただやるだけではつまらないわね。そこの子供先生を賭けましょう」

「はぁ?あんた達何言っ「なら私は要さんを!!」文うっさい!!」

「文さん・・・・・・要さんは・・・・・・」

「せっちゃん、どないんしたん?」

「な、何でもあらへんよ!!」

とりあえずうちらは参加できひんな。下手に参加して力加減を間違えたら大変やし。

「じゃあ明日菜、頑張ってぇな」

「任せなさい！！」

まあこのクラスにあれくらいのハンデは必要かな。

要ｓｉｄｅ

あー、精神的胃痛と物理的胃痛は違うな。やっぱり精神的胃痛の方が数倍きつい。

「大丈夫ですか？一条先生」

「長谷川か。まあ問題ない。で、お前は参加しないのか？」

「インドア派なんで」

ああそうか、じゃあ授業でもないこれに無理に参加する必要ないしな。

「ああ、どうしよう」

「スプリングフィールド実習生、問題ないぞ。２－Ａが負けても連れ去られる事は・・・・・あるか」

「ええ！？」

麻帆良の生徒は無駄に実行力はあるからな。まあ連れ去られたとしても担任を変えられる事はないだろう。しかし・・・・・・

「勝てるか？」

「？　私が言うのもなんですが、うちのクラス、特にバカレンジャーは運動が出来ますから、いくら高校生相手だとしても負ける事は」

「あいつらな、ドッジボール部なんだよ」

『・・・・・・はぁ？』（ゆっくりボイス）

クラスの奴らが揃えて言う。あいつはら麻帆良のドッジボール部の主力メンバー。かなりの実力者だ。

「高校生にもなってドッジボール部って、ぷぷっ」

「な！？笑ったわね！！」

ドッジボールもれっきとしたスポーツなんだから大人もやるぞ。まあ珍しいのには違いない。

「私達の力を思い知りなさい！！」

そこからの試合は圧倒的だった。人数が多いため、次々と当たっていく。

「しまった！人数が多いのは有利じゃない！！不利だ！！」

漸く気付いたか。だが気付くのが早かろうが遅かろうがこうなるの

は決まっていただろう。さて、ここからどう持ち直す？

ネギｓｉｄｅ

ああ明日菜さん達がピンチだ。一条先生はニヤニヤしてるだけだし。

「今不穏な表現しなかったか？」

？　なんの事だろう？とにかく応援しないと！！

「皆さん！まだ試合は終わってません！！頑張って下さい！！」

「そうよ！まだ人数も結構残ってるし！！」

そこから明日菜さん達の反撃が始まり、高校生の人達をどんどん当てていった。しかし高校生の人の一人がジャンプシュートを放つと、明日菜さんが当てられていまった。

「逆光なんて卑怯よ！！」

「あら、偶然よ」

ああ、明日菜さんが当てられたらもう後がないんじゃ。しかし高校生の人が外野にパスしようとしたボールをまき絵さんが体操のリボンで取る。

「ちょっ！？卑怯よ！！」

あう、確かにドッジボールで道具使ってはいけないような。

「別に卑怯ではないな」

「え？」

一条先生がいきなりそう言う。

「これは公式戦ではない。言わば遊び。ただ勝てばいい遊びだ」

「そ、そんな」

一条先生って味方でいいのかな？

「まあ高校生メンバーだって何してもＯＫだ」

やっぱり敵？

でもその後は２－Ａがいろいろな技（？）で高校生を押して勝利を収めた。

「イエーイ！！」

「やったー！！」

よかった～。みんな凄かったな。

「まだロスタイムよ！神楽坂明日菜！！」

そう言って高校生の人が明日菜さん目掛けてボールを投げる。僕は咄嗟に明日菜さんの前に立ってボールを受け止めようとしたけど。

「何してんだ、お前ら」

一条先生がそれを受け止めた。一体いつの間に。

「決着は着いた。まだやりたいのか？それとも憂さ晴らしか？」

「え、あ・・・・・・」

「ふぅ」

パァン

「ひっ！？」

突然一条先生が取ったボールが破裂した。魔法？でも魔力なんて感じなかったし。

「負けたならさっさと移動するぞ！！」

『はいぃぃ！！』

「あ、そうそう、スプリングフィールド実習生」

「何ですか？」

「生徒の為に体を張るのはよかったぞ」

・・・・・えっと、初めて褒められたのかな。

ドッジボールは戦争だ（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今回は都会、東京です」

シャ「作者は都会は怖いと思ってるわ」

椛「田舎ですからね」

ア「とりあえずもんじゃ焼き食べましょ」

シャ「ハフハフ」

椛「ヘラから直接食べるなんて新鮮な感覚です」

ア「作者は遠足で作ったら酷いものが出来て、それ以来『なんで生焼けのぐちゃぐちゃなんて食べないといけないんだ。お好み焼きこそ至高なり』って考えてるそうよ」

シャ「お好み焼きって大阪と広島があるわよね」

椛「いいですね、お好み焼き」

ア「今回は前半の方が印象に残ったでしょう」

シャ「要くんも大変ね」

椛「では次回もお楽しみに」

テストは真面目に（前書き）

皆さん、テストは真面目にやってますか？
作者は不真面目です。でも不正はしないよ。

テストは真面目に

ネギｓｉｄｅ

朝から学園長先生に呼ばれたけど、何かしたかな？

「失礼します」

「よく来てくれたの」

「どうかしましたか？」

「うむ、君に正式採用の試験を受けてもらおうと思っての」

それじゃあ遂に僕の修行も本格的にスタートになるんだ。でもどんな試験だろう。まさか、ドラゴン退治とか？

「試験の内容はいたって簡単。２－Ａを学年最下位から脱出させる事じゃ」

「それだけですか？」

「うむ」

なーんだ、簡単そうな事じゃないか。これなら正式採用だって目の前にあるようなものだね。

「この封筒に詳しい内容は書いてある」

「わかりました。失礼しました」

僕はうきうき気分で部屋を出ようとした。

「あー、ネギくん。試験が成功しなければ大変じゃかなら」

「え？」

それってもしかして、帰されちゃうって事！？それじゃあ頑張って最下位脱出させないと！！

文ｓｉｄｅ

「皆さん！今回のテストで最下位脱出しましょう！！」

何やらネギ先生の気合いの入り方がいつも以上だ。ふむ、これは何か裏がありそうですね。

「む？」

今ネギ先生が手に封筒を持っているのが見えましたね。

「ネギ先生、その封筒は何ですか？」

「え、いや、何でもないです「正式採用試験の内容らしい」一条先生！？」

「隠しても意味ないだろう？はっきり言って協力してもらえ」

「・・・・・わかりました。皆さん、聞いて下さい」

ネギ先生が話した事を要約すると、私達が最下位脱出すればネギ先生は正式採用。出来なければネギ先生は強制送還。これはどうなんでしょうか？

『要さん、今の話って』

『勝手な妄想だ。失敗しても教育実習生の期間が長くなるだけ』

ああやっぱり。子供の勝手な解釈でしたか。

「皆さん！ネギ先生の為に最下位脱出しますわよ！！」

『おー！！！』

いいんちょさんの号令にみんなが返事をする。一体何人が事実に気付いているのでしょうか。

要ｓｉｄｅ

授業後、俺とネギ坊主は成績の著しくないメンバー、主にバカレンジャーを集めて勉強会を開いた。

「異義あり！！何故私がいるのですか！！」

「刹那、お前国語以外の成績が酷いだろ」

「バカレンジャーレベルじゃありません！！」

「紙一重が吠えるな」

事実刹那はバカレンジャー候補となっていた。国語がトップクラスでなければ綾瀬と交代していただろう。

「ではスプリングフィールド実習生、頼んだ」

「はい！」

ネギ坊主は英語のプリントを配っていく。内容は簡単な穴埋め問題。１０点満点だ。

一番に抜けたのは綾瀬。しっかり勉強すれば頭いいキャラなのに。

次に佐々木と古菲と長瀬。ここいらも・・・・・まあ頑張ればいけるか。

「で、明日菜ちゃんと刹那はどうした？」

「ううう・・・・・・」

「くっ・・・・・・・」

7点合格なのにどうした。刹那は6点を取り続けてるし、明日菜ちゃんは悪くなる一方。毎回違う問題だからといっても基礎は同じはずなんだが。

「木乃香はもう帰ってもいいんだぞ」

「二人が終わるまで待っとるわ」

いい友人を持ったな。

結局刹那は数分後、明日菜ちゃんは１０分後に終わった。途中タカミチが来たりしたんだが、特に問題なかった。

明日菜ｓｉｄｅ

夜遅く、私はネギと勉強していた。木乃香はもう寝ている。あーあ、何でこんな事になったんだろ。私は別にネギがいなくなってもいい

んだけど。

「うーん」

「どうしたのよネギ」

「やっぱり魔法を使いましょう!!使った後はパーになりますけ「アホか!!」へぶっ!?」

このバカネギは、私達の頭をパーにしてどうすんのよ。

「何でもかんでも魔法に頼ろうとすんじゃないわよ!!」

私がそう言うとネギは何か反省したようだった。

「そうですね、ごめんなさい」

「反省したならいいわ。もう寝るわよ」

「・・・・・・はい」

「あ・・・さん、明日菜さん」

「むにゃ、何よ」

「外に来て下さい」

ネギに起こされて部屋から出ると、刹那さんを除くお残りメンバーと本屋ちゃんがいた。

「どうしたのよ」

「実はですね」

夕映ちゃんが話し出したのはとんでもない事だった。

「図書館島に魔法の本があるそうです」

「魔法の本？」

魔法があるのは知ってたけど、なんで図書館島にそんなのがあるのよ。

「刹那さんは何故かいませんでしたので明日菜さんを誘いに来ました」

「でもそんなの使っていいの？」

「もうテストまで時間がありません。図書館島の最深部と聞きますから早く行きましょう」

確かに、あんまり時間がない。ネギの魔法に頼るよりマシかな。私

達の力で手に入れるんだから。

「でもやっぱり自分の力でやった方が」

「ネギ先生、私達が頭が良くならないとネギ先生が帰されちゃうんですよ」

「そうだよ。ネギくんが帰るなんて私達も嫌だよ」

「私も、帰ってほしくないです」

まき絵ちゃんと本屋ちゃんが言う。それに説得されたのか、ネギも覚悟を決めたようだった。

「わかりました、行きましょう！！先生として皆さんを危険な目に合わせられませんし」

という事で、私達は図書館島に向かっている。本来の入口とは別だけど、夕映ちゃん達が言うにはこっちに近道があるらしい。

「もうすぐ着き「あーら、こんな所で何してるのかしら？」え？」

後ろから女の人の声がしたので振り向くと、青白い長髪の美人がいた。要さんと同じような雰囲気がするけど、全く違う気もする。

「みんな、下がるでござる」

「何者アルか？」

長瀬さんと古菲が前に出る。この人何なの？

「駄目よ、子供がこんな所にいちゃ。狼に食べられちゃうわよ♪」

「邪魔するでござるか？」

「もちろん♪」

「じゃあ敵アルね。いくアル！！」

「覚悟なされ！！」

長瀬さんと古菲が女の人に突撃して近付いた瞬間、二人は倒れた。

「未熟未熟～♪」

「そ、そんな」

麻帆良四天王と呼ばれる二人が一瞬で倒された！？

「ネギ、なんとかしなさいよ！！」

「わ、わかりました!!魔法の矢を喰らえ!!」

・・・・・何も起こらない？

「まほーの、や？」

「アハハ!!坊やったら魔法なんて使えると思ってるの？」

「し、しまった!魔力封じたんだった!!」

このバカネギ!おおっぴらに魔法なんて使ってんじゃないわよ!!つーか使えてないし。

「じゃああなた達もおやすみなさい」

女の人が速く動いたと思った瞬間、私の意識は途切れた。

楔ｓｉｄｅ

要に頼まれてやったけど、つまらない仕事だったわ。強いっていう二人も瞬殺だったし。

「ご苦労さん。怪我はさせてないな？」

「当然。乙女の柔肌に傷を付けるなんて私には出来ないわ」

「どの口が言うか」

あら酷い。私はそんな事しないのに。

「とりあえず帰すぞ。アリストテレス、記憶処理頼んだ」

「了解しました」

あら、いつの間にいたのかしら。いえ、いつの間に擬人化したのかしら、が正しいかしら？

「しかし久しぶりの出番がこれって、なんで鈴が来た時に出さなかったのよ！！」

「知るか」

ちなみに全員しっかり勉強して最下位脱出は出来たそうよ。私には関係ないけどね。

テストは真面目に（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「大阪キタ――――――――！！！！」

椛「もぐもぐ」

シャ「いきなり食べてるわね」

椛「タコ焼き食べます？」

ア「じゃあ頂くわ」

シャ「私も」

椛「次はお好み焼きですね」

ア「作者は大阪風お好み焼きが好きだそうよ」

シャ「なんで？」

ア「簡単に作れるからだそうよ」

椛「混ぜて焼くだけですしね」

ア「ハフハフ」

椛「おいひー」

シャ「本場のお好み焼きは違うわね」

ア「その発言はやめた方がいいわよ」

シャ「何で？」

椛「大阪と広島はそれぞれ自分の地域のが本場と思ってるからだそうです」

シャ「ふーん」

ア「次回のキーワードはフラグ」

椛「何ですかそのキーワードは」

シャ「では次回もお楽しみに」

椛「そういえば次回が終われればコラボ再開だそうです。お楽しみに」

嫌ならしょうがない（前書き）

どんな人にも嫌な出来事はある。嫌なら無理にやらなくてもいいと思うんだ。

ただしテストは例外だ。

嫌ならしょうがない

千雨ｓｉｄｅ

今回の期末テストでなんか最下位脱出したから子供先生が正式採用になったらしいけど、そんなの私にはどうでもいい。

「なんでお祝いなんてやるんだよ」

こいつらただお祭り事がやりたいだけじゃねぇか？あー、やってらんない。帰ろう。

「あれ？長谷川さんどうしたんですか？」

ちっ、子供先生に見つかったか。まあ適当な理由で逃げるか。

「調子が悪いので帰ります」

「え？送っていきましょうか？」

面倒だな。本人は親切心なんだろうけど、私かりゃすれば迷惑なんだよな。

「では」

「あ、はい」

要ｓｉｄｅ

ん？長谷川が帰ったか。まああいつなら帰るか。

「あの、一条先生。僕やっぱり長谷川の様子を「その必要はない」何でですか？」

「俺が行く」

この一年でわかった事だが、あいつは異端を極端に嫌う。いや、普通を求めているが正しいか。だから下手に子供で先生なんかがやってるネギ坊主が行っても無駄だろう。というかネギ坊主はトラブル起こしそうだからな。

「じゃあお前さんはお祝いを楽しみな」

さて、この部屋が長谷川の部屋だったか。

ピンポーン

「長谷川、一条だが」

『先生？何しに来たんですか？』

「調子が悪いと聞いて。まあ仮病だろ？」

『・・・・・気付いてたんですか？』

「一年お前らの副担やったんだぞ。お前らの性格くらい把握してる。お前が普通が殆どないあのクラスが苦手ってのも」

タカミチか気付いてないのは意外だったが、あいつは出張が多いからな。生徒について気付かない事も多いだろう。

「なあ、お祝いに参加するの嫌か？」

『あんまり』

「そうか、嫌ならしょうがないか」

勉強ならともかく、こういう自由参加なのは無理にやらせてもな。本人も周りも気分が悪くなる。正直参加してもらいたいんだが。

「じゃあ行くわ」

『あっ、私の為に此処まで来てくれたんだから、その、お茶くらい・

・・・・・』

「ふむ、じゃあご馳走になろうか」

『はい！！今開けます！！』

千雨ｓｉｄｅ

なんで私は一条先生を誘ってんだ！？というか一条先生もホイホイ着いてくんなよ！！

「これ、粗茶ですけど」

「わざわざどうも」

あー緊張する。私から誘っておいて緊張ってどうなんだよ。・・・・・・そういえば一条先生に聞いてみたい事があるんだよな。

「先生ってあのクラスどう思う？」

あんな異常の中でも結構普通な人だからいろいろ聞いてみたい。

「そうだな、まずおかしい」

「直球ですね」

まあその通りだとは思うけど、仮にも自分の生徒だろうに。

「いや、あのクラスだけじゃない。この学園がおかしい。そう思わんか？」

「・・・・・正直」

「それが正常。しかし異常」

どういう事だろうか？

「今のはただの戯れ言だ。気にするな」

いや、めっちゃ気になるだろ。正常なのに異常って矛盾してるだろ。

「ん？長谷川もパソコンやるのか？」

「ええ」

「なら『ちう』って知ってるか？」

はぁ！？なんでこの人が『ちう』を知ってんだよ！？意味わかんねぇ！！

「ちょいと暇潰しにネットサーフィンしてたら人気のサイトっつーので見つけてな。なかなか面白いぞ」

「・・・・・そうですか」

「あれだけ人気だと気分も良くないか？長谷川」

・・・・・ちょっと待て、なんだ今の発言は。いや、まさかな。

「なんで私に聞くんですか？」

「あれお前だろ？」

やっぱりばれてる！？コスプレしてんのに！！いや、その前に画像の加工もしたんだぞ！！

「画像の加工も意味ないよ。うちの家族にそういうの取っ払いたくなる奴がいてな」

なんだよそいつ！！おかしいだろ！！趣味わりぃだろ！！

「しかしなんで加工なんてしてんだ？」

「そりゃ、綺麗にしたいから」

「は？いやいや、加工しない方が綺麗だろ」

「え？」

何言ってんだこの人。

「ああ、ネットに出すとやっぱり加工しないと見た目が悪いか。いや、それでも加工しない方がいいと思ったが」

「・・・・・／／／／」

なんでこんな恥ずかしい事をはっきり言えるんだこの人は。招待したのは間違いだったかな。

「まあ俺が言えるのは、そのままが一番じゃないかって事だ。ネッ

トに出す時嫌ならしょうがないが」

「・・・・・・はい／／／」

あああもう！！さっきから顔が熱くてしょうがねぇ！！あれもこれも一条先生のせいだ。うん、そうに決まってる。

「じゃあそろそろ帰るわ。また明日」

「はい」

私は目を合わせず返事をした。まともに目も合わせられないって、意識し過ぎだ私。落ち着け落ち着け。あっちは教師、私は生徒。恋愛に発展するはずがない。って何勝手に恋愛って思ってるんだ！！どうした私！！なんか今夜はゆっくり寝れそうにねぇな。

要ｓｉｄｅ

「またやっちまったか」

あの調子だとフラグ立てたな。歳を取るとそういう事もわかっちまうんだよな。経験かな。

「どうするか」

今まで違う世界でフラグを立てる事は何度かあった。だけど生徒ってのは・・・・・・スバルか。

「優や吼太を笑えんな」

いや、あいつらよりかマシか？まあ問題は数じゃないんだが。

「とりあえず帰るか」

今考えてもしょうがねぇしな。

嫌ならしょうがない（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「三重に来ました」

シャ「三重って知ってるかしら？」

椛「松阪牛美味しいです」

ア「『まつざがぎゅう』じゃなくて、『まつさかうし』って読むのよ」

シャ「サシの入った赤身が美味しいわね」

椛「とろけます」

ア「アメリカとかだとサシが入ったのよりただの赤身が好まれるそうよ」

椛「次回からコラボですね」

シャ「なっぺ様とのね」

ア「吼太で遊ぶ？」

椛「知りませんよ」

シャ「何がしたいか教えてね」

椛「あっ、焼きすぎた」

ア「ちょっと、ちゃんと焼いてよ」

シャ「では次回もお楽しみに」

些細な暇潰しは吼太の不幸（前書き）

なっぺ様とのコラボです。
自分にとっちゃ小さな事も他人を不幸にする事がある。

些細な暇潰しは吼太の不幸

神様ｓｉｄｅ

暇だ～。面白い事ないかな～。要くんは普通の生活でまともな戦いしないし。やったとすれば前回異世界から来た変な奴、もとい火斐くんとの戦いか。

「そうだ異世界だ」

いい相手がいないなら僕が連れて来てあげよう。ナイスアイディア。

という訳で今僕はとある奴を捜索中。

「あ、いたいた。おーい、ベス」

「ベスじゃありません」

いやいや、どう見てもスライムベスだろうに。まあそんな事はいいんだ。

「吼太くん借りるよ」

「へ？」

「許可しないとスライムたたきだ！！」

「ちょ！？エスカリボルグは勘弁！！許可します！！」

これでよし。あんまり迷惑が掛からないチートゲットだぜ。

吼太ｓｉｄｅ

「とーさま、それを返して」

「駄目」

今俺はカンナと向かい合っている。カンナが返してと言っているのはキリの事である。そう、あの板とかに穴を開けるキリだ。

「何に穴を開けるつもりだった？自分の首か？頭か？」

「両方」

こいつの自殺癖はどうにかならんのかな。ん？

「魔法陣！？」

「だね」

何処のどいつか知らないが、俺に何か出来ると思うな。

「って消せない！？」

『君程度が消せると思うなよ？』

この声は！！

「要の所の神！？」

「誰？」

『偉い人だ』

いや、偉いのには間違いないんだけどさ。

『じゃあ要くんの所に飛ばすね。ネギま世界だよ』

「は？」

あいついつの間に移住したんだ？まあいっか。勝手に飛ばされるんだったら待つか。

要ｓｉｄｅ

「王手」

「・・・・・参りました」

「えっへん」

くそ、久遠が将棋強すぎる。エヴァンジェリンとやると五分五分なのに、久遠とやると九割負ける。

「暇だね」

「そうだな」

正直春休みになった時からやる事がない。仕事はすぐに終わったし、部活の顧問してる訳でもないし。志貴とアルクとエヴァンジェリンは旅行。クラトスは出張と言う名のＮＧＯ活動。妻達は今日はアウトレットでお買い物。

「空からなんか降ってこないかな」

「ぬあっ！？」

「わー」

・・・・・降ってきたな。吼太と、確かカンナだっけか？

「いきなり家の中に落ちてくるな」

「久しぶりの挨拶がそれ！？」

どう考えてもそれしかないだろ。しかしまだガキって事は昔の吼太か。これから会う知り合いは全員昔のと考えた方がいいな。

「で、御用件は？フラグ王」

「ちげぇ！！」

「じゃあハーレム地獄人か」

「それもちげぇ！！」

我が儘だな。これでも優より下に見てやってるのに。

「用件なんてない。そっちの神に飛ばされたんだから」

「成る程。それじゃあ向こうでカンナが首吊りしようとしてるんだが」

「何やってんだー！！」

吼太はすぐにカンナの首吊りを阻止した。あの自殺癖は今も昔も同じか。

「あー、全く」

「ねぇねぇ吼太」

「なんだ？久遠」

「こんなの送られてきたよ」

久遠が持っていたのは、スク水にエプロン。あと早苗の巫女装束だな。

「いるか！！」

「着なさいよ。あと詩音寄越しなさい」

「楔！？」

こいつもいつの間に出てきたんだか。まあいつもの事だけど。しかし詩音は出すべきだと思うんだ。読者もそれを望んでるはず。

「貴方がこれを着るか、詩音がこれを着るか、さあ選べ！！」

「何それ！？嫌だよ！！」

「へー、じゃあ要に勝ったら許してあげるわ」

なんだと？楔の奴、何を考えてやがる。まあ俺も最近運動不足な感

じはあったから正直ちょうどいいんだが。

「要！やるぞ！！」

「はいはい」

とりあえず別荘に来た。改造されまくってるから大分丈夫にはなっているが、ルールくらい決めとくか。

「吼太、此処を壊すな。相手を殺すな。この二つを守って試合するぞ」

「ああ、それでいい」

「とーさま、頑張れ」

「要！頑張ってね！」

「絶対に勝ちなさい！！」

楔は黙れ。どうせ吼太と詩音で遊びたいだけだろうに。

吼太ｓｉｄｅ

要と試合か。勝てるのか？いや、勝たないといけない。俺のプライドの為にも。

「とりあえず、１２０％とアルティメットワンかな」

「いきなりだな、おい」

初っ端から限界突破とか、俺をそれだけの相手と見てくれてるという事でいいんだよな。

「まあいっか。小手調べの、百鬼夜行（ピック）！！」

黄色と黒のストライプの柱が要向かって飛んでいく。

「オラァ！！」

要はそれを裏拳一発で打ち砕いた。って砕けるのかよ！！

「あれ？こんな弱かったっけ？」

挑発か？いや、純粋に不思議がってるのか？まあどちらでもいいか。

「ならお望み通り、バオウ・ザケルガ！！！」

「・・・・・ああそうか、弱い訳だ」

そんな事を言いながら、要はバオウ・ザケルガを手刀で切り裂いた。

「未来のお前と比べたらな」

「未来の、俺？」

よくわからんけど、未来の俺と戦ったなら今の俺が弱いのも納得だ。

「だからって負けられるか！！１秒を１０秒に変える能力！！」

「おっ」

俺の時間の流れがゆっくりになる。そのため周りから見れば速く見えるのだが、要は確実に視認している。なら更に速く。

「変身！！クロックアップ！！」

これで追い付く事が出来る筈がない。そして、トドメだ！！

「ギガドリルブレイク！！！」

カンナｓｉｄｅ

とーさまが目にも写らない速さで要って人を攻撃した。砂煙がいきなり立ったので攻撃したとわかったんだけど。

「速いね」

「ええ、でも倒せたかしら？」

？　あれで倒されない人がいるんだろうか？

砂煙が消えて見えたのは、ライダーになってドリルを突き出してい

るとーさまと、そのドリルを掴んでいる要って人の姿だった。

「・・・・・・なんだ、その手は」

とーさまがそう言うので要って人の手を見ると、肌色ではなく、水晶のような、金属のような、不思議な状態だった。

「新しいスキルでな。『武装・ＯＲＴ』って名付けた。皮膚の一部をＯＲＴの外殻と同じにする」

「それじゃあ掴める訳だ。というかよく反応出来たな」

「勘だ」

次の瞬間、とーさまの周りに無数の針みたいのが出現した。

「ニードルガン、こんなに創れるようになったのかよ」

「お前ならこの状態から抜け出すのもたやすいだろうが、敢えて聞こう。まだ勝負を続けるか？」

「・・・・・・やめる」

えっ？まだ戦えるのになんで？

「これ以上やるなら間違いなく此処を壊すし、殺すレベルの攻撃じゃないと倒せない。お前はそうじゃなくても倒せるんだろ？」

「当然だ。経験を積め、若造」

まだ二十歳過ぎてるくらいなのに偉そうだ。

「じゃあ吼太、これ着なさい」

「・・・・・・あ」

とーさま忘れてたんだ。熱くなりすぎだね。

要ｓｉｄｅ

「畜生畜生畜生畜生。こんな事ならルール破ってでも勝てばよかった」

「はい次これ♪」

吼太は楔の着せ替え人形状態になっている。まあ敗者なんだからしょうがない。

「楔お姉ちゃん楽しそうだね」

「実際楽しいんだろうよ」

「クー」

今俺の膝には詩音が座っており、頭の上には子狐状態の久遠が乗っている。

「カンナ、ちゃんと撮りなさいよ」

「うん」

「この裏切り者！！」

カンナはビデオとカメラで吼太を撮影中。あの娘が自殺以外で生き生きしてるのを見るのは久しぶりだな。

「いくらで売るか」

「売るな！！」

吼太に聞こえたか。まあ気にしない気にしない。

ちなみにこの後、詩音も楔にコスプレをさせられ、吼太＆詩音の撮影会が行われた。

「もう絶対来ないからな！！！」

「要お兄ちゃん、楔お姉ちゃん、久遠ちゃん、またね！！」

「バイバイ」

吼太、その捨て台詞はフラグだ。

些細な暇潰しは吼太の不幸（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん死＞

椛「なんですか『死』って！？」

ア「あそこに付くのはゲストを一文字で表した文字でしょ」

シャ「という訳で、吼太くんの娘、自殺癖のカンナちゃんです」

カ「この湖、水死にピッタリ」

椛「駄目です！！」

ア「今私達は琵琶湖にいるわ」

シャ「死なないでね、今は」

カ「わかった。今は死なない」

椛「これからも死なないで下さい！！」

ア「椛がツッコミまくりね」

シャ「今は食べ物がないからね」

ア「食べ物があれば食いしん坊キャラなのに」

カ「ねぇ」

シャ「何かしら？」

カ「あの変態（雨季）いないよね？」

椛「あの人は変態じゃありません。性癖が変わってるだけです」

ア「世間はそれを変態と言うのよ」

シャ「大丈夫よ」

カ「よかった」

ア「それにしても、椛が作者を擁護するなんてね」

椛「食べ物とお金送って貰ってますから」

シャ「あれ作者だったのね」

ア「餌付けされてるわね」

カ「じゃあ次回」

ア・シャ・椛「「「いきなり締めた！？」」」

カ「次回のコラボは黎音て人だって」

ア「何したいか教えてね」

殺人鬼と殺人貴（前書き）

黎音様の『理不尽（まほう）には殺人鬼（チート）を』とのコラボです。
うちの志貴には（雨）を。向こうの志貴には（黎）を付けてあります。苗字で分けてもいいんだけどね。

殺人鬼と殺人貴

志貴（雨）ｓｉｄｅ

「今日もいつも通りか」

店番をしていて、ついぼやいてしまった。まあこの店の客といったら、俺達を嫌っていない魔法関係者、もしくは物好きくらいだ。要達は暇潰しに来るだけだし。しかも今日はアルクェイドが要の家に行ってるしな。

カランカラン

っと、客か。

「いらっしゃいませ」

「邪魔する」

なんだか変わった雰囲気の客だな。でもどこか、とても近くで感じた事がある雰囲気だ。

「何をお探しですか？」

「あんたに用があってな、殺人貴」

「・・・・・何者だ」

突如殺気を放たれ、俺はポケットの中のナイフに手を掛ける。俺に

用があるって事はヴァンパイアハンターか？賞金稼ぎか？

「表で殺ろうか」

「・・・・・・」

確かにこんな所でやる訳にもいかない。相手が弱ければすぐ気絶させて終わりなんだが、こいつは間違いなく強い。なんでこうなったんだか。

志貴（黎）ｓｉｄｅ

俺らは麻帆良の敷地内の森に来ている。ここなら俺らの力を存分に発揮出来るからな。しかし本当に殺人貴がいるとはな。神とかいうのを信じて正解だったな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その時、俺はただ街をぶらぶらしていた。

(殺し合いたい)

訂正、物騒な事を考えながらだ。

「そこな君」

「ん？」

後ろから声を掛けてきたのは、金髪の、所謂イケメンて奴だった。

「殺し合いする気ない？」

「いつでも殺る気だ。お前を殺して！？」

死が、視えないだと！？

「君程度の能力者が神様を殺せると思った？」

「神、だと？こんな人込みの中でよくそんな痛い事が言えたもんだな」

「周り止めてあるから」

確かに、俺らの周りが灰色になり時間も止まっているようだ。こい

っ、本当に神か？

「まだ疑うの？　まぁいいや。君には並行世界の麻帆良にいる殺人貴と殺し合ってもらうよ」

並行世界の殺人鬼？

「遠野、いや七夜志貴と言った方がわかりやすいかな？」

「へぇ」

あの殺人貴がいるのか。何で麻帆良かは知らないが、そいつと殺し合い出来るなんて最高じゃないか。

「じゃあ飛ばすよ」

「おう」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「そろそろあんたの名前を教えてくれないか？」

「そういやまだ言ってなかったか。両儀志貴だ」

「両儀！？」

「お前の知ってるのと違うと思うぞ。名前の漢字もお前と同じだし」

まあそんなのは関係ないけどな。今からやるのは殺し合いなんだからよ。

「さあ、殺し合おう」

「全く、困ったもんだ」

志貴は包帯を外して魔眼を解放した。同時に俺も魔眼を解放する。

血が騒ぐな。

俺らは互いに木の幹や枝を使い、宙を駆け抜ける。そしてすれ違いざまにナイフを振るい、相手を斬り裂く。

「ハハハ！！やるじゃないか！！」

「・・・・・・・・・・・・」

だんまりか。死合が始まってからずっとこの調子。まるで殺人機械（キラーマシン）だな。しかし・・・・・・

「フッ！！」

「・・・・・・」

速い。動きは僅かだが、こちらが上。しかし反応速度はあちらが上。いや、反応速度というより知覚範囲か。そのせいで反応速度が速くみえ、結果速く動いているように思えるのか。

「なら」

反応出来ても動けないようにすればいい。俺は上を目指して跳んだ。もちろん志貴もそれに着いてくる。そして足場も何もない空中に出た。

「蹴り穿つ！！」

志貴が閃走・六兎を放つ。だが俺は空気を固め、それを足場として志貴より速く閃走・一鹿を放った。

「蹴り砕く！！！」

「ガッ！？」

見事にカウンターが決まり、志貴は地へと墜ちていった。これで終わりはしないよな。

「ん？」

一瞬、何か光ったよう

「なっ！！？」

俺の足がいきなり地へと引っ張られた。目を凝らすと細い糸が見えた。

「エーテライトか！！」

こんなものも使えるなんて、面白いな。

俺はエーテライトを斬り、なんとか安全に着地した。

「ちっ」

「小細工とは、やってくれるな」

「・・・・・・」

無言で志貴が構える。あの構えは・・・・・・いいだろう。

「「弔毘八仙」」

互いが高速で跳び出す。動きの速さはほぼ同じ。ならば振りの速さで勝負が決まる。

「「無情に伏す・・・・・・！！！」」

・・・・・結果は相殺。互いの刃が相手の身に届く事はなかった。

だがまだこちらには手札がある。

「行け！！」

「投影！？」

投影した刀剣を志貴目掛けて放った。志貴はそれを避け、場合によっては受け流す。しかし僅かな隙が出来てしまった。

「斬る」

その隙を俺が見逃すはずもなく、閃鞘・七夜で志貴を斬った。いや、志貴はあの状態からなんとか避けた為、掠ったというのが正しいな。だが

「くっ！？」

掠った場所が悪かった。掠ったのは死の線の上。十分なダメージだ。

「斬刑に処す」

「舐めるな！！」

閃鞘・八点衝の打ち合い。徐々にではあるが、こちらが押してきた。

「どうした！！この程度か！！」

「この、喰らえ！！」

ここから更に速くなるか。だが打ち合いに集中しすぎたな。

「こっちだ」

「しまっ！？」

ドスドスドス

「ぐ・・・ぎ・・・！？」

閃走・水月で後ろに回り、投影した刀剣を突き刺した。敢えて直死の魔眼は使わなかったから、死にはしないだろう。

「こんなの・・・・・どこぞ、の・・・正義の、味方以来だ」

へぇ、衛宮士郎とも戦った事があるのか。どうでもいいけど。

志貴は刺さった刀剣を抜き、ナイフを持った腕を上に掲げた。この状態で極死・七夜を使うか。

「極死」

志貴がナイフを投げる。その速度は重傷の人間が投げたとは思えない程の速さ。だが対処はたやすい。ナイフを弾き、首を折りに来る志貴を迎撃する。そう考えていた。

「ハァッ！！！」

「なっ！ガハッ！？」

だが実際は違った。志貴は投げたナイフより更に速く走り、飛んでいるナイフを掴んだ。そして片腕で俺の胸倉を掴み、木に押し付けた。それと同時に俺の顔にナイフが突き付けられた。

志貴（雨）ｓｉｄｅ

なんとか、なったか。上手くいってよかった。

「くっ、まさか投げたナイフを掴むとは。しかもあんなに速く動けるなんてな」

「エーテライトだよ」

「！　そうか。強制的にリミッターを外したか」

これだけで気付くなんて、随分と知識があるんだな。

「今回は俺の勝ちだ」

「殺さないのか？」

「俺は殺人鬼じゃないからな」

「ふん、甘いな」

甘くて結構。俺は人を殺すなんてしたくないんだ。俺は両儀を放した。もう押さえ付ける必要はないしな。

「次やる時は全力で殺す」

「今のが全力じゃなかったのかよ」

「奥の手がまだある。ちっ、これじゃあ負け惜しみに聞こえるな」

確かにそうかもしれないけど、間違いなく事実なんだろう。厄介なのに狙われたな。

『終わったね。じゃあ両儀志貴くんを返すよ』

その声が聞こえた瞬間、両儀の下に魔法陣が現れた。

「じゃあな」

「客としてならいつでも歓迎するよ」

「それは無理かな」

そう言って両儀は消えた。最後まで物騒な奴だったな。

『あっ、死の線で出来た傷は治してあげる』

おっ、本当に治った。ありがたい。さて、剣が刺さった傷も治して服も替えて店番に戻るか。

殺人鬼と殺人貴（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「ズルズル」

椛「ズズッ」

シャ「何か喋りましょうよ」

ア「今は香川よ」

椛「讃岐うどんを食べてます」

シャ「うどんはいいわね」

ア「コシがあるわね」

椛「あったまります」

ア「そういや今回の話はこれでよかったのかしら？」

シャ「黎音様が決める事よ」

椛「ズルズル」

ア「そうね。性能が近いキャラは書きにくいわよね」

椛「ズズッ、ズル」

シャ「奥の手?出したら志貴くんが死んでたわよ」

椛「チュルン」

ア「他のキャラ?作者の技量不足よ」

椛「ズズッ、ゴクゴク」

シャ「ええ、エーテライトは思い付きよ」

椛「プハー、次回は秋代様とのコラボです」

ア「私達に行って欲しい都道府県も募集中」

チャレンジオーバーソウル（前書き）

秋代様の『転生者はシャーマン』とのコラボ、やっと書けたぞ。

何か問題があれば教えて下さい。

チャレンジオーバーソウル

要ｓｉｄｅ

俺達は現在、木乃香の修行に付き合って別荘にいる。そういやこないだ志貴の所に殺人鬼が来たそうだ。見てみたかったな。

「ほらほら、そんなんじゃ駄目だよ」

「ちょ！？なのはさん、待って」

ピチューン

うーむ、木乃香はデバイスを使った魔法も、東洋魔術も大分腕が上がったんだが、まだ何か足りないな。

「ふはははは！！遅い、遅すぎる！！」

「天魔様！本気出さないで下さい！！」

「ぜぇぜぇ」

向こうじゃ刹那と文が天魔を捕まえようと必死になっている。それ速くなる修行なのか？相手の動きを読む修行だろ。

「一条先生、お茶をどうぞ」

「すまんな、茶々丸」

「いえ」

茶々丸はメンテナンスために此処にいる。エヴァンジェリンも一緒に来ている。そのエヴァンジェリンは久遠と将棋中だ。

「要兄ちゃ～ん、なのはさんがいじめる～」

「はいはい」

「ちゃんと構ってぇな」

「逃げてきた奴が何を言う」

まあなのはの修行がキツイのはわかるんだけどな。

《主に比べたらマシでしょう》

「何だと？」

《何でもありません》

こいつ、俺のデバイスの癖に生意気な。

「なあなあ兄ちゃん、手っ取り早く強くなる方法ないん？」

「馬鹿言うな。そんなのあるか」

自分の力を限界まで鍛える事、それが強くなる為に重要だ。手っ取り早く強くなるなんてゲームじゃあるまいし。敢えて言うなら新しい技術を取り入れるとかかな。

「ま、地味に努力「うわーーーーー！！！」・・・・・・はぁ」

上空から人の声がする。今度は何処のどいつだ？ともかく落とす訳にはいかないな。

「木乃香、頑張れ」

「うち！？えっと、どうすれば」

《バインドっすよ！！》

「そやね、バインド！！」

木乃香のバインドが落ちてきた少年を捕まえた。精度は悪くないな。多少ムラはあるが。

「ハァハァ、びっくりした」

「こんにちは、少年」

「あ、えっと、こんにちは？」

状況の把握が出来てないようだな。仕方ないといえば仕方ないか。レイ達のように世界を飛び慣れてるのは稀だからな。

「名前は？」

「麻倉葉生と言います。此処は？」

「説明してやろう」

「という事でここは異世界だ」

「はぁ、そうですか」

「まあいいや。とりあえず後ろの霊はお前の知り合いか？」

さっきからずっとこいつの後ろに憑いてる奴ら。どう見てもアルトリアにクー・フーリン、ギルガメッシュだよな。実体ではないから完全に霊なんだろうけど。

「見えるんですか！？」

「一応な」

あんまり弱い霊は見れないし、強力なの以外ぼんやりだしな。にしてもギルガメッシュか。

「ギルガメッシュさんよ、野太刀一本くれね？」

《何故(おれ)我が貴様のような輩に我が財をやらねばならん》

「そうかー、人類最古の英雄王にして最高の王であるギルガメッシュならくれると思ったんだが、存外器が小さ《ハハハ！！良かろう！！そのような物幾らでも持っていけ！！》さっすがギルガメッシュ！！」

上手く乗ってくれたな。

《葉生！！》

「わかった。憑依！！合体！！」

ほぅ、麻倉と言っていたから予想はしてたが、やはりシャーマンだったか。

「「さあ、好きな物を持っていくが良い！！」」

バビロンから古今東西あらゆる野太刀が出てきた。

「凄まじいな」

「エヴァンジェリンいたのか」

「今来た」

まあギルガメッシュのあれは初めて見ると凄まじいものがあるよな。特に魔術関係者は。さて、彼がシャーマンならあれが出来るかな？

「葉生くん、オーバーソウルは出来るか？」

俺は憑依合体を解いた葉生くんに聞いた。

「オーバーソウルも知ってるって、一体」

「気にするな。それで出来るか？」

「出来ますけど」

「ならうちの木乃香に教えてくれ」

「・・・・・・はい！？」

葉生ｓｉｄｅ

あれよあれよという間に俺は何故か木乃香さんにオーバーソウルを教える事になった。

《頑張って》

「ハオ・・・・・・」

人事だと思って、いや、実際に人事か。

「よろしくな、葉生くん。それで何すればええん？」

「えっと、とりあえず持ち霊っていますか？」

「前鬼と後鬼でええかな」

ああ、よく陰陽師とかであるやつだっけ？確かにあれも霊だよな。

「ほないくよ、出てきて」

「は～い」

「何かな？お嬢」

和服を着た黒髪の少女と金髪の貴族っぽい男の人が出てきた。でも実体があるよな。

「霊体に出来ない？」

「霊体？」

「お嬢が魔力供給を止めればいいよ」

「そうなん？ならストップ」

多分魔力供給を止めたのだろう。二人が霊体化した。便利だな。

「じゃあまず憑依合体からやろうか」

「どうやるん？」

「持ち霊を人魂モードにして」

「さっき葉生くんがやっとったの？」

「そうそう。性別が同じだとやりやすいよ」

でも練習に時間掛かるからな。正直憑依合体が限界かな。オーバーソウルなんて無理だろ。

「こう、かな」

そう言って木乃香さんは女の子の霊を人魂モードにした。

《ひゃっ！なんかくすぐったい》

《一発成功かよ》

クーが驚いてる。もちろん俺やアルトリアも驚いた。こんな簡単に成功するなんて才能としか言えないな。

「後は入れるんやね。憑依合体～」

木乃香さんは女の子の霊を取り込んだ。しかしすぐに分かれてしまった。

「うーん、失敗」

いやいや、一瞬とはいえ間違いなく憑依合体が成功していた。もし

かしたらすぐに物に出来るかも。

あれから一時間程度の練習で木乃香さんは憑依合体を習得した。でも男の人とは出来なかったから相性の問題もあるんだろう。しかし女の子が玉藻前で男の人がヴラド・ツェペシュだったなんてな。驚いた。

「そんで、オーバーソウルって何？」

「簡単に言えば霊を物に憑かせる事だね」

「付喪神？」

「いや、別物。とりあえず見て。アルトリア」

《わかりました》

「人魂モード！！憑依！合体！！」

俺は人魂モードになったアルトリアを手に持ち

「ｉｎエクスカリバー！！」

エクスカリバーに憑依合体させた。

「とまあこんな感じ」

「物への憑依合体なんや」

理解してもらえたようでなによりだ。さて、上手く出来るかな?

「そういや玉藻は何がええんやろ」

《そうね、扇とか?》

確かに何がいいんだろ。玉藻前のシンボルとなる物か。

「これやるよ」

いきなり出てきた要さんが持って来たのは石だった。って石?何で?

《な!?どうしてあんたが『殺生石』を!?》

殺生石って、確か玉藻前が死後、姿を変えた石だっけ?各地にバラバラに散ったとか、二つに割れたとか聞いたけど。

「麻帆良の中に異様なまでに妖魔が集まる場所があってな。探ったら出てきた」

《そう。まあこれでいいわ》

「ほなやるよ。憑依!合体!!ｉｎ殺生石!!」

玉藻前の人魂が石に吸い込まれるように入っていった。次の瞬間、石は美しく、しかし禍禍しく輝いた。

「ふぇ～、綺麗やな」

《なんか馴染む～》

また一発成功か。でもこの石の能力ってなんだろな。

「わざわざ済まなかったな。助かった」

「いえ」

《じゃあそろそろ帰ろうか》

ハオがそう言う。ってか帰るってまさか今回の事って。

《僕がやったんだよ》

やっぱり。というかよく異世界に移動なんて出来るんだな。

《まあ僕だけの力じゃないけどね》

？　どういう事だ？まあいっか。

「それじゃあ帰ります」

「ああ、じゃあこれ返すよ」

要さんは大量の野太刀を渡してくれた。随分沢山出したんだな。

「今度来たら稽古してやるよ」

「ハハハ、じゃあお願いします。っうおーー!?」

俺の前の空間に穴が開いて吸い込まれた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

オマケ・刹那の野太刀選び

「どれにしましょう?」

数が多過ぎやからどれ選べばええのやら。

「茶々丸、これを使ってみたらどうだ?」

「マスター・エヴァ、これは刹那さんのですよ」

「これだけあるんだから気にするな」

エヴァンジェリンさん、確かに沢山あるけど、貰う本人を目の前にしてそういう事言うのはどうなん？

「これは見事な。刹那、一本貰っても」

「天魔様、娘のを取るのは止めましょうね」

「離せ、射命丸！！」

文さんがお父様を引っ張って行った。

「刹那ちゃん、これにしなよ」

「なのはさん、その禍禍しい野太刀を勧める理由は？」

「要くんに近寄る小娘は排除しないと「なのは」久遠ちゃん？」

「神罰！！」

「にゃー！！？」

はぁ、相変わらず騒がしい人達やな。

「ん？」

なんや気がついたら持っとったけど、これ手に馴染むな。ちょっと素振りしてみよ。

「フッ！！」

おお、使い易い。これにしよう。
ちなみにこのあと要さんに教えて貰ったんやけど、この剣は通称『物干し竿』言うて、どっかの農民が使っとったんやって。農民がこない立派なの持っとったなんて凄いな。

チャレンジオーバーソウル（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「寒い寒い」

シャ「今は岐阜の白川郷に来ています」

椛「惨劇が起こりそうですね」

ア「どうでもいいわ」

椛「合掌造りはいいですね」

シャ「落ち着くわ」

ア「でも寒い」

椛「冷え症ですか？」

ア「うーん、そうかも」

シャ「最近めっきり冷え込んだしね」

椛「体調管理に気をつけて下さい」

ア「次回は灰音様とのコラボね」

シャ「その次がうりあ様ね」

椛「コラボはそこで一時終了ですね」

ア「今春休みでしょ？濃いわね」

シャ「そういえば桜通りの吸血鬼はどうするのかしら？」

椛「そこら辺は大丈夫だそうです」

ア「では灰音様、何がしたいか教えて下さいね」

シャ「次回もお楽しみに」

獣と植物（前書き）

灰音様の『魔法少女リリカルなのは～加速する獣～』とのコラボです。
要くんは出ません。

獣と植物

ゼロｓｉｄｅ

俺は魔法を習う為にリッゴーの部屋に立ち寄った。

「リッゴー、いるか？」

「おう」

「魔法習いたいんだが」

「基礎は大体教えたんだけどな」

基礎を教え終わったなら応用教えてくれればいいだろうに。

「そうだ、修行するか？」

「何処で？」

「並行世界」

はっ？こいつ何を言ってるんだ？並行世界って、まさかこいつ！！

「飛んでけ！！」

「てめっ、このバカヤロー！！」

リッゴーが創り出した空間の裂け目に俺は吸い込まれた。

舞人ｓｉｄｅ

今日は定休日。お花の手入れをしています。いやー、やっぱりお花はいいよね。もちろんお花だけじゃなくて植物全てがいいんだけど。そのうち花屋を大きくして植物園ってのもいいかな。

ガシャーン

「キャー！！」

な、なんだ！？

「まーちゃん！！大丈夫！？」

「な、なんですの、貴方は！！」

「あ・・・ゴメン」

「ゴメンじゃ済みません！！」

そこには少年と怒っているまーちゃんがいた。天窓が割れてるから

そこから落ちてきたんだろう。とりあえず落ち着いて貰おう。

「はい、ジャスミンティー。君も」

「ありがとう、まーくん」

「ありがとうございます」

さて、二人も落ち着いたところで話を聞くとするかな。

「君の名前は？」

「ゼロです」

一真さんのゼロデヴァイスと被りそうだな。

「君はどうして落ちてきたんだい？」

「どうせ異世界から来たのでしょう？」

「何でそれを！？」

あ、やっぱりそうなんだ。何となく予想出来てたけど、要さんの所じゃなくてこっちとは珍しいけど。

「まあ僕らもそういう関係者だからね」

「そんなのいるんだ・・・・・・」

「まあ珍しいでしょうね。それで貴方は何しに来たのかしら？」

「修行なんだけど」

修行か。よりにもよってこの世界とは、運があるのかないのか。強くなれる確証はないけど、トラウマが植え付けられる可能性は大いにあるんだよな。

「なら私がお相手します」

「まーちゃん！？」

なんでいきなりそんな事を。此処は無難に要さんに任せるべきでしょう。

「ふふふ、私達のお店を壊した罪は大きいですわよ」

「えーと、頑張ってね、君」

「マジかよ」

この子も運がないな。本当に。

「そういえばまーちゃん。私達のお店って」

「もちろん、優さんと私ですわ」

ですよねー。

ゼロｓｉｄｅ

俺達は今、森にいる。この人達がどういう人達かわからないけど、とりあえず怒りを買ったのはわかる。

「さあ来なさい」

「なら遠慮なく、ハッ！！」

俺は魔力弾を放つが、イバラの壁に阻まれた。植物を操るのか。

「その程度では無駄ですわよ。本当の貴方の力を見せてみなさい」

ばれてる!?本当に何だよこの人。でも力を使わないと勝てないか。

「なら見せてやる!!喰らえ!!」

俺の右手が獣の口のようになり、そこから炎が吐き出される。しかしイバラの壁を燃やす事はなかった。

「生きてる植物がその程度のとろ火で燃えると思って?」

「それならこれだ!!」

腕を巨大な鎌にした。そしてようやくイバラの壁を斬り裂いた。俺は更に左腕を触手に変化させた。

「あら気持ち悪い」

触手が女に向かっていくが、植物の蔦がそれを阻んだ。周りからは別の蔦が襲い掛かってきていた。

「効くかよ!」

「腕が増えますの。凄いですわね」

俺は八本に増えた腕のうち、六本を獣の口にして蔦を食いちぎり、二本は巨大な爪にした。

「オラッ！！」

「危ない危ない」

蔦を食いちぎった口も入れて八本の腕で攻撃をするも、女はまるで踊るかのように避ける。

「素晴らしい能力を持っているようですが、経験が足りなさ過ぎますわよ」

「うっせぇ！！」

「頭に血が上ってますわね。少し冷やしなさい」

女がそう言った瞬間、女の姿が変わった。巨大な植物。どんな植物かはわからない。ただこのままでは食われる。それはわかる。

キシャアアアアア！！！

「グアッ！！？」

腕が三本持っていかれた。デカイのになんて速さだ。

キルキルキルキル

「くっ！！」

変化空間を創り出し、時間を遅くして植物から離れた。

「ハァ、ハァ」

空間を解除すると時間の流れが元に戻った。十数メートルは離れたから少なくとも安全か？

「！？　しまった！！」

気がつくと脚に蔦が絡まっていた。あの食人植物はもう目の前。変化空間で時間を遅くするか？ただの時間稼ぎにしかならない。ならその間に蔦を斬るか？駄目だ。絡まってるからわかるが、植物とは思えない程の硬さがある。なら脚を引きちぎって抜け出すしかない。

「くっ、はっ！！「そこまでですわ」なっ！？」

前にいた食人植物は枯れていった。そして後ろでは地面から上半身を生やした女が木刀を突き付けている。

「私の勝ちですわね」

「くそ・・・・・・」

舞花ｓｉｄｅ

「ふぅ」

一試合した後のお茶は美味しいですわね。

「強すぎだろ」

「そうでもありません」

「君も十分強いよ」

まーくんも甘いですわね。まあ普通に見れば十分な強いのは確かですけど。

「おーい、ゼロいるか？」

「リッゴー！？」

空間に裂け目が出来たと思ったらそこから男の子が出て来ました。
知り合いのようですね。

「強くなったか？」

「いい経験にはなったな」

あれでいい経験にならなかったのなら私がもう一度試合して差し上げたのに。

「君が彼を？」

「おう、ちょっと俺と試合わね？」

「遠慮するよ」

命知らずですこと。まーくんは私より強いというのに。まあ好戦的な性格でないですから滅多に戦う気はないそうですが。

「つまんね。じゃあ帰るか」

「今日はありがとうございました」

「またね」

「今度はちゃんと玄関から来て下さいな」

そうしたら相応のおもてなしはしますしね。

獣と植物（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「私達は青森県の白神山地にいます」

シャ「凄い自然よね」

椛「森林浴にはいいですね」

ア「でも樹海で迷いそうよね」

椛「そうなっても私が捜しますよ」

シャ「それは安心なのかしら？」

ア「今回はまーちゃんの活躍だったわね」

シャ「コラボ相手をボコッていいのかしら？」

椛「それがうちですよ」

ア「次回はうりあ様とのコラボね」

シャ「やりたい事を教えて下さいね」

椛「では次回もお楽しみに」

未熟者め　By要（前書き）

うりあ様の『なぜか異世界にとばされた』とのコラボです。
やっぱりコラボは難しいね。

未熟者め　By要

要side

うーん、暇だ。別荘で修行していたが、飽きたから久しぶりに我が子の映像でも見るかな。

「フェイト、子供の映像見るか？」

「うん。みんなも呼んでくるね」

まずどれから見るかな。運動会もいいが、学芸会も捨て難い。ここは敢えて家族旅行にするか？まあみんな集まってから決めよう。

みんなで決めた結果、運動会の映像を見る事にした。久遠と文も一緒にいる。

「ほらほら、私の子が可愛いよ」

「なのは、自分の子が一番なのはみんなだよ」

「つーかどの子も一番だろ」

確かに、どの子も可愛いのには違いない。唯一の息子は生意気だったが、またあれも可愛いんだよな。

「でもすずかさんの子ってみんな・・・・・・」

「スバル、それは言うな」

「ヴィータちゃん、どういう事？」

すずかの子はたいていいが、あれだ、変わった所があるんだ。月村の遺伝子のせいなのか、すずかの教育のせいなのか。十中八九教育のせいだろうが。

「ここに久遠もいるよ」

「おや本当ですね。しかし要さんの姿が見当たりませんが」

文の台詞にフェイトが反応する。

「運動会は要の参加お断りだもん。失礼だよ」

「しょうがねぇよフェイト。あの事件起こしたらな」

あの事件というのは父兄参加競技にて俺が張り切り過ぎた事件だ。通称『一条突っ走り事件』。父兄参加競技を全てぶっちぎりのトップで終わらせ、最後の綱引きは俺一人で勝ってしまった。正直やり過ぎたと反省している。

「楽しかったね、あの頃は」

「そうだな、胃痛も少なかったし」

チート共が侵略して来ないおかげで俺の胃痛もかなり改善されてき

「ジェノサイドブレイバー!!!」・・・・・畜生。

「侵入者か!?」

「ヴィータさん!私もやります!!」

「居候として私も」

「「「頑張って～」」」

「「「働け!!」」」

「俺がやる」

「要、気をつけてね」

下手に妻を働かせれん。荒事は男がやるもんだからな。

「おいそこの黒髪とＫＯＳＭＯＳ」

「俺達?」

「私達以外にいないかと」

こいつら人を舐めてんのか?さっさと帰らせるか。

「名前は？用件は？」

「俺は高木恭介。こっちはイヴ。用件は遊びに「帰れ」えー」

ふざけるなよ。さっきの攻撃、ここが別荘だからよかったものの、外だったら大惨事だぞ。

「私から答えましょう。皆さんのデバイスを強化しに来ました」

ふーん、デバイス強化ね。今更必要性を感じないな。

「特に俺はいらん」

「なんでだよ。いろいろ出来るぜ」

「たいていの事は間に合ってる」

簡単な魔法はアリストテレス、飛ぶのは朔夜。強力な魔法は必要ない。それにアリストテレスを知らん奴に改造されるのが不快で堪らん。

「妻達のを頼んだ」

恭介ｓｉｄｅ

ちぇ～、せっかく面白そうな事しようと思ったのによ。この世界は面白いって風の噂で聞いたんだが、どんな事が待ってるんだろな。

「じゃあどう改造したい？」

「高出力に耐えれるように」

「更に速く」

「パワーを強く」

「あたしはそこまでやらなくてもいいかな。今以上にやったら使い難くなるかもしれないから、チューニング程度で頼む」

「久遠は別にいいよ」

「私はデバイス自体持っていませんからね」

「じゃあその娘を頂戴」

「最後以外はわかったぜ」

いきなりイヴをくれはないだろ。そんなに珍しいのか？いや珍しいんだな。

「じゃあデバイスを預かるぞ」

どんな改造しようかな。でも下手な改造するとあそこで睨んでる一条要、だったよな、まあそいつにやられそうな気がする。勝負を仕掛けられても負ける気はないけどな。

「主、これは」

「ああ、凄まじいな」

改造に取り掛かってわかったんだが、このデバイス達既に魔改造が施されている。こりゃ下手にやると逆に性能が落ちかねん。

「まず要望に応えるぞ」

「了解です」

なのはのは高出力に耐えれるようにだっけか。ならフレームの強化だな。スバルのパワー強化も同様にまずフレーム強化だ。あっ、ビット付いてる。これの数も増やしとこ。フェイトのはスピード強化だろ。でもこれ以上やりようがないな。いや、加速装置があったな。ヴィータのは全体的にパワーアップでいっか。それに全部に銀鍵守護神機関を付けよう。

「出来た！！」

「お疲れ様です」

我ながらなかなかいい出来だ。渡すのは後でもいいか。先に一条要との勝負だな。

「という訳で勝負だ！！」

「どういう訳だ」

「だから勝負だ」

「・・・・・わかった。ただ別荘は壊すなよ」

なんだ、意外とノッてくれるじゃないか。硬そうな奴だと思ったけど、そうでもないのかな。

「じゃ、魔神拳！！」

「手が早いな。身体能力８０％解放、魔力５０％解放」

要は魔神拳を簡単に避ける。不意打ちとはいえ直線的な攻撃だからな。

「飛燕連脚！！獅子戦吼！！獅吼爆砕陣！！！」

「その程度か？」

なかなか当たらないな。避けるのが随分上手いじゃないか。なら避けれない弾幕を撃つ。

「ヘルヒート！！」

無数の炎弾が要に向かって飛んでいく。高い追尾性能を持っているこいつを避けるのは不可能。防いだらそこを突けば

「っていねぇ！？」

「ベールシールド」

突然後ろから布みたいのに縛られた。外そうにも鉄のように硬い。そして後ろに要がいるせいか、撃ったヘルヒートがこっちに向かって飛んでくる。

「この、外れろ！！」

駄目だ、間に合わない！！

ドドドドドドドドドッ

「セーフ」

直前にA・Tフィールドを張ったお陰でダメージは免れた。

「お前さ、接近戦そこまで得意じゃないだろ」

「わかるか？」

「わかるとも。お前は能力は確かに高い。だが真っ直ぐ過ぎるんだ。次に何やるのか手に取るようにわかるくらいな」

だけど今までこれでやってこれたんだけどな。そりゃMSとかに乗って戦う事もあるけどさ。

「お前は戦いの素人だよ。今までは相手の能力を圧倒的に上回ってたかもしれんが、同レベルの奴では接近戦で確実に負ける。だから接近戦はオススメしない」

なんか説教されてるみたいだな。別に気にしないけど。

「ともかく、別の戦いを見せてみろ。能力があれで全部じゃないんだろ？」

「うーん、そうだな」

勇者王は此処を壊しそうだし、というかロボット系ってどれも壊しそうだよな。まあいっか、直すだけだし。

「こいつで行くぜ！！」

要ｓｉｄｅ

恭介が出したのは巨大なロボット。前見た事あるな。ストライクフリーダムガンダムだっけ。

『うおぉぉぉぉ！！！』

フリーダムは二本のビームサーベルを巧みに操り俺に攻撃してくる。的が小さいのによくやるもんだ。

「限界突破、身体能力１２０％解放。アルティメットワン発動」

喰らうと大ダメージじゃ済まなそうなので、限界突破とアルティメットワンを使っておく。

「シールドスライサー、十連！！」

『効くかよ！！』

やはり斬り落とされるか。そしてフリーダムは二丁のビームライフルを乱射する。乱射と言っても確実に俺を狙ってるんだが。

「それがいかんのだ」

俺を狙いすぎているから軌道が読みやすい。俺はフリーダムの足元に辿り着いた。

「受け取れ、鉄山靠！！！」

ズドン

『ぬあっ！？』

フリーダムのバランスが崩れる。追撃しようとも考えたが、周りに見えたファンネルのようなものを見て下がった。そこから放たれたビームを避ける。

『ドラグーンを簡単に避けるなよ』

「遅いんだよ」

『普通避けれないだろ』

「チートじゃ済まないからな」

『そうかよ。ならこれだ！！ドラグーン・フルバースト！！！』

さっきのファンネルのようなものも含め、大量の砲撃を撃ってくる。別荘壊すなってのを忘れたか？

「ＯＲＴ部分解放」

四本のＯＲＴの脚を高速で動かし、ドラグーンとやらと砲撃を打ち砕く。

『はっ？』

「そらよ」

そして脚は機体を貫いた。コクピットの真横だが、大丈夫だよな。

『おまっ!?掠ったぞ!!』

「わりぃわりぃ」

『核積んでんだぞこいつ!!繊細にやれ!!』

「そんなの別荘で乗るな!!すずかに分解されるぞ!!」

『マジか!?』

恭介ｓｉｄｅ

あー、強かった。というか俺の経験不足か。そりゃ他の技とか機体を使えば勝てたかもしれないけどな。でもＯＲＴ相手じゃきついかな。

「ほんとうに強いな、要」

「俺なんぞより強いのはいくらでもいる」

あれより強いのがいるのか?つまり最低でもＯＲＴ以上ってことだ

ろ。ありえねぇ、自分が井の中の蛙ってのを思い知らされたな。

「じゃあイヴ、帰るぞ」

「はい」

「もうこなくていいぞ」

うわひでえ、そこは嘘でもいいからまた今度とか言うだろ。

「絶対来るからな」

「はいはい、それまでにはＯＲＴ倒せるようになれよ」

それ無理にもほどがあるだろ。でも人の要には勝てるようになりたいよな。

「帰って修行だ！ジェノザイドブレイバーーーー！！！！」

「それで帰るな」

未熟者め　By要（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「広島に来ました！」

シャ「広島風お好み焼きよ」

椛「ハフハフ、これもいいですね。大阪とは違う美味しさです」

ア「野菜と生地が別だからね」

シャ「次回からやっと本編よね」

ア「桜通りの事件ね」

椛「主役はやっぱり要さんらしいです」

シャ「それにエヴァンジェリンちゃんはあんまり出ないとか」

ア「作者いわく、『桜通りの怪人編』だそうよ」

椛「私何が出るか知ってます」

シャ「読者の皆さんは次回をお楽しみに」

桜通りの怪人（前書き）

桜通りの怪人編。今回よりスタートです。

桜通りの怪人

要ｓｉｄｅ

俺は朝から学園長室に呼ばれ近衛門と話をしていた。最近発生しているある事件についてだ。今日は新学期だってのに。まあ今は身体測定の時間だからいいけど。

「桜通りの怪人、ね」

「どう思いますか？」

「情報が少なすぎる」

今現在ある情報は、怪人は黒いマントを羽織っており、黒い長髪。身長は１８０ｃｍほど。被害者は夜に桜通りを歩いているときに襲われた。このくらいだな。

「しかし被害者が犯人をはっきり覚えていないとはな」

今までの情報もたまたま被害者の声が聞こえたので見に行った人が証言したのだからな。

「魔力の痕跡もありませんし、怪我をしている様子もありません」

「被害者の共通点は？」

「魔法生徒や魔法先生、一般生徒でも魔力が多少高いのが狙われてますな」

となると犯人の目的は魔力か。だが被害者の中にはそこそこの実力者もいる。犯人に対応できるのはうちの家族か、近衛門、牧原兄妹、エヴァンジェリン一家、クラトス、このくらいかな。木乃香や刹那はまだまだだからな。

「学園長先生！！また被害者です！！」

「うむ、誰じゃ？」

「３－Ａの佐々木まき絵です！！」

「んだと！？」

ついにうちのクラスにも被害者が出たか。そろそろ本格的に解決に乗り出さないとな。

保健室に向かうと、既にクラスメートが集まっていた。ベッドに寝転がってる佐々木は見た目特に怪我はないようだな。意識もはっきりしてるし。

「一条先生！まき絵が！！」

「わかってる。スプリングフィールド先生、佐々木はどうだ？」

「怪我も体調不良もないようです」

「ごめんね先生、心配かけて」

「気にするな。生徒が無事なら副担としても安心だ。さて、いろいろ聞きたいんだが、いいか？」

佐々木に話を聞いた限り、今までの被害者と特に変わりはないようだな。ただ話を聞いてる途中なんども俺の顔を確認してるように見えたが。

「俺の顔に何か付いてるか？」

「えっと、なんだか先生を昨日見たような気がして」

「そうか？」

昨日は一日特に何もしてなかったんだがな。街に出たわけでもないしな。

「似た顔なんてよくあるだろ」

「ですよね」

「一条先生、いいですか？」

「どうした？スプリングフィールド先生」

「今晩見回りをしようと思うんですけど」

ふむ、悪くはないが、ネギ坊主一人でやる気か？やる気なんだろうな。

「俺も回ろう。一人じゃ回りきれないだろう」

「あ、ありがとうございます！！」

さて、鬼が出るか蛇が出るか。どちらにしろ潰してやろう。

ネギｓｉｄｅ

夜になって僕は一条先生と見回りをしている。とは言っても違う場所を見回ってるから一緒にはいないけど。

「キャアァァァァァ！！！！」

「この声は！！」

今のは宮崎さんの！！かなり近かったぞ！！

僕が走って声のした方に行くと、黒いマントを着た人が宮崎さんを抱えていた。

「何してるんですかーー！！！！」

黒い人は宮崎さんを地面に寝かせるとこちらを向いた。その瞬間、その姿は消えた。

「えっ？」

「そこ」

ズド

「がっ！？」

気がつくとお腹を殴られていた。いったい、いつの間に。

「ほう、良い魔力を持っておるな。少々頂くぞ」

「あ・・・・・・」

僕の胸から赤っぽい玉が抜けていく。それが魔力だとわかるのは僕の体から力が抜けた瞬間だった。

「良質で量もある。これなら他より多めにとっても構わんかの」

「こらーーー！！！ネギに何してんのよ！！！」

「むっ」

アスナさん、何でここに？あ、もう意識がなくなる。その直前、一瞬だけ見えた黒い人の顔。それは

「一条・・・・・・先生？」

木乃香ｓｉｄｅ

帰り道、なんやのどかちゃんの悲鳴が聞こえたから明日菜と一緒に見に行ったらそこには倒れとるのどかちゃんと、リンカーコアが取り出されとるネギくんがおった。それを見た瞬間、明日菜がリンカーコアを取り出しとる男に飛び蹴りをしたけど投げ飛ばされた。

「きゃっ！？」

「いかんのぉ。若い娘がそのような事をしては」

あの男、強いなんてもんちゃう。少なくともうちじゃあ相手にもならへん。

「しかしこれだけ見られてしまっては、去るか」

そう言って男は屋根の上に跳び、そのまま走っていった。この場合どうしたらええんやろ。まず要兄ちゃんに連絡やな。

『兄ちゃん!!犯人おったで!!』

『何処だ!?』

『今森の方に向かって、屋根の上を走ってった!!』

『わかった、ご苦労』

とりあえずこれでよし。あとはネギくんとのどかちゃんの手当やな。しかしさっきの男の声、どっかで聞いたことあるような気すんねんけど、どこやったかな?

要ｓｉｄｅ

朔夜を使って上空を飛ぶ。確か木乃香の情報ではこっちのはずだが。

「あれか」

黒い影が凄まじい速さで屋根の上を駆けていく。その走りを見るだ

けでもわかる。あいつは強い。ここで仕留めておかなければ被害者が増えるかもしれん。

「受け取れ、シールドスライサー」

俺がシールドスライサーを投げる。シールドスライサーはかなりの速さで飛んでいき、黒い影を捕らえたが。

バキィン

黒い影は振り向きもせずに打ち砕いた。そして立ち止まった。俺と戦おうってのか？

「よっと」

屋根に着陸する。さて、その面拝ませて貰おうか。ってこいつ！！

「久しいの、オリジナル」

「なんでてめぇがいる。俺にも一真にも負けて消えたんじゃなかったのか？」

「どうやら悪運だけは強いようでな。何故かまだ存在出来ておったのじゃ」

「そうかい。なら今回の目的は？」

「わかっておるじゃろ？お主との殺し合い（ケンカ）じゃよ」

相変わらずの戦闘狂だな。なら今まで人を襲ったのは力を集める為

か。

「ここで潰す」

「っと、まだ準備したいのでな。退散させてもらおう」

そう言って相手は魔法陣を創り出す。これはベルカ式!?しかも見慣れたこいつは、はやてのラグナロク!?

「なんでそれを使える!!」

「秘密じゃ。消し飛べ、エクスカリバー!!!!」

ルーフシールドを、駄目だ。これを流したら民家に被害が出る。ただのシールドで防ぐしかない。

「アリストテレス!!」

《わかってます!!》

アリストテレスが特大のシールドを創り出し、砲撃を防ぐ。

「ぐぐっ!!」

かなりの魔力を消費したが、砲撃を無力化出来た。しかしその間に相手に逃げられてしまった。

「畜生」

やられた。まさか砲撃が撃てるとは。しかしあの砲撃、エクスカリ

バーと言ったな。確かはやてのマテリアルの魔法だったか？だが今はそんな事どうでもいい。問題は俺のマテリアルがいるという事。

「今度はその存在を潰す。『異能の拳闘士』」

桜通りの怪人（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「秋田県に到着」

シャ「椛ちゃんは？」

ア「きりたんぽ求めて行っちゃったわよ」

シャ「あらあら」

ア「しかし秋田と言えば秋田美人」

シャ「最近お肌とか気になるものね」

ア「ふふふ、楽しみね」

椛「ハフハフ、きりたんぽ鍋美味しいです」

あの嬢ちゃんすげぇ
もう三つ目だろ

椛「おかわり」

ア「あんたどんだけ食べてるのよ」

椛「あれ？来たんですか？すみません、二人前追加」

シャ「いいわよ別に」

ア「さて、今回はまさかの登場、異能の拳闘士」

シャ「要くんのマテリアルよね。なんではやてちゃんのマテリアルの魔法を？」

椛「それは後で明かされます」

ア「しかし前作のチョイキャラがここにきて登場とは」

椛「雨季さんもびっくりしてました」

シャ「自分がやった事でしょう」

ア「じゃあそろそろおしまい」

椛「次回もお楽しみに。さて、きりたんぽ♪きりたんぽ♪」

シャ「美人の源は何処かしら」

勘違いとオコジョ妖精（前書き）

今回あんまり進展ないかな。

要ｓｉｄｅ

何故この世界にあいつがいるのか。現れるとしたら別世界だろう。俺が倒して一真の世界に現れたように。それともあいつが現れる予定だったこの世界にたまたま飛んでしまった？だがあいつは俺と戦えるのをわかっていたような感じだし。

「あー、わかんねぇ！！」

「要五月蝿いよ～」

「あ、スマン久遠」

寝てたのに起こしちまったか。にしてももう６時か、ほぼ徹夜しちまったな。

「さて、行くか」

考えるのはとりあえず止めて学校に行くとするか。

木乃香ｓｉｄｅ

「行ーきーなーさーいー！！」

「いーやーでーすー！！」

朝から騒がしいなぁ。なんや昨日の事件でネギくんが犯人は要兄ち

ゃんで、会うのが怖いって学校に行こうとせえへん。明日菜はもちろんそんなの信じとらん。

「要さんがあんな事するはずないでしょう！！」

「でも一条先生の顔でした！！」

あの後要兄ちゃんに聞いたんやけど、これは俺が解決する言うて教えてくれへんかった。犯人の事は知っとるみたいやね。気になるわぁ。まあ今は学校行かんとな。

「明日菜、明日菜」

「何よ木乃香」

「麻袋あるよ」

「ナイス！！」

「木乃香さんの裏切り者～！！」

生徒も先生も登校拒否はあかんよ。みんなも約束やで。

要ｓｉｄｅ

朝、出勤と同時に職員室ではなく学園長室へと向かった。

「近右衛門、いるな」

「どうなさいました？師匠」

「話がある」

「成る程、それでは犯人は師匠のコピーと言う事ですか」

「劣化コピーな。とはいえ厄介極まりない。学園の魔法関係者には手を出さないように通達しろ」

下手に手を出すと返り討ち確定だ。タカミチでもやられる可能性が高い。

「ともかく、俺がやる」

「失礼します、学園ちょ・・・・・・」

ネギ坊主が学園長室に入って来た。そして俺の顔を見た瞬間、固まった。何と言うか恐怖を感じてるな。

「おやネギくん、どうしたかね？」

「あ、あああとで来ます！！！」

ネギ坊主は走って出て行った。多分あいつの顔を見たんだろうな。あいつと俺を同じと誤解してるな。

「まあいいか」

たいした事にはならないだろう。
だがこの考えがとんでも事件を引き起こすのだった。

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

私が千年城にある骨董品を磨いていると兄様が話し掛けてきた。

「エヴァは桜通りの怪人って知ってるか？」

「ええ」

噂はよく耳にするしな。正体が掴めないからなんとも言えないんだが、そこらの魔法使いより強いな。

「最近要の生徒も被害にあったらしいわね」

「そうなのですか？姉様」

「そうよ」

となると一条の怒りを買ったな。あいつは身内には甘いしな。私も人の事を言えんが。

ピーポーパーポー

「おっ」

「あら」

「むっ」

この気の抜けた音が店内に響いたら侵入者が現れたという事だ。何故この音かは知らん。大方姉様の趣味だろう。

「行ってきます」

「エヴァが行かなくても俺が」

「店長が店を開けてどうするんですか」

兄様は本当に商売に執着心がないな。まあこの店も趣味みたいなものだからな。

『茶々丸、聞こえるな』

『侵入者ですか？』

『ああ、小さい気配がな』

『わかりました』

面倒くさいが一応警備員もやっているからな。さっさと仕留めて爺に渡してくるか。

「ここら辺か」

「ええ、魔力反応はこの近くです」

「むっ、マクダウェルに絡繰か」

「アウリオン、貴様も来ていたか」

「クラトス先生」

わざわざ来たのか。教師だというのにご苦労な事だ。

「お二人共、これを」

茶々丸が見つけてきたのは白い毛。魔力を帯びてるようだな。抜けて間もない魔法生物の体毛か。

「これはオコジョの毛のようです」

「となるとオコジョ妖精か」

「オコジョ妖精・・・・・確か魔法使いが罰で変えられる姿だったか？」

「別にそれだけではない。自然界にも存在し、魔法使いと共生するのもいる」

といっても元魔法使いの方が今は多い。これがどちらかはわからんが、この程度ならば放っておいても問題ないだろう。

「爺に報告して帰るか」

「絡繰、私の授業では見逃すが、他の授業ではあまり抜け出すなよ」

「はい」

無駄足だったか。さっさと帰って店の手伝いをしないとな。

刹那ｓｉｄｅ

「龍宮、また成長したか？」

「そうか？」

今大風呂に入っているんだが、龍宮の胸がまた成長したように見える。別に悔しくない。悔しくないで！！

「刹那も随分成長しただろ？」

「へっ？」

こないだの身体測定ではあんまり大きくなってらんかったんやけど、気ぃ使ったんかな。

「身のこなしに無駄がなくなったとクラトスおじさんが言ってたぞ」

「・・・・・そっちか」

嬉しい成長ではあるけど、その成長より体の成長が欲しかった。

「キャーーーー！！！」

「何ーーー！？」

ん？一体何があったんだ？

「騒がしいな」

「Gでも出たか？」

「刹那、あまりそういうのは言わない方がいい」

そういうものなのか？

「こんの！！」

パコーン

今のは明日菜さんか。パコーンって、桶で叩いたのか？

「お見事」

「見えたのか？」

「魔眼を舐めるなよ？」

魔眼すごいなー。あこがれちゃうなー。

「馬鹿にしただろう」

「失礼な」

正直ドキッとしたのは秘密。

ネギｓｉｄｅ

僕が部屋に帰るとカモくんをふん縛っている明日菜さんがいた。

「兄貴ーー！！」

「カモくん！？」

なんでカモくんがここにいるの？

「ネギ、これの知り合い？」

「親友ですよ」

「親友？こいつみんなの下着を盗んでたのよ！！」

「えぇっ！？」

そんな、なんでカモくんがそんな事を。

「兄貴、聞いてくだせぇ。実はおれっちには病気の妹がいまして、人間の下着は保温性とかも高くて妹の布団にピッタリでして」

「そうなの？」

まさかカモくんに病気の妹がいたなんて。僕に言ってくれればよかったのに。

「カモくん。僕が雇ってあげるからもうそんな事しなくてもいいよ」

「マジっすか！？」

「ちょっとネギ！？」

結局この後カモくんは僕に雇われた。明日菜さんは反対したけど、これでよかったと思う。カモくんの為にもなるし、きっと役に立ってくれるよ。

勘違いとオコジョ妖精（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「茨城県入りました」

シャ「水戸です」

椛「納豆です」

ア「納豆って苦手なのよね」

シャ「私もちょっと」

椛「そうなんですか？」

ア「納豆というかネバッとした食品が」

シャ「あの臭いが」

椛「美味しいのに」

ア「そういえば今回はカモの登場ね」

シャ「どうでもいいけど」

椛「次回があれですね」

ア「あのイベントね」

シャ「楽しみな人も多いはずのあれね」

椛「そういえばもうすぐ４０万アクセスだとか」

ア「５０万になったらまた何かやりますか」

シャ「やるのは私達じゃないけどね」

椛「では次回もお楽しみに」

オコジョの愚策（前書き）

あっれ～？予定した所まで進まなかったぞ～。

オコジョの愚策

カモｓｉｄｅ

いやー、まさかこうも上手くいくなんて、運が良かったな。明日菜の姐さんは結構警戒してたけど。さてといろいろと計画を実行するか。

「およ？何この子」

ん？誰だこの嬢ちゃんは。

「木乃香さん！えっと、僕のペットです」

「そうなん？」

ああ、兄貴の生徒か。結構な魔力持ってるからパクティオー候補だな。

『兄貴、兄貴』

『何？カモくん』

『明日教室に連れていってくれねえか？』

『うん、いいよ』

くくっ、これでパクティオー候補が厳選し放題。金の為、じゃなくて兄貴のために頑張るか。

要ｓｉｄｅ

「あれは」

出勤するとネギ坊主の肩にオコジョが乗っていた。ついユーノを思い出したが、その後すぐにエヴァンジェリンの報告を思い出した。確か昨日の侵入者はオコジョ妖精だったか。おそらくあれだろう。

「スプリングフィールド先生」

「はひ！？一条先生！？」

「学校にペットを連れてくるのは関心せんな」

「す、すみません。でもカモくんは迷惑掛けませんので」

「迷惑云々の問題じゃないんだ。常識的に問題なんだ」

「はい・・・・・・」

異様に反省したかというか、やはり俺への恐怖があるようだな。

「今回は仕方ないが、以後気を付けるように」

「わかりました」

ネギ坊主はそそくさとその場を去っていった。あのオコジョ妖精、多少俺を警戒していたな。

「一条先生」

「長谷川か。どうした？」

「最近あの子供先生との中が悪いようだけど」

「勘違いと擦れ違いだ」

「ふーん。改善は、出来なそうだな。あいつ変な思い込みしそうだし」

流石は長谷川。人間観察力に長けているな。

「時が過ぎれば改善する。改善しなければ無理矢理やる」

「一条先生って結構強引な所あるよな。まあそっちの方が私は好きだけど」

「何か言ったか？」

「なんでもない！！なんでもない！！」

まあいいか。あのオコジョが入ることによってこの先どうなるかね。出来れば悪化しないで欲しいんだけどな。

カモｓｉｄｅ

「兄貴、あの男なんすか？」

今までいろんな人間を見てきたが、あいつには何か異質なものがあるように見えた。

「実は・・・・・・」

兄貴が話してくれた事は衝撃的な事だった。副担任なのはいい。だけど人を襲って魔力を奪ってただと？しかも兄貴も被害にあったなんて。

「兄貴！俺が一肌脱ぎますぜ！！」

「でもどうするの？」

「おれっちにおまかせを」

あの男の化けの皮を剥いでやる。

という訳で、放課後にあの男の後をつけていった。かなり離れた距離から双眼鏡で覗いてるからバレねえだろ。おっ、店に入っていったな。千年城？変わった名前だな。とりあえず中を見るか。

「な、なんだと！？」

何だあのそうそうたる裏社会のメンバーは！！これはヤバイ！！早く兄貴に報告だ！！

明日菜ｓｉｄｅ

部屋にいるとカモの奴が急いで入ってきた。木乃香がいたらどうするのよ。

「兄貴！！大変ですぜ！！」

「どうしたの？」

「これを！！」

カモが取り出した一枚の写真には千年城の店内が写っていた。そこには要さんにクラトス先生。店長の志貴さんにアルクェイドさんと、店員のエヴァンジェリンさんと茶々丸さんが写っていた。

「これがどうしたのよ」

「うん、そうだよ」

「いいっすか。まずこの包帯。こいつは裏では殺人貴と言われ、１０００万ドルの賞金首です」

「「ええっ！！？」」

あのお人よしの志貴さんが賞金首？信じられない。

「そしてこっちの金髪。こっちは真祖の吸血鬼にして、月の姫と言われた１２００万ドルの賞金首です」

「「１２００万ドル！？」」

それってどれくらいなのよ。えっと０の数が、あ、でもドルだから円より高くて。

「更にこの茶髪はＮＧＯにおいて最強の傭兵と言われた男です」

「クラトス先生が」

「なんか納得」

あの人たまに異常な身体能力見せるし、性格も硬いから傭兵とか似

合いそう。

「じゃあエヴァンジェリンさんは？」

「エヴァンジェリン！？姐さん！この娘エヴァンジェリンなんすか！？」

「え、そうだけど」

「エヴァンジェリンと言ったら真祖の吸血鬼で６００万ドルの賞金首っすよ！！」

「・・・・・・マジ？」

本当にとんでもないわね。でもなんでその中に要さんとクラトス先生と茶々丸さんがいるのかしら？

「多分この二人は吸血鬼の従者っすよ。傭兵はわからないっすけど」

「そんな・・・・・・」

「まず弱そうなこの女から叩くべきっす！！姐さんも協力して下さい！！」

はっ？茶々丸さんを倒せって言うの？クラスメートなのに？

「今やらないと被害が増える一方っすよ！！」

「でも・・・・・・」

クラスメートを倒すなんてやりたくないし。あのお店の人はみんないい人だし。まあエヴァンジェリンさんはちょっと無愛想かなとは思うけど。そしてなにより要さんが吸血鬼の従者なんて信じられない。

「とにかく！今やらないでどうするんすか！！兄貴の生徒や姐さんの友人に被害が出ていいんすか！？」

「それは・・・・・・」

「もちろん嫌だけど・・・・・・」

「ならやるしかないんすよ！！」

玉藻ｓｉｄｅ

「おぉう」

霊体でのんびりしてたら何やらすごい話してるなぁ。茶々丸を襲うとは、なんという無茶を。

「とりあえず連絡しよ」

要はどんな反応するのかな。やっぱり怒るよね。

要はさっきのオコジョの情報通り千年城にいた。エヴァ達にも一緒に報告出来るね。

「要～」

「なんだ玉藻」

「大変だよ」

「何がだよ」

私はネギ達が話していた事そのまま話した。

「「「「「・・・・・・はぁ」」」」」

あれ？あんまり怒ってない。というか茶々丸以外呆れてる感じ。

「ネギくんだっけ？何を考えてるんだが」

「茶々丸強いのにね～」

「私達の中では今はまだそれほどでもないが、麻帆良で見ればかなり上位だというのに」

「スプリングフィールド、いや今回の原因はオコジョ妖精か」

「まあまだ決まった訳じゃないんだろ？とりあえず茶々丸は注意し

ろよ」

「わかりました、一条先生」

うーん、やっぱりこの人（？）達はどこかおかしいよ。普通知り合いが狙われてるって知ったらこんな反応しないよ。

「しかし茶々丸一人では心配だな」

「そうだよね、エヴァ」

よかった、エヴァは普通

「まだ力加減が出来んから殺りかねん」

じゃなかったー！！心配する事が間違ってるよ！！

「ならすずかを護衛に着けよう」

「なんですずか？」

「あいつ何気に強いぞ」

科学力のおかげ？最近嵌まってる野球ゲームに出てくるダイジョー○博士？

「あいつは魔力を使わない戦闘においてはトップクラスだ」

へー、科学者なのに凄いんだ。

「まあ大人しく待とうや」

オコジョの愚策（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は豪勢よ」

シャ「山口県にて河豚を堪能！！」

椛「はむはむ」

シャ「河豚のお刺身の贅沢食いは憧れよね」

ア「私はそこそこ食べた事があるけど、贅沢食いはした事ないわね」

椛「いけません。贅沢食いはいけません」

ア「何でよ」

椛「河豚というのは非常に身の弾力が強い魚です。故に厚く切ってしまうと弾力の為に美味しく食べれないのです。薄く刺身にするのはその為です。だというのに何枚も重ねて食べてはその意味が無くなるのです。ちなみに鮪など柔らかい魚は厚く切らないとその旨味を感じる事が出来ません」

ア「へ、へー」

シャ「く、詳しいのね」

椛「雨季さんの知識です」

ア「なんて無駄な」

シャ「それを勉強に回せばいい大学にも行けたのに」

椛「次回は本当に皆さんお待ちかねのイベントです」

ア「今回はごめんなさいね」

シャ「次回も楽しみにして貰えると有り難いわ」

椛「ではではさようなら」

一つの命（前書き）

上手く書けなかったけど気にしないでくれ。
そして本編より後書きをどうするかが最近の悩み事。

すずかｓｉｄｅ

「私？」

「そう、お前」

いきなり要くんに呼び出されたと思ったら、茶々丸の護衛をしろと言われた。普通私が護衛される側でしょ。

「お前が茶々丸を一番知ってるだろ？」

「うん、そうだね」

「ならもしもの時、茶々丸を一番上手くフォロー出来るだろ？」

そう言われると確かにそうだけど、まあ要くんの頼みならしょうがないか。

「夜のサービスを楽しみにしてるよ」

「ねーよ」

茶々丸ｓｉｄｅ

今日はマスター・エヴァに言われてマイスターと一緒に行動しています。よくよく考えたらマイスターと二人だけというのは初めてですね。

「茶々丸って普段何してるの？」

「お買い物や地域での交流でしょうか」

「らしい行動だね。うん、いいと思うよ」

「ありがとうございます」

とは言っても今日はお買い物の予定もありませんので、あの子達の世話をするとしましょう。

「えーん」

あ、女の子が泣いています。木に風船が引っかかっているので、おそらくあれを離してしまったのでしょう。

「マイスター、行ってきます」

「頑張ってね」

私は木の下に行くとジェットを使って、は駄目ですね。いくら麻帆

良が認識阻害の結界に包まれているからといって非常識な行動はいけません。なので木を登って風船を取ります。

「どうぞ、もう離してはいけませんよ？」

「ありがとう！！お姉ちゃん！！」

女の子は手を振って走って行きました。転ばなければ良いのですが。

「よくやったね、開発者として鼻が高いよ」

「いえ、当然の事ですので」

「その当然ができるのが偉いの」

そう言ってマイスターは私の頭をなでました。こういう時にはどんな反応をすれば良いのでしょうか。

「笑えばいいと思うよ」

「心を読まないで下さい。そしてネタはやめて下さい」

「イケルと思ったのに」

無理です。

あの後も横断歩道でおばあさんの荷物を持ってあげたり、迷子の親を探してあげたり、ひったくり犯を捕まえたり、いつもより少し多めのトラブルを解決していきました。

「ふぇ～、茶々丸いつもこんな事やってるの？」

「はい、皆さまの為ですので」

「私には無理かな。要くんの為ならともかく」

普段の行為が一条先生の為だというなら、それは迷惑だと思うのですが、やはり夫婦ともなると違ってくるのでしょうか。

「あれ？橋の方が騒がしくない？」

「そうですね、行きましょう」

橋に着くとそこには川に流されている子猫がいた。ダンボールに入っているとはいえ、早く助けないといけない。私が川へ飛び込もうとした瞬間、横を何かがものすごい速さで通りすぎていった。

「猫ーーー！！！！」

「マ、マイスターー！？」

「確保ーーー！！！！」

マイスターは川に飛び込むと、子猫を救い上げ、岸に上がってきた。

「大丈夫ですかマイスター！！」

「この子も私も大丈夫」

周りからマイスターの行動に賛辞が飛び交います。私はマイスターと子猫を持っていたタオルで拭いて差し上げました。

「タオルなんて持ってたんだ」

「普段から何があるかわかりませんので」

それにしてもマイスターでも一条先生以外を助けようとするのですね。というより先ほどのは重度の猫好きとしか言いようがありませんね。ならこれから行く予定の場所は喜ばれるでしょう。

「マイスター、帰る前に寄りたい場所があるのですが」

「いいよ。私も服乾かして帰りたいし」

ふふっ、マイスターの反応が楽しみですね。

私がマイスターを連れてきたのは教会の裏側。さて、呼ぶとしましょう。

「出てきてください。ご飯ですよ」

私がそう言うと何処からともなく何匹もの猫が出てきた。

ニャーニャー　ニャーニャー　ニャーニャー

「わぁ、猫いっぱい」

「喧嘩しないようにして下さいね」

猫達は喧嘩もしないで仲良く食べ始めました。体が小さい猫には別にエサを用意します。

「ね～こ～ね～こ～」

「楽しそうですね」

「好きだから」

研究と一条先生以外でこんな子供のような笑顔を見せるマイスターは初めてです。なんだか良い事をした気になりました。しかしそれも後ろに出現した人物によりかき消されました。

「・・・・・こんにちは、ネギ先生。神楽坂さんも一緒ですか」

「あの子が噂の子供先生か」

「あの、茶々丸さん。一条先生にみんなを襲わないように言って下さい」

「何故私に言うのですか？一条先生に直接言えば済むでしょう」

「うぅ、それは」

「兄貴、ここはガツンとやっておきましょう。そうすれば向こうだってきっと動きづらくなりやすって」

何を根拠にいっているのでしょうかあのオコジョ妖精は。普通仲間がやられればその報復が来るのが当たり前でしょう。

「でもカモ、一般人いるわよ」

マイスターの事でしょうね。一般人というか逸般人ですが。

「記憶消去の魔法で済みますって。さあ兄貴！！」

「ごめんなさい、茶々丸さん。契約執行１０秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

「ごめんね、行くよ！！」

はぁ、謝るくらいならやらなければいいのに。私は神楽坂さんの攻撃をいなしていきます。いい動きですが、所詮は初心者ですね。動きが読みやすい。

「光の精霊１１柱、集い来たりて敵を射て！！魔法の射手・連弾・光の１１矢！！」

ネギ先生が魔法を放ちますが、この程度避けなくとも対処できるし、私のフレームを傷つける事さえ難しい。そう考えていた。その為、周りの行動など計算に入れていなかった。

「フーーーッ！！！」

「！？　駄目！！！」

「マズっ！！」

後ろにいたはずの猫が私を守ろうとしたのであろう、前へ飛び出したのだ。とっさの事に私は慌ててしまい、マイスターもかなり離れていたから間に合わない。

「ギャン！！？」

そして魔法の射手の一本が猫に直撃した。血まみれになって飛ばされた猫が私の方に飛んできた。残りの魔法の射手が私に当たるがそんなものは無視だ。私は猫を受け止めたが、猫の体はどんどん冷たくなっていき、ピクリとも動こうとしない。『死』。これまで感じた事のない生き物の明確な死。

「あ・・・・・・」

受け入れたくない。受け入れることが出来ない。私があの子達を先に避難させておけば、ネギ先生達を早く追い返しておけば、あいつらを、早く倒しておけば。

「・・・・・・」

私はＡＩの機能を最小限まで抑え、機械に成り下がる。そして左手に黒い両刃の剣、『小烏丸天国』を持ち、右手をドリルに変化させる。それを使い私はあいつらを倒そうと、否、殺そうとした。

「落ち着きなさい」

ガキィン

しかしそれはマイスターの爪により阻まれた。

「あの子はまだ生きてるわ」

「・・・・・えっ？」

「早くうちに連れていきなさい！！」

「はい！！」

私は猫を抱き抱え、空を飛んだ。その時、ほんの僅かだが猫の鳴き声を聞いた。

要ｓｉｄｅ

今頃すずか達は何してっかな。そろそろ帰ってきてもいい時間なんだけど。

「一条先生！！この子を助けて下さい！！」

突然家に飛び込んで来た茶々丸が抱えていたのは血まみれの猫。あれはいかん。早く治療しないと。

「フェイト！エリクサーを持ってこい！！」

「うん！！」

フェイトは凄まじい速さで台所へ行き、エリクサーを持ってきた。何故台所なのかはこの際無視だ。早く飲ませないと。

「ちっ、駄目か」

意識がないからか、瀕死だからかは知らないが、エリクサーを飲んでくれない。

「先生、貸して下さい」

茶々丸がエリクサーは受け取ると、口に含んで口移しで猫に与えた。なんとか飲んだのか、猫の傷はみるみるうちに治っていった。あとは安静にするだけだな。

「さて茶々丸、何があった？すずかはどうしてる？」

ネギｓｉｄｅ

茶々丸さんがとてつもない魔力を持った剣と、腕を変化させたドリルで僕達を襲うとした時、目の前女性が助けてくれた。その後すぐ茶々丸さんは猫を抱えて何処かへ飛んでいった。

「あ、あの、ありがとうございます」

「んー、気にしないでいいよ」

ドサッ

「あれ？」

いきなりアスナさんが倒れたので様子を見ようとした瞬間、僕とカモくんは蹴り飛ばされ、教会の壁にぶつかった。

「がぁっ！？」

「げぶっ！？」

「茶々丸の代わりに私がお仕置きするよ」

「なん、で」

さっきは助けてくれたのに。なんでそんな事を。

「何？自分を助けてくれたと思った？私が助けたのは猫。茶々丸じゃないと間に合わないと思ったから茶々丸を止めて飛ばしたの」

「そん、な・・・・・・」

「そっちのオコジョは気絶したか。なら子供先生だけだね」

怖い。さっきの茶々丸さんも怖かったけど、この女性はそれ以上だ。徐々にこちらに歩いてくる。もう助からない。そう思った時、女性が後ろに跳んだ。

ドンッ

そして女性がいた位置に何かが当たって煙が立つ。

「何をしているんですか？」

タカミチだ。ああ、これでもう安心だ。僕は意識を手放した。

すずかｓｉｄｅ

「何？ストーカー？」

「まさか。たまたま大きな音が聞こえて、茶々丸くんが飛び立つのが見えただけですよ」

嘘、ではなさそうだね。最初から見ていたならネギくんを止めてたもんね。

「ネギくん達は私達を攻撃したの。それだけなら怒りはしないよ。でもね、猫を殺しかけたの」

「猫？」

「そう、猫。事故みたいなものなんだけどね、交通事故でも責任は取らないと駄目でしょ？」

「だけどネギくんはまだ子供です」

確かにネギくんは子供だ。中学生にもなってないような年齢の子供。

「でもね、先生でもある。先生っていうのは職業でしょ？仕事に付いてたら子供も何も無いと思うんだ」

「そうかもしれません、だけど」

しつこいね、あんまり過保護だといけないんだよ。・・・・・要くん凄い過保護だったな。そのせいで子どもが逆にしっかりしたけど、あれは例外だよね。

「まあいいや、じゃあ貴方が私の相手する？」

「・・・・・わかりました」

「・・・・・ふふっ、冗談だよ。その子達をお願いね」

あの子大丈夫かな?早く帰って確かめないと。

要ｓｉｄｅ

成る程な、つまりネギ坊主が茶々丸達に魔法を放ち、それが猫に当たったという訳か。

「放っておいてはいかんかったか」

まさか魔法関係者と思われていないすずかの前でも魔法を使うとはな。いい加減誤解を解かないと。

「ただいま～」

「すずか、どうだった?というか何をしてきた?」

「明日菜ちゃんは殺気で気絶させて、ネギくんとオコジョは蹴っ飛ばした」

「怪我は？」

「私はないよ。ネギくん達はどうだろね、タカミチに任せたけど」

タカミチ？なんであいつがいるんだ。まあいいか、あいつがどうしようと解決する問題でもあるまいし。

「じゃあ私は猫の様子見るね」

「ああ」

ちなみにこの後タカミチから連絡があったんだが、ネギ坊主は骨が二、三本いってたらしい。魔法ですぐに治したそうだが。それとあの猫はマクダウェル家の飼い猫になったそうだ。名前は黒猫だったからレンだってよ。間違いなく志貴とアルクが付けたな。

一つの命（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「うえーい、徳島！！」

シャ「徳島って何があるっけ？」

椛「徳島にだって美味しいものはあります。私がオススメするのは鳴門金時です」

ア「サツマイモだっけ？」

シャ「美味しそうね」

椛「シンプルに焼き芋にしましょうか」

ア「いいわね、そういうのも」

シャ「ハフハフ」

椛「次回はネギ家出、そして拳闘士の久しぶりの登場だそうです」

ア「ちなみに今回、タカミチを襲う為登場予定だったそうだけど止めたそうよ」

シャ「ではまた次回」

自分の意志（前書き）

なにやら長くなってしまった。これもネギを修正するため致し方なし。

自分の意志

近右衛門ｓｉｄｅ

『という事だ。仕置きは任せた』

「わかりました」

師匠からいきなり電話があったと思ったらお仕置き依頼とは。まあ話を聞く限りネギくん達に責任がありそうじゃからな。学園長としてビシッとやっておかんと。

「タカミチくん、ちょっとネギくん達を呼んでくれんか？」

「ネギくんは先日大怪我をしたばか「呼べ」わ、わかりました」

いかんの、わしの威厳が無くなっとるのかネギくん、英雄の息子の影響が大きいのか。最近皆が言う事を聞いてくれんから強く言わんとな。

タカミチくんが連れて来たのは明日菜ちゃんとオコジョ妖精じゃっ

た。

「タカミチくん、外してくれ」

「はい」

「ネギくんはどうしたかの？」

「朝起きたらいなくなってまして」

ふむ、家出か。目の前の大きな壁から逃げ出したか。まあ先にこの子達か。

「呼ばれた理由はわかるかの？」

「・・・・・茶々丸さんを襲ったから」

「わかっておるようじゃな。ではまずすべき事があるじゃろ？」

「・・・・・茶々丸さんに謝ってきます！！」

やはり真っ直ぐでいい子じゃな。その真っ直ぐさが仇とならなければよいのだが。

「そうじゃ。あの場にいた女性については一条先生に聞くと良い」

「わかりました」

「帰ってきたら反省文じゃ」

「はーい」

「それとオコジョくんは残りなさい」

「おれっち？」

さて、明日菜ちゃんも出ていった事じゃし、本格的に仕置きをするかの。

パチン

「ヒッ！！？」

わしが指を鳴らすとオコジョ妖精は球体の結界に包まれ、そこへ殺気を叩き込む。

「君は少々やり過ぎじゃな。何も確かめずネギくん達を言いくるめ、多くの人々を被害に巻き込む。仕置きをしようか。死にはせんから安心するがいい」

「あ・・・・・・あ・・・・・・・」

ネギｓｉｄｅ

「ヒックヒック」

怖かった。気がついたら部屋で寝ていたけど、あの女性の恐怖が頭から離れなかった。だから逃げ出した。とにかく遠くに行こうとした。杖も無くして、ボロボロになって泣きながら歩いていた。

「・・・・・テント？」

広い所に出たと思ったら河原にテントが建っていた。誰かいるのかな。

「おや、ネギ坊主ではござらんか」

「うわ！？長瀬さん？」

いきなり後ろから声を掛けられたので驚いたけど、そこにいたのはうちのクラスの長瀬さんだった。

「どうかしたのでござるか？」

「・・・・・」

言いたくなかった。生徒にあんな事をしたなんて話したくなかった。

「話したくないのなら構わんでござる。さて、そちらに隠れておる御仁はどなたかな？」

「いや～、バレておったか」

「えっ！？」

聞き覚えのある声だったので長瀬さんが向いている方を見ると、そこには一条先生がいた。

「ひっ！！」

「・・・・・・一条先生、ではなさそうでござるな」

え？長瀬さん何を言って、そういえばこの一条先生なんか黒いような、というか実際黒い。髪が特にわかりやすいかな。

「うむ。儂は異能の拳闘士。オリジナル、一条要の劣化コピーじゃ」

「劣化・・・・・・」

「コピー・・・・・・？」

じゃあ、偽者って事？それなら今まで僕がやってきた事ってずっと勘違いで人に迷惑を掛けたって事なの？

「そのコピーが何の用でござるか？」

「この森に住んでおるんじゃよ。それで以前襲ったその童が入ってくるのを見たからの」

やっぱりそうだ。この人がみんなを襲ってた人なんだ。

「襲った？お主、桜通りの怪人か」

「そうじゃの。やるか？」

「遠慮させて貰おう。勝てる気がしないのでな」

「つまらんのぉ」

それにしてもなんだか怖くない。どうしてだろ。あの時はあんなに怖かったのに。

「ネギ坊主を追ってきた理由は？また襲いにきたのでござるか？」

「残念ながら、一度魔力を奪った相手からは二度と奪えんのじゃ。だから今ここにいるのは気まぐれにすぎん」

魔力を奪うって、そんな事を何でしてたんだろう。宮崎さん達生徒は魔法使いじゃないのに魔力なんてあるのかな。

「魔力？」

「何じゃ、知らんのか。簡単に言えば生物に内包された力の一つ。他には気、チャクラ、霊力、神力、数えたらキリがないの」

へー、そんなにあるんだ。全然知らなかったよ。

「とりあえずネギ坊主は襲わないという事でござるな。ではネギ坊主はどうするのでござる？」

「あぅ」

決めてなかった。どうしよう。

「今から帰ってはいつになるかわからん。今日は泊まっていくでござる」

「じゃあ、お世話になります」

長瀬さんにお世話になる事になったので、食材調達のお手伝いをする事になった。何故か異能の拳闘士さんも一緒だ。

「ほれ、このクナイで魚を取るでござるよ。シッ！！」

ヒュッ

長瀬さんが投げたクナイは見事に魚に突き刺さっていた。よーし、僕も。

「えいっ！！」

ポチャ

僕はクナイをまともに投げる事も出来ず、クナイは川に落ちた。

「ハハハ、初めてはそんなもんでござるよ。拳闘士殿もどうかな？」

「では、ほれ」

ビュッ

「「へっ？」」

拳闘士さんが投げたクナイは魚に刺さった。ただ三匹一緒に刺さっていた。

「クナイは久しぶりだが、腕落ちていないようじゃ」

「次は薪割りでござる」

そう言われて斧を持たされたけど重くてふらふらしてしまう。これじゃあまともに出来ないよ。

「うーむ、ネギ坊主には大きすぎたかな？」

「ごめんなさい、役に立てなくて」

「気にする事はないでござるよ。あちらで拳闘士殿がやってくれて

るでござる」

「北〇！！有情〇顔拳！！！」

あれ薪割りじゃないと思うんだ。

「気にしたら負けでござるよ」

「さあ風呂でござる」

何故か僕は長瀬さんと一緒にドラム缶風呂に入れられている。火を吹いているのは拳闘士さんだ。

「熱かったら言うんじゃぞ」

「はい」

「覗きはしないで欲しいでござる」

「とうの昔に枯れとるわい」

今日一日一緒にいたけど、この人がどうも悪い人に見えない。どうして魔力を集めたりしてたんだろう。

「何か聞きたいことがあるかの？」

「あ、いえ」

「拙者としてはネギ坊主がここにいたのかをいい加減知りたいでござるな」

やっぱり、いい加減言ったほうがいいよね。でもどうやって言おう。

「長瀬さん、自分が正しいと思ってとった行動が実は間違ってて、それで何かを傷つけたらどうします？」

「そうでござるな。やはり第一に謝るべきかと。傷つけてしまったなら謝罪は大切でござるからな」

「そう、ですか」

謝る。確かに僕は謝ってない。あんな事をしておいて茶々丸さんに謝罪の一言もせず、それどころか巻き込んだアスナさんにも何も言わずに出てきてしまった。

「あの、拳闘士さんはどう思いますか？」

「儂はそんな経験はないからの。アドバイスのしようがない。悪いのぉ」

「いえ」

「そうそう、拳闘士殿は何処で寝るのでござるか？」

「適当にハンモックでも創って寝るわい」

夜になってもなかなか眠れなかった。やっぱり頭の中にこのあの事がよぎってしまう。

『童、聞こえるか？』

『拳闘士さん？』

突然頭の中に声が響いたのでちょっと驚いたけど、誰かわかれば大丈夫。

『ちょいと木の上に来い』

『あ、はい』

いったいなんだろう。

木の上に登るとハンモックで寝転がっている拳闘士さんがいた。

「どうしました？」

「年長者としていろいろ話してやろうと思っての。童、ネギ・スプリングフィールドは父であるナギ・スプリングフィールドのような立派な魔法使い（マギステル・マギ）なりたいのだったかな？」

「な、なんでそれを！？」

「魔力を奪った相手からはその魔力のみならず、能力や記憶も蒐集可能なのじゃ。まあ普段気にするようなものでもないがの」

じゃあいろんな人の記憶や能力も持ってるって事？それなら劣化コピーとは言っても一条先生じゃ勝てないんじゃ。

「さて、ここでアドバイスじゃ。立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指すのは結構。しかし英雄になってはいかん」

「どうしてですか？」

お父さんは立派な魔法使い（マギステル・マギ）であり英雄って言われた人だから、その二つを両立したら駄目って事はないはずだけど。

「童、今は平和か？」

「えっと、多分平和だと思います」

僕はいろいろとやっちゃったけど、世間は概ね平和だと思う。

「ならば英雄になぞなるでない。英雄とは人殺しの別名みたいなもんじゃ。戦乱の世ならば敵を殺す事により世を平和に導く事が出来よう。しかし平和な世には人殺しは不要。それに童に人を殺す覚悟はないじゃろ？」

「・・・・・・はい」

人を殺すなんて考えた事もない。でもそうだとするとお父さんは人殺しだったっていう事？

「人を殺さないで英雄にはなれないんですか？」

「不可能。殺さなければ生き残れぬ。殺さなければ守れぬ。戦乱の世とはそういうもの。英雄と言われた者達も人を殺さない事を考えた事があったであろう。しかし不可能なのじゃ。さあ話題を変えてもう一つのアドバイスじゃ」

「もう一つのアドバイス？」

「うむ。童が父を目指すのは結構。しかしいきなり大きな壁を目指しすぎじゃな」

確かにお父さんは遠い存在だけど、僕はそれに追いつきたいんだ。

「慌てる事はない。人生は有限と言えど決して短いものではない。まずは自分の意志で動いてみる事じゃ」

「自分の、意志？」

いつも僕は自分で考えて行動してると思うんだけど。

「童が最初に父を目指した理由は自分が英雄の息子で、周りから期待されておったからであろう。童は無意識のうちに周りの期待に応えようとして父を目指したはずじゃ。しかし無理をする事はない。今自分がすべき事をよく考え、周りを見渡し、時に自己を貫き通し、時に周りと協力しながら、段差を乗り越えろ。どんな小さな段差でもな」

「段差、ですか？」

「うむ。その段差がたとえ数ｃｍのものとしても積み重ねれば階段となる。そしてその階段を登れ。さすれば父とは違う頂としても、同じ高さに達することが出来るだろう」

まだ僕にはよくわからなかった。でもよくよく考えると僕は周りに流されていたのかもしれない。アスナさんのご機嫌を取ろうと惚れ薬を作ったり、カモくんに言われて茶々丸さんを襲ったり。僕はこの学園に来て自分の意志で何をしただろうか。何をすべきか考えただろうか。

「悩め悩め。それが若い者の特権じゃ」

僕が今積み重ねなければならない事。やらなければならない事。それはやっぱり茶々丸さんとあの女性。そして猫さんへの謝罪だ。そ

れに一条先生に勘違いしていた事を謝らないと。

「ありがとうございます。やる事見えた気がします」

「そうかそうか」

「そういえば、拳闘士さんの目標はなんですか？」

「儂か？簡単な事、オリジナルを超える事。その為に様々なものから魔力を奪った。世界を越え、時を越え、人から、獣から、人外から。一番有益なのは転生者とかいうのだったかの。他者の迷惑なぞ考えず、ただただ強くなろうとした。少々やり過ぎた感も否めんが」

転生者？一度死んで生き返った人の事だっけ？そんな人もいるんだ。でも時間移動なんて、本当に何なんだろうこの人。

「そろそろ寝なさい。起こした儂が言うべきでもないかもしれんが、子供はもう寝る時間じゃ」

「はい、おやすみなさい」

次の日、僕は朝から杖を呼んでこの森を出る準備をした。

「もう行くのでござるか？」

「長瀬さん。お世話になりました。やる事がありますから」

「昨晩何があったのかは知らぬが、いい顔をしてるでござるよ」

「ありがとうございます。それじゃあまた学校で」

僕は杖にまたがり空を飛んだ。まずは茶々丸さんの家に行かないと。その後にあの女性の家。あっ、でもわかんないからまずは一条先生の家に行こう。

ピンポーン

「はい、どちら様・・・・・・何の用ですか？」

うっ、茶々丸さんが怖い。でもこれは僕のせいなんだ。しっかり謝らないと。

「茶々丸さん。先日はすみませんでした！！」

「謝って済むと？」

「そんな事は思ってません。でも僕には今こうする以外の方法がわからないんです」

「・・・・・・レン」

茶々丸さんがそう言うと一匹の黒猫が奥から出てきた。あの猫は確かに僕が魔法を当ててしまった猫だった。

「ではこの子に謝って下さい」

「えっと、猫さん、ごめんなさい」

「ニャッ！！」

バリッ

「痛っ！？」

顔を引っ掻いて猫さんは奥に帰って行ってしまった。やっぱり怒ってるのかな。

「良かったですね。許すそうです」

「本当ですか！？」

「ええ、あの子が許すなら私も許します」

よ、良かった～。引っ掻かれたから怒ってるのかと思っちゃったよ。

「先日も神楽坂さんが謝りに来たんですよ」

「えっ？それじゃあ」

「顔に見事な三本の筋を残して帰って行きました」

ハハハ、アスナさんもなんだ。さて、次は一条先生の家だ。

「茶々丸さん。本当にすみませんでした。これからはしっかりしていきますんで」

「ええ、お願いします」

ええと、確か住所ではこの辺りに。

「うちの前で何してるんだ？」

「一条先生」

やっぱりこの家だったんだ。

「突っ立たれるのもあれだから中に入れ」

「はい」

一条先生の家の中は凄く広くて、何人でも住めそうな感じだった。

一条先生は椅子に腰掛けて子狐を撫でている。

「用件は？」

「謝罪に来ました」

「謝罪？何の？」

「桜通りの怪人を一条先生と勘違いしていてすみませんでした。ちゃんと確認もしないで一条先生を避けてすみませんでした」

そう言うと一条先生の顔が曇った。不快感というより、違和感を感じているというのが感じることができた。

「スプリングフィールド先生。何故俺が怪人でないと？」

「本人に、異能の拳闘士さんに会いました」

「はっ、成る程な。そいつの名を知ってる時点で事実のようだな。いいだろう、その謝罪受け入れた。それで、お前は別に謝罪する相手がいるはずだが」

何で一条先生がそれを知ってるんだろう。いや、今はそんな事はいいか。

「茶々丸さんと猫さんには謝罪して許しを貰いました。あとは女性だけなんですけど、何か知りませんか？」

「もう許しを貰ってきたか。いい行いだ。さて、その女性だが」

「ここにいるわよ」

あれ？何でここに？ここって一条先生の家なのに。

「私は旧姓月村。今は一条すずか。この人の妻よ」

「・・・・・え、ええっ！？」

「そんな驚く事でもないだろ」

だって一条先生に奥さんがいるなんて聞いた事ないし、きっと朝倉さんも知らないよ。っといけない。そんな事はどうでもいいんだった。

「先日はすみませんでした」

「あの猫ちゃんが許したなら私も許すわ。茶々丸も同じ事言ったで

しょ」

「はい」

「まあ許されたかはその傷で一目瞭然だけどね。明日菜ちゃんも付けてたもん」

「あ、そうですか」

「さて、スプリングフィールド先生。あいつとは何処で会った？」

あいつ？拳闘士さんの事だよね。

「森です。麻帆良の外れにある」

「了解した、あとあいつと話した事をすずかに教えといてくれ」

「わかりました」

要ｓｉｄｅ

あいつ、やはり森に隠れていたか。この森なら確かに隠れる場所が

五万とあるしな。

《主、あの木を上を》

「お待ちか」

木の上にあいつはつっ立っていた。ここで襲撃してもいいんだが、避けられるのが関の山か。

「よう。ネギ坊主にいろいろと吹きこんでくれたみたいだな。感謝する」

「気にするでない。年長者として当然の事」

《主より教師に向いてるのでは？》

「黙れ。俺もそう思った」

こいつ、あのお硬いネギ坊主をあそこまで説得するとは。全く、教師として頭が下がるね、本当。

「お主にこれを渡そうと思ったのだが、手間が省けたな」

「果たし状？どれどれ」

《この日は、学園の停電の日ですね》

「いかにも。その日なら周りに気づかれる事も少なかろう」

「どうやってこの日を知った？」

「チョチョイとハッキングしただけじゃ」

《主より有能ですね》

「黙れ。俺もそう思った」

なんだよこいつ。俺の劣化コピーだろ？俺が勝ってるの戦闘しかねえじゃねえか。

「ではな」

ほう、なかなかの速さだな。やはりあいつも成長しているという事か。

「帰ってすずかの報告を受けるか」

「ただいま」

「お帰りなさい」

ネギ坊主は既に帰っているようだな。

「どうだった？」

「かなり有益な情報だったよ。これを見て」

モニターに映しだされたのは夜天の書。これがどうしたのか。

「ネギくんの話だと異能の拳闘士は魔力の蒐集と同時に能力の蒐集もしてるみたい」

「成る程、だから夜天の書か」

あれは魔導師の魔法を蒐集するやつだったからな。

「以前の砲撃もはやてちゃんのマテリアルを蒐集したんだと思う。問題は次、ネギくんいわく、異能の拳闘士は世界を越え、時を越え、人から、獣から、人外から魔力を蒐集したそうなの」

つまり様々な世界の様々な生命体から魔力を蒐集したからそれだけ多くの能力も蒐集したって訳か。

「そして、一番有益なのは転生者。そう言ってたそうだよ」

「転生者だと！？」

これは厄介になったぞ。転生者となると場合によってはとんでもないチートかもしれん。少なくともあいつよりは弱かったんだろうが、能力も使いようだ。どう化けるかわからん。

「全力で潰すか」

「ＯＲＴの使用も想定しないとね。この学園も厄介なの抱えたよね」

本来ならツッコむが、今はそんな事する気はない。待ってろ異能の拳闘士。お前の喧嘩、ここで終焉にしてやる。

自分の意志（後書き）

〈続・アリシャの部屋＋わん〉

ア「今回は岩手に来たわ」

シャ「名物って何があったかしら」

椛「岩手の人に失礼ですね。みんなが知ってるわんこそばがあるでしょう」

ア「椛にぴったりね」

シャ「量的にも名前的にも」

椛「量は認めます。しかし私は白狼天狗です。わんこではありません」

ア「でもこのタイトルの＋わんって」

椛「言わないで下さい」

シャ「今回は圧倒的不人気のネギくん救済策」

ア「そして異能の拳闘士が有能の拳闘士になりそうね」

椛「みなさんの意見次第でこれからどうなるか決まります」

ア「ネギも異能の拳闘士もね」

シャ「次何処に行こうかしら」

ア「これの依頼も待ってるわ」

椛「では次回もお楽しみに」

世界を越えた決戦（前書き）

やっと終わった。
今回も長くなったな。

世界を越えた決戦

要ｓｉｄｅ

今日か。あいつ対策にいろいろとやったが、やはりこの身で潰すのが一番だな。

「志貴、アルク、クラトス、修行に付き合わせて悪かったな」

「気にするな。頑張れよ」

「負けるんじゃないわよ」

「全力を尽くせ」

全く、それじゃあ戦場に送り出すみたいじゃないか。ちょっと喧嘩するだけだってのによ。

「要、負けたら許さねえからな」

「わかったよ、ヴィータ」

「お弁当食べます？」

「いやいや、戦いの前に弁当はないだろ、スバル」

「無茶しないでね」

「なのはじゃないんだから大丈夫だよ」

「全くだ」

「「ハハハハハ」」

「要くん、フェイトちゃん。頭冷やそうか」

「「ごめんなさい」」

ん？そういえばすずかの姿が見当たらないな。せっかく俺の戦いの日なんだから送り出してくれてもいいのに。まあそんな事されなくてもいいんだがな。でも気分的にはあったほうが嬉しいような。

「要さん。面白い戦いを期待してますよ」

「文、写真を撮ったら俺にもくれ」

「頑張ってね、要」

「任せろ久遠」

あいつには悪いが今回も勝たせてもらう。そしていい加減消滅してもらおうか。

世界樹の下に着いたはいいんだが、少々早すぎたかな。まだ１０分も時間が余ってやがる。

「アリストテレス、なんか面白い事ないか？」

《そうですね、『優の女難・パート３４』でも見ますか？》

「戦闘前に見るもんじゃねえな」

面白い事は面白いんだが、今見るよりもみんなで見たほうがいいな。大晦日の笑ってはいけないシリーズみたいに。

《では異能の拳闘士のデータでも》

「あるなら最初から出せ」

全く、こいつはいつからこんな主をおちょくる正確になってしまったのか。このままだとこいつも胃痛の原因になりかねん。嫌だ、それは嫌だ。身内に胃痛の素がいるなんて。

「そうだ、捨てよう」

《いきなりなんですか。って投げないで下さい！！私を投げないで下さい！！！》

「なら大人しくデータを見せろ」

《了解です》

ふむ、やはりデータは古いのが多いな。最近のでも実力の一割も出してないだろうし。情報戦では勝てないかな、こりゃ。

「っと、時間か」

周りの光が消えていく。停電の時間だ。この間は結界も一部消えるから木乃香と刹那は鬼退治なんだよな。ご苦労なこった。

《主》

「わかった」

アリストテレスのレーダーに引っ掛かったな。多分普通にこっちに飛んでくるはずだ。

「こないだぶりじゃの」

パン

「おっと」

ちっ、不意打ちのつもりでハンドガンを撃ったんだが避けられたか。まあこの程度で沈んだら楽しめないな。

「いきなりじゃの。普通合図をしたら戦闘開始じゃろ」

「喧嘩は勝てばいい。殺し合いは殺せばいい。ルールもへったくれもあるか」

「それもそうじゃ。では一言、儂はお主を超える」

「言うね、なら俺も。俺は貴様を潰す」

その一言が合図となったのか拳闘士が大きく息を吸い込む。何をする気だ？

「フーーーッ！！」

息を吐き出すと煙のようなものが出てきた。暗いから良くわからんのだが。その煙が俺の服に触れると服が石化を始めた。

「なっ！？」

俺は即座に服を脱ぎ捨てた。そして今のが何の攻撃かを思い出した。

「コカトリスの石化の息吹か」

「ご名答」

転生者の能力を使ってくるとばっかり思ってたが、よくよく考えたらこいつはあらゆる生物から魔力を奪ったんだ。魔獣の類の能力が使えてもおかしくないか。

「お次はこれじゃ！！」

「させるかよ！！ニードルマシンガン！！！」

あいつが何かするならその前に止めればいい。相手に何もさせないのは戦闘の基本だ。だがニードルマシンガンが当たった瞬間、拳闘

士は木人になった。

「変わり身の術！？」

《後ろです！！》

「くっ！！」

「はずれか」

後ろから突進してきた拳闘士をすんでのところで避ける。あいつが手に持つは黄色い魔槍『ゲイ・ボウ』。あれで刺された危なかったな。しかしこれで二つほど能力が割れた。

「忍術に投影魔術、成る程、転生者が好みそうな能力だ」

「さあそちらの能力も見せるがいい」

「たく、知ってるだろう。ほとんど変わりなしだが、限界突破、身体能力１５０％解放！！！神速！！！」

限界突破と神速で一気に身体能力と反応速度を速め突貫する。

「吹っ飛べ！！」

「ぐっ！？重い！！」

ガードされたが浸透勁と追加した拳だ。そこそこ効いただろう。

「いやはや、いい拳じゃった」

そう言うと拳闘士はポケットをあさり何かを取り出す。そしてそれを宙に弾く。月明かりで光ったそれは、コイン？

「レールガン」

「ルーフシールド」

拳闘士が撃ち放った雷撃をルーフシールドで受け流す。本当に多種多様な能力を手に入れやがったな。羨ましい。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ここでこの戦いを観戦している人々＋αの様子を見てみましょう。

マクダウェル家の場合

「うわっ、本当に要そっくりだ」

「七夜みたいだね。色は違うけど」

「七夜は出さないでくれよ」

「あれで劣化コピー？一条が規格外なのか、あのコピーがそれだけ力をつけたのか」

「おそらく後者かと、マスター・エヴァ。マイスターに見せてもらった映像にはあそこまでの能力はありませんでした」

「それにしても果し状受け取って不意打ちなんて、要ずるいね」

（（（否定出来ない））））

クラトス・真名

「む、あの銃なかなかいいな」

「ならば一条に頼んで貰ってやろうか？」

「うーん、じゃあお願いするよ、おじさん」

「しかしあの男、強いな」

「そうだね、あんな化け物が麻帆良に潜んでいたなんて。おじさんは勝てるかい？」

「わからんな。剣で戦えば勝機は十二分にあるが、あのようななんでもありの戦いでは負けるかもしれん」

「勝ち目はある事はあるんだ。はぁ、まだまだ未熟だな、私は」

「焦る事はない。私達が規格外だっただけだ」

一条家

「そこだ！いけ！！」

「要さん頑張れー！！」

「はいはい、二人共熱くなり過ぎだよ」

「あーー！！どうしてそこで攻めないの！！そこ！ほら！！もっと！！！速く！！！！」

「フェイトちゃん・・・・・・」

「一番熱かったな」

「流石にあそこまでは・・・・・・・」

「だーかーらー・・・・・・・！！！」

「レイジングハート、消音ご苦労様」

《いえ、お気になさらず》

「そういえばすずかはまだか？」

「まだ別荘で造ってるんじゃないですか？」

「間に合うのかな？」

「・・・・・・！！！！」

「声が出ていないのに熱く応援している。この光景をしっかりビデオに収めましょう」

「文、あんまりいじめちゃ駄目だよ？」

「交渉の道具ですよ、久遠さん」

木乃香・刹那

「「どけ雑魚！！」」

『ぎゃーーーー！！！』

「お嬢も刹那も荒れてるな」

「要の応援に行けないからね」

「二人共！！仕事しぃ！！！」

「はぁ、お嬢、ここは私がやっておくから刹那と一緒に行きな」

「「ほんまに？」」

「ヴラド、甘やかしたらいけないわよ」

「たまにはいいさ。玉藻、君も行きな」

「「行ってきます！！」」

「速！？じゃあヴラド、頑張ってね」

「なんや兄ちゃん一人かいな」

「くくっ、君達ごとき私で十分だよ。いくよ、異形共。我が槍の前に散れ！！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

異能の拳闘士ｓｉｄｅ

やはりオリジナルとの戦いは心踊る。これまで様々な世界で強者と戦った。時には負けそうになる事もあった。それらは実に楽しかっ

た。だがオリジナルとの戦いはそれらとは一線を画す。肉体が、本能が、儂を構成する全てが戦いを楽しんでおる。

「ハハハハハ！！！」

「バトルジャンキーが。だが悪くない！！！」

儂とオリジナルの拳がぶつかる。単純な身体能力はあちらの方が上らしい。儂も鍛えたのだがな。

「そこ！！」

オリジナルの拳が儂の腹を文字通り貫く。本来ならここで試合終了じゃろうが、儂はしぶといぞ。

「！？　抜けない！？これは、スライム！！」

「そうじゃよ。儂に打撃は効かん」

オリジナルが腕を抜こうとするが、抜く事が出来なかった。儂はとある世界でスライム族の魔力を奪う事により肉体をゼリー状に変化させる事が可能となった。闇の書の闇が取り込んだ魔法生物を触手として使ったようにの。

「ハアァァァァ！！！」

「がはっ！！？」

腕を抜く事が出来んオリジナルをたこ殴りにする。

「アリストテレス！！」

《了解！！》

「ぬっ！？」

ザンッ

儂の体が真っ二つになる。その瞬間にオリジナルは腕を抜いた。シールドスライサーか。

「化け物になったな」

「それはお互い様じゃ」

真っ二つになった体をくっつける。元々ＯＲＴなんて化け物を内包しとったのはオリジナルじゃろうに。それに化け物呼ばわりされるとは心外じゃの。

「しかしこのままだとマンネリだな」

「では、これなどどうじゃ？」

「何？」

オリジナルが儂を見た瞬間、正確には儂の左眼を見た瞬間膝をついた。じゃがすぐに立ち上がった。

「万華鏡写輪眼か。驚いた」

「三日三晩刺される幻を驚いたで済ませないで欲しいのぉ。というか驚いたのは儂じゃ」

「何万回も殺されるのに比べたら軽い。しかし何故万華鏡写輪眼を持っている？」

「ちょいと死人と外道からの」

ちなみに付け替え可能で、他には白眼、千里眼、譜眼、いろいろあるの。直死は脳とセットじゃから無理じゃ。とりあえず白眼と付け替えるとするか。

「ん・・・・・・」

グチュ　グチャ

「うわ、グロ」

仕方ないであろう。これ以外の方法はないのだから。写輪眼をケースに入れて、別のケースから白眼を取り出して嵌める。

「よし、再開じゃ。ＯＲＴよ」

「ＯＲＴ部分解放」

儂からは黒いＯＲＴの脚が二本、オリジナルからは水晶のようなＯＲＴの脚が二本出る。しかし儂のには赤黒い模様のようなものが入っている。

「貴様、この世全ての悪（アンリマユ）まで取り込んだか」

「正確には取り付かれた、じゃがの」

この世全ての悪（アンリマユ）を内包した転生者が暴走しとったんじゃ。それを止めるのにＯＲＴで叩き潰したら儂に取り付いたという訳じゃな。相性もなかなか良かったしの。

「面白い。だが勝つのは俺だ！！」

「それ負けフラグではないかの？」

「うっせぇ！！」

儂らのＯＲＴの脚がぶつかり合う。いくら三割とはいえ、この世全ての悪（アンリマユ）によって強化された儂のＯＲＴはそうそう負けんぞ。

「オォォォォォォォォ！！！」

「ハアアアアアア！！！」

途中までは互角。しかし時間が経つにつれ、徐々にではあるが儂が押され始めた。どうする。何か術を使おうにも集中する時間がない。広範囲が見えるという理由で白眼にしたのは失敗だったかの。だが突然あちらの攻撃がやんだ。

「なんじゃいきなり」

「どうせだから新しい力を使おうかと思ってな」

ほう、新しい力とな？つまり今より強くなるという事であろう。そ

れは楽しみでならんな。

「ふーーー」

「む、収めるのか」

ＯＲＴの脚を収めるとなると、純粋な肉体技かの？楽しみに待っておると、オリジナルに巻き付いていた無数の鎖が弾ける。そんな幻覚を見た。

「枷を外すのは現実では初めてだな」

「枷？」

今まで手加減しておった、という事ではなさそうじゃの。それなら気がつくはず。まあよい、如何なるものでも打ち砕こう。

「せいやっ！！！」

儂がＯＲＴの脚を振るった瞬間、オリジナルはいなくなった。

「な、にっ！！？」

「ふむ」

いきなり儂の下半身が消滅した。いや、高速で蹴り飛ばされたのか。後ろにはローキックを放った体勢のオリジナルがいた。早く再生しなければ。

「おらよ」

「ぬおっ！？」

オリジナルは儂のＯＲＴの脚を掴むと宙に投げ飛ばした。この世全ての悪（アンリマユ）に汚染されておるのに素手でやりおった。宙に舞った次の瞬間にはオリジナルが裏拳を放つ体勢で目の前にいた。

「俺の勝ちだ」

「無念、と言っておこう」

刹那、儂の体は首から下が消し飛んだ。

要ｓｉｄｅ

星の枷を外していられるのは２０秒前後といったところか。しかし神様の所でＯＲＴ相手にしか使ってなかったからわからなかったがここまで能力が跳ね上がるとはな。

「おーい！！お前ら出て来い！！」

そう言うと観戦していた奴らがぞろぞろと出てきた。あれ？なんで木乃香と刹那がいるんだ？

「お前ら仕事は」

「ヴラド任せたで」

自分でやれよ、全く。なんか一部の奴らが言いたいことがありそうだな。

「軽く質問タイムでも設けてやろうか？」

「なら要さん、あの蜘蛛のような脚は何だい？」

「ＯＲＴ、規格外生物」

龍宮の質問にはこう答えるしかないな。説明してもわからないだろうし。

「じゃあ次私ね。なんで抑止力を無力化出来るのかしら？」

アルクがそう質問してきたが、抑止力？ああ星の枷の事か。

「なんか神様に外せるようにしてもらった」

「何その反則。ずるい～」

「はいはい」

まあ確かにタイプ・マアキュリーに抑止力の無力化。反則にもほどがあるな。

「要さん、拳闘士さんは無事なん？」

「刹那は優しいな。あんなの気にしないで「再生率５０％じゃ」早いな」

「みんな～～～！！」

「すずかおせーぞ！！」

「もう終わりましたよ」

「めんごめんご」

いきなり登場だな、すずか。今まで何をしてたんだ？

「おや、その箱はなんですか？」

文が気がつく。確かにすずかは手に小さな黒い箱を持っている。ってこれ見た事あるような。

「これはね、こうするんだよ」

すずかが箱を宙に投げる。すると・・・・・・

「ぬあぁぁぁ！！？」

『はい？』

拳闘士が吸い込まれた。俺らは驚いたが、一部、妻達は驚いていなかった。という事は知ってたのか。そして思い出した。あの箱、ディオネを入れてたのと同じだ。

『出～せ～』

「ふふふ、いいけど違う世界に行かないって約束する？」

『するする』

「ならいいよ」

「ほっ、出れた」

あれを造ってたのか。しかも出し入れ可能。まあ拳闘士を放っておいたらまた違う世界に行きそうだしな。

「これからはうちのサポーターとして働いて貰うよ」

「うーむ、仕方ないか」

なんだかなぁ。まあ仕方ないな。

「あれ？要なら怒ると思ったのに」

「フェイト、俺がお前らをこんな事で怒った事あるか？」

「にゃはは、確かにないね」

気に入らんが、妻達が決めた事だ。新しい家族として迎えてやろう。

「そういえば名前どうするの？」

久遠の一言で思い出した。こいつの名前どうすんだ？苗字は不本意だが一条でいいんだが。

「読者に決めて貰えばいいだろ」

「エヴァンジェリン、メタ発言はアリシャ行きだ」

「それもメタ発言とやらではないのか？」

「おじさん、ツッコんだら巻き込まれるよ」

近右衛門ｓｉｄｅ

無事終わったようじゃな。被害が少なかったのは師匠と拳闘士殿が広域破壊タイプではなかったからか。僅かに見えた結界は奥方達かの。

「学園長！！何ですかあれは！？」

あ、忘れておった。師匠達の邪魔にならないように魔法先生や生徒を集めておったのじゃった。どうせだから師匠の実力を見せるのに生放送やっとったのじゃった。

「あのような化け物が何故いるのです！？」

「すぐに追い払うべきです！！」

「危険です！！」

あー、やはりこんな反応じゃったか。

「うむ、危険じゃの。ナギですらあの前では子供扱いになるかもしれんな」

「なら！！」

「しかし危険なのは能力であって人間性ではない」

というかあの方々がおられる方が学園は安全なのは間違いないの。力は力を呼ぶがあれ以上の馬鹿戦力などおらんじゃろて。

「学園長にあいつらの何がわかるのです！！誰がどう見ても危険でしょう！！」

「少なくともお主らより知っておるよ。ではお主らは危険以外何か知っておるのか？」

「危険なのを知っていれば十分でしょう！！」

周りからも同じような声が飛ぶ。

「彼らが学園に現れてもう一年は経っておる。志貴殿達に至っては十五年。その間、今回以外で被害があった事は？」

「う、それは・・・・・・」

「ないじゃろ？その被害の原因も押さえ込まれた今、何を恐れる？」

まあ未知の力に恐れるのが人の性である事には違いないがの。

「わしは魔法教会理事長である前に一教育者である。今回生徒に被害を出した拳闘士殿には厳しく対応しなくてはならんが、これから生徒に被害が出ない限りあの方々へ特にする事はない」

「やはり学園長は甘い！！私達だけでも排除すべ「いい加減黙れ」！！？」

「貴様ら、頭に乗るなよ？ガキ共」

っといかん。つい昔の口調で殺気を放ってしまった。わしもまだまだ未熟じゃの。

「では今日は解散じゃ」

そういえば拳闘士殿にも何か職を与えた方が良いかのぉ？

世界を越えた決戦（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「横浜に来たわ」

シャ「中華街よ」

椛「もぐもぐ、肉まん美味しいです」

ア「作者の好物の一つね」

椛「胡麻団子もお好きなそうです」

シャ「中華街ってついつい食べ過ぎちゃうのよね」

ア「美味しいからね」

椛「そういえば拳闘士さんの名前は募集ですか？」

ア「一応『禊（みそぎ）』ってのが作者の脳内にあるそうよ」

シャ「でも皆さんに聞いた方がいいものね」

椛「あと次回からコラボスタートだそうです」

ア「誰がいたかしら？」

シャ「もう一度教えて貰えば嬉しいわ」

椛「では中華街を満喫しましょう」

ア「自由行動にしましょう。私あっちね」

シャ「じゃあ私はこっち」

椛「では私は向こうに」

この後三人は再会に12時間の時間が掛かった。集合場所はちゃんと決めましょう。

烈風と風神（前書き）

まずはバルディッシュ様とのコラボです。
拳闘士の名前決まったよ～。

烈風と風神

要ｓｉｄｅ

「出来たーーーー！！」

いきなり居間に飛び込んで来たすずかが言った。また何か造ったのか？今度は全員知らないみたいだし。

「鏡（かがみ）の協力を得て造り上げました！！」

鏡ってのは異能の拳闘士の事。俺に瓜二つだから鏡らしい。

「今度は何だ？」

「並行世界から人を喚び出す装置！」

その座布団がか？相変わらず奇抜な物を造る。しかしな。

「・・・・・鏡、どう協力した？」

「儂が今まで世界移動しとった能力の応用じゃ。儂というかパラレルモンの能力じゃが」

パラレルモンて、一真、お前の専売特許が徐々に侵食されてるぞ。

「で、誰を喚ぶんだ」

「このサイコロで決めます！！なのはちゃん！！」

「これってすべらない話の」

「気にしないで」

まあ確かに気にしたらこの家では暮らしていけないよな。しかしどんな名前が書いてあるんだ？

「じゃあいくよ。えい」

コロコロと転がったサイコロが出した目に書いてあった名前は、ヒスイだった。

「ヒスイ・ハーツをご案内！」

座布団が光り輝く。この光景だけでも奇妙奇天烈なんだが、光が収まるとヒスイが座っていた。

「な、何が起こった？」

「大丈夫か？ヒスイ」

「あ、要か。久しぶりだな」

まさか成功するとは。しかしいきなり喚び出して良かったのか？・・・・まあ今更か。

ヒスイｓｉｄｅ

現状を理解するのに時間がかかったものの、とりあえず俺は要の世

界に喚び出されたのはわかった。

「だがあのそっくりさんは誰だ?」

「俺の有能劣化コピー」

それはどっちなんだ。自分より上なのけ?下なのか?それ以前にコピーってなんだ。

「俺の世界だ。気にするな」

「それで納得した自分がいる」

そうだな、ここは要の世界なんだ。なら仕方ないな。

「そうだ!やる事ないなら試合しないか?」

「ん~、そうだな。俺じゃなくてもいいか?」

「ああ、構わない」

要以外となると誰になるんだろうな。いい試合が出来たらいいんだが。

要が連れてきたのは一人の女の子。彼女が相手か。

「居候の文だ」

「射命丸文と言います」

「よろしくな」

「天狗だから手加減しなくていいぞ」

天狗・・・・・って何だ?よくわからんが、人ではないんだな。
シルフ相手に戦う感じでいいか。

「別荘でやるぞ」

「別荘?」

「これだ」

要が取り出したのは瓶。その中にはミニチュアの世界が広がっている。これが別荘なのか?

「入るぞ」

要がそう言うと光が俺達を包み、光が消えると俺達は広場にいた。

「ほー、凄いな」

「貰い物だがな。じゃあいつでも始めてくれ」

よし、やってやろうじゃないか。

「いくぞ」

「幻想郷最速の力をお見せしましょう」

文の背中に黒い翼が生えたかと思うと、文は飛び立った。速いな。

「だが撃ち落とす！！ゲイルアーク、セットアップ！！」

《セットアップ》

「針雀！！！」

三本の矢を撃つが文は速さでそれから逃れる。

「いい攻撃ですが、その程度では当たってあげられませんね」

ならもっと数を増やすのみ！

「墜ちろ！！槍鴎！！！」

両手のボウガンから三本づつ矢を放つ。片方は文自身を。もう片方は文が移動するであろう場所を狙って撃つ。

「あやや、残念でした」

「くっ、ふざけた速さだ」

確かに移動する場所は当たったが、文は更にスピードを上げて矢から逃れた。

「ではそろそろ。『幻想風靡』！！！」

「速っ！？」

文がカードを掲げた瞬間、さっきまでとは比べものにならない速さで動き始めた。動きは不規則で狙いが定まらず、文が動く度に弾が降ってくる。

「クソッ！！これじゃあ狙えない！！」

弾が多すぎる。避けるのに集中して撃つ事が出来ない。

「ゲイルアーク！！」

《ウインディシールド》

とりあえずこれで弾は防げるが、どうしたものか。弾がやむまで待つ、のは無理だな。シールドが耐え切れない。なら撃つしかないな。

「・・・・・・」

惑わされるな。速いからといって当たらない事などない。確実に一撃を当てる。

「・・・・・・そこ！！荒鷹！！！」

「きゃあ！！？」

俺の一撃はシールドを貫き、文の翼を穿った。シールドを失った少しの間に多少弾を受けたが戦闘に支障はない。

「あたた、まさか撃たれるとは」

「動きが鋭角すぎたんだよ。あのスピードじゃ鋭角に曲がるには一瞬止まる必要があるからな」

落ちてきた文に対して言った。もし文の動きが曲線だったら撃ち抜くことは出来なかっただろう。

「まだやるか？」

「試合ですしこのくらいにしましょう。耐久スペルカードも破られてしまいましたし」

「そうか」

速い奴に対する勉強にはなったかな。今度は最期までやりきりたいな。

「お疲れ。帰る準備出来てるぞ」

「おうそう、か？」

要が持ってきたのは大砲？もしかしてこれで帰れというのか？

「さあ入れ」

「いやいやいやいや！！」

「さあ入れ」

「無理無理無理無理！！」

「久遠さん！お願いします！！」

「フィッシュ♪」

「嫌だーーー！！！」

逃げようとしたが布に簀巻きにされて大砲に突っ込まれた。

「発射！！」

ドーン

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」

要ｓｉｄｅ

抵抗せずに大人しく入れば良かったのに。

「しかし負けたな」

「残念ですね。慰めて下さい、主にベッド「文？」な、なのはさん？」

「表に出ろ、なの♪」

「その歳で、なの♪はどうか、って痛い痛い！！翼を引っ張らないでーー！！」

文は何をやってんだか。というかなのはにもお仕置きはほどほどにするよう言わないとな。

「要～、お腹へった～」

「じゃあ飯にすっか」

烈風と風神（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん矢＞

ア「今回は石川県で～す」

シャ「何があるの？」

椛「その前にこの人を気にして下さい」

ヒ「うーん、ここは？」

ア「はい、こんにちは」

ヒ「あ、こんにちは」

シャ「ゲストのヒスイ・ハーツさんです」

ヒ「何でいきなり」

シャ「気にしないの」

椛「大砲お疲れ様です。ズワイガニどうぞ」

ヒ「ありがとう。ん、美味い」

シャ「ここの名産ってカニなのね」

ア「次回はライ様とのコラボだそうよ」

シャ「のんびり日常だったかしら？」

椛「胃に優しいから要さん歓喜ですね」

ヒ「今回は俺の体に悪かったけどな」

シャ「では次回もお楽しみに」

のんびりしたっていいじゃない（前書き）

チートだってのんびりしたいんです。異論は認める。

のんびりしたっていいじゃない

一真ｓｉｄｅ

最近のんびり出来てないな。充実した生活ではあるんだが、トラブルやらなんやらがあって休む時間が少ない気がする。

「異世界に行くか」

とはいえ何処に行ったものか。場所によっては逆に疲れるし、変な事件に巻き込まれるし。

《要の世界はどうだ？》

「あそこはトラブルの宝庫だろ」

《まあまあ、駄目なら他に飛べばいいだからよ》

ま、そうだな。行く前から決めるより行ってから決めればいいか。

「よっしゃ、飛ぶぞ」

《おう》

要ｓｉｄｅ

ピンポーン

おや、誰が来たかな？今日は特に予定はなかったはずだが、まあこっちの予定で人が来るはずないか。

「はいはい、どちら様ですか？」

「よう、元気か？」

「一真、どうした？」

「ちょっとのんびりしに」

のんびりって、こう言っちゃなんだが俺の世界はトラブルに定評があるぞ。特に異世界人が来た時。

「とりあえず茶でも出そう」

「お邪魔します」

紅茶かコーヒーか緑茶か。何でもいっか。いちいちそんなの気にする仲でもないし。

「おぉ、一真ではないか。久しぶりじゃの」

「ああ、久しぶり・・・・・・ってオい!!何故お前がいる!?」

「気にするでない。どうじゃ?再会を記念して一勝負」

「断る。俺はのんびりしに来たんだ」

「残念じゃのぉ」

そういや何気に初対面じゃないんだよな。そりゃ消滅したはずの奴が居たら驚くよな。俺も驚いたし。

「異能の拳闘士がどうしているんだ?」

「捕まえて家族になった。今は一条鏡って名前だ」

「意味わからん」

うん、俺もだ。だけどここは俺の世界だからという事にしてくれ。

「アリストテレス、茶」

「はい。一真様は如何なさいます?」

「それじゃコーヒーで」

「了解しました。少々お待ちを」

「「・・・・・はぁ」」

いいな、こうのんびりと時間が過ぎていくのは。争いもなく、特に話す事がある訳でもなく、ただただ時間が流れるだけ。

「にしてもここ何の世界だ？」

「ネギまだとさ」

「へー」

ピンポーン

あ、また誰か来た。出るの面倒だな。

「アリストテレス、出て」

「了解しました」

「働けよ」

別にいいだろ、俺が出ようが出まいがたいした問題じゃない。

「主、木乃香様とネギ様です」

「兄ちゃん、こんちわ」

「どうも、一条先生」

「どうした?休日に珍しい」

「実は・・・・・・」

木乃香の話では今度明日菜ちゃんの誕生日らしい。だから誕生日プレゼントを買うのに俺もついてきて欲しいとの事らしい。

「一真も来るか?」

「暇だしいいぞ」

「そういや木乃香、刹那はどうした?」

「天魔さんと修行中や」

ふーん、それならしょうがないな。四人で買いに行くか。

「アリストテレス、留守番頼む」

「了解しました」

「そういえばお前の奥さん達はどうした?」

「夫を置いて遊びだよ。夫婦がいつでも一緒なんてのは１０年までだ」

「寧ろ１０年もったんだな」

一真ｓｉｄｅ

女の子の誕生日プレゼントか。あいつらへのプレゼントの参考になるかな。

「やっぱりプレゼントはその子が好きなものがいいよな。明日菜って子は何が好きなんだ？」

「「「うーん、おじさん？」」」

なんだその特殊性癖は。しかも満場一致だからおじさん好きは確実じゃないか。

「流石に誕生日プレゼントにそれはないだろ」

「「「喜ぶと思うのに」」」

さて、街に着いた訳だが。何処で何を買えばいいんだろうか。

「服とかどうでしょう？」

「趣味がわからん」

「バッグも同じ事が言えるしな」

「それに高価なんは気を使わせてまうしな」

こうやって考えてみると難しいものだな。無難に小物とかはどうだろうな。女の子だから可愛いらしいのがいいのかな。でもオジコンな女の子だし。

「難しいな」

「やはり女性へのプレゼントはいつになってもよくわからん」

「明日菜は特に特殊なタイプやからね。普段一緒におるうちでも難しいわ」

「一真さんは普段プレゼントしないのですか？」

「するにはするんだが、世間一般では高いものだからな」

まあ自家製というか自分の鉱山で取ったものだからタダなんだけどな。

「ちょっと休憩するか。目的もなく歩くのも疲れた」

「「賛成」」

要の提案で喫茶店へ行く事に決定した。しかしそう簡単にはいかなかったようだ。

「一条先生!!見つけたアル!!」

「なんだ、中国二号か」

「古アル!!」

なんだ、知り合いか?というか先生って言ってたから生徒か。

「勝負するヨ!!」

「知り合いいるからまたな」

「また・・・・・絶対アル!!」

おいおい、そんな事言っていいのかよ。要が負ける事なんてないだろうけど、面倒だろ。

「じゃあ行こうぜ」

「あんな約束していいのか?」

「大人はズルイんだぜ」

つまり放棄って事かよ。あの子も可哀相に。

「そういや兄ちゃんと一真さんてどんな関係なん？」

喫茶店でゆったりしてると木乃香ちゃんがそう聞いてきた。どんな関係か。

「親友かな」

「そうだな」

思い出してみると懐かしい。初めては、そう、ディアボロモンの時だったな。

「こいつはいきなり降ってくるからな」

「お前のとこのせいだろ」

「まあそうだが、そうそう、アメリカ旅行覚えてるか？」

「懐かしいな。あんなハプニングがあるなんてな」

「お前が女の子をオトした事？」

「違う！！」

「お二人共仲が良いんですね」

「「ああ」」

時には戦ったりもしたが、基本的に力を合わせて戦うって事が多いからな。自然と息も合ってくる。そう考えるとやっぱり親友なのかな。

「じゃあそろそろ行こうか」

「そやね」

のんびりしたいのはしたいが、ちゃんとプレゼントを買わないとな。

確実な目当てがないので大型デパートに行く事になった。

「「「うーん」」」

「お前ら、おじさん雑誌の前で悩むな」

こいつら脳内に完全にオジコンがインプットされてやがる。

「もっとあるだろ、女の子らしいの」

「なら全員一個探そうぜ。それで集合」

ああ、悪くないな。そっちの方が効率も良さそうだし。

「では、解散？」

何故疑問系なんだよ。

３０分後、みんながそれぞれプレゼントを持ってきた。

「俺はこれ」

要が持ってきたのは『ＤＶＤで見る世界の戦場』。

「「「ないわ～」」」

「ええ～」

誰がどう見たってお前の趣味だろ。女子中学生にプレゼントするなや。

「うちはこれ」

木乃香ちゃんが持ってきたのは『日本の駅弁』という本。

「明日菜って子は旅行好きなのか？」

「魅力的やったからつい」

つまり木乃香ちゃんも自分が欲しいものという訳か。

「僕はこれです」

ネギくんが持ってきたのは『大和撫子になるには』という本。何故だろう、非常にいけない気がする。

「何故？」

「明日菜さんの為になるかと」

「やめとけ」

「怒らせると思うで」

成る程、二人の会話を聞く限りその子は大和撫子とは程遠い存在のようだな。じゃあ怒らせるに違いない。

「一真はなんだよ」

「俺はこれ」

俺が持ってきたのは無難に『オルゴール』だ。

「成る程な」

「その手があったか」

「一真さんは凄いですね」

え？何？そんな褒められるような事か？

「さて、曲は」

パタッ

パタッ

『西～に～、カモメが』

「演歌じゃねぇか！！」

「お前らがおじさんおじさんやってるからだろ！！」

結局あの後、最近流行りのアーティストの曲に変更してオルゴールを購入した。

「今日は楽しかった」

「ああ、俺もだ」

木乃香ちゃんとネギくんには先に帰ってもらい、俺は要と歩いている。

「こういう日常はいいな」

「俺達には稀な事だな。願わくば、こんな日常が続いて欲しいな」

「だけど続かないんだよな」

「俺の場合日常でなくとも胃が痛まなければいい」

「流石は要」

「何が流石だ」

どう考えても胃が痛くなければいいなんてお前だけだろ。他のチートで胃痛に悩む奴なんてお前以外いないだろ。

「さて、そろそろ帰るわ」

「気をつけろよ。いや、お前に限ってそれはないか」

「じゃな」

「また来いよ」

のんびりしたっていいじゃない（後書き）

〈続・アリシャの部屋＋わん〉

ア「ヒャッハー！！長崎だ！！」

シャ「今回の食べ物は？」

椛「長崎ちゃんぽんです」

ア「野菜もたっぷりで美味しいわね」

シャ「長崎に来たなら是非食べておきたいわね」

ア「作者は行ったことないけどね」

椛「というか学生で全国を渡り歩くなんてそうそうありませんよ」

ア「大学は春休みが長いんだからその間に行けばいいのに」

シャ「次回は海人様とのコラボね」

椛「飛翔さんとユーノさんの修行でしたっけ？」

ア「どうなることやら。では次回もお楽しみに」

修行も度が過ぎれば・・・・・・（前書き）

ポリゴン５Ｖ（攻撃０）が出てはしゃいでしまった。

修行も度が過ぎれば・・・・・・

飛翔ｓｉｄｅ

「ユーノさん、修行しませんか？」

俺はふとそんな事を考えた。確かに今のままでも十分戦える。でも更に強くなりたい。

「いいよ。何処でやる？」

「並行世界なんて良いんじゃないですか？」

「じゃあそうしようか」

何処に行こうかな。あんまり迷惑が掛からないような、尚且つ快く協力してくれそうな世界。一真や吼太の世界も悪くないんだがここはやはり。

「要かな」

あそこほど迷惑の掛からない世界はあるまい。初めて家族で行った時もこっちが逆に驚かされたぐらいだしな。

「決まりましたんで飛びましょうか」

「わかったよ」

要ｓｉｄｅ

「そんで、俺の所で修行したいと」

うちに突然飛翔とユーノが来たと思ったら修行したいと言ってきた。

「頼めるか？」

「友人の頼みを断る理由がないな」

「ありがとう」

しかしユーノまでライダーになれるとはな。まあそれは置いといて、どんな修行をしてやるか。

「よし、決まった」

「どんな修行なんだ？」

「とりあえず服を変えようか」

俺が持ってきたのはジャージ。これの方が動きやすいし、細工もしてあるしな。

「普通のジャージだな」

「俺はライダーではない。なら生身を鍛えてやろうと思ってな」

「飛翔からは強いって聞いてましたが、ライダーじゃないんですね」

「ああ、バケモノを内包してるからな。余計なのはいらないんだ」

「バケモノ？」

「気にするな。さっさと着替えろよ。それと裸足になっとけ」

「「裸足？」」

ふふふ、俺式修行を味わってもらおう。さて、あれは何処に置いたかな。

ユーノｓｉｄｅ

今僕らはよくわからない空間にいる。何やら修練の門というのを要風味にしたとかなんとか。

「じゃあ、スイッチオン」

「うおっ!?」

「重っ!?」

突然体が重くなる。あの様子だと飛翔も同じだろう。

「そのジャージはな。着ると重力が二倍になるように改造してある」

「要は、大丈夫なのかよ」

「俺慣れてるから」

でもこれくらいならしばらくすれば慣れそうだ。これから一体どんな修行をするんだろう。

「まず山登りだ」

山登りね。まあそれくらいならいい運動にはなるかな。ウォーミングアップには激しいけど。

「さあこの山を駆け上がる「「ちょっと待て!!」」どうした?」

「どうした?じゃない!!」

「これが山?ふざけるな!!」

目の前にそびえ立つのは確かに山だ。しかしただの山ではない。『

針山』だ。

「お前らな。世の中には車に轢かれても大丈夫な人とかいるんだぞ」

「そんなのはいい。重力二倍の状態でどう登るんだよ」

「こうやって」

そう言うと要は針の上に飛び乗った。しかし刺さる様子はない。

「足の裏に気やら魔力やらを集めれば余裕だ」

何それ、チートってみんなこういうふうなの？みんなこんな修行してるの？

「もうちょっとマイルドなのはないのか？」

「なら崖登りにする？」

「危険物は？」

「ない。ただの高い崖だ」

ほっ、それなら落ちない限りなんとかなりそうだ。まあ高いってのがちょっと気になるけど。

飛翔ｓｉｄｅ

間違えたかもしれない。要に頼むのは間違いだったかもしれない。
俺らの目の前には確かに崖がある。

「高すぎね？」

「うん」

「まあ万はあるからな」

ハハハ、万って、これを登れっていうのか？お前は鬼か何かか？

「さあ行くぞ。実は休憩所が１０００ｍごとに設けてある。先に到着した奴が後の奴が着いてから１０分休憩。後の奴はしがみついてろ」

何だと？つまり後の奴は休憩が出来ないという事か。更に早く着くだけ休憩時間は長くなる。

「ちなみに俺も参加するから」

「「ちょっと待て！！」」

こっちが圧倒的に不利じゃないか！！どうやって勝てっていうんだよ！！

「頑張れ」

そう言い残し、要は崖を登って、いや、駆け上がっていった。俺も早くしないと。

「じゃ、ユーノさん。俺も行きます！！」

「えっ！？」

俺も要を追って崖を駆け上がった。そう時間は経ってない。まだ間に合うはず。しかし重力二倍が地味に効いてるな。

「遅いぞ～」

「ちっ！！」

漸く見つけたが、あいつ俺が追いつける速度で走ってやがる。舐めやがって。

「抜かす！！」

「ハハハ、飛ばしすぎはいかんぞ」

ユーノｓｉｄｅ

「ぜぇ、ぜぇ」

崖登りがここまでキツイなんて。やっぱりこのジャージのせいだよ。

「おーい、遅いぞ」

「はぁ、はぁ、やっと」

やっと１０００ｍに到達したのか。要は崖に造られた穴でのんびりしており、飛翔はその横で崖に張り付いていた。

「じゃあ行くぞ」

「ええーーー！！」

少しは僕にも休憩を。

「ユーノが次１０分早く着いたらちょっと休ませてやる」

「隙有り！！」

「飛翔！てめぇ！！」

いや、有り難いんだけど。二人共速過ぎるよ。生身で崖を駆け上がるっておかしいでしょ。

「終わるのかな、これ」

「はぁ、はぁ、つ、着いた」

「お疲れ」

「ご苦労様です」

この崖登るのに一体どれだけ時間が掛かったんだろ。でも日が暮れてないんだよね。

「ほれ、クールダウンクールダウン」

「うひゃっ！？」

いきなり冷たいスプレーをかけられて驚いたけど、確かに筋肉はちゃんと冷やさないとね。

「次はどうする？まだ地獄巡り、じゃなくて修行は残ってるぞ」

「「言い切った！！地獄巡りって言い切った！！」」

「気にするな」

普通気にするよ。でもそんな修行をやってたらいつか殺される。

「そ、そうだ！！もう少し実戦形式なのはないの？」

「うーん、もう少し体を鍛えてやりたいところだが、それを希望するならしょうがない」

よかった。これでもうさっきのような苦行はないはず。でも思わず実戦形式って言っちゃったけどどうなるんだろ。

「ユーノさん、なんて事を」

「それはどういう事？」

「要の顔を見て下さい」

そこにはイイ笑顔で何かを考えている要がいた。

「あいつ、いやあれもいいな。待てよ、あの選択肢もあるか」

飛翔ｓｉｄｅ

実戦形式、か。確かにそうだ。こんな化け物と戦うのは実戦以外有り得ん。

「グオォォォォ！！！」

「ラ、ライオン？」

「ユーノさん、幻想種ですよ」

「強い？」

「多分、きっと、絶対」

でもなんだこいつは。圧倒的なまでの威圧感。竜種に匹敵するんじゃないか？

「そいつはネメアの獅子だ」

「何だと！？」

ネメアの獅子。ヘラクレスの十二の試練の一つである魔獣。その毛皮はあらゆる武具を防ぎ、ヘラクレスは三日間獅子の首を締め上げ漸く倒したと聞く。

「なんでそんなのがいる！！」

「どっかの世界でちっさいこいつを見つけてな。飼ってたらこうなった」

「意味わからん」

「さあしっかり逃げろよ。行け！！ネメア！！」

「グオォォォォ！！！」

「「ギャアァァァァ！！！」」

い、生き延びた。約半日、あの魔獣から逃げ切った。

「こ、これで、強く、なれたのかな？」

「さ、さあ、どう、でしょう」

「よくやったな」

「要、俺ら、強くなったのか？」

一番疑問に思っていた事を俺は聞いた。こんな拷問みたいな事で本当に強くなれたのか？

「崖登りで基礎体力は付いたろうし、ネメアから逃げて危機察知能力と脚力は付いたな。ただ」

「「ただ？」」

「あんな拷問メニューを真面目にこなすお前らが面白かったな、と思って」

「「・・・・・・貴様殺す！！！変身！！！」」

「どこからでも来いや！！ＯＲＴ部分解放！！！」

結局最後にやった要との大喧嘩が一番の修行になった気がした。

修行も度が過ぎれば・・・・・・（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は宮城県に到着」

シャ「ここの名物は？」

椛「仙台牛タンです」

ア「美味しそう」

シャ「早く食べましょう」

椛「タンはいいですね。焼くも良し、シチューも良し、鮮度が良ければ生もいけます」

ア「私はやっぱり王道タン塩かな」

シャ「シチューも美味しそうね」

椛「デザートはずんだ餅ですかね」

ア「そういえば今回は修行、よね？」

シャ「あれが修行に見えるなら眼科に行きましょう」

椛「次回はｋｅｉ様とのコラボです」

ア「あと５０万企画は座談会でほぼ決まりね」

シャ「見たいなら過去話も書いても大丈夫ですって」

椛「その際には『誰』の過去話を見たいかを書いて下さい。あるなら『どんな』のを見たいかも書いて下さい」

ア「５人以上の応募があれば書きます」

シャ「では次回も見て下さい」

引っ掻き回す者（前書き）

ようやく書けたぜ。

引っ掻き回す者

遥ｓｉｄｅ

「暇～」

刺激がないと暇でしょうがない。やる事がない訳じゃない。八神家の相手をしたり、飯を作ったり、しかし刺激がない。

「・・・・・・飛ぶか」

一日くらいいいだろ。さて、楽しそうな世界といえば、やっぱり要かな。

「ミヤ、要の所行くか？」

「うん！久遠に会いたい！！」

「じゃあ行くぞ。傾国の剣よ！！」

「あれ？」

要の世界に来たはずなのに真っ白。これは一体どういう事だ？

「あ、来た」

「お、要んとこの最高神。要はどうした？」

「はいこれ」

渡されたのは一枚の紙。なになに、『ネギまに引っ越しました』だと？だからいないのか。

「要くん死んだからね。新しくネギま世界に飛んでもらったんだ」

「じゃあなんであんたは此処に？」

「座標を要くんの世界にして飛んでくる人への対応」

ああ成る程。要そのものを座標にすれば問題ないが、世界を座標にしたら駄目だもんな。

「遥、この人何？」

「神だよ」

「初めましてミヤちゃん。ゼウスと言います。よろしくね」

「うん」

さて、それじゃあ要を座標にして飛ぶとするかな。

「いってらっしゃい」

「「行ってきます」」

さあ着いたぞ。此処が要の家だな。立派な三階建てだなおい。

ピンポーン

「はーい、あ、遥くん」

「久しぶり、なのは」

「上がってってよ」

「もとよりそのつもりだ」

「ずーずーしーよ」

ミヤ、この世界は図々しくても許されるんだぞ。これからどんな事して遊ぼうかな。

「ミヤだーー！！」

「久遠だーー！！」

「二人共遊んできていいけど、遅くなっちゃ駄目だよ」

「「はーい」」

ほのぼのするなぁ。久遠も可愛いがやはりミヤが一番可愛い。

「そういえば要くんいないんだ」

「そうなのか？」

要を座標にしたのに要がいないとはこれいかに。いや待てよ、これはチャンスだ。今のうちに要で遊ぶ準備が出来る。

「ちょっといいか？」

「ん？」

「要で遊ぼう」

「いいよ」

要、奥さんに裏切られたぞ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ハクション！！」

「大丈夫カ？一条せんせ」

「問題ない、中国三号」

「何故三号ネ。二号が古で、一号が見当たらないヨ」

「そりゃ一号は彼女だ。ま、お前に言ってもしょうがない。飲茶セット一つ」

「了解アル」

「元気かな、中国。いや美鈴」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さあ会議を始める」

「「「「「「わーー」」」」」」

とりあえず要の奥さん五人＋何故かいた射命丸文に集まってもらい、要でどう遊ぶかを決定したいと思う。

「何かある人」

「はい！！」

「はい、スバル」

「要さんて楔さんと分かれるじゃないですか。その状態で性転換薬飲んだらどうなるんでしょう？」

そういえばそうだな。あいつは分かれる事が出来るんだったな。その状態での性転換か。

「楔さんが二人になるのでは？」

「文ちゃん、それはないと思うの」

それはそれで面白いんだが、恐ろしくもあるな。

「はい」

「はい、フェイト」

「要の生徒で千雨って子がいるの」

「惚れてるのか？」

「十中八九。要本人もやっちまったって」

あいつも何気にフラグ建ててるじゃないか。というかフラグ探知能力無しで気付けるのか。俺は恋愛方面は駄目なのに。

「要に惚れちゃったら遅かれ早かれこの世界に入ると思う。だから今のうちに教えようと思う」

「でもよ、要はやめろって言ってたろ」

「ヴィータちゃん、対策は早い方がいいよ」

うんうん、すずかの言う通りだ。それに原作的にも入るのは確定なんだから、それが何ヶ月か早いだけだ。

「じゃあそれは要が性転換薬飲んで混乱してるうちにやろう」

「ただいま。遥いるか？」

おっと、帰ってきやがったか。計画は二つだな。

「おう！邪魔してるぜ」

（すずか、任せた）

（うん）

要ｓｉｄｅ

家に帰ってくると、外で久遠がミヤと遊んでいた。遥の奴が来たか。

「久しぶり、ミヤ」

「要だ、久しぶり」

「おかえり」

「遥は、家かな？」

「うん」

やっぱりか。まああいつがミヤを一人で送るなんて事はないか。

「ただいま。遥いるか？」

「おう！邪魔してるぜ」

そう言って遥が出て来た。

「よく来た、と言っておこう。茶でも出そう」

「はい」

「お、準備いいな。すずか」

元々準備していたのかというくらい早いな。まあ早くて悪い事はない。

「そうだ要。久しぶりに楔にも会いたいんだが」

「構わんぞ」

俺はロザリオを付けて楔と分かれる。しかし何で楔と会いたいんだ？

「ヤッホー、何企んでるの？」

「別に」

ああ、企むという選択肢があったか。やるとしても楔関係だろ。俺に迷惑がかからないならそれでいい。

ボフン

茶を飲んだ瞬間に俺は煙に包まれた。

「よっしゃーー！！」

「なんだ要なの」

「楔を出した状態で性転換したらどうなるかと思って」

この、そんな下らないこと考えてたのか。というか茶を出したすずか、いや、もしかしたらうちの全員がこの計画に加担していたかもしれんな。

「ったく、クソが。んな下らねえ事やるんじゃねえ」

『・・・・・・誰?』

出てきたみんながそんな事を言った。なんか口調が乱暴になったな、俺。

「なっつかし～」

楔だけが何故かそんな事を言う。懐かしい?一体どんな姿になったんだ?

「はい、鏡」

「・・・・・・懐かしい」

なのはに鏡を渡され、自分の顔を見た瞬間つい呟いてしまった。鏡に見えるのは黒髪短髪の少々柄の悪そうな青年。

「前世、いや前々世と言った方がいいか?とにかくこの姿は俺の最初の姿だ」

「へー、それが転生前か」

「なんかちょっと怖いですね」

「でもワイルドでこっちも」

まあ不良をやってた事もあったしな。多少は怖さがあるかもしれん

が、所詮ただの人間だ。

「全く、懐かしいったらありゃしねえな」

「そういうもんかね」

ボフン

遥が自分に出された茶を飲んだ瞬間、煙に包まれた。

「成功！！」

「すずか！裏切ったな！！」

あーあ、はるかちゃんになっちまったな。自業自得だ。

そんな騒ぎの中、ヴィータがどこか行くのに気付く者はいなかった。

千雨ｓｉｄｅ

よし、更新完了。うーん、やる事無くなったな。適当にネットサーフィンでもしてるかな。

ピンポーン

誰だ?誰か訪ねて来るなんて今までほとんど、あっ、宅配便かな。

「はいはい」

「よっ」

「・・・・・お嬢ちゃん、何処の子かな?」

玄関を開けるといたのはガキ一人。全く、子供先生のおかげでガキには飽き飽きしてんのによ。

「長谷川千雨だな?」

「そうだけど」

「要が好きか?」

ブッ!!このガキいきなり何言ってやがる!!というか何故それを。

「何言ってるのか「あたしは真面目に聞いてるんだ」・・・・・・」

このガキ、目が本気だ。今までこんな目をしてる奴は何人見たか。

こいつの前じゃ嘘も無意味だな。

「ああ好きだ。こんな感情は初めてだったが間違いなく好きだ」

「なら要の全てを受け入れる覚悟はあるか?」

「おい、お前一条先生の何を知ってる」

「ほぼ全て。あたしは要を最も知る一人だ」

最も知る、だと?あの朝倉でも一条先生の日常は、特に家庭は知ってないってのに。

「で、覚悟は?」

・・・・・・このまま着いていけば私の日常は間違いなく遠退く。でもそれでいいのか?確かに日常は大切だ。でも・・・・・・

「・・・・・・その程度だったか。悪いな邪魔し「待てよ」ん?」

「惚れた男の為だ。一肌でも二肌でも脱いでやる」

「はっ、いい顔するじゃねえか。よし、行くぜ」

ガキがそう言うと私達の足元によくわかんない模様が現れて、私達は光に包まれた。目を開けると、そこは家の前だった。

「おい、今の」

「魔法だ」

ハハハ、魔法かよ。本当に日常から遠ざかっちまったな。

「ただいま」

「お邪魔します」

私達が家に入って一番最初に、そして激しく反応したのは一条先生だった。

「ヴィータ、何故連れて来た」

「みんなの意思だよ。どうせ巻き込まれるなら巻き込んだ方がいい」

「そんな事させるかよ」

「いやいや、いくら何でも無理だろ」

「遥、お前か」

「違う。完全にそっちの意思」

なんか私来ちゃいけなかった感じが・・・・・・

「・・・・・連れて来たからにはしょうがない。全部教えてやる」

「じゃ、俺はお邪魔するぜ」

そう言って女（？）は出ていった。私、どうなるんだろ？

遥ｓｉｄｅ

「ミヤ、遊びに行くぞ。久遠、ミヤ連れてくぞ」

「うん、行こ」

「いいよ」

さて、とりあえずぶらぶら街を歩くか。流石に麻帆良は広いからな。いろいろ面白いものがありそうだ。

「む！」

あのベンチに座って猫を撫でてる奴、志貴じゃないか？眼に包帯巻いてるから殺人貴モードか？まあそれはいいか。どうやって声掛けるかな。

「おーい○野、野球しようぜ！」

「中○～、って俺はカツ○じゃない！！」

まさかのノリツッコミ、この志貴、出来る！！

「えっと、誰？」

「要の知り合い。五十嵐遥だ」

「五十嵐ミヤです」

「ああ成る程。俺は志貴・Ｂ（ブリュンスタッド）・マクダウェル」

納得された。流石は要。この世界でも既に有名人だな。つーかアルクェイドもいてエヴァンジェリンの家族か。

「どうせならうちの店来る？」

「おう」

志貴の店に入ると予想外の人物がいた。アルクェイドやエヴァンジェリンは予想出来てたが、あんたまでいるのか。

「お父さん！！」

「お父さん呼ぶな！！誰だ貴様！！」

「要のダチの五十嵐遥。こっちはミヤ。よろしくな、クラトスお父さん」

「だからお父さんと呼ぶな！！」

いいじゃないか。お父さんってみんな呼んでるぞ・・・・・・多分。

「あいつはまともな知り合いがいないのか」

「結構いると思うよ」

「遥、見て見て」

「ん？・・・・・・ハァ！？」

ミヤが店のどっかから持ってきたのは鉄球状態のフラガラック。なんてもん置いてんだこの店。

「それ欲しいのかい？」

「うーん、あんまり」

「ハハハ、そうかい。そうだな、何か欲しいのがあればプレゼントしよう」

「本当！やった！！」

「志貴のロリコン」

「な！？アルクェイド！！」

「兄様はロリコン、なら私にも」

「エヴァ！！」

遊ばれてるな志貴。だがミヤに手を出したら殺すがな。

「これ欲しい」

「じゃああげるよ」

あれ？確かあれって。

「ほう、ラビットシンボルか」

クラトスがそう言う。やっぱりそうか。まあ変なのよりよっぽどマシかな。

「じゃ、そろそろ行くわ」

「じゃあね」

そろそろ終わってるかな。あ、そうだ。どうせ勘違いしてるだろうから言っとこ。

「俺男だから」

「「「「・・・・・・え？」」」」

「終わった？」

「ああ。結局すずかの弟子になるとさ」

すずかの弟子って、それ大丈夫なのか？いろいろと常識的に問題が発生しそうなんだが。分野的には相性最高なんだろうけどさ。

「で、まだ何かやるのか？」

「もうやる事ないから帰るわ」

「そうか、じゃあまたな。今度はあんまり遊ぶなよ？」

「だが断る。じゃな」

俺は傾国の剣で世界を飛んだ。

引っ掻き回す者（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は富山」

シャ「何があるの？椛ちゃん」

椛「富山はブリ大根です。そろそろ寒ブリの時期ですね」

ア「えっ！？ブリ大根で全国区じゃなかったの！？」

椛「元々は富山の名物、というか郷土料理です。他にはけんちん汁がありますね」

シャ「意外と私達も食べてるのね」

ア「そういえば今回は転生前要の登場ね」

シャ「地味だったけど」

椛「ああ、５０万記念の過去話は無しになりそうです」

ア「二人だったからね」

シャ「需要がないならしょうがないわね」

椛「次回は秋代様とのコラボです」

ア「胃痛だ胃痛だヤッホーイ！！」

シャ「では次回もお楽しみに」

胃痛じゃ済まない（前書き）

あれだ、これこそ要という人は是非感想を書いてくれ。

胃痛じゃ済まない

貴史ｓｉｄｅ

『あーテステス』

突然頭にマイクテストをする声が響いた。この声は要んとこの神だな。一体何のつもりだ？

『貴史くん、カスミちゃん、薫ちゃん、聞こえるかな？』

あの二人にも聞こえてるのか。

『ああ』

『何だいきなり』

『どしたん？』

『重要なお知らせ』

重要なお知らせだ？俺らに関係ある事だろうな。あろうがなかろうがくだらなかったら叩く。

『最近要くんの胃痛が収まっています』

『『『なん・・・・・・・・・・だと・・・・・・・・・・・・？』』』

なんという事だ。要のシンボルである胃痛が収まっているなんて。
こんな事はあってはいけない。今すぐ元に戻さないと。

『カスミ！薫！やるぞ！！』

『ああ！私達がやらずにどうする！！』

『やったるでー！！』

『あんまり要くん以外は傷つけないでね。あと志貴くんとアルクェイドちゃんにクラトス、それと文ちゃんもいるから』

ほほう、なかなか面白い人材が揃ってるじゃないか。そいつらも使わせてもらうか。

『では頑張ってくれたまへ。三人共別の場所に飛ばすからね』

そうして俺らは要の世界に飛ばされた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ゾクッ

「何だ今の寒気は」

ズキッ

「ぬおっ!?なんでもないのに胃が少し痛い!?」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あれ?ここは麻帆良だろ?なんでこの世界に要がいるんだ?

「とりあえず要を捜すか」

でもその前に少し腹が減ったな。お、ちょうどいい所に超包子があるじゃないか。ちょっと食ってこ。

「いらっしゃいませ。こちらにどうぞ」

どれにしようかな。とりあえず・・・・・・

「一条要って知ってる?」

「はい、超店長の担任さんですので」

ラッキー。やっぱり教師やってたんだな。これであれが使える。

「俺要の親友なんだよ」

「そうなんですか」

「おう、それでここ奢ってくれるって言ったから、これとこれとこれをくれ。あとここまでをお土産に。請求先は一条要ね。貴史が買ったといえば払ってくれる、はず」

「かしこまりました」

これでタダ飯と土産ゲット。要の知名度流石だぜ。

カスミｓｉｄｅ

何故麻帆良だ？ともかくここに要がいるんだな。しかし麻帆良という事はエヴァもいるはず。

「味見くらい、いいよな」

せっかく並行世界なんだから食べないと損だ。うん、食べよう。

「何処にいるかな～」

魔力を探知してみるか。おや？封印されてる訳じゃなさそうだな。これなら捜しやすい。

「ここか」

『千年城』か。間違いなく志貴やアルクェイドがいるな。ふふふ、これは面白くなりそうだ。

カランカラン

「いらっしゃいませ」

ほー、骨董屋と書いてあったが、並の骨董品のレベルではないな。中には宝具クラスや宝具そのものもあるじゃないか。

「いい品揃えだな」

「ありがとうございます」

店員姿のエヴァが言う。敬語でこういう姿のエヴァもなかなか。

「いやー、本当にいい品揃えだ。特に・・・・・・んっ！」

「んぶっ！？」

「「はっ？」」

志貴やアルクェイド、茶々丸もいる中で、私はエヴァにキスした。
もちろん深くだ。

「ん、くちゅ、ちゅぱ・・・れろ、ぷはっ」

「・・・・・・」

エヴァは放心状態だ。ごちそうさま。志貴達も反応出来ていないな。

「ふふふ、私は要の友人のカスミというものだ。あいつに誘われて来たんだ。文句はあいつに言え。あいつが自由にやっていいと言ったんだ」

そう言って店を出ると、店から「一条ぶち殺す!!!兄様!!!姉様!!!茶々丸!!!手伝え!!!」という声が響いた。頑張れ、要。嘘に騙されるエヴァが悪いんだ。

薫ｓｉｄｅ

どうしようかな。とりあえずおじいちゃんに会ってみよ。

「おじいちゃ～ん」

「む、誰じゃ？」

「ありゃ？一瞬やな」

「ホッホッホ、木乃香はお主ほど洗練された魔力は持っておらんよ。で、誰かの？わしの予想では師匠、一条要の知り合いと見たが」

「当たり。薫言うんやけど、なんやつまらんなぁ」

もうちょっと面白い反応を期待してたんに。しかし要の弟子だったんやな。

「学園長先生、失礼します。むっ、近衛？いや、違うか」

「要の知り合いの薫や。よろしゅう」

「クラトスだ」

この人がクラトスやな。どう胃痛に持っていくとしようか。簡単な嘘やと見破られそうやし。

『薫ちゃん、今はクラトスは地味キャラだよ』

『ナイスや！！』

「なあなあ、要が言うとったんやけど」

「なんだ？」

「クラトス地味で派手さがないくせによくレギュラーやれるよな」

「・・・・・学園長先生、少々用事が出来ました」

おー、凄い怒気や。ちょっとびっくりしてもうた。これはやり過ぎたかな？

「あまり遊ばないで欲しいんじゃが」

「だが断る。ほな」

次は誰をけしかけようかな～。

貴史ｓｉｄｅ

何故か店を出たら古菲に喧嘩吹っ掛けられた。

「一条先生の友人なら強いはずアル！！」

「強いぞ」

「なら勝負アル！！」

面倒だな。ちゃっちゃと終わらせて要を胃じめるか。

「行くヨ！！」

「ほら」

チッ

「あれ？」

ドサッ

俺は古菲の顎にパンチを掠らせ、脳震盪を起こしてやった。気絶しないのは流石と言ったところか。

「うぅ、負けたアル」

「いつも要とやってんのか？」

「一条先生は戦ってくれないヨ」

ほほう、これは使えるな。

「そうだろな！！要の奴、この学園には雑魚しかいない。わざわざ戦ってやる義理はねぇ。って言ってたからな！！」

『何だと！！？』

俺が大声でそんな事を言うと周りにいた古菲の親衛隊っぽいのが怒った。それだけじゃないな。近くを通り掛かった魔法先生や魔法生徒も反応したか。

『一条要倒すべし!!』

全員走っていっちまったな。ドンマイ、要。

カスミｓｉｄｅ

街をぶらぶらしていると薫と合流したので、お互いの戦果を話し合った。

「えぐいな、薫」

「カスミこそ、羨ましい」

ん？あそこを歩いているのは木乃香に刹那に、長谷川千雨か？それに射命丸文とは、珍しい組み合わせだな。

『あの三人は一条家の弟子だよ。文ちゃんは居候。全員要くんが好

きだよ』

ここで神情報か。やっぱりフラグを立ててるな。となると、あんな手はどうだろう。

「薫、耳貸して」

「ほい、ふむふむ、うわー酷っ」

そんな事言う割に顔は笑顔だぞ。まあ気持ちは非常にわかるが。

「「ではスタート」」

薫ｓｉｄｅ

まさかあんな事を思い付くなんて、カスミは本当に悪いなぁ。

「ちょっとええか？」

「うわっ！うちがおる！！」

「えっ？えっ！？」

「はぁ、今度は何だよ」

「ドッペルゲンガー、いい記事になりそうです」

「私達は単なる要の知り合いだ」

「「「「なーんだ」」」」

うん、当然の反応やな。要の周りはおかしいがデフォやし。

「お前達に要の悪い癖を教えてやる」

「要ってなぁ、異世界に行く度に女を作ってはヤッて、飽きたらポイッてしてるんやで」

「「「「!?」」」」

「私達も口説かれたしな」

「もうしつこくてしつこくて」

「うち、やる事あったんや」

「ちょっと素振りしよかなぁ」

「新しいメカの調子を確かめないとな」

「弾幕最近張ってませんね。少し練習して感覚を取り戻さないと」

うわ、全員瞳からハイライトが消えたで。これはちょっとやり過ぎたんちゃうか?さっきのクラトスの比やないで。

「薫、貴史捜そう」

「うん」

流石に早くあの子達から離れたいわ。

要ｓｉｄｅ

うーむ、何やら嫌な予感しかしないな。

『一条要！！貴様を殺す！！』

「はっ？」

いきなり麻帆良の格闘技系の部員共が向かって来た。

「我らが古菲さんを雑魚扱いとは！！」

「死ね死ね死ね死ねぃ！！」

「な、何の事だ！？」

確かに古菲はそこまで強くないが、俺は挑発以外で雑魚とは言わないし。そもそも古菲に雑魚言う時がない。

「とにかく逃げる！えいっ！！」

ボフン

「わー！！煙幕だ！！」

「えぇい！逃がすな！！」

とりあえず森に逃げるとしよう。一体何が起こっている？

ふぅ、とりあえずこれで一安心・・・・・とはいかないようだな。

「一条要！！」

「ここでお前を倒す！！」

今度は魔法先生に生徒か。だがこちらは一般人と違って力をセーブする必要はないな。

「悪いが突破する！！ニードルマシンガン！！」

「ぐあぁぁぁ！！」

「くそ！！怯むな！！」

ああ数が多い!!一掃するか。

「受け取れ!!魔導式ロケットランチャー!!」

『ぎゃあああぁぁぁぁぁ!!!』

よし、一掃完了。しかし何で俺が狙われないといけないんだ。あー、胃が痛い。

ゾクッ

《主!!》

「くっ!?」

「ちっ!!」

アリストテレスの警告と直感のおかげでエヴァンジェリンの襲撃を避ける事が出来た。何でこいつまで狙ってくる。

「貴様のせいで、貴様のせいで!!」

「俺が何をした?」

「貴様が呼んだカスミとやらが私のファーストディープキスを奪ったんだ」

それファーストキスじゃないよな。いや待て、重要なのはそれではない。『カスミ』、だと?まさかあいつか?

「殺す！！」

「死なん！！」

エヴァンジェリンの爪に拳で対応する。時折見せる動きは、七夜の体術か。

「志貴！アルク！茶々丸！助けろ！！」

「要、俺には出来ない」

「誰にでも無理はあるのよ」

「申し訳ありません」

くっ、役立たず共め。仕方ない。力ずくで寝てもらうぞ。

「限界突破！！身体能力「ジャッジメント！！！」クラトス！？」

「ふふふ、私を地味だの派手さがないだの、陰でよく言ってくれたな。此処が貴様の墓場だ！！」

「誰がそんな事教えた！？」

「薫とやらだ！！」

間違いない！！確信した！！あの三人この世界で俺（の胃）を殺す気だ！！という事はさっきのは貴史か。

「ぶち殺す！！エクセキューショナーソード！！！」

「ディバイン・ジャッジメント！！！」

「畜生め！！！」

「はぁ、はぁ」

やった、逃げ切った。何とかなるもんだな。

「要兄ちゃん、大丈夫？」

「木乃香？何で此処に！？」

「逃がしましたか」

「刹那！？」

あっぶな。もう少しで斬られるところだった。こいつらも騙されてるよな、きっと。

《主、囲まれています》

「何？」

周りをよく見ると小さな機械が無数に浮いていた。千雨まで敵に回っているのか。待てよ、上空にはない。上に逃げるのも、いや、罠だな。

「憑依合体ｉｎ殺生石！！」

「やべっ！！」

「病巣結界！！」

病巣結界。木乃香が考案した殺生石の使い方。あらゆる病が存在する結界に相手を閉じ込める。その中には抗体が存在しないような、遥か昔に滅びた病だって存在する。

「朔夜、じゃ防げない。結界を破るか」

短時間でも留まるのは危険。なら破壊するしかない。

「シールドスライサー、十連！！」

結界に無数の切れ目を入れて破壊する。結界が壊れれば病も無くなる。発病したら遅いが。

「突風」

「今度は文か」

「『猿田彦の先導』！！！」

文が風を纏い凄まじい速さで突進してくる。だが甘い。

「どっせい！！！」

「！？　止めた！？」

この程度の突進なら大質量のモノブロスやディアブロスの方がきつかったぜ。

「斬空『エアブレイド』！！！」

「ぬあっ！？」

後ろから刹那が巨大な真空の刃で斬り掛かってきた。当たったら死ぬぞ。

カチッ

「ん？」

ドガーン

「グハァ！！？」

今度は地雷ですかー！！

生きてるって素晴らしい。あいつらあそこまで強くなってたなんて。
ギャグ補正か？

「あ、一条先生、此処にいたんですか」

「さっちゃん？どうした？」

「貴史という人から」

あいつ。そうだよ、今回の原因はあいつらだよ。

「ツケです」

「・・・・・・いくら？」

あの野郎、人の金を何だと思ってやがる。まああの店は学園都市だからか良心的な価格設定だから多少は・・・・・・

「２３万飛んで３１０円です」

ズキィ

「胃が、胃が痛い」

金？払ったよ。財布はからっぽだよ。次の日病院でストレス性急性胃潰瘍を診断され、みんなの誤解を解くのに多大な労力を払ったがな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「おお貴史、それは」

「超ちゃんの店の高級食材の数々！！」

「土産だ土産。もちろん要の金だがな」

「「貴史も悪よのぉ」」

「お前らもな」

「「「ハハハハハハハ！！！」」」

胃痛じゃ済まない（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「愛媛県に来てみました」

シャ「ここでは作者の食べたいものがあるそうよ」

椛「じゃこ天です。愛媛の有名料理です」

ア「作者はとある名古屋のローカル番組で見たそうよ」

シャ「ペナルティのワッキーさんがしりとりで地方を回って行く番組よ」

椛「あれは面白かったですね。よく何年も旅をしたものです」

ア「愛知、岐阜、三重の三県に到着するだけなのにね。しかも市は関係なく」

シャ「さて、今回は要くんが・・・・・・」

椛「ご愁傷様です」

ア「流石の嫌がらせね」

シャ「酷かったわね」

椛「では次回もお楽しみに。何か問題があればご連絡を」

旅人の些細な休日（前書き）

八神カイト様とのコラボ。リアルは何やら大変なようです。頑張れカイト様。

旅人の些細な休日

要ｓｉｄｅ

先日は酷い目に遭った。全く、あいつらは人の事を何だと思ってんだか。俺は今別荘で木乃香達をシバいている。

「ほら、まだ２０周残ってるぞ。千雨は３０だな」

「ひぃー」

「このちゃん、大丈夫？」

「相変わらず、きつい」

「私はインドア、なんだぞ」

ふん、俺を襲撃するからだ。今でも胃が少々痛むんだぞ。

「オリジナルは厳しいのぉ」

「お前もあんな目に遭うか？」

「遠慮しよう」

「やってるな」

この声は、まあ何時何処いようが驚くことでもないかこいつなら。

「久しぶり、カイト達」

「おう、元気そうだな。一回死んだくせに」

「今は胃が死にそうだよ」

相変わらず何でも知ってるな。カイトだからしょうがないといえばしょうがないんだがな。

「そっちがお前のマテリアルか」

「オリジナルの知り合いか。しかし何故儂を知っている」

「マスターがそんな事知らないわけないでしょ」

「ほう、面白い。それにお主ら全員がかなりの強者のようじゃな。どうじゃ？一試合」

「いいじゃねえか。俺がやってやる」

紅蓮はやっぱりバトルジャンキーだな。鏡もそうなんだが。しかし死ぬんじゃないか？流石に。

「別の世界でやれ」

「当然だ。流石の俺でも此処ではやらねえよ」

「くくっ、楽しみよのぉ」

「ほら、飛んでけ」

カイトがそう言うと二人の姿は消えた。流石だな。どういう術式だったのかさっぱりだ。

「で、カイト達は何をしに？」

「私はお前を鍛えに」

「マスターに着いてきただけよ」

「まーくん達に会いに来ました」

「遊びに来たんだよ」

「全員ばらばらって事だ」

ふむ、そうなのか。しかし黄宇が俺を鍛えてくれるとは、有り難いな。更に強くなれる。

「お前ら、今日は終わりだ」

「「「「はい」」」」

「鋼牙、お姉ちゃん達と『本気で』遊んでいいぞ」

「ほんと？やった！！」

鋼牙と遊ぶだけでもあいつらにはいい訓練になるだろ。本気の遊びにどれだけ着いていけるやら。

「さあ要、訓練するぞ」

「よろしく頼む」

どれだけ成長出来るか。黄宇の胸を借りるとしよう。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

カイト達の行動

黄宇の場合

まずは要がどれだけの実力を付けたのかを調べる必要があるな。

「全力で来ぃ」

「当然。限界突破、身体能力２００％解放。枷を外すぜ」

次の瞬間、確かに要を縛っていた星の枷、抑止力が砕けた。制御は問題ないようだな。

「シッ！！！」

「ぬっ！？」

要がボディブローを一発繰り出してきて、私は受け止めたが飛ばされた。想定以上だな。単に力のみならず、技も洗練されている。惜しむべきは才能か。要の才能はせいぜい１０年に１人レベルの才能だな。

「腹に穴開けるつもりだったんだが」

「並のチートなら受け止めてもミンチだったろうな。というか女性の腹に穴を開けるとはどういうつもりだ」

「黄宇なら大丈夫だろ」

まあ当然だがな。では実力もわかったところで本番を始めるか。

「死ぬなよ？」

「死ぬ気ではやろう」

紅蓮の場合

「ぜぇ、ぜぇ」

「・・・・・・強いじゃねぇか」

俺の首には赤い筋が一本。正直油断した。まさかコピーに傷つけられるとはな。しかしどれだけの生物の能力を持ってやがる。１００や１０００じゃ足らんぞ。

「ほら行くぜ」

「月牙・・・天衝！！！」

鏡は黒い斬撃を放つが、俺は腕の一振りで霧散させる。次はこっちだ。

「燃え上がれ！！！」

すると世界は焦土と化した。スライム体のあいつは蒸発しちまったかな？まあそうなったら相棒に頼んで蘇生させてもらえば「何処を見ておる？」！？

ズドン

「っ！？」

心臓に向けての正拳。なんでこの状況で生きてやがる。ダメージよりその驚きの方が大きかった。

「驚いておるようじゃの」

「たりめぇだ。なんで蒸発しない」

「火を制すのは水のみに非ず」

・・・・・成る程。さっきまでとは違うこの魔力。

「イフリート。火で火を制したか」

「いかにも。儂が体を変化させるはスライムだけではないぞ」

体を火にすれば確かに蒸発する事はないな。

「おもしれぇ！！火をも滅する業火を見せてやる！！」

水薙の場合

「で、最近の性活はどうなの？」

「普通だよ。一人３回」

ほほー、要も結構精力あるのね。

「このままだとすぐ子供出来るんじゃない？」

「でも不老不死になった影響で出来にくいんだってよ」

「そう、残念ね」

まあ不老不死でぽんぽん子供が出来たらある意味大変だけどね。

「そういえばさっき訓練してた子達は？要を好きなんでしょ？」

「そうなんですよ。要さんたら私達がいるのに」

「まあまあスバル、それが要でしょ？それにまだ大人しい方なんだから」

「優さん達は別格ですから比べるのはどうかと」

でもいいじゃない。フラグを立てるのは若い証拠よ。マスターだって、まあ正直あんまり他の子とはいちゃいちゃして欲しくないけど。

「水薙さんはどうなの？マンネリしてるなら玩具作ってあげようか？」

「すずかが作ると酷いの出来そうだから遠慮するわ」

「「「「確かに」」」」

「みんな酷っ！！」

鋼牙の場合

「そんじゃ何して遊ぼうか？」

「うーん、かくれんぼ！！僕が鬼ね」

「じゃあ３０数えてな」

「うん！！」

お姉ちゃん達が隠れ始める。よーし、頑張って捜すぞー。

「・・・・・・２９、３０！！」

捜すぞー。何処に隠れたのかな?本気でやっても大丈夫なんだよね。

「・・・・・こっち!!」

こっちの方から気配がした気がする。えっと・・・・・・

「木乃香お姉ちゃんみーつけた♪♪♪」

「早っ!?」

木の上にいたんだ。でも気配でまるわかりだもん。簡単だよ。

「もっと本気で隠れてよ」

「ハハハ、みんなに伝えとくわ」

これでもっと面白くなるかな♪♪

龍斗の場合

このお店ですね。植物が生き生きしていて素晴らしい花屋ですね。

流石本人達が植物なだけあります。

「お邪魔します」

「あら龍斗さん、お久しぶりですわ」

「遊びに来たんですか？」

「ええ」

お二人共立派に成長して。元々はあんなにちっぽけだったのに、今では世界樹のように」

「誉め過ぎですよ」

「声に出てました？」

「ええ、しっかりと」

これは少し恥ずかしいところを晒してしまいましたね。いやでも本当に強くなっています。まともに戦えば二人に勝てるのはそうそういないレベルまで成長しています。

「お茶でも出しますよ。何にします？」

「では、緑茶で」

「わかりました。まーちゃん、お願い」

「はい」

おや、まーちゃんが入れるんですか。まーちゃんは料理が苦手と聞いていましたが、お茶は別なんですかね。

「ではお話でもしましょう」

「そうですね」

カイトの場合

此処だな。

「邪魔するぜ」

「いらっしゃいませ」

「・・・・・何者？」

おっと、いきなりアルクェイドに警戒されてるな。そのせいで志貴もエヴァンジェリンも茶々丸も警戒してるじゃないか。

「要の知り合いの八神カイト。宇宙（そら）の救世主（メシア）とか言った方がいいか？」

「!?　貴方があの!!」

「要の交友関係には脱帽だな」

アルクェイドと志貴は知ってたか。大方ゼルレッチの奴だろう。

「どうして此処に?」

「暇潰し。そうだ、クラトスも呼べ」

「本当に何でも知ってるのね。エヴァ、連絡して」

「わかりました」

「私を呼ぶとはどうした?・・・・・・誰だ?」

「よろしく、八神カイトだ」

「!?　世界の（ワールド・）破滅者（ディザスター）か!?」

ほう、よく知ってるな。流石無駄に長生きしているだけある。ん?
あの剣・・・・・・

「その剣、まだ解放してなかったのか」

「解放？」

知らないのかよ。ゼウスの野郎、最初から解放して渡せよ。

「ほら貸してみな」

「うむ」

俺が力を篭めてやると魔力が強大なだけだった西洋剣が、刀身が波打った赤い炎のような剣になった。

「これは、フランベルジュ！！」

「初めて持った時しっくりした感覚があったろ？これが元々お前の剣だったからだよ」

「成る程な」

あのゼウス、改造しておいて渡しやがったからな。解放はクラトスにやらせるつもりだったんだろうが、別に構わんだろ。次は志貴にあれをくれてやるか。

「ほら志貴、これやる」

「！？　これ、親父の」

俺が志貴にやったのは鉄の棍。遠野、いや七夜志貴の父である七夜

黄理が愛用していた武器だ。

「お前にそれを扱う技量はあるかな？」

「わからないけど、ありがとう。貰っておくよ」

黄理はこれで異能者を斬っていたからな。大層な才能と技量だよ。

「じゃ、帰るわ」

「はい、また来て下さい」

「考えとく」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

要ｓｉｄｅ

きつかった。死ぬ気でやるとはいったものの、マジで死にそうだった。

「よく耐え切った」

「・・・・・いや、本当に」

「「ただいま」」

あ、あの三人も帰ってきた。

「おお要、死にそうだな。黄宇、どうなった？」

「栃を２０分は外せるようになりました。基本的な能力もなかなかいい感じです。鋼牙、楽しかったか？」

「うん♪♪♪」

あいつら予想以上に頑張ったな。並の努力じゃなかったはずだ。

「大変でしたよ」

「いたのか」

「ひでえな、おい」

お前ら元気が無いから気づけなかっただろう。まあ今は人の事を言えんのだが。

「光化学迷彩が見破られるなんて」

「私なんて空気の屈折率を変えて気配まで消したのに」

「天狗として情け無い限りです」

「うちは最初に見つかったから気分楽やわ～」

まあ鋼牙相手によく頑張ったと褒めてやろう。心の中で。

「まーくんもまーちゃんも立派になってました」

「そうか。そういや紅蓮と鏡を喚ばないとな」

あああいつらまだやってるのか。どうなってるかな。予想は大体つくけどな。

「ほらよ」

カイトが魔法陣を創り出し二人を召喚する。魔法陣から出てきたのは服などが多少破けた紅蓮とほぼ虫の息の鏡だった。

「ほう、随分と苦戦したようだな」

「別にいいだろ、姉貴。相棒、治してやってくれ」

「あいよ」

カイトが魔法を使うと鏡の傷が一瞬で治った。

「こいつしぶとすぎ。相棒が喚んでくれなきゃ殺してたかもしれん」

「ハハハ、そうなったら蘇生する」

そういや水薙は何やってたんだ？

「有意義な時間だったわ」

「まさか今までずっとなのは達と話してたのか？」

「ええそうよ」

「はっ、まるでおばさんだな」

おいおい紅蓮、そいつは言っちゃ・・・・・・

「紅蓮、少しお話しようか」

「私達も言いたい事あるな」

「ちょ！？まっ、ああーーーーーーー」

水薙のみならずなのは達まで。ギャグ補正のフルボッコ、毎回ご苦労様だ。

「じゃあそろそろ帰る」

「ああ、また会おう」

「あ、そうだ」

ん？まだ何かあるのか？って体が軽くなったような気が、ってこれは！！

「胃痛がない！！」

「じゃな～」

俺、ここまで人に感謝したの初めてかもしれん。

旅人の些細な休日（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は福島～」

シャ「では名物はなんですか？」

椛「太ちぢれ麺にあっさり醤油味の喜多方ラーメンです」

ア「日本三大ラーメンの一つとも言われてるわね」

シャ「いいわね、私は醤油味好きよ」

椛「私はこってり豚骨が」

ア「人それぞれよね」

シャ「そういえばコラボはあといくつ残ってるの？」

椛「真祖様とＡｒｉｓｈｉａ様とアルビオン様ですね」

ア「多い！本編を心待ちにしてる読者様だっているのに」

シャ「しかもその後座談会だしね」

椛「でも依頼があるからにはやらないと」

ア「ま、そうよね」

シャ「では次回もお楽しみに」

死にも安息を（前書き）

真祖様とのコラボ。
いつもより短いのは漫研の締め切りが近いからだよ。ホントダヨ。
雨季ウソツカナーイ。

死にも安息を

要ｓｉｄｅ

さあ作るぞ、昼飯。たまには大黒柱が妻の代わりに頑張らないとな。

《意気込みは素晴らしいですが、作れるのは野菜炒めだけですよね》

「十分だ」

これと米と味噌汁。あとは干物があれば立派な昼飯だろ。

《味噌汁はインスタント。干物もただ焼くだけですが》

「焼くぞ」

《遠慮します》

「というか流石に味噌汁くらいは手作りだ」

《出来たんですか！？》

おいアリストテレス。本気で怒るぞ。いくら俺でもそれくらいは出来る。まあ調理実習レベルなんだが。それを補うのが究極の野菜炒めだ。

《確かに主の野菜炒めは素晴らしいです》

「野菜炒めはな」

やっぱりもう少しレパートリーを増やした方がいいかな。得意料理が野菜炒めと野戦で鍛えた焼肉ってのも寂しい。

「っと完成」

今日もいい出来栄えだ。野菜炒めは。

「お前ら、飯だぞ。おっ、亮じゃないか」

「どうも」

いつの間にいたんだ？まあ大方飛ばされてきて、たまたまうちに辿り着いたってとこかな。

「昼飯食うか？」

「えっと」

「別に遠慮する必要ありませんよ」

「文が言うな、と言いたいがその通りだ」

「じゃあ頂きます」

「どうだった？」

「他は普通なのに野菜炒めだけ凄く美味しかったです。習いたいぐらいです」

「それはよかった」

亮にも認められたら十分誇れるな。

「お前ら、少し亮と話したいから席空けてくれ」

『はーい』

さて、見た瞬間から思っていた事を率直に話させてもらうか。

「随分、濃くなったな」

亮ｓｉｄｅ

気が付いたらいきなりこの世界にいて、何故か久遠ちゃんに引っ張られて来てしまった。お昼も御馳走になっちゃったし。しかしやっぱり気付かれたか。

「わかりますか」

「なのは達も気付いていたろう。血の匂い、それ以上に死の匂いが濃い。何があったかは聞かないがな。アリストテレス、コーヒーを」

「了解しました」

聞かないでくれるのは有り難いな。でも気を使わせちゃったかな。

「お待たせしました」

「ありがとうございます。うん、美味しい」

出されたコーヒーはブラックだったけど、入れ方が上手いな。

「亮、今のお前が背負っているものはコーヒーだ」

「はい？」

「コーヒーは数滴のミルクを入れても変わらない。しかし多ければ味も色も変わる。お前が背負っているものも多少の事では変わらんだろう。さて、お前の周りにミルクはいるか？」

「・・・・・いるかもしれませんけど」

例えミルクが入っても黒が、罪が消える訳ではない。寧ろ背負わせてしまう。

「あいつらを、巻き込みはしません」

「そうか。なら尚更注意しろ。ミルクはコーヒー（お前）が拒絶しても無理矢理混ざってくるぞ」

こういう風にな、と言って要さんはミルクをコーヒーに混ぜた。そ

れを飲むと要さんは眉を潜めた。

「・・・・・やはりコーヒーはブラックだ」

「ハハハ・・・・・・」

「気分転換で組み手でもしようか。というか俺が気分転換したい」

自由になってるな、この人。

要さんとの組み手か。まあ武器は使わず軽い運動気分でやるかな。

「ほれ」

「やっ！」

要さんの正拳を避けて蹴りを繰り出すが流される。予定調和って感じかな。

「ホアタタタタッ！！」

「どこの世紀末ですか！？」

無駄に洗練された無駄がない無駄な動きって感じの連続突きを放たれる。組み手なんて遊び気分なんだろうな。ならこっちも。

「・・・・・・」

俺は要さんの死角を跳び回って攻撃をしようとしたけど。

（見られてる）

こちらがどう動くのかがわかってるかのように俺が跳ぶ先を見ている。

「その動きは見慣れてるぞ」

「くっ」

見慣れてるって、この動きをする奴が、いそうだな。要さんの周りチートばっかりだし。

「よしやめた！！」

「ええ！？」

なんかいい感じになってきたのに。

「出掛けるぞ」

「なんか引っ張り回されてる気がする」

「うわー」

「いいだろ、此処」

連れて来られたのは街の高台。そこから広がる夕日に染まった街はとても美しく、儚い雰囲気を感じた。

「俺はな、少なくともこの世界にいる限りはこの街を守りたいと思ってる。亮にもあるだろ？守りたいもの」

「はい」

「なら目を離すな。それはいつどうなるかわからん。失ってからじゃ遅いからな。っと、お前には釈迦に説法だったな」

「いえ、改めて決意が固まりました」

こんな活気に満ちた街でも儚く見えるんだ。どんなものでもいつ消えるかわからない。だから、俺は・・・・・・

「そうか」

むんず

「へっ？」

いきなり要さんに首根っこを掴まれた。嫌な予感しかしない。

「さあお帰りだ！！！神様、お願いします！！！」

ブンッ

「うわーーーーー！！？」

いきなり高台から宙に向かって投げられた。そして今までなかった黒い穴が目の前に開いている。こんな帰り方はないでしょ！！

「グッドラック！！！」

「グッドラックじゃなーい！！！」

死にも安息を（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は高知。四万十川が綺麗ね」

シャ「これで四国は制覇かしら」

椛「そうですね、多分」

ア「高知は何があるの？」

椛「果物です。ポンカン、ヤマモモ、小夏。どれも美味しいです」

シャ「椛ちゃんは何でも美味しいでしょ」

ア「いい事だけどね」

椛「今回のお話は比較的穏やかでしたね」

ア「そういうお願いだし」

シャ「次回は凄いわよ」

椛「タイトルだけ発表しますか」

ア「そうね。ではせーの」

ア・シャ・椛「「「流石フラグ神、格が違った」」」

流石フラグ神、格が違った（前書き）

Ａｒｉｓｈｉａ様とのコラボ。
頼まれてもいないフラグを立ててしまった。
流石フラグ神、格が違った。

流石フラグ神、格が違った

のどかｓｉｄｅ

今日は買い物をして何故かいつも通らない道を通ってしまった。普段は人があまり通らない道。危険だから寄り付かないんだけど、何かに引き寄せられるように私は歩いていた。

「早く帰らないと」

そうだ、早く帰らないといけない。なのに私の意思に反するかのように足は勝手に動くような気がした。そして寮の近くの路地裏で足が止まった。

「あっ！！」

そこには人が倒れていた。意識はないみたいだけど、服はボロボロで体も汚れている。怪我はないみたいだけど。

「とにかく運ばないと」

えっと、私一人だと出来る気がしないから夕映を呼ぼう。

「ふー」

「意外と重かったですね」

倒れてた人を二人でようやく運んで来た。疲れた。

「でも一条先生に意識のない人の運び方を教えて貰っててよかったね」

「人生何が役に立つかわかりませんね」

一条先生ってたまに体育に関係ない事や、明らかに体育の範疇から外れた事を教えてくれるけど、日常で役に立つ事が多い。フライパンの焦げを取る方法とか、上手なお風呂掃除の方法とか。

「しかし綺麗な人ですね」

「うん」

本当に綺麗な顔立ちだ。汚れてなかったらきっとお人形さんみたいなんだろうな。

「拭いてあげよう」

「そうですね。汚れたままではあれですし」

そういう事でまず濡れタオルを用意して、服を脱がせ始めた。そういえばこの服って男物だよね。綺麗な女の子なのになんでだろう？

「ん～」

上半身に何か違和感を感じるけど、まあいっか。そしてズボンを下ろした時事件は起こった。

「「・・・・・・きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

宮崎のどか、綾瀬夕映が生まれて初めて父親以外の一物を見た瞬間であった。

「男性・・・・・・」

「有り得ない、こんな顔で」

でもこの目ではっきりと見てしまった。その、股に付いているあれを。女性にはないあれを。

「・・・・・・おっきかったね」

「・・・・・・平均は知りませんが大きかったです」

「う、うぅん」

「「はっ！！」」

「此処、何処？」

起きたんだ。でも起きるなら私達が体を拭く前に起きて欲しかった。

「此処は麻帆良学園の寮です」

「君達は？」

「私は綾瀬夕映。こちらは宮崎のどか。気絶している貴方をのどかが見つけたのですよ」

「そうなんだ。ありがとう」

「い、いえ。それより何であんな所に？」

これが一番の疑問だ。少し話しただけだけど危ない事やってる人には見えないし、何で路地裏なんかで気絶してたんだろ？

「うーん、どうして此処にいるかは把握出来たけど、自分が何処でどうして気絶してたかはさっぱり・・・・・でもないか」

「何か覚えているのですか？」

「・・・・・ごめん。思い出そうとすると頭が痛いから」

「なら一回行ってみませんか？何か思い出すかも」

「うん、そうしようか。あ、忘れてた。俺は暁優。よろしく」

これが私達と優さんとの最初の会話だった。

鏡ｓｉｄｅ

「ハッ！！ハッ！！」

先日の紅蓮との試合の感覚を忘れぬよう儂は最近訓練を続けておる。

いつかはオリジナルを超える為に。

「ヤッホー」

「誰じゃ？」

「神です」

神？いろいろな世界で見たエセ神とは違う雰囲気じゃし、そこらの低級の神とも違うの。

「要くんを転生させた張本人」

「おお！お主がゼウスか！！して、何用じゃ？」

「まずこの話を聞いてくれ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

怠い、暇、娯楽が欲しい。

「ならお仕事をしましょうか、ゼウス様」

「働きたくないでござる」

要くんの所で何か面白い事起こらないかな。そうだ！起こらないなら起こせばいいじゃない！！

「カモーン！！」

「うわっ！？」

僕が召喚したのは暁優くん。リアルの人すら陥落させたフラグ神だ。

「えっと、誰？」

「ああ記憶喪失だっけ？そぉい！！」

ドゴーン

「うおっ！？」

僕が爆発を優くんに当ててやった。これで思い出すはず。ボロボロになったけど。

「ハッ！！要の所の神様！？」

「君にはちょっと違う世界に行ってもらうよ」

「拒否権「ない！！」ですよねー」

「あ、そうそう、此処に来る前の記憶ってある？」

「そりゃ・・・・・あれ？」

うん、上手く僕らの事だけを思い出したみたいだね。流石にあの世界の記憶を覚えたままで思い出されたら困るし。

「では、消えろ！！」

「消えろ！？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

つまり、その優とやらに儂が何かすればよいのじゃな。

「こうして欲しいんだ。ゴニョゴニョ」

「ふむふむ、面白そうじゃが」

「報酬だね」

わかっておるではないか。どのような報酬を要求しようかの。やはり力か。

「ではＯＲＴの力を３０％から５０％に」

「１００じゃなくていいの？」

「残りは隙有ればオリジナルから奪おう」

「わかった。成功報酬ね」

ふふふ、優とやら、お主の実力を見せてもらうとしよう。儂を楽しませてくれよ？

優ｓｉｄｅ

はぁ、あの神様のせいでとんだ災難だよ。

「此処ですけど」

「・・・・・思い出せないな」

というか思い出してるから思い出すものが無いんだけど。しかし何でこんな路地裏に出されたんだ？

「おぉ、なかなか上玉がいるじゃねぇか」

「誰だ！？」

俺らの後ろにいたのは金髪に金眼の男。整った顔立ちだけどろくな奴じゃないのは見てわかる。

「お前ら俺の女にしてやる。なぁに、洗脳するだけだ」

こいつ、最低だな。

「残念だけど俺は男だし、後ろの二人には指一本触れさせない」

「その顔で男かよ。じゃあいらね、死ね。投影開始（トレース・オン）」

男の後ろに無数の剣が浮かぶ。こいつも転生者か。

「ゆ、優さん」

「危ないです！逃げましょう！！」

「大丈夫。君達は絶対に守る。あんな奴なんかに触らせやしない。だから、俺を信じて」

「「・・・・・・はい／／／／／／」」

「行くぞ」

俺もあいつと同数の剣を創る。デバイスがないけど、あいつに勝つ事ぐらい一人でやってやる。

「「行け！！！」」

剣が飛び、ぶつかり、弾け、砕ける。その弾幕の中、俺は西洋剣を創り出し、それを持って突撃した。だが相手も同じ考えだったようだ。相手が持っているのは白と黒の双剣。

「ハアァァァァ！！！」

「オラオラオラオラ！！！」

流石に手数はあちらが多いか。だけど場数ならこちらが多い。そし

て一瞬の隙をついて攻撃したが。

「馬鹿め！！」

受け止められた。相手はそれが狙いだったようだけど、その程度想定してないと思ったか？

ドスドスドスドス

「ガッ！？そん・・・な」

「逃げるぞ！！」

「えっ！？」

「わわっ！？」

男が斬ろうとした瞬間、背中に創り出した剣を何本も突き刺してやった。そのまま二人の手を引いて走り出した。

神ｓｉｄｅ

今僕の前には背中に剣の刺さった男が倒れている。

「お疲れ様」

僕がそう言うと男は泥のようになり、再び人の形に、鏡くんの形になった。

「わざと負けるのはストレス溜まるのぉ」

「ごめんね、はい報酬」

「うむ、力が湧いてくるわい。確かに受け取った」

しかしこうも見事に悪役を演じてくれるとはね。そりゃ優くんもフラグが立てやすいってもんだ。さて、二人が裏を知っちゃったけどどうするのかな？

要ｓｉｄｅ

「あれ？」

ちょっと木乃香に用があって寮に来たんだが、何故か優が宮崎、綾

瀬の手を引っ張って来た。

「何やってんだ？」

「要！！」

「「一条先生！！」」

「？」

何やら話を聞く限り、転生者が現れて襲い掛かってきたとか何とか。
でも優が倒したならいいじゃないか。

「そんな悠長な」

「それより俺が聞きたいのは二人の前で魔法を使ったんだな？」

「あー、うん」

どうしたもんか。説明がめんどくさいな。

「あの、一条先生。あれは魔法なんですか？」

「ああ、ただし漫画とかとは違う。簡単に言えば兵器に近い」

「そう、ですね」

まあ魔法に夢をみるのはしょうがない。でも初めて見た魔法が激しすぎたな。

「あの、私達も魔法使えますか？」

「宮崎、危険なのをわかっているのか？」

「はい、人が刺されるのを見ましたから。でも優さんの力になりたいんです！！」

「私もお願いします！！」

普段大人しいこいつらがここまで言うとはな。優の奴、またフラグ立てやがったか。とりあえず覚悟を見させてもらうか。

「はっきり言おう。足手まといになる」

「それは・・・・・・」

「今の私達ならですよね？なら強くなれば」

「考えが甘い。そんな簡単に強くなれると思っているのか？現実だぞ？」

「「・・・・・・」」

「なあ要、そこまで言わなくても」

相変わらず優は甘いな。そんなだからフラグ神なんだよ。だが確かにこれ以上言っても諦めそうにないな。

「俺の訓練は拷問並だぞ」

「え？」

「それって」

「魔法を教えてやる」

「「や、やった！！」」

このくらいで喜ぶとはやっぱり子供だね。これから地獄の訓練があるってのに。

「そういえば優さんに教わったら駄目なんですか？」

「えっと、それは」

「駄目とは言わんが、無理なんだ」

「無理？」

「こいつ異世界から来てるから」

「「異世界？」」

「正確には並行世界。パラレルワールドだな」

まあわざわざ説明する理由もないんだが。とりあえずは教えてもらえないってのがわかってもらえれば十分だ。

「あ、優が帰る前にあれやっとくか」

「「あれ？」」

俺はチョークを取り出して魔法陣を書いた。そしてそれに魔力を流してっと。

「上手くいったな」

《まさか主が魔法陣を描けるようになるとは》

「俺でもこれくらい出来るからな！？」

「一条先生、今のは？」

「また今度教える。さて優、此処に立て。二人には最初の試練だな」

「ああ、わかった」

優は大して警戒する事なく魔法陣の上に立った。これでいい。魔法陣が上手く働いたら完璧だ。

「さあ二人共、優にキスしろ」

「「ええ！？」」

「そんなの聞いてない！！俺はやめるぞって足が動かない！？」

おお、魔法陣に追加した捕縛効果がしっかり発動してるな。上出来上出来。

「いいか、二人共。これをやればお前ら専用アイテムが手に入る上

に優と繋がりが出来るんだぞ。不純異性交遊？俺が認めよう」

「「ゴクリ」」

「おいこら！！それでも教師か！？」

「「優さん、失礼します／／／／」」

「二人共落ち着いて！！」

「アリストテレス」

《高画質動画で》

「流石だ」

ちなみにこのあと神様が優を飛ばした。そして鏡に力を与えた事も聞いた。全部この人の手の上って事か。しかし弟子が増えちまったな。

流石フラグ神、格が違った（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は大分県」

シャ「ここの名物は結構有名よね」

椛「関サバですね。サバの中では最高級です」

ア「関アジもあるわよね」

シャ「しかし本編」

ア「優だからね」

椛「あれがフラグ神ですか。流石です」

ア「次回とその次でコラボ祭りは終わり」

シャ「修学旅行編ね」

椛「私が手に入れた極秘情報では・・・・・・」

ア「何？」

椛「やっぱり秘密にしましょう」

シャ「えー」

椛「次回はアルビオン様とのコラボです。お楽しみに」

神になった者とチートになった者（前書き）

アルビオン様どうですか？なんなら直しますよ。

神になった者とチートになった者

要ｓｉｄｅ

「なあ久遠、これでいいかな？」

「ダメ」

こないだ料理の本を貰ったのでせっかくだから俺のレパートリーを増やそうと思ったのだが、何故久遠に教えてもらっているのだろう。ここはなのはとか木乃香とかだろ？というか久遠が厳しい。

「炒飯はこんなもんで」

「ダメ。全然ダメ。その程度で満足したら上手くならない」

「・・・・・・はい」

ああ、下手に料理を覚えようとするんじゃなかった。でも久遠には逆らえないんだよな。

ピンポーン

ん？客でも来たか？

「ちょっと「要は続けて」酷い」

途中でやめる事すら出来ないのですか？ちゃんと火は消す、ってかうちはＩＨだぞ。

久遠ｓｉｄｅ

もう、せっかく要に料理を教えてたのに。タイミング悪いなぁ。

「どちら様ですか？」

「初めまして」

誰だろ？何となくわかるけど、とりあえず決まり文句を言ってみよう。

「・・・・・間に合ってます」

「新聞じゃないからな！？」

「冗談。はるばる世界を越えてよくぞいらっしゃいました。あんまり歓迎しません」

「歓迎してくれないのかよ！！」

だって知らない異世界人と関わったらあんまりいい事ないんだもん。

「とりあえず入って。粗相したら花粉症にするよ」

「地味だな」

地味な呪いの方が効果も持続力も高いんだよ。

「あ、名前は？」

「そういや言ってなかったな。流士（ながれかさ）だ」

士ｓｉｄｅ

成る程、ここが噂の異世界人が集う世界。チートのたまり場。様々な異名を持つ一条要のいる世界か。夏海があんな情報見つけなければこなかっただろうな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ある日、夏海がパソコンをいじっていた。

「何やってんだ？」

「天界ネットだよ」

て、天界ネット？なんだそれは。神の間でのみ流行ってんのか？

「面白いのか？」

「うん」

どうやらやっているのはチャットのようだな。見る限りは普通のチャットと変わらないが、名前が神や天使の類ばっかりだな。夏海は夏海みたいだけど。

《ゼウスさんが入室しました》

ゼウスて、まあ本物かはわからんが。

「ゼウスさんまたサボりかな」

「サボり？」

「仕事サボってよくやってるんだって」

仕事しろよ天界の誰か知らないが。

「でもゼウスさんの情報は凄いんだよ」

「ほう、なら面白い世界はないか聞いてみてくれないか？」

「うん」

『ゼウスさんゼウスさん。なにか面白い世界はありますか？』

『ｏｋ、任せなよ。僕が転生させた一条要くんの世界なんてどうだい？』

『チートワールドｋｔｋｒ』

『あそこマジパネェっす』

『久遠ちゃんハァハァ』

『『『熱田大神もちつけ』』』

え、何この反応。そんなに有名なの？一条要って。というか熱田大神、あんた何言ってんだ。

「へぇー、あの人転生させたのゼウスさんなんだ」

「知ってるのか？」

「うん。あの人の周りには異様にチートが集まるって有名だよ」

どんな人間だ？というかまず人間か？

「もっと詳しい情報教えてもらえるか？」

「じゃあ聞いてみよっか。一条要さんの・・・・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

まさかそれで出てきた情報がＯＲＴを内包した転生者だとはな。しかも他の能力なしにチートとしてやってるとは。まあＯＲＴ自体がチートだし。

「要、お客さん」

「どちら様？」

「流士だ。お前の噂を聞いてな」

「単刀直入に言え」

「模擬戦しようぜ」

真剣に悩んでるように見えるが、チャーハンを作りながら悩むなよ。

「他ごと考えない！！」

「はい！ごめんなさい！！」

うん、とりあえずチャーハンが出来るまで待とう。そうしないと久遠が怖い。

「待たせたな。で、模擬戦だっけ？」

「ああ、そっちはＯＲＴ使っても」

「模擬戦で使うもんじゃないな」

まあ確かにあんなもの模擬戦で使うのもあれか。でも戦ってみたいんだよな。

「ま、模擬戦くらいはいいだろう。別荘でやるが、いいか？」

「問題ない」

というか俺らの戦闘に耐えれる別荘が、ありそうだな。そうじゃなきゃそんな申し出しないし。

「じゃあ行くぞ」

別荘の中では結構な人数が訓練やらなんやらをしていた。時期的にはまだ魔法に関わってないようなのもちらほら。

「お前ら、これから客と模擬戦するから出てけ。観戦するなら結界でも作っとけ」

『はーい』

要の一言で全員が動き出す。じゃあさっそくやるか。

「士、お前は強いか？」

「ああ、もちろんだ。１００００年もいろんな世界に行って修行したしな」

「そうかそうか。１００００年か」

あんまり驚かないな。チートにはそれ以上がいるのか？少なくとも俺は会った事がないな。

「行くぞ。あまり自惚れると足元をすくうぞ。身体能力１００％解放、魔力１００％解放、アルティメットワン発動、アリストテレスセットアップ」

《セットアップ》

「なら俺は、メタモルフォーゼ！！ウィングガンダムゼロ！！」

俺はウィングガンダムゼロになってツインバスターライフルを撃とうとしとが、要は既にいなかった。

「抜骨・砕」

バキィ

「ぐぅ！？」

ＭＳの関節を砕いた！？関節だけじゃない。関節周辺にある回路やらなんやらも全て砕いた。

「生身じゃなくてよかったな。生身なら筋肉も、腱も、血管も、神経も、全てが砕けてたぞ」

「面白い！！」

俺は姿を元に戻す。あいつ相手じゃＭＳだとついていけない。そして右手にエクスカリバー、左手には黒いエクスカリバーを持った。

「ハッ！！！」

一気に縮地で近づき、要を十字に斬り裂いた。

要ｓｉｄｅ

縮地法か。確かに生身でしか出来ない技だな。

「おい、何だその皮膚は」

「武装・ＯＲＴ。俺の皮膚をＯＲＴの外殻に変化させる技だ」

「ＯＲＴは使わないんじゃなかったか？」

「死にたくないし、ＯＲＴ本体じゃないし」

まあエクスカリバーで斬られた程度じゃあ死なないんだけどな。しかし１００００年生きたにしてはしょぼいな。リミッターでも付けてるのか？

「まあいい。ミニスライサー！！」

「おっと」

手のひら一杯に造ったミニスライサーを投げつけてやったが、全てが一振りで落とされた。まだまだ改良が必要だな。

「そりゃ！！」

「ほっ！！」

あれから数十分俺らの攻防は続いたが、最後は俺が土を地面に押し付けて勝利した。

「あー、負けた」

「リミッターしてる奴に勝ってもな」

「あ、わかるか？リミッター外したらこの星壊しかねないし、創造神としての力あるし」

「俺の知り合いには軽く銀河破壊して最高神でも殺せない、逆に殺す奴がいるが」

「何それ、チート？」

カイトはチートの枠には嵌めれんな。あれがチートなら俺は凡人だし。

（ねぇ要。私も久しぶりに遊びたいんだけど）

（はいはい）

俺がロザリオを首に掛けると楔と分かれた。その様子を見ていた士も流石に驚いたようだ。

「分身？分裂？」

「分裂に近いわね。私は楔。要の中の別人格よ。よろしく、おじいちゃん」

「おじいちゃん言うな」

「１００００年生きたらおじいちゃんでしょ」

まあ確かにそうだが、だとしたらお前はおばあちゃんになるぞ。

「私は永遠の二十歳よ」

「これ本当にお前か？」

「突然変異、多重人格とでも考えてくれ」

「じゃ、行くわよ」

「お、おう」

士ｓｉｄｅ

これには驚いたな。性転換させるのは簡単だが、目の前でいきなり分裂されるとはな。しかも性格が別物。

「どしたの？惚れた？愛人ならＯＫよ」

「違うからな。これから何するか考えてただけだ」

「エヴァをイジるのよ」

ほう、それはいいな。楽しそうだな。どうやってイジってやるか。

「此処よ」

確かにエヴァの家だな。ちゃんといるよな?

「エヴァ〜」

「うっさい」

おお出て来た。というか早いな。まるで待っていたかのようだ。出番が欲しかったのか?さて何してやろうか。

「てい」

「わぷっ!?」

楔がいきなりエヴァに粉を被せた。え?俺が何かやるんじゃないの?

「士!!カメラ!!」

「お、おう」

王の財宝(ゲートオブバビロン)から高性能カメラを取り出した。

「ゲホゲホ、いきなりにゃにをする!!」

にゃ?煙が晴れたそこには猫耳に尻尾が付いた猫エヴァがいた。成る程そういう事か。

「撮りまくるぜ！！！」

「にゃ！？貴様やめるにゃーー！！！」

「だが断る！！」

良い映像が撮れそうだぜ。結局何故かいた志貴立ちが止めに入るまでこの羞恥撮影会は続いた。

「今日は楽しかった」

「そうか」

「映像寄越しなさいよ」

「わかってるって」

にしても此処がチートのたまり場の理由が何となくわかった。拒絶される事もなく、ただただ楽しくいられる。

「じゃ帰るわ。今度は妹も一緒に来るかもな」

「その妹可愛い？」

「うん？可愛いぞ」

「なら食べて「駄目」ちっ」

楔には警戒しないとな。

神になった者とチートになった者（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は佐賀」

シャ「名前は知ってても名物は知らないわね」

椛「丸ぼうろですよ」

ア「クッキー？」

シャ「でもしっとりしててケーキっぽいわね」

椛「懐かしい味ですね。ポルトガルから伝来したもののようです」

ア「今回はアルビオン様とのコラボ」

シャ「そして次回は座談会」

椛「４０人強の出演者がいるので出番が少ない方もいるかも」

ア「その時はごめんなさいね」

シャ「では次回もお楽しみに」

５０万記念企画（前書き）

５０万アクセスありがとう！！！

５０万記念企画

要「毎度お馴染み座談会」

神「はっじまっるよー」

久遠「今回は２０作者様から４８のキャラが送られてきたよ」

楔「私達も合わせると２１作者の５０以上のキャラになる予定よ」

神「では始めにこの二人」

貴史「お呼ばれに預かった」

葉生「よろしくお願いします」

要「秋代様より、南武貴史と麻倉葉生だ」

久遠「次はこちら」

ドゴーン

一真「また落ちた・・・・・」

ゼロ《我慢しろ》

楔「ライ様より、御剣一真とゼロよ」

神「続けていこう」

ゼフィリス「久しいな、みんな」

志貴「既に強そうなのがいるな」

要「黎音様より、ゼフィリス・エーデルフェルトと両儀志貴だ」

久遠「次のはこの人達」

飛翔「相変わらずうちは多いな」

鈴音「家族ですから」

アリシア「とはいえ、ねぇ」

アリサ「仕方ないわよ」

すずか「まあ出して貰ってるだけ有り難く思おう」

アインス「そういう考えの方がいいかもな」

リニス「改めてよろしくお願いします」

ユーノ「今回は僕もいるしね」

楔「海人様より、不破飛翔ファミリーとユーノ・スクライアよ」

神「次のは・・・・・・」

カイト「流石の人数だな」

黄宇「それが此処ですしね」

紅蓮「強そうなのがいるじゃねぇか」

龍斗「紅蓮は自重なさい」

水薙「たまにはこういうのもいいわよね」

鋼牙「楽しそー」

要「八神カイト様より、八神カイトと黄宇、紅蓮、龍斗、水薙、そして鋼牙だ」

久遠「次は一人」

亮「お邪魔します」

楔「真祖様より、七宮亮～」

神「次も一人だね。大丈夫かな？」

せつな「かな兄～」

要「っと、元気だな。七つ夜＆ａｍｐ；夜つ七様より、せつなだ」

久遠「次は、常連さんだよ」

百合姫「ハ～イ、来たわよ」

鈴「せつなもいるのか」

楔「鈴素敵よ♪香崎真琴様より、御神百合姫と神北鈴よ」

神「こちらも常連」

吼太「よっ」

詩音「人がいっぱい」

トゥード「失礼します」

要「なっぺ様より、吉谷吼太、吉谷詩音、フォーティトゥードだ。夫婦は詩音を狙わないように」

百合姫・鈴「「ちっ」」

久遠「次も知り合いだね」

遥「おいっす」

楔「ｋｅｉ様より、五十嵐遥よ。はるかちゃんになれ」

遥「おい！！」

神「次はこの人達」

ソウヤ「久しぶりだな」

ゼクト「変わっておらんの」

オルタ「此処がどうなろうと関係ないが」

要「白銀の騎士様より、蒼神双夜とフィリウス・ゼクトとセイバー・オルタだ」

久遠「えっと次は前回出たね」

士「早速の登場だ」

夏海「みなさんよろしく」

刹那「よろしく！！」

楔「アルビオン様より、流士と流夏海と刹那よ」

神「次は、初登場もいるね」

ライト「何だよこのチート空間」

流々「うわ凄っ」

音無「えっと、お願いします」

要「水橋様より、ライト・T・テスタロッサと高町流々、音無だ」

久遠「次もキャラは初登場だよ」

御門「みんなのお兄さんだよ」

楔「緋水様より、御門慧よ」

神「お次はこちら」

ゼロ「被ってるのがいるんだけど」

リッゴー「括弧で違いがわかるだろ」

要「灰音様より、ゼロとリッゴー・トリニクル・スシェルス・グランセイス・ディレクトだ。長い」

久遠「次はこちらだよ」

恭介「ハッハー！！俺だぜ！！」

イヴ「ご迷惑をおかけします」

楔「うりあ様より、高木恭介とイヴね」

神「今度は彼ら」

レイ「イエーイ！！」

優「はぁ、大変だ」

要「Ａｒｉｓｈａ様より、レイ・ツァイベルとフラグ神、暁優だ」

優「おかしくね！？」

要「おかしくない」

久遠「こっちもよくお世話になります」

ヒスイ「なんか俺弱くね？」

シルフ「仕方ないかと」

楔「バルディッシュ様より、ヒスイ・ハーツとシルフよ」

神「残りは初登場」

優星「今日はよろしくお願いします」

エクス《こんにちは》

要「天照大神様より、津川優星とエクスだ」

久遠「初登場～」

シノン「邪魔させてもらう」

楔「雪月花様より、シノン・ガラードよ」

要「以上のメンバーで座談会を開始する」

神「多いのは気にしないように。ではスタート」

カイト「お前が流士か」

士「そうだけど」

カイト「・・・・・・雑魚っ」

士「な!?」

御門「喧嘩するなよ、お前負けるから」

黄宇「お前が御門か。話には聞いてるぞ」

御門「それは光栄」

士「グググッ」

夏海「落ち着いて!お兄ちゃんでも勝てないから!!」

ソウヤ「喧嘩か?俺もやるぞ!!」

ゼクト「ソウヤ、飲み過ぎじゃ」

オルタ「酒に飲まれてどうする」

ソウヤ「うっせー!!キスすっぞ!!」

ゼクト「それは、大歓迎だが」

オルタ「うむ、そうだな」

一真「惚気るなよ」

吼太「人前だぞ」

要「ったく、何考えてんだか」

シノン「何故だろうな。初対面なのにこの人達も惚気てそうな気がする」

ライト「そんなのいちいち気にしたら駄目だぞ、シノンとやら」

流々「ライト様、あっち行きましょう」

音無「兄様は私とこっちに行くんです」

ライト「おいおい、俺は一人なんだぞ。仲良くしてくれ」

シノン「確かにそうみたいだ」

アリシア「惚気なら私だって出番が」

アリサ「需要がないからね～」

すずか「大人しく帰ろうね～」

アリシア「二人共放して！！って私の出番が終わりの気がするー！！」

アリサ・すずか「「我慢我慢」」

葉生「・・・・・・」

亮「・・・・・・」

葉生・亮（（なんか親近感が））

→自分の中に別人格がいる者同士

葉生・亮「「これからもよろしくお願いします」」

貴史「あの二人は何してんだ？」

志貴「そんな事より死合しようぜ」

紅蓮「俺様も混ぜてくれるよな」

貴史「いいぜ。纏めて相手・・・・・」

せつな（じーーー）

貴史「・・・・・・・仲良くしよう」

志貴「・・・・・・・そうだな」

紅蓮「・・・・・・・ああ」

鋼牙「せつな～、久遠ちゃ～ん、遊ぼ～」

せつな「うん！」

久遠「やろ！」

刹那「ねぇ、僕も入れて」

鋼牙・せつな・久遠「「「いいよ」」」

刹那「ありがとう！！」

百合姫「いいわね～♪」

鈴「そうだな」

百合姫「あら？いつもよりテンション低め？」

鈴「あれ見てみ」

シルフ「うっ、鼻血が止まらない。でもあの光景をカメラに収めなければ」

ヒスイ「そんな事しなくていい！！誰か救急車を！！」

龍斗「大丈夫ですか？すぐに応急処置を」

シルフ「私の邪魔をしないで下さい！！」

ドゴッ

龍斗「グハァ！？」

ヒスイ「龍斗ーー！？」

百合姫「・・・・・・成る程」

鈴「たまには自重も大切だな。大人しく見守ろう」

楔「私ならいくらでもＯＫよ♪」

百合姫「なら３Ｐ、ヤる？」

鈴「場所は？」

楔「用意してあるわ」

百合姫・鈴「「流石楔」」

詩音「優お兄ちゃ～ん♪♪♪」

優「詩音に酒飲ませたのは誰だ!?」

レイ「俺らだが」

恭介「何か問題でも」

水薙「あったかしら?」

優「大有りだ!!」

詩音「優お兄ちゃん、詩音の初めて貰って」

優「落ち着いて、な?な!!」

レイ「いい肴だ」

恭介「なんか気が合いそうだな」

水薙「いいわね、人が不幸なのって」

レイ「あれはある種の幸福だけどな」

リッゴー「お前ら何してんの？」

飛翔「強くなるための有効的な訓練法をゼフィリスに教わっている」

ユーノ「以前要に酷い目に遭わされたからね」

ゼフィリス「さて、次は体の動かし方だな」

リッゴー「頑張るねぇ、此処まで来て」

優星「僕もいいですか？」

ゼフィリス「ああ、もちろんだとも」

リニス「ゼロくんも大変だったのね」

ゼロ「でも今が楽しいですから」

アインス「それはいい事だ」

ゼロ「そうですね。零やリッゴーのお陰で人生というものに触れる

事が出来ましたし」

アインス「私も、もしあのままだったら」

リニス「そういうのは無しにしましょう。今日は楽しい日なんですから」

アインス「そうだな」

遥「へー、イヴは恭介が好きなのか。で、鈴音は飛翔が好きと」

イヴ「はい、主は最愛の人です」

鈴音「そうなんですが、やっぱり父様は娘としか見てくれなくて」

遥「大変だなぁ。でも義理なら大丈夫だろ」

イヴ「理由は？」

遥「血縁、特に親子間で子供が出来た場合、その子になんらかの障害がある場合が多い。それを考えたら義理の娘との間なら子供が出来ても大丈夫」

鈴音「それは関係ないと思います」

ゼロ《さて、俺達はどうする？》

アリストテレス《デバイスで集まったはいいですが》

エクス《そういえばトゥードは何故人なのですか？》

トゥード「マスターに何かあった時のために」

アリストテレス《詩音様は人気ですからね》

ゼロ《大変だな》

エクス《愛されているのですね》

アリストテレス《なら私が貴女を愛しましょうか？エクス》

エクス《えっ／／／／》

アリストテレス《すみませんね、貴女が可愛いらしかったもので》

エクス《か、からかわないで下さい！！／／／／》

アリストテレス《おや、本気でしたのに》

エクス《／／／／》

ゼロ《あれって》

トゥード「口説きましたね」

ゼロ《いいのかよ》

トゥード「無意識フラグを立てる貴方よりマシかと」

ゼロ《えっ？》

一真「おいおいあれって」

優星「エクス、よかったね」

一真「いいのかよ」

優「でも女性を口説くって」

貴史「無意識フラグ立てるお前らよりマシじゃね？」

一真・優星・優「「「えっ？」」」

神「さあこれでお開きです。みんな楽しんだかな？」

全員『おーーー！！』

要「本来は一人一人にプレゼントを渡したいんだが、いかんせん人数が多い。纏めてで勘弁してくれ」

楔「『チートじゃ済まないｉｎネギま』のキャラを誰でも、何人でも、好きに使える券」

久遠「久遠のストラップ！！」

神「僕が夜なべして創った一度だけ願いを叶えてくれる宝玉」

要「以上だ。っと優星、ちょっといいか？」

優星「何？要にぃ」

要「エクスにこれを。妊娠、出産も可能な擬人化パッチだ」

優星「ん、わかった」

神「ではみなさん、また会う日まで！！」

５０万記念企画（後書き）

雨「５０万アクセスありがとうございます」

椛「今日は続・アリシャの部屋は休みです」

雨「にしても人数多かった」

椛「合宿でテンションが高かったからこんなに早く書けてよかったですね」

雨「しかし勝手にフラグ立ててよかったのか」

椛「擬人化はいいとしてもあれはどうでしょう」

雨「天照大神様、駄目なら即直しますんで遠慮なく言って下さい」

椛「次回から修学旅行編。お楽しみに」

修学旅行って定番あるの？（前書き）

いつもより少し短め。

修学旅行って定番あるの？

要ｓｉｄｅ

朝っぱらから近右衛門に呼び出されたんだが、大方修学旅行についてだろう。

「スプリングフィールド先生も呼ばれましたか」

「はい、どうされたんでしょう？」

「修学旅行がハワイ行きになったとか？」

「えー、京都楽しみだったのに」

「修学旅行はハワイに変更しようと思う」

あ、マジで当たった。しかしハワイか。普通の学校はなんなんだろな？俺は前世では奈良だったんだが。そういえば京都を楽しみにしてたネギ坊主はどうなった？

「ｏｒｚ」

おおう、見事なｏｒｚポーズ。なかなか出来るものじゃないぞ。見直した。

「ネギくん、そう落ち込むでないて。わしは一条先生と話があるから教室に行ってくれ」

「・・・・・・はい」

あーあ、落ち込んじゃって。そんなだと雪広に食われるぞ。さて、俺は話をするか。

「実はですね」

「予想は出来てる。呪術協会の下っ端共が魔法先生を拒否したんだろ？」

「その通りです」

詠春の奴、ちゃんと止めろ。と言いたいが、勝手に暴走したんだろうな。ああ厄介だ。

「でも京都だろ？」

「親書を運ぶという名目ですがの」

親書なんて正直なくてもいいんだよな。此処とあっちのトップが親族なんだから。

「ならなんでハワイなんて言った？」

「遊びですじゃ」

「ハハハ、遊びならしょうがない」

このあとネギ坊主に京都行きになった事を伝えると、歓喜のあまり奇妙な踊りをした。魔力が吸われた気がした。

此処はみんな大好き『千年城』。みんなの憩いの場。幻想郷の香霖堂みたいなもん。物は取られないけどね。

「お前らも行くのかよ」

「茶々丸が行くからな」

「本当はエヴァが行きたいだけなのよね」

エヴァンジェリンは京都好きだな。話に聞く限り年に何回も行ってるらしいからな。

「しかしうちの家族も来るんだが」

「修学旅行に家族を連れてくるな」

着いてくるなんだけどな。一緒にいる方が京都の馬鹿から生徒を守るには都合がいい。というかマクダウェル家に一条家、そしてクラトス。過剰戦力にもほどがあるな。

「なあ要、確か鏡って今日教師になったんだよな」

「なんだ志貴、話を聞きたいか？」

「少し」

なら話すとしよう。あいつの就任初日を・・・・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

近右衛門と話が終わった後、鏡が学園長室に入ってきた。

「失礼するぞい」

「よく来たの。話は？」

「オリジナルから聞いておる。オリジナルが学園にいる限り、無給奉仕じゃったな」

「うむ」

あの事件の罰としての奉仕活動だ。まあうちはこいつが働かなくても十分金はあるからな。

「じゃあ教室行くぞ」

「うむ」

「はい注目。今日は新しい古典の先生が来てます」

『おー』

「ほら入れ」

「ぶっきらぼうじゃな。さて皆の集、儂が新しく古典を担当する事になった一条鏡じゃ。そこにいるのとは双子っぽいのじゃ」

『っぽい！？』

「そこにいるのとは苗字が被るから鏡先生と呼ぶとよい。そっちは要先生じゃな」

「勝手に決めるな。まあそうした方がいいか」

「質問です！！なんで要先生と鏡先生は髪色が違うんですか？」

「そりゃ見分けがやすい「要が不良なだけじゃ」おい！！」

『そーなのかー』

「納得するな！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「とまあこんな感じだ」

あいつすぐにクラスに馴染んだな。というかあのボケはなんなんだよ。

「・・・・・・お疲れ様」

「全くだ」

そうなるとあいつも修学旅行に来るんだよな。京都大丈夫か？

「さて、修学旅行の準備をするかね。お前ら宿はどうするんだ？」

「俺ら？」

「エヴァが決めてるわ」

「お前らと同じ宿だ」

何だよ。なら尚更協力してもらった方がいいな。

「邪魔したな。また今度な」

「またな」

家に帰るとみんなが別荘で修行をしていた。あれ？何でこいつがいるの？

「ようパチェ」

「久しぶりね」

何故にこいつがいるんだ?

「すずかに呼ばれたのよ。夕映とかいう子を鍛えてって」

「ああ」

なんか雰囲気が似てるからこいつも夕映も。本が好きだし。

「わざわざご苦労だな」

「まあ楽しかったわよ。なかなか筋もいいし、タイプも私に近いし」

「ほう、ならロイヤルフレアも使えるのか?」

「焦げたけど」

焦げ・・・・・使えたのは才能はあったという事で。

「じゃあね」

「おう」

「あ、そうそう。のどかとかいう子は地霊の主が鍛えてたわよ。何でも彼女のアーティファクトが覚(さとり)の能力に近いからだそうよ」

確かイドノエニッキだっけ?相手の心を読む事に関しては近いな。

読む相手を自由に選べる点ではこちらが上か。まあ読む力は覚(さとり)が上だろうが。

「もう一つ。妹様が遊びたがってるわ。貴方はなかなか壊れないからね」

「はいはい」

フランにはもうちょっとまともな遊びを教えろよ。弾幕ごっこも遊びったら遊びだけどよ。

「ちょっと体動かすか。っとクラトスも来たのか」

「先程誘われてな」

「ちょうどいい。少し手合わせしようぜ」

「いいだろう。行くぞ!!魔神剣!!」

「シールドスライサー!!」

この時はまだ修学旅行であんな事やそんな事が起こるなんて思いもしなかった。

修学旅行って定番あるの？（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は島根」

シャ「今日のグルメは？」

椛「あご野焼です」

ア「・・・・・ちくわ？」

シャ「ちくわ、ね」

椛「トビウオで作ったちょっと硬めのちくわと考えればいいです。わさび醤油で食べましょう」

ア「今回は鏡の就任とのどか、夕映の強化フラグね」

シャ「ロイヤルフレア、自分も焦げる」

椛「まあまだ始めたばっかりですし」

ア「そういえば修学旅行には優が来るそうよ」

シャ「本当に出るかはわからないけどね」

椛「では次回もお楽しみに」

初日から大変だ（前書き）

一日目を今回の話で終わらせるつもりが続けてしまった。

初日から大変だ

刹那ｓｉｄｅ

修学旅行か。正直ハワイがよかったなぁ。京都なんて故郷やから大きな休みの度に行っとるし。

「せっちゃん、お小遣はどうする？」

「五万円」

「多っ！？」

いや、楽しまないと損やし、楽しむにはお金もいるし。

さて、うちらは駅に着いたんやけど、ピンチや。とてもピンチや。

「ほら刹那、どうせ余分に金持ってんだろ？出しなさい」

「持ってへん」

「なら財布見せろ」

「プライバシーの侵害や」

要さん、見逃してぇな。昔からの仲なんやから。何でこういう時に限って教師面をするんかな。

「失礼な事考えるな」

「何も考えてへん。何を根拠に」

「冷静過ぎる。逆に怪しいぞ」

うっ、そういわれると確かに淡々と話し過ぎた気がする。

「まあ見逃してやろう」

「ほんまに!?」

「はいアウト。その反応じゃバレバレだ」

「あ・・・・・・」

まあ結局見逃してくれたのは優しいというかなんというか。

新幹線の中、何かが起こりそうな気がする。というかこの志貴さん達に要さん達にクラトス先生。このメンバーで何も起こらない方がおかしい。あ・・・・・・

「このちゃん、ちょっと」

「ん？」

「お手洗いに」

「はいはい、行ってらっしゃい」

あうー、ちゃんと駅でトイレに行っとけばよかった。

「ふぅ」

『せっち～ゃん』

『どうしたん？いきなり念話して』

『なんや蛙が出て来てな、ネギくんが親書奪われたんやと。そっちに行ったから』

何やっとんやか。こっちに来るんやったら助けてあげなかんな。とはいえ物干し竿を使えんしな。物差しでいいかな。

「おっ、あれかな？」

式紙で出来た燕が飛んできた。本物の燕とは違うから簡単に斬れるかな。

「ハッ！！！」

ザンッ

危なっ！！もう少しで親書まで斬ってまうとこやった。

「待てー！！」

ようやく来たんか。

「あれ？刹那さん」

「これ大切なものでしょう？」

「あっ！！親書！！ありがとうございます！！」

真面目なのはいいんですが実力がこれでは京都で親書を守るのは厳しいですね。しかし相手の狙いは親書なのでしょうか？まあどちら

にしろ負けなければいいんです。

要ｓｉｄｅ

ホテルに着くまでいろいろあったな。新幹線の蛙とか、落とし穴の蛙とか、滝の酒は美味かったな。酒を垂れ流してた酒樽を全て飲み干したらウワバミだのバッカスだの言われたけど。

「一条先生、温泉入って下さいね」

「あいよ」

温泉はいいね、胃に優しいね。

「おっ、スプリングフィールド先生もですか」

「はい、さっき言われまして。そういえばいいですか？」

「はい、何ですか？」

「そろそろそういう硬い呼び方は止めて欲しいなと。僕も要先生って呼びますから」

「ＯＫ、ネギ坊主。さあ入るぞ！温泉の作法を教えてやる」

「いきなりフランクですね」

ネギ坊主から言うまで我慢してたからな。それに今はどちらかといえばプライベートな時間だからな。さて入りますか・・・・・・

「誰だ？」

「えっ？誰かいるんですか？」

「岩に隠れてるのはわかってるぞ」

しかしこの気配。誰だっけ？よく知ってるような気がするんだが。とにかく確かめないとな。

「でも湯舟に入る前にかけ湯は大切だ」

「そんな悠長な」

湯舟に入って岩の後ろを見ると、異様に縮こまった刹那がいた。

「・・・・・今は男の時間だぞ？」

「・・・・・間違えました」

ならしょうがないか。次から気をつければいいんだし。

「「キャーーー！！？」」

「!?　今のは!?」

「アスナさんと」

「このちゃん!?」

しまった!まさか風呂時を狙うとは。予想出来た事だろうに。弛んでたな。

「来い朔夜!!」

朔夜を喚び出し身に纏う。本当にこういう時に便利だな。

「行くぞ!!」

「はい!!」

声が聞こえたのは女子更衣室だが、緊急事態だ。それにガキの体で欲情するような男じゃないしな。↑ヴィータと三日に一度はヤッてる人。

「大丈夫、だったな」

「はぁ、はぁ、何だったのよ」

「びっくりしたなぁ」

そこにはモップを持っている二人がいた。散らばっている紙は式紙か。

「お疲れ、じゃ」

「女子更衣室に入ってきておいてその態度はなんだ！！！」

「あべしっ！？」

明日菜ちゃんに殴られてしまった。想像以上に痛！？

「そこ！！！」

明日菜ちゃんの持っていたモップを奪い、薮の中に投げ付けた。

「ちっ」

外れ、いや防がれたか。

「これから会議をする。いいな？」

とある部屋に関係者全員に集まってもらい会議を始めた。

「問題が発生した」

「何が起こったのだ？」

「敵戦力についてだ」

いくらあれがモップだったとはいえああも軽く防がれるとは思わなかった。

「どれくらいなのよ」

「そこまではわからんが、木乃香と刹那では対応出来ないレベルだ」

「つまり二人、特に木乃香ちゃんを一人にしちゃ駄目な訳だ」

今回の件で相手の狙いが木乃香とわかったしな。

「あの、こんな空気の中悪いけど、トイレ行きたいんやけど」

『・・・・・・はぁ』

この状況でよく言えたもんだな。まあ誰かを付けるって決定した後だからいいんだが。

「なら僕が「すずか、頼む」え？」

「お前な、女性のトイレに着いていく気か？」

「あ・・・・・・」

「じゃあ行こうか」

「はようはよう！！」

すずかｓｉｄｅ

「早くね」

「はーい」

さてと、いろいろ考えるとしようかな。要くんがああ言うんだから結構な相手だろうし、私で大丈夫だったのかな？

「どうにかなるかな」

「もし、木乃香という娘は何処にいますか？」

「今このトイレに、って誰！！」

後ろを向くとそこにいた人は予想外にもほどがあった。

「・・・・・なんで、貴方が」

「それは、秘密です」

ごめん要くん。木乃香ちゃん守れないかもしれない。

初日から大変だ（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「何気に忘れてたね、奈良」

シャ「ポリポリ」

椛「もぐもぐ」

ア「漬物でご飯食べてんじゃないわよ」

シャ「奈良と言ったら奈良漬けでしょ」

椛「さっぱりしますね」

ア「まあ美味しいけど」

シャ「そうそう、京都側もちょっと強化します」

椛「今更ですがね」

ア「それとクリスマスネタは雪合戦になりました」

シャ「コラボはないけどね」

椛「京都側に誰が出るか当てた人には何かあるかもしれませんし、無いかもしれません」

ア「絶対ないでしょ」

シャ「型月より一人。テイルズより一人。全く関係ない作品より一人です」

椛「では次回もお楽しみに」

三人の刺客（？）（前書き）

京都側には誰がいるんでしょうか？

しかと見よ！！

三人の刺客（？）

刹那ｓｉｄｅ

ロビーで待っとるんやけど、さっきからトイレにしては長い時間が経ってる気がする。まさか、いやすずかさんがいるんやし。

プルルル、プルルル

ん？　携帯電話かな？　誰のやろ。

「はい、一条です」

「要さんのか」

一体誰からの電話やろ。

「おいすずか！！マジかよ！？」

「え、どうしたんですか？」

「まさか、近衛が掠われたか？」

クラトス先生がそんな事を言う。でもこの反応だとまず間違いなく。

「その通りだ。想定外にもほどがある。今すぐ行くぞ！！」

「ああ」

「はい！！」

「ネギ坊主達はすずかを助けろ。終わったら応援に来い」

「わかりました！！」

「任せて！！」

そういえば志貴さん達は自分の部屋に帰ってしもうたけど、今呼んでいては遅い。そうだ念話して。

「志貴達は呼ぶな」

「どうしてなん？」

「ここで戦力を全て見せる訳にはいかない」

確かに志貴さんの眼やアルクェイドさん達、真祖の力は隠した方がいいかもしれへんけど、相手はすずかさんを倒したっちゅうのに。

「大丈夫、すずかちゃんは一番弱いんだよ？じゃあ私達は先に行くね」

なのはさん達は先に空に飛んでいった。うちらもはようせんと。

「あやや、大変な事になりましたね」

「文さんもそんな事言ってないで」

「はいはい、刹那さん着いて来なさいよ」

「わかってます！！」

このちゃん、待っててな。

要ｓｉｄｅ

いきなりすずかが『ヘルプ・・・・・やられ・・・ました』って連絡してきた時は驚いたな。とりあえず俺とスバルとクラトスは陸から追い掛けている。空にはなのは達が飛んでいる。

「いたよ！！」

「ああ」

「もう追い付いたんかい！？」

木乃香を抱えている猿の着ぐるみ女を見つけた。その隣には男が一人。

「任せたで！！」

「いいだろう」

男が立ち止まって振り返る。あいつ、知ってるぞ。俺よりクラトスの方が詳しいか。

「！？　ユアン！？」

「久しいなクラトス」

「ここはお前に任せるぞ、クラトス」

「ああ。ハアァァァ！！！」

「ウオォォォォォ！！！」

クラトスの剣とユアンのダブルセイバーがぶつかるのを見届け、俺らは追跡を開始した。

クラトスｓｉｄｅ

ガキィン

「貴様が！何故！いる！！」

ガキィン

「さあな！私も！知らん！！」

私もかなり成長したつもりでいたが、ユアンも見事な太刀筋だ。

「サンダーブレード！！」

「無詠唱だと！？」

いくら得意属性とはいえ詠唱を全くせずに魔術を放つとは。サンダーブレードを避け間合いを詰める。

「閃空裂破！！閃光墜刃牙！！！」

「甘い！！」

防がれたか。やはり技は完全に見切られているか。ならば貴様が知らない技を見せてやろう。

「隙だらけだぞ！！天翔雷斬撃！！！」

「そこだ！！魔王地顎陣！！！」

「な！？ぐあぁぁぁぁ！？」

地の魔力を剣に付加させ地面を叩き付ける。すると大地が割れ、溶岩が噴き上がった。

「くっ、なんだその技は！！」

「成長しているのは貴様だけではないという事だ」

「面白い！！」

志貴ｓｉｄｅ

なんかさっき魔力を感じたんだが、まさか要達が何かしたのか？

「ささ、兄様。グイッと」

「なあエヴァ、あいつら」

「木乃香が掠われたんですって」

「何だって！？どうして早く言わないんだアルクェイド！！」

「止められてたから」

「止められていた？」

話を聞くとどうやら俺達は隠し戦力らしい。とはいえ歯痒いな。知り合いが掠われているのに助けられないとは。

「誰か来ます」

「何？」

茶々丸がそう警告すると部屋のドアが開いた。

「よう志貴」

「！？　な、どうして」

「さあな。俺らも気付いたら呼ばれてな」

「『ら』？」

という事はこいつ以外にも誰か来ているのか。厄介だな。

「兄様、こいつ「おい志貴！！兄様とはどういう事だ！！俺らには妹がいるだろ！！」妹？」

「落ち着け。紹介するよ。今は敵のようだが、こいつは遠野四季」

「ま、兄弟みたいなもんだな」

「思い出した！！ロアに転生された奴！！」

「痛いとこ突くな」

四季はへらへらと笑っていた。こんな奴だったか？いや、ロアに乗っ取られる前はこんな感じだったか。

「それで用は？」

「今日は顔見せだ。次に会ったら殺し合いだな。どっちが地獄に堕ちるやら」

「地獄になら、遅かれ早かれ二人共堕ちるよ」

「違いない。じゃあな」

四季は笑いを堪えながら出て行った。死んだはずの四季がいるとなると、これから何が起こってもおかしくないな。っと、よく考えたら俺も死人だったな。

要ｓｉｄｅ

「捕まえた！！」

「ひーー！！三枚符術・京都大文字焼き！！」

「っと」

なかなかにしぶといな。いい加減捕まれっての。

「刹那」

「はい」

刹那が能力で火炎の周りの酸素をなくし消化する。いかに魔力の火とはいえ酸素がなければ燃えないからな。そして火炎が消えた先に広がっていたのは。

「・・・・・・魔族」

１～２００はいるであろう魔族。そしてその中心にいるおかっぱ糸目の男。成る程、こいつならすずかがやられてもしょうがない。

「ようゴキブリ魔族」

「それはやめて下さいよ」

「そうかい、獣神官（プリースト）ゼロス」

こいつがどうしてここにいるかは知らないが、邪魔をするなら潰すか。ま、その前に。

「刹那、文、木乃香を救出しろ」

「はい」

「了解です」

二人は飛んでいったが、魔族もゼロスも動く事はなかった。

「止めなくていいのか？」

「ええ」

余裕だな、相変わらず。

「そちらの方も出て来たらどうです？」

「ばれておったか」

俺の影から鏡が出て来る。

「皆さん強そうですね。すずかさんも動揺していなければ木乃香さんは奪えませんでした」

「そうかい。お前ら！一人全殺のつもりで戦うぞ！！」

「全力で倒すよ、レイジングハート」

《もちろんです》

「バルディッシュ、行けるよね？」

《イエスサー》

「鉄槌の騎士、参る！！」

「私の拳で全てを砕く！！」

「魔族、美味そうじゃ」

「おお怖い怖い。では足止めさせてもらいますよ」

結局この戦いの中、ゼロスには逃げられてしまった。クラトスもユアンに逃げられたそうだ。更には念話で四季が出たって聞いたし。そして問題の木乃香は応援に来たネギ坊主の武装解除が上手くいって助かったらしい。しかし対策が大変だな。ゼロスにユアンに四季。この世界にいる理由。京都側につく理由。どれもわからんが、邪魔をするなら潰そう。

三人の刺客（？）（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「山形～」

シャ「いつも通り、名物は？」

椛「玉こんにゃくです。からしを付けてお召し上がり下さい」

ア「山形はこんにゃくの消費が日本一」

シャ「こんにゃくはカロリー０だから女性に優しい」

椛「さて、バルディッシュ様がゼロスを、優さんが四季を当てました」

ア「ゼロスは前回の最後の台詞がヒントなんだけど、まさか四季を当てるとはね」

シャ「作者はネロか四季。ミトスかユアンかで迷ったそうよ」

椛「当てた人はどうしましょう？」

ア「雪合戦に参加」

シャ「拒否はもちろん可能です」

椛「では次回もお楽しみに」

クリスマス企画　雪合戦大会（前書き）

とりあえず適当に書いたからそこら辺は気にしないで下さい。

クリスマス企画　雪合戦大会

神「さあ始まりましたクリスマス企画！！」

雨「まずはルール説明」

神「雪合戦では相手に球を当てるか、旗を奪えば勝利だよ」

雨「雪玉は神様が用意した物を使用。石を入れちゃ駄目です。隠れる雪壁もあるよ」

神「チームは４人一組。チーム表はこちら」

一条家Ａチーム・・・要、楔、鏡、なのは

一条家Ｂチーム・・・フェイト、ヴィータ、スバル、久遠

マクダウェル家チーム・・・志貴、アルクェイド、エヴァンジェリン、茶々丸

パパと娘チーム・・・木乃香、詠春、刹那、天魔

ラブラブ（？）チーム・・・優、舞花、のどか、夕映

機械と自然チーム・・・すずか、千雨、舞人、文

刃物と射撃チーム・・・クラトス、チャチャゼロ、ヒスイ、真名

後書きチーム・・・雨季、椛、アリサ、シャマル

神「君も出るんだ」

雨「数合わせに」

神「まずは一条家Ａチーム対一条家Ｂチーム。ではスタート」

第一試合

Ａチーム側

要「正直ここ最強じゃね？」

楔「そうよね」

鏡「やる前から勝った気でいるのはどうかと思うの。まあ儂もそう思うが」

なのは「でも向こうは久遠ちゃんがいるよ」

要・楔・鏡「「「あ・・・・・・」」」

一条家では久遠に逆らえる人はいない。本気の雪玉なんて当てたら大変。お遊び程度の雪玉では妲己のオートガードに防がれる。

なのは「旗を狙おっか」

要「ああ」

Bチーム側

ヴィータ「とりあえず久遠が前で雪玉を投げてくれ。隙があれば旗を取ってくれ」

久遠「うん、わかったよ」

フェイト「向こうは旗を狙ってくるはず」

スバル「私達が守らないと」

久遠「楽しみだな～♪」

雪合戦スタート

要「オラオラオラ！！！」

楔「えいえいえい！！！」

鏡「ほれほれほれ！！！」

なのは「シューティング雪玉！！！」

要、楔、鏡は雪玉を乱射し、なのはは魔法で飛ばす。もちろん久遠には当てないようにしている。

久遠「えい！えい！」

久遠が投げる雪玉は全てが相殺されていく。

ヴィータ「あいつら本気過ぎるだろ！！」

フェイト「壁から出れない」

スバル「これ拳で防いだらアウトなのかな？」

ヴィータ「とりあえず久遠の応援を、グハッ！？」

フェイト「ヴィータ！？」

要「そんな壁なぞ貫いてやる！！」

どうやら要の雪玉が雪壁を貫いてヴィータに突き刺さったようだ。

フェイト「もうしょうがない。出るよ！！」

スバル「よしきた！！スバル行きまーす！！」

ズドドドドドッ

スバル「グハァ！！？」

スバルは大量の雪玉を受けて雪だるまになった。

フェイト「バルディッシュ、真・ソニックフォームでいくよ」

バルディッシュ《イエスサー》

フェイト「こっちだよ！！」

要「この弾幕に耐え切れるか？」

なのは「悪いけど墜ちてもらうの！！」

鏡「この雪原の中、寒そうな格好じゃの」

楔「当てるわよ！！」

いくらフェイトが速くても、厚すぎる雪玉の弾幕の前には一歩及ばなかった。

フェイト「ぐっ！？」

楔「ヨッシャ！！当たった！！」

久遠「取ったー！！」

しかし久遠に旗を取られてしまった。

鏡「・・・・・忘れとったのぉ」

神「そこまで！！一条家Ｂチーム勝利！！」

第二試合

マクダウェル家チーム側

志貴「思ったより激しいな」

アルク「相手はなかなか強いわよ」

茶々丸「しかし木乃香さんと刹那さんが枷になるかと」

エヴァ「茶々丸の言う通りです。経験少ない二人がキーパーソンになるのは間違いありません」

志貴「だな。でもそれを言ったら茶々丸もだろ？」

茶々丸「あぅ」

アルク「あー、落ち込ませた」

エヴァ「デリカシーがありませんね」

志貴「えー」

パパと娘チーム側

天魔「二人は下がっておれ」

詠春「私達がやりますからね」

刹那「チーム戦なんやけど」

木乃香「うちらも参加したい」

詠春「あんな危険な弾幕に娘を出せますか」

天魔「本来なら戦場にすら出したくないのだぞ」

刹那「あれ？今父様達の頭の中が雪合戦＞戦場になっとる気が」

木乃香「気にしたら駄目や」

雪合戦スタート

詠春「喰らいなさい！！」

エヴァ「雪玉を気で強化するな！！」

天魔「父とは娘の前で良い格好を見せたいものよ」

刹那「なんちゅうか良い格好より」

木乃香「大人げない」

詠春・天魔「「！？」」

父親はショックを受けた。動けない。

茶々丸「今です」

ドン　ドン

詠春・天魔「「あべしっ！？」」

茶々丸が撃った（投げた×）雪玉がショックで動けなくなっていた父親二人を倒した。

木乃香「よしやるで！！」

刹那「てい！！」

志貴「よかった、普通になった」

アルク「でもプロ野球並のスピードだけどね」

エヴァ「さっきよりマシです」

茶々丸「頑張ります」

結局人数差もあってマクダウェル家チームの勝利。

第三試合

ラブラブ（？）チーム側

舞花「優さんは私が守ります」

優「いや、俺男だし。女の子に守られるのはちょっと」

のどか「じゃあ、私を守ってくれますか？」

優「ああ」

のどか「エヘヘ」（ニヤリッ）

夕映「（のどか、恐ろしい子！！）私達は力がありませんので頼りにしてますよ？」

優「頑張るよ」

機械と自然チーム

文「何故自然に舞花さんがいないのでしょう？」

舞人「まーちゃんだからさ」

すずか「ここはこうして・・・・・・」

千雨「あ、でもこうしたら・・・・・・」

すずか「成る程、なら・・・・・・」

舞人「二人が何か作り上げるまで守ろう」

文「そうですね」

雪合戦スタート

文「このスピードに着いて来れますか？」

優「速い！！」

のどか「次は右！！左！！下に降りてからの直進！！」

舞花「行動がわかっていても速いと当たりませんわね」

舞人「そっちばっかり見てたら駄目だよ」

バシッ

夕映「あいた！？」

優「夕映ちゃん！！」

夕映「嘘つき」

優「へっ？」

夕映「守ってくれませんでした！！優さんの嘘つき！！」

優「ご、ごめん」

夕映「なら後で私の部屋に来て下さい」

舞花・のどか「「駄目！！！」」

文「これは、攻撃のチャンスですか？」

舞人「ここで攻撃したらＫＹだよ」

すずか「たとえＫＹだとしても」

千雨「勝てばそれでいい」

ババババババババッ

文「？　ヘリコプター？」

ラブラブ（？）チームの上空にはヘリコプターが飛んでいた。

すずか・千雨「「落下！！」」

ドサササササササッ

優・舞花・のどか・夕映「「「「わあぁぁぁぁぁ！！？」」」」

ヘリコプターから多量の雪玉が落とされ、優達は埋もれた。

舞人「うわー」

文「これは酷い」

すずか「戦いは頭脳だよ」

千雨「軽いな」

神「試合終了」

第四試合

刃物と射撃チーム側

ヒスイ「さて、どうする？」

チャチャゼロ「ルールナンテ気ニスンナ」

真名「流石にそれは駄目だが」

クラトス「ルールに書いてない行動なら問題あるまい」

チャチャゼロ「ケケケ、成程ナ」

ヒスイ「何をするんだ？」

クラトス「つまりな・・・・・・」

後書きチーム側

雨季「まず勝てる見込みはないぞ」

アリサ「わかってるわよ」

シャマル「なんでこうなったのかしら？」

椛「数合わせですよ」

雨季「いざとなったら俺が椛を守る。だから安心しろ」

椛「雨季さん／／／」

アリサ「黙れ」

シャマル「死んでしまいなさい」

雪合戦スタート

雨季「とにかく投げろ!!」

アリサ・シャマル・椛「「「おーーー!!!」」」

パン　パン　パン　パン　パン　パン

アリサ「ちょっ!?」

シャマル「撃ち落とすなんて有りなの!?」

雨季「ルール上問題ない。ヒスイと真名を同じチームにしたのは失敗だったか」

ヒスイ「あのくらい撃ち落とすのは軽いな」

真名「射撃の練習にもならないな」

クラトス「では行こうか」

チャチャゼロ「ケケケ」

雨季「来るぞ!!」

アリサ「あー、もう!!」

椛「えい！！」

ザンッ

シャマル「斬られた！？」

雨季「雪玉が直接体に触れなければアウトじゃない。仕方ない。逃げるぞ！！」

椛「ひゃっ！？」

雨季は椛をお姫様抱っこして逃げ出した。

アリサ「置いてくな！！」

シャマル「ひぇーー！！」

後書きチームの逃亡により刃物と射撃チームの勝利。

準決勝第一試合

一条家Ｂチーム側

フェイト「どう勝つ？」

ヴィータ「今回は久遠に旗を守ってもらおう」

久遠「うんわかった」

スバル「相手も強いからね。頑張らないと」

フェイト「旗狙いでいこう」

マクダウェル家チーム側

エヴァ「相手は旗を狙うはずだ」

茶々丸「こちらを全員当てるのは難しいですからね」

志貴「フェイトさんの相手を俺がする。あの速さに対応しきれるのは俺ぐらいだろ」

アルク「私も出来ない事はないけどね」

茶々丸「こちらも旗狙いが良いかと」

アルク「ならそうしましょう」

雪合戦スタート

フェイト「一気に行く！！」

志貴「させるかよ！！」

アルク「貴女の相手は私よ」

スバル「勝つ！！」

茶々丸「援護します」

ドン

ヴィータ「私を忘れるな！！」

志貴はフェイトを止め、アルクはスバルとの雪合戦に入り、ヴィータは茶々丸の雪玉を砕く。

エヴァ「暇だな。そうだ、あれをしてみるか」

そう言うとエヴァンジェリンは雪玉をかき集めて何かを作り始めた。

エヴァ「出来た。行け！！雪玉ゴーレム！！」

フェイト「！？」

スバル「凄っ！！」

ヴィータ「雪玉で作んなよ」

久遠「うわー♪」

志貴「何やってんだか」

アルク「子供ねぇ」

茶々丸「マスター・エヴァ・・・・・・雪玉がありませんよ」

エヴァンジェリンが作ったのは、雪玉を全て使った巨大ゴーレム。

スバル「ここは私の番だね。私のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！ばぁぁぁくねつ、ゴッド・フィンガー！！！」

ジュオオォォォ

エヴァ「溶けただと！？くっ、茶々丸！！」

茶々丸「玉切れです」

エヴァ「何だと！？」

志貴・アルク「「あーあ」」

マクダウェル家チーム、玉切れにより敗北。

準決勝第二試合

機械と自然チーム側

すずか「これなら撃ち落とすのも無理だよ」

千雨「でもエヴァンジェリンさんの二の舞にならないかな？」

すずか「そこは計算済み」

文「何をしているんでしょう？」

舞人「また発明じゃないの」

文「自重を知りませんね」

刃物と射撃チーム側

クラトス「厄介だな」

真名「どんな発明を繰り出すのか」

ヒスイ「さっきみたいのは嫌だな。優達は体暖めに行ったし」

チャチャゼロ「食ワレテルカモナ、ケケケ」

ちょっ!?三人共やめ、アーーーーッ

クラトス・ヒスイ・真名・チャチャゼロ「「「「・・・・・・・」」」」

雪合戦スタート

すずか「喰らうがいい!!」

千雨「これが科学の結晶だ!!」

ポイ　ポイ　ポイ　ポイ

ヒスイ「ビー玉?」

真名「!?　伏せろ!!」

カッ

チャチャゼロ「目ガ!!目ガーーー!!」

ヒスイ「な、何だ！？」

クラトス「小型の閃光玉だと！？」

舞人「ヒロインのやる事じゃない」

文「汚い、流石科学汚い」

すずか「お次はこちら！！」

真名「ガトリング砲！？」

千雨「そう！雪玉専用ガトリング砲だ！！」

舞人・文「「１０円キズ付けちゃえ～」」

すずか・千雨「「やめてー」」

ヒスイ「・・・・・・荒鷹」

チュドーン

すずか・千雨・舞人・文「「「「「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！？」」」」」

チャチャゼロ「モロッ！！」

機械と自然チーム、自爆により敗北。

決勝戦

一条家Ｂチーム側

フェイト「すずかの馬鹿」

ヴィータ「身内の恥だな」

久遠「もう終わりなんだね」

スバル「早いね」

フェイト「ここまで来たからには勝つよ」

ヴィータ・久遠・スバル「「「おーーー！！」」」

刃物と射撃チーム側

ヒスイ「まさかここまで来るとは」

真名「いいんだよ。本編で出番がないんだから」

チャチャゼロ「オレナンテイツ出番ガアッタ？」

クラトス「今回くらいは主役でも誰も文句は言うまい」

ヒスイ「俺もたまにはこの小説で活躍したいしな」

雪合戦スタート

ヒスイ「とにかくフェイトは俺らが食い止める！！」

真名「クラトスおじさん達は旗を！！」

クラトス「ああ」

チャチャゼロ「ヤッテヤルゼ」

スバル「こっちだっているんだよ！！」

ヴィータ「止めてやるよ！！」

クラトス「やってみせろ！！」

チャチャゼロ「久遠ノ雪玉ニモ注意シロヨ」

久遠は旗を守りながらも羽衣を使って雪玉を投げまくっている。

フェイト「守りが硬い！」

ヒスイ「やらせるか！！」

ヒスイと真名はフェイトを近づけないように撃ち続けている。

チャチャゼロ「来タゼ！！」

久遠「旗は取らせないよ！！」

チャチャゼロ「関係ネェ！！」

ポイ

チャチャゼロが宙に投げたのはさっきすずか達が使った閃光玉だった。たまたま不発していたものを拾ったのだろう。

チャチャゼロ「撃テ！！」

真名「ああ！！」

パン　カッ

久遠「クー！？」

チャチャゼロ「取ッタ！！」

神「そこまで！！優勝は地味チーム！！」

クラトス・ヒスイ・真名・チャチャゼロ「「「「地味チーム言うな！！！」」」」

神「おめでとう」

雨季「おめでとう」

神「帰ってきたんだ」

雨季「うん」

神「さて、優勝賞品はありません」

全員『何だってーーー！！！』

雨季「そんな予定はない」

神「まあゲストは能力を少し上げてあげよう。はい」

優とヒスイの体が少し光った気がした。

優「どうなったんだ？」

神「恋愛以外のフラグが強化されました」

優「いらねーーー！！！」

ヒスイ「俺は？」

神「魔力が上がったかもしれない。あとゲイルアークが硬くなったかもしれない」

ヒスイ「しれないかよ」

雨季「とにかくこれでクリスマス企画は終了です。皆さんまた次回」

クリスマス企画　雪合戦大会（後書き）

雨季「わー、後書きだ」

椛「あの二人は？」

雨季「気にするな。今日はクリスマスなんだから」

椛「そうですね」

雨季「何か欲しいのあるか？」

椛「うーん、雨季さんがくれる物ならなんでも」

雨季「ハハハ、ならこれをやるよ」

椛「これ新しい剣じゃないですか！！ワーイ♪♪♪」

雨季「よかった。喜んでくれて」

椛「ありがとうございます♪♪♪チュッ／／／／」

雨季「ん」

椛「私からのクリスマスプレゼントです／／／／」

雨季「ありがとな、嬉しいよ」

椛「なんか慣れちゃってますね」

雨季「毎晩ヤってればな」

椛「こんなところで言わないで下さい！！！／／／／」

雨季「スマンスマン。では皆さん、次回もお楽しみに」

椛「あの、雨季さん」

雨季「ん？」

椛「こういうの誰得なんでしょう？」

雨季「俺得」

二日目は恋愛日和！？（前書き）

今回はある意味衝撃的なお話です。何せあの人達が出たんですから。

二日目は恋愛日和！？

要ｓｉｄｅ

昨日は面倒だったな。イレギュラー多過ぎ。人の事は言えんけどな。ま、それは置いといて飯だ。

「なんか騒がしいな」

「ネギくんがどの班と回るかで争いになっているようです」

「文はどうすんだ？」

「要さん、と言いたいのですが、どうやらこちらも競争率が高いようで」

俺を誘いそうなのといったら木乃香に刹那、千雨に文、なのは達もか。

「つーか班って守るもんか？どうせ途中で自然解散。終わりに集合だろ」

「教師がそれを言っていいんでしょうか」

どの教師もそれを容認してるよ。というか言っても聞かないだろ。俺も昔はよくやったものさ。行方不明者が出たが。

「あの、一条先生」

「のどかか。どうした？」

「昨日変な夢見たんですけど」

「雪合戦のあれか」

「知ってるんですか！？」

「知ってるも何も、あれ実際にあった事だし」

神様の力で創った世界で起こった事だな。一晩限りの夢と大して変わらないんだが、現実には間違い。

「ゆえ～、つまり／／／／」

「ヤっちゃいましたね／／／／」

ああ、こいつらは優と、な。やっぱりあいつには責任を取ってもらわんとな。

「頑張れ。先生は応援するぞ」

「「はい／／／／」」

「要さん、私とも」

「文ちゃん、ちょっと来て」

「すずかさん！？まだ死にたく、アーーーーッ」

すずか、文はお前に似ているってのを忘れるなよ。

「要さん、私と回ろうか」

「千雨か。構わんぞ」

「「えーーー」」

「ならお前らも一緒にな、木乃香、刹那」

「「わーーい」」

これが奈良の大仏か。昔は遊んでてまともに見なかったな。うーむ、昔の人はよくこんなの造ったもんだ。

「何度見ても立派だな」

「エヴァンジェリン、いたのか。志貴達は？」

「見飽きたんだと。何故飽きるのやら」

兄様達はわかっていない。とか言っているが、最低半年に一度は来

てるようじゃないか。そりゃ飽きるって。

「私からすれば新鮮だがな」

「そりゃクラトスおじさんは違う世界から来たからね」

「ならば私が一から千まで教えてやろう」

「頼もうか」

やめとけクラトス。と言おうとしたが、言ったら俺まで巻き込まれそうな気がしたからやめた。

「はぁ、一から千は多過ぎるだろう」

「大変だな、真名」

「貴方ほどじゃない」

「要さ～ん、次行くで～！！」

「あいよ～」

そういえばなのは達は何処に行ったんだろう？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「奈良はいいね〜」

「のんびり出来るからね〜」

「なのは、フェイト、おばさんみたいだぞ。まああたしものんびりするのは好きだけど」

「おばちゃ〜ん。お団子十本追加！！」

「太るよ、スバル」

「食べても太らない体質だもん。というかすずかさんだっていっぱい食べてるじゃん」

「私も太らないもん」

「「平和だね〜」」

「お前ら、まだ敵はいるってのに。あっ、おばちゃん。あたしは餡蜜追加で」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

うん、あいつらはほっといてもいいか。

「要〜、あそこ行きたい」

「いいぞ〜。お前ら、久遠があっち行きたいらしいから行くぞ」

「相変わらず久遠に甘いな」

「でも久遠ちゃん可愛いしな」

「一条家のマスコットやしな」

それに俺の妹みたいなもんだからな。ついつい甘やかしちまうんだよな。昔から妹には甘いって言われてたし。

のどかｓｉｄｅ

私と夕映は茶屋で静かに座っている。

「ねぇ夕映」

「何ですか？」

「優さん凄かったね」

「そうですね」

また会えるのかな？いつ会えるのかな？また愛してもらえるのかな？それ以前に愛してくれてるのかな？まともな告白してないし。

「「・・・・・・はぁ」」

夕映も一緒にため息をつく。同じ事を考えてたみたい。

「隣いいかしら？」

「あ、どうぞ」

隣に二人の女性が座ってきた。大きめのベンチだったから四人くらいは簡単に座れた。座ったのは金髪で赤い服の人。もう一人は同じく金髪で緑の服の人。あれ？この人達って。

「確か、アリサさんとシャマルさん？」

「せいかーい」

「よく覚えてたわね」

「昨日の今日ですから覚えているでしょう」

「それでも忘れる人がいるのよ」

それはなんというか悲しい人達だなぁ。

「今日はどうしたんですか？後書きは？椛さんは？」

「サボりですか？」

「サボりで本編に出れるなら毎回サボるわよ」

「後書きはちゃんとやるわよ。椛ちゃんは作者と遊びに」

仲が良いんだな。私達も優さんと気楽に遊びに行ける仲になれたらな。

「今日はプレゼントよ」

「開け時空の扉！！来れ！！暁優！！」

その瞬間、魔法陣が出来て優さんが出てきた。ってえぇ！？

「何処だ此処は！？」

「元気？」

「えっ？なんでみんないるの？」

「今日は一日のどかちゃん達といなさい。じゃ、私達は遊びに行くから」

「またね」

そう言って二人はどこかへ行ってしまった。これでここにいるのは優さんと私達だけ。

「あー、よくわかんないけどよろしく」

「はい！！」

「あ、お茶飲みますか？」

「ん、ありがとう」

朝倉ｓｉｄｅ

流石に自由行動は暇だな。ネギくんはいいんちょに掠われるし。何か面白い事でもないかな。

「おや？」

あれは本屋に夕映。隣にいるのは女性？いや、私の眼はごまかされないわよ！！あれは男！！

「なかなかいい雰囲気じゃない」

しかしあの二人をはべらすなんてあの男、一体何者？

「これはスクープに「そこまでです」な!?裏切ったのか同志!!」

「人の恋路を邪魔すると、わかりますね?」

怖っ!!あやや怖いよ!!いつものあややじゃない!!

「さあ行きますよ」

「離してーーーー!!!」

要side

旅館に帰ってきたら何故かのどかと夕映が優を連れて来た。

「・・・・・成る程、理解した」

「早いな!!」

「つまりあれだ。お前は二人の純潔を奪った責任を取って二人を嫁として貰いに来たと」

「違「そんな事させません！！」まーちゃん！？」

「そんな事絶対にさせません。というかするなら私も一緒に」

「だからそんな事しな「なら今晩一緒に楽しみましょう」ちょっ、夕映ちゃん何言って「あら、それは楽しそうですわね」えー！？」

「あの、良ければ私も／／／／」

「のどかちゃんまで・・・・・・」

流石に優は人気だな。俺なんて目じゃないな。そこに痺れもしなければ憧れもしないが。

「ん？」

今変な気配がしたような気がしたが、気のせいか？

「ねぇ要くん、私達も」

「ここは旅館だ。家に帰ったらいっぱいヤってやるから」

さて、部屋でのんびり酒でも飲むとするかな。

「ふぅ、流石要っち。この距離で気付きかけるとはにゃ。ムフフ、しかし気付けなかった事を後悔するといい。さあ３－Ａ諸君、あちしをた・の・し・ま・せ・て」

二日目は恋愛日和！？（後書き）

《白狼天狗と作者の座敷》

椛「あの二人が本編に・・・・・・」

雨「椛も出たかった？」

椛「雨季さんと一緒なら別にいいです」

雨「それはありがとう。いつか椛も出すよ。そっちの方が読者の皆さんも喜ぶ」

椛「楽しみにしてますよ。さて今回は優さんが前回に引き続き登場ですね」

雨「次回も出るけどね。最後に出たのはカモの代わりにあのイベントをやるキャラだよ。あいつなら誰も文句は言わないはず」

椛「そういえばカモさんはどうしたんですか？ネギくんすら空気で忘れてましたが」

雨「学園長が無限牢獄という、空の境界で荒耶が式を閉じ込めたような空間に封じました。多分本編には出ない」

椛「そうですか」

雨「では次回もお楽しみに」

イベントは胃痛の源（前書き）

カモがやるとイラッとくるのにネコだったら構わないのは何故だろう。

イベントは胃痛の源

木乃香ｓｉｄｅ

修学旅行は観光もええけど、夜の恋ばなもええよな。

「そんで、千雨ちゃんは何処までいったん？」

「わかってるだろ？お前らと同じ」

「やっぱり妻がおる人を好きになると大変やよね」

あれはしょうがないわ。ちっさい頃に吊橋効果。惚れんはずがないもん。千雨ちゃんもありのままの自分を初めて認めてもらったしな。

「で、あいつらは？」

「ヤっとるんやろ」

「結界張っとるみたいやで」

準備万端やな。そりゃこんな所でヤるなら結界くらい張らんとな。というか性欲有り余っとるな。

「どんな感じなんやろ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あのさ、三人共落ち着こう、ね？」

「私達は落ち着いてますわ」

「なら服着て！！」

「それはお断りです」

「優さんは、私達が嫌いですか？」

「嫌いじゃないよ！！嫌いなら・・・・・・しなかったし」

「なら問題ないですわよね？」

「優さんも服を脱いで」

「私お風呂に入ってますね」

「・・・・・・どうしてこうなった」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「幸せやろうな」

優さんはどうか知らんけど、少なくともあの三人は幸せやろうな。

パチッ

「ん？テレビが。誰かリモコン踏んだか？」

「このテレビはリモコンないよ」

いきなりテレビのスイッチが点いた。特に番組が映る訳でもなく砂嵐が映っている。

『にゃんにゃにゃーん。３－Ａの諸君、修学旅行楽しんでるかな？』

「「「・・・・・・何？」」」

砂嵐が映っているテレビとは思えないほど鮮明でイラッとくる声が聞こえてきた。

『諸君にはとあるゲームに参加してもらうにゃ。デメリットはないから安心してほしい』

「くだらねぇ」

『ちっちっちっ、くだらなくはないＺＥ。ミス・レイヤー』

「!?　聞こえてやがんのか!?」

うわー、嫌やわー。下手な事を喋ったら聞こえてまうなんて。

『これより行うゲームは『ラブ×２キッスゲーム!!』。好きな人にキッスしてカードを手に入れよう!!』

キスしてカード、って!!

「「「仮契約（パクティオー）!?」」」

いきなりなんてとんでもない事を始めるんや、この変な声は。でもこれは

「「「チャンス!!」」」

ありゃ、二人も同じ事を考えたんか。でも負けへんで。要さんの唇はうちが貰うんや!!

要ｓｉｄｅ

ゾッ

何か変な雰囲気がしたな。狙われてる、のか？昨日の今日でまた襲撃か？いや、それならみんなで設置した結界に引っ掛かるはず。引っ掛からなくてもこんな雰囲気ではないよな。

「フェイト、ちょっと外出てくるわ」

「わかった。じゃあ私はお風呂行ってくるね」

まずは屋根にでも登ってみるか。

「ふむ」

屋根の上に来たはいいんだが、さっきの雰囲気はなくなったな。勘違いだったか？しかし月が綺麗だな。

「オッ、要ジャネェカ」

「チャチャゼロ、来てたのか」

「サッキマデ御主人ニ縛ラレテタカラナ」

「そうか。で、呑むか？」

「ケケケ」

チャチャゼロは返事をすることなく隣に座った。別に会話は必要ない。俺らはただ呑むだけなんだから。

「ほら」

「イイ酒ダナ」

「今日買ってな。月見酒にピッタリだ」

ああ旨い。のんびり酒を飲むのは一番だ。

「あ、おった」

「木乃香。刹那に千雨も、どうした？」

「「「キスしよう」」」

・・・・・・・・・・・・は？

「モテモテダナ」

そんなのはどうでもいい。さっきの雰囲気はこいつらが出していた

のか。成る程、納得

「出来るかぁ！！」

いきなりなんなんだよ！？おかしいだろ？なあおかしいだろ？

「本屋ちゃん達なんてヤってるんやから」

「俺は公共の場ではそういうのはしないの。第一なんでいきなりだ。理由を言いなさい」

「「「仮契約（パクティオー）出来るから」」」

「どういう事だ？」

「えっと・・・・・・」

説明を聞いて理解した。が理解したくなかった。何故あのナマモノがここに存在する。アルクがいるからか？

「潰してやろう。ネコアルク！！！」

「おぉう!?今ビビッときた殺意は要っちかにゃ?ここはさっさと隠れさせてもらうとするにゃ～」

木乃香達を瞬ボコして俺はネコアルクを捜し出した。

「何処だネコ!!」

「見つけましたよ要さん!!」

今度は文か。面倒だな。ここはどうやって切り抜けるか。

「その唇、頂きます!!」

ふむ、おちょくってみるか。俺は突っ込んで来た文を避けて耳元で囁いた。

「愛してるよ、俺の文」

ボンッ

おおっ、頭から煙が出たぞ。長年生きていても乙女は乙女だな。というか耐性がなさすぎる。

「俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の文俺の・・・・・・」

「ではな」

ありゃほっといても大丈夫かな。周りに危害は及ぼさんだろ。

ネコアルクを捜しているとこれまた意外な人達に会った。

「新田先生にズェピア先生、どうしました？」

「む、一条先生ですか」

「これはこれは、心強い助っ人の登場だ。実はですね・・・・・・」

どうやら今回の騒ぎ。発生しているのは３－Ａだけのようだ。あのネコ、計画立ててやってやがるな。

「わかりました。３－Ａ副担任として責任を持って制圧しま「一条せんせー」スプリングフィールド先生？」

確かにそこにいるのはネギ坊主なんだが、様子が、というか目からしておかしい。

「チューー！！！」

「！？　死ねぃ！！！」

ボフン

「「ぎゃあ！？」」

いきなり腕と唇が伸びてきたネギ坊主を叩き潰してしまったが、その瞬間にネギ坊主は爆発して新田先生とズェピア先生を巻き込んだ。

「なんだってんだ？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

何があったのかこれを見てもらおう。

ネギが部屋に帰った時、机の上に紙が置いてあった。

「書き置きだ。何々、『この紙に名前を書けば身代わりが出来ます。外出時に使って下さい。ｂｙ刹那』。へー、凄いんだな。早速やってみよう」

ネギは書き始めが、何度も失敗してはごみ箱に捨てていた。

「よし出来た。早速外に行ってこよ。じゃあよろしくね」

「はい」

ネギが出て行った後、ごみ箱から何人もの失敗ネギが出てきた。そして部屋にネコアルクが入ってきた。

「ムフフ、あちきの用意した札を上手く使ってくれたようだにゃ。さあネギ軍団よ、キッスへ向かえ～！！」

『ラジャー』

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

よくわからんが偽者が存在するようだな。それを排除しながら３－Ａを制圧し、そしてネコアルクを潰す！！・・・・・・捕まるかな。

胃が痛くなってきた。

「見つけたアル！！」

「拙者達と試合ってもらうでござるよ！！」

「はぁ」

こいつらはこういう時に限ってやる気を出すからな。勉強にやる気出せ。とりあえず

「邪魔だ」

そう言って威圧すると二人は固まってしまった。呼吸は普通だから大丈夫だな。

「次」

ロビーはカオスだった。偽者ネギ坊主軍団を３－Ａの奴らが追い掛けていた。胃が痛い。

「ネギ先生ーーー！！！」

ぶちゅー

あ、雪広がキスした。

ボフン

『ぎゃーーーー！！？』

ボフン　ボフン　ボフン　ボフン

さっきの爆発に何人か巻き込まれ、更に爆発が他の偽者ネギ坊主に誘爆した。

「・・・・・・よし行こう」

全滅したのを確認して俺はその場を去った。

何処だ何処だ何処だ。全く見つからないぞ。

「要、どうしたの？」

「久遠か。ネコアルクを捜しているんだが、解るか？」

「ん～」

クンクン

「こっち！」

「よしきた！！」

久遠を頭に乗せて走り出す。その後も久遠のナビに従って走ると女湯の前に着いた。うん、入れん。あ、そういえば・・・・・・

『なのは、フェイト、ヴィータ、すずか、スバル。聞こえるか？』

『どうしたの？』

『何かあった？』

『今女湯だぞ。少し待て』

『いやここは入ってもらってみんなで』

『すずかさん自重』

全員いるようだな。

『そこにネコアルクあり。殲滅せよ』

『『『『ラジャ』』』』

さて、どうなるかな。

「にゃにゃ！？いきなり何を！？」

「エクセリオンバスター・デモンズ！！！」

「トライデントスマッシャー・シャイン！！！」

「ラケーテンクラッシャー！！！」

「12連ロケットランチャー！！！」

「振動双拳！！！」

「に゛ゃーーーーーーー！！？」

終わったようだな。ただ風呂は大丈夫なのか？まあ遠は3－Aの馬鹿共をお仕置きするかな。やっぱり胃が痛い。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

オマケ

「はぁはぁ」

「優さんは相変わらずの絶倫っぷりで」

「二日連続で、この、精力ですか」

「はふぅ〜〜〜」

「あら？これは」

「どうしたのまーちゃん」

「いえ、何でも」

(何故私にパクティオーカードが。まあマスターが優さんのようですから構いませんね)

「では第二ラウンドですわ」

「「「え゛！？」」」

「あら三人共ここで終わりだと？夜はまだまだ長いですわよ〜♪」

(((この人が一番絶倫だよ)))

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

イベントは胃痛の源（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は鳥取」

シャ「ここの名物は、って椛ちゃん？」

椛「あ、はい。鳥取は２０世紀梨です」

ア「どうしたのよ」

椛「このまま三人でやるより雨季さんと「「駄目！！」」ですよね」

シャ「そんなの認めません！！」

ア「誰も喜ばないわよ！！」

椛「アリシャの部屋より需要はあるかと」

ア・シャ「「ない！！」」

椛「そういえば今回なのはさん達が使ったのって新技ですよね」

ア「元々ある技を強化したのだけどね」

シャ「抜骨・砕みたいなものね」

椛「しかし優さんも」

ア「大変ね」

シャ「でも優さんだし」

ア「そしてまーちゃんの絶倫っぷり」

椛「あれくらい当然では？」

ア・シャ「「え　ぅ？」」

椛「では次回もお楽しみに」

3日目は戦闘気分（前書き）

とりあえず三部構成になる予定。

3日目は戦闘気分

要ｓｉｄｅ

俺は昨日やんちゃした奴らを集めて説教した。全員が反省していた。ように見えた。今は関係者一同を集めて話をしている。

「さて、おそらく今日が山場だ。敵も本気でくるぞ。気合い入れていくぞ」

『おーーー！！』

「と、気合い入れたのはいいが、一部はネギ坊主が親書を届ける手伝いをしてもらう」

『えーーー！！』

まあこういう反応になるってのは薄々気付いていたよ。だけど誰かがやらないといけないんだよ。

「という訳で、まだ戦力として心許ない千雨、のどか、夕映の三人に行ってもらう」

「ちぇ」

「わかりました」

「頑張ります」

千雨だけ不満そうだが、科学者である千雨は戦闘力が低い。すずかレベルになれば別なんだがな。

「あと保護者として久遠、ついでに鏡も行け」

「はーい」

「なん・・・じゃと・・・？」

あ、鏡が固まった。こいつ何気に戦闘臭がすると反応するからな。固まったって事は戦闘はないか、もしくはちっちゃい戦闘だな。

「嫌じゃ嫌じゃ！！そっちの方が激しく良いんじゃ！！！」

「子供の姿になって駄々こねるな。さてみんな、今回の戦いは以前とは比べものにならない気がする。気をつけろ。特に木乃香」

「任せときぃ！！」

「このちゃん、それが心配なんやよ」

調子に乗らせると大変だな。確かにそこそこの力はあるが、あくまでそこそこだ。戦わせたらまずい。

「さあ修学旅行3日目スタートだ」

鏡side

寂しいのぉ、悲しいのぉ。このルートは間違いなく儂の出番がない。
こうなったら

「ゲームで憂さ晴らしじゃ！！」

「あの兄ちゃんつえぇ！！」

格ゲーはいい。どんなに殴っても斬ってもゲームだから問題ない。

「儂の相手になるのはおらんのか！！」

「なら私が」

ほう、千雨が相手か。こやつの（ゲームでの）強さはかなりのもの。
以前もネトゲの全国大会で敗北してしまったからの。

「リベンジと行かせてもらうぞい」

「返り討ちだよ」

カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャ
カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャ

「はえぇ！！？」

「手の動きが見えねぇ!!?」

フレーム単位の戦い。1フレームでも遅れれば敗北は必須。しかし相変わらずの強さ。感服する。

「じゃが負けん!!」

僅かな隙を見つけ必殺技を繰り出す。避ける事など叶わぬ。これで終わりじゃ!!

「いい動きだ!!だけど、まだまだ!!」

な!?暗転返し!?しまった!!相手のゲージの確認を忘れておった。

「終わり!!」

《KO!!》

「無念」

久遠ｓｉｄｅ

鏡と千雨がゲームに熱中してる間に私達は親書を届けるために木乃香の家に向かってる。

「それにしても夕映ちゃんや本屋ちゃんまで関係者だったなんてね」

「びっくりしましたよ」

「明日菜さんよりは関わった時期は遅いですよ」

「でも、頑張って手伝います」

二人共結構成長が早いからね。二人掛かりならいい戦いが出来ると思うよ。でも私の方が強いんだよ。ホントだよ。ってあれ？

「クーー！！」

「あれ？どうしたの？」

「ネギ先生、明日菜さんご注意を。のどか」

「うん。来れ（アデアット）！！」

私の警戒に気がついた二人が戦闘準備を始める。さっきからこの千本鳥居の同じ所をずっと回っているんだよね。

「おっ、そこの姉ちゃん達は気付いたみたいやな」

鳥居の影から出てきたのはネギくらいの男の子。なんだか私と同じ

ような臭いがするから獣関係の能力持ってるのかな？

「君は誰？」

「さっきゲーセンで一緒にゲームで勝負したやろ」

「あ、さっきの」

そういえばそんな事もしてたっけ？よくよく思い出したらこんな臭いがした気もしたけどＵＦＯキャッチャーに夢中だったからなぁ。

「そこにも誰かいますね」

「お、気がついたか。その本のおかげか？」

もう一人出てきたのは着物を着流した白髪の男。確か四季だっけ？

「四季兄ちゃんは邪魔せんといてや」

「はいはい」

「みなさん、僕があの子と戦います」

「無理すんじゃないわよ」

んー、多分あの子は接近戦タイプ。魔法使いのネギには分が悪いかな。

『のどか、あっちの行動を本で読んで教えてあげてね』

『はい』

のどかｓｉｄｅ

『ネギ先生、聞こえますか?私が言った方に避けて下さい』

『わかりました』

さてと、どんな攻撃をするのかな?レベルが高い人になると無数の可能性をほぼ同時に考えるからわかりにくいし、一条先生クラスになるとこんなので心を読んでたら間に合わない。でもあの子はそうじゃないみたい。

『ネギ先生、右に避けてからしゃがんで』

『はい!』

「こんの、避けるなや!!」

『そこで魔法の射手です!!』

「魔法の射手・雷の１矢!!」

「ぐえっ!?」

うん。ネギ先生が思ったよりいい動きをするからこのまま行けば勝てるかな。

「やるやないか。でも、舐めんなや!!」

男の子の体が変化して一部が狗のようになる。更に分身までしてネギ先生へと襲い掛かる。

『落ち着いて対処して下さい。本体は右斜め前にいます。周りは無視して突撃して下さい。多少の怪我は我慢して下さい』

『わかりました！ありがとうございます！！』

ネギ先生は突撃をし始めた。周りからの攻撃で多少傷が付くが支障はないだろう。そして後一歩で男の子の間合いに入るという所で指示を出す。

『そこでストップです！！』

ブンッ

ネギ先生が止まった瞬間、ネギ先生の鼻先を男の子の爪が通り過ぎる。そしてその隙に指示を出す。

『顎を殴って！！おもいっきり！！』

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

バキィ

「ぐ・・・あ・・・」

男の子はよろめき、周りの分身は消えた。これで勝利かな。

夕映ｓｉｄｅ

のどかの指示が的確なのか、ネギ先生は着実に少年を追い詰めています。

「やるじゃないか。あの娘」

「気付いていましたか」

「まあな」

この人は敵ですが、おそらく今は手を出さないでしょう。なんとなくそんな気がします。

「ちょっとあんた、敵なのに馴れ馴れしいわよ」

「そりゃ失礼、っと終わったな」

確かにネギ先生の一撃で少年が沈んだようですね。そして男の人は少年に近寄って持ち上げると、肩に担ぎました。

「退散するぞ」

「四季・・・・・兄ちゃん、まだ・・・や」

「俺らの任務は足止めだっつの」

パリィン

『!?』

いきなり結界が砕けてみんなが警戒します。そして出て来たのが

「儂登場！！」

「こんな結界、科学の前には無駄無駄無駄ぁ！！」

鏡さんと千雨さんでした。警戒して損しました。

「お主！勝負！！」

「あと数分早けりゃやったんだが、もう退散だ」

「なん・・・じゃと・・・？」

「やっぱり遅かったか」

鏡さんが落ち込んでる間に男の人達は去っていった。

「そういや要さん達が襲撃されたってさ」

「「ええ！？」」

「「へー」」

「「反応薄っ！！」」

「しくしく」

ネギ先生と明日菜さんにツッコまれましたが、襲撃程度は予想されてましたからね。しかし鏡さんはいつまでも落ち込まないで下さい

よ。

3日目は戦闘気分（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は長野よ」

シャ「ここで食べるのはおやき」

椛「おやきとは小麦粉の生地で野沢菜を包んで焼いたものが一般的ですね。野沢菜に限らず様々なものを入れます」

シャ「最近作者がどの県を書いたか忘れる事があるらしいわ」

ア「もしかしたら被るかもって事ね」

シャ「そうなったら教えてね」

椛「そうそう、要さんのＣＶを考えてるそうですよ」

ア「今更ね」

シャ「候補は？」

椛「関俊彦さんだそうです」

ア「誰か考えたら教えてね」

シャ「では次回もお楽しみに」

ミッション・ポッシブル（前書き）

とりあえず、新年あけましておめでとうございます。

要ｓｉｄｅ

今俺達は普通に観光している。なのは達とクラトスは別の場所を回っている。そういえば考えてみると、相手は俺の事を考えて対策を練ってるかもしれんな。ここはあえて俺が出ないでいくかな。

「お前ら、俺ちょっと用事を思い出したから」

「ほえ？ならどうするん？」

「楔を送る」

「むむっ、その楔とは誰ですか？」

たまたま一緒に歩いていた朝倉が聞いてくる。そういえば一般生徒には教えてないよな。

「俺の妹だ。今京都にいるからな」

「へー」

「おやおや、同志は知らなかったのですね」

「あややは一条先生の家に居候してるから知ってるだけでしょ！！」

「言い訳ですね。ジャーナリストならそれくらい自分で知らないと」

なんとも不毛な争いだな。さて、変わってくるか。
俺は誰もいない路地裏に向かい、懐からあるものを取り出す。

「薬で変わるのも久しぶりだな」

ゴクリ

「楔登場♪」

楔ｓｉｄｅ

要が中にいる状態ってのも久しぶりね。なんとなく優越感♪

（ちゃんと守ってやれよ？）

（わかってるわよ）

そんな事を言われなくともあんな美味しそう、もとい可愛い娘達を
襲わせる訳ないでしょ。

「アリストテレス、よろしく♪」

《よろしくお願いします》

早速あの娘達の所へ向かわないとね。

「ヤッホー！！私が楔よ♪」

『よろしくお願いします』

うーん、なかなか食べがいがありそうな娘ばかりね。木乃香達は警戒するから襲えないのよね。

ヒュッ

「あらあら」

「！？」

キン

いきなり棒手裏剣が飛んできたけど刹那が守ってくれた。まあ守ってくれなくとも私が防いだんだけど。

「木乃香さん！！」

「きゃーー！！せっちゃん大胆！！」

「なんでやねん！！」

刹那はみんながいる前だと基本標準語なんだけど、慌てたりすると訛りが戻るのよね。そこが可愛い♪ジュルリ。

ゾッ　キョロキョロ

「あら、どうしたの刹那？」

「いえ、寒気が」

ちっ、バレたか。というか私達が凄い速さで走ってるからあの子達が着いてこれてないんだけど。まあいっか。確かこの先にあるのは映画村だったかしら？

「このちゃん跳ぶよ！！」

「うん！！」

「ちゃんと料金を、まあいっか♪」

「あや～、不法侵入ですね」

別に誰も気にしないわよね。

ここが映画村か。あんまり時代劇には興味ないからな。鏡だったら

喜びそうだけど。

「せっちゃん！あそこで仮装出来るって！！」

「そんな余裕は」

「いいじゃない。楽しみましょう♪」

「楽しいのが一番ですよ」

「ええ！？」

敵から追われてるからって慌ててちゃ駄目よ。こういう時ほど余裕を持って行動しないと。ただ遊びたいだけだけど。

「「「さあ行こう」」」

「・・・・・・はぁ」

木乃香はお嬢様。刹那は新撰組。文は町娘。私？何だと思う？遊女と思った人手を挙げなさい。大丈夫。保健室で《ピー》するだけだから。

「なんと忍者でした！！」

「誰に言ってるですか」

「読者」

そりゃ読者以外に何がいるってのよ。おや？馬車がこっちに向かってくるわね。

「うわわ」

「何だ？」

「こんにちは～」

「お前は！！・・・・・・誰だ！！」

「酷っ！？刹那先輩！この人にうちの事教えてやって！！」

「・・・・・誰？」

あ、沈んだ。しかし本当に誰かしら？刹那の後輩？

「一緒に殺し愛したんに・・・・・もうええ！うちの名前は月詠！１２時に橋に来て下さい！お嬢様を貰います！！」

「よく知らんがお嬢様は渡さん」

「「「せっちゃんカッコイイ！！」」」

「楔さんと文さんも協力してな」

「もちろん♪というか私だけでやるわ」

刹那には木乃香に常に一緒にいてもらわないとね。それに私も久しぶりにしっかり運動したいし。

「お姉さん、あんま舐めとると痛い目みるで」

「大丈夫よ。舐めても勝てるから」

「ほんまイラッとくるお姉さんですなぁ」

そう言ってよくわかんないのは去っていった。

「頑張って下さいね」

「文も木乃香を守ってね」

「お任せ下さい」

という事で約束の時間になって橋に行くと、観客が大量にいた。どうやらさっきのを見てショーか何かと思ったらしい。

「さあお姉さん！さっさとお嬢様を渡しぃ！！」

「お断りよ。雑魚には渡せないわ」

「なら力ずくで行かせてもらいます」

そう言って謎娘は刀を取り出す。普通の刀と小太刀の二刀流か。

「すぐに終わらせてあげる♪」

そう言った私の体からはもっそい力が溢れ出してきた。

「！？　それは、咸卦法！？手を合わせてないのに！？」

「そんな事してやるのは三流よ。気も魔力も体内にあるんだから体内合成くらい軽いわ」

ま、要は出来ないんだけどね。もしかしたら私って天才かもね。

「じゃあやるわよ～」

「！？　いつの間に後ろに！？」

「コチョコチョコチョコチョ～♪」

「アッハッハ！！？あ、アカン！！？そこは」

「コチョコチョコチョコチョ～♪」

「ヒィヒィ！！も、やめ」

「まだまだコチョコチョ～♪」

「ひぃーーーー！！！」

観客は呆然としてたけど、私が楽しければそれでいいのよ。というかなかなかいい体つきしてるわね。あとでホテルの個室に連れ込んでムフフな事しようかしら。

刹那ｓｉｄｅ

楔さん大丈夫やろか？

「見つけたで！！」

ん？こいつはこのちゃんをさらっていた着ぐるみ女じゃないか。

「お嬢様を渡しや！！」

「せっちゃん守ってな」

「わかっとるよ」

「私もやりますよ」

こっちは私に文さん。それにこのちゃんの前鬼と後鬼であるヴラドさんと玉藻さんもいる。この程度の相手なら遅れをとることもない。

「千草、手伝うよ」

いきなり出てきた白髪の少年。こいつはやばい。よく要さんに逢いに来るチートな人達ほどではないにしろ、私達には荷が重い。

「僕もやりますよ」

「あー！！あんときのおかっぱ！！」

「こんにちは、木乃香さん」

確か、ゼロスだったか。この人まで出てきたら逃げる事も危うい。どっちも考えが読めん顔してるし。

「おい、何してんだよ」

「その子達の相手をする前に私達の相手をしてもらえないかな？」

「ヴィータさん！スバルさん！」

「さっさと逃げな」

「私達が足止めするから」

足止め・・・・・やっぱり相手は強敵なんだ。ここはお言葉に甘えさせてもらおう。

「文さん！飛びますよ！！」

「ええ！木乃香さん掴まって！！」

「うん！！」

「逃がさないよ。石の槍」

白髪の少年が放った魔法が私達に向かって飛んでくる。しかしそれをピンクと金色の閃光、そして銃弾が魔法を砕いた。

「ありがとう。なのはさん、フェイトさん、すずかさん」

このままこのちゃんの家まで逃げ切る。

ヴィータｓｉｄｅ

ったくよ。なんでこんな面倒なのが出てくるんだよ。

「またあんたらのせいで・・・・・新入り達！！」

「いや、ここは逃げよう」

「賛成です」

「なっ！？」

へー、ゼロスはともかくあのガキもよくわかってるじゃねぇか。数も質もこっちが上。あたしらが勝つのは見えてるからな。

「さあさあ帰りますよ、千草さん」

「離さんかい！！」

「やめた方がいい。力を出す時は近衛木乃香を捕まえる時だ」

「くっ、覚えときぃ！！」

おうおう、随分テンプレな逃げ台詞だな。久しぶりに聞いた気がする。

そして相手はガキが作ったであろう水のゲートで逃げていった。

「あーあ、やりたかったな」

「我慢しろよ。あたしらの目的は木乃香を守る事なんだから」

『ヴィータちゃん。敵は完全にロスト』

『私のレーダーにも引っ掛かってないね』

『わかった。フェイトはなんかあるか？』

『・・・・・楔が遊んでる』

あいつは・・・・・・要に任されたんじゃないのかよ。よし、みんなでお仕置きだな。

『みんな、聞こえる？』

『久遠ちゃん？どうしたの？』

『あ、スバル。襲撃されたって聞いたけど』

『もう大丈夫。でも誰から聞いたの？』

『千雨。千雨は楔に聞いたって』

ああ意外と仕事してたんだな。でも木乃香達と一緒にいないと意味ないからな。やっぱりお仕置きだな。

ミッション・ポッシブル（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん雨＞

雨「みなさん新年あけましておめでとうございます」

椛「今年もチートじゃ済まないシリーズをよろしくお願いします」

アリシャ「「私達の台詞は！？」」

雨「・・・・・・？」

アリシャ「「？じゃない！！」」

椛「今私達は富士山にご来光を見に来ています」

アリシャ「「無視するなー！！」」

雨「山の上でみる日の出はいつ見ても綺麗だな」

椛「雨季さんは何度も見てますからね」

雨「雲海の中から出てくる朝日がこれまたいいんだ。いつ見ても飽きない」

アリシャ「「もういい・・・・・」」

雨「しかし要のＣＶ候補はいろいろあったな。でもやっぱりこういうのは読者の脳内再生に任せよう」

椛「そういうものですよ」

ア「じゃあそろそろ終わりね」

シャ「みなさん昨年はありがとうございました」

雨「改めてこれからもよろしくお願いします」

最終決戦　前編（前書き）

前編後編に分けてみた。
まずは戦闘シーンほぼ無し。

最終決戦　前編

要ｓｉｄｅ

何故か俺らが集合すると、早乙女、朝倉、那波、村上、雪広、この五人の生徒までいた。なんかＧＰＳがどうのこうの。

「どうします？」

「連れてく。下手に帰しても着いてくるからな」

特に朝倉。こいつが一番面倒な奴だ。

「一条先生！そちらの女性達は？」

なのは達か。適当に説明してもな。他の奴らも気になってるし。

「家族だ」

「そこを詳し「あ？」なんでもありません」

ちょっと脅したらびびっちまったな。悪い事したかな。でも踏み込んだらいけない領域もあるんだよ。

「さあ行くぞ」

久しぶりだな。詠春の奴元気にやってるかな。まあどうだろうと邪魔するんだがな。

『おかえりなさいませ、木乃香おじょ「詠春出てこい!!!」・・・・・』

「要兄ちゃん。そこは言わせてあげようや」

そんなの関係ねぇ。俺らが来るのがわかってるんだからさっさと出てくるべきだ。

「ハハハ、変わりませんね」

「人間そう簡単には変わらん。特に俺のようなのはな。ネギ坊主」

「あ、はい。親書をお持ちしました」

「はいどうも。ではみなさん、今日はゆっくりしていって下さい」

『わーい!!』

「要さん、お酒でも飲みますか?」

「いいな、大人組は参加するぞ」

どんな酒を用意しているかな。まあこいつの用意する酒ならなかなかに高級なものだろう。飲み過ぎないようにはするかな。

うん、美味い。大吟醸とはいいもの持ってきたな。ワインもあるし、ビールもある。

「貴方は大酒飲みですからね」

「とはいえこういう時は自重するさ」

「ビール9本も飲んだ人が言わないでよ」

なのはうっさいわ。俺にとってはこの程度少量にすぎんわ。第一ビール程度のアルコール度数で酔うはずないだろ。

『イッキイッキ!!!』

「ごくごくごく、プハーッ!!!」

『おーーー!!』

あいつらの方が自重すべきだろ。というか大人モードになってると

ヴィータはほんとによく飲むよな。普段子供姿だと飲めない反動かな。

「二番手スバルいっきまーーす!!」

『イエェェーーーイ!!!』

「いい加減にしろ!!静かに飲めんのか!!!!」

俺の一声で全員がピタリと止まる。スバルは酒に弱いんだからあんまり飲むなよ。

「私は木乃香達の所へ行きます」

「詠春、気をつけろ」

「・・・・・わかりました」

詠春は刀を持って出ていった。常に臨戦体勢でいるのは大切だからな。

「どうしてあんな事言ったの?」

「嫌な予感がするんだよ」

「私のレーダーには何も反応がないけど」

「人の勘は機械を超えるぞ」

特に戦場で鍛えた勘はな。詠春の奴は衰えてるようだが、俺の勘が

衰えるのは殆ど無いだろうな。あのチート共のせいで。

ドゴォォォーーーーン

『!?』

「ほらな」

さて、行くとするか。そう思って廊下に出た瞬間白髪のガキが出てきやがった。木乃香を抱えて。

「君が一条要か」

「木乃香を返して貰おうか」

「断るよ。石化の邪眼」

光線がガキの指から飛び、俺の体に当たる。服がどんどん石化するのを見ると石化の魔法か。

「で?」

「な!?」

ズドン

石化が俺に効かなかったのが余程意外だったのかガキの動きが止まった。そこへ俺は腹パンをしてやった。

「む」

だがガキと木乃香は水となって消えた。分身か。なかなか高度な代物だな。それにすずかのレーダーをかい潜るとは、隠密性もなかなかか。

「要くん!!大丈夫!?」

「アルティメットワンを使ったから問題ない。それより木乃香を助けるぞ。お前ら!!準備は出来てるな!!」

『はい!!!』

外に出ると詠春、ネギ坊主、明日菜ちゃん、刹那、文がいた。

「千雨にのどか、夕映は?」

「自主避難しました」

正しい選択だな。あいつらにはまだ早い。というかよく生き残ったもんだ。

「すみません。木乃香を守れなかったあげく、要さんの生徒達を・・

・・・・」

「うじうじするな詠春。それにお前の部下もやられたんだ。今は木乃香を助けるぞ」

「そうですね」

少し行くと着ぐるみ女と白ガキ、ゼロスがいやがった。

「木乃香を返しなさい！！」

「長の頼みでも聞けませんなぁ」

そう言うと着ぐるみ女は木乃香に呪符を付けて何か呪文を唱え出す。その時木乃香は苦しみ出していた。

「木乃香！？」

「さあ出てきぃ！！」

次の瞬間、何百もの鬼や天狗が出てきた。木乃香の魔力を使って片っ端から召喚しやがったか。

「なんや、女や子供が多いやんけ」

「殺さんければどうしてもええで」

「では僕も」

ゼロスが召喚したのは４体の魔族。そしてあいつらは逃げていった。

しかしあの魔族、かなりの力を持ってやがるな。この鬼共を相手にするより数倍面倒だな。

「なのは、フェイト、ヴィータ、スバル、お前らは魔族の相手をしろ。すずかと詠春、鏡は鬼の相手」

「うん」

「任せて」

「やってやる」

「腕が鳴るね」

「仕方ないなぁ」

「構わんぞ」

「ネギ坊主、明日菜ちゃん、刹那、文はあいつらを追え」

「はい」

「わかったわ」

「やります」

「頑張りますよ」

これで全員に指示は出したな。やるか。誘拐なんて事したんだ。それ相応の覚悟はしてもらおうか。

千雨ｓｉｄｅ

「早くして下さい！！！」

「わーてるっつの！！」

なんだよあのガキ。のどかが教えてくれなきゃ私達も今頃石になってたぞ。っと繋がった。

「茶々丸！！聞こえるな！！」

『どうなさいました？千雨様』

「敵だ！木乃香が掠われた！！至急応援を頼む！！」

『了解しました。マスター・志貴、マスター・アルク、マスター・エヴァ、姉さん、それと私が向かいます』

それだけの戦力がいれば確かに安心だが、念には念を入れてもう少し増やすか。

「いるならクラトス先生と龍宮も頼む。行くのは要さん達の所だ。大丈夫か？」

『問題ありません。ではすぐに』

これで私達が今やれる事は終わったな。

「あの、助けに行きましょう」

「のどかの言う通りです」

「まあ待ちな。今サーチャーを飛ばす。それで私達が行っても大丈夫なら行こう」

下手に行ってあのガキクラスのに遭遇したらまずい。慎重に、確実に、邪魔にならないように行動しないとな。

志貴ｓｉｄｅ

要がいるから大丈夫かと思っていたけど、やられたか。

「行くのですか？」

「ああ」

木乃香ちゃんだけなら要に任せたかもしれない。いや、それはないかな。応援を求められたら行くな。とにかく向こうには四季がいる。なら行かないと。

「クラトス先生と龍宮様をお呼びしました」

「話は聞いたぞ」

「報酬は向こう持ちでいいね？」

これで全員集まったな。よし、エヴァの魔法で・・・・・・誰かいるな。

「ちょっと、そこにいるの出てきなさい」

アルクェイドが言うと二人の女の子が出てきた。

「古に長瀬、何故いる」

ああ生徒か。二人共そこそこの実力者のようだけど、未熟だな。

「何処に行くアルか？」

「拙者らも付き合うでござるよ」

「必要ない。生徒は大人しくしていろ」

「茶々丸殿も生徒でござるよ？」

どうしたもんか。彼女達を連れていく訳にもいかないし。とはいえ茶々丸を連れていくとついてきそうだし。

「古菲さん、長瀬さん。悪いですが貴女達では足手まといです」

「茶々丸・・・・・・」

「マスター・志貴。ここは私に任せて」

・・・・・茶々丸に任せるしかないか。ここで俺がでしゃばっても意味がないし。

「確かにこの人達に比べれば弱いけど、十分戦えるアル」

「思い上がりですね」

「いくら茶々丸殿でも言い過ぎでは？」

「事実です」

（ねぇ志貴、茶々丸きついわね）

（ああ、きっついな）

（私でもあそこまできつい事を言う茶々丸を見るのは初めてです）

アルクェイドもエヴァも同じ意見か。でも茶々丸はクラスメイトの事を考えて言ってるんだろう。

「おかえり下さい」

「断るアル」

「無理にでも連れていってもらうでござるよ」

「・・・・・失礼します」

プシュ

「っ!?針!?」

「体が!?」

「即効性の麻酔針です。5分程度しか効きませんが」

強行手段に出たな。しかし茶々丸の奴あんなの持ってたのか。他にどれだけの武装を持ってるんだ?

「申し訳ありません」

「古、長瀬、大人しくしているんだな」

「では準備はいいな?行くぞ」

俺らはエヴァの魔法で転移をした。待ってろ四季。最後の勝負をしようじゃないか。

最終決戦　前編（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「岡山でーす」

シャ「今日の名物は・・・・・・あら？」

ア「椛～、何処～？」

長船刀剣博物館

椛「これが備前長船の刀。・・・・・・はぁ、美しい」

ア「私達だけで進めましょうか」

シャ「ここの名物はきびだんごです」

ア「まーさかりかーついだ」

シャ「それは金太郎。きびだんごは桃太郎」

ア「冗談よ」

シャ「今回は戦闘しなかったわね」

ア「次回が戦闘三昧だもの」

シャ「では次回もお楽しみに」

最終決戦　後編（前書き）

長くなった。
そしてみなさんの期待を裏切れたらいいなと思いたい。

最終決戦　後編

要ｓｉｄｅ

「「シールドスライサー！！」」

「神鳴流秘剣・百花繚乱！！」

「魔導式ガトリング！！」

『ギャアアアアアアア！！？』

俺、鏡、詠春、すずかが鬼共に攻撃をしまくる。そのおかげか殲滅がスムーズに進んでいる。なのは達と魔族は既に別の所へ飛んでいっている。

「大丈夫、だな」

「おう志貴か。他の奴らもいるみたいだな」

「千雨様より連絡がありました」

ふむ、あいつも自分のやる事をしっかりやってるみたいだな。

「なら「クラトス！！勝負だ！！」「おー、志貴来たか」やる事はわかってるな」

「任せてもらおう」

「やってくるよ」

クラトスはユアンと、志貴は四季と別の場所へと行ってしまった。

「残ったメンバーは鬼退治を手伝ってくれ」

「まっかせなさい！！」

「姉様、あまり遊ばないように」

「要先生、お手伝いします」

「ケケケ、虐殺カ」

「報酬は魔導式の武器で頼むよ」

オーバーキルにもほどがあるが、別にいいよな。特に俺は他よりストレスがあるしな。

『ニヤリッ』

『ヒィィィィーーーー！！！？』

なのはｓｉｄｅ

私の前にいる魔族は紳士っぽい服を着た人間的な魔族。

「初めまして。ゼロス様の部下の一人。名はカオス、と名付けられました」

「一条なのは。魔導師だよ」

「では参ります。黒影夢（ヴン・ガ・ルイム）」

黒い獣人が何体も召喚される。私に対して物量戦か。いい度胸だね。

「ファンネル」

レイジングハートから射出されたビットが黒い獣人達を一気に殲滅していく。

「凄まじい威力だ。人のそれとは思えない」

「鍛えてるからね」

「では次は、黒狼刃（ダーク・クロウ）」

ぼんやりしてるけど、虫かな。また召喚、って訳じゃないね。魔力弾みたいなものかな。少し嫌な感じがするな。

「アクセルシューター、シュート！！」

試しにアクセルシューターを撃ってみた。すると虫に触れた瞬間に消滅した。他にも虫が触れたものが消滅していく。成る程、そういう魔法なんだ。

「行きなさい！！」

「当たらないよ！！」

私は空を飛んで逃げる。どうやって攻めようかな。虫に触れたらアウト。でもさっきから虫が敵の近くにいない事を考えると、術者も触れたら駄目なのかな。

「なら接近戦だね。レイジングハート、ランスモード」

《ランスモード》

レイジングハートが槍のような形になり、刃は魔力で構成される。接近戦はあまり得意じゃないけど、やるしかないね。

《フラッシュムーヴ》

「やあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「掛かりましたね！！餓竜咬（ディス・ファング）！！！」

敵の影が竜の形になる。そして狙っているのは、私の影？

ブシュッ

「あ！？」

竜の牙が私の影を掠った瞬間、影と同じ場所から血が出た。影を攻撃することによって本体を攻撃する魔法!?もし咬まれたら・・・・・

「外しましたか。次は喰らいます!!」

影の竜が再び私の影を咬もうとする。相手は影、なら。

「ヤッ!!」

「なっ!?どうしたのです!!何故動かない!!」

「無駄だよ。影縫いをしたからね」

私が投げたのは黒鍵。バインドが効かない相手にはこの手の技がよく効くんだよね。

「私の勝ちだね」

ザンッ

私は魔族の首を切り落とした。

フェイトｓｉｄｅ

今私が戦おうとしている魔族は・・・・・・

「ヒャッハッハッハ！！！さっさと殺ろうぜ！！！」

めんどくさいタイプだ。４枚の羽も生えて、爪は刀のように鋭い。

私と同じスピードタイプかな。

「逝くぜー！！！」

「逝っちゃ駄目じゃない？」

「日本語は難しいぜー！！！」

もうやだこの魔族。

「バルディッシュ、ザンバーモードで一気に決めるよ」

《イエスサー》

「殺る気満々じゃねえか！！」

「当たり前だよ」

ガキン　ガキン　ガキン

速いし一撃一撃も重い。技術もしっかりしてる。難があるのは性格

だけか。

「いいねいいね！！俺様はハーデス！！貴様も名乗りな！！」

「フェイト・Ｔ・Ｈ・一条」

「オラオラオラオラオラオラァァァァ！！！」

「聞いてる！？」

戦闘バカはこれだから嫌い。あ、要は別だよ。要が戦闘バカでも私は好きだよ。

「そこだ！！！」

「甘いよ」

ザンッ

「！？　俺の爪が！！？」

「相手の戦力を見誤ったね。てりゃりゃりゃりゃりゃりゃ！！！」

ザンザンザンザンザンザンザン

隙を見て一気に斬りつけまくる。体、羽、爪、あらゆる部分を斬り刻んでいく。

「ぬおぉぉぉぉ！！？」

「これで終わり！！雷神両断！！」

《ライジング・ザンバー》

「チッキショォォォォ！！！」

ズバン

私の刃が魔族を頭から股まで真っ二つにした。他のみんなはどうなったかな。

スバルｓｉｄｅ

私の前にいる魔族は女性型だけど・・・・・・

「何かしら？お嬢ちゃん」

「むー」

私より明らかにスタイルがイイ。不満だ。

「私はシヴァ。ゼロス様に付けてもらったのよ」

「私はスバル・N・一条。すぐ会えなくなるけどね」

「そうね。貴女が死ぬ事によってね！！氷の槍（アイシクル・ランス）！！」

シヴァってのが氷の槍を飛ばしてくる。だけど、そんなの当たらないよ。

「逃げ足は一人前ね。なら、氷霧針（ダスト・チップ）！！」

「アイテテテテテ！？」

飛ばされた細かい氷の針が私に当たる。怪我は殆ど無いけど、とにかく痛い。

「隙だらけよ。凍界結（ラーフリーズ）！！」

「あっ」

冷気が私にぶつかり、私の体が凍りついていく。このままだとまずい！！

「ヒートエンド！！！」

ジュオォォォォ

「ち、しぶといね」

「まあね」

距離を離すと負ける。接近戦で一気に決める!!

「させないよ!!霊氷陣(デモナ・クリスタル)!!」

地面から冷気が吹き出してくるけど、遅いね。

「ガラ空きだよ!!」

「くっ!凍界結(ラーフリーズ)!!」

相手は手を突き出して冷気の波動を放つけど、そんなのは無視!!

「リボルビング・・・・・・ステーク!!!」

「ガハッ!!?」

右手に創り出したパイルバンカーを相手の胸に突き刺し地面に押し付ける。これで終わらせる!!

「喰らえぇぇぇぇぇ!!!」

ドンドンドンドンドンドン

「あ・・・・・・」

計六発の炸薬を爆発させて杭を叩き込んだ。相手はグチャったけど、勝負だからね。さようなら。

ヴィータｓｉｄｅ

「・・・・・デケェ」

あたしの戦う魔族がとにかくデカイ。４ｍはありそうな鎧姿。鎧で顔も見れん。剣は両刃で５ｍはありそうだな。

「あたしは鉄槌の騎士ヴィータ！！お前の名は？」

「オレ・・・タイタン」

「いくぞ！！！」

「・・・マイル」

ガキィン

互いの武器がぶつかり弾ける。見た目通りパワータイプのようだが、スピードがないわけじゃないな。

「タツ」

「やってみな！！ラケーテンハンマー！！」

ガキャン

「ム」

「そこだ！！！」

ドゴォン

ラケーテンハンマーによってあいつの剣を弾き、そのまま一撃を体に叩き込んでやった。その一撃であいつは吹っ飛んだが、平気で立ち上がりやがった。

「丈夫だな」

「・・・オマエ・・・ツヨイ」

「オメェもな」

「ホンキ、ダス」

そう言うとあいつはあたしに剣を投げつけてきた。簡単に避けれたが、何のつもりだ？

「ウオォォォォォォォォォォ！！！！」

「うげ」

あいつは鎧すらも投げ捨てた。その姿は羊のような角に筋骨隆々の肉体。まさに悪魔だな。

「アァァァ！！」

「ぐぅ！？」

速い！？しかも一撃が重すぎる。さっきの剣や鎧は枷だったってのか。

「オォォォォォォォォォォォォォォ！！！」

「いい、加減に、しろぉぉぉ！！」

連打を打ってくるあいつの隙を見て吹き飛ばす。一瞬でいい。隙があれば。

「ゴルディオンクラッシャァァァァァァ！！！！」

「！！？」

ズドォォーーーン

ふぅ、終わったみたいだな・・・・・・！？

「まだ立てたか」

「・・・・・ミゴト」

それだけ言ってあいつは倒れた。久々にまともな戦士と戦えたな。

志貴ｓｉｄｅ

「やろうぜ、志貴」

「ああ」

特に話す事なんてない。俺達がやる事はただ一つ。

「「最後の喧嘩だ！！」」

閃鞘・七夜

血刀

俺が斬りかかると四季は血で刀を創り出し対抗する。

「ちっ！更に速くなってるな！！」

「お前と違って何百年も修行したんだよ」

「成る程、勝ち目はない。だけどな、諦めないぜ！！」

「そうか。なら俺も全力でやらないとな。来れ（アデアット）！！」

俺の腕に腕輪が装備される。

「それがアーティファクトってやつか」

「ああ、これがなかなか便利でな」

閃走・六兎

「ハッ！見えて、ガッ！？」

四季は俺の攻撃を確かに防いだ。だが四季を攻撃したのも確かに俺だった。後ろにいるもう一人の俺。
攻撃が済むともう一人の俺は消えた。

「今のは・・・・・・」

「アーティファクトのおかげだよ。写し身の腕輪っていうらしくてな。攻撃の瞬間だけもう一人の自分を自分の反対側に創り出す事が出来る。まあ俺と同じ行動しかしないけどな」

「それでも便利だろ」

全くだ。これほど使いやすいアーティファクトもそうそうないだろう。特に俺のように決定力がない奴はな。

「仕留める！！」

閃鞘・八穿

「うわっ、と」

避けられたか。だけどまだまだ終わらないぞ。

「寝てな！！」

閃鞘・一風

「ガッ！？」

俺は四季の胸倉を掴んで頭から地面に叩き付けた。普通は叩き付けた勢いと自重で首の骨を折る技なんだが、耐えたか。

「いっ！？」

俺の頬を何かが斬り裂いた。俺はすぐに下がった。そして今の攻撃が何か気がついた。今のは四季が吐いた血か。あいつはさっきの血刀のように血を固める事が出来るからな。

「頬か。眼か頭に当たれば致命傷だったんだが」

「下手に傷つけれないな」

一撃で確実に倒すには、直死の魔眼だな。

四季ｓｉｄｅ

志貴の奴が包帯を解いて、ナイフの他に鉄の棒を取り出した。殺す気だな。だがそうじゃないとな。

「そらよ！！」

俺は血刀を何本も創り出して投げ付けるが、全て斬られた。いや殺されたと言った方が正しいか。

「殺す」

閃鞘・迷獄沙門

どうする。避けるのは、難しいな。防ぐならどうするか。少しきついがあれをやってみるか。

「ぐ・・・・・・」

俺は腕を引き裂いて大量の血を出す。これだけの血を出せば十分か。

血壁

俺は血を使って壁を創り出す。そして更に血刀の準備をする。

ザンッ

志貴は血壁をたやすく斬り裂いた。腕を振り切ったその隙、見逃さないぜ!!

ザンッ

「カハッ・・・・・・!?」

だが俺は斬る事はなく後ろから斬られた。しまった、志貴のアーティファクトを忘れてた。

「悪いが、俺の勝ちだな」

「まだだ！！」

斬られた部分の血を固めて傷を塞ぐ。

「そうか、ならこれで終わりだ！！極死」

「血壁！！」

これ以上血を使うのは正直きついが、あれを喰らったら死ぬ。だから多少無理をしても。

「！？」

だが血壁はナイフに貫かれた。いくら志貴の筋力が上がったとしても血壁を貫く事など。いや待て、ナイフの後ろに見えたものは、さっきの鉄の棒か！ナイフの尻に棒をぶつけて威力を上げたか！！

「ハァ、負けた」

「七夜」

ブシュッ

俺の首がへし折られ、血が噴き出した。そして俺の体は消滅した。

志貴ｓｉｄｅ

「消えた？」

特に魔力は感じなかったし、転移じゃない。本当に消えたのか。

「三日限りの幻、か」

殺し合いになったとはいえ、久しぶりに親友に会えて嬉しかったな。

「じゃあな四季。地獄で会おう」

クラトスｓｉｄｅ

「改めて聞こう。何故貴様がいる」

「さあな。死んだかもしれんし、ただ飛ばされただけかもしれん」

「何故私を襲う。目的がないから、というのは拒否させてもらうぞ」

「・・・・・・」

そうなのか？本当に目的がないから私を狙うのか？さすがにそれはかつての戦友として情け無い限りだぞ。

「まあチグサに助けてもらった礼、というのがあるだろうな。そしてチグサが狙う娘の近くにたまたまお前がいただけだ」

「助けてもらった礼？」

「うむ、初めてこの世界に来た時、食と住が全くなかった私を助けてくれたからな」

「自分で何とかしようとは？」

「もちろんした。しかしガルドではどうしようもなくてな」

世界が違えば通貨が違う可能性など万もあるだろう。まあ違う世界などという概念はなかったのだろうな。

「では行くぞ！！瞬雷剣！！」

「来い！！雷神剣！！」

私とユアンの刃がぶつかり雷が落ちる。だがユアンの方が威力は上、流石に雷系が得意なだけはある。ならこちらは手数で攻めさせてもらう。

「散沙雨！！秋沙雨！！」

「この！」

「まだだ！霧沙雨！！」

「いつの間に、そんな技を！？」

修行で身につけたのだが、よく初見で防げるものだ。やはり散沙雨と秋沙雨の組み合わせは単純すぎただろうか。

「受けてみろ！！翔破爆雷陣！！」

「ふん、獅吼爆炎陣！！」

「似たタイプの技ばかり使うな！！」

とはいえ相殺しやすいのは近いタイプの技だからな。戦略と思って欲しいものだ。

ユアンｓｉｄｅ

クラトスめ。私が知らないような技をいくつ持っているんだ。

「だがお前だけ先には行かせん！！」

「言ってろ！！」

なら見るがいい。新たな私の奥義を！！

「雷刃十連撃！！！」

「ぐっ！？」

ダブルセイバーによる雷を発生させる十発の攻撃。防ぎきってみせよ！！

ガキィン

「しまっ！？」

クラトスの剣を弾き、クラトスの懐がガラ空きになる。

「今だ！！獅子戦吼！！！」

「ぐおっ！！？」

獅子の形をした闘気がクラトスを吹き飛ばし、間合いを開ける。ここまで広がれば術を使うには十分だ。

「神の雷を喰らえ！！インディグネイション！！！」

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

ふ、終わったな。私の勝ちだな、クラトス。いい戦いであったぞ。

「だから貴様は詰めが甘いのだ！！」

「何！？」

あれを喰らってまだ動けるのか！？

「翔破裂光閃！！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

無数の突きが私の体を貫き、私は地へと倒れた。

クラトスｓｉｄｅ

「勝負は決した」

「く・・・そ・・・・」

するといきなりユアンの体が薄くなっていく。

「どうしたのだ!?」

「どうやら・・・終わり、らしい」

終わり?

「この世界に、いれるのも・・・限界のようだ・・・・・・・さらばだ、クラトス」

それだけ言うとユアンは消えてしまった。まああの様子だと死んだ感じはしないから元の世界に帰ったのだろう。

文ｓｉｄｅ

私達はさらわれた木乃香さんを目指して飛んでいるのですが・・・・・

「あんたら速すぎ！！」

明日菜さんが遅いのでゆっくり飛ぶしかありません。正直ネギくんも私と刹那さんからすれば遅いのですが。

「待ちぃや！！」

おや？この子は確か、ネギくん達を襲撃したという子でしたね。

「勝負やネギ！！」

ネギくんとの勝負ですか。さて、彼はどうするのでしょうか。勝負を選ぶか、木乃香さんを選ぶか。

「・・・・・ごめん、戦えないよ」

「な！？逃げるんかい！？」

「生徒がさらわれたんだ。助けないと」

「言い訳なんて聞きたないわ！！腰抜け！！」

「腰抜けと目的ある逃走は違うぜ、ガキ」

この声は・・・・・・

「待たせたな、そのガキの相手は私がやる」

「千雨さん！のどかさん！夕映さん！」

「なんや、女を殴るんは趣味やないんやで」

「ほざくなガキ。女に負けるのが怖いだけだろ？」

「！　言うやんけ」

おやおや、千雨さんは相変わらず挑発が上手い。要さんも同じ事言いそうなのは何故でしょう？千雨さんがリスペクトしてるからでしょうか？

「みなさんは先に「あー、いい。のどかと夕映も行きな」千雨さん？」

「私だけで十分だ」

「姉ちゃん、調子に乗るなや！！」

「まあ正確には私もやらないんだが」

「はっ？」

「来い！魔導兵士！！」

ズシーン　ズシーン

三人が出てきた所から来たのは巨大ロボット。成る程、確かに自分では戦いませんね。

「これなら存分に戦えるだろ？」

「いいやないか！！それならやれるわ！！」

さて、私達は速く追いかけるとしますか。

刹那ｓｉｄｅ

ようやくこのちゃんを見つけた。見つけたんやけど。

「な、何よこいつ！！」

「鬼ですね。馬鹿でかい」

「ハハハ！！間に合わんかったな！！こいつはリョウメンスクナノカミや！！」

リョウメンスクナノカミ。確か詠春様達が昔封印したっていう鬼神。これはまた面倒なもんを。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！来れ雷精　風の精！！雷を纏いて　吹きすさべ　南洋の風！！雷の暴風！！！」

ネギ先生が魔法を放つが、スクナの前には無意味も同然だった。

「そん、な」

「西洋魔術師も大した事無いなぁ！！」

「ならこれでも喰らいなさい！！土水符『ノエキアンデリュージュ』！！！」

「では私も、風符『天狗道の開風』！！」

夕映さんの手から大量の圧縮された水が放出され、文さんは暴風を放つ。流石のスクナもこれならダメージが入ると思ったんやけど。

「させないよ」

またあの白い少年が邪魔をした。いい加減しつこいなぁ。

「君達は本当に邪魔だな。ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト」

！？　魔法を使うか！！

「みなさん！！石化の魔法です！！」

のどかさんがアーティファクトでそれを知ったのかみんなに告げる。

そしてみんなが回避の体勢に入った。

「小さき王　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　その光　我が手に宿し災いなる　眼差しで射よ　石化の邪眼！！」

少年が撃った光線をみんなが避ける。ただ明日菜さんは当たったのだが服が石になる程度だった。

「ぐぅ！？」

「ネギ！？」

ネギ先生がやられたか。ならここは私達が頑張るしかない。

「ネギに何すんのよ！！」

明日菜さんがハリセンで少年に殴りかかる。すると少年の魔法障壁が消えた。明日菜さんのアーティファクトの効果？

「やあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「うっ！？」

その瞬間、ネギ先生が少年を殴りつけた。

「この身に拳を入れられたのは君が初めてだよ、ネギ・スプリングフィールド」

「そうか、それなら」

「私達が」

「2，3，4番目かの」

「!?」

ドカ　バキィ　ズドーン

いきなり少年の影から現れたエヴァンジェリンさんが殴り飛ばし、一緒に現れたアルクェイドさんが上空に蹴り上げ、最後に何故かいた鏡さんが叩き落とした。これは酷い。

「でかいのがおるの。食いたい」

「どうします?姉様」

「とりあえず木乃香を救出するわ」

そう言ったアルクェイドさんは一気に女の所まで跳び、このちゃんを奪還した。

「返さんかい!!!」

「先にさらったのはあんたでしょ」

『うんうん』

やっぱみんな同じ意見やんな。さてこのちゃんを助けたし、あとはこの鬼だけやな。

「うーん、あれ？うち」

「おはよう、このちゃん」

このちゃん起きたな。じゃあさっさと終わらせんとな。

「オォォォォォォォォォォォォォォォ！！！」

「ハ、ハハハ、まだや！！まだこっちにはスクナがおる！！」

スクナの全身が出てきてもうたな。改めて見るとでっかいわー。

「なんだ、もう終盤か？」

「あ、要さん」

「とりあえず、消すか。ＯＲＴ部分解放」

要さんの背中からＯＲＴの脚が二本出る。その瞬間、スクナが後ずさりした。

「グウゥゥゥゥ・・・・・」

「よくわかってるな。勝てる相手と勝てない相手を。だが召喚主が悪かったな」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド

一瞬。スクナの肉体はバラバラに引き裂かれていた。原型など一片もとどめていない。

「人以外は殺すのに躊躇しなくていいな」

呆気無い終わりやったな。

「うぅ・・・・・・」

「どうした？ネギ坊主」

「これは、まずいな」

エヴァンジェリンさんが言うにはネギ先生の抵抗力が高いため、石化の進行が遅いという。一気に石化するならともかく、徐々に石化すると、気管などが石化すれば死んでしまうらしい。

「ふむ、木乃香。治せるか？」

「今のうちじゃ。あ、仮契約（パクティオー）したら何とかなるかもしれん」

なん・・・やて・・・？つまりあれか？要さんとキスするって言うんか？いやいや、確か要さんはやる時は血液の交換で。

「時間がない。キスでいいな」

「もちろんや」

ノー！！このちゃんの裏切り者！！

「ほら、魔法陣描き終わったぞ」

「すまんな、エヴァンジェリン。それじゃあやるぞ」

「うん♪」

妬ましい妬ましい。そううちが私怨に燃えている時だった。

「障壁突破・石の槍」

ドス

要さんの腹に石の槍が刺さったんは。でも要さんは。

「痛た。何するんだよ」

ズボッ

普通に槍を抜いてた。

「さっきの脚といい。君はバケモノか」

「そうかもな。つーかそうだ」

肯定しちゃったよこの人。周りも一部を除いて呆然としてるで。

「そんな事より、気をつけな」

「？　何を〈トスッ〉なっ！？」

何かを軽く刺すような音。少年の後ろには志貴さんが立っていて、ナイフを突き出していた。包帯を取って蒼い瞳を輝かせた。

「グ、アァァァァァァァァ!!?な、なんで!?この・・体は・・・分身なのに!?」

「要から連絡があってね。お前は魂から殺せって。分身だろうと魂は繋がっている。だったら殺すのは簡単だ」

「アァァァァ!!?」

少年の体は水となって消えた。元々水で創られた分身だったのだろう。そして志貴さんも地面に片膝をついた。

「志貴!?」

「兄様!?」

「ハハハ、久しぶりに無理したかも。いくら負担が抑えられてるとはいえ、分身の死を突くのはきつかった」

「ご苦労さん。帰ったら飯をおごるよ」

「じゃあ要兄ちゃん」

「ああ」

このちゃんと要さんの唇が重なる。次の瞬間、このちゃんから光が溢れて周りの生き物を治していった。そういやあの女はどうなったんやろ。

千草ｓｉｄｅ

「ハァハァ」

なんやあのバケモノは!?一条要がかなり強いとは情報があったけど、あんなの知らへん!!

「オイ、オ前。オ前ハ誇リアル悪カ?」

「誇りないのであればここで消えて下さい」

「ヒィ!?」

木の影から出てきたのは人斬り人形が似合いそうな小さな人形に、それによく似た女。うちはただただ後ずさりした。そして木にぶつかった瞬間、木の根っこがうちを縛り上げた。

「カ・・・・・!?」

「少々きついですか?」

「あれはきついよ、まーちゃん」

更に増援!?あかん、うちの人生もう終わった。そう諦めた時だった。

「何をやっとるんじゃ」

周りに響く声。現れたのは流れるような黒髪をした男。誰でも良かった。とにかく助けてくれれば。しかしこの後の台詞は予想外もいいところだった。

「こやつ　（の力）は儂のもんじゃ!!勝手に手を出すでない!!」

ああ、これが一目惚れなんやな。

要ｓｉｄｅ

全てが終わった。仮契約（パクティオー）が終わった後刹那にも無理矢理やられたが、そこは置いておこう。鏡に何故かあの女、千草が引っ付いていたのも気にしないでおこう。まーくんがいたのはまーちゃんが2日目に来たからだろう。４日目にネギ坊主達とナギ・スプリングフィールドのアジトに行った事も大した出来事ではない。

「眠い・・・・・・」

今は新幹線の中。修学旅行は終わったのだ。ゆっくり休んで明日の英気に繋げるとしよう。願わくば、明日からは平和であらん事を。

・・・・・あれ？何か忘れてるような・・・・・まあいっか。

ゼロス「うぅ、まさか出なかったら最後まで忘れられるとは。もういいです。帰りますから」

修学旅行編　完

最終決戦　後編（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん〉

ア「京都だー！！」

シャ「修学旅行を終えるまで我慢してた京都」

椛「ぶぶ漬け食べていきますか？」

アリシャ「「まだ消えたくありません」」

椛「ですよねー」

ア「京都といえばいろいろあるわね」

シャ「美味しいものも多いしね」

椛「歴史もありますしね」

ア「とりあえずお土産に京野菜を持って行きましょう」

椛「変わった野菜が多いですね」

シャ「どう調理すればいいかしら？」

ア「ググれ。というかシャマルさんはしなくていい」

シャ「なんで？」

ア「なんでも」

椛「次回からはコラボ回ですね。今コラボ予定なのは、なっぺ様、水橋様、畏無様、葵（仮）様、他は？」

雨「覚えてないか、これだけか。もし、俺の名前がないぞ、とか、俺も参加する、という人はご連絡を」

ア「今作者が」

シャ「あんまり気にしちゃ駄目よ」

椛「では次回もお楽しみに」

浪漫（ドリル）の正しい使い方（前書き）

なっぺ様とのコラボ。
前回で力を使いすぎた。
だから今回は短いよ。

浪漫（ドリル）の正しい使い方

要ｓｉｄｅ

俺はエヴァンジェリンの家へ茶々丸に会いにきた。

「茶々丸、いるか？」

「どうなさいました？要先生」

「少しトレーニングをしないか？」

「わかりました」

よしこれで茶々丸に浪漫（ドリル）の素晴らしさを教えてやれる。使用に関する講師は、吼太が一番かな。俺の知る限り一番の浪漫（ドリル）使いだし。

さて俺の家の別荘に茶々丸を連れて来て、後は吼太を召喚するだけだ。久しぶりに召喚用座布団を使うか。しかしすずかはなんでこんな形にしたのやら。

「来い、フラグ王」

「誰がフラグ王だ！！」

「自覚してるから来るんだろ？」

「うっさいわ」

召喚成功。というか座布団いらなかったかな。

「で、喧嘩売るために喚んだのか？」

「まさか。お前に頼みたい事がある。茶々丸、来い」

「何でしょう」

「こいつに浪漫（ドリル）の使い方を教えてやってくれ」

「その漢字にその読みはどうなんだ？」

俺がやりたくてやってるんだから気にするな。というかドリルは男の浪漫武器の一つだろう。なら浪漫（ドリル）でいいはずだ。

「ともかく、茶々丸にドリルの使い方を教えればいいんだな」

「おう」

吼太ｓｉｄｅ

なんでか知らんけどドリルの使い方を教える事になった吼太です。

「じゃあ始めようか。まずドリルは普段使う？」

「いえ、あまり使う機会はありません」

それはあれだな。いかんな。ドリルほど使える武器もそうないのに。

「ドリルってのはどんなものでも貫くんだ。それがどういう事かわかるか？」

「・・・・・・つまり？」

「相手が防ごうとも貫ける。防御なんて無視出来る。はず」

「はずですか」

いやだってＯＲＴとかどうしろってんだ。あれを貫くとしたらどんだけのエネルギーがいるんだよ。

「まあそんな事は実戦で理解すればいい」

「わかりました。では早速ご指導お願いいたします」

んじゃ、いっちょやりますか。

「やはりドリルも使い分けが必要でしょうか？」

「そうだな。ドリルのみならずどんな武器も状況によって使い分けないとな」

「特に茶々丸は武器のバリエーションが豊かなんだからな」

要、いたのか。しかし要の言う通りだ。バリエーションが豊かならどんな場合でもオールラウンダーに戦えるって事だしな。

「でも今回は浪漫（ドリル）の使い方をしっかり覚えろよ」

「だからその浪漫（ドリル）はやめろよ」

どんだけドリルに浪漫を求めてんだよ。それなら転生の時にドリルでも貰えばよかっただろう。

「じゃあスタートだ」

「はい」

茶々丸は右手をドリルに変化させる。対人には十分な代物だな。

「行きます」

茶々丸がかなりの速さで向かって来る。突きの速さも申し分ない。

「だけどただ突くだけじゃ駄目だ」

ドリルは突くより穿つもの。俺が手本を見せてやろう。

「ギガドリル！！」

「ディストーション・フィールド」

悪くない判断だ。普通の武器による攻撃ならそれでも十分に防ぎ切れるだろう。

「だがドリルを舐めるな！！」

バキィン

「ぐっ！？」

ぎりぎり避けたみたいだな。そうじゃないとな。

「成る程、先程の言葉はこういう事でしたか」

「ああ。ドリル相手には防御より回避をオススメするぞ」

「わかりました」

すぐに理解してくれるから指導がしやすい。短期間でも著しい成長を遂げるな。

「では再開します」

「どんとこい」

うん、いい感じになったな。動きもさっきまでとは見違える程良くなった。

「疲れてないか？」

「ガイノイドですので」

だけどちょっとふらついたように見えたんだけどな。気のせいだったかな。

ガクッ

「あ」

「危ない！！」

崩れ落ちそうになった茶々丸を抱き抱える。やっぱり無理してたじゃないか。

「申し訳ありません。エネルギーが」

「だったら休め。ガイノイドとはいえ無理は禁物だ」

「・・・・・・」

ん?どうしたんだ?黙り込んで。

「あの、手が」

「手?・・・・・・うわわ!?ごめん!!!」

やってしまった!突然だったから抱き抱えた時胸を触ってた!いくらガイノイドとはいえ女性相手に。

カシャ

・・・・・カシャ?

「見ーちゃった撮っちゃった」

「・・・・・要!!!それを寄越せ!!!!」

要の奴、カメラで今の光景を撮ってやがった。普段ろくでもない事やられてる奴はこういう時ろくでもない事をやり返すに決まってる。

「お前のとこのなのは達にくれてやる~」

「やめろーーー!!!!」

俺を殺す気か!!

結局トゥードが取り返してくれたけど俺には渡してくれなかった。
何故だ。そして茶々丸に謝る前に帰ってしまった。すまない茶々丸。

「・・・・・あの反応。私が女性としての魅力は十分という事ですね。これならマスター・志貴を誘惑出来る！！」

たくましい茶々丸であった。

浪漫（ドリル）の正しい使い方（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「コラボ祭スタート！！ちなみに今日は和歌山」

シャ「今日の名物は？」

椛「なれずしです。今回は早なれずしです」

シャ「早なれずし？」

椛「本来は何日も発酵させて作るのですが、私の鼻にきついので一日だけの早なれずしです」

ア「ふなずしみたいものね」

椛「どちらも川魚で作る保存食ですから。この手の寿司は日本全国にありますよ」

シャ「次回は水橋様とのコラボ」

ア「では次回もお楽しみに」

楽しい日常（一部除く）（前書き）

水橋様とのコラボ。
恋姫のキャラも二人来ます。

楽しい日常（一部除く）

ライトｓｉｄｅ

「異世界という所に行ってみたいわ」

ある日突然、華琳がそんな事を言ってきた。異世界ねぇ。何でわざわざ。この世界も華琳達にとっては異世界だろうに。

「どうして？」

「この辺りの娘には、ゴホン、えーと、そう！視野を広げたいのよ！！」

つまりこの辺の女の子は全部ちょっかいを掛けて暇になったんだな。

「楽しそうですねー。風もいいですか？」

「ええ、構わないわ」

風も来るのか。それならどんな世界にするか。華琳も風も飽きない世界か。そういや要って女子中の教師だったな。あの街は広いから風も飽きないだろうし。

「ライトさん、いるか？」

「火斐か。どうした？」

「修行でもしませんか？」

修行か。それなら要の世界でも十分出来るよな。うん、決定だな。

「なら世界を飛ぶか。天使、聞こえるか？」

『残念！！ゼウスでした！！』

・・・・・は？何でこの人が。あ、確か要を転生させたのこの人だっけ？天使の上司だし。

「な、なあライトさん。もしかしてこれから行く世界って」

「要の世界だぞ」

「嫌だ！！！まだ死にたく『ストップ』・・・・・・」

「固まったわね」

「固まりましたねー」

『さあ飛ばすよ』

「あ、はい」

火斐の奴、何がそんなに嫌がってるんだ？そういえば前回あいつが要の世界に行った時もシグナムと震えて帰ってきたな。

要ｓｉｄｅ

家で無限プチプチを潰していた時、神様の声が聞こえた。

『要くん、今から人を送るよ』

「いきなりですね。まあ構いませんけど」

『寂しい事やってるね』

「気にしないで下さい」

これがなかなか楽しいんだよ。ずっとプチプチプチプチ、ストレス社会の必需品だよ。っと魔法陣が出てきたな。今回は誰が来るのかな。

「到着したか」

「なんだライト達か」

「ギャー！！出たー！！」

「何よ、男の癖に女々しいわよ」

「こいつを知らないから言えるんだよ！！」

「知ってるわよ。呂布を捕まえた奴でしょう」

「このお兄さんがそうですか」

ライトに加えて火斐に、曹操と・・・・・・誰?とにかく外史の人間だろうが、何故いる?

「用事を聞こうか」

成る程、つまり曹操と程イク（さっき教えてもらった）は遊びに。
ライトと火斐は修行に来たのか。

「ああ、私達は真名で構わないわよ」

「いいのか?」

「この世界だと真名の方がいいんでしょう?私は華琳よ」

「私は風です」

「ではよろしく」

この二人だけを街に出したら大変だからな。案内が必要だな。誰かに頼むのは面倒だから、楔でいいか。

「二人の案内人を用意する」

「誰か呼ぶのか？」

「楔でいいだろ」

俺は首にロザリオを掛けて楔と分かれた。

「「！？」」

「よろしくね、お二人さん」

「どこから出てきたのよ！？」

「要の中。私は楔。女になった要と考えればいいわ」

「不思議な方々ですね」

まあ確かに俺みたいのはそういないよな。吼太ぐらいか。

「・・・・・・気が合いそうね」

「・・・・・・同感よ。よろしく」

二人共女好きだからな。そこら辺は雰囲気で察するのか。街中の女の子が被害に遭わないように祈ろう。

「んじゃ、楔頼む」

「任された♪」

「二人は別荘でやるぞ」

「よろしく」

「助けてくれーーー！！！」

諦めが悪いぞ。火斐。

楔ｓｉｄｅ

「ここが麻帆良の学園都市よ」

「広いわね」

「おー」

麻帆良は初めて来た人は迷子になる確率が５割を超えるのよ。勝手

な私の想像だけど。

「要の生徒、一人くらいお持ち帰りする？」

「いいわね」

「怒られますよー」

うーん、確かに。要って私（自分）には厳しいのよね。誰かを渡したりしたらそりゃもう大変な事になるわね。

「ライトに怒られたくはないわね」

「大人しく散歩でもしましょうか」

「そうしましょう」

「そういえばお兄さん達はどうしてるんでしょうね？」

あー、ライトと火斐か。要にいたぶられてる事は間違いないけど、どんな事やってるのかな。

ライトｓｉｄｅ

要の修行を甘く見すぎていた。火斐が怯えるのも当然だ。

「ほら歩くな」

「この鬼畜！！」

「ただの拷問だろ！！」

「重力３倍」

「「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！？」」

俺ら重さが１００ｋｇの重り付けさせられて３００ｋｍの山道を走っている。重力はさっき3倍になってしまった。

「そんな事だとお仕置きだぞ。これなんてまだ軽いんだから」

「「嘘だ！！」」

「うん」

「「嘘だった！？」」

「じゃあ俺先に待ってるぞ」

そう言った要が口笛を吹くと、何かが俺らの上に来た。影からしてそこまでの大きさではないようだけど。そして上を向くとそこにいたのは。

「グリフォン！？」

「何でこんなのが！？」

「俺のペットだ」

要がグリフォンの背中に乗ると、グリフォンはそのまま山頂まで飛んでいってしまった。

「俺らも乗せてけ！！」

「定員オーバーだ」

これって本当に修行になるんだろうか。

華琳ｓｉｄｅ

いい街ね。活気もあるし、いるだけで楽しくなるし、何よりこのお店はいいわ。

「風ちゃん次これ着て～」

「はい～」

「まだ小悪魔のこすぷれがあるわよ」

「はい～」

このこすぷれしょっぷは本当に素晴らしいわ。なるべく沢山買ってあの娘達にも着せてあげないと。

「うげ、何であんたがいるんだよ」

「あら、千雨じゃない。どうしたの？」

「新作を買いに来たんだよ」

楔の知り合いかしら？しかし新作を買いに来たという事は常連よね。

「貴女、いいかしら？」

「あ？誰だ？」

「私の友人よ」

「そうなのか。で、何かようか？」

「この娘達に合うこすぷれは何だと思う？」

私が魏の将達の写真を渡すと、千雨という娘はぶつくさ言いながらも細かくこすぷれを選んでいた。なかなかいい娘じゃない。

「これが終わったら帰りましょうか」

「早過ぎない？」

「多分あいつらが修行してるのは別荘よ。あ、別荘ってうのは一時間で一日過ぎる空間の事よ」

「便利ですね」

本当に。でもそれっと歳を取るのも早くなるって事よね。それは嫌だわ。

火斐ｓｉｄｅ

よ、ようやく終わった。こいつ本気で俺らを殺す気じゃあるまいな。

「遅いぞ。そのおかげでいい修行が思い浮かんだ」

こいつのいい修行って嫌な感じしかしないんだが。とりあえず聞いてみないと。ここで逃げたらなんて言われるか。

「まず火斐。お前に足りないものはなんだ？」

「俺に足りないもの？力じゃないか？」

「そんなだから変な奴と言われるんだ」

ぐっ、修行の時は普通に火斐って言ってたのに。だったら何が足りないってんだよ。

「お前には集中力と冷静さが足りん。だから特別修行を用意した。ライトはちょっと待ってろ。お前用のもあるから」

「わかった」

「じゃあついてこい」

はぁ、憂鬱だ。まともな修行だといいんだが。

俺が連れて来られたのは針山。まさか、遂に串刺しか！？

「ほらこれ」

「・・・・・板？」

「これを針の上に置いて、板の上で座禅しろ」

「はぁ！？落ちたら串刺しじゃねぇか！！」

「だから落ちないようにしろ」

マジでこいつ俺を殺す気だろ。うん、間違いない。きっとライトさんも危ない目に合わされるんだ。

「あ、しばらくしたら鉄球飛んでくるから」

みんな、今までありがとう。さようなら。

ライトｓｉｄｅ

俺どんな修行をやるのかな。

「お待たせ。お前にやってもらうのはこれだ」

「何だこれ？」

要が持ってきたのは両手を置く窪みだけがあるノートパソコンのような機械。モニターは無数にある。

「魔力測定器」

魔力測定器？これで俺の魔力量でも測るのか？

「この窪みに手を置け」

「こうか？」

「そうそう。んで、このモニターに数字が現れる。その数字とピッタリの魔力を流せ。お前は総合力が十分だからこんな修行しか思い浮かばなかった」

つまり魔力の精密操作かな。なかなか難しそうだな。しかしこんな評価をされてたとはな。

「最終的には十本全ての指から違う量の魔力を流せるようにしてもらう」

何だと？それどんだけの精密操作をしないといけないんだよ。

「あ、一秒以内にモニターの数字と同じ魔力流さないと電撃が流れるから」

「何でだよ！？」

「罰って必須じゃん」

こいつが酷い理由がわかった気がする。

風ｓｉｄｅ

さてー、お兄さん達は強くなったんでしょうか？それにしても華琳様はいっぱいお買い物しましたね。

「まさか袋が６つになるとはね」

「しかも千雨ったら全部が全部ピッタリなもの選ぶもんね」

えっと、確か楔さんの話ではこの物体が別荘だったはずです。どうやって入るんでしょう？

「はいはい、そんなに焦らなくても入れますよ～」

「焦ってません。興味があるだけです」

「じゃあ入るわよ」

すると私達の周りに光が溢れ、光が無くなると別の空間にいました。

この世界に来る時と似た感覚ですね。

「あ、変な奴」

「・・・・・何やってるのよ、あれ」

確かに火斐さんはいましたが、針の上の板に座禅を組んでいて、飛んでくる鉄球を体を少し反らして避けたり、手で軽く軌道をずらしたりしていました。

「おかえり」

「ただいま、要。あれ何？」

「修行」

よくあんな修行が出来るものですね。一歩間違えば即死でしょう。

「ライトは何処かしら？」

「あそこ」

そこにはいくつもの画面と向き合うお兄さんがいました。物凄い速さで数字が映ってますけど、何をしているのでしょう？

「随分と成長したわね」

「二人共元がいいからな」

「楔、ライトは何をしているのかしら？」

「魔力の精密操作よ。精密操作が出来れば無駄な魔力を使わず戦えるしね」

ほほー、よく考えられた修行ですね。要さんはなかなかいい指導者なのですね。

「しっかし要が遊ばないなんて珍しいわね」

「俺も遊びたかったが、たまにはまともにやってやらないとな」

前言撤回です。この人は指導者としては落第点ですね。

「よし、二人共終了だ！！」

「「やっとか」」

要ｓｉｄｅ

もう少し遊んでもよかったかな。最初の山登りだけじゃ面白みが少なかったな。

「ちょっとライト!?その手の火傷、どうしたのよ!?」

「さっきの修行の代償、かな」

「ふーん、要。貴方やり過ぎじゃない？」

おお怖い。でもしょうがないんだぜ。修行に痛みは付き物なんだからな。

「まあまあ華琳。これで多少なりとも強くなったんだから」

「・・・・・仕方ないわね」

『準備出来た?じゃあ帰すよ』

神様の声が聞こえる。今回はもうさようならか。

「また来いよ?今度は俺に負けないくらいになってな」

「やってやろうじゃねぇか」

「それくらいにはなりたいもんだな」

まああんな事を言ったけど、俺はこいつらに永遠に追い付かせるつもりはないけどな。

「このカメラで写真を撮ったらこっちにもデータ送られるから」

「わかったわ。しっかり撮ってきてあげる」

「風のこすぷれ姿もまた撮られるのでしょうか。残るとなると恥ずかしいものですね」

「「可愛いから大丈夫」」

女性陣は何があったんだろう。

楽しい日常（一部除く）（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん風〉

椛「あれ？風といえばシルフさんでしたよね？」

風「今回は私がお邪魔させてもらうのです」

ア「では始めましょうか。今日は静岡」

シャ「今回の名物は？」

椛「ハチご飯です」

風「風は少し用事が」

ア「あ、忘れ物した」

シャ「お化粧直ししないと」

椛「冗談です。静岡おでんです」

風「驚きましたよ」

椛「でも名物ですから」

ア「嫌な名物ね」

シャ「とりあえず、えっと、あの、変な人にお土産としてハチどう

ぞ。他はおでんを」

風「ではではいただきます」

ア「次回は畏無様とのコラボ」

シャ「では次回もお楽しみに」

俺の世界ではよくある事（前書き）

今回は畏無様の「魔法少女リリカルなのは～偽リノ騎士～」とのコラボ。
誰かが突然来る。それはこの世界ではよくある事。
何か問題があればご報告を。

俺の世界ではよくある事

要ｓｉｄｅ

「鏡はん、あ～ん」

「やらんでいいと言っておろう」

千草が鏡に引っ付いてうちまで来たんだが、飯の度にこの調子。そりゃ俺も新婚時代はこんな感じだったんだろうが、客観視するとここまでうざいものとはな。

「お前ら出てけ」

「いやや。なんでバケモノの言う事聞かなあかん」

「鏡も十分バケモノだぞ」

誰でもいいからこの色ボケ女をどうにかしてくれ。

「うわぁ！！？」

「へぶっ！？」

「あ！大丈夫ですか！？」

「いや、よくやってくれた少年」

「え？」

いきなり上から降ってきた少年が千草を潰してくれた。有り難い。
これで楽になった。

「鏡は千草の看病でもしてろ。俺はこの少年と話をする」

「うむ、わかった」

響介ｓｉｄｅ

（なあスカイ、どうしてこうなったんだ？）

（さあ？何故でしょう？）

「えーと、名前は？」

「あ、安藤響介です」

「俺は一条要だ。ほれお茶、いるか？」

「じゃあいただきます」

この人も俺が女の人を潰して礼を言うし、それ以前に降ってきた俺に対して平然と対応してるし。

「何が聞きたい？」

「此処は何処ですか？」

「異世界と思ってくれ。お前みたいのは頻繁に来るからな」

そうなのか。だから平然としていられる訳か。しかしこの人強そうだな。

「ちょっとお願いがあるんですけど」

「いいぜ。あと自分の話しやすいように話せ」

「じゃあそうさせてもらうよ。俺を鍛えてくれないか」

《いいのですか?》

多分この人に鍛えてもらったら強くなれる。そんな気がする。

「構わんが、まず検査を受けてもらおうか」

「検査?」

「俺はお前の強さを知らんからな」

ああ確かに。強さを知らなかったらどんな修行をすればいいのかわからないからな。

「ついてこい」

別荘とか言う不思議な空間でやらされた検査は学校でやる体力測定みたいのから、女の子のロボットと戦うのまでいろいろあった。というかあのロボット強すぎだろ。見た目も完全に人間だし。

「ふむふむ」

「何かわかったか？」

「基礎体力が足りん」

それもそうだ。まだ体が出来上がってないんだから。

「成長期の体にきつい修行は出来ん。軽く体力作りでもしようか」

「わかったよ」

「軽くランニングとか筋トレだな」

俺はこの時、この人の軽くって言葉を甘く見ていた。ランニングは片道１００ｍのシャトルラン。筋トレは限界までやって回復。限界までやって回復の繰り返し。回復してるから肉体的疲れはないんだけど、精神的疲れが酷い。しかも完全に善意だからたちが悪い。

「どうだ？」

「・・・・・体力作りは大変だなぁ」

「ハハハ！！みんな最初はそんなもんだ！！」

《何か違う気がします》

スカイの言う通りなんだが、体力が付いたのも事実だしな。

「あ・・・・・・」

「どうした？」

「子供の頃から過度の筋トレすると成長に影響あるの忘れてた」

「おい！？」

「悪い悪い。お茶でも飲んで落ち着いてくれ」

この人本当に悪いって思ってるのかな。

要ｓｉｄｅ

いつもの癖でちょっとやりすぎたかな。反省しなければ。

「ただいまー！！」

「おかえり、久遠」

「安藤響介です。よろしく」

さっきまで遊びに出かけていた久遠が帰ってきた。手提げ袋に大量のお菓子を引っさげて。

「それどうしたんだ？」

「木乃香が余ったからってくれた」

それはそれは、後で木乃香に礼を言っておこう。

「響介も食べよ」

「じゃあ貰おうかな」

という事でお菓子パーティーが始まった。ちなみに俺は洋菓子派だ。

「はい響介」

「あ・・・・・」

久遠から飴を貰った響介が固まった。

「スカイさんや」

《何でしょう、要》

「あいつ飴嫌いなのか？」

《そういう訳ではないのですが・・・・・・》

何か事情がありそうだな。嫌いでないのに固まるとなると、嫌な思い出でもあるのか？

「食べないの？」

「う・・・・・いただきます！！！」

ボフン

響介が飴を口に含んだ瞬間、響介が女の子になった。飴を舐めると性転換する体質とは。

「女の子になっちゃった」

「ふぇ～」

《あの、要。あんまり変な目で双葉を見ないで下さいね》

「見ねぇよ。俺だって性転換するんだから」

「要兄様も？」

兄様て、響介も性転換すると大分性格が変わるようだな。

「名前は双葉でいいかな？」

「うん」

『要！！私も出しなさい！！！』

『食べる気だろう？断るよ』

楔の奴は見境がないというかなんというか。我ながら恥ずかしい。

《どうかしましたか？》

「中にいる別姓の自分が五月蝿くてな」

「要兄様話せるんだ。凄い」

「凄くも何ともない。迷惑なだけさ」

「ねえねえ双葉ちゃん。遊ぼ」

「うん！」

久遠は双葉を連れて外に出て行った。子供ってのは元気だな。

響介ｓｉｄｅ

正直双葉を出したらどうなってしまうかと思ったけど、要まで性転換出来るなんてな。親近感が湧いた。

「しかし何でこの世界に来たんだろうな？」

「事故の奴もいれば遊びに来る奴だっている。俺を弄るためだけに世界を渡るのもいるんだ。お前はそうならないでくれよ？」

「ハハハ・・・・・・」

弄るためだけって、そんな事で世界を移動できる奴が凄いな。

《そういえば響介、どうやって帰ります？》

「・・・・・どうしようか」

「大丈夫。方法はある」

そう言った要が持ってきたのは、大砲？

「さあこれの中に入れ」

「いやいやいや！！！おかしいだろ！！？」

「とは言ってもうちにはこれしかないんだ」

どうする俺、どうする！！

「要くん、何してるの？」

「おうすずか。こいつを元の世界に帰すのに手間取っててな」

「トランスポーターならさっき出来たよ」

「マジか！！」

よく知らないお姉さんありがとう！！貴女は女神だ！！

「ちょうど実験台探してたんだ。助かったよ」

・・・・・俺、モルモット扱い？

《頑張りましょう》

「うん」

結局無事に帰れたんだけどね。

俺の世界ではよくある事（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん〉

ア「今日は千葉」

シャ「某夢の国！！」

椛「ではありません」

ア「行きたかったな」

椛「落花生で我慢して下さい」

シャ「いくら名物でも落花生じゃね」

椛「いいんです。お酒のツマミにしてください」

ア「次回は葵（仮）様とのコラボだったわね」

シャ「では次回もお楽しみに」

唯一神を内包する者と究極の一を内包する者（前書き）

葵（仮）様の【唯一神】シリーズとのコラボです。
問題があったらご報告を。

唯一神を内包する者と究極の一を内包する者

唯一神ｓｉｄｅ

「唯一神様、お客様です」

おや珍しい。誰でしょうか？

「ゼウス様です」

・・・・・彼ですか。突然何の用でしょう？

「ハーイ！！元気？」

「元気ですが、随分と変わったものですね、貴方も」

昔は仕事にも真面目で周りからの信頼も厚かったのに。今ではまるで遊び人。

「神だって変わるさ。君も変わった方がいいんじゃないか？あの馬鹿をどうにかするために」

「なら貴方がして下さい」

「お断り。僕は今修行で忙しいの」

修行？彼が？信じられませんね。昔なら、いえ昔ですら戦いには興味を示さなかった神なのに。

「要くんの所見てるとね、うかうかしてたら殺されそうな気がして。しっかり鍛えて対抗しないとね」

「要、確か貴方が転生させた人間でしたか。今では特異点。異常者の溜まり場となっている」

「そうそう。それで本題。要くんとそっちの霞ちゃんを会わせてみないかい？」

彼とですか。彼のような人物と会ったらどのような影響が出るのやら。

「こないだ会ってるからいいじゃん」

「それは違う世界での話でしょう。世界が違えば話も違います」

「案ずるより産むが易し！！サラダバー！！」

「あ！！」

行ってしまった。どうなるのでしょう。

霞ｓｉｄｅ

街を歩いていたら金髪の男に絡まれた。

「まあまあいいじゃない。ちょっとだけ異世界に行くだけだからさ」

「異世界行くのってちょっとだっけ？」

いきなり異世界って何この人、危ない。

「とりあえず誰よあんた」

「聞くの遅い。僕はゼウス。よろ～」

ゼウスって最高神のゼウスか。軽っ！神の癖に軽っ！！

「とにかく面白いのがいるからさ」

「えー、でも「こないだ安藤響介って子が来たっけな」なぬ」

響ちゃんが来ただと？なんだか一気に興味が出たぞ、その世界。

「じゃあ行ってみよう！！」

「おーー！！って誰の世界か教えてよ」

「要くん」

「要くんかい！！」

こないだ貴史くんの世界で会ったばっかりじゃん。よかった、知ら

ない人じゃなくて。

「飛ばすよ」

「はいよ」

要ｓｉｄｅ

「イヤッホー！！要くん！！」

「霞、だっけ？」

「うん」

オッドアイで白銀の長髪をした女。霧雨霞が突然家に転移してきた。
いきなり現れてどうしたんだ？

「ねえねえ」

「何だ？」

「響ちゃんが来たってほんと？」

「響ちゃん?ああ、響介か。来たぞ」

こいつ響介と何か関係でもあるのか?よくわからんな。

「実は響ちゃんとはああいう仲でさ」

「・・・・・理解した」

まあ多少の年齢差はあるが、それを言ったらキリが無いのが沢山いるからな。

「要くん、お客さん?」

「おお、大人なのは」

「また転生者さん?」

「普通に対応された!?」

「うちじゃ日常茶飯事だからな」

というかなのは達自身が今じゃ転生者だしな。もし驚くとしたら、本当に変なものだけだな。

「他には誰がいるの?」

「久遠にフェイト、すずかにヴィータ、スバル、文。あと俺のマテリアルとそれに惚れた女」

「ハーレムじゃない。文って射命丸？」

「ああ。それと久遠は違うぞ。妹みたいなもんだ。まあフラグ体質なのは否定はせんが」

なのは達に加えて木乃香に刹那、千雨と文。これだけフラグを立てておいてフラグ体質じゃないとは言えんさ。

「男の浪漫を体現してるね」

「なるべく回避するようにはしてるんだぜ。フラグ体質だが、フラグは察知出来るからな」

「へ～」

フラグ神やフラグ王のようにはなりたくないからな。

「あのさ、要くん」

「おう？」

「一戦やらない？あの時胃痛で実力わからなかったし」

「ああ、構わん」

俺としても霞の実力を理解しておきたいからな。ほどほどにやるか。

霞ｓｉｄｅ

要くんってどれくらい強いのかしら？チートって事ぐらいしか知らないし。

「まず、いや始めから１００でいいか。あとアルティメットワン」

１００？とりあえず王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）から勝利すべき黄金の剣（カリバーン）を取り出しておこう。

「デバイスは使わないでいいのか？ユニゾンもいるのに」

「模擬戦だもん」

《負けるなよ？》

「頑張って下さい」

ロストも撫子も心配しないでいいよ。あ、ロストは私のデバイスで撫子はユニゾンデバイスね。

「そうかい。そらよ！！」

「くっ！？」

速い！！しかも勝利すべき黄金の剣（カリバーン）がミシミシいってる。どれだけ重い攻撃なのよ！！

「ほらほら！！どうしたよ！！」

「こんのぉ！！」

あんまり私を舐めるなよ！！ぶった切っちゃる！！

「でりゃりゃりゃりゃりゃりゃ！！！」

こちらが連撃を繰り出すも受け流されていく。要くん、攻撃力だけじゃなくて技術も高いなぁ。

「でも私だって負けないよ！！スターライト・ブレイカー！！」

「うお！？」

近距離からの砲撃、どうなったかな。

「危ないな」

要くんはシールドを張って耐えていた。シールドも折り曲げられている。これなら受け流せるわ。

「この距離であれを撃つか」

「この距離でよく防ぐね」

「くくっ」

「ふふふ」

強いね、要くんは本当に強い。すっごく楽しいよ。

「それじゃ、１５０だ」

「！？」

バキィン

勝利すべき黄金の剣（カリバーン）が折られた！？威力が桁違いに上がってる！！

この威力に対抗するには。

「無毀なる湖光（アロンダイト）！！」

「それで来たか。確かにそれなら折れんな。だが、お前を倒す事は出来る！！」

「やってみなさい！！」

「久遠かあいいよ～♪おっ持ち帰りぃ～♪」

「いけません」

久遠もふもふ。もふもふ久遠。久遠気持ちいいよ。気持ちいいよ久遠。え？模擬戦？終わったよ。

「読者は結果を知りたいんだと思うが」

「心読まないでよ～」

「ク～」

「久遠、何故同意した」

とりあえず結果ね。時間切れ。以上。

「ねえ、やっぱり久遠「いけません」ぶー」

《霞も諦めろ》

「そうですよ。久遠ちゃんは要くんの家族なんですから」

でも可愛いものを欲しがるのが女の子。他人ものを欲しがるのが人間ってもんでしょ。

「ま、遊びに来るぐらいならいつでも歓迎するからよ」

「そう、じゃあ今度は私が勝つわ」

「もうちっと年取ってから言うんだな、小娘」

小娘って。体はまだ若いけど、見た目よりは生きてるのに。

「なら要くんはいくつなのよ」

「１２０超え」

「お爺ちゃんじゃん」

「小遣いやろか」

むむ、上手くあしらわれた気がする。

『霞ちゃん。どうだった？』

「お、ゼウスだ。楽しかったよ」

「神様。やはり貴方ですか」

要くんが敬語使ってる。この人そんなに偉いの？

『そろそろ帰ろうか』

「うん、いいよ」

「帰るのか」

「ん～、寂しく「全然」早っ！！酷っ！！」

「どうせまた会うだろう。だから気にする事でもない」

「・・・・・・そうね」

なんか照れるな。でも確かに、会うって思ってたら寂しくなんてないもんね。

「じゃあね、まあ会おう！！」

「その前に久遠を置いてけ」

ちっ、バレたか。

唯一神を内包する者と究極の一を内包する者（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「今日は埼玉」

シャ「ここの名物は？」

椛「うまい！うますぎる！！の十万石まんじゅうです」

ア「よくわからないけど有名らしいわよ」

シャ「でも埼玉名物だからそのフレーズも埼玉限定かしら？」

椛「次回は秋代様とのコラボ」

シャ「要くんの胃はどうなるのやら」

ア「では次回もお楽しみに」

大・爆・発（前書き）

秋代様とのコラボ。
何が爆発するって？見ればわかる。

大・爆・発

貴史ｓｉｄｅ

「貴史」

「どうした？クロナ」

「一条要で遊びませんか？」

いきなりだな。何でだ？

「最近ほのぼのして胃痛から遠ざかってると聞きまして」

それはいかんな。要の胃痛は全国の皆さんが望む娯楽の一つなんだ。

それにあいつが胃痛から逃れる事は永遠にないしな。

「よし行こうか。どうやって胃痛を起こす？」

「それは、ゴニョゴニョ」

「ふむふむ、それで行こう」

「「くっくっく」」

要ｓｉｄｅ

ゾクッ

「・・・・・嫌な感じだ」

物凄い嫌な感じがしたぞ。暗殺とかそんな命に関わるものじゃないが、とてつもなくやばい感じだ。

「要くん、お醤油切れちゃったんだけど」

「買ってこよう」

ちょっと外に出て気分転換でもしようかね。何かのフラグの気がしてならないが。

えっと、醤油は買った。久遠の菓子も買った。他は特にないな。事件も起こらなかったし、気のせいだったかな。

「ちょっと貴方」

「はい？」

パンッ

「・・・・・・は？」

いきなりすれ違った見知らぬ女にビンタされた。俺が何をした？

「貴方今触ったでしょ」

「はい？」

「すれ違った時私の体を触ったでしょ！！」

いや、何を勘違いしているんだ。触った？俺が？こういう場合はどう対処すればいいんだ？

「おい、どうした？」

なんか柄の悪そうな男が出て来た。面倒な事になりそうだ。

「聞いてよ！この男痴漢したのよ！！」

「いやいや！！ただの誤解だって！！」

「お前、俺の女に手を出すとはいい根性してるな」

聞いてねえ。この状況、かなりやばい。どうすればいい。

パシャ

その時、カメラのシャッター音が聞こえた。

「あ、朝倉？」

「ハハハ、要先生。ご愁傷様」

「おい！！こっち来い！！」

男に引きずられながら俺は思った。人生終わった、と。ああ、胃が痛い。

人気のない路地裏。どんな事をしてもいいからこれが誤解だと気付いてくれ。

「ククク」

「ハハハ！！面白い！！」

「・・・・・この声は」

「貴史だ！！」

「クロナです！！」

この二人、変装してやがった！！そうか、そういう事か。

「あの慌てよう、傑作だな！！」

「まさかあそこでパパラッチが出て来るとは、まさにナイスタイミングですね」

そこまでして俺を胃痛にしたかったか。ああそうかい。お前らの望み通り俺の胃痛は今最悪だよ。

「ホントに、要で遊ぶのは最高だ！！」

その瞬間、俺の中で何かが切れた。

貴史ｓｉｄｅ

おや？要の様子がおかしいぞ。

「魔力が高まってますね」

「ああ」

しかもなんかぶつぶつ呟いてるな。何て言ってるんだ？

「・・・・・嫌いか・・・痛い・・だよ・・・・・潰・・・殺され・・・・・・」

病んだか?病んだのか?

「!?　何だ、あれ」

要の体がどんどんと変化していく。皮膚がＯＲＴのように。それが手先から要を侵食していっている。

「Ｇｉ・・・Ｇｉｉ」

「これはまずいかもな。赤い槍（ブラッディ・ランス）」

次元を斬り裂いて俺らと要は違う世界に飛ぶ。確かここは無人世界だから戦っても問題ないはず。

「Ｇｙｕｉｉｉｉｉｉｉ！！」

「変わったな」

「ＯＲＴに飲まれたのでしょうか?」

要は人型をしているが、全身ＯＲＴと同じ外殻になり、眼は赤い。面影があるのは髪ぐらいだな。

「Ｇｉｉｉｉｉｉｉｉ！！！」

「来るか」

今までの要より圧倒的に速い。ＯＲＴ状態よりも上か。だが見えるぞ。

「Ｇｉｉ！！」

「フッ！！」

ハイキックだな。受け流すかな！？

ズドン

「ガッ！？」

ハイキックから踵落としに変えただと！？フェイントだったか！！

「Ｇｉｉ！！」

「させません！！」

要はクロナに蹴り飛ばされたが、ダメージはないようだな。

「大丈夫ですか？」

「本能で戦ってるもんだと、油断したな」

「体に染み付いているのでしょうか？」

でもあれはＯＲＴだろう。いくら要の中にいたからって技が使えるのか？

『ちょっとあんた達!!とんでもない事やってくれたわね!!』

「楔?」

「要と一緒に飲み込まれなかったのですね」

『飲み込まれた?飲み込んだのよ!!要が!ORTを!!』

何?いやでも確かに、もしORTが要を飲み込んだなら人型でいるのはおかしいし、さっきみたいなフェイントをする訳がない。

『あんたらが要に与えたストレスが爆発したの!!責任取りなさい!!殺すんじゃないわよ!!』

めんどくせぇ。でも面白いな。

「なら9割殺す!!!赤い槍(ブラッディ・ランス)!!!」

「Gyuaaaaaaaa!!!」

ガキィンガキィンガキィンガキィンガキィン

この野郎。本当に暴走してるのか?赤い槍(ブラッディ・ランス)が当たる外殻のみ厚く、硬くしてやがる。それでも流石に手はボロボロだな。

「Gii」

ブチッ

「なっ!?」

自分の手を引きちぎっただと!?赤い槍の傷（ブラッディ・ランス）は治らない。再生するORTにとっては治らない部分を捨てる事は有効的だが、躊躇なくやるか。

「手伝いましょうか？」

「俺がやる」

「せっかく面白そうな敵なのに」

俺だってそう思ってるから一人でやりたいんだ。

「Giiii・・・・・」

魔力が集まるのを感じる。手に魔力を集めて放出する気か。

「Gaaaaaaaa!!!」

「貫け!!!」

俺が赤い槍（ブラッディ・ランス）を投げ付けると、魔力の塊は霧散した。しかしそこに要はいなかった。

「Giiii!!」

「あら、私をご指名ですか」

クロナの方に行ったか。殺されないか心配だ。

クロナｓｉｄｅ

フフフ、私に向かってくるとはいい度胸ですね。

「Ｇｙｕａａａａａａａａ！！！」

技は悪くありません。柔の攻撃も、剛の攻撃もしっかり使い分けできているようですし。

「ですがまだまだですね。蛇咬（スネークバイト）！！」

「Ｇｉｉｉ」

あら？随分とあっさりちぎれてしまいました。いえ、これは自切ですね。

「Ｇａａａａａａａａ！！！」

「おっと」

もう少しで蹴られるとこでした。戦いが体や本能に染み付いてますね。見方によってはある種の才能ですね。

「そろそろグダってきたので終わりにしましょう！！鮮血に穢され（ブラッディ・アロンダイト）し湖光！！！」

鮮血のごとき輝きを放つ斬撃がそのまま襲いかかろうとしていた要ごと飲み込んだ。しかしその鮮血の中、こちらに向かってくる影が見えた。

「まだ、終わっちゃいねぇ！！！」

「っ！？」

今までとは違う、明確な意思が込められた拳。私を殴るという意思が込められた拳。その一撃が私の頬に傷を付けた。

貴史ｓｉｄｅ

「要、戻ったのか？」

「ああ、今の一撃でな」

ショック療法か。ならさっさとエアをぶっ放せばよかったかな。

「迷惑掛けた。もう帰って「私の肌に傷を付けておいて帰れと？」・・・・・・・」

「俺もまだやりたりんな」

「・・・・・・星の枷、解除」

「はっ、まだ隠してやがったか」

「これは意識しないと外せないんだよ」

いいじゃねぇか。楽しいじゃねぇか。それでこそやる気が出るってもんだ。

「クロナ！！」

「わかってます」

「「今こそ：汝が右手に
その呪わしき命運尽き果てるまで
高き銀河より
下りたもう蛇遣い座を宿すものなり

されば、我は求め、訴えたり、
喰らえ、その毒蛇の牙を以て！！
汝が神に、我が身を捧げん！！」」

俺らは悪魔の腕を解放する。おもいっきりぶつかろうじゃないか。

「悪いがさっきまでの暴走であまり長く戦えそうにない」

「なら短くて濃厚な戦いでもしましょう」

「そうだぜ。全力で来い！！」

「なら、遠慮無く！！」

さっきまでとは桁違いの速さで要が走ってくる。あいつがやろうとしている事は単純明快。ただ殴る。それだけだろう。

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「蛇殺（スネークジェノサイド）！！！！！」

要の拳は俺の顔をぶっ飛ばし、俺の一撃は要を真っ二つに抉った。

どちらも瞬時に再生したんだけどな。

「私を忘れないで下さい」

「忘れるかよ。抜骨・全解！！」

「危ない危ない」

「ちっ、一発も当たらんか」

抜骨の連打バージョンか。だけどさっきの掠った一撃でやる気になったクロナには当たらんぞ。

「ほーら、蛇咬（スネークバイト）」

「ぬお！！？」

おお避けた。なかなかやるな。

「てめぇらいい加減にしろ！！！いっぺんぶっ飛べ！！！」

「おお～～～！！」

「ひゃ～～～！！」

要の魔力放出で一気に距離が離された。そして要が魔力を溜め始める。

「最後の一撃か」

「ならこちらも敬意を込めて倒しましょう。」

「だな。目覚めよ、赤い乖離剣（ブラッディ・エア）」

俺は赤く染まった乖離剣を。クロナは赤く染まった約束された勝利の剣（エクスカリバー）を出す。さあ最後の一撃。楽しませてくれよ。

「消し飛べぇぇぇぇぇぇ！！！！」

「鮮血の（ブラッディ）・・・天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！！！！！」

「鮮血にまみれし（ブラッディ）・・・圧倒的な勝利の剣（エクスカリバー）！！！！！」

三つの膨大な魔力の奔流がぶつかる。しかし要の魔力波は一瞬拮抗しただけで一気に押され、最後には要を飲み込んだ。

「・・・・・・驚いたな」

「・・・・・・ええ」

ただの魔力波で俺ら二人の攻撃を一瞬とはいえ拮抗するとは。しかも要の奴、あれに飲み込まれても立ってやがる。まあ皮膚は戻ってるし、気も失ってる。全身もボロボロで、ところどころ体が欠けているんだけど。

「予想外のところで楽しめたな」

「そうですね」

要、また来るぜ。

ちなみに要の処理は要のとこの神がやったんだとさ。

大・爆・発（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん〉

ア「兵庫～」

シャ「ここの名物は？」

椛「神戸プリンです」

アリシャ「「わ～い。まともだ～」」

椛「そういえば気づいてましたか？」

アリシャ「「私達が一纏めって事？」」

椛「違います。今回で日本ぶらり旅が４０回目なんですよ」

アリシャ「「な、なんだってー！！」」

椛「つまり残り7県なんです」

アリシャ「「めでたいね～」」

椛「これ終わったら貴女達が解雇という噂も」

ア「ちょっ！？待ってよ！！」

シャ「そんなの聞いてないわよ！！」

椛「次回は香崎様とのコラボです」

アリシャ「「ちょっとーーー！！！」」

チート夫婦とその娘がやってきた（前書き）

香崎様とのコラボ。
このキャラ達は個人的に使いにくい。でも楽しい。

チート夫婦とその娘がやってきた

要ｓｉｄｅ

「はい」

ペチッ

「ぬおぉぉぉぉ！！？」

「もう、何でこんな風にボロボロなの？」

「・・・・・すみません」

貴史達との戦いの後、体中が痛いのなんの。いくら神様に治してもらっても、死なない程度に治してもらっただけだからな。

「フェイト、もう少し優しく「ペチッとな」ぎゃおぉぉぉぉ！！？」

「情けないわね～」

「しかしなんでこんな状態なんだ？」

「この残留魔力からして、貴史かな？」

・・・・・なんでチート夫婦とジェイルがいるんだ？

「「「遊びに来た」」」

「知らなかったの？」

嘘つけ。絶対なんか変な目的があるだろ。こいつらはところどころ信用ならん。というかフェイトは知ってたのか。この感じだと俺だけ知らなかったのか？

「俺とユリは茶々丸に用があってな」

「茶々丸の人間化よ」

「ほう、しかしそれは大丈夫なのか？ガイノイドだから出来た戦いもあったろ」

「そこは武装で何とかする。すずかの協力もあるしな」

またすずかか！！とはいえ茶々丸にとっても人になった方がいいかもしれんな。人（？）に恋をしてるんだから。

「で、私は吉谷吼太から＜見せられないよ＞を採取したから次を君のをと思ってね」

「・・・・・ハハハ！！あいつも搾られたか！！しかし俺なんて普通なのでもいいのか？」

「普通とは、よく言えたものだな」

だって普通だろ？俺の力はあくまでＯＲＴのもの。俺自身の力なんてたいした事はない。

「でも俺一人の意志じゃ決められんな。これでも既婚者だし」

「問題ない。その交渉ならもうしたよ」

「ヴィータが最後まで粘ったけどね」

まあヴィータが一番そういうのに堅いからな。しかし他の奴、夫をそう簡単に貸し出すなよ。これは信頼されてると考えてもいいのか？うん、そうポジティブに考えよう。

「しょうがない。あいつらがＯＫ出してるなら従うしかないな」

「潔いな。では早速」

「待て待て。俺は怪我人だぞ」

まだ体中が痛いってのにヤったら死ぬわ。そこら辺を配慮しろよ。

「第一避妊の準備はしたのか？自分が大丈夫と思っても以外とそうじゃない時だってあるんだぞ」

「いいじゃないか、避妊程度。そろそろ乱にも新しい家族を「たわけ！！」痛っ！？」

「そんなので娘が喜ぶか！！いいか？そもそも・・・・・」

百合姫ｓｉｄｅ

うわー、説教長そう。ジェイルもご愁傷様。年寄りの説教ほど面倒なものはないわよ。

「じゃあ俺らは茶々丸の所に行こうぜ」

「そうね、すずかも待ってるでしょうし」

すずかと茶々丸は先にすずかのラボで待っているはず。前準備はもう終わってるはず。

「それじゃ、転移！」

到着。相変わらずでかいラボね。

「すずか！！」

「いらっしゃい。準備出来てるよ」

「おお！！やるな！！」

そこにはガラスのポットに入れられた脳と骨格があった。

「人工脳と人工骨格なんて無茶言うよ。私は生体関連は専門じゃないんだよ」

「よく言うわ。これだけ完璧なものを作っておいて」

「本当に。ジェイルと組んだらどうなるやら」

そんな事したら世界が大変な事になるわよ。チートでも止められそうにないわね。

「もう脳には茶々丸の記憶を入れてあるから。素体をよろしく！！」

「任せろ！！」

鈴が脳と骨格に肉付けするように茶々丸の体を創っていく。以前の見た目と違う所があるとすれば、耳のアンテナがないのくらいかな。

「終わった～」

「お疲れ様」

「後は目が覚めるのを待つだけだね」

上手くいったね。流石は私の夫。

「鈴ーーーー♪♪♪」

「楔か」

「要が始めたからこっち来たの」

ああ、本当にヤってるんだ。まあジェイルが満足するなら私は構わないけどね。

「すずかもヤる？」

「私は要くんと、って決めてるし」

「その要はヤってるのに？」

「それはいいの。私達が許した事だし」

「ふーん。まあいいや。鈴、ヤろ♪」

「ま、終わったしいいぞ」

「もちろん私もやるね」

楔もいると何か盛り上がるのよね。何か知らないけど。

「ヤるならあちらで」

「「はーい」」

鈴ｓｉｄｅ

楔の体力とテクが驚くほど成長していたな。流石これは予想外だった。

「お父様、お母様、おはようございます」

「お、茶々丸起きたのか」

「調子はどう？」

「問題ありません。寧ろ良好です」

それはよかった。失敗したらどうしようかと思ったよ。茶々丸も俺らの娘だからな。

「茶々丸。体慣らすためにちょっと歩こうぜ」

「はい」

そういえばジェイルはどうなったかな？上手くヤったかな？ヤってなかったら要をちょっとボコるだけだけどな。

要のいた場所に行くと、要がジェイルに関節技をかけていた。

「ヘルプヘルプヘルプ！！！」

「あぁ！？ざけんなよ！？」

「こーら要！！ジェイルに何してるのよ！！」

「そうだぞ！！ジェイルが何をした！！」

大体予想は付くけどあえて聞いてみよう。

「こいつ避妊薬とか言って妊娠薬使ったんだぞ」

「まあ確実に妊娠する訳でもあるまい「ＤＡ・ＭＡ・ＲＥ」痛い痛い！！」

妊娠した場合責任を取るのは要なんだが。とにかく止めようか、な？

「ね、ねえ。寒くない？」

「殺気、だよな？」

「後ろ、振り向きたくないんだけど」

「でも向かないと、話が進まなそうだし」

「じゃあ、いっせーのーで！！」

振り向くと４人の鬼が立っていた。わかりやすくいえばなのはとフェイトとヴィータとスバル。

「妊娠までとは聞いてないよ」

「悪い人達だね」

「だからあたしは最初から反対したんだ」

「とにかく、お仕置きですね」

うん、いくら俺らでもギャグ補正にはかなわないんだ。

「「逃げろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

「「「「待てぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」」」」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あやや！？何ですか、このカオスは！？」

「文さん、おかえりなさいませ。今までどちらに？」

「同志とネタ漁りに。ってそんなのはどうでもいいんです。これは一体？」

「文ちゃんは知らなくていいよ」

「すずかさん！？」

「そうですね」

「茶々丸さんまで！？」

「そういえばマイスターは参加なさらないのですか？」

「予想出来たからね。姿や性別。趣味が変わろうともジェイル・スカリエッティだし。あ、彼女は神崎か」

「妙に説得力があるので納得しておきます」

「私をはぶらないで下さ〜い！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

チート夫婦とその娘がやってきた（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん覇風〉

ア「・・・・・・栃木」

シャ「・・・・・・名物は？」

椛「いくら降板の危機があるからって落ち込まないでください。名物はじゃがいも焼きそばです」

アリシャ「「ふーん」」

華琳「全く、情けないわね。あら、意外と美味しい」

風「じゃがいもと焼きそばは合うんですね」

椛「すみません、お二人共」

華琳「貴女が気にする事ではないわ」

風「そうですよー。椛ちゃんはちゃんとやってますから」

アリシャ「「（，・ω・、）」」

華琳「本当にあれはどうにかならないのかしら？」

風「ならないと思いますよ」

椛「次回はユタ様とのコラボです。次回もお楽しみに」

世界を渡る者来る（前書き）

ユタ様とのコラボ。
試合にする予定が全力ボケに走ってしまった。
問題があればご報告を。

世界を渡る者来る

要ｓｉｄｅ

「セイッ！！」

「オラッ！！」

「その程度か？」

俺は体の調子を整えるためにスバルとヴィータを相手に試合をしていた。

「なんか強くなってません？」

「そうだな。調子が非常にいい」

一回あの暴走モードになったおかげか、一つ壁を突破した感じだな。普段使う限界突破とはまた違う。根本的にレベルが上がったな。

「おーい」

「ん？確か、哭堵だっけ？」

「優でいいぞ」

「被る奴がいるからパス」

あのフラグ神と被るからな。というかよく今まで被る名前がいなか

ったもんだ。

「要、知り合いか？」

「こないだちょっと共闘した」

「初めまして、要さんの妻のスバルです」

「ヴィータだ」

「よろしく。哭堵優だ」

「で、用は？」

「試合しようぜ」

試合か。まあ自称神様だから相手にとって不足はないんだが、まだ万全じゃないからな。

「本調子じゃないから軽くになるが、いいか？」

「ああ。雑魚とやるより数千倍マシだ」

前は実力がよくわからなんだが、今回はその力見せてもらうよ。

哭堵優ｓｉｄｅ

なんか前より強くなってる感じがするな。あの時でも全力ではなかった感じなのに。

「さて、何でやるか」

「何でもいいぜ。相手してやる」

「なら死棘の終末（ゲイバルローメ）」

「ゲイボルグ、じゃないな。改造宝具か」

一目でわかるか。まあこんだけ中身が違えばわかるよな。

「じゃあ適当に。スバル、合図」

「はーい！はっけよーい「違う！！」えー」

なんかやる気がガクンと下がったな。試合だから別にいいんだけどさ。というか今要ツッコまなかったよな。

「ほらほら早くしろ」

「お前もノリノリで四股踏むな！！」

もしかして俺が変なのか？空気読めてないのか？

「安心しろ。お前の反応を楽しんでるだけだ」

「そうか、安心した。ってヴィータも行司姿じゃねぇか！！！」

そうか！こいつら俺のペースを崩す気だな。なんという姑息な手を使うんだ。

「じゃあ真面目にやるぞ」

「やっとか」

「両者構え！！・・・・・・始め！！」

まず俺が一歩踏み込み、頭、左胸に突きを放つ。要は体を僅かにずらしてそれを避ける。

「ハッ！！」

俺はそこから槍を振るい要を狙う。槍ってのは確かに突きが威力が高いが、薙ぎ払いもそのリーチ故に威力が高く、牽制としても優秀だ。

「ほっ」

しかし要は漫画のように穂先に乗ってそれを避けた。実はこの方法はかなり有効だ。確実に避ける事が出来るし、武器を踏まれるって事は武器破壊の可能性もある。チート以外出来る奴はそういないけど。

「ニードルガン！！」

「当たらん！！」

槍から飛び降りた要が撃った針のような魔力弾を避ける。だが避けた先に髪の毛以上に細い魔力弾が飛んでくるのが見えた。

「オォォォォ！！」

槍を回転させそれを弾く。刺さってもたいした事はないんだろうが、もし何かあったら嫌だしな。

「マイクロニードルがよく見えたな」

「一応創造神だぞ？」

「毒込めたのに」

毒って。効かないけどえぐい事考えるな。

「まあいっか。次はこれだ」

そう言った要が取り出したのは、大砲か？人が持つにはデカすぎるけどな。

「魔導式粒子砲～」

「青狸っぽく言っても超危険物だな」

「あれだって地球破壊爆弾持ってるぜ」

確かに。そういえばあの狸は貧乏だったよな。地球破壊爆弾は未来ではそんなに安価で売られているのだろうか？

「発射！！」

キィィィィン　ドオォォォォン

「・・・・・・」

甲高い充電音と大きな発射音。だけど出てきたのは砲撃などではなく、カラフルな紐やら紙吹雪やらだった。

「なあ、これって」

「スマン。パーティー用のクラッカーだった」

なんでそんなもんを出すんだよ。間違えるような見た目の造るなよ。

「みんな～！ご飯だよ～！！」

「「「はーい」」」

・・・・・俺、何しに来るんだっけ？まともに戦ったのほんのちょっとだよな。

「お前も食ってけ」

「ああ」

「あれ？どちら様？」

「こいつは哭堵優。あいつと被るから、こっちは哭堵。あいつはフラグ神で」

俺はフラグ神じゃない！！！

今何か変な声が聞こえた気がしたんだが、というか結局優を使って

ないな。

「ごちそうさま。美味かった」

「当然だ。うちの妻が作った飯だぞ」

プロとは違う家庭的な味ってのはいいよな。安心出来る味っていうのかな。

「今日はスマンな。真面目にやらなくて」

「ああ気にするな、っておい。本当に真面目にやってないのか」

「当然だ！！いや～、神でも遊べるんだな～」

この野郎、今度やる時は全力でぶっ倒してやる。

「しかし神とかいう割にはボケに弱いな。やっぱり自称だろ」

「違うわ。第一ボケに強い神なんて・・・・・・いるな」

「だろ？」

「もういい。俺は帰る」

「またな」

帰りながら切実にボケ対策はした方がいいのだろうか、と考えてしまった。

世界を渡る者来る（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「山梨県よ」

シャ「名物は？」

椛「ほうとうです」

ア「あ、知ってる」

シャ「この時期は温まる食べ物はいいわね」

椛「心は？」

アリシャ「「聞かないで」」

椛「でも二人がいなくなるかどうか。日本巡ったら次どうするかは読者の皆様次第ですよ」

アリシャ「「みんな助けて下さい！！」」

椛「次回は龍賀様とのコラボです。では次回もお楽しみに」

差ってのを教えてやる（前書き）

龍賀様の「テンプレな転生（仮）」とのコラボです。
説教があります。
問題があればご報告を。

差ってのを教えてやる

森龍斗ｓｉｄｅ

最近一人で鍛練するのも飽きてきたな。とはいえなのは達相手じゃあな。

『ほっほっほ、暇しとるかの』

「神か。何の用だよ」

『異世界に行ってみんか？』

異世界か。なんか面白そうだな。

「強い奴いるか？」

『・・・・・おぉ、おるおる。なかなか強いぞ』

「よし行くぜ」

『では飛ばすぞい』

どんな奴かな。俺が本気で戦っても大丈夫な奴だといいけど。

「そういえば強い奴の名前は？」

『一条要じゃ』

要ｓｉｄｅ

「ラーメン美味いな」

「うん！！」

「私の調査のおかげですからね」

「はいはい」

文が調べたっていう麻帆良の美味いラーメン屋に俺と久遠、それと調べた本人である文とでラーメンを食いに来たのだ。

「すみません、塩ラーメン一つ」

「あいよ」

少年が一人でラーメン屋に入ってきた。最近の親は何やってんだか。ガキの面倒くらいしっかり見とけよ。

「あの、すみません」

「ん？何だ？」

「一条要って人知りませんか？」

「・・・・・俺だが」

こいつは俺が狙いか。転生者か？神様が連れて来たのか？

「よかった、捜さなくて。俺は森龍斗です。よろしく」

「知ってると思うが、俺は一条要。こっちは久遠と射命丸文だ」

「よろしく！」

「よろしくお願いします」

「え？久遠に射命丸って」

「お前の予想通りだろうさ。さあラーメンラーメン」

早く食わないと伸びるからな。話は後からでも出来る。美味いラーメンは今だけ。

森龍斗ｓｉｄｅ

「森は俺に試合を挑みに来たと？」

「ああ」

ラーメンを食い終わった後、俺は要と街を歩いていた。さっきタメ口でいいって言われたからタメ口だ。俺も龍斗でいいって言ったけど、同じ名前の知り合いがいるからって断られた。

「しかし凄いな。志貴とかいるんだろ？麻帆良なのに」

「凄いのかどうかは知らん」

いや凄いだろ。ネギま世界にこんないろいろ混じってるって普通はないだろ。まあ転生者がいる事自体普通じゃないんだけど。

「お、見てみ。ここが志貴達の店」

「へー、千年城か」

名前はらしいっちゃらしいな。定休日なのが残業だけど。

「入る？」

「邪魔したら悪いし、早く試合したいし」

「そうか。じゃあやるか」

やっぱり別荘持ちなんだな。まあ便利そうだしな、これ。

「さて、どんなもんでやるかな」

「本気で来いよ。そうじゃないと鍛練にならない」

「・・・・・あまり調子に乗るなよ？」

その瞬間、俺の周りから全てが吹き飛んだ感じがした。足は震え、呼吸すら危うい。

「あ・・・・・・」

《マスター！？どうしたのですか！？》

俺のデバイスであるブラッディクロスことクロスに声を掛けられてなんとか踏み止まった。

「ふん、弱いな」

「弱、い？」

「井の中の蛙大海を知らず。お前は調子に乗りすぎだ」

こいつ、言わせておけば好き勝手言いやがって!!

「クロス!!セットアップ!!」

《セットアップ》

俺は黒い制服にマントを羽織ったようなバリアジャケットを纏い、クロスはナイフとなる。

「斬る!!」

「黙れ」

俺は閃鞘・七夜で斬り掛かろうとしたが、またもや足がすくんでしまった。

「お前は今までどんな戦いをした?大方生温い戦いだったんだろ?」

「違う!!」

「違うならなんで殺気で怯む。動けなくなる。お前のそれは警戒ではない。怯えだ」

怯え。俺が殺気で怯えている?そんな、俺は今までの戦いでそんな事は一度もなかったのに。

《マスター!!相手のペースに飲み込まれないで!!》

「お前は何も知らない。本当の殺し合い。泥臭く血生臭い殺気。そして圧倒的なまでの敗北。そんな奴は強くなれない。貰った力をただ振り回し、気がついた時には大切なものを失っている」

俺は、俺は・・・・・・

「だが今なら間に合う」

「・・・・・・え？」

「俺も昔はそうだった。自分が負ける事なんてないと思ってた矢先、殺されかけた。そしてそれをバネに強くなってみんなを守れると天狗になった時、鼻をぶち折られた。気付けばいい。自分がどんなに傷ついても気付けばいいんだ。そして、ちゃんと強くなれ」

こいつ、いやこの人は・・・・・・

「不器用」

「知ってる。言葉で教えるのは苦手でね。暴力で教えるのが得意なんだ。早速やるか」

やってやる。俺は強くなる！！そしてあいつらを守ってやるんだ！！

「クロス！！やるぞ！！」

《はい！！》

「いい眼になった。さあ、潰してやるよ！！」

俺はナイフを振るい要を斬ろうとしたが、刃は要に傷一つ与える事が出来なかった。威力不足か。ならば!!

「絶世の名剣(デュランダル)!!」

斬れないものはないと言われるこの宝具。これの前にはいかなる守りも無意味!!

「セイヤッ!!」

「遅い!!!」

メキィ

「ガッ!!?」

剣を振ったが要はそれを避け、カウンター気味に俺の胸に掌底を打ち込んだ。俺は血を吐きながら飛ばされた。さっきの打撃音にこの感覚。胸が陥没してるぞ。真祖の体じゃなきゃ死んでたぞ。

「大丈夫か?」

「ゲホッ、グッ・・・何が、大丈、夫かだ」

「大丈夫だな」

何を基準に言ってるんだ。あれか?喋れるなら大丈夫ってか?

「まだやれるだろ?」

「当たり前だ！！」

とはいえこっちの攻撃はさっぱり当たらない。どんなに速く剣を振ろうと掠りもしない。

「お前、何で当たらないんだろう。とか考えてるだろ？答えを教えてやろうか？」

「なんだ？」

「経験と技術。転生してどれだけ経ってるか知らないし、前世で何をやっていたかも知らないが、お前には経験が足りん。戦場にいる一般人にも負けるほど経験が足りん。そして技術。所詮貰い物。お前が鍛え上げたものじゃないから良くて１００％しか使えない。それ以上使えるようにしないとな」

１００％以上って。技の持ち主以上の力を引き出せってのか？

「他にも３７ほどあるが、置いておこう」

そんなにあるのかよ。でも確かに今はいいか。今は自分の手札でどうやって攻撃を当てるか。あれならどうだ？

「いくぞ、秘剣・燕「フンッ！！」なっ！？」

「まるわかりなんだよ！！抜骨・四肢抜き！！」

ゴキ　ゴキ　ゴキ　ゴキ

俺が構えた瞬間に剣を蹴り飛ばされ、両肩と両膝を触られた。する

と関節が外れてしまった。

「はいおしまい。頑張りましょう」

・・・・・これで終わったと思うなよ？

「ブルート・ディ・シュヴェスタァ！！！」

空想具現化による月落とし。体が動かなくても使えるし、おそらく威力も最も高い。避ける事だって無理なはず。

「フッ」

しかしそれを見た瞬間、要は鼻で笑った。

「武装・ＯＲＴ」

要の右手が異形の姿に変わる。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

そして要の右手と偽りの月がぶつかった時、月は砕け消えた。

「痺れる～」

「・・・・・」

「ア然としてるな。俺は以前これ以上の月落としを喰らってな。それと比べたら空想じゃなくて妄想以下だよ」

本当に何だよ要って奴は。強いなんてもんじゃないぞ。

「お前も十年もすればかなり強くなるよ。ほら、関節治すぞ」

「あたっ！もっと丁寧にしろよ」

『どうだったかの？』

あ、神。もしかしなくても今まで見てたのか？

『お主は敵となる者がおらんかったからの。ここで一回負けてもらおうと『だから勝手に要くんを使ったと？』ゼ、ゼウス様！？』

『ぶっ飛べー。アルテマキャノン』

『ブベラッ！！？』

・・・・・うん、ご愁傷様。要があれならこっちの神様もあれだな。

『じゃあ帰すよ』

「あ、ああ」

「また来いよ？」

「今度は勝つ」

馬鹿にされないくらいに強くなってみせる。

要ｓｉｄｅ

行ったか。

『要くん、腕大丈夫？』

「やっぱりわかりました？」

『僕を誰だと？』

ゼウスでしたね。そりゃわかるのは当然。いや、見る人が見ればわかるか。

「武装・ＯＲＴを使えば未熟な空想具現化程度軽いと考えたが、俺が未熟だったか。慢心とはな」

俺の右腕は筋肉が殆ど断裂しており、骨は粉砕状態。治してはいるがもうちょっと掛かりそうだ。何が妄想以下だ。立派な空想だよ。

《主、今回は試合に勝って勝負に負けましたね》

「次は完全勝利だ。修行するぞ」

《はい》

またの試合を楽しみにしてるぞ、森龍斗。

差ってのを教えてやる（後書き）

＜続・アリシャの部屋＋わん＞

ア「新潟だ！」

シャ「ここといえばコシヒカリよね」

椛「そうですが、他にも皆さんがよく食べるものもあります」

ア「何？」

椛「柿の種です」

シャ「あれ！？」

椛「元々は機械の故障で出来たようです」

ア「へー」

シャ「次回は本編ね」

椛「そうですね。二人は頑張って」

アリシャ「「何が？」」

椛「残り少ない出演を」

アリシャ「「嘘だ！！！」」

椛「次の候補は私、雨季さんの夫婦コンビ。私、アルフさん、フィーラさんのわんわんわん。私と日替わりで要さんのヒロインや家族が一人づつ出演する。などなど」

アリシャ「「私達じゃ駄目なの！？」」

椛「では次回もお楽しみに」

新たな始まり（前書き）

久しぶりの本編は適当かな？

新たな始まり

詠春ｓｉｄｅ

今朝部下から連絡があった。以前麻帆良の修学旅行で事件を起こしたメンバーの一人である犬上小太郎くんが逃げ出したと。彼一人で逃げ出すのは難しい。ならば共犯者がいるはず。

「月読くん、いいかい？」

「およ？どうしました、長？」

「小太郎くんの件だが、私が言いたい事がわかるかい？」

月読くんはクスリと笑った。やっぱり彼女か。

「何でそんな事を？」

「簡単な事どすぇ。出番です」

「出番？」

「うちはなぁ、最後の戦いに全く出んかったんや！！わかります！？わかりませんよね！！出番があった長にはね！！」

……これは、叱れない。罰せれない。

「シクシク」

どうすればいいのだろう。

要ｓｉｄｅ

ピンポーン

ある日の朝、誰かが家に訪ねてきた。また異世界から誰か来たか？

「おはようございます」

「ネギ坊主？明日菜ちゃんまで」

「お願いがあります」

「とりあえず入れ」

お願いねぇ。面倒な事の気がするな。面倒だったらどうしよう。

「む、客か？」

「あ、鏡さ…ん」

「こら、部屋に戻れ」

「うむ、千草」

「はい～」

二階から降りてきたのは鏡と千草だったんだが、その格好がタオル一枚という姿だった。朝までヤってたのか。

「スマンな」

「いえ……」

「あの二人って」

「明日菜ちゃんの考えてる通りだよ」

今では殆ど付き合っているような感じだな。二人で違う家に住めよ。

「で、話は？」

「僕を弟子に「無理」えぇ！？」

「別にいいじゃないですか！！」

そう言われても無理なんだよな。俺とネギ坊主はタイプが違いすぎる。

「要さんの力を見た時、この人しかいないと思ったんです！！」

「私からもお願いするから」

「だから無理だって。やだじゃなくて無理なんだよ。出来ないの」

俺は魔法使いじゃないんだから。俺は魔導師。しかも殴り合いしか殆どしないんだから。

「なら要さんのオススメとかないの？」

「オススメか。ネギ坊主は魔法使いだからエヴァンジェリンかな」

俺の知る限りではあいつがこの世界の魔法使いでは最強クラスだからな。近衛右門でもいいがあいつが教えるとは思えんな。

「わかりました」

「せいぜい頑張って交渉しな」

ネギ坊主達が出ていってしばらくすると電話がかかってきた。

「はい、一条で「こらぁ！！一条要！！」五月蠅いぞ、エヴァンジェリン」

「厄介事を押し付けるな！！」

でもな、俺だって厄介事はやだからな。それにあれだ。エヴァンジェリンならいい師になれるだろうし。

「とにかく、お前がやれ！！」

「魔法使いだからエヴァンジェリンがやれ」

「そっちだって魔法使いだろ！！」

「魔導師だ」

このままじゃ話は平行線だな。どうやって押し付けるか。

「ならエヴァンジェリン。お前に報酬をやる」

「……内容は？」

「うちに転がってる魔法鉱石や魔法薬の原料を好きなだけやる」

魔法使いであるエヴァンジェリンならこれに食いつかないはずがない。うちに何があるかってのは知ってるだろうからな。

「いいだろう。だが弟子にするかどうかは坊や次第だ。それでも報酬は貰うぞ」

「結構。お前に押し付けたいだけだからな」

「本音が出たな」

気づいてたくせに。しかしネギ坊主次第とは、何か試験でもやるのか？まあいいか。

「頑張れよ」

「頑張るのは坊やだがな」

木乃香ｓｉｄｅ

学校でなんやようわからん噂が広まっとった。ネギくんが古ちゃんと楓ちゃんに告白するとかなんとか。

「木乃香、どうなってると思う？」

「武術でも習うんとちゃう？せっちゃんはどう思う？」

「このちゃんの言う通りやと思うよ」

「まあそんな感じか。っと噂をすれば」

千雨ちゃんが見つけたんは世界樹の下で向かい合っとるネギくんと古ちゃん、楓ちゃんやった。

「しかし何であの二人は引き受けたんだか」

何でやろな。ようわからんわ。あ、ネギくんが突っ込んだ。でも簡単に捕まってもうたな。端から見れば抱きついてるように……

「ネギ先生に何をしてるんですか！！」

「流石いいんちょさん。即登場やな」

「つーか見張ってたろ」

「それがいいんちょやで」

さーて、うちらはさっさと帰ろか。って千雨ちゃん、何をしとるんや。

「これか？ちょっとカメラをな。面白い映像撮れそうだし」

「ほどほどにな」

「「「ただいま～」」」

「お前らの家ではないだろう」

およ？どうしてエヴァンジェリンさんが要兄ちゃん家におるん？

「おかえり、どうした？」

「何でエヴァンジェリンさんが？」

「報酬の受け渡しだ」

「「「報酬？」」」

「私が坊やを鍛える報酬だ」

何でネギくんの事で要兄ちゃんが報酬を渡すんかわからんけど、エヴァンジェリンさんにも弟子入りしたんか。

「さっき古と長瀬にも鍛えてもらってたのにな」

「待て、それはどういう事だ？」

「ほい、生中継」

千雨ちゃんがエヴァンジェリンさんに小型モニターを渡す。早速さっきのが役に立ったな。

「ふ、ふふふ。とんだコウモリ野郎だったか」

「どうすんだ？お前が鍛えるのやめるか？」

「気に入らんが、あちらは武術。こちらは魔法。分野が違う師ならば大した問題はない。しかしやはり気に入らんな。……桜咲刹那！！」

「はい、何ですか？」

「坊やと試合しろ」

「はい？」

エヴァンジェリンさん、何を言うとるんや？そんなの意味ないやろ。

「構わんだろ？一条要。報酬にお前の弟子を借りるのを追加だ」

「構わんが、何故試合を？」

「せっかく坊やが武術を鍛えるんだ。ならそれを試験にしてやる」

「でも、刹那に勝てないだろ」

「そうやそうや、千雨ちゃんの言う通りや」

「一撃。これなら可能性は十分にある」

いやいや、それでもきついのレベルちゃうで。

「刹那、やるか？」

「わかりました」

「手加減無しだ。したらおわるせかいだ」

ネギくんオワタ。

新たな始まり（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん〉

ア「兵庫に来たわ」

シャ「名物は？」

椛「明石焼きです」

ア「これ美味しいわよね」

椛「汁をごくごく飲むのが雨季さんは好きだそうです」

シャ「まあ、人の好みだしね」

ア「しかしネギはどうなるのかしら？」

シャ「いい目には遭わないわね」

椛「そういえば今のところ時期後書き候補はわんわんわんですね」

ア「いやーー！！」

シャ「まだ消えたくない！！」

椛「あと四回、では次回もお楽しみに」

現実は厳しいね（前書き）

まだ試験じゃないよ。

現実は厳しいね

刹那ｓｉｄｅ

さて、今日も鍛錬をしますか。今日は無手での戦いを教えてもらいましょう。

「刹那さん！！」

「明日菜さん、どうしました？」

「エヴァンジェリンさんの試験の事だけど」

「私がネギ先生と試合しますよ」

「本当だったんだ。ねぇ、手加減とか「出来ません」だよね」

うちだって死にたくないから。手加減をしたらエヴァンジェリンさんに厨ニ奥義ＥＦＢを食らわされるし。（注：おわるせかいです）

「まあネギ先生によろしく言っておいて下さい」

「うん……」

手加減は出来んけど、制限なら出来るかもしれんからちょっと交渉してみよ。

「構わんぞ」

「流石エヴァンジェリンさん」

どんな制限がいいかな。あんまりやりすぎはいかんし。ある程度、片手しか使えないくらいかな。

「ではお前が二人との戦いに勝ったらな」

「え？」

「ではお願いします」

「ごめんね、刹那ちゃん」

「悪いが相手をしてもらうぞ、桜咲」

何で志貴さんとクラトスさん相手に戦わないといけないん？うち悪い事したん？

「制限なんて出来るほど偉くなったら、やれるよな？」

「エヴァには逆らえなくて」

「稽古と思え」

「ちなみに桜咲は無手だ」

うちは大変な事をしてしまったようです。生きて帰る自信が全くありません。さようなら。

久遠ｓｉｄｅ

「ふふふーん♪」

久しぶりに一人で散歩。お小遣いも要から貰ったし、何か買い食いでもしようかな。

「ん？」

あれがネギだね。修行してるのかな。

「頑張ってーー！！」

誰だろ、あれ。ネギに指導してる二人は知ってるけど。生徒の一人かな。狐モードに変身して近寄ってみよ。

「クー」

「わ、可愛い！！どうしたのかな？」

「あれ？その狐、確か要先生の所の」

とりあえずこの女の子の隣で見てよ。それにしてもあれだな。上達してはいるけど、上辺だけ。これじゃあとてもじゃないけど刹那と戦えないね。

「ネギくん、ちょっと休んでご飯にしよ。ほらいっぱい作ってきたから」

「わー、美味しそうですね。ありがとうございます、まき絵さん」

「ほらほら、どんどん食べて」

うわー、あんなに食べたら駄目だよ。

「う、うぷっ。もう駄目」

「わわわ！？ごめんね！！」

うーん、あの子的にはお手伝いしたいんだろうけど、あれじゃあ逆効果だよ。

「あ、なら「佐々木殿、思いだけ受け取るでござるよ」え？」

「ネギ坊主、大丈夫アルか？」

そりゃ止められるよ。

「何をしてるんだ？」

「おや、エヴァンジェリン殿ではござらんか」

「ふむ、武術の練習か」

エヴァはネギの動きを軽く見て嘲笑した。

「まるで子供のお遊戯だな」

エヴァから見ればそうかもしれないけど、ううん、これは挑発かな。

「何なんですか貴女は！！自分が子供みたいな見た目して！！」

何でまき絵って子が怒るの？自分の事じゃないのに。ネギが好きって感じでもないし。

「なんだ貴様は」

「貴女が何か知らないけどネギくんを馬鹿にしないで！！ネギくんは貴女くらいちょちょいとやっつけちゃうんだから！！」

「そうか。なら坊や、ちょっと掛かって来い」

「え？」

「行ってくるアル」

「少しはいい経験になるかもしれぬよ」

うん確かに。圧倒的な実力差を肌で感じる事は大切だもんね。

「なら、行きます！！」

ネギがエヴァに突っ込んでいく。要もよく使う八極拳だけど、普段要のを見てるせいか酷く拙く見える。

「ふん」

「うわわ！？」

エヴァはそんなネギを投げ飛ばした。ネギの力を利用しつつも自分の力も加えて投げる。芸術と言われるレベルだね。

「もう少し鍛錬しろ。そうしなければ届かんぞ」

「クー」

私はエヴァの頭の上に乗った。いつも通りサラサラした髪だね。

「重い」

「クー！！」

ぺちっ

「あた」

女性に重いは失礼だよ。

楓ｓｉｄｅ

「大丈夫でござるか？」

「は、はい」

「まあ予想通りアルね」

「あう」

古の一言に落ち込むネギ坊主であるが、拙者も予想通りであった。全てにおいてエヴァンジェリン殿は格が違うのだ。寧ろああ言われたという事は可能性があるという事。誇っていい。

「それにしてもまき絵は何であんな事言ったアルか？」

「……頑張ってるネギくんが馬鹿にされた気がして」

拙者が見る限りはそれだけではないようであったが、これ以上は個人の問題。口を挟む事ではござらんな。

「さあエヴァンジェリン殿をギャフンと言わせるくらい強くなるでござるよ！！」

「はい！！」

とはいえ、刹那相手にどれほど戦えるか。たった一撃。されど一撃。

その一撃に辿り着くまで時間が足りるだろうか。

～～～～～～～～～～～～

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「せっちゃーん!!戻ってきてー!!」

「おい、夕映、のどか。刹那はどうしたんだ？」

「何でもエヴァンジェリンさんが志貴さんとクラトス先生を使って虐めたとか」

「私はそこにアルクェイドさんと茶々丸さんもいたって聞いたよ」

「調子に乗ってごめんなさい馬鹿言ってごめんなさい生まれてきてごめんなさい原子として存在してごめんなさい存在がごめんなさい」

「せっちゃーん!!？どんだけネガティブやねん!!？」

「とにかく重症だな」

「のどか、心を読んでみれば？」

「嫌だよ。私だって鬱になりたくないもん」

「確かにあれの心読んだら鬱になりそうだわ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「せっちゃーん！！いい加減飽きられるで！！それでも芸人か！！」

「剣士だろ」

「剣士ですね」

「剣士ですよ」

～～～～～～～～～～～～～～～～

現実は厳しいね（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん子〉

ア「今日は神奈川だけど」

シャ「子って、何？」

椛「ゲストですよ」

ア「子って、子供？それとも○○子的な？」

シャ「誰なの？」

椛「今回初登場です。言うならばまーくんみたいな存在です」

ア「な！？」

シャ「また私達の出番が食われるじゃない！！」

？「そんな小さい事気にしてるから落とされるのよ」

アリシャ「「ぐはっ！？」」

アリシャに９９９９のダメージ。しかしアリシャはしぶとく生き残った。

？「うわー、まるで黒光りする害虫並みの生命力ね」

ア「五月蝿い！！誰よこの幼女！！」

椛「ほら叶ちゃん。自己紹介して下さい」

叶「はーい、椛お姉ちゃん。私は神条叶（しんじょかなえ）。４歳です。パパの名前は一条要。ママの神崎ジェイルです」

ア「ああ、デキてたんだ。通りで髪と顔は要に似てると思った」

シャ「眼と性格は完全にジェイルだけどね」

叶「心が荒んでるからそう見えるんだよ」

アリシャ「「黙れ毒舌幼女」」

椛「ほら皆さん、神奈川名物の鳩サブレですよ」

叶「わーい」

ア「この子もこれから後書きに参加？」

椛「そのうち本編に出ると思います。出演者さんの楽屋に挨拶しに行きましたから」

ア「楽屋！？」

シャ「そんなの私達ないわよ！？」

叶「じゃあね、また会おうね～」

アリシャ「「締めるな！！」」

覚悟とは（前書き）

また要の説教付き。というかそれメイン。
これは恥ずかしい。黒歴史だ。この小説自体黒歴史か。

覚悟とは

文ｓｉｄｅ

今晩はネギくんの試験という事で要さんとエヴァンジェリンさんの家に来ています。

「こないだは刹那が世話になったようだな、志貴、アルク、クラトス」

「ちょっとやりすぎたかな」

「私は楽しかったわよ」

「何事も経験だ」

刹那さんの話を聞く限りはフルボッコだったようですが、成る程、それも経験ですか。

「そろそろ時間〈ピンポーン〉来たな」

時間ぴったり。流石に真面目ですね。

「ネギ・スプリングフィールド！！試験を受けに参りました！！」

「よく来た、な」

おや？対応に当たったエヴァンジェリンさんの声がおかしいですね。何かあったのでしょうか？

「何で余分なのがいる！！」
あやや～、これはこれは。ネギくんが一般生徒まで連れてきてしまったようですね。何を考えているのでしょうか。

要ｓｉｄｅ

あいつ、これを何だと思ってやがる。

「あややも要先生も魔法関係者？」

「おや同志。その様子だと」

「ネギくんが魔法使いってのを知ってね」

朝倉に知られたか。まあこいつにはいつか知られそうな気がしていたがな。

「要先生、ちょっとお話聞いても？」

「断る」

「魔法使いってことバラすよ」

それで交渉しているつもりか？まあこの一言があればこの世界の魔法使いは大抵黙りそうだが、俺は違うぞ。

「バラすならバラせ。誰が信じるかわからんがな」

「証拠写真だって」

「合成写真と言えばいい。非現実的なお前の話と現実的な俺の話。さて、どちらが多くの支持を得るかな？間違いなく俺だろう。そしてお前はインチキ記者と後ろ指を刺されるだろうさ」

「むむむ」

「同志、要さんは優しいからこう言っているのですよ」

文め、何を言い出すんだ。

「魔法っていうものは華やかな世界ではありません。いつ死ぬかわからないような世界です。戦場と変わらず、もしかしたら自分が相手を殺すかもしれません」

「……」

「それでもこの世界に入りますか？」

「！？　おい！！」

本当に何を言い出すんだ！！流石に止めさせてもらうぞ。

「要さん、同志は諦めませんよ。なら今引き込んでおいた方がいいです」

「だが」

「本当に優しいね、要先生は。でも私は決めたから。何があっても後悔しない」

「……たわけ」

そんな眼をされたら止められんだろう。全く、俺も甘くなったもんだ。無駄に守らなきゃいけないものが増えるってのに。

「裏のイロハは文から教われ」

「了解しましたー」

さあネギ坊主の試験だ。この短期間での成長見せてもらおう。っとその前に。

「朝倉、訊いておきたい事がある」

「何ですか？」

「お前は将来、かなり有能な記者になれるだろう。しかしそれは同時に沢山の敵を作る事になる。テロリストやマフィアなんかな。お前は女だ。捕まった場合、わかるな？」

「……」

無言で頷く朝倉。わかっているならそれでいい。

「さて、その場合最後は殺されるかもしれん。お前はどうする？」

しばらく黙った後、静かに、けして大きな声ではないが、しっかりと俺の心に響く声でこう言った。

何が何でも生きる

ふっ、確かめる必要はなかったな。意識してるかしてないか知らんが、覚悟をしっかり持っているようだな。安心した。

刹那ｓｉｄｅ

「試験内容は桜咲に武術で一撃を入れる事。制限時間はない。坊やがくたばるまでだ」

「はい！！刹那さん、お願いします！！」

「こちらこそ」

手加減は駄目。やったら今度こそ殺される。制限してるのは能力程度。あとは剣を使わないくらい。これでネギ先生は大丈夫やろうか？

「いきます！！契約執行９０秒間！！ネギ・スプリングフィールド！！」

自分への魔力供給、そして瞬動か。でも真っ直ぐやな。

「へぶっ！？」

ちょっと足を引っ掛けたら転んでしまった。

「せっちゃんナイス！！」

「まあ妥当だな」

「ちょっと、ネギ応援してあげてよ」

ハハハ、まあこのちゃん達はこっち側やし。

「さ、ネギ先生、立って下さい。まだやるのでしょう？」

「はい！！」

元気なのはええけど、さっきの動きで実力は大体把握出来た。

「やっ！！たっ！！」

「よっ！ほっ！」

『おぉー』

いい勝負をしているように見えるのか歓声があがる。だけど見る人が見ればそんな事はない。

「てやぁぁぁ！！」

「そろそろ、かな」

「あ」

「そこ！！！」

ズドン

「がっ！？」

ネギ先生の魔力供給が切れた瞬間を狙って掌底を叩き込む。魔力切れ状態は生身。そこに一撃入れれば落とす事は容易い。

「げほっ……ぐっ」

「ネギ！？」

「あれ大丈夫なの！？」

まあ大丈夫やと思うよ。打ったうちが言える事ちゃうけど。

「意外と早く終わったな」

「まだ……です」

「ほう、ならやってみろ」

うはっ、エヴァンジェリンさん容赦なさすぎワロタ。っと千雨さんのが移ってもうた。

「はぁ、はぁ」

「出来るんですか？」

「この試験は……僕が、くたばるまで、ですから」

一撃入れただけでこの状態。本当に大丈夫やろか？エヴァンジェリンさんには悪いけど、ここからは力だけは加減させてもらおう。

「……」

バシン

「ぐっ！？」

「……」

ドコッ

「あがっ!?」

あれからしばらく、リンチと言われてもしょうがないような状態が続いている。観客から聞こえるのはほぼ悲鳴と変わりない声。

「もうやめましょう」

「ま……だ……」

「もう私止めてくる!!」

明日菜さんがネギ先生を止めるために飛び出そうとした。

「ダメーーーー!!」

しかしそれを佐々木さんが止めた。

「まき絵ちゃん、でも今止めないと!!」

「わかってる。けど今止める方がネギくんは可哀相だよ!!どんな事でも頑張るって言ってたもん!!」

「そんなの子供も意地っ張りじゃん!!」

「ネギくんは大人だよ!!その、上手く言えないけど……ネギくん

にはカクゴっていうのがあると思う」

覚悟。佐々木さん、その言葉は簡単に口にしていいものやない。この場に一人、そういうのに敏感な人がおるし。

「覚悟、と言ったな」

「要先生？」

「佐々木にとって覚悟とは何だ？ああやって無謀な戦いをする事か？」

「そうじゃないけど、ネギくんはしっかりした目標があるし」

「そうだ、あいつには目標がある。しかしそれが覚悟に繋がるかといえば否だ。人には様々な覚悟がある。例えば朝倉にはジャーナリストとしての覚悟だ」

要さんがこの試験の前に朝倉さんと話していたのはその事かな？朝倉さんは認められたって事かな？

「あいつが持たなきゃいけない覚悟は二つ。一つは戦う者としての覚悟。そしてもう一つ、わかるか？」

「……わからない」

「教師としての覚悟だ。あいつは何よりもまず教師として動かなければならない。例え生徒に嫌われ、避けられ、陰口を叩かれようとも生徒のために行動すべきだ。新田先生などがいい手本だ。あの人は教師という役職に誇りと覚悟を持っている」

確かに、新田先生はいろいろ規則に厳しかったりするけど、それは生徒を思っての事。だからそれがわかってる人には人気もある。

「だがあいつはどうだ？教師としてこれが何の役に立つ。生徒を導くのに暴力が必要なのか？それに戦う者としての覚悟もない。戦う者としての覚悟は何も相手に立ち向かうだけじゃない。逃げ出す勇気。これも覚悟のうちに入る。あいつのようにまともに動けなくなるようにまで戦うのは覚悟とは言わない。無駄で無謀で無意味で無価値な行動だ。あいつは目標しか目に入らないただのガキだ」

周りが静まり返る。これは流石に止めんと、佐々木さんなんて泣きそうやし。

「!?　せっちゃん!!」

ペチッ

「へ、へ……一撃、入れ……ました」

このちゃんの声で振り向いた時には既に遅く、ネギ先生の触るような一撃が当たった。

「どんなにショボくても一撃か。合格だ!!」

エヴァンジェリンさんがそう言ったものの、さっきの要さんの説教のせいか歓声は上がらない。とりあえずネギ先生を介抱せんと。

「無理ばかりしやがって」

「え？」

気がつけば要さんがネギ先生を抱えていた。いつの間に。

「えっと、要先生？」

「何だ？明日菜ちゃん。今は早くこいつを治療したいんだが」

「ネギの事嫌いなんじゃ」

「いつ俺が嫌いと言った？さっきのもこれから知っていけばいい。それに一応同僚だぞ？同僚を助けない理由などない。エヴァンジェリン、薬貰うぞ」

「勝手に使え」

うん、ツンデレ乙。

「刹那、木乃香、千雨、治療が済んだらお仕置きだ」

「「何で！？」」

「今失礼な事を考えたからだよ」

バレた！？考えただけなのに！？

「お、その表情、刹那は当たりか」

「鎌を掛けられた！？」

二人も考えとれば良かったのに。うちだけ災難や。

覚悟とは（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん子〉

叶「全国のみんな、こんにちはー！！今日は福井だよ」

ア「一番は私なのに」

シャ「まあまあ、それで名物は？」

椛「ソースカツ丼です」

叶「ソースなの？」

椛「ええ。ご飯に千切りキャベツ、その上にカツを乗せてソースをかけたものです。味噌カツ大好き雨季さんが初めてソースカツが美味いと思わせた代物です」

ア「私達の時、あんな丁寧な説明あったっけ？」

シャ「たまたまよ、たまたま」

叶「ねぇ、食べていい？」

椛「どうぞ」

叶「いただきまーす！！」

ア「今回は一応試験があったわね」

シャ「メインが要くんだったけど」

椛「ほらほら、ほっぺにご飯が付いてますよ」

叶「ん～」

ア「次回は？」

シャ「適当に修行と日常らしいわ」

椛・叶「「では次回もお楽しみに」」

アリシャ「「取られた？」」

叶「そういえば作者の活動報告でそこのお姉ちゃん達についてアンケートやってるよ。見てね」

椛「よく出来ました。ご褒美の羽二重餅です」

叶「わーい」

アリシャ「「私達は生き残りたい。生き残りたいんだ！！！！」」

明日菜ちゃん頑張ってます（前書き）

タイトルの割りには出番は少ない明日菜ちゃん。頑張れ明日菜ちゃん。

明日菜ちゃん頑張ってます

明日菜ｓｉｄｅ

ネギが試験に合格したはいいんだけど、このままだと私が置いていかれそうだから私も何かしないと。という訳で刹那さんに剣を教わろう。

「なので来ました」

「悪いな明日菜ちゃん。刹那は今日はエヴァンジェリンの所だ」

あっちか。どっちか迷ったけどハズレたか。

「まあうちから飛ぶ事が出来るから安心しろ」

「ほんとに？」

「ああ、それに良い講師も付けてやる」

刹那さん以上に剣が出来る人なんて私は知らないけど、ってクラトス先生がいるじゃない。そうかそうか、クラトス先生か。

「鏡、やれ」

「人使いが荒いのぉ」

「あれ？」

またハズレだった。っていうか鏡先生って剣が使えたんだ。

「剣ならあの機械人形があるじゃろ」

「お前以上に剣のデータを持ち合わせている奴はいないよ」

「褒められるのは嬉しいが、押し付けはやめてほしいんじゃが」

「気にするな。やる気がなくなったらクラトスか刹那に押し付けろ」

「そうしよう」

うーん、なんだかそれでいいのかという会話をしてるけど、気にしたら負けよね。

「んじゃ逝ってこい」

「字が違う！！」

「よく気がついたな明日菜ちゃん。その調子で勉強頑張れ」

「関係ないよね！？」

「ほれ行くぞい」

鏡味先生に引っ張られてきたのは魔法陣とかいうのがある場所。ここに乗ればいいのかな。

「準備はいいか？」

「はい」

「ほい着いた」

「早っ!?」

一瞬にもほどがあるでしょう!!もう少しSFのテレポート装置みたいにうにょんうにょんて感じになると思ったのに。

「何を考えておったか知らんが、行くぞ」

「あ、待って!!」

鏡先生を追っていくと広い場所に出た。そこではみんながいろいろやってた。

ガキィンガキィンガキィン

「!?」

何あれ!?速っ!?誰と誰が戦ってるのよ!?

「あれは志貴とクラトス、アルクェイドもおるの」

あ、三人だったんだ。というか速すぎない?あれくらいやれないと駄目なの?

「明日菜ちゃんは初心者メニューじゃから安心せい」

「良かった」

「まずは適性検査じゃ」

そう言った鏡先生が私の肩に手をおくとすぐに離した。

「成る程、大剣か」

「わかるの！？」

「ちょいと調べさせてもらったからの」

へー、今のでそんな事出来たんだ。

「あれ？明日菜さん、何で？」

「ネギも来たんだ……」

あれ？何で夕映ちゃん達はいいわ。関係者って知ってるもの。ハルナって。

「あれ？明日菜もこっちの人間だったの？」

「あんたは？」

「ネギくんが図書館島へ飛んでいくのを見つけてさ。問い詰めたらあっさり」

あーあ、ネギったらどうして簡単に見つかるのかしら？

「坊や」

「はい？」

「もう来なくていいぞ」

「え、えぇ！？」

「そりゃそうじゃろ。魔法使いが簡単に一般人に見つかってどうする。見つかったら記憶か存在の消去を」

「それは魔術師の思考よ、鏡」

「っとそうであったな、アルクェイド」

ついてけないけど、またネギがバカやったっていうのは誰でもわかるわね。

「こちらはさっさとやるぞい」

「あ、はい」

鏡さんのって厳しいのかな？

鏡ｓｉｄｅ

ふむ、明日菜ちゃんがどんなものかと思ったが、いい動きをするではないか。

「あの～、ずっと素振りをすれば？」

「当然。基礎は大切じゃ」

「うへっ」

とは言ったものの、何故か基礎が既に出来かけておる。しかも実戦で鍛え上げたような。

「どちらにしろしばらく素振りじゃが」

「ええー」

「お主が師事をしておるとは意外だな」

「おん？天魔か。何用じゃ？」

「刹那に会いに来る以外にあるか」

オリジナルといい天魔といい、親バカばかりじゃの。

「刹那ーー！！」

「お父様、仕事は？」

「大天狗がおるから問題ない」

「酷いパワハラを見ました。これは記事にしないと」

「射命丸？」

「何でもありませんよ～」

相変わらずじゃの。とはいえ文の言う通り。パワハラはいかんの。

「なんかいっぱいいるな」

「要さん！！天魔様が虐めます！！」

「そうかそうか。駄目だろ、部下を虐めたら」

「虐めてなどおらんわ」

「また仕事サボったんだろ？部下もキレるぞ、一美ちゃん」

『一美ちゃん？』

「俺をその名で呼ぶんじゃねぇ！！！！」

うおっ！？天魔から凄まじい力を感じるぞ！！口調も違うし、何が起こった！？

～～～～～～～～～～～～～～～～

椛「どうも、白狼天狗の犬走椛です」

叶「神条叶だよ」

椛「ここではちょっと解説を挟みたいと思います」

叶「何で天魔おじちゃんはキレたの？」

椛「本名が恥ずかしいからです。天魔様の本名は鞍馬寺一美（くらまじひとみ）です」

叶「女の子みたいだね」

椛「だから天魔という役職を目指したのです。天魔ならば名を呼ばれる事も知られる事も殆どありませんから」

叶「何代目〇〇って感じだね」

椛「そうですね。口調に関しては昔は今キレてる感じだったそうですが、威厳を出すために変えたそうです」

叶「では本編をどうぞ！！」

～～～～～～～～～～～～～～

うむ、変なのが入った気がするがまあよい。

「勝ったどーーー！！」

「くそっ！！離しやがれ！！」

終わったようじゃな。結局オリジナルの勝利になったか。まああんな状態では流石の天魔といえど勝てるはずもなし。

「アホかーーー！！」

今度はなんじゃ？

「何やらネギ先生が、ドラゴンに勝つにはどうしたらいいかというのをエヴァンジェリンさんに訊いたようですよ」

「ほう、しかし何故夕映はそれを？」

「ネギ先生が言ってましたからね」

ドラゴンか。この麻帆良にそれほど強力な力を感じた事はなかったんじゃが。儂らの力の方が高すぎてわからなかったのかもしれんの。

「あの時私とのどかがいなければ大変だったのに」

「なんじゃ、戦ったのか」

「ええ。私とのどかだけでは力不足でしたが、千雨さんでもいれば十分戦えましたね」

それはつまらん。その程度のレベルでは気づくはずもないか。

「あの、鏡先生。まだ素振りしてれば？」

「クラトスに教われ」

「遂に押し付けた!?」

「何だ?私に用か?」

「明日菜ちゃんの指導を頼むぞい」

「まあその程度なら」

ならば儂はのんびりと茶でも飲むとしよう。

「そういえばこの空間は一時間が一日になる空間じゃが、知っとったかの?」

「ええ!?そうなの!?」

やはり知らんかったようじゃな。まあ若いんじゃから一日くらい問題あるまい。しかしこの人数じゃし、今晩は楽しくなるじゃろう。

明日菜ちゃん頑張ってます（後書き）

〈アリシャの部屋〉

ア・シャ「「!?」」

ア「あの二人がいない!?」

シャ「遂に私達が後書きを奪い返したのね!!」

（注：二人は本編へ出張のためお休みです）

ア「ヒャッハー!!テンション上がってきたー!!」

シャ「さあ今回の県は?」

ア「大分よ!!」

シャ「名物はとり天!!とりに天ぷら粉を付けて揚げたものよ!!」

ア「うまーー!!」

シャ「いいわね!!あの二人がいないのはいいわね!!」

ア「さて今回は明日菜の微妙な修行と、天魔の恥名の紹介だったわね」

シャ「あれは恥ずかしいわね」

ア「男なのに女の子みたいな名前って」

天魔「死ぬがよい。風神『風王突貫』！！！！！」

アリシャ「「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」

一美「読者も忘れろ！！よいな！？って名前を変えんじゃねぇ！！！」

雨「うわらばっ！？」

過去、それは黒歴史とも言う（前書き）

今回はネギと要の過去を適当に書いたよ。
何か問題があればご報告を。

過去、それは黒歴史とも言う

要ｓｉｄｅ

別荘内の夜。俺はのんびり一人酒。

「オイ、俺ト呑モウゼ」

「チャチャゼロか。ほら」

「オットット」

いつぞやの夜と同じだな。まあ月が微妙なのが残念かな。

「そういえばあいつらは何やってるんだ？」

さっきからネギ坊主と明日菜ちゃんを中心にいろいろと集まっている。面白い遊びでもやってるのかね。

「アア、過去ヲ見ルンダトサ」

「過去？」

つまり記憶を呼び覚ますっていう事か？いや、のどかがいるから文字通り見るんだろうな。しかしあのアーティファクト便利だな。俺もあんなアーティファクトが欲しい。

「オ前ハ殴ルシカ能ガネェクセニ」

「ごもっとも」

しかしネギ坊主の過去か。正直気になるな。あんな性格になったのには大体幼児期に何かあったからだろう。

「ちょっと見てくる」

「俺トシテハオ前ノ過去モ見タイケドナ」

「やめてくれよ」

あの記憶だけは。あの過去だけは見せたくないんだ。あれだけは……

「どんな感じだ？」

「あ、要先生。今からですよ」

「では見せてもらおうか」

「じゃあ、いきますよ」

のどかがアーティファクトを展開する。そこにネギ坊主の記憶が映

し出されていく。最近じゃレベルも上がって絵じゃなくて映像化するようになったんだよな。

～～～～～～～～～～～～～～～

そこにいたのは一人の男の子。父親に英雄を持ち、ピンチになれば父親が助けに来てくれると信じている男の子。時には川で溺れて姉に怒られたりしたが父親を求め続けた。

当然か。両親がいないのならそれを求めるのは。だがここまでは親がいない子にはよくある事。その先が問題だな。

「……酷い」

次に映し出された光景は悲惨と言っていいものだろう。まあ一般的にだが。村は火の海、人は石となり、悪魔が徘徊する。その中を男の子は親しい者を探し駆け回る。

「何で、こんな事に」

「大方父親のせいだろう」

「どういう事？要先生」

「父親が英雄だからだ。英雄ってのは何も味方ばかりではない。寧ろ敵の方が多い。その敵は、例え英雄本人がいなくなったとしても周りを苦しめる。よくある話だ」

「そんな……」

っと、記憶も終盤だな。男の子は悪魔と対峙してしまう。しかし男

の子に抗う術があるはずもない。だがそこへ現れた赤髪の男が雷の斧を使い悪魔達を消し飛ばした。

「あ、ちっちゃいネギ先生逃げるの？」

「当然じゃろう。恐怖の存在である悪魔。それを消し飛ばしたのじゃから」

鏡の言う通りだな。あんな力を子供が見たら恐怖を抱くに決まっている。

逃げ出した男の子は老人と少女を見つける。そこにいた悪魔が光線を撃ち放つ。老人と少女は男の子を守り、老人は何やろ魔法を使い悪魔を封印したが、他の村人と同じように石化。少女も足が石化を始める。そこへ再び現れた魔法使い。男の子は少女を守ろうと立ち塞がる。

「お前がネギだな」

「え？」

「大きくなったな」

魔法使いは少女の足の石化を止め、男の子に杖を渡して去っていった。

～～～～～～～～～～～～～～

「これが僕の過去です」

『……』

全員が静まり返る。一部には泣いているのもいる。

「だから、あまり僕には関わらない方が「で？」え？」

「だから何なのよ。生憎私は自分でいたいからこっちにいるの！！あんたの言う事なんて聞いてられないわ！！」

「明日菜さん」

ったく、明日菜ちゃんは優しいな。まあ悪い考えではないな。ああいうのは無理矢理ついていくしかない。

「しかしまあ良かったんじゃないの？」

「要先生！？あれが良かったって」

「朝倉。悪いが言わせてもらう。俺はあれ以上の境遇の子を何人も知っている」

まだネギ坊主には希望がある。村人は石化だから死んだ訳じゃないし、家族だって生きている。戦場では全てを失ってしまった子もいる。そんな中でも笑顔で生きている子だっているんだからな。

「そういえば私は要先生の過去に興味あるな～」

「ハルナに賛成。是非とも取材させて」

「……寝る」

「「えー」」

知られてたまるかあんな過去。

鏡ｓｉｄｅ

オリジナルが過去を見せたくないというのもわかるの。あれは確かに見せたくない。

「しかしお主らは見たいのじゃろ？」

『はい！！』

おお、全員か。

「私も気になるわ」

「俺もちょっと」

「私も参加させてもらおうか」

アルクェイドはともかく、志貴やクラトスもか。これは意外。しかし良いじゃろう。この調子だとエヴァンジェリンも参加しそうじゃな。

「ではやろうか」

っとその前にオリジナルについて説明しないと混乱するかもしれんから適当に説明しておくか。

要が完全に寝た後、記憶覗きに参加したメンバーが集まる。文、刹那、木乃香、千雨、早乙女、朝倉、明日菜ちゃん、ネギ坊主、マクダウェル家、クラトスじゃな。夕映とのどかは要の記憶には興味がないらしい。優なら飛びついたであろうが。

「しかし要先生が二回死んでるとはね～」

「俺やアルクェイド、クラトスだって似たようなもんだけどな」

これを教えておかんと記憶内での容姿の違いに驚かれるからの。

「一条鏡。どうやってこいつの記憶を見るんだ？」

「儂とオリジナルは多少ながらリンクしておる。普段はオリジナルが強すぎる故に干渉出来んが、寝てる時ならな」

「でもそうなると鏡さんだけしか見れんのちゃう？」

「そのために儂の奪ってきた生物の力を使う。今回は獏じゃ」

獏はご存知の通り中国の夢を食う魔物。一般的に実在すると言われてる生物の方ではないぞ。その力を応用すれば自由に夢を見せる事

も、他人の夢を他の人間に見せる事も容易い。

「では……」

儂は力を使いオリジナルの夢を変更し、皆を夢へと誘った。

……

「ここが要さんの夢」

「あやや？あそこにいる子供は」

「オリジナルじゃな。過去にどんな暮らしをしておったのか静かに見ようではないか」

～～～～～～～～～～～～～～

ごく普通な民家。その和室の障子を男の子、少年の要がぶち破っていった。

「おやじしねー！！」

「ときメモの邪魔をするなー！！」

そして蹴り飛ばされてきた。哀れである。

「うぅ……おぼえてろー！！」

「一昨日来やがれ！！」

なんとも見事な捨て台詞である。

「あ・な・た」

「……あ」

「何度要を蹴り飛ばせば気が済むのですか！！」

「ぐおぉぉぉぉ！？」

要の父親、一（はじめ）も殴り飛ばされてきた。親子揃って残念である。

「詩織ちゃんを攻略中だったのにー！！」

「また初めからやり直しなさい！！」

あの子にしてこの親。流石である。

「「……」」

「ママー、あれ」

「見ちゃいけません」

そりゃ少年とオッサンが公園のベンチで体育座りをしながらチューペットを吸っていたら誰も子供には見せたくないだろう。

「おやじ」

「んだよ」

チューチュー

「かえらないのか？」

「お前こそ帰れよ」

チューチュー

「お兄ちゃんみつけた！！かえろ！！」

走ってきた幼女がそう言う。妹の楔である。要が性転換した楔ではない。

「くさび！！おう、かえるぞ！！」

「あれ？お父さんは？」

「お母さんがまだだめって」

「……チューチュー」

情けない大黒柱だ。要が家へ帰ると母親、茜（あかね）が待っていた。

「要、障子は壊さないと何度言えばわかるの」

「ふっ、おれのパワーにしょうじがたえれなかっただけのこと」

ゴチン

「！？」

「殴るよ」

「もうなぐった！！くそばばぁ！！」

次の瞬間、茜は構え、要を玄関から道路前まで殴り飛ばした。

「ぐはぁぁぁぁ！？」

「お兄ちゃーん！？」

「ぐっ、おまえなんて格ゲーにラスボスでてて『うはっ、何このおばさん。一撃で体力半分まで減らされたんですけど、バロスｗｗｗ』なんて言われちまえ！！」

「出直してらっしゃい！！あと親をお前呼ばわりしない」

最後の捨て台詞が意味不明な要であった。

再び公園。そして再びチューペットを吸う親子。

「「チューチュー」」

「おやじ」

「んだよ」

チューチュー

「おふくろに勝つひっさつわざをかんがえた」

「へぇ、どんなの」

「あいてをたいきごとこおらせる。あいてはしぬ」

「殺したら飯作ってくれる人いないぞ」

「ならいっしゅんでうしろにまわり、いんをむすんでつきはなつ」

「カンチョーじゃねぇか。まあ母さんはそっちのプレイは苦手だしな」

「プレイ？」

「要に何を教えてるのかしら？」

「……あ」

「あの世に墜ちなさい！！！！」

「ぬあぁぁぁぁぁ！？」

公園の端から端まで殴り飛ばされた父親。それを見て流石に怯える要。

「さあ要。今日はハンバーグよ」

「うおー！！ハンバーグだー！！」

しかしやはり子供。父親よりハンバーグを優先したようだ。

「なあおふくろ」

「なぁに？」

「プレイってなんだ？」

「大人になればわかるわ」

「おれはおとなだぞ」

「そう言ってる限り子供ね」

「ならこどもだ！！」

「じゃあ子供ね」

「ムキーー！！」

～～～～～～～～～～～～～～

『……アハハハハハハハハ！！！！』

予想通りの大爆笑じゃな。まああんな過去笑われてもしょうがないじゃろ。

「くくっ、あれがこの要か？」

「は、腹がよじれるわ」

「ヒィヒィ、し、死ねる。これは、死ねる」

「ほほう。そんなに面白かったか？」

あ、起きおった。儂はすたこらさっさと逃げさせてもらうよ。

「全員潰してやろうか！！！！」

『逃げろーー』

皆意外と余裕じゃな。ではちょちょいとな。

「！？　結界！？」

「本当ですか姉様！！」

「逃がさんぞ～」

あの状態からいつまで生き残れるかの。まあ結界自体三分で無くなってしまうが。

「鬼畜だな」

「クラトス。逃げておったか」

「嫌な予感がしたからな」

流石は年の功。いい勘をしておる。

「どうじゃ？一杯」

「この時間に呑む気はしないな」

それは残念。儂一人でのんびりと呑ませてもらうとしよう。

過去、それは黒歴史とも言う（後書き）

〈アリシャの部屋＋わん子〉

椛「さようなら」

叶「今までありがとう」

椛・叶「「アリシャ」」

アリシャ「「ええ！？何で！？」」

椛「これは決定事項です」

叶「後書きお疲れ様」

ア「じゃあこれからどうするの！？」

叶「えっと、私達だけで繋ぐのは難しいって」

シャ「そうよね！！なら私達を使えばいいじゃない！！」

椛「ですから私達だけではやりません」

ア「え？」

椛「次回から始まるのは〈かなもみの楽屋訪問〉です」

ア「あの楽屋はフラグ！？」

シャ「じゃあ毎回ゲストがいるようなもの？」

叶「だから私達でも大丈夫」

椛「さて最後の県は群馬」

ア「どうせだから最後の後書きは頑張るわ」

シャ「ここの名物は？」

叶「焼きまんじゅうだって。二人共、焼き土下座すれば許してもらえるかもよ」

アリシャ「「嫌よ！！」」

椛「美味しいですね」

叶「うん！！」

ア「それにしても叶ちゃんのパパは小さい頃があれね。馬鹿ね」

叶「知ってるよ。パパから自分みたいになっちゃ駄目って言われたもん」

シャ「何ですと？」

椛「では終わりです」

ア「さらば後書き！！」

シャ「戻ってきたら駄目？」

叶「駄目！！」

椛「二度と後書きには帰ってこれません」

ア「いつか復讐してやる！！」

シャ「覚えてなさい！！」

叶「下っ端だね」

椛「では次回もお楽しみに」

手を出していけない者（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「後書きが駄目なら前書きでやればいいじゃない！！」

シャ「みんな大好きアリサとシャマルのコンビは不滅です！！」

スタッフ「ちょっと！？何を勝手に」

アリシャ「「邪魔！！」」

スタッフ「ぎゃあ！？」

ア「ざまぁないわね」

シャ「所詮スタッフよ」

監督「で？」

アリシャ「「あ、監督」」

監督「死ねぃ！！！」

アリシャ「「うわらばっ！？」」

ア「……これでは、終わらんぞー」

シャ「……次回からも、でるわ」

監督「あー、今回何かミスがあればご連絡お願いします。こいつらの存在が一番のミスですが」

アリシャ「酷い！！」

手を出していけない者

明日菜ｓｉｄｅ

朝になってあのよくわからない空間から出ると、外は雨だった。時計を見ると確かに一時間しか経っていなかった。

「あ、傘」

一時間前は晴れだったから多分誰も傘を持っていないだろう。濡れるのやだな。

「傘ならやろうか？」

「鏡先生持ってるの？」

「創れる」

そう言うと鏡先生はどこからともなく人数分の傘を出した。これも魔法なのかな。

「凄いわねぇ。何て魔法？」

「投影魔術という。本来この能力者の力で創れるのは剣の類なんじゃが、傘程度なら軽い。あ、乱暴に扱わんようにな。壊れたら消える」

『へー』

本来この能力者って、獏っての時もそうだけど鏡先生自身の力じゃないのかな。ならどうして持ってるんだろ。

「さあ早く帰ってゆっくり休め」

「十分休めた気もするけど」

どうせだからゆっくり休ませてもらうけどさ。

「じゃあ浴場でのんびりしましょうか」

『賛成』

千鶴ｓｉｄｅ

雨の中、黒い子犬を見つけた。汚れているし、多少ながら怪我もしているようだ。

「あらあら、どうしましょう」

この程度の怪我なら私でも治療は出来そうだ。と言っても私は獣医じゃない。雨が止んだら獣医さんの所へ連れて行こう。

「そういえば夏美ちゃんて犬は大丈夫だったかしら？」

駄目なら駄目で少し我慢してもらうか、私が少しの間誰かの部屋を借りよう。私は気を失っている黒い子犬を胸に抱えて駆け出した。しかしこの子犬があんな事になるなんて思いもしなかった。

無事夏美ちゃんにも受け入れられて子犬の治療は済んだ。そして私が食べ物を買って帰ってきた時、それは起こった。

「ち、ちづ姉！！」

「あら夏美ちゃん、そんなに慌ててどうした……の？」

何という事でしょう。ベッドに寝ているのは子犬ではなく、ネギ先生くらい男の子。これは……分かったわ！！

「夏美ちゃん」

「な、何？」

「ショタコンでも私達は友達よ？」

「違うから!!そんな暖かい目で見ないで!!あの子は犬があなったの!!尻尾と耳があるでしょ!!」

確かに。成る程分かったわ!!

「ショタコンの上にコスプレ癖なんて。夏美ちゃんの性癖がそんなに激しいなんてお姉さん知らなかったわ。このままだとネギ先生も危ないわね。手を出しちゃいけないわよ」

「違う!!」

「う……」

あら、男の子が起きたわ。真面目にしましょうか。

「おはよう僕。名前は?」

「何や姉ちゃん。人に名前を訊く時は自分からやろ」

「そうね、ごめんなさい。私は那波千鶴よ」

「犬上小太郎や。そういやさっきネギとか言っとらんかったか?」

あらこの子、ネギ先生の知り合いなのかしら?犬が知り合い?

「ネギ先生なら私達の担任よ」

「会わせてくれへんか。話したい事があるねん」

「その必要はありません」

「「「!?」」」

気がつくと見知らぬ老紳士がそこにいた。一体いつの間に。

「何やお前!!」

「私はヘルマン。以後お見知りおきを」

「ふざけんなや!!」

小太郎くんが老紳士に立ち向かっていきけれども、簡単にあしらわれ、怪我を負わされる。それが我慢ならなかった。

「ちょっと貴方!!」

パァン

「む……」

「ちづ姉!?」

「恥ずかしくないんですか!?こんな子供に暴力を振るって!!」

「……くくっ、ははははは!!強い娘さんだ。どれ」

「あ……」

老紳士の目を見た瞬間に意識が薄れていく。

「……！！」

「！？……！！」

夏美ちゃんや小太郎くんが何か言ってるけど聞こえない。もう……

……

木乃香ｓｉｄｅ

「ふひぃ～。やっぱり風呂はええなぁ」

ほんまうちらの寮の大浴場は広くてええわ。こんな風呂普通はないもんなぁ。……む。

「……せっちゃん」

「何、このちゃん？」

「えい」

むにゅ

「うひゃあ！？」

「ふむふむ」

むにむに

「あ、や、このちゃ、止め、て」

せっちゃんの胸がここ数ヶ月でかなり成長した気がする。このままいけば麻帆良でもトップクラスの胸に。

「何セクハラしてるんですか」

ゴスッ

「ぶっ！？」

「はぁはぁ、夕映さん。助かりました」

おぉぉ、頭が、頭が割れる。何も本の角で殴らんでも。というか何故風呂に本？

「防水紙の本ですので問題ありません」

「大問題や！！たんこぶ出来たらどないすんねん！！」

「自分で治療して下さい」

「夕映、そんな風に虐めちゃいけないよ」

流石のどかちゃん。その優しさでうちは救われた。

「やるなら徹底的にしないと」

訂正。悪魔の尻尾が見える。

「!?　危ない!!」

「へ?」

ドン

せっちゃんが突然うちを突き飛ばした。

ツルッ　ガッ

「おぉぉ……」

石鹸を踏みつけておもいっきりこけてもうた。痛い。でも無傷。丈夫に産んでくれてありがとうお母様。

「て、みんな!?」

みんながスライムのようなものに包まれて消えた。あわわ、どないしよ。とりあえず連絡せんと。

うちは風呂から飛び出てケータイで電話を掛けた。

プルルルプルルル　ガチャ

『はい一条です』

「あ！！なのはさん！？緊急事態や！！」

『どういう事？』

うちはせっちゃん達がさらわれた事を伝えた。

『そう、刹那ちゃん達も』

「も？」

『まーちゃんもさらわれたって』

「嘘っ！？」

まーちゃんて、舞花さをやろ。ありえん。あの人まで……

『油断してたんだろうね。とにかく応援を送るね』

どうなってまうんやろ。

ヘルマンｓｉｄｅ

小太郎くんにネギくんと一緒に世界樹の広場に来るように言ったが、いつ来るかな。

「ヘルマン。その子供達は面白いのか？」

「ええ、きっと面白い事になるでしょう」

「ふ、美しくなければ興味ないな」

私と一緒にいる二人の悪魔。二人共悪魔の王族。先に言葉を発したのはヴィネ様。美しいものが好きなのがザガン様。

「ふふふ、彼女は本当に美しい」

「牧原舞花ですか。よく捕まえましたね」

「この程度容易いよ」

捕らえた者達は超強化スライムの中におり、牧原舞花のみ十字架に縛られている。そして全員が神楽坂明日菜の能力を使い能力が使えなくなっている。しかし何故彼らは手を貸してくれたのだろう。っと、来たようだな。

「明日菜さん達を返して下さい！！」

「さあ約束通り来たで！！」

「ならば君達の力を見せて！？」

なんだこの殺気は！？最早物理的な圧力を加えられているような錯覚に陥る。

「まーちゃんを返してもらうよ」

「刹那は無事だろうな」

彼らは、牧原舞人と天狗の長である天魔か。情報ではそこまで危険度の高い人物ではなかったが。

「ヘルマン。あいつらの相手は私がしよう」

「悪いね。彼女はもう私の物だよ」

この戦い。どう転ぶだろう。

茶々丸ｓｉｄｅ

マスター・エヴァに悪魔を見張り、もしもの場合は攻撃するように命令されたが。

「必要でしょうか？」

舞人様と天魔様の二人が出てきた辺りからそんな事を考えて始めた。
でも二人が相手にしている悪魔はどう見ても上位だし。

「始まっちまったか」

「要先生。いらしたのですか」

「ああ。茶々丸、手を出すなよ？」

何故でしょう。危なくなったら助けに入るべきではないでしょうか。

「二人共手を出されたら逆にキレるぞ。あくまで自分の手でけりを付けたいだろうしな」

「そうですか」

「それにな。あいつらの本気は凄まじいぞ」

それは、要先生が言うのですから本当に凄いのでしょうね。では見させてもらうとしましょう。

天魔ｓｉｄｅ

こいつらが刹那をさらったのか。必ず倒す。否、滅す。

「天狗の長、天魔か。我が名は「別によい」何？」

「今から消えるものの名を知ってどうする」

「貴様、殺す！！」

ふん、殺すのはこちらだ。欠片も残さずにな。だがこやつをどうこうするのは二の次。本来の目的は刹那を助ける事なのだからな。

「我が津波の前にひれ伏せ！！」

目の前の悪魔が放ったは津波は確かに大層な威力だ。だが私の前には無力だ。

津波は私に当たる直前に消滅した。

「！？　何をした！！」

「何だと思う？」

「く、ふざけるな！！」

悪魔が何度攻撃を放とうとも、私に当たる前に消滅していく。どうしようが私に当たるはずがないのだ。私の能力の前には。

「何なのだ貴様は！？」

「天狗の長、天魔。能力を教えてやろうか？」

「能力？それが我が攻撃を無力化した種か」

「いかにも」

さて、私の能力がわかるかな？

「魔力による攻撃を無力化する力か！？」

「否。私の能力の名は『０と１を操る程度の能力』」

「『０と１を操る程度の能力』？」

「私の前には全てが０と１。貴様の攻撃も０にしただけだ」

私の能力を使えば相手の力を０にし、なかった事にも出来るし。逆に１にすれば能力がないものにも何らかの能力が発現する。

「そして……」

「？　何を」

私が手をかざすと悪魔は何か言おうとしたが消滅した。私が悪魔の存在を０にしただけだ。実に呆気ない結末だ。

舞人ｓｉｄｅ

「美しい。人ではないというのに、いや人ではないからこその美しさかな」

「黙れ。お前に言われてもまーちゃんは嬉しくも何ともない」

この悪魔。本当に人を苛つかせてくれる。

「君も女なら私の物にしたのに」

「御託はいい。さっさと殺させてもらう」

「ハハハ、たかだか植物ごときがよく吠える。燃えろ」

超高温の火炎弾が飛んでくる。植物なら火でどうにかなると思ったか？

「甘い」

僕は懐から植物の種を取り出し地面に蒔いた。すると一瞬で成長し、緑の壁となり火炎弾を防いだ。

「！？　何故植物如きが私の火炎弾を！？」

「これの名前は火喰い草。火山の火口に育つ植物だから火には強いんだよ」

「そんな植物が」

「世界にはお前の知らない植物がゴマンとある。例えば、これとかね」

僕が取り出したのはさっきとは違う種。これで終わりにしよう。

「ほら」

「ん？」

パンッ

「……今のは何だ？」

悪魔に投げた種は悪魔の目の前で破裂した。これで良し。もう決着は着いたも同然。

「今のが何かは知らないけど失敗のようだね。今度は油断せずに君を殺してあげよう」

「今度？今度なんてないよ」

「？　何を言って」

ブシュッ

「!?　あ、あぁぁ!?何なんだこれは!?」

ブシュッブシュッブシュッブシュッブシュッ

さっきからしてる音は悪魔の体から植物が突き出す音。悪魔の体は徐々に植物に浸食されているのだ。

「さっきの種は失敗じゃない。あの種の中には更に細かい種が入っていたんだ。それがあんたの体内で成長しただけ。作るの苦労したんだよ。目の前の敵以外に被害が出ないようにするのとか、体内での成長速度とか。ってもう聞いてなかったね」

もうそこに悪魔の姿はなく、人型の植物があるだけだった。さて、まーちゃんを救出しないとな。

茶々丸ｓｉｄｅ

本当に手を出す必要がありませんでしたね。圧倒的でした。

「だから言ったろ」

「はぁ」

あの方々の力は恐ろしいですね。天魔様は0にされてしまえば全てが終わりますし、舞人様はあらゆる状況に応じた植物を持っているでしょう。

「！　ネギ坊主が」

「オーバードライブ。暴走ですね」

ネギ先生の魔力が爆発し、凄まじい威力になりましたが、動きは単調になり、石化を喰らいそうになりました。しかしそれを狗族の少年が何とか救出しました。

「む、抜け出したな」

「はい」

千雨さんが何か機械を使い抜け出し、全員救出されました。これでネギ先生も安心して戦えるはずです。

「じゃあ俺は帰るわ」

「最後まで見なくても？」

「結果は見えてるからな」

まあここまでくれば敗北は有り得ないでしょう。
その後は無事悪魔は倒されました。私は持ってきた服を皆さんに渡しました。何故か裸でしたからね。

「見るでない！！」

「「ぶへっ！？」」

天魔様が刹那さんの裸を見そうになったネギ先生と狗族の少年を殴り飛ばしていた。

手を出していけない者（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「神条叶でーす！！」

椛「犬走椛です」

叶「出演者の楽屋に突撃する〈かなもみの楽屋訪問〉」

椛「今日は主人公『一条要』さんです」

叶「お邪魔しまーす」

要「いらっしゃい」

叶「……狭いね」

要「まあ最低限のものがあるから苦労しないよ」

椛「私達より狭いです」

要「作者のお気に入りだからな、二人共」

叶「なのはママ達より狭いよ」

要「別に構わんよ。妻だからいい思いしてもらいたい」

椛「ネギくんより狭いですね」

要「……なぬ？」

叶「というか表の一条要の楽屋って文字が剥がれて、物置ってのが見えたね」

要「……胃が、痛い」

叶「あらら」

椛「こんな愉快な楽屋訪問。次回も見て下さいね」

学祭……懐かしい（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

シャ「始まったわよー」

ア「前回のあらすじを簡単に説明するのがこのコーナー」

シャ「前回はそんなのなかったけどね」

ア「では前回のあらすじ！！

・コタロー拾われる

・まーくんマジ切れ

・一美ちゃんもマジ切れ」

一美「一美と言うな！！地の果てまで飛んでけ！！」

アリシャ「「あぁぁぁぁぁ……」」

一美「全く、ってスタッフ！！名前修正！！」

スタッフ「はいはい」

天魔「ではチートじゃ済まないｉｎネギま、スタート」

学祭……懐かしい

要ｓｉｄｅ

俺は朝っぱらから学園長室にいる。あの小太郎とかいう坊主のこれからについての話だ。

「で、那波に預けて、この学園に通わせると」

「ええ。どちらも那波くんの意見ですが」

「ああ、あいつはそういうのは頑固だからな。粘ったんだろ。それで、学費とかは?学生の那波じゃ払えんだろ」

「まあ一人分程度はどうにか出来ます」

この学園の持ち主はこいつだから俺がどうこう言う権利はないからな。

「俺は帰るな。ちなみにフォローするつもりはないぞ」

「期待しておりません」

酷いな～。まあ期待されても困るんだけどな。

「おはよう、ネギ坊主」

「おはようございます、要先生。そういえば今日コタローくんが学園に通うんですよ」

「ふむ、良かったな」

「はい！！」

やっぱり同年代がいるかいないかで子供ってのは大分違うよな。

「そういえばもうすぐ学園祭ですね」

「学祭か。懐かしいな」

「何をやるか決めないといけませんね」

出し物か。やるとしたら何をするべきなんだろうな。無難に考えると、お化け屋敷？売店？

「結局生徒が決める事だけどな」

「そうですね」

あいつらが決めると無難なものに収まるはずがない。どうなるやら。

『いらっしゃいませご主人様♪』

教室に入ると生徒達がメイド姿でそんな事を言ってきた。ネギ坊主は引っ張られてくし。

「ほらほら要先生も」

「お前ら……いい加減にせんか！！」

『わーーー！？』

「では皆さん。学園祭の出し物を決めたいと思います」

『はーい』

どんな意見が出るんだろうな。今の子供達の考えってのを知りたいし。

「喫茶店とかは？」

「ただの喫茶店じゃつまらなくない？」

「メイド喫茶！！」

「さっきやったし、水着喫茶とか」

「ノーパン喫茶！！」

「お前らちゃんと考えんか！！」

『サーセン』

ノーパン喫茶なぞ過去の異物を何故お前らが知っている。先生マジ切れするよ。

「要先生。先生が学生の頃は何をしたんですか？」

「あ？俺？お前ら知りたい？」

『はい！！』

「相撲喫茶だ」

『はい？』

そう、あれは高校三年の頃……

～～～～～～～～～～～～～～～

「あ〝？んだって？」

「だから一条くんもちゃんと考えて下さい！！」

ＤＱＮに目覚めてしまっていた俺はまともに学祭会議になんか参加しなかった。出席はするんだけど。

「俺様が出席してるだけ有り難いと思いな」

「貴方それでもクラスメート？最後の学祭なのに……それなら会議にも授業にも出席しないで！！」

「単位が貰えねぇだろ！！」

「……そういうのは考えるのね」

「とにかく勝手に「あ～、いいかい？」んだよデブ」

俺とクラスの委員長の話に割って入ってきたのは学年唯一の相撲部員だった。

「一条くん。委員長さんの話も最もだよ」

「は？つまりお前も参加しろって言う訳？リンチすっぞ」

「そういう暴力的な事は嫌いだよ。でも勝負で決着を着けようじゃないか」

「ハッ、おもしれぇ。何すんだ？」

「腕相撲」

「いいだろう。これでもガキの頃から武術家として育ったんだ。今だって授業と鍛錬だけは怠らねえ」

「貴方不良辞めたら？」

「うっせぇぞ委員長！！」

この時の俺は負ける気などサラサラなかった。当然だ。これまで勝負事で負けたのは親父くらいだったからだ。

「委員長さん。合図を」

「……それじゃあ用意はいい？……始め！！」

「ぬんっ！！」

「！？」

ドカッ

「それまで！！」

「……負けた？俺が？一瞬で？」

「じゃあ参加してもらうよ」

「……クソが！！」

「じゃあ一条くん。何か考えはあるかしら？」

「……今出ている案は射的、お化け屋敷、ミュージックコンサート、そして喫茶店だったな。ああ、リンゴ飴もあったか」

「……ちゃんと聞いてたのね」

「耳に入るだけだ。で、俺の考えだが、今俺に勝ったそいつを有効活用すべきだ」

「僕？」

「相撲喫茶。値段設定は少々高めにいこう」

「それじゃあお客さんが来ないじゃない。それに相撲はどこにあるの？」

「まあ待て。相撲は腕相撲の事。そのデブに腕相撲で勝てばタダ。女は二人。子供は三人くらいでやれば上手く釣り合う」

「彼の休みがないじゃない」

「その時は俺がやろう」

「一瞬で負けたくせに」

「いやいや、一条くんはかなり強いよ。正直油断したら負けたよ」

「……ふん、当然だ」

「まあ候補に入れておくわ」

そしてこの案は通り、実行すると大盛況。女子供は手加減する事もあったために負けるのは多少なりともあったが、男には全勝だったので赤字はなかった。寧ろ校内一の売上だったそうだ。

「なかなかやるじゃない」

「当然だ。俺様を誰だと思う」

「僕に腕相撲で負けた人」

「なにぃ？よし、もう一度勝負だ！！」

「うん」

～～～～～～～～～～～～～～～～

「とまあこんなエピソードがある訳だ」

「……不良だったんだ」

「やんちゃしたさ。人としての道は外さなかった自信はあるがな」

薬とかには手は出さなかったし、喧嘩して警察の世話になっても犯

罪で世話になる事はなかった。

「俺的に今回の学園祭はお化け屋敷をオススメするぞ」

「何でですか？」

「うちのクラスの料理の主戦力が大体超の店で働くからだ。料理のクオリティが低いと客が寄らん。それにうちのクラスは人をおちょくるのが得意そうなのが多いからな」

『成る程』

「まあ全部お前達が決める事だが」

最終的にうちのクラスはお化け屋敷をやる事になった。あれっていろいろ作らないといけないから作業は早めに取り掛からないとな。

学祭……懐かしい（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「パパはＤＱＮ！！」

椛「さあ始まりました。今日の楽屋は？」

叶「久遠お姉ちゃん！！私は今日はネコミミスタイル！！」

椛「私は白狼、久遠さんは狐だから丁度いいですね。ではお邪魔しまーす」

久遠「いらっしゃい！！お煎餅いる？」

叶「いただきまーす！！って硬い！？このお煎餅硬いよ！？」

久遠「えっと、ご賞味の際はハンマーで砕いてお召し上がり下さい。だって」

椛「どんな煎餅ですか」

叶「久遠お姉ちゃんの楽屋は綺麗だね」

椛「いろいろと道具がありますが、クシが多いですね」

久遠「クシもいろいろあるからね。数種類のクシを使い分けてセットしてるんだよ」

叶「大変だね」

椛「理容師さんは呼ばないんですか？」

久遠「やっぱり髪くらいは自分でやりたいからね」

椛「成る程」

叶「じゃあ今回はこれくらい。次回もお楽しみに！！」

お化けが出た（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「はい始まりました」

シャ「ちんたらやってると追い出されそうなのでちゃっちゃとやります」

ア「前回は
・要のＤＱＮな過去・学園祭はお化け屋敷
が主なお話」

シャ「あの過去は酷かったわね」

ア「では本編を始めていきましょう」

シャ「何かミスがあったら教えてね」

ア「私達がミスっていうのは無しよ。まあある意味ミスかもね」

シャ「ミス・前書きね」

ア「ではスタート」

雨「さっきミスって外伝にあげました。サーセン」

アリシャ「「早速ミスるな！！」」

お化けが出た

要ｓｉｄｅ

最近、いや以前から噂はあった３－Ａの霊の話。ここ最近になって妙にその話が大きくなり始めた。確か、文が心霊写真を撮った頃からか。

一番前の端っこの席。そこの近くで文が写真を撮ると、ぼんやりした人型の影が写っていた。初めは指でも入ったと思った文はもう一度撮り直した。すると影は更に近く、そしてぼんやりながらも女性とわかる形で写った。それを新聞に載せたもんだからあら大変。そして今晩、お化け退治をしようという事になった。……のだが。

「要くん、ほらグイッと」

「とっとっと、ありがとうございます、ズェピア先生」

呑み会中なんだよね。

プルルルル　プルルルル

「はい一条です」

『あ、要先生ですか？お化け退治は』

「いや～、すまない。呑み会でな。全くもって申し訳ない！！ハッハッハ！！」（↑飲み会主催者）

『え？』

「頑張ってくれ！！応援なら送るから！！」

『えぇぇ！？』

ピッ

「さあ皆さん！！今日は俺の奢りで食べ放題飲み放題！！でも残り４０分！！」

「それただの食べ放題コースを選んだだけでしょう」

「そうとも言う！！さあ時間がないぞ！！じゃんじゃんいこう！！」

『わーー！！』

とりあえず俺は生中１５杯頼むとしようかね。

木乃香ｓｉｄｅ

ネギくんからの報告で要兄ちゃんが休むという事がわかった。まあ呑み会やったら来る訳ないわな。家族、友人、酒が兄ちゃんの大切

なものベストスリーやからな。

「応援って誰でしょう？明日菜さんは誰だと思います？」

「うーん、わかんない」

『なあヴラド、玉藻、多分久遠ちゃんやと思うんやけど』

『彼女ぐらいだろうね』

『まあ私達がいれば霊退治なんて簡単だけど』

うん、同じ霊やしな。格も違うやろし。

「おーい！！」

「あ、久遠さん」

「やっぱりや」

来たのは予想通り久遠ちゃん。これで今この場にいるのは、うち、せっちゃん、文さん、のどかちゃん、ネギくん、明日菜、真名ちゃん、和美ちゃん。

のどかちゃんはアーティファクトが考えを読むのだから、お化けの考えも読めるかもという事で。真名ちゃんは魔眼持ちやから。

「でもここって基本的に霊が多いよね」

「「「え？」」」

久遠ちゃんの発言にネギくんと明日菜と和美ちゃんが反応する。久

遠ちゃんが言ってるのは力の弱い霊についてやろな。

「あ、ほらそこにも」

「「どこ!?」」

「慌て過ぎやよ。霊なんて日常の中に常に漂っとるもんなんやから」

「久遠さんもほどほどにね?」

「てへっ♪」

最近出番が少なかったからって遊んどるな。

「とにかくクラスに行こうじゃないか。件の霊はそこにいるのだから」

「真名さんの言う通りですよ」

しかし女の子の霊なんておるんやろか?全然気づかへんかった。

久遠ｓｉｄｅ

霊か～。たまたま浮遊霊が写っただけかもしれないけど、昔からそういう噂があったなら地縛霊なのかな。あ、霊といえば。

「文って視えないの?幽々子とかは視えるのに」

「食べ物を食べるレベルの霊なんて誰にでも見えるでしょう」

「確かに」

物質を食べるって事は自分も物質化してるって事だから見えるのは当然か。

「この教室ですよ」

むむむ、視える、視えるよ。でもすぐに終わらせたらつまんないんだよね。私の出番が無くなる。

「和美！！写真！！」

「あ、うん」

和美がポラロイドカメラで写真を撮ると、その写真に白い影が写っていた。

「や、やっぱりいる！？」

「私の眼でも視えないとはな。少しショックだ」

「真名が視えないのもしょうがないよ。こういうのが得意な私も視にくいんだから」

「うちもや。なんや影の薄い地味なお化けやな」

「あ！！」

のどかが声を上げたのでアーティファクトを見ると、絵はないけど、文字で

ひどいです

と書かれていた。そして次の瞬間、机や椅子が揺れ始めた。

「ポルターガイストだーー!!」

「キャーー!?ネギ!!魔法で何とかしなさいよ!!」

「む、むむむ無理ですよ!!」

「ちっ!久遠さん!!何処にいる!?」

「あ、真名、撃たなくていいよ。刹那も刀を納めて」

「でも久遠さん!!止めないと!!」

「殺しちゃうでしょ」

霊を殺す。これいかに。まあそんな事はどうでもいいんだよ。

「木乃香」

「わかった。ヴラド!!玉藻!!」

「さあやろうか」

「任せなさい!!」

「「「誰!?」」」

ヴラドと玉藻の姿が見えるようになる。見えるだけで普通には触れないんだけどね。
そういえばネギ、明日菜、和美の三人は知らないんだよね。知ってたらこんな反応しないか。

「捕まえた！！」

「きゃあ！？」

ヴラドが女の子の霊を捕まえると、女の子も実体化する。力のある霊に触られたからだろうけど。

「後ろから羽交い締めって。ヴラド、変態？」

「失礼な事言わないでくれ玉藻！！」

「読者の皆さん。せーの」

ーヴラドの変態ー

「何か変な声が！？」

「変態ヴラドはええから早くその子の離しぃ」

「お嬢まで！？」

ヴラドが変態なのは本当にどうでもいいから女の子の霊の話を聞かないとね。

えっと、この子の名前は『相坂さよ』。６０年くらい前に死んだ子。まだまだ若いね！！

「久遠ちゃん？何か変な事考えんかった？」

「気のせい！！それでさよはどうしたいの？」

「どう、したい？」

「貴女には何か望みがあるはず。そうでもなければ地縛霊としているはずがない。それにこのままだと」

貴女は悪霊になる

『！？』

みんなが驚くけど、これは当然の事。霊とは周りの影響を受けやすい存在。悪意の類は特にね。そうなると悪霊になる。これまで自分の意識を保っていたのが不思議なくらいだよ。多分この麻帆良が何か影響してるんだろうね。

「早くしないと貴女という存在を保てないだけじゃなく、周りにも

迷惑を掛けるよ」

「……」

「何が不安か知らんがうちのクラスの奴がお前さんの願いを聞き入れんと思ってるのか？」

……あれ？この声は。

「要？」

「よう」

「要先生。呑み会だったんじゃ」

「店の酒が無くなったから追い出された」

『流石バッカス。格が違った』

「バッカス言うな」

お店のお酒を飲み尽くしたら追い出されるに決まってるよ。食べ放題飲み放題にも限度っていうのがあるんだよ。

「で、お願いを聞こうか？」

「あの、えっと……私とお友達になって下さい！！」

「……ハハハ！！そんな事か！！」

「僕は勿論いいですよ」

「私もよ」

「私だっていいよ」

「私も問題ありません。あとで取材させて下さいね」

「私も、いいですよ」

「私も構わないよ」

「うちもええよ」

「はい、私も」

「久遠もいいよ」

「だそうだ。俺もいいぞ」

みんながそう言うとさよは目に涙を浮かべていた。

「皆さん、ありがとうございます。私、嬉しいです」

さよの体が光り出す。もう消えるんだね。

「ちょい待て。それで満足か？」

「え？」

「学生生活を謳歌したくないか？」

要、もしかしてあれを持ってきたの？

「ここに一体の人形があります！！」

「あやや、のっぺらぼうで怖いですね」

「まあ話は最後まで聞け。なんとこの人形、魂を入れるとその人の姿に変身する代物！！」

「じゃあ、さよさんをそれに入れたら」

「その通り！！人になれます！！ただ子供を作る機能はないし、動くためには魔力が必要で、その魔力は世界樹から汲んでるから麻帆良から出れないけどな。どうする？」

「……それでも、人になれるなら」

ふふふ、要も優しいなぁ。でもどうやって入れるんだろ。何か術式でも用意してあるのかな？

「木乃香！！オーバーソウル感覚でやっちゃいな！！」

「うちぃ～？ま、やるけど。さよちゃん、ちょっと失礼」

「はい？ひゃっ！？」

木乃香がさよを人魂モードにする。やっぱりくすぐったいのかな、あれ。

「憑依合体ｉｎ人形！！」

さよの魂が入ると人形がさよの姿になった。

「っと」

倒れそうになったさよを要が支えた。意識はないみたい。

「要先生、大丈夫なのかい？」

「馴染むのに少々時間が掛かるが問題ない。今日は解散だ」

『はい』

そういえばさよって何処に住むんだろ。

～～～～～～～～～～～～～～～

次の日

「皆さん、聞いて下さい」

「今日は新しく仲間が増えるぞ」

『おーー』

「じゃあ入って下さい」

ガラガラ

「自己紹介を頼む」

「は、はい！私は相坂さよです！！これからよろしくお願いします！！」

『わーー！！』

（良かったですね、要先生）

（偶にはいい事しないとな）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

お化けが出た（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「前書きでイラッとした人は和んで欲しいな」

椛「楽屋訪問の時間です。今日はなのはさん&フェイトさん&すずかさんです」

叶「なのはママ達は五人で二つの楽屋なんだよ」

椛「その分広い楽屋なんですけどね」

叶「お邪魔しまーす」

なのは「いらっしゃい、叶ちゃん、椛ちゃん」

フェイト「プリン食べる？」

すずか「チョコもあるよ」

叶「わーい！！」

椛「要さんの奥さんであるお三方。最近どうですか？」

なのは「それがね聞いてよ椛ちゃん。この間ね、ナンパされちゃったの！！ナンパ！！私もまだまだイケると実感したわ」

フェイト「あのね、一昨日スーパーのタイムセールでもやしが一円

だったんだよ！！牛肉も１００ｇ５０円！！魚屋ではオマケでカレイ貰っちゃったし」

すずか「最近ロボット作りが上手くいかなくてね。あ、でも武器はいろいろ造ったよ。千雨ちゃんがいいアイデアくれるのよ」

椛「本編で出番があまりない事に不満は？」

な・フェ・す「「まあオマケで付いてきたキャラだから」」

叶「大人だね。こんな大人な女になりたいな」

なのは「ありがとう。嬉しいよ」

椛「大人なのかなぁ？」

フェイト「椛は我が儘言っても大丈夫。普段言わないけど作者頼られるの好きらしいから」

椛「そうなんですか」

叶「次回はヴィータママとスバルママの楽屋だよ。次回もお楽しみに」

デート……練習？（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「最近調子に乗ってると言われているアリシャです」

シャ「みんなツンデレよね」

ア「前回は
・バッカス要
・久しぶりの久遠
・さよ、体を手に入れる
だったわね」

シャ「よくあれだけ呑めるわね」

ア「肝臓は丈夫よね。胃は丈夫じゃないくせに」

要「アリシャうっせぇぞ！！シールドスライサー！！」

アリシャ「「うぎゃあぁぁぁぁ！？」」

要「では本編スタートだ」

デート……練習？

要ｓｉｄｅ

ある日街を歩いていたら明日菜ちゃんが話し掛けてきた。

「要さん、ちょっといいですか？」

「どうした？」

「デートの練習を手伝って下さい！！」

デートって練習するものなのか？

「明日菜、今年も誘おうとしとるん？出来へんのに」

「だから今年は練習するんでしょう！！」

木乃香の話では、明日菜ちゃんは毎年学園祭を回るのにタカミチを誘おうとするらしいが出来ていないそうだ。

「率直に思った事いいか？」

「何ですか？」

「そもそも誘えないならデート練習の意味なくないか？」

「グハッ！？」

「それは言ったらいかん」

あ、そうだったのか。でも助けてやりたいよな。そこそこ長い付き合いなんだし。だけど俺相手に練習してもな。そうだ、あいつがいた。

「クラトスなんてどうだ？」

「無理無理！！」

「でもそっちの方がいいんじゃないか？」

あいつの方が俺よりもオッサンっぽいし。俺なんて人生経験を積んでいても見た目も雰囲気も若者だし。

「あんな兄ちゃん、まずは少しずつ慣らさんとあかんやろ」

「……成る程」

となるとやっぱり俺？でも俺は子供みたいに扱いそうだな。いや待て、俺じゃなくとも明日菜ちゃんより大人ならいいんだよな。

「ネギ坊主を使おう」

「……要さん。何でガキとデートしないと駄目なのよ」

「だからある物を使う。ちょっと待ってろ」

何処に仕舞ったかな。確か薬の類が仕舞ってある棚は此処のはずなんだけど。

「兄ちゃん、何探しとるん？」

「年齢詐称薬なんだが」

「此処ちゃう？」

あった。だがしかし木乃香が俺より家の持ち物を把握しているのは何故だろう。

「この家の掃除を手伝って何年やと思うねん」

「……そうか」

なんか亭主としてどうなんだろな、俺。

「ともかくこれを使え」

「何これ？」

「さっき聞こえたかもしれんが、年齢詐称薬という代物だ。赤い飴玉は大きく。青い飴玉は小さくなる」

百聞は一見に如かず。とりあえず試してみるか。

「まずは青」

ボフン

俺を煙が包み込み、煙が晴れて俺の姿が見えた時、明日菜ちゃんはキョトンとしていた。俺自身の変化としては視点が低くなった感じかな。多分１０歳前後だと思う。

「こうなる」

「へ、へー」

「次は赤」

ボフン

また俺は煙に包み込まれる。視点は元と同じくらいの高さになる。大体三十代前後かな。

「赤はこうなる」

「／／／／」

「渋い、渋いで兄ちゃん」

「そうか？」

鏡がないから確認出来ないんだよな。まあそんなのはいいか。

「これを使えばネギ坊主も明日菜ちゃんより年上に見えるだろう」

「……はい／／／」

「兄ちゃん、戻らな明日菜がまともに話せへんて」

「だな」

俺が取り出したのは白い飴玉。本来は販売されてないんだが、俺らが作った他の飴玉の効力を無くすものだ。

ボフン

「これで大丈夫か？」

「うん、話しやすい」

「そうか」

この体質というか性癖というか、まずはオジサンを前にして照れないようにしないと始まらないな。

「じゃあ頑張れ。後ろから付いてくから」

「付いて来るの！？」

「当然だろ」

「当然やな」

「木乃香まで！？」

心配だからな。ネギ坊主も明日菜ちゃんも。

「ではストーキングスタートだ」

「千雨ちゃん、せっちゃん、見つからんように頑張ろな」

「なんで私が」

「カメラ頑張ってな、千雨さん」

「……後で朝倉に売りつけたる」

ストーキングメンバーの紹介。なんかスターティングメンバーの紹介みたいだな。とりあえず、俺、木乃香、刹那、千雨、そして上空には文がいる。明日菜ちゃんとネギ坊主のデートコースはなのは達が考えた。

「しかし毎年思うんだが、出店がもう出てるってどうよ」

「ええんちゃう」

「早いのは確かだが、別に出しちゃいけない訳じゃないからな」

「うちは楽しいからええと思う」

「せっちゃんはベビーカステラ目当てやろ」

「ソソソ、ソンナコトニャイヨ～」

「カタコトの上に噛んでるぞ」

うちの刹那はベビーカステラが大好物です。作者はリンゴ飴で気持ち悪くなった思い出がある。ちなみに俺は祭ではチョコバナナが好きだ。

「お、始まったで」

待ち合わせ場所で待っていた大きくなったネギ坊主の所へ明日菜ちゃんがやってくる。

「ネギくんエスコート出来るんかな？」

「いやいや、魔法ばっかやってた9歳児だぞ。そんなのやる訳ないだろ」

「英国紳士って自分で言っとるよ」

「紳士は要さんみたいのを言うんだよ」

「「……へー」」

「な、なんだよその目は」

「「べっつに～」」

こいつら楽しそうだな。まあ千雨の言う通りあいつがエスコート出来るとは思えないな。

「で、千雨ちゃん。さっきのをもう少し」

「あーあー！！」

「そんな子供みたいな事しても駄目やで～」

「お前ら、遊んでないで追いかけるぞ」

「「はーい」」

「助けてくれよ！！」

「楽しそうですね～。一人上空は寂しいです」

ふむ、明日菜ちゃんもネギ坊主も楽しんでるようだな。デートってのは男女が楽しむのが大切だからな。

「おぉ！！ネギくんもなかなかやるやないか」

金魚すくいでネギ坊主が明日菜ちゃんを後ろから抱きかかえるように金魚すくいを手伝っている。

「ああいうのを自然にやるからフラグを立てるんだよ。わかるか？」

「誰に言っとるん？」

おそらくこれを見ているであろうフラグ最高神やフラグ神やフラグ王に言ってるんだよ。

「でも確かにフラグ立ててるよな」

「……ちょっと思ったんだけどさ」

「どうしたん？」

「タカミチってあんな甲斐性あるのかな、って思ってさ」

「「「……」」」

「そもそもあいつ修行ばっかりで女性経験てあるのか？」

「「「……知らない」」」

「ハックション！！誰か噂でもしてるのかな？」

最後は夕日の見える丘。うん、綺麗だ。

「明日菜さん達は見ないのですか？」

「文、降りてきたのか？」

「寂しいですから」

「そうやよね」

「要さんも酷いですよね」

「一人上空はないわな」

うーむ、悪い事してたな。後でなんか奢ってやろう。

「あいつらはほっといても大丈夫だろ。いい時間だし飯でも食いに行くか。文、何処がいい？」

「では焼き肉なんてどうでしょう？」

「じゃあそうしよう。なのは達に連絡するな」

俺らこの後全員でのんびりと食事をした。

デート……練習？（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「次回は私が出るよ！！」

椛「叶ちゃん、それは最後に言うのよ」

叶「ふぇ？」

椛「まあいいか。さて今日はヴィータさんとスバルさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

ヴィータ「らっしゃい」

スバル「何かあったかな？」

ヴィータ「あたしが作ったシフォンケーキならあるぞ」

叶「わーい！！」

椛「お二人は叶ちゃんの相手をよくしてると聞きますが」

ヴィータ「叶はなかなか筋がよくてな。相手をしても楽しいぞ」

スバル「最終的には吹っ飛ばされるんだけどね」

叶「私も楽しいよ」

スバル「それは良かったね。ちょっと私にもケーキ頂戴」

ヴィータ「お前には後で作ってやるから我慢しろ」

椛「最初も言ったように叶ちゃんが次回本編に出ます」

叶「みんな、見てね」

強くなりたい（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「更新！！」

シャ「完了！！」

ア「前回のあらすじは
・明日菜、デート練習
・ストーキング
・タカミチはきっと女性経験がない
だったかしら」

シャ「意味がわからないわね」

ア「そして今回は小太郎メインにして叶出演」

シャ「叶ちゃんにはまだ早いわよ。私達が出るべき」

雨「ボッシュート！！」

パカッ

アリシャ「「あぁぁぁぁぁぁぁ……」」

雨「何故小太郎メインかと言うと、友人に小太郎はどうするのと訊かれたからです。ではどうぞ」

強くなりたい

小太郎ｓｉｄｅ

こないだある話を聞いた。何でも麻帆良祭とかつう祭りの時に格闘大会があるらしい。その優勝賞金はとかもあるらしいけど、それ以上にネギが出るなら俺も出る。そのために修行をせんとな。

「出掛けてきます」

「あら、何処へ行くの？」

「要の兄ちゃんちや。遅なるようなら連絡するで」

「わかったわ。気をつけてね」

「はーい」

強なるために頑張るで。

「だからうちに来たと」

「頼んます！！」

要の兄ちゃんは馬鹿みたいに強いんやから鍛えてもらえればきっと強くなれる。

「悪いが今日は予定があってな」

「そうなんか……」

「ならば儂がやろう」

出てきたんは鏡の兄ちゃん。

「ええんか？」

「うむ」

こっちの兄ちゃんも強いからな。ええ修行をしてくれるかもしれへん。

「でも何でやってくれるん？」

「うちが頼んだんやで」

「千草の姉ちゃん」

「元仲間やからな」

ホンマありがたいわ。

「ではやるか？」

「おう！！」

ネギ、待っとれよ！！

別荘とかいう所で修行をやる事になった。

「ではまず格闘における基本的な型からやるぞ」

「「オッス！！」」

ん？なんか一人分声が多かったぞ。つか誰やこの娘は。

「叶もやるのか？」

「うん！！」

どうやらこの娘は叶というらしい。俺より年下みたいやけど、見たことないな。

「よろしくね」

「ああよろしゅう」

でもこんなちみっこがついてけるんかな?この人のはキツくないんか?

「では始めるぞい」

まずは2時間くらいいろんな格闘の型をやっとった。地味やなぁ。

「なんか技教えてぇな」

「ふむ、基礎はそこそこ出来ているようじゃし、構わんか」

「ヨッシャ!!」

「確かお主は狗族じゃったな」

「そやで」

「ならこれでいいじゃろ」

そう言うと鏡の兄ちゃんの姿が変わり、ジーンズを履いた蒼い狼のような獣人になった。

「鏡の兄ちゃん、その姿は？」

「以前取り込んだワーガルルモンというものの姿じゃ」

取り込んだて。意味わからんよ。そないなもんがおるんかい。

「ちょっと待っとれ」

鏡の兄ちゃんはどっかへ行き、デッカい鉄で出来た人形を持って戻ってきた。

「これからお主に習得してもらう技を見せる」

兄ちゃんの力が高まっていくのが目に見えてわかる。一体どんな技なんやろか。

「ハアァァァ！！カイザーネイル！！！」

兄ちゃんの爪による攻撃で鉄の人形はバラバラに引き裂かれた。なんちゅう威力や。これを教えてもらえるんか。

「私は何すればいい？」

「叶は「私と模擬戦でもやろうか」スバルか」

「うん！！やる！！」

あっちはあっちで模擬戦か。まあ俺はさっさとさっきの技の習得に励むとしよか。

「リボルバー・インパクト！！！」

「ぴーーーーー！！？」

なんやいきなり吹っ飛ばされとった。

「……大丈夫なんか？」

「日常じゃ」

あれが日常なんか。嫌な日常やな。

「うおりゃぁぁぁぁ！！カイザーネイル！！」

「踏み込みが足らん」

くそ、どんだけやっても上手くいかん。鏡の兄ちゃんが言うには変身してない状態で出来れば変身した時威力や精度は上がるらしいけど。

「力だけでは出来んぞ」

「わかっとる。頭ではわかっとるんやけど体が動かんのや」

「今までが力任せの戦いが多かったのじゃろう。この技はそんな単純なものではないからの。それにお主は頭ではなく体で覚えるタイプのようじゃし」

ホンマどないしたら習得出来るねん。こんな調子だと何年も掛かるかもしれへん。

「ねえ鏡おじちゃん」

さっきまで何度もぴーぴー吹っ飛ばされとった叶がやってきた。

「何じゃ？」

「影真似の術したら？」

「成る程。それなら儂の動きと連動可能か。よく思い付いたの。ジュースを奢ってやろう」

「わーい」

影真似の術？何するんやそれ。魔法か？

「では」

鏡の兄ちゃんは印を結んだ。すると兄ちゃんの影が伸びて俺の影と

くっ付いた。

「!?　動けん!?」

「この術は、まあ説明はよいか。とにかく今は儂とお主の動きは連動しとるのを理解しろ」

動きが連動。つまり兄ちゃんが動けば俺も動くって事か。それなら、兄ちゃんがカイザーネイルをやれば俺も出来る!!

「理解したか。ではしっかり体に覚え込ませろ」

「おう!!」

大分やったな。自分の動きやないから疲れたけど、完全に覚えたで!!!

「よし、やってみせい」

「いくで!!カイザァァァァネイル!!!!!」

ズバァン

「おー、見事」

「どんなもんや！！」

やっと出来た。でもこれで俺も成長したはずや。

「コタローお兄ちゃん、試合しよ」

「ええで。やったるわ」

「叶、あれは禁止じゃぞ」

「わかってるよ」

なんか制限でもあるんか？なら俺もカイザーネイルはやめとこか。

というか力加減が出来るまでは使用は控えんとな。相手女やし。

「いっくよ！！」

「うおっ！？」

攻撃は軽いけど、男にはないしなやかさと小ささ故の小回りで隙を作らず連打が繰り出される。

「てりゃてりゃてりゃ！！」

「こんのぉ！！」

マジ攻撃速度が速いわ。隙が見つからへん。でもこんな軽い攻撃な

らちょっとくらいは無視出来る！！

「喰らいぃ！！」

「フッ！！」

パシン

「っ！？」

パンチをしたら手の甲に一撃を入れられた。

「ハッ！！」

「ぐっ！？」

「てぇい！！」

「いっ！？」

こめかみにフック、その隙に足への踏みつけ。こいつ確実に鍛える事が出来ない人体の急所を狙っとる。

「抜骨！！」

ゴキッ

「あぐぅ！？」

右肩の骨を外してきおった！？ホンマ何者なんや！？

「決まり！！」

！　油断しおった！！

「そこや！！」

「にゃっ！？」

べちっ

足払いをするとそのまま転けた。俺は首へ手刀を突きつけた。

「そこまで。叶、詰めが甘いぞ。そんなだからヴィータやスバルに吹っ飛ばされるんじゃ」

「ふみゅ～」

危なかった。最後の油断がなければ間違いなく負けとった。

「小太郎。暇があったら技を教えてやろう」

「ホンマか！？」

「うむ」

「その時はまた私と試合しよ」

「へへっ、次は確実に勝ったる」

「私だって奥の手が「使用禁止じゃ」うー」

奥の手って何やろな。というかそれ使われたら俺が負けるみたいやん。絶対に使わせるくらいに強くなったる。そんでネギにも勝ったるんや！！

強くなりたい（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「楽しかった！！」

椛「良かったですね。次は勝つように頑張りましょう」

叶「うん！！」

椛「今日はクラトスさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

クラトス「よく来たな。悪いが菓子の類はないのだ。お茶ならあるのだが」

叶「いいよ」

椛「クラトスさんはあんまり本編に出演出来ない事に関して何か？」

クラトス「まあ偶然出演が決定してしまったからな。それに出番はこれからだ」

叶「そうなの？」

クラトス「うむ」

椛「ファンも喜びますよ」

クラトス「私にファンなどいるのかね？」

叶「いるよ」

椛「自信を持っていいですよ」

クラトス「そうか、ありがとう」

叶「じゃあ今日はここまで。次回もお楽しみに」

更なる高みへ（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「要が超強化」

シャ「嫌な人はここで戻るボタン」

ア「そしてあらすじは
・叶可愛いよ
・叶最高
・叶愛してる
これ書いたの要でしょ」

シャ「ちゃんと事実を書かないとね」

ア「そうそう。ヴラドが地味で変態とか」

ヴラド「死ぬかい？」

アリシャ「あ……」

ヴラド「死にさらせ！！串刺し槍林！！」

アリシャ「「ぎゃあぁぁぁ！？」」

ヴラド「では本編スタート。最初に言ったように要が強くなるから気をつけて」

更なる高みへ

要ｓｉｄｅ

さっき小太郎が来たが、鏡がいて良かった。これから大切な用事があるからな。

「さて、この辺でいいか」

周りには誰もおらず、近寄ってくる気配もない。

「神様、聞こえますか？」

『聞こえますよ』

「修行がしたい」

『いいよ。こっちに喚ぶね』

俺の足元に魔法陣が現れ、俺は神様の所へ飛ばされた。

相変わらず白い世界だな。

「いきなりどうしたんだい？」

「ん～、俺弱いからさ」

「弱い？下手な神より強いよ君は」

「ＯＲＴ付きで、だけど」

ＯＲＴがなければただの人、とまではいかないが何かしらの能力持ちと戦えばまず負ける。身体能力や魔力の解放もＯＲＴがあるから出来る事だしな。

「じゃあ君はどうしたいんだい？」

「さっきも言った通り修行がしたい。ＯＲＴ抜きで」

「……わかったよ」

神様がそう言うと俺の体から力が抜けていく。長かった髪は短髪になり、色も黒くなる。転生前の姿に逆戻りだ。

「鍛えた肉体は変わってないから安心して。最低限の魔力と気もあるし」

「それは良かった」

「じゃあ僕が相手になるよ」

神様自身がか。それは有り難いな。

「じゃあ始めるよ」

「お願いします」

「うん、お願いします」

ドスッ

互いに礼をして構える。そして次の瞬間、神様のボディブローが俺の腹に突き刺さった。そう、『突き刺さった』のだ。

「ゴフッ……！？」

「まずは一回」

「いき……なり、貫通……させ…ま……すか」

ただのボディブローが腹を貫通するってどういう事だよ。神様が腕を引き抜くと傷は治った。この空間は以前ＯＲＴを認めさせた空間と同じらしい。

「くっ、こんな武闘派だったなんて聞いてませんよ」

「言ってないもん」

いくらＯＲＴがいないとはいえ一切動きが見えないとは。気配も無し、音も無し。神様に武術で負ける気はなかったんだが、今は完敗だな。

「だが負けん！！」

「それは防いでから言いな」

ザンッ

神様の蹴り一発で俺の体は豆腐を斬ったように袈裟掛けに斬れた。
なんて異常な蹴りだよ。宝具クラスの切れ味だな。

「シッ！！」

再生してすぐに拳を放った。攻撃を打たせるな。打ち続けろ。

「連撃ってのはこうやるの」

だが悪あがきに過ぎなかった。俺が一発の拳を放つ瞬間に神様は無数の拳を放ち、俺の体は穴だらけになった。

「……」

「ほら治った。立って」

ＯＲＴ以来の修行だな。一撃叩き込んでその整った顔を歪ませてやる！！

「オラァッ！！」

「フフン、遅いよ」

グシャッ

どれだけ戦っただろう。もはや時間の感覚などない。もしかしたら一瞬かもしれないし、何十世紀も戦ったのかもしれない。まあ前者はないだろう。何故なら……

「フンッ！！」

バキィ

「ぐっ！？受け取りなよ！！」

「当たるか！！」

俺の攻撃が当たり、神様の攻撃が避けれるようになったからだ。スキルで言えば心眼（真）ＥＸって感じになったな。

「フッハッ！！」

「そこ！！」

神様も途中から様々な攻撃を繰り出してくる。銃、剣、槍、他にも

あらゆる種類の攻撃を出してくる。俺のためを考えてだろう。本当に有り難いな。

「ラァッ！！」

「ハァッ！！」

パァン

クロスカウンターを決められ、俺の頭が吹っ飛んだ。だが即再生する。さあまだまだ。

「終わろう」

「はい？」

「君は十分強くなったよ。人の身で僕と殴りあえるんだし」

「でも一撃喰らうと死にますよ」

「人間なんだからしょうがないよ。いくら星の枷を外したり、咸卦法で補っても所詮人は人」

まあ、そうだわな。寧ろこれだけやり合えるのがおかしいのか。

「ねぇ、君の異常ってわかる？」

「俺の異常？」

何をいきなり言うんだこの人は。俺の異常？俺に異常性なんてない

だろ。

「精神力だよ。君はここまでどれだけ死んだと思ってるんだい？普通にしてるのがおかしいんだよ」

「はぁ」

「わかっちゃいないね、こりゃ」

精神力ねぇ。さっぱりだよそういうのは。

「あ、そうだ。ほい」

「！？」

突然頭の中に様々な記憶が流れ込んでくる。いやこれは甦っているんだ。

「ぼんやりしていた記憶が戻ったかい？」

「はっきりと」

「それは良かった」

「ゼウス様、失礼します」

神様の部下である天使が来た。

「彼女の修行も終わったかい？」

「大分前に」

彼女？俺以外に誰か修行でもしてたのか？新しい転生者？

「入れて」

「はい」

そしてこの空間に入ってきたのは意外な奴だった。

「Ｇｉｉ」

「ＯＲＴ！？」

こいつ雌だったのか！？いやそれはいい。こいつも修行したのか？

「君だけが強くなるのが彼女は気に入らなかったんだよ。ちなみに彼女はあらゆる世界のアルティメットワンと戦ってた」

「はぁ」

「ああそうだ。ＯＲＴが女の子とわかった所で君も気づいていない秘密を教えよう」

「秘密、ですか」

「楔くんの性格の大半はＯＲＴのものだ」

……なん……だと……？あれは俺の中の女的なものが集まって出来たものじゃなかったのか？

「もちろん君という存在も混じって楔くんは出来てるよ。でもそれだけじゃああんなしっかりした性格は出来ないよ。分裂なんて問題外だ」

何というか、新たに凄まじい真実が判明してしまったな。

「じゃあ一つにするよ」

「はい」

「Ｇｉｉｉ」

ＯＲＴが光になり、俺の中に吸い込まれる。前より強くなった気がする。

「……」

「どうしました？」

「ちょっと全身ＯＲＴになるあれ、やってみて。それで僕と試合しよう」

「？　はい。完全武装・ＯＲＴ」

一瞬で全身がＯＲＴの外殻に包まれる。随分と馴染むな。

「じゃあ、いきます」

近づいてのアッパー一発。それで神様の半身がミンチになった。

「！？」

俺が驚いたよ。何が何だかさっぱりだよ。

「とんでもない事になったね。僕じゃ勝てないよ」

治った神様がそう言う。

「じゃあね～。向こうじゃ一時間くらいしか経ってないはずだから」

「ありがとうございました」

ゼウスｓｉｄｅ

要くんを元の世界に帰した。そうして僕はようやく一服出来た。

「お疲れ様です」

「うん、疲れたよ」

要くんが強くなるのは想定出来た。しかしその強さは自分の想定の遥か上だった。

「星の枷有りで僕を殺すか」

「あれで有りですか！？」

いやはや、僕もビックリだよ。いくら全身にＯＲＴを纏っても僕に勝てるとは思わなかった。要くんを鍛えている時は全力ではなかっ

た。だがさっきの攻撃は本能で全力で避けようとした。なのに無様にも半身ミンチにされたのだ。

「＋でも×でもない。計り知れないな。よし！！僕も修行頑張るぞ！！」

「その前に仕事です」

……現実から逃げようかなー。

更なる高みへ（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「パパのパワーアップ！！」

椛「随分強くなりましたね」

叶「私のパパだもん」

椛「さて今日の楽屋は志貴さんとアルクェイドさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす」

志貴「いらっしゃい、二人共」

アルクェイド「ほらチーズケーキよ」

叶「ありがとう！！」

椛「さてお二人はこの後本編でどのような活躍が？」

志貴「とりあえず武術大会には出るだろうな」

アルクェイド「私は応援かしらね」

志貴「店の話も多少あるかもな」

叶「ねぇねぇ、今度遊びにいってもいい？」

アルクェイド「どんと来なさい！！」

叶「どんと行く！！」

志貴「ハハハ、何か用意しないとな」

椛「それでは今回はここまで。では次回もお楽しみに」

ちょっとした幕間？（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「変な事される前にさっさとやるわよ！！」

シャ「では前回のあらすじをお願い」

ア「お願いされた！
・要超強化
・神様殺っちゃった
・楔はＯＲＴと要のハイブリッド」

シャ「神様殺しちゃうなんてね」

ア「神様が弱いんじゃないの？」

アリシャ「「アハハハハ」」

ゼウス「神の雷を喰らえ～」

ジュッ

ゼウス「失礼な二人だな。では本編をどうぞ」

ちょっとした幕間？

要ｓｉｄｅ

今日は夜に集会があるらしい。何の集会だ？

「要、要！！」

「ん？ああスマンな久遠」

「早くしてよ」

「なら、これで」

パチン

久遠との将棋に集中しないとな。強いもんな久遠。

「何考えてたの？」

パチン

「今晩の集会についてだよ」

パチン

「クラトスとかに訊いたら。王手」

パチン

「ああ、そうだ、な」

……穴が見当たらん。ここから抜け出すのは、無理そうだな。やっぱり将棋じゃ勝てないか。

「参りました」

「えっへん」

夜になる前に千年城で話し合いでもしようかな。

「志貴、茶」

「いきなり来てそれはないだろ」

そんな事を言いながらちゃんと出してくれるんだよな。

「クラトスも来てるな」

「呼ばれたからな。用件は？」

「今日の集会って何やるか知ってるか？」

「直接学園長先生に訊けば早かろう」

まあそうなんだけど、先に出たのがクラトスだったからな。それにたまにはみんなで話したかったし。

「世界樹についてだ。何でも今年は学園祭の時期に世界樹付近で告白すると必ず結ばれる暗示、いやほぼ呪いがかかるらしい。世界樹が最高まで溜まった魔力を放出する現象の副作用的なものだそうだ」

なんだそのくだらない呪いは。つかそんなもんに頼るなよ。知らない奴にとっては願掛け程度なんだろうが。

「本来は来年だったようですが、異常気象で一年早まったそうです」

「茶々丸、本当か？」

異常気象程度で魔力って溜まるのが早くなるのか？今度まーくんに訊いてみよう。

「私としては要先生がいるせいかと」

「あ、その意見私も賛成」

「うむ、茶々丸の言う通りだな」

「俺もそう感じるな」

「おいマクダウェル家。どういうこったそりゃ」

何？俺の存在が世界樹に影響を与えてたってのか？俺がいると魔力が溜まるのか？

「クラトス、失礼と思わんか？」

「……」

「沈黙は肯定と理解した」

もちろんマクダウェル家の意見に賛成なんだろうな。周りには敵しかいないのか。

「そういや茶々丸、髪伸びたな。今度うちに来い。切ったる」

「ありがとうございます」

「あ、私も」

「俺らは伸びないだろ、アルクェイド」

まあ時間になるまでのんびりしてるかな。もちろんこの店で。

時間になって世界樹広場に来た。魔法先生だけでなく魔法生徒もいるな。

「面倒だね」

「真名は金が貰えるからいいだろ。俺らは無償奉仕。つまりボランティアだぞ」

「学園長の師匠なら脅したらどうだい？」

その手があったか。

『出しませんよ、師匠』

『念話でいちいち言ってくるな』

ちっ、聞こえてたか。抜け目ないな。昔なら一瞬で出し抜けたのに。

「さて、全員集まったようじゃな。では集会を始める」

近右衛門が話しているのは主にクラトスが話していた事と同じ。告白を止めるためでバレないようにするなら攻撃も可らしい。しかし、見られてるな。

『師匠、気づかれましたか？』

『これで気づかないのがいるかっての』

『大半が気づいていないようですぞ』

情けない。よくそれで立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるなんて言うよな。まああんな小さな虫型機械に気づくのは難しいかな。常に周りに気を配らないといけないし。

『とりあえず、アリストテレス。マイクロニードル』

『了解』

小さな、縫い針よりも小さな魔力の針を作り射出した。魔力針は上手く機械虫を貫いた。

「何を企んでるか知らんが、くだらん事なら承知せんぞ、超」

超ｓｉｄｅ

「壊されたカ」

要先生ならやるだろうとは思っていた。しかし彼らは何者なのだろう。私の知る過去にはいなかった。

マクダウェル家にいる殺人貴『志貴・Ｂ・マクダウェル』と真祖の姫『アルクェイド・Ｂ・マクダウェル』。以前までロボットだった

のに何故か人になっている『絡繰茶々丸』。
最強の傭兵『クラトス・アウリオン』。
人にあらざる者『牧原舞人』、『牧原舞花』の兄妹。

「何より要先生の周りに集まる者」

刹那や木乃香、千雨、のどかに夕映もこの時期、いや未来でもあんな力を持ち合わせていない。エヴァンジェリンがいない代わりにクラスにいる『射命丸文』。彼女も驚異だ。それと彼女の上司にして刹那の父という『天魔』。彼の能力は危険極まりない。

「まあ一番の問題は要先生の家族だけどネ」

あの家族の戦力はおかしい。まだ確認出来ていないが、『久遠』という子狐もかなりの力を持っているだろう。更に言えば時折現れる要先生の知り合いと思われる人物達。あれの力も異常だ。

「どうなるやら。先が見えないアル」

まあこれだけは言えるだろう。計画成功しないんじゃない？

ちょっとした幕間？（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「はっじまっるよー」

椛「今日の楽屋は舞人さんと舞花さんの楽屋です」

叶「二人共優しいんだよ」

椛「そうですね」

叶「お邪魔しまーす！！」

舞人「いらっしゃい」

舞花「簡単なものしか用意していなくてすみません」

椛「……簡単？」

叶「薔薇の形したチョコだね」

舞花「バレンタインで優さんとお父様にプレゼントするのの試作品です」

舞人「実は僕も手伝いました」

叶「美味しいよ！！」

椛「凄いですね」

舞花「ありがとうございます」

椛「お二人は麻帆良での生活はどうですか？」

舞人「まあまあスリルがあるね。このまま永住してもいいかな」

舞花「でも私は優さんと共に」

叶「優お兄ちゃんは人気者だね」

椛「好きな人と一緒にいたいのは当然ですね。舞人さんにはいないんですか？」

舞人「どうだろね。僕を好きという人が現れば考えるかもね」

叶「私は舞人お兄ちゃんが好きだよ」

舞人「ハハハ、ありがとう」

椛「次回は感想１０００件記念企画です。やるのは１０００件を踏んだ海人様とのコラボ。では次回もお楽しみに」

感想１０００件記念企画（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「感想１０００件。やったね！！」

シャ「これも皆さんのおかげね」

ア「では前回のあらすじ
・厄介な世界樹
・やる気のない要
・超の憂鬱」

シャ「相変わらず酷いあらすじね」

ア「今回は面倒なのが来る前に逃げる、もとい帰るわよ」

シャ「今回は１０００件を踏んだ海人様とのコラボ。では本編どうぞ」

感想１０００件記念企画

要ｓｉｄｅ

「グアァァァァァ！！」

俺が今対峙しているのはクシャルダオラ。鋼の外殻とあらゆるものを吹き飛ばす暴風を纏った龍だ。突進してくるそれの頭に拳打を当ててやる。

「グゥゥゥ……」

するとクシャルダオラは倒れた。既に息はない。

「お見事」

「ん？飛翔じゃないか。久しぶり」

そこには飛翔とその妻であるアリサとすずかがいた。

「どうやったのよ、これ」

「表面に傷はないね」

「内壊。そういう名前の技だ」

「センスどうなのよ」

「言うな」

俺だってそれは気にしてるんだから。自分のセンスが恨めしい。

「ま、まあ名前はおいといて、どういう技なの？」

「体内を破壊する技。抜骨の応用みたいな感じだな」

「じゃあこの龍は」

「脳を破壊した」

改めて考えると酷い技だよな。表面上は無傷なのに内面ボロボロって。

「それで何か用か？」

「頼みがあってな。俺は力の操作。二人にはこっちの魔法を教えてやってくれ」

力の操作？飛翔が今更？まあどういう理由か知らんが友人の頼みだしな。

「力ってのはどんなだ？」

「夜の一族の力と直死の魔眼。要の所ならどうにかなると思って」

おいおい随分な力じゃないか。というかうちは便利屋じゃないんだぞ。まあどうにかなるけどさ。

「夜の一族はともかく、直死や魔法についてはいい場所がある」

「やっぱりあるのね」
「流石だね」
本当に。うちの世界はどうなってんだか。
「では案内するぞ」

アリサｓｉｄｅ

連れてこられたのは骨董屋っぽい所。こんな場所で修行なんて出来るのかしら？
「邪魔するぞ」
「あ、要。いらっしゃい」
「ブッ！？」
突然飛翔が店員らしき女性を見た瞬間に吹いた。一体どうしたっていうのよ。

「そっちのは？」

「俺のダチの、って飛翔どうした？」

「な、何でもない。うん、要の世界だからしょうがないよな、うん」

「落ち着いて」

すずかの言う通りよ。一体全体どうしたっていうのよ。

「アルク、志貴とエヴァンジェリンはいるか？」

「いるわよ。呼ぼっか？」

「頼む」

店員さんが要が頼んだ人を呼びに行ってる間も飛翔はなんかブツブツ言ってた。

「呼んで来たわよ」

「どうした要？」

「いきなり呼び出すな」

出てきたのは包帯を顔に巻いた男と、金髪幼女だった。

「わりぃな。飛翔は志貴。アリサとすずかはエヴァンジェリンに」

「ちゃんと説明しろ」

「あいよ」

要の説明を簡単に纏めると私達はエヴァンジェリンって子に魔法を教わって、飛翔は志貴って人に魔眼の使い方を教わるという事らしい。

「なら飛翔の夜の一族の力は？」

『私にお任せあれ～』

この声、すずかね。間違いなくこの世界のすずかね。どこから話しているのかしら？

「あ、それ？」

『それ』

すずかが見つけたのは要の背中に引っ付いてる蝶。あれから確かに声が出てるけど、相変わらずの技術ね。本物の蝶にしか見えないわ。

「じゃあ志貴、エヴァンジェリン、頼めるか？」

「ああ」

「構わんが、仮契約くらいやったらどうだ？」

仮契約？何かしらそれ？

「そうだな。んじゃエヴァンジェリン」

「仕方ない。まあ私から言った事だしな」

エヴァンジェリンさんが魔法陣を描く。これで仮契約とかをやるのかしらね。

「飛翔、この上に立て。んでまずは、アリサ」

「何？」

「飛翔とキスしろ」

……は？キス？何で人前でキスしないと駄目なのよ！

「飛翔も何かいいなさいよ！！」

「でも従わないとな」

「そうだぞ。魔術式な契約より数十倍楽なんだから」

「あれはあんまりないよな」

「どういう契約なの？」

「男女なら基本性行よ」

……うん、確かに楽だ。

「こうなったらさっさとやるわよ！！」

すずか（飛翔）ｓｉｄｅ

結局私もアリサちゃんもキスしたけど、そしたらカードが出てきた。

「これ何なの？」

「パクティオーカードだ。契約主と念話が出来て、契約主は自由に契約者を召喚出来る。契約者は自分にあったアーティファクトを出せる」

ふーん、なかなか便利なカードなんだね。リスクもないみたいだし。

「ようやくスタートだ」

「ではそこの二人。ついて来い」

エヴァンジェリンさんて小さいけど偉そうだよね。

「まずはアーティファクトを出すぞ」

「どうやって？」

「カードを持って『来れ（アデアット）』と言えばいい。戻す時は『去れ（アベアット）』だ」

簡単だね。カードには私は双剣を持ってる私が、アリサちゃんは双銃を持ってるアリサちゃんが写ってるから多分それがアーティファクトなんだろう。名前は私がエイヤノソウガ、アリサちゃんはアサヤケノセイジュウ。漢字にしたら永夜の双牙と朝焼けの聖銃かな。

「称号とか方位とかいろいろ書いてあるけど」

「気にする必要ない。重要なのはアーティファクトだ。ではやってみろ」

「「来れ（アデアット）」」

出たのはやっぱり私は双剣、アリサちゃんは双銃だった。

「それは何らかの特殊能力もあるだろうが、魔法発動体としても使える。早速だが練習だ。プラクテ・ビギ・ナル　火よ灯れ」

エヴァンジェリンさんの指先に火が灯る。簡単な魔法だね。適性を調べるものかな。

「「プラクテ・ビギ・ナル　火よ灯れ」」

私は剣の先から、アリサちゃんは銃口から火が出る。でもアリサちゃんの方が大きいようだ。

「成る程、そっちの、アリサとかいうのは火に適性があるようだな。では適性検査を続けるぞ」

適性検査の結果、私はメインは闇、サブが氷と影。アリサちゃんはメインは火、サブは光だった。

「すずかは私と同じだから教えやすいな」

「やっぱり吸血鬼っていうのが関係しているのかしら？」

「それもあるかもしれんがアーティファクトの影響もあるかもな。ある程度魔法を覚えたらアーティファクトについても覚えてもらうつもりだ」

なかなか覚える事が多そうだけど頑張らないとね。

「飛翔達は何してるのかしら？」

そういえばどうなんだろ。上手く出来てるのかな?

飛翔ｓｉｄｅ

この二人に師事したのは間違いだったかもしれない。こっちのすずかに夜の一族の力について訊くと。

『パーとやればいいんだよ。抑える必要なし!!』

だし、志貴さんに直死の魔眼について訊くと。

「こんな力は使わない方がいいんだ。君には他の力があるんだろ?ならそれを使った方がいい」

とりあえず夜の一族の力から始めるか。

「抑える必要がないってどういう事だ?」

『まんまだよ。あれは力を制御出来るかじゃなくて自分を制御出来るかが問題なの』

「それならそうと言って下さいよ」

成る程、自分の制御か。力を抑える事を考えたら駄目なんだな。

『まあ飛翔くんの場合馴染んでないのが一番の問題だけど』

「馴染んで、ない？」

『そう。夜の一族は多かれ少なかれ生まれつきその血は自分で精製するの。だから体に血が馴染んでるんだけど、飛翔くんは輸血で入れたからまだ血が体に馴染んでないはずなの。馴染んでたら制御の必要はないんだけどね』

「確かに」

でもその場合どうやっと血を体に馴染ませればいいんだ。

「というか制御しないといけない理由があるんだが」

『何？』

「力を使うと直死が発動するんだ」

『そういうのは早く言う！！』

ええー、怒られた。かなり理不尽な気がする。

『なら頻繁に、出来れば毎日そっちの私の血を飲んで』

「量は？」

『ちょっとでもいいから継続が大事。そのうち血が体に馴染むわ』

「ならそうしよう」

これで問題は一つは解決したな。なら次は直死の方だな。

「どうしても使うのか？」

「はい」

「……ならまず見せてくれ」

俺の眼が血のように赤くなり、俺には死が線で視えるようになる。
それと同時に僅かながら頭痛がする。

「悪いけどこれを殺してくれるか？」

志貴さんが渡してきたのはナイフと拳大の石。俺はナイフを使って
石の死を断った。

「確かに直死の魔眼だな。君も厄介なものを背負ったな」

「いえ」

これは俺の未熟さが招いた事だからな。

「どんな感じで死が視える？」

「点とかは視えませんし、物の死は視にくいです」

「頭痛は？」

「少し」

「なら多用しない事だ。脳が死を理解しきっていないからね。酷使をすれば脳が焼き切れる」

「なら使いどころは？」

「使うな。もし使うならば、あっちゃいけないんだが自分の死を覚悟してでも、自分以上の何かから大切なものを護る時だ。この眼は命を軽視しすぎる」

「……はい」

俺だってそんなのは嫌だけど、でも覚悟はしておかないといけない。

「まあ話してばっかりもあれだし、今からちょっと試合でもしようか」

「お願いします」

試合中に投影魔術を使ったら何故か志貴さんがマジになってしまった。何で？俺そんなに悪い事でもしたか？

要ｓｉｄｅ

アリサと向こうのすずかは充実した顔で、飛翔はやつれた顔で帰ってきた。

「飛翔、どうした？」

「……何でもない」

後で志貴に何があったかを聞いておくか。

「エヴァンジェリン、二人には何を教えたんだ？」

「基本的な魔法を全属性。得意属性の中級魔法。上級魔法は呪文だけを教えたぞ」

僅かな時間でそれだけ習得出来たか。やっぱり才能があるな。

「それぞれ何か収穫があったようで良かったな」

「まあ、疲れたけど良かった」

「そうね、いい経験になったわ」

「うん。新しい魔法は楽しかったしね」

「なら二人共、帰るぞ」

「「はーい」」

飛翔が宝石剣を取り出す。もう帰るのか。ってあいつらは別荘にいたんだから1日いたようなもんか。

「また来いよ」

「ああ、またな」

感想１０００件記念企画（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「感想１０００件、やったね！！」

椛「いい事ですね」

叶「今日の楽屋は誰？」

椛「エヴァンジェリンさんと茶々丸さんとチャチャゼロさんです」

叶「お邪魔しまーす！！」

茶々丸「いらっしゃい。お菓子もいっぱい用意しましたよ」

叶「ありがとう！！」

チャチャゼロ「アメーナ」

叶「お菓子は甘いよ？」

エヴァ「くくっ、そうだな」

椛「では早速。お三方は志貴さんが好きですか？」

茶々丸「え！？」

チャチャゼロ「兄貴ハ好キダゼ」

エヴァ「私も大好きだ」

叶「茶々丸お姉ちゃんは？」

茶々丸「え、あ……好き、です」

椛「好きな人がいるのはいいですね」

叶「私もパパが好き」

椛「では今回はここまで。では次回もお楽しみに」

麻帆良祭の始まり始まり（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「始まったわよ」

シャ「今回から麻帆良祭ね」

ア「今回は軽くやる気がないそうよ」

シャ「なんで？」

ア「バレンタインだから」

シャ「あー」

ア「では前回のあらすじ
・感想１０００件
・海人様とのコラボ
・頭の痛い飛翔くん
くらいかしら？」

シャ「それにしてもバレンタインでやる気がないってね」

ア「二次元にしか嫁がいない男の末路ね」

椛「狗符『レイビーズバイト』！！」

アリシャ「「前書きに来ない、ぎゃあぁぁぁぁ！？」」

椛「雨季さんを馬鹿にするからです。では本編どうぞ」

麻帆良祭の始まり始まり

要ｓｉｄｅ

今日からか。変な出来事が起こらなきゃいいんだが。

「望むだけ無駄か」

俺がいる時点でトラブルが起こりますよと言ってるようなもんだ。

「じゃあ行くか」

今日は木乃香達と回るって決めたからな。回るといっても見回りの事だぞ。麻帆良のバカップル、はいいが、告白しようとしてるのを殲滅しないとな。

木乃香ｓｉｄｅ

「これはうちらにとってはチャンスや」

「要さんにええとこ見せれば評価上がるしね」

「コスプレ大会のエントリー取り消そうかな」

千雨ちゃん、楽しみにしとる人かておるんやから参加せなかんで。
うちはただ千雨ちゃんの生コスを見たいだけなんやけどね。

「午前中はうちはクラスの手伝いやから」

「せっちゃん頑張ってな」

「私は午後からなんだよな。ロボットで身代わり出来るかな？」

「「無理やろ」」

元茶々丸さんクラスのロボットでもないとバレるで。

「要兄ちゃん！！」

「来たか。じゃあ行くぞ」

千雨ちゃんがいるとはいえ、要兄ちゃんとほぼデートなんやよな。
よくよく考えたら初めてやな、こういうの。

「しかしこのセンサー、どういう構造だ？」

兄ちゃんが持っとるんは、告白探知機とかそんな感じのもん。確かに構造が気になるなぁ。

「ん～、私の想像で良ければ」

「わかるん？」

「いくら強大な魔力を持つ世界樹でも準備は必要なんだと思う。告白しようとする人間の何かを察知して魔力を集め、告白したら成功させる。つまりそれは世界樹の固有魔力の高まりを探る機械なんだと思う」

「「ほー」」

正直ようわからんかった。でも魔力を探知する機械っちゅう事は理解出来たわ。それを考える人も凄いけど、一瞬で考察した千雨ちゃんも凄いわ。

「あ、早速反応あり」

「あの、一条先生。いいですか？」

「おう？」

突然兄ちゃんに話し掛けてきたんはウルスラの制服着た女の人。なんや嫌な予感する。

「ちょっと話があるみたいだからお前達は待っててくれ」

「「はい」」

兄ちゃんと女の人は行ってもうた。

「……千雨ちゃん」

「……わかってる。ついてくぞ」

人がいない建物の裏、そこに二人がいた。

「で、何の用かな？」

「……」

間違いなくこの雰囲気、告白やろ。兄ちゃんは何で止めんのやろ？
兄ちゃんが気づかんはずないし。

「黙ってたら「一条先生！！」ん？」

「好きです！！付き合って下さい！！」

（（しちゃったーー！！））

その瞬間、二人が光に包まれたように見えた。どうなってしまうんやろ。もしもの場合は殺生石の毒で。

「お断りだ」

「え？」

「お断りだ」

兄ちゃんはキッパリと、女の人の告白を切り捨てた。世界樹の効かんかったの？女の人が呆然としてる中、兄ちゃんはこっちに来た。

「行くぞ」

「あ、うん」

「なあ要さん。効かなかったのか？」

「効いたよ」

「「へ？」」

効いた？ならなんで？

「効いたけど無効にしてやった。あれは一種の暗示だからな、精神的に負けなければ対抗出来る」

「そんな軽いもんなん？」

「お前らなら耐えれんな」

それって結構強力な暗示ちゃうん？兄ちゃんの精神力は凄いなぁ。

「他にも効かなそうなのがいるがな」

「誰？」

「例えば……」

舞人ｓｉｄｅ

「舞人さん！！好きです！！」

「ありがとう。でもごめんね」

女の子はトボトボ帰っていってしまった。これで何人目だろう。朝からずっとだよ。

「モテモテですわね」

「まーちゃんもでしょ？」

しかもまーちゃんの場合男性だけでなく女性からもだし。大変だね。

「ええ、いくら効かないからといって対応に疲れますわ」

効かないっていうのは世界樹の暗示、最早呪いといっていいレベルのだけど。

「この麻帆良の植物は全て僕達の支配下にあるからね」

「世界樹もその限りではありませんしね」

それにしても告白されるのも断るのももううんざりだよ。

「いっその事、世界樹の魔力を使って人払いを」

「お客様が来なくなりますわよ」

「うっ」

この学園祭中ずっと我慢しないといけないのか。どうせなら本当に彼女作ればこなくなるかな。

「まーちゃん、彼女いた方がいいかな？」

「まーくんに見合う人がいませんわよ。それに彼女なんて出来たら」

「お父さんが何か言いそうだよね。過保護だからね」

でも本音としてはもうそろそろ彼女の一人くらいいてもいいかな。とは思ってるんだけどね。好みとしては僕の受け入れてくれる人かな。

「まあ長く待とう」

志貴ｓｉｄｅ

「志貴、次あそこ行こ！！」

「まずは向こうと言ってますよ姉様」

全くこの二人は。以前にも同じような事があった気がする。

「まずは茶々丸の仕事を見に行くんだろ？」

「「はーい」」

本当に仲がいいのか悪いのか。いやいいんだけどね。っと到着。

「いらっしゃいませ、志貴さん、アルクェイド様、マスター・エヴ

ァ」

店に入ると茶々丸が出迎えてくれたけど、呼び方がそれぞれ違うのには訳がある。マスター・〇〇っていうのは長いから駄目って俺とアルクェイドが言って、次は様付けだったけど翡翠を思い出しちゃったから、俺はさん付けにしてもらった。

「こちらです」

今更茶々丸の働きを見る必要はないんだけど、ここは美味しいからな。

「ご注文はいかが致しましょう？」

「俺は、今日のオススメで」

「じゃあ私は茶々丸のオススメね」

「私もそうします」

「二人共、そんなのメニューに「了解しました」悪いな、茶々丸」

「いえ」

この二人の無茶振りはどうにかしないとな。

「今頃みんな回ったり仕事したりしてるのかしら？」

「でしょうね」

クラトスｓｉｄｅ

私は真名がいる建物の屋上に来た。

「順調か？」

「クラトスおじさんか。問題ないよ」

「そうか。差し入れだ」

「ありがとう」

コンビニで買ってきたおにぎりとお茶を渡す。真名はその間もライフルのスコープを覗いていた。

「……」

パンッ

「やったか？」

「問題なく」

告白しようとする人間を高い所から狙撃して阻止する。効率がいいな。私など近くにいないと気絶させれないのにな。遠距離技を持っていないのは大抵そうだろうが。

「そういえば要さんが告白されたよ」

「無事だったのか？」

「効果なし。おかしな人だよ。それに狙撃しようとしたら止められたし」

効かない人間もいるという事か。それとも要が効かないというだけか？どちらににしろ要に告白したのは運が悪かったな。

「おじさんも屋台とかを回ったらどうだい？」

「なら真名こそ回るべきだな。学生なのだから」

「報酬があるからね」

「私もだ」

結局どちらも傭兵の頃の癖が抜けていないという事だな。

「では見回りに戻ろう」

「頑張って」

「ああ」

祭りは長い。報酬もそれなりに出ているのだから気合いを入れてやらないとな。

麻帆良祭の始まり始まり（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「あれ？椛お姉ちゃんは？」

椛「ただいま」

叶「お帰りなさい。どこにいたの？」

椛「ちょっと、ね。さて今回の楽屋は鏡さんです」

叶「お邪魔しまーす！！」

鏡「よく来たの。ほれ、羊羹があるぞ。煎餅がいいか？それとも饅頭か？」

叶「現代っ子向けじゃないね」

椛「私は好きですよ。では鏡さん。主人公よりカリスマがあって万能で性格もなかなか良くて、あれ？こいつが主人公じゃね？と雨季さんまでが言ってましたが」

鏡「儂は儂らしく生きとるだけじゃ。それがどう評価されようと儂は気にせんよ」

叶「好感度アップだね」

椛「流石ですね。では次回もお楽しみに」

学園祭の始まり始まり・裏（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「作者がこれ考えてる時が一番面倒なんだって」

シャ「でも消えないわよ！！」

ア「前回のあらすじは
・要の精神パネェ
・茶々丸のオススメで頼む
・クラトス＆真名が一番普通？」

シャ「さっぱりわからないわね」

ア「でもこんな感じよね」

シャ「さあ本編スタートするわよ」

ア「こんなに謙虚なのに面倒なんて。まあいいわ、どうぞ」

シャ「あ、今回いろいろとおかしな事になってるから覚悟して見てね。覚悟出来てなくて見たら大変よ」

学園祭の始まり始まり・裏

近右衛門ｓｉｄｅ

図書館島の地下。彼の部屋の前に儂は来ておった。

「アルくん、おるかの？」

「おや学園長。今はクウネル・サンダースでお願いしますよ」

「儂らしかおらんのじゃからアルビオレ・イマで良いじゃろ」

「ではそうしましょうか。それで、何かご用で？」

「まほら武道会、出なくてよいぞ」

アルくんはそれを聞いて驚いた顔をした。何故自分が出ようとしているのがわかったか、といった感じかの。

「お断りです。ネギくんが気になりますし、何よりあんなに面白そうな人々の人生を収集出来るかもしれませんから」

人生の収集。人の趣味に口を出すつもりはないが、あの方達にそんな事をしたらどうなるか。

「お主では何も出来ずに負けるぞ」

「負ける、ですか。確かに一条要やクラトス・アウリオンはラカンに勝ったと聞きました。志貴さん達の強さも理解しているつもりで

す。ですがそう簡単に負けるつもりなど」

「なら一条要の弟子である儂を倒せたら許可しよう」

「……何故そこまで私を出したくないのですか？」

「何でじゃろな」

本音を言えばアルくんと学園のためなんじゃがな。アルくんが何か策を弄して倒されないようにしたら、クラトスくんや志貴殿はともかく、師匠なら問答無用にそれを破壊しようとする可能性が。そうなったら学園崩壊の危機。儂そんなの嫌じゃ。

「まあこの学園の主の力も知りたかったですしね」

「そうかそうか。では行くぞ」

儂は自身にとある魔法を掛ける。普段はまず使わないとある魔法。

「！？　若返り！？」

「その通り。生涯現役。これなら文字通りそれが可能だからな」

「口調も変わってますね」

「若い時ぐらいは若い口調でも構わねえだろ？」

思考は年寄りのままなんじゃがな。ちなみに今は大体２５歳。綺麗な黒髪短髪の美青年じゃ。自分で言うと説得力ないの。まあそんなのはどうでもいいんじゃ。

「金剛、久しぶりに行くぜ。セットアップ」

《イエス、ボス。セットアップ》

「それは、一条要達が使ってるデバイスとかいうものでしたか」

「便利だぜ。昔は戦闘。今は書類整理にな」

儂のバリアジャケットは黒を基調とした軽鎧。武器はトンファーである。昔は知らなかったが、これはすずか様が造った試作品だそうじゃ。

「関東最強の魔法使いがトンファー使いでもあったとは」

「最強、ねぇ。師匠曰く、俺は魔法の才よりトンファーの才の方があるらしい。年取ってからだな、魔法の方が強くなったのは」

「まあ体と違って魔法は衰えませんしね」

「日々進化だからな」

「流石に進化というレベルでは」

細かい事を気にするでない。そんなだからいつまで経っても引きこもりなんじゃ。

「失礼な事考えませんでした？」

「気になるか？」

「気になりますが、聞きません」

「そうかい」

儂は構えて一気に突っ込む。アルくんは防壁を張ってそれを防いだ。

じゃが甘いよ。

「爆」

《エクスプロード》

ドガン

「なっ!?障壁が!!」

「うらぁっ!!」

「ぐっ!?」

障壁に触れていたトンファーが爆発を起こし、障壁を破壊した。そこでアルくんに一撃を入れた。

「やりますね」

「この程度じゃないぜ」

「そうですか。では私も」

体に重力がのしかかる。何倍じゃろうな。まあ動けるから関係ない

か。さて、どんな手で攻めるかの。せっかく若いのじゃから。

「ごり押しだ!!」

「ならば重力を追「おせぇ!!!」ぬっ?」

トンファーで障壁を破壊。そしてトンファーの先をアルくんの腹に押し付ける。

《シュート》

「がっ!?」

トンファーの先から出た魔力弾がアルくんに突き刺さった。トンファーから射撃を出せるとは考えていなかったのじゃろう。

「どうした?動きが鈍いぞ?」

「そう……ですね。何をしました?」

「手品は種を明かしたらいけないんだぜ」

まあ簡単な事なんじゃけどな。毒を撒き散らしていただけじゃ。対魔法使い用の毒じゃから魔法とか気じゃどうしようもないんじゃがな。

「人間弱いから頭を使わないとな」

「頭を使いすぎて…学園長のような、頭部にはなりたくない……ですね」

「ハハハ……」

それは、嫌じゃの。しかしあれは頭を使いすぎてなった訳じゃないんじゃが。

「それじゃあ締めだ」

「年寄りにしては、せっかちです、ね」

「人生短いんだ。のんびりしてるとすぐ死ぬぜ」

どんな技にしようかの。大技叩き込むとするかの。

「いつでもいいぜ」

「お、ナギになったか」

悪くない選択肢じゃな。

「行くぜじーさん！！」

「では！！」

互いに走り出す。儂はトンファーを振りかぶり、ナギとなったアルくんは拳を振りかぶった。

「檻」

《ケージバインド》

「!?　てめぇ!!」

そこで儂はケージバインドを使ってアルくんを閉じ込めた。いくらナギになっておろうとも、儂のケージバインドはそうそう破れんぞ。

「頭を使えよ。爆」

《エクスプロード》

「ぐあぁぁぁぁぁぁ!?」

ケージバインドを内部から爆発させた。これは効いたじゃろ。さて、戻るとするか。

「はぁ、はぁ」

「ほっほっほ、儂は魔法の才よりトンファーの才、それ以上にずる賢いと言われておったわい」

「その、ようですね」

「ではお主の参加は無しという事で」

久しぶりに運動したから疲れたわい。年寄りが無茶するもんじゃないの。

超ｓｉｄｅ

麻帆良のとある場所。そこで私はモニターを見ていた。

「……は？」

要先生が告白された映像を見たけど、世界樹のあれを耐えた？人間としておかしい、いや、あの人の中には化け物が住んでたカ。

「さて、どうするカ」

まほら武道会も要先生の関係者が残るだろう。ネギ・スプリングフィールドは決勝に行けないかもしれない。

「全部の計画も成功率低そうだしネ」

鬼神を出した所で無意味だろう。やるなら今のうちに全員を捕縛……無理だ。どう頑張った所で出来やしない。

「今は彼らが暴れない事を祈るだけネ」

モニターを切り、その場から離れようとした時、再びモニターが点いた。

『ハロー』

「一条……すずか！？」

『何でモニターに映ってるって感じの顔だね。この程度ならハッキングくらい出来るよ』

不覚。あちらの科学力を舐めていた。まさかこちらの機器をハッキング出来るレベルだったとは。

『貴女、違う時代から来たでしょ』

「！？」

『あ、当たっちゃった』

「鎌掛けたのネ」

表情に出してしまうなんて情けない。

「それで、どうするつもりカ？」

『別に。言いたい事があるけどね』

「何ネ」

『貴女がどういうつもりでこの世界に来たかは知らない。でもね、歴史っていうのはその時代の人間によって作られないと駄目なの。それがどんな結果になろうともね』

「その結果によって理不尽なものを押し付けられた人はどうするネ

！！泣き寝入りしろと！？」

『自分の力で何とかなさい！！！』

「っ！？」

『理不尽なものを押し付けられたなら、それは過去を見るのではなく未来を見て解決策を見出しなさい！！過去に責任を押し付け、改変しようとする貴女はただの弱虫よ！！』

『それにね、過去を変えても意味はないよ』

次にモニターに映ったのは一条なのは。過去を変えても意味がない？

「なんでそんな事言えるネ」

『貴女が過去を変えても別の世界が新たに出来るだけ。並行世界、貴女ならわかるでしょう？』

並行世界、パラレルワールド。いろいろな呼び方があるけど、あらゆる分岐点から派生する世界をそう呼ぶ。

「でもそんなもの」

『あるよ。私達がその住民だからね』

そんな……だとしたら私のしている事は。

「本当に、無意味？」

『残念だけどね。八つ当たりにしかならないよ』

「ならどうするネ。私のしてきた事に意味がなくなってしまった」

『そうかもしれない。だけど貴女だから出来る事もあるはずだよ。これだけの技術を持っている貴女なら』

無理だ。だからこの時代にやってきたのだ。歴史改変のために。

『貴女、仲間はいる？』

「仲間？」

『うん。一人じゃ何も出来なくても、仲間がいれば出来る事だってある』

『そうだよ。貴女の考えに共感してくれる人だっているはずだから』

「……そうネ。頑張ってみるヨ」

『じゃあ本題だけど』

ズコー

『す、すずかちゃん？』

「今のが本題じゃないのカ？」

『そんな訳ないじゃない。で、貴女のデータから見つけたこれだけど』

モニターに映し出されたのは私達が造った鬼神のデータ。

「これが？」

『しょぼい』

ガーン

一生懸命造ったこれが、しょぼい？そんな一言で片付けられるなんて。

『なのでこれを差し上げます』

次に映し出されたのは様々なロボットのデータ。って何これ！？

『これで学園祭を「これで未来が救えるネ！！！」はい？』

「ありがとう！！助かったヨ！！」

このロボット達は凄いネ！！このイデ○ンとかゲッ○ーロボとか○オライマーとか。というか個人が何故こんなものを？

「まあいいネ。持ち帰らせてもらうヨ？」

『うん』（まさかこんなに喜ばれるとは）

さあ学園祭楽しむヨ！！

学園祭の始まり始まり・裏（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「意外すぎる本編！！」

椛「学園長先生が若くなったり、未来がロボットで救われたり」

叶「チー済まクオリティだね」

椛「今回の楽屋は神様ことゼウスさんです」

叶「……」

椛「あれ？入らないの？」

叶「中からあはんとからめぇとか」

椛「ちょっと向こう向いててね」

ガチャ

椛「何してるんですか！！」

サオリ「キャッ！？」

ゼウス「今ヤッてるんだけど」

椛「今日は楽屋訪問と言ったでしょう！！」

ゼウス「そうだったね、ゴメンゴメン。片付けるね」

サオリ「じゃあ私は」

椛「そのままで構いませんよ。それより片付けて下さい」

椛「では改めて」

叶「お邪魔しまーす！！」

ゼウス「いらっしゃい」

サオリ「どうも」

椛「サオリさんは霊亀様の所の天使で、ゼウスさんの恋人です」

ゼウス「僕としては早く結婚したいんだけどね」

サオリ「けけ、結婚！？」

叶「神様には奥さんいないの？」

ゼウス「あー、いいんだよ。要くんだって重婚だし妻でもない人と子供いるじゃん」

叶「だね」

椛「さてゼウスさん、サオリさん、最近どうですか？」

ゼウス「春」

サオリ「幸せです」

叶「子作り頑張ってね」

サオリ「ちょっ、叶ちゃん!?」

ゼウス「頑張るよ」

椛「では次回もお楽しみに」

こちらコスプレ会場（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「我が世の春が来たーーー！！」

シャ「なんと今回！！私達出ます！！」

ア「他の作品の後書きをにも出てるし、人気、知名度共に上がってきたわね」

シャ「じゃああらすじよ。
・学園長つえぇ
・すずかのお悩み相談室
・超（チャオ）ハイテンション」

ア「人生って素晴らしい」

シャ「このまま他作品の後書きを奪いまくって」

ア「楽しみだわ。では本編スタート」

こちらコスプレ会場

千雨ｓｉｄｅ

警備を抜けてコスプレ会場に来たけど、まあ学生なんだ。構わないよな。

「しかし客が多いな。非公式なのに集まる場所には集まるな」

折角の祭りなんだから楽しむのはいい事なんだけどな。昔の私ならこんな事考えなかっただろうな。にしても暇だ。ちょっと会場を歩いて回るか。

「あ、長谷川さん！！」

「千雨のねーちゃんもおったんか」

微妙なのに見つかったな。ちょっと話題をずらしてやるか。

「どうもネギ先生、小太郎。小太郎、最近どうだ？」

「いい感じや」

小太郎は鏡さんの所でメキメキと力を付けてるからな。最近はどんな技を習得したんだろな。

「小太郎くん、何の事？」

「修行や、修行」

「修行なら僕だってやってるよ」

ガキンチョ、同じ修行でもやってると思ってるのか？エヴァンジェリンさんがガキンチョにやってる修行はお遊び。鏡さんが小太郎にやってるのは……あ、確か遊びって言ってたなあの人。でも鏡さんは強くする遊びとか言ってたし。

「どうしたんですか？」

「人の考えはよくわからんな、と思ってさ」

「ねーちゃんの考えもわからんで」

「気にすんな。あんまり変なのに絡まれないようにしろよ」

あいつらがいるとなると、他にもいろいろいそうだな。

「要さん？」

「千雨か」

「千雨お姉ちゃんだ！！こんにちは！！」

「はいこんにちは。叶はいつも元気だな」

「うん！！」

この親子何してるんだ？要さん警備があるだろうに。まあ子煩悩なこの人にはちっちゃな事だろうけど。

「叶がどうしても出たいって言ってな」

「えへへ」

いや、確かに年齢制限なんてないけどさ。

「んで心配だから俺がいるんだ」

「最強のボディガードだな」

とりあえず叶に関して問題はないみたいだな。いろんな意味で問題だけど。

「あと楔と鏡も出るぞ」

おいおい、大丈夫かよ。楔さんは危ない方向へ向かいそうだし、鏡さんなんて変装とかコスプレじゃなくて変身だろ。

「お姉ちゃんも頑張ってね！！」

「年期の違いを見せてやるよ」

私が負ける訳にはいかない。初心者に負けたらネットアイドルの立場がないからな。早速準備室に戻って衣装準備だ。

「これでいいかな」

無難に格ゲーキャラで攻めてみる事にしたけど、他のがどうなるか。順番が最後なのは有り難いな。

「始まりましたコスプレフェスティバル！！まず始めはアリシャのお二人で、あ、はい。主催者（作者）権限でボッシュートです！！」

「「ちょ、まだ、あーーーーーー！！！」」

……これは仕方ないな。どこの誰か知らないけど、仕方ない。

「では改めて始めは……」

そこからしばらくいろいろな参加者が出てきた。お遊びみたいのもいれば、クオリティが高いのもいる。

「お次は一条要先生の妹さん、一条楔さんです！！」

お、楔さんか。どんな犯罪的姿で登場するのかな。

「はーい♪♪♪」

「ブハッ!?」

『うおーーー!!』

まさか、まさかスモッグでくるとは!!まさに犯罪!!ＡＶに出てろ!!

「これは審査員票も高い!!最早審査員は服よりも顔と体で選んでいるようにしか見えない!!」

まあ、実際そういう風にしか見えないよな。審査員が男ばっかりだし。

「お次は一条要先生の双子の弟さん、一条鏡先生だ!!」

「へぇ」

鏡さんの格好は風来のシ○ンのシレ○だ。普通にコスプレしているのが意外だった。

「なかなかのクオリティの高さ。票も高いですね」

あれは普通にいいからな。まあ優勝とかいうレベルでもないけどな。

それから何人か出てあと二人。残ってるのは私と叶か。

「さあお次は最年少、神条叶ちゃんです！！」

子供らしい可愛いのでくるだろうとか考えていたんだが、予想外にもほどがある格好だった。服や髪はいつも通り。ただ違うのは、ダンボールに『ＧＵＮＤＡＭ』というのを着ているだけの姿。

「箱ガン○ムだーーー！！！」

『うおーーー！！！！』

何故会場はここまで盛り上がるし。そこまで幼女が好きか貴様ら！！変更だ変更！！衣装替えだ！！

「貴様ら！！」

「あ、長谷川千雨さん、まだ」

「このロリコンどもめ！！」

「べ○子だーーー！！」

『わーーーー！！！』

非常に有耶無耶になった感じは否めないが、楽しかったんじゃないの。それと優勝は私と叶だった。

こちらコスプレ会場（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「一番！！」

椛「おめでとう」

叶「えへへ」

椛「今回の楽屋は木乃香さんと刹那さん、千雨さんですね」

叶「お邪魔しまーす」

木乃香「いらっしゃい」

刹那「ポリポリ……」

千雨「ポリポリ……」

叶「なんで一本のポッキーを両端から食べてるの？」

椛「お二人がそういう関係だったとは」

刹那「ちゃうちゃう！！」

千雨「罰ゲームなんだよ！！」

木乃香「ちゃんと動画に撮ったるで」

刹那・千雨「「何ですと!?」」

叶「私もポッキー食べる!!」

木乃香「はい」

椛「さて皆さん、今の待遇はどうですか?」

木乃香「なんでのどかちゃん達はRな事やっとんのにうちらは駄目なんやろ」

刹那「相手の問題やない?うちは今の待遇でも問題ないで」

千雨「今回は私の話だったしな。満足だぞ」

椛「成る程」

叶「そういえば次回からは１００万アクセス記念企画だよね」

椛「大コラボ祭りですね。本編の滞りが凄まじくなります」

叶「でも楽しいよ」

椛「楽屋訪問もゲストの楽屋になりますしね」

叶「じゃあお楽しみに!!」

１００万アクセス記念企画　第一回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

雨「出てけ」

アリシャ「「いきなり！？」」

雨「冗談だ」

ア「何よいきなり」

シャ「驚いたわよ」

ア「とりあえず、いつも通りあらすじね。
・コスプレ大会
・箱ガ○ダム
・このロリコンどもめ！！」

雨「我ながら酷い話を書いたもんだ」

シャ「自重しなさいよ」

雨「うちはギャグだ。読者は自重など求めていない」

ア「何よそれ」

シャ「ではコラボ祭り、始めは海人様。どうぞ」

１００万アクセス記念企画　第一回

要ｓｉｄｅ

ある日、仕事が終わって家に帰ると飛翔とその妻のアリサ、娘の鈴音がいた。

「邪魔してるぞ」

「気にすんな。で、今日は？」

「この二人に格闘を教えてやってくれないか？」

アリサと鈴音にか。この二人って出来なかったのか？まあそんなのどうでもいいか。

「お前の頼みならしょうがないな。飛翔は久遠の相手でもしてくれ」

「いいぞ。よろしくな、久遠」

「うん！」

さて、どうやって鍛えてやるかな。

アリサｓｉｄｅ

飛翔が突然特訓しようって言った時にはちょっと驚いたけど、気にしたら負けかな。

「しかし要か」

「キツいと聞きましたけど」

キツいか。飛翔もそんな事言ってたっけ？なのにわざわざ要に頼むなんて信頼してるって事かしら。

「さあやるぞ」

「？　準備とかしないの？」

「そうだな。軽く体をあったためるか」

やり始めたのは本当に軽い運動。ストレッチをやって、軽く走り込むって感じ。

「もういいか？」

「何するのよ」

「組み手。悪い所は俺が指導する。あ、生身でやれよ」

普通ね。女性には優しいのかしら。飛翔のようなのを覚悟してたから拍子抜けというか。

「行きます」

鈴音が攻撃しようと殴り掛かったら投げ捨てられた。そして要は倒れている鈴音の顔目掛けて足を振り落とした。

「くっ！？」

鈴音は顔を動かして避けたけど、今の寸止めする様子が一切なかったわよね。どういうつもりなのよ。

「やっぱり実戦形式が一番だよな」

実戦形式って。生きるか死ぬかじゃない。

飛翔ｓｉｄｅ

あいつら大丈夫かな。要の奴容赦しないからな。

「チェックメイト」

「……あ」

「あやや～、次の手がありませんね」

久遠がやりたかったらしいチェスをやってたんだが、久遠がルールを覚えてからは完全に勝てなくなった。

「では次は私ですよ」

「わかった」

途中から参加している文には簡単に勝てるんだけどな。

「久遠は何手先まで考えてるんだよ」

「ん～、１６００通りくらい？」

ちょっと待て、手じゃなくて通りだと？つまり先を読んでるんじゃなくて決定しているルートを歩いているだけなのか？

「凄いな」

「えっへん」

久遠ならそのパターンから外れても混乱する事はないだろう。策士としてこれ以上の人材はないだろう。

「っと、チェックメイト」

「また負けた……」

「文頑張って」

俺も久遠に勝てるように頑張ろう。

鈴音ｓｉｄｅ

私達は何を習いに来たんだっけ？そう思ってしまうくらい要さんの指導は滅茶苦茶だった。

「ほら！！」

「石投げるな！！格闘教えなさい！！」

「格闘だ？実戦において型に嵌った技が使えると思ってんのか！！」

確かにそうかもしれない。さっきからいろいろな場所に連れられて戦っている。踏ん張りの効かない沼地。障害物だらけの森。狭い足場の大樹の枝。どれも普通にやっていては戦う事すら難しい。しかも要さんはその場にあるものを使って攻撃したりする。

「あんた何考えてるのよ！！」

「お前らを鍛える事」

「殺す気でしょう！！」

「そうしないと強くなれんぞ！！」

とにかく、要さんを倒して終わらせよう。

「フッ！！」

「見え見えだぞ」

脚払いをしようとしたら跳んで避けられ、脚を踏み潰されそうになった。

「セイッ！！」

「おっと」

「鈴音、大丈夫？」

「はい」

危なかった。助けてもらわなければ脚をやられていた。

「そろそろ場所変えるか」

「「また！？」」

「アリストテレス」

《ほどほどに》

今度は一面が白い。濃霧ですか。

「さあさあ、油断すると危ないぞ」

油断しなくても貴方は危ないです。

飛翔ｓｉｄｅ

要から終わったと連絡があったので別荘に入ってみると、ボロボロになったアリサと鈴音がいた。

「大丈夫か？」

「……なんとか」

「……きつかったです」

一体何をされたんだろうな。要だからろくな事じゃないかもしれない。この二人はよく頑張ったんだろう。

「二人共成長したぜ。主に、ゲリラ戦」

「何故に！？」

俺が頼んだのって格闘戦だよな！？いつの間にゲリラ戦なんてとんでもないもん使えるようになっちゃってんの！？

「普通に格闘戦も成長したから安心してくれ」

「安心できねえよ」

明日は二人共しっかり休ませよう。そうしよう。

「また来いよ」

「来るが、訓練は遠慮しとく」

「えーーー」

頼むからうちの家族を魔改造しないでくれ。

１００万アクセス記念企画　第一回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「サバイバル！！」

椛「今回からしばらくゲストの楽屋にお邪魔します」

叶「楽しみだね」

椛「そうね」

叶「じゃあ、お邪魔しまーす！！」

飛翔「いらっしゃい」

アリサ「本当に要そっくりね」

叶「娘だもん」

鈴音「可愛いね」

叶「えへへ」

椛「さて、チートじゃ済まないの良心とされる飛翔ファミリーですが、最近のこの世界はどうですか？」

飛翔「変わらず滅茶苦茶だな。もちろんいい意味でだ」

アリサ「突然お邪魔したのに何も言わないでお茶が出たしね」

鈴音「私達も慣れてしまっていますが」

叶「アリサお姉ちゃんはアリシャをどう思う？」

アリサ「関わったら巻き込まれるもの」

椛「自分にも容赦ありませんね。次回は秋代様とのコラボ。次回もお楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第二回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「始まるよー」

シャ「先に一言。私達を出したい人は許可なんていらないから出していいわよ」

ア「主人公すら食ってやるわ」

シャ「本編において最高の働きをするわよ」

ア「ではあらすじ
・大人気、要の苦行
・アリサと鈴音のサバイバルスキルが上がった
・久遠すげぇ！！」

シャ「要くんの修行は毎度毎度人気ね」

ア「ドMが多いのかしら？」

シャ「次回もそれらしいしね」

ア「今回は秋代様の作品とのコラボよ。本編どうぞ」

１００万アクセス記念企画　第二回

要ｓｉｄｅ

「何用だ。アキラ、ｓｉｘ」

「大丈夫かな、って」

「ほれ見た事か。この男ならなんら問題ない」

現状を説明しよう。アキラ・シュヴァイアーとｔｈｅ　ｄａｒｋ　ｓｉｘが突然家に来た。以上。

「こないだ異世界に飛ばしちゃったからさ」

「有り難い事に以前いた世界の並行世界だったからな。生きていくのに問題はなかったよ」

「そっか」

……どうせ来たんだから何かしてやりたいな。毎度毎度顔を合わせれば殺し合いだしな。

『なのは』

『なぁに？』

『……って事をしたいんだが』

『うん分かった。なら私達は……するね』

これでよし。くくく、今日は振り回させてもらうぞ。

「よしアキラ、遊びに行くぞ」

「え？」

「む、勝手に連れて「ｓｉｘさんはこっち来て」待て、離さないか」

「来・な・さ・い」

「……」

おぉ、あいつを黙らせた。主婦の強さを再確認した。

アキラｓｉｄｅ

いきなり連れ出されてしまったけど、何処へ行くんだ？

「着いた」

「……待って要。此処って、その」

「ご覧の通り、ランジェリーショップだ」

何で!?普通は女の人が来る場所でしょ!?男二人で来るような場所じゃないよね!?

「お前知らないのか?最近は男性用もちゃんとあるんだぞ」

「え?そうなの?」

「まあ今回は完全に女性用だけど」

「だよね」

どう見ても男が入るような見た目の店じゃないもんね。

「何でこんな所に平然と来るの!?変態なの!?」

「なのは達に連れられてこの手の店は慣れてな。それに今回はお前のためだぞ」

「僕の?」

「お前ってｓｉｘにプレゼントしないだろ。だからそのプレゼント選びを手伝ってやろうと」

「嬉しいけど、下着じゃなくてもいいと思う」

「分かってる今回はお前の反応を見たかっただけだから」

そう言って要は隣の服屋に入っていった。僕、遊ばれただけ？

ｓｉｘｓｉｄｅ

何故妾がこんな事を。

「ほら集中する！！ダマになるよ！！」

「う……」

今妾は菓子作りをやらされている。やる気はなかったのだが、アキラのためと言われてしまったら。

「女性なら料理の一つぐらい作れないと」

「だがアキラの主食は妾の血で」

「そんなもので心は満たされません。好きな人には愛情籠もった料理を食べさせるものです」

こんな小娘達にこの妾が説教されるとは。しかも何やら逆らいがた

い威圧感を感じる。

「生地は、まあ及第点だな。次は生地を伸ばして平らに均さないとな」

「こうか？」

「ペラッペラにするな！！」

バチコーン

くっ、こんな見た目幼女に叩かれるとは。平らに均せと言ったのはそちらであろう。

「ペラペラなクッキーはないでしょう？こうやってある程度の厚みを持たせるんですよ」

「……クッキーだったのか」

「気づいてなかったんですね。言うべきでした」

あの焼き菓子はこのように作るものだったのか。このようなものがあれになるのだな。

「あとは型で抜いて焼くだけです」

「そうか。ようやく終わるのだな」

「プレーンクッキーなんて簡単な分類なのに」

これで、簡単？料理人という職業はこれ以上のものを容易くこなしているのか。人間も侮れん。

「じゃあ次は」

「まだ作るのか！？」

これ以上やれば精神が擦り切れそうだ。

アキラｓｉｄｅ

「……疲れた」

「お前な、プレゼント買うくらいで疲れるなよ」

「あのさ、あんな店行くの始めてなんだから」

「慣れろ。いつ彼女と来るかわからんぞ」

ｓｉｘは間違いなく来ないと思うけどな。あんな女性服の専門店的な所。

「ウダウダ言ってるとランジェリーショップに連れてくぞ」

「勘弁してよ」

「なら帰るぞ。そろそろ終わってるたずだし」

終わってる?何がだろう。今日の要を見る限りろくでもない事な気もするんだけど。

「さあ待ってるはずだ」

「誰がだよ」

「行けばわかる」

要の家に行くとｓｉｘが出迎えてくれた。だけどｓｉｘもなんだか疲れているようだ。肉体的にじゃなくて今の僕みたいに精神的に。

「ｓｉｘ、どうしたの?」

「アキラこそ」

「まあ、いろいろと」

「妾もだ」

大変だったんだなお互い。

「ほらｓｉｘさん、あれ」

「いや待て！！あれを渡すのか！？」

「せっかく作ったんだから」

「何か作ったの？」

「あ、いや……その」

Ｓｉｘにしては歯切れが悪いな。気になる。

「アキラ！！」

「うん？」

「……これをやる」

Ｓｉｘから渡されたのは、黒い……塊？

「……なのは、クッキーの予定では？」

「にゃはは、焼いてる間に他の事やってたら」

「タイマーは？」

「忘れてました」

「しっかりしろよ。初心者に料理を教えるんだから」

あぁ、クッキーだったんだ。今までの会話を聞く限りｓｉｘがこれを作ったのかな。

「……パクッ」

「あ……」

苦い。中まで焦げてる。だけど……

「ｓｉｘの気持ちは伝わったよ」

「……そうか」

「こっちもお返ししないとな」

「言われなくてもわかってるよ。はい、ｓｉｘ」

「これは？」

「服だよ」

選んだのは白いワンピース。ｓｉｘは普段黒いのを着てるからたまには対象的な白もいいかなと思って。

「別にこのような物」

「貰ってやれよ。アキラが一生懸命選んだんだから」

「いらぬとは言っていない」

「ツンデレツンデレ～」

「五月蝿いぞ一条」

『ツンデレツンデレ～』

「一家で言うな！！」

今日は僕らがいろいろとやられちゃったな。普段は戦いしかしないけど、たまにはこんな事があってもいいかな。毎回は困るけどね。

１００万アクセス記念企画　第二回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「お料理出来ません！！」

椛「収録終わったら教えてあげるね」

叶「わーい！！」

椛「今日の楽屋はアキラさんとｓｉｘさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

アキラ「はい、いらっしゃい」

ｓｉｘ「よく来た」

椛「ｓｉｘさんもこの収録が終わったら料理教えましょうか？」

ｓｉｘ「……頼む、白狼の娘」

叶「アキラお兄ちゃん愛されてるね」

アキラ「ハハハ、そうだね」

椛「では質問です。お二人は要さんをどう見ていますか？」

アキラ「うーん、良き友人にしてライバルかな。実は一番長い付き

合いだしね」

Ｓｉｘ「便利な変わり者だな。連れて来ても文句が出んし、アキラの練習相手としても申し分ない」

椛「要さんの異世界経験は他の人より明らかに多いですしね」

叶「パパは凄いよ！！」

アキラ「そうだね」

Ｓｉｘ「あやつの子にしてらよく出来ているのではないか？このような仕事をこなすのだから」

椛「本人が聞いたら大喜びですね」

アキラ「貶されてるように聞こえるけど」

椛「要さんは親バカだから娘が褒められたら喜ぶんです」

叶「次回は悠久なる時間様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第三回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「さあ始めるわよ」

シャ「今回は悠久なる時間様とのコラボね。なかなか難しかったそうだから何かミスがあるかもしれないわ」

ア「あらすじは
・アキラ心労
・ｓｉｘ心労
・最後は纏まった？」

シャ「普段戦いばっかりだからああなるのよ」

ア「私達みたいに余裕を持たないと。では本編スタート」

１００万アクセス記念企画　第三回

鏡（きょう）ｓｉｄｅ

うーん、今日はジュエルシード探しで寄り道したらちょっと遅くなったな。横着だけど転移して行くか。

「……あ」

急いで術式を組んだら何かをミスをしてしまったようだ。俺は制御出来ず転移してしまった。

落ちる。何処へ行くのか。陸だと有り難いんだけどな。

バキィ　ドガ　ズドン

「いてて」

何かを突き破って落下したようだ。家、かな。

「まずは言うべき事があるんじゃないか？」

「あ、すみません。って要!?」

「ダイナミックな来訪だな」

「うっ、ごめん」

要の家に落ちるなんて。しかし随分落ち着いてるよな。知り合いとはいえ人が降ってきたのに。

「一条家に常識は通用せんよ。この程度ならよくある事だ」

「普通ないよね」

「普通じゃないんだよ」

要がよくわからない。こんな事が日常なのか？

「まあいい。せっかく来たんだから何かやってけ」

何かか。どうしようかな。本来なら早く帰るべきなんだろうけど、時間はどうにかなりそうだし。

「なら修行とか」

「お前に教えれる事があるかわからんが、やるか」

要ｓｉｄｅ

別荘に入ると刹那がいた。そういえば自主練に来てたっけか。

「要さん、そちらの方は？」

「知り合い。今から修行すっから」

「そういえば要はこの前あげた神術使ってる？」

「あんまり」

俺の戦いは小手先の技術を使わない殴り合い。下手な技や道具は使うだけ邪魔になる。

「ああ、あの分身はたまに使うぞ。日常生活で便利だからな」

「戦闘で使って欲しいんだけどな」

まあ朔夜とかも空飛ぶ道具とかで日常で使ってるしな。

「じゃ、やろうか」

「何を？」

「とりあえず、俺を殺してみる？」

「……え？」

やっぱり呆然としてる。刹那は、またこの人は馬鹿な事を言って、という感じでいる。

「何で……」

「何となく。殺し合いとか苦手そうだから今のうちに慣れさせた方がいいかと」

「そんな事しなくても」

「なら試合しよう。能力無しで」

「うーん、わかった」

殺し合いはこの先あるだろうに。まあ覚悟なんて後から付いて来るからいいか。

「じゃあベネファー「待て待て」ん？」

「デバイスも使うな。完全生身でやるぞ」

《しかし要、マスターは貴方のように非常識では》

「これより常識を捨ててもらう。アリストテレス！！」

《了解。重力５倍》

別荘中の重力が5倍になり、体が重くなる。鍛えてる感じがするね。

「じゃ、やるぞ」

鏡ｓｉｄｅ

強い。あの時もそう思ったけど、ただの殴り合いとなると要の強さがよくわかる。こっちの攻撃は当たらないのに、向こうはカウンターを完璧に当ててくる。

「強いね」

「そりゃこっちに有利な条件だしな。あん時も手抜きしたしな」

「手抜き!?ＯＲＴとか出して!?」

「全力なら２００％でぶん殴るよ。ＯＲＴを出したからといって全力とは限らん」

規格外だな。あれが全力だと思ってたけど、過小評価だったようだ。

「さ、締めだ」

「やれるならやってみなよ!!」

俺は向かってきた要に合わせて蹴りを入れた。

ドカッ

「で？」

「効いてない！？」

要は俺の下腹あたりに手を当てると、重力５倍とは思えないようにクルッと回されて地面に叩き落とされた。

「ほい」

「ちょっ！？」

要は倒れている俺に向かって倒れるように肘打ちをかましてきた。なんとか転がってそれを避けた。

ズドン

「……外れた」

「殺す気か！！重力５倍でそんな事したら腹が陥没するわ！！」

「耐えろ」

「無茶言うな！！」

何で普通にあんな事やるかな。というか重力５倍すら普通はキツいどころじゃないぞ。

「あの～」

「どうした刹那」

「そちらの方と試合をさせてもらえませんか？」

この人は確かさっきから此処にいた人だよな。何気に重力5倍の中いたんだよな。

「鏡、どうだ？」

「いいけど」

「ありがとうございます」

「じゃ、アリストテレス」

《了解》

重力が元に戻る。かなり軽くなった気がするな。そりゃそうだよな。

「桜咲刹那です」

「神代鏡だよ。よろしく」

俺はデバイスのベネファーをセットアップし、刹那さんは野太刀を構える。

「セイッ！！」

「鋼神錬気」

神気を練って体を硬くし野太刀を受け止めようとしたけど、嫌な感

じがして避けた。すると野太刀が振り下ろされた所から先の地面がスッパリと斬れた。

（あれだと受けたら斬れたかもしれないな。何をした？）

「ハァッ！！」

「神爪術・風爪！！」

緑にも見える風の爪を作り、野太刀を受け止める。その時野太刀から同じような力を感じた。あの野太刀は風でも纏っているのか？

「てやっ！！」

「フッ！！」

ガキンガキン

俺は打ち合いながらも神の瞳を使って野太刀を見る。全てを見通すこの瞳の前にはどんなものだって隠せない。

「空気か」

「見破られましたか。ですが見破ったところでどうしようもありませんよ」

「それはどうかな？ベネファー」

《はい、マスター》

俺はベネファーを刀にする。やっぱり拳よりもこっちの方がいいな。

「剣技ではそうそう負けませんよ。雷鳴剣！！」

「虚空の幻影！！」

刹那さんには撃ち出した雷撃が俺に当たったように見えただろうけど、それはただの幻影。俺は後ろに回り込んでいた。

「烈仙演舞！！」

舞うような連続斬撃を叩き込んだけれども全てが避けられた。

「無駄です。空気の流れで丸見えです」

空気使いっていうのは思ったより厄介だな。

「反撃しますよ」

刹那さんはそう言うとカードを取り出した。

「空刃『無刃殺劇』」

カードが霧散し、刹那さんはあらぬ方向へと野太刀を振った。

ズバズバズバズバ

「ぐっ！？」

突然何かが俺の体を無数に切り裂いた。神の瞳で解ったんだが、刹

那さんが野太刀を振った瞬間に無数の真空の刃が同時に発生。そして俺を斬り刻もうとしたようだ。鋼神錬気を使ってなければもっと重傷だったな。

「いい技だな。刹那の技、模倣した（もらった）」

俺は傷を治してそう言った。

「？　何を」

「空刃『無刃殺劇』」

「！？」

俺が刀を振るうとさっきの刹那さんと同じ技が発動した。しかしそれが刹那さんを斬る事はなかった。

「驚きました。まさかあれが真似されるとは。ですが、空気は私のもの。空気を使った攻撃は私には効きません」

とはいえ目に見えて疲れている。やはり防ぐのはきつかったと見える。攻めるなら今か。

「アルトロッセ」

「増えた？確か要さんも使ってましたね」

「そりゃ当然だ」

「プレゼントしたのは俺だし」

アルトロッセは自分と全く同じ存在を創る術。さて、どうする？

「参りました」

「……そうなのか？」

「引き際を見誤っては生き残れません」

ちょっと消化不良な感じもするけど便利な技も手には入ったし、まあいっか。

「お疲れさん。まだまだだな刹那」

「精進します」

「なら俺は帰るな」

「おう、これ持ってけ」

要がくれたのは一つの指輪。一体どんなもの何だろう。

「いつだったかな。まあいつでもいい。それは簡単言えば魔力のサブタンクだな。周囲の魔力を勝手にかき集めて所有者の魔力が空になったら自動供給する優れものだ」

へー、確かに便利だな。でもこんなの貰っていいのか？

「俺魔力そんなに使わないし。多分それにはもうかなりの魔力が貯まってるはずだ」

「そうか。じゃあ有り難く頂くよ」

「また来いよ」

「またな」

さて、早く帰らないと。なのは達が怒るかもしれないからな。

１００万アクセス記念企画　第三回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「やるねせっちゃん！！」

椛「能力がまだ使いこなせていませんね。あれでは疲れます」

叶「そうなの？」

椛「まあ能力が使える存在しかわからないと思うけど。今日の楽屋は神代鏡さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

鏡「あ、いらっしゃい」

叶「よろしくお願いします」

鏡「よろしく」

椛「鏡さんは天界人とかいうので、見た目は自由自在。今はなのはさん達と一緒に小学校に通っている」

鏡「そうだよ」

叶「私も早く小学校行きたいな」

椛「では質問です。この世界の感想は？」

鏡「何て言うか、凄いね。いろいろ自分の考えが変わったよ」

叶「パパより強い人もいっぱい来るよ」

鏡「要以上!?そんなのいるの!?」

椛「要さんが既に神様を超えていますしね。驚くのも無理はありません」

叶「郷に入っては郷に従え、だよ」

鏡「難しい言葉知ってるね」

椛「今回はここまで。次回はぱっつぁん様とのコラボです。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第四回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「痛い……」

シャ「監督が本気で叩いた……」

ア「調子に乗ってごめんなさい。あらすじはこちら
・あらまた新しい子が
・要の虐め
・強くなったよせっちゃん」

シャ「また叩かれたくないから、早く本編始めます」

ア「ぱっつぁん様の業炎の剣帝シリーズとのコラボ。どうぞ」

１００万アクセス記念企画　第四回

ジークｓｉｄｅ

……此処は、何処だ？何もない。ただ真っ白な世界。

「こんにちわ」

「……誰だ？」

金髪の男がそこへ来た瞬間、世界に色が付き、物が現れた。どうやら何処かの職場のような場所らしい。

「神です」

「神？」

「そんな顔しないでくれよ。君を転生させた神じゃないんだからさ」

まあ確かにそうだな。俺を転生させたのはこんなに若くなかったな。

「で、その神が何の用だ？」

「君を強くしてあげようと思ってね」

「俺は今は仮死状態だぞ」

「うん。だから精神、魂に肉付けして一時的に体をあげる」

それは有り難いんだが、いきなりどうしてこんな事をするんだ？それだけが疑問だ。

「じゃあ飛ばすよ」

「は？あんたが鍛えてくれるんじゃ」

「違うよ。僕が転生させた人の所」

同じ転生者かよ。強いんだろうな。そうじゃなきゃ意味ないぞ。

「では飛んでけ」

「！？　落ちたーー！？」

要ｓｉｄｅ

「出来た」

最近料理も上達してきてグラタンも作れるようになったぞ。美味そうだ。

『要くん要くん』

「今度は誰ですか？」

『ジークくんを鍛えてね』

最早神様との会話も以心伝心レベルだな。で、ジークだっけ？また新しい奴か。そして一言言いたい。うちはいつから修行場になった。最近修行ばっかりだな。

ズドン

「あたた、此処は？」

「お前がジークとやらか。ほら水」

「すまない」

「「……」」

気のせいか？こいつどどっかで会ったような気がするんだが……関係ないか。

「さて、お前を鍛える事になった一条要だ」

「ジークフリート・D・B・ファナリストだ」

「とりあえずお前さんの能力を教えてくれないか？そうしないと教えるのが難しい」

「わかった」

成る程、真祖か。となると肉体的成長は見込めないな。技術的に成長させるか。まあ肉体が借り物だからどちらにしろ魂に技術を叩き込むしかないんだが。

「じゃあ別荘に行くぞ」

「別荘あるんだな」

「うちは何かとおかしいからな」

「自分で言うか？」

とはいえ自分でそう思ってるからな。一真の所なんて惑星だからな。そんな事はどうでもいいんだ。プランとしては、いつも通り思いつきでやるか。

ジークｓｉｄｅ

何かと充実した別荘だな。自然も多い。

「さて」

ドガッ

「ガハッ！！？」

突然要が殴りつけてきやがった。肺が破裂したのか呼吸が苦しい。

「て……め……」

「これから行うは殺し合いだ。その体は神様が作ったんだろ？なら真祖でなくともすぐ再生する」

ちっ、実際に再生してやがるからタチが悪い。真祖以上の再生力かよ。

「安心しろ。お前の心が壊れない限りは大丈夫だ」

「壊れたら終了かよ」

「俺は二度ほどそれをやったが？」

「お前、人か？」

「人を超えた自覚はあるよ。ＯＲＴ部分解放」

要の背中から異形の脚が二本出てくる。何が人を超えただ。完全にバケモノじゃないかよ。

「『両腕解放・奈落の業火』！！双腕掌握！！『神鳥神火（ホウオウガ）』！！」

闇の魔法で奈落の業火を取り込み全身を炎にする。

「そら」

「当たるか！！」

脚の攻撃を避け、俺は姿を不死鳥へと変え、上空へ飛ぶ。

「逃げんなよ」

「跳んでくるな！！」

かなりの高度だってのにひとっ跳びで来るのがいるか！！

「まず落ちるか」

「うおっ！？」

いきなり俺らの上に魔力で作られた巨大円盤が現れて押し潰してきやがった。そのまま俺らは地面まで落とされた。

「流石にこんだけデカいシールドからは逃げれんだろ」

「あのまま押し潰されるかと思ったぞ」

「それならこうするって」

またさっきの円盤、シールドが俺の左右に現れ、俺を万力のように押し潰そうとしやがった。

「だがこの程度は砕ける！！」

「だろうね」

「！？　後ろ！？」

「よっ」

シールドを破壊した瞬間に後ろに回っていた要の攻撃してきた。なんとか受け止めたが、炎になってる俺を攻撃するって。

「締めだ」

「ぐっ！？」

殴り飛ばされた俺に巨大な脚が振り下ろされる。

「諦めるか！！」

だが俺は転がってそれをなんとか避けた。

「よく避けた。そうでないとな」

「ハァ…ハァ…、これ修行か？」

「苦行だな。だが強くなれるだろうさ。そう思わないとやってけんぞ」

「……そうだな」

強くならないとな。どんな険しい道だろうと。

要ｓｉｄｅ

ほぼ一日中やっただろうか。なるべくジーク以上、しかし強すぎない程度にやるのは苦労した。

「ニードルマシンガン！！」

「見え見えだ！！」

いいね、強くなった。俺が徐々にスピードやパワーを上げても対応出来るようになってきやがった。突然手榴弾を投げようと、ミサイ

ルを撃とうと、アリストテレスとタンデムしようと落ち着いて対処しやがる。

「たった一日でよくここまで強くなったな」

「あんまり実感はないんだがな」

「そういうもんだ。さあ最後に本気の一撃を俺に叩き込んでみろ」

「ああいいぜ」

ジークが創り出したのは火の玉。かなりの熱量があるようだな。

《擬似的な太陽ですね。主、お気をつけて》

「そうかい」

ジークはそれを握り締め、右腕に力を込めた。

「いくぞ……右腕解放……『業火崩拳ＥＴＥＲＮＡＬ　ＢＵＲＳＴ！！！』」

さっきの炎が一気に解放され、そして崩拳として俺に襲いかかってくる。当たればまず蒸発、即死だろう。いいもん見せてもらったよ。

「完全武装・ＯＲＴ」

ドゴォォォォォォォォ

「な……！？」

「残念。流石にこれは貫けなかったか」

「何だよ、その姿」

全身が水晶みたいになってればそんな反応するよな。

「それはまた逢えたら話をしよう。じゃあな」

俺は欠片も残さぬようおもいっきり殴って、更に魔力放出による砲撃でジークを完全消滅させた。これで帰ったかな。さて、俺はひと眠りさせてもらおう。

１００万アクセス記念企画　第四回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「最近小学生になりました！！」

椛「業炎の剣帝シリーズとのコラボなのに剣が出てないのは気にしたら負けです」

叶「気になる。あ、負けた」

椛「今回の楽屋はジークさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

ジーク「おー、来た来た」

叶「トリックオアトリート！！」

ジーク「ハロウィンはとうの昔に終わってるが、はいクッキー」

叶「ありがとう、ジークお兄ちゃん！！」

椛「ジークさん、まずはお疲れ様です」

ジーク「本当に疲れた。最後消し飛ばされるし」

椛「並行世界では要さんと会ってるんですよね」

ジーク「みたいだな。でも俺が体験した事じゃないしな」

叶「パパ凄いでしょう」

ジーク「本当に凄いな。立派なパパだよ」

叶「えへへ」

椛「では次回は毬藻様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第五回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「コラボが多くて飽きた人」

シャ「はーい」

ア「私も」

椛「なら消えますか？貴女達が消えても作品になんら影響はないんですよ」

アリシャ「「すみませんでした！！」」

ア「ではあらすじ
・イジメ
・虐め
・苛め」

シャ「あそこで睨みを利かせている椛ちゃんが怖いので始めます」

ア「毬藻様とのコラボです。本編スタート」

１００万アクセス記念企画　第五回

要ｓｉｄｅ

「やっ！たぁ！！」

「よーし、いい感じだぞ叶」

叶の成長は早いな。子供だからってのもあるんだろうが、ジェイルの才能もあるんだろう。俺のが混ざってるからあそこまで天才じゃないが。

「そろそろ休憩だ。しっかり休めよ」

「はーい」

うかうかしてると武術の腕はすぐに抜かされそうだな。幸い貴史の娘の乱ほどおかしな性能じゃないけど。

「パパ」

「ん？」

「私、強くなってるかな？」

「ああ、十分強いよ」

「でもパパに一撃も入れてないよ」

「まだまだ叶は子供だからな。パパもそう簡単には一本をやれんのだよ」

《主、失礼します。誰かこの別荘に来るようです》

誰だよ。親子水入らずの時間を過ごしてたってのによ。場合によっては追い払うぞ。

「要、久しぶり」

来たのは流と知らんのが一人、そして突如現れたモニターにフィーナが映った。

「流か。生憎と今は親子水入らずの時間なんだが」

「お前娘がいたのか？」

「ああそうだ。叶というんだが、可愛いだろ。美しいだろ。見惚れるのも仕方ないな。だがお前にはくれてやらんぞ。絶対にだ！！」

「いやそんな事言ってないから」

でも言っておかないと狙うかもしれないじゃないか。

「で、要件は？」

「模擬戦しないか？」

「あのな、さっき言ったろ。俺らは「私パパが戦ってる所見たいな」よしやるか」

「親バカか！！」

親バカで何が悪い。この世で娘が一番だ。

流ｓｉｄｅ

要って大分親バカだったんだな。意外だった。

「それがお前のデバイスか？」

「ああ。ユニゾンデバイスのシャインだ」

「よろしくお願いします」

「ああよろしく」

前回は本気を出せなかったし、今回はおもいっきりやるか。

「シャイン」

「はい」

「「ユニゾンイン！！」」

「ふむ」

これだけじゃないぞ。

「フィーナ、頼む」

『わかったよ。時間限定解除（タイムリミットリリース）！！』

「成る程。それがお前の全力か」

「まあな」

「なら俺も力を使わせてもらうか」

要の力か。あっちも前回は全力って感じじゃなかったからな。じっくり見せてもらうかな。

「朔夜」

要はどこからともなく出したクロークを着た。

「身体能力・魔力１５０％解放。アルティメットワン発動。星の枷解除」

次の瞬間、圧倒的なまでの力の重圧を感じた。おいおい、なんだよこれ。

「やるぞ」

「……ああ」

どうやる。まともにやれば瞬殺だぞ。とりあえず小太刀を二本出したけど。

「オラッ！！」

「うあっ！？」

ミシミシ

刀で受け流すように要の蹴りを防いだけど、それだけで小太刀が悲鳴を上げている。俺もキツいし、どんな威力だよ。

「この……射抜！！」

「見えてるぞ」

最速の突き。しかしその一撃を軽く掴まれてしまった。

ミシィ

「ちっ！！」

「っと」

小太刀をへし折られそうになったが、もう片方の小太刀で要の腕を斬りつけ、何とかそれは逃れた。

「この野郎！！石化の槍、ミストルテイン！！」

かなりの魔力を込めたこれならあのアルティメットワンとやらも貫けるに違いない。だがそんな希望も容易くかき消された。

「悪いな。アルティメットワンは今のなら貫けただろうが、朔夜とマジックキラーはそう簡単にはいかん」

「何なんだよそれ」

「このクローク、朔夜は魔力攻撃を１００分の１にし、腕輪、マジックキラーは魔力攻撃を吸収する」

それだけじゃないんだけどな、とか言ってるけどそれだけでも十分脅威だよ。

「普段めったに使わない道具だが、使うと便利だな」

「使わないならくれよ」

「朔夜は魂と同化してるから無理」

「なら腕輪は？」

「勿体無いから駄目」

結局駄目じゃないか。困った。攻め手が見つからないぞ。

『シャイン、何かあるか？』

『アルカンシェルなどは？』

『要は大丈夫だろうけど、娘は？』

『無理ですね』

だよな。下手に模擬戦を挑んだのが間違いだったか。

「……どうした？」

「いや、まあ、負けた」

「そうか」

「強すぎるだろ。いくらこっちも前回より強化したからって」

「それはすまないな。娘の手前張り切ってしまった」

うん、ならしょうがないか。そういう気持ちもわからないでもないかな。親が運動会で子供の前で張り切りすぎるようなもんだろ。

「パパ」

「どうした叶」

「みっともない」

「ぐはぁっ！？」

……一撃必殺。

『流様の攻撃は一切効かなかったのに』

『攻撃より口撃ですね』

「親としては娘のあの一言は痛いんだろう」

「流お兄ちゃん、パパがごめんなさい」

「いや、気にしてないよ」

寧ろ今ぶっ倒れている要が哀れでしかない。あいつ洗濯物を分けられたりしたら死ぬんじゃねえか？

「じゃあ、帰るね。ユニゾンアウト」

『またね、叶ちゃん』

「また会いましょう」

「じゃあ後書きでね」

「『「メメタァ」』」

１００万アクセス記念企画　第五回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「パパに代わって謝ります」

椛「確かに張り切りすぎだったわね。それで叶ちゃん、その目玉みたいな生物は？」

叶「一真お兄ちゃんの所から貰ったの。デジモンのクラモンって言って、名前はクララ」

クララ「キュ？」

椛「うん、ペットの世話はちゃんとしようね」

叶「大丈夫！！」

椛「今回の楽屋は流さん、フィーナさん、シャインさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

フィーナ「ようこそ」

流「いらっしゃい」

シャイン「パフェが用意されてますよ。一緒に食べましょう」

叶「パフェだ！！そういえばパフェとサンデーってどう違うの？み

んな教えて」

流「……知ってるか？」

シャイン「さあ？」

フィーナ「気にした事もなかった」

椛「では答えれる質問にしましょう。要さんの印象は？」

流・フィーナ・シャイン「「「親バカ」」」

椛「ですよね」

流「初めて会った時は戦闘狂的なイメージだったんだが」

フィーナ「今回は、凄かった」

叶「うちのパパがごめんなさい」

流・フィーナ・シャイン「「「いえいえ」」」

椛「では今回はここまで。次回は十六夜アミナ様とのコラボです。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第六回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「スタートよ」

シャ「今回は十六夜アミナ様とのコラボね」

ア「あんまり自信がないそうだから問題があったら教えてね」

シャ「じゃあいつも通りあらすじお願い」

ア「お願いされた！！
・親ばか
・親バカ
・親馬鹿
最近台本がサボってない？」

シャ「そうね。監督さんに怒られるの私達なのに」

ア「では本編スタート」

１００万アクセス記念企画　第六回

セレナｓｉｄｅ

うーん、あの時ライトくんの所で会った要くん、理不尽だったなぁ。
ちょっと戦ってみたいかも。

「よし、行こう！！」

「セレナ、どうしたの？」

「あ、マリア。ちょっと異世界行ってくるわ」

「え？いきなり？」

「ごめんね～」

私はディアークドライバーを使って要くんのいる世界へ飛んだ。

この街にいるのは確かなんだけど、どこにいるのかしら？

「あれ？」

あそこのアイス屋さんに並んでるのってスバルとヴィータよね。ここってリリカルなのはの世界じゃないよね。もしかしたら何か知ってるかも。

「あの」

「何ですか？」

「一条要って知ってます？」

「要さんの知り合いですか？」

あ、早速当たった。

「また異世界からか。とりあえず一緒に並ぶか？」

「ここのアイス美味しいですよ」

「じゃあ一緒に並ぼうかな」

すぐに会わなきゃいけない訳でもないしね。

要ｓｉｄｅ

「マルマル、バツ、バツバツ、マル」

「要、何してるの？」

「テストの採点」

一応教師だからな。こういうのはちゃんとやらないと。まあ普段は担任であるネギ坊主がやってるんだが、たまには俺もやらないとな。

「「ただいま」」

「おうお帰り、ヴィータ、スバル。ん？そっちにいるのはセレナか」

「久しぶり、要くん」

俺とはライトの世界で会った事はあるが、俺のいる世界に来るのは初めてだな。

「普通だね」

「何がだよ」

「ほら、あの時は何かと激しかったじゃない」

「ああ、ストレス溜まってたからな」

あの時のストレスの溜まり具合は凄かったからな。胃痛になるようなタイプのストレスじゃなかったけどな。

「それで、どうしたんだ？」

「手合わせしない？」

手合わせか。最近その手の奴が多いな。別に構わないんだが。

「何か欲しいよな」

「私もアイス奢って貰ったからいいよ。確かお酒好きだったよね。これあげる」

セレナの後ろの空間が歪んで中から酒瓶が出てきた。

「ネクタルだけど」

「神の酒か」

「要さん、あんまり飲んじゃ駄目だよ」

「この一本だけだよ。シールドスライサー」

俺はシールドスライサーを出して瓶の先を切り裂いた。そしてそのまま口を付けて

ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク

一気に飲み干した。結構な度数だが、実に美味い。

「流石に美味いな。よし別荘でやるか」

「そうだね」

なんかおかしなものを見るような目でセレナが見てるが、何かおかしかったか？

セレナｓｉｄｅ

要くんは強いからな。どんな感じでやろうかな。

「とりあえず、夜桜、闇桜、セットアップ」

《《セットアップ》》

二つで一つの私のデバイス。今は双剣になっていてもらう。

「身体能力・魔力１００％解放」

おぉ、結構な魔力。さてまずは小手調べといきますか。

「魔神連牙斬！！」

地を走る斬撃を三連発。速度はそこまで速くないから避けられるかな。

「フンッ！！」

ドンッ

「震脚……」

たった一発の震脚で斬撃を消し飛ばした。地面がちょっと陥没してるよ。

「俺は小手先の技も大技も全部力でねじ伏せるタイプでな。力には自信があるぞ」

「そういえばライトくんの世界でもそうだったね」

「しかし突っ立っていいのか？そこは俺の間合いだぞ」

「おっと」

２０ｍくらいあったのに一気に詰め寄ってきた。それくらいは出来るだろうと予想してたから受け流したけど、そこから要くんは連打をしてきた。私もなんとか受け流し続けた。

「いい守りしてるな。ペースを上げようか」

「流石に、お断り！！王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）！！」

「バビロンか。ＯＲＴ部分解放」

ついに出た。要くんの背中から出る蜘蛛のような二本の巨大な脚。
それが宝具の軍勢を一瞬で薙払った。

「凄い威圧感だね。それがＯＲＴなんだね」

「そんな珍しいか？」

「普通は見ないからね」

噂には聞いた事があるけど。

「そうかそうか。触ってもいいぞ」

「それは興味ない」

「そうだろな。触ったら斬れるかもしれないし」

そんなに鋭いの？興味本位で触るようなものじゃないわね。

「続きを始めるぞ」

「うん」

「やる気はあるようだが、お前に攻め手があるか？」

ＯＲＴの間合いは広く、威力も強度もある。しかも大きい割には動きも速い。背負ってる要くん自身も速く動けて、ＯＲＴの脚の数少ない死角である零距離も要くん自身の間合い。

「やるなら、超遠距離戦」

「正解」

そう言いながら要くんはＯＲＴの脚で私を薙払った。だけどもそこに私はおらず、既にかなり離れた場所にいた。

『転移などの類ではないな。予兆がなかった』

要くんから念話が飛んできた。まあこの距離だと話せないからね。

『ちょっと此処とそこを接続したの』

『空間操作か。便利だな』

『まあね』

じゃあ攻めるよ。

「夜桜、闇桜、バスターフォルム」

《《了解》》

デバイスが艇の大砲のようになる。ついでに王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）も展開して。

「いっけー！！」

砲撃と宝具が大量に要くんのいる場所に飛んでいった。

「オマケの……天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！！」

これなら……やりすぎたかな？そう思って見てたんだけど、エアから飛んだ斬撃が要くんの所で曲がったんですけど。

「何……したの？」

普通あれを曲げるなんて事出来ないでしょ。

『流石に今のはないだろ』

『要くんだから大丈夫かなって。というか何したの？』

『武装・ＯＲＴって言うので腕をＯＲＴと同じにして殴った』

本当に力でねじ伏せたね。何か道具を使ったとか、魔法を使ったとかじゃなくて殴るとは。

『そろそろ終わりにするか』

『そうね。手合わせだしね』

手合わせが終わってなんとなく要くんとお話をする事にした。

「強いね」

「まだまだ。俺以上なんていくらでもいる」

「それは凄いね」

「本当だ。あいつらおかしいだろっていつも思うよ。胃痛にされるし」

胃痛って。戦って負けるとかじゃなくて胃痛なの？

「薬いる？」

「気持ちは貰っておく。今じゃあ殆どの薬に耐性が出来てな」

「……頑張って」

そう言うしかなかった。その時の要くんの顔は何かを悟っていたかのようだった。

「また来るね」

「ああ」

……お酒をおいて帰ろう。

１００万アクセス記念企画　第六回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「はっじまっるよー！！」

クララ「キュー！！」

椛「クララも慣れれば可愛いわね」

叶「うん！！」

椛「今回の楽屋はセレナさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

セレナ「いらっしゃい……それは？」

叶「ペットのクララ！！」

クララ「キュー！！」

セレナ「あ、そうなの」

椛「ここは後書きですからあんまり気にしない方がいいですよ」

セレナ「そうするわ」

叶「セレナお姉ちゃん綺麗だね」

セレナ「ありがとう。叶ちゃんも美人よ」

叶「えへへ」

椛「雨季さんからメッセージがあります。『要にお酒を与えないで下さい』」

セレナ「要くんは動物か何か？」

叶「あながち間違ってない」

椛「娘に言われたらお終いですね」

セレナ「そうね」

椛「次回はユタ様とのコラボです。では次回もお楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第七回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「遅くなってごめんね」

シャ「作者もニュースが気になってしょうがなかったのよ」

ア「あらすじ行くわよ
・セレナいい人
・要胃痛な人
・酒」

シャ「今回は短く纏めてこれでお終い。では本編スタート」

１００万アクセス記念企画　第七回

要ｓｉｄｅ

現在職員室で鏡を仕事している。

「オリジナル～」

「んだよ鏡」

「儂の仕事を肩代わりしてくれんか？」

「断る。自分の仕事は自分でやれ」

「千草が待っとるんじゃが」

今や鏡の脳内では千草≦戦闘になってしまっている。こいつの頭に春が来た。

「お前、子供出来たらどうするんだ？」

「そうじゃの。普通の学校に通わせて普通に育ってくれれば最高じゃな」

「無理だろ」

「そうじゃな。まずマテリアルの儂に生殖機能があるかも怪しい」

それを言ったらお終いだ。鏡はいろいろと吸収してるから生殖機能

も吸収してるんじゃないか？

「要いるか？」

「哭堵か。どうした？」

突然来たのは哭堵優。わざわざ学校に来るとは。

「ちょっといいか？」

「あー、仕事が終わるまで待ってくれ」

「わかった」

「鏡、さっさとやるぞ」

「うむ」

さてと、一体何の用なのかな？

「いきなり悪かったな」

「いきなり突撃してくる奴よりマシだ。で？」

「試合しないか？真面目に」

「まあいいぞ」

前回のあれはあまりに酷かったからな。流石に反省している。

「別世界で頼む。互いに重傷は負わない程度にやろう」

「試合だからな。保証は出来ないが」

全くだ。俺もそんなのは気にしていないが、ある程度の線引きしておかないと殺し合いに発展するからな。

哭堵優ｓｉｄｅ

要の本気がようやく見れるな。どれくらいの実力なんだろうな。楽しみだ。

「じゃあ世界移動も済んだし、やるか」

何を使うか。ここはグラムでいいか。

「身体能力・魔力１５０％解放。アルティメットワン発動」
魔力はかなりのもんか。人として見たらだが。
「星の枷解除。武装・ＯＲＴ」
!?　一気に能力が上がった!?腕もＯＲＴみたいになってやがるし、こんな隠し玉を持っていたとは。
「準備出来たぞ」
「見ればわかる」
「ならやるか」
「ああ、いくぞ!!」
俺のその言葉と同時に俺らは走り出した。
「炎龍獄滅殺!!」
グラムに高温の炎を纏わせ斬りつける。しかし要はそれを真っ正面から受け止めた。
「その程度の温度じゃ、この手は燃やせんぞ」
「なら斬れろ!!」
「断る!!」

斬りつけたが避けられる。想像以上に速い。どういうパワーアップしてんだよ。明らかに以前共闘した時よりも強くなってるだろ。

「オラオラオラァ！！」

「くっ！調子に乗るなよ！！」

「調子乗れるかよ！！乗ったら死ぬ！！」

「そうかい！！グラム５０％解放！！」

５０％解放すればグラムは空間すら斬り裂ける。流石に試合で１００％やる必要はないな。

「シッ！！」

「フンッ！！」

ガキン

「これを受け止めるか！？」

「どんな切れ味か知らんが、武装・ＯＲＴを使った上に星の枷を解除したこの手は斬れん！！」

「面白い！！」

空間を斬り裂く程度では効果はないか。だがそれは剣自体の切れ味。持ち主の技巧も合わせれば更に切れ味は上がる。

「セイッ！！」

ザクッ

「やるな」

少し斬れただけか。切れ味自体を上げないと駄目だな。

「吹っ飛ばす！！」

「っと」

要の拳を受け止めたが、かなり後ろに飛ばされた。だが離れた方が有利だ。

「落雷雷光衝！！」

要がいる場所へ雷を落としたが、要はその場から一瞬で消えた。

「ハッ！！」

俺は後ろに剣を振った。そこに要がいるのがわかっているから。

「ぬんっ！！」

「白刃取りだと！？」

「うおりゃ！！」

要の奴、白刃取りをして剣ごと俺を叩き付けようとしやがった。

「ほっ」

とりあえず剣から手を離して叩き付けられるのは逃れた。

「死棘の終末（ゲイバルローメ）」

とりあえず槍を出しておくか。だけど使わないかもしれないな。

「哭堵」

「何だ要」

「終わりにしよう。これ以上やったら殺し合いに発展する」

ほらやっぱり使わなかった。

試合を終えて、要の家の夕飯に招待された。欧風カレーが美味い。

「哭堵、手加減が過ぎるんじゃないか？」

あ、バレてたか。

「武器主体の戦いだと上手く調整出来なくてな。並みの武器じゃお前に効かないし」

「そう考えると武器に頼るのも考えものだな」

「武器に頼らないとお前は倒せんだろ」

あんな硬いのを素手でどうにかしろと？無理無茶無謀だろ。

「ごっつぁん。そろそろ帰ろうかな」

「そうか。またな」

「ああ」

１００万アクセス記念企画　第七回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「久しぶりのまともバトル」

椛「今回は哭堵優さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

哭堵「いらっしゃい」

椛「こんにちは。うちでは有名なフラグ最高神さんとコラボしているので哭堵で通っていますがどう思います？」

哭堵「同じ名前で向こうが先ならしょうがないな」

叶「大変だね」

哭堵「別にそうでもないぞ」

椛「要さんとはバトル関連ばっかりですね」

哭堵「そう頼んでるからな。ここの作者さん昔の遊戯王しか知らないから無理だし」

叶「今回はここまで！！次回は八神カイト様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第八回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

雨「今日テンション上がらないから無しね」

アリシャ「「なんだってーーー！？」」

雨「うっせ」

ア「私は勝手にやるわよ！！」

シャ「ねぇアリサちゃん」

ア「何よ」

シャ「こんな事やってる時点でアリシャの部屋だと思うの」

ア「……あ」

雨「バレちまった。あばよとっつぁ～ん！！」

ア「あいつは～」

シャ「まあやりましょう」

ア「あらすじは
・鏡ノロケ
・真面目に試合

・今夜はカレーだ！！」

シャ「今回は八神カイト様とのコラボ。本編どうぞ」

１００万アクセス記念企画　第八回

要ｓｉｄｅ

神様に言われてとある世界へと来た。此処に俺を待っているのがいるらしい。

「……あんたか、カイト」

「よう要」

「相変わらず元気そうだな。あんたなら当然か」

「俺だって元気がない時もあるぞ」

「まあ誰だってそんな時はあるからな。それで、要件は？」

「わかっているんじゃないか？」

そりゃなんとなくは気付くさ。相手がカイト一人。そして俺のいる世界ではどことも知らない無人世界。

「俺との戦いか。お前にメリットあるのか？」

「特にないが、お前が成長したって聞いたから見てみたくてな」

「物好きだな」

「長生きしてると娯楽が少ないんだよ」

だがいい機会だ。俺が知る限り最強クラスである八神カイトに今の俺がどれだけ届くか。この場で確かめさせてもらうとしよう。

「全能力最大解放!!星の枷解除!!完全武装・ＯＲＴ!!」

「最初から随分飛ばすな」

「そうでもしないとあんたには届かんからな。俺に出来るのは、潰すだけだからな!!」

「大きく出たな。セカンド・イグニッション　第二形態（ツヴァイス）　完全鎧化（フルアムド）　魔力全解放（フルパワー）」

あれは初めて会った時に見せたやつか。あの時は手も足も出ないどころか戦わせてすらくれなかった。だかが今は違う。

「オラァァァ!!!!」

「いっつ」

入った。見た目殆ど効いていないように見えるが、今の感覚は確実に骨を折ってやった。すぐ再生しただろうけど。

「強くなったもんだ。来い、『選定されし勝利の剣（ＥＸカリバーン）』」

あれは、勝利すべき黄金の剣（カリバーン）か?それにしては感じる威圧感が半端じゃない。

「カラミティ・エンド！！」

カイトが剣を十字に振るうと漆黒の球体が現れる。そこから凄まじい力で吸引される。

「ぐっ」

対抗出来ない事はないんだが、その隙に攻撃されるのは目に見えている。ならやる事は一つ。いや俺に出来る事が一つ。

「その存在、潰す！！！」

カイトｓｉｄｅ

「おいおい」

正直驚いたぞ。俺の骨を折った事はともかく、殴ってカラミティ・エンドを消すか。

「ふぅ～、なんだあれ」

「カラミティ・エンドか？虚数空間に魂から永遠に封じる技だが」

「うわ、ひでぇ」

「それを潰したお前はもっとひでぇよ」

ＯＲＴを纏っているとはいえ素手でどうこう出来る代物じゃないっての。正直不満だ。あの調子だと他のカラミティ・エンド系も潰されるな。どちらにしろ第二形態（ツヴァイス）じゃあそろそろ失礼か。

「解除（パージ）」

「鎧を脱いだ、ってなんだこの馬鹿魔力は！？」

「魔力を増大させただけだ」

「鎧は拘束具かなにかかよ」

「それは自由に想像しな。今は俺が更に強くなったのを理解すればいい」

「さいです、か！！」

要は一瞬で後ろに回って跳び蹴りを仕掛けてきた。速いが、十分対応可能だ。

「そりゃ！！」

「飛べっ！！」

足から魔力放出による砲撃か。だがこいつ（ＥＸカリバーン）の前においては無駄だ。

ザンッ

「あぶねっ！！」

「外れたか」

脚ごと斬り裂くつもりだったが、よく避けたもんだ。無理な体勢で避けたから身体を痛めてもいいはずだが、チートにそれを求めるのは無謀か。そうなったらつまらないけどな。

「それに斬られたら痛いじゃ済みそうにないな。まあ殺される覚悟なぞとうの昔出来てるがな」

「なら殺されるか？」

「あんたなら生き返らせてくれるだろうが、遠慮するよ。殺されるより潰す方が楽でいい」

「そうか」

俺としてもそっちの方がいいな。だがそれ以上に俺は一条要の限界を見てみたい。

「じゃあな、耐えてたら会おう」

「？　何を」

「エターナル……エンド」

俺の手札のうちで最も強力な精神攻撃。耐えきれるか？っておい！？

「あー、びびった。脳や心、魂が同時に犯されるのは初めてだ」

「は、ははっ、あれを容易く破るか！！」

「所詮ただの精神攻撃だろ？」

「くくっ、あれを所詮と言うか。自分に失望しそうだ。こうもあっさり破られるとなると、改良が必要かな」

要の精神力を考慮していなかった俺も俺か。

「考え事なんてしてもいいのか？内壊」

「ゴフッ！？」

俺とした事が油断したか！心臓を的確に破壊してきやがった。

「潰れとけ！！」

要が俺の頭を掴む。おもいっきり頭を下げられるのと同時に要の膝が見えた。

グシャ

要ｓｉｄｅ

「ぐぅ……」

カイトを潰したはいいが、さっきの精神攻撃が効いてるな。頭いてぇ。

「なんだ。ちゃんと効いてるじゃねぇか」

「あ～、もう生き返ったか。そりゃ効くさ」

「当然だ。神ですら廃人になるような精神攻撃だぞ。あ、廃神か」

「笑えねぇ……」

今度はどうやるか。全身の骨を外してやるか。いや、もっといいのがあるか？まあいいや。

「考えるより行動！！」

「もう殺されるか！！」

カイトの剣は急所に当たれば一発アウト。腕や脚ならどうにかなるが、今は避けながら少しでも多く殴る。さっきのような隙はもう無いと思え。

「ちょこまか逃げんなよ！！」

「嫌だ、うおっ！？」

ザンッ

突然気配が増えたもんだからその場から逃げるように跳んだ。しかし左腕が斬り落とされてしまった。これだけで済んだのは運が良かったか。

「分身なんてズルくね？」

カイトが一人、二人、三人、沢山。

「お前だって一応出来るそうじゃないか」

「出来るけど、実戦じゃ使えないな」

実戦で使えないってのは分身の問題じゃない。問題なのは俺自身だ。俺が得意なのは単独行動。自分とはいえ余分な要素が入っちゃ戦いにくい。

「そうか。なら俺も一人になるか」

「無理に合わせなくていいぞ」

「合わせても合わせなくて勝てるからな」

「流石の余裕だな」

カイトの強さは肌で理解している。俺に出来る事なんて殴るだけだけど、もうちょっと痛めつけてやりたいな。

「オラオラァ！！！」

「おっとっと」

手数を多く、攻めを止めず、相手を攻めさせるな。と言っても全部防がれてるんだけどな。しかも右腕だけだから隙も出来る。

「そこだ！！」

「くそっ！！」

「ほらほら反撃だぞ！！」

どんどん俺の身体が斬られていく。致命傷を受けないように避けるのが精一杯だ。

「ハァ…ハァ…」

「よく5時間も避け続けるもんだ」

5時間？もうそんなに続けてたのか。道理で疲労が半端ないはずだ。

「よく頑張った。だがもう終わりだ。デストラクション・エンド」

「！？」

完全武装・ＯＲＴが解除された！？いや、俺の姿が前世に戻った！？

「じゃあな」

消える。俺の存在が消えていく。能力の解除と相手の消滅があの技の力か。しかし消えるってのに冷静だな俺。消えるってのに

「ウオォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！」

なんで殴りかかろうとしてんだろうな。

「オォォォォォ！！！！！抜骨！！！！！」

……意識あり。

「蘇生ご苦労さん」

「まあ俺が殺った事だしな」

どんな結果になろうと蘇生やら回復やらするつもらだったろうに。

「最後、まさか消えながら俺の首の骨外してくるなんてな」

「あ、当たったのか。死んだ？なぁ死んだ？」

「うぜぇ……死んだけどさ」

なら良かった。最後の一撃が決まらないって恥ずかしいしな。それに能力がなくても技術がなくならないってのが確かめれた。

「とにかくいい死合だった。お前の今の実力も見れたしな」

「どうだった？」

「想像以上だった。ひよっこにしか思えなかったお前がこんな成長するなんてな」

「あんたにそう言われるとこっぱずかしいな」

いい歳だから最近人に褒められるって事がないからな。特に最強と思ってた奴に言われるとな。

「じゃあな」

「ああ。今度は遊びに来てくれ」

「そうしよう」

そう言ってカイトは帰って行った。俺も神様に頼んで帰るとするか。

１００万アクセス記念企画　第八回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「真面目に戦ってたね」

椛「そうね」

叶「カイトお兄ちゃん強いね」

椛「雨季さんの中でも最強キャラの一人らしいし。という事で今回はカイトさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

カイト「はい、こんにちは」

叶「カイトお兄ちゃんは便利だよね」

カイト「まあ基本なんでも出来るからな」

叶「なのにグリンピースは駄目なんだよね」

椛「今回は子供が見ている前で大人らしく苦手を克服してもらいましょう」

カイト「いやいや、何故そうなった。ってなんだこの丼山盛りの緑の悪魔（グリンピース）は！？」

叶「ワクワク」

椛「子供の前で逃げるんですか?好き嫌いは駄目と言うのが大人でしょう?」

カイト「くっ……俺は食わんぞ!!グリンピースを食わなくても他の食品で栄養は取れる!!グリンピースにしか含まれていない栄養なんてないんだからな!!」

叶「開き直った!?」

椛「なんて人でしょう」

カイト「なんとでも言え!!」

叶「ちなみに私に好き嫌いはないよ」

椛「偉いわね。次回はｋｅｉ様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第九回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「私達のファンはいますか？」

シャ「いるならドシドシお手紙下さい」

ア「カミソリレターはお断り」

シャ「じゃあ今日も楽しく行くわよ」

ア「前回のあらすじは
・殺し合い
・全壊勝負
・ねぇ死んだ？ねぇ死んだ？」

シャ「激しい戦いだったわね」

ア「要は死ぬ事前提で戦うしね」

シャ「じゃあ本編やるわよ。今回はｋｅｉ様とのコラボ。スタート」

１００万アクセス記念企画　第九回

遥ｓｉｄｅ

働きたくないでござる。いや、正確にはもっとフリーダムに。

「本音は？」

「遊びたいんだよミヤ」

「わかってたよ」

あー、そうだ。遊ぶなら要がいるじゃないか。あの世界なら何しても大体許されるもんな。そうしよう。

「ちょっと出掛けてくる」

「いつ帰ってくるの？」

「一日くらいしたら」

一日あれば結構遊べるだろう。どんな感じでやろうかな。向こうに行ってから決めるか。

要ｓｉｄｅ

「「「……」」」

「王手、チェックメイト。こっちも終わり」

「「「ぐはぁ！強すぎる！！」」」

「えっへん」

今、俺は学園長室で久遠とチェスをしている。近右衛門は久遠と将棋。そしてエヴァンジェリンは久遠と囲碁。つまり久遠は同時に三人を相手にし、違うゲームで勝利したのだ。なんという強さだ。

「何やってんだ？」

「おぉ遥、久しぶり」

「ゲームか？久遠一人に三人が負けたのか？情けないな」

「「「……」」」

「何か言い返せよ」

言い返せないんだよ。実際一人に負けたのを考えるとな。

「遥は何しに来たんだ？」

「遊びに」

ふーむ、そうなると、何かする事あるかな？いや、無さそうだ。あ、そうだ。

「教師でもやるか？」

「教師？」

「うちのクラスは愉快だぞ。近右衛門も問題ないだろ？」

「まあそうですな。一日くらいなら構わないでしょう」

「ならやるかな。一応経験あるし」

これで正当にサボれる。いきなりやってくる遥が悪いんだからな。

遥ｓｉｄｅ

このクラスが要の担当するクラスね。

「はいお前ら、今日一日先生をやってくれる五十嵐遥先生だ。拍手？」

『何故疑問系だし』

いいツッコミだ。流石は要の生徒達だ。

「では「あの～、要先生」どうしたネギ坊主」

「聞いてないんですけど」

「さっき決まったからな。まずは数学だな」

「遥先生の自己紹介はないんですか？」

俺の自己紹介？正直めんどくさい。だからやんね。そんな事やってる暇があるなら勉強しろよ。学生なんだから。

「自己紹介はやらん。お前らは勉強しろ」

『えー』

「はいはい、遥頼む」

「数学だったな。じゃあ九九から」

『小学生か！！』

案外いるもんだぞ、中学生になっても九九出来ない奴。一部ツッコまずに目をそらしてるし。

次は体育か。体育ってつい『たいく』って言っちゃうよな。

「自由に遊べ！！」

『わーい！！』

「遥先生、それは」

「ネギ坊主、今日は遥の指示に従え。さあお前ら！！俺と遥にドッジボールで勝ったら一カ月学食奢ってやる！！」

『おぉぉぉぉ』

随分無理な事を言う。もちろん無理なのは生徒一同。俺と要相手じゃ分が悪いにもほどがある。

「さあやるぞ！！ネギ坊主は外野頼む」

「わかりました」

「要、当たるなよ」

「当たったらお前になんでも奢ろう」

……羽交い締めにしてボール当ててやろうか。

「遥先生からどうぞ」

「ほい」

「そんな緩いボール、簡単に取れますわ」

「雪広、注意しろ」

「え？きゃっ！？」

上手くいったな。雪広って子がボールを取ろうとしたら、手を弾いてボールが飛んでいった。

「スピンとか鬼畜だな」

「怪我させないように配慮しただけだぞ」

「そうですかい」

結果は俺らの余裕勝ち。ただこれじゃあつまらないから要とタイマンマジドッジボールをした。グラウンドが荒れたのは気にしないでおこう。

時間は経って飯の時間。とりあえず学食でいいか。

「あ、遥先生」

「おっす、近衛だっけ？なんかオススメとかあるか？」

「えっとな、タピオカ」

「うん、飯じゃないな」

確かに炭水化物であるキャッサバ芋から作られているがどちらかと言えばデザートだろ。もっとマシなものはないのか？

「なら日替わりランチはどうでしょうか？今日はグリーンカレーです」

グリーンカレーって、普通学食にないだろ。学食といったらカツカレーとかじゃね？同じカレーでも種類が違いすぎる。

「でも頼んでみるか」

どうせ頼むもんがないんだから。結果としては美味かった。

今日は5時間目までらしいからこれで終わりだな。

「えっと、家庭科か。焼き肉について教えよう」

『何故に!?』

「焼き肉の素晴らしさを知らんのか!!よし一から京まで教えてやる」

「時間が足りん!!」

スパーン

要に頭を叩かれた。何が悪いというんだ。焼き肉の魅力を若い世代に伝えるのは大切な使命なんだぞ。

「お前はまともに授業やれ」

「これ以上に真面目にやる授業はないぞ」

「ないのかよ!!」

スパーン

軽いジョークだっての。

「はい、今日も終わり。全員ご苦労さん。遥もな」

「ああ」

「最後に何か言っておきたい事あるか？」

言っておきたい事か。そういえば……確認のためにも言っておくか。

「俺、男だから」

『……な、なんだってーーー！！！？』

……やっぱりわかってなかった。

「ハハハ、ドンマイ遥」

「今日はそこそこ楽しかったぞ」

「そうか」

中学生を教えるのは何気に初めてだったしな。しかし男と気づいてるのがいなかったとは。寂しい悔しい。

「なら帰るな」

「土産いるか？」

「お、サンキュー」

「じゃあ後書きで渡すように言っとくわ」

後書きとか言っていいのかよ。……俺が気にする事じゃないか。楽屋で待ってよう。

１００万アクセス記念企画　第九回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「パパからお土産受け取ってきました」

椛「遥さん喜んでくれるといいわね」

叶「どうだろ～」

椛「という事で、今回は遥さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

遥「いらっしゃい」

叶「お土産あるよ。はい！！」

遥「……麻帆良のペナントって」

椛「しかも手抜きですね。残念でした」

遥「要の言葉を期待した俺が馬鹿だったよ」

叶「格好良くない？」

遥・椛「「え？」」

叶「いらないなら貰ってもいい？」

遥「ああ、いいよ」（この子の感性が心配だ）

叶「わーい！！」

椛「良かったわね。では今回はここまで。次回は香崎様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第十回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「前回ファンレターを募集したところ、一通来ました！！」

シャ「小包まであるわよ」

ア「さっさとあらすじ終わらせましょう。
・久遠最強説
・教師は遊び
・男の娘」

シャ「じゃあファンレター読むわよ。『いつも楽しく見ています。二人の言動が面白いです。小包は二人への些細なプレゼントです』ですって」

ア「じゃあ早速開けましょう」

ドゴォォォーーーン

雨「黎音様のＣ４は流石だな。今回は香崎様とのコラボ。ではどうぞ」

１００万アクセス記念企画　第十回

セインｓｉｄｅ

真琴さんに頼まれて、というか真琴さんが頼まれて私はゼウスさんのお手伝いをする事になったんだけど。

「働いて下さい！！」

「嫌でござる。働きたくないでござる」

働かない。全く働かない。どんなに怒鳴っても働かない。

「それでも最高神なんですか！？」

「働くという字は、人が動くと書いて働くなんだよ。そこに神は介入すべきではない」

「良い事言ったみたいな雰囲気出さないで下さい！！」

「どや？」

「どや？じゃない！！って消えた！？」

さっきまでゼウスさんがいた場所には『ａｕ、肉まん、コンコンのフィギュア買う』と書いてある紙が置いてあるだけだった。なんだこの神は。

「どうしました？」

「あ、此処の天使さん。実はゼウスさんが逃げ出しまして」

「フッ、未熟」

「なっ！？」

鼻で笑われた。もう嫌だこの職場。胃が痛くなってきた。

「セイーン」

「いるか？」

「母さん！父さん！」

「なんか疲れてる？」

「聞いて下さいよ！！」

とりあえずさっきまでの出来事を事細かに伝える。母さんと父さんが注目したのは紙だった。

「ゼウスはＫａｎ○ｎの真琴が好きか」

「微妙に伏せ字になってないわね」

いや、そんな事はどうでもいいですよ。

「ああそうだ。要の世界行くから準備しろよ」

「あ、はい」

「ジェイルも連れてくからね」

何をしに行くんだろう。

要ｓｉｄｅ

すずかがまたくだらない物を作った。感情に応じて動く犬耳らしい。

そんなもんどうするんだよ。

「パパ～」（ピコピコ）

最高の発明です！！

「叶は可愛いなぁもう」

「えへへ～」

「「「叶は可愛いなぁ」」」

……なんでこいつらが、って今更か。

「だがノックくらいはして欲しいな。ジェイル、お義父さんお義母さん」

「ぬおぉぉぉぉ！？耳が拒絶反応をぉぉぉぉ！！」

「気持ち悪いぃぃぃ！！やめてぇぇぇぇ！！」

流石に今のは俺も気持ち悪かったな。反省しよう。

「あの……」

「んあ？セイン？」

「あ、こんにちは」

こいつらの家族か？まあナンバーズだから当然か。

「それでジェイル。あそこで悶えてるのの代わりに何をしに来たか教えてくれ」

「悶えさせたのは君だろう。今日は叶に会いに来たついでに君で遊ぼうとね」

「ほら」

「む？」

俺が渡したのはブラックカード。これで自由に遊んでくれればいい。振り回されるのは嫌だ。

「叶はパパも一緒がいいんじゃないか？」

「あー、悪いが今さっきやる事が出来てな」

「何よ」

「セインと話す事」

「私と、ですか？私なんて気にしなくていいですから遊んできて下さい」

「そうはいかん」

セインを見て一目でわかった。セインは俺と同類。胃痛で悩んでる奴だ。ここで見過ごすなんて事は出来ない。

「私はパパが一緒じゃなくても大丈夫だよ」

「そうか。叶、ありがとう」

「叶がそう言うなら仕方ないな」

「では叶、ママ達と行こうか」

「うん！！」

さて問題のセインとの話し合いをしないとな。

「ついてきてくれ」

「はい」

ジェイルｓｉｄｅ

せっかくブラックカードを貰ったのだから、叶に好きなものを買ってやらないといけないな。

「欲しいものを言いなさい。何でも買ってあげよう」

「本当？」

「ああ」

「やった！！」

「デレデレね」

「デレデレだな」

乱が親離れが早かったから甘えられるとついつい。

「ママ達も何か買わないの？」

「大丈夫。いっぱい買うよ」

「叶は気にせずどんどん買えよ」

「こんな機会めったにないんだからね」

「うん！！じゃあね、あそこ行こ！！」

なかなか高そうな服屋だな。だが私達の金ではないんだ。気にしないで使おう。

要ｓｉｄｅ

「じゃあ遠慮なく話しな」

「あ、でも」

「我慢しない！！」

「はい！！」

この娘はいい子なんだが、どうにも溜め込む傾向があるようだ。溜まったものは吐き出さないといけないが、その吐き出す場所がなかったのだろう。

「あの、この世界に来る前なんですけど……」

今、一時的とはいえ俺が彼女の愚痴を聞こう。

セインｓｉｄｅ

「……で、クア姉ったら謝りもしないんですよ！！」

「それは大変だったな。だがお前は正しいぞ」

「そうですよね！！」

要さんにいろいろと吐き出してるうちに心が大分楽になってきた。要さんは私の言う事をしっかり聞いて、否定する事なく全部肯定してくれた。

「よく頑張ってるよ」

「ありがとうございます。そういえば胃痛にならないためのアドバイスとかありますか？」

「そうだな。セインの場合環境、人間関係によるものが大きい気がするから、それらを全部とっかえるのが一番だな。だけどそんなの無理だから、自分の全てを受け入れてくれる相手が常に身近にいるといい。わかりやすい例としては生涯の伴侶、つまり夫だな」

それって、結婚しろっていう事？そんな事考えた事もなかったよ。

「まあそれも簡単じゃないからな。また溜まったらうちに来い。俺がまた相談に乗ってやる」

「でも迷惑じゃないですか？」

「馬鹿言え。俺らは家族だぞ。遠慮なんてするな」

そうか、叶ちゃんがいるからいろいろと辿れば要さんも家族なんだよな。

「ただいま～」

あ、みんな帰ってきた。

「要、紙切れ返す」

「……ちょっと待て。紙切れって、このブラックカード、まさか」

「「「使い切っちゃった♪」」」

「いやいや！！何を買ったらそうなる！！」

「俺、ユリ、ジェイル、叶の別荘」

「服も店ごと買ったわね」

「アイス屋も叶のために丸ごと買ったかな」

うわ、それは酷い。自由に使える人のお金だからって、限度があるでしょ。

「……胃が」

「えっと、パパ、ごめんなさい」

「叶は気にしなくていいよ。ちょっと、賞金首狩ってくる」

要さんが家を出ようとした時、私の方を見て一言言った。

「胃薬で治らなくなれば諦めろ」

なんだかとても深い言葉に私は聞こえた。

１００万アクセス記念企画　第十回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「買いすぎました」

椛「物事には限度があるわよね」

叶「作者と椛お姉ちゃん達のお家も買ったよ」

椛「そうなの。ありがとう」

叶「クララにはリボン」

クララ「キュー！！」

椛「一つ目生物にリボン……まあいいわ。今回は鈴さん、百合姫さん、ジェイルさんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

鈴「よく来た」

百合姫「何でもあるわよ」

ジェイル「好きなものを言いたまえ」

椛「甘やかしすぎでは？」

鈴「それは要だって一緒だろ」

叶「セインお姉ちゃんは？一緒じゃないの？」

百合姫「また要の所よ」

ジェイル「余程相談しやすいのだろうな」

椛「お三方は要さんの事を、遊び道具と思ってますよね」

鈴・百合姫・ジェイル「「「ただしギャグに限る」」」

叶「ここは殆どギャグだから大丈夫だね」

椛「コラボでシリアスが少ないしね。では今回はここまで。次回は畏無様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第十一回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「遂に十一回」

シャ「長すぎるから座談会は後回しになったそうよ」

ア「となると残りコラボは？」

シャ「今回の畏無様、残りはなっぺ様と黎音様ね」

ア「じゃああらすじね。
・叶は可愛い
・セインは胃痛
・要も胃痛」

シャ「あの二人は大変ね」

ア「なら本編行くわよ。今回はさっき言った通り畏無様よ」

１００万アクセス記念企画　第十一回

要ｓｉｄｅ

本日快晴。何か良い事がありそうだ。とは言っても予定はすでに決まっている。

「響介、準備はいいか？」

「大丈夫」

「じゃあ始めるぞ。今日はパスタを作る」

響介と料理の練習だ。なんでか知らないが朝っぱら響介がうちを訪ねてきて、んでやる事もないので料理を作ろうという事になった。脈絡も何もないな。

「お前は霞って彼女がいるんだ。あいつを喜ばせれるように頑張れよ」

「要は奥さんのために？」

「馬鹿言え。勝手にあいつらが旅行に行って一人取り残された時のためだ。万年新婚夫婦なんてただの幻想だ」

「リアルだなぁ」

「それが現実。響介、パスタ茹でてくれ」

「どういう感じに？」

「袋の裏に書いてあるだろ」

「えー」

なんだ？何か俺の秘伝的なものを教えてもらえると思ったのか？料理ってのはちゃんと書いてあるのを見てやれば失敗なんて有り得ないんだよ。

「あ、無理にアルデンテとかやるなよ。失敗の原因になる」

「わかった」

茹でるのは問題ないだろ。さて、ソースの準備でもするか。用意するものはキャベツとキノコ。

「これを一口大に切る」

「うんうん」

「炒める。味付けは塩胡椒、あとは適当に味の素とかだな」

「それから？」

「完成」

「適当だな」

これでそこそこ美味いからな。あとはここに茹でたパスタを混ぜて。

「はい出来上がり」

「こんなでいいの？」

「市販のミートソースとかの方がいいかもな」

「おい」

知らんよ。作者の家ではこんなパスタが定番なんだ。これがみんなにとって美味いのかは知らんよ。

「完成したからいいんだよ。お前ら、飯だ！！」

『はーい』

響介ｓｉｄｅ

俺は何しに来たんだろう。気がついたらこっちの神様ってのに飛ばされて、何故か昼飯を作って、一緒に食べて。

「美味しかったよ」

「ありがとう、久遠ちゃん」

「要が呼んでたよ」

「要が？」

正直要の行動もさっぱりだ。とにかく呼ばれたから行こう。

「どこにいるの？」

「こっち」

久遠ちゃんに案内されてとある部屋に入ると、要が酒を呑んでいた。

「あー！また呑んでる！！」

「久遠、静かに。バレたら「バレたら？」なのは……」

「没収」

「あぁ……」

アル中かお前は。そんなで肝臓大丈夫か？

「俺を呼んでたみたいだけど」

「……ああ」

暗いなぁ。そんなに酒を取られたのが残念なのか。

「お前は霞を守りたいんだっけ？」

「ああ。だから強くなりたいんだ」

「それでいいのか？」

「どういう事だ？」

霞姉を守るのに強くならなくてどうするんだよ。

「力じゃお前は霞に勝てん」

「そんなのはわかってる！！だから「力が欲しい。単純だな」なんだと！？」

「守るってのは力だけじゃない。そりゃ男に生まれたからには自分の力で女性を守りたいってのはわからんでもない。だけど守るのに必要なのは力だけとは限らない」

「……」

なんとなく要の言いたい事は理解した。

「それならどうやって守ればいいかな？」

要が言いたいのは霞姉の心を守れって事だと思う。それのためのアドバイスを聞こう。

「強くなったら？」

「言ってる事が違うじゃん！！」

さっきまでは力じゃ駄目って言ってたのに。どうしてそういう結論になったんだ。

「だってよ、霞はお前がいなくなったら頭おかしくなるぞ」

「物凄い失礼だけど、間違ってない気がする」

「それにお前には過保護っぽいから、お前と一緒に戦うとなった場合どうなると思う？」

「……ああ」

間違いなく霞姉は俺を守ろうとする。霞姉はそういう人だ。

「だから強くなって、せめて自分の身は自分で守れるレベルにはなろうぜ。そうすれば霞だって安心出来るはずだ」

「だな。まずは自分。それが出来たら霞姉を守ればいいか」

「頑張れ。喜ばれるぞ」

最終目標は変わらないけど、過程にも目標が出来たな。

「あと料理でも作ってやればいいんじゃないか？」

「そのために今日のは」

「馬鹿言え。俺が楽したいからに決まってるだろ」

台無しだよ。というかパスタ茹でる程度で楽しようとするなよ。あのくらい簡単だろ。

「響介。お前は俺が良い事言ってるように思うかもしれんが、どこかで見たような事を言ってるだけだ」

本当に全部台無しだよ。こいつどうにかしないと。

「まあ、気にしたら負けだ。ゴクッ」

「また酒呑んでる。うわばみか」

「俺の前世はバッカスだと思う」

「転生してるから前世ではないだろ」

「お前が転生者じゃないのがびっくりだよ。俺の知り合いは大抵転生者なのに」

「お前の周りに転生者が多すぎるんだろ」

「要、飯出来たぞ。ってまた酒か！！」

「あ、ヴィータ」

あーあ、見つかっちゃったよ。

「没収だ。全くどこに隠してんだか」

「その棚から出してたよ」

「響介！！裏切るのか！？」

何が裏切りか。禁酒しろよ。

「サンキュ、響介。飯食ってけよ」

「ありがとう」

「要は抜き」

「なん…だと…？」

そりゃそうだろ。霞姉とはこんな関係になりたくないな。頑張ろう、いろいろと。

１００万アクセス記念企画　第十一回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「今回はほのぼの？」

椛「ほのぼのよ」

叶「パパのお酒はどうにかならないのかな？」

椛「難しいと思うわよ。じゃあ今回の楽屋は響介くんよ」

叶「お邪魔しまーす！！」

響介「どうぞ」

叶「響介お兄ちゃんは葵（仮）さんの所の霞お姉ちゃんの旦那さんなんだよね」

椛「まだ若いのにね」

響介「いや、まあ、うん」

椛「頑張って下さいね。年齢差なんて気にしたら負けですよ」

叶「ん～」

響介「どうしたの？」

叶「霞お姉ちゃんてショタコン？」

要「そんな言葉覚えちゃいけません！！」

響介「……今」

椛「一瞬で出てきて一瞬で消えましたね。それで答えは？」

響介「知らないよ」

椛「なら響介くんは姉萌えなんですか？」

響介「どうしてそうなるの！？」

叶「気にしたら負けだよ」

椛「では今回はここまで。次回はなっぺ様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第十二回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「始まったわよ」

シャ「今回はほのぼのをコンセプトにやったそうよ」

ア「事実かは知らないけど」

シャ「ちなみに要くんは出ません」

ア「ではあらすじ。
・料理は適当
・前世はバッカス
・酒取らないでよぉ」

シャ「本当に大酒飲みね」

ア「ありゃヤマタノオロチも逃げ出すわよ」

シャ「さあ今回はなっぺ様とのコラボ。どうぞ」

１００万アクセス記念企画　第十二回

吼太ｓｉｄｅ

「ぅん……」

眩しいな。もう朝か。体がうまく動かない。寝違えたかな。

「おはよー！！」

楔がいる。

「………夢か」

「なら起きろー！！」

「ぐぼぁ！？」

いきなり腹を蹴り飛ばされた！？痛い。という事は現実かよ。

「というかなんで椅子に縛られてるんだよ！？」

「貴方が逃げないようにするためよ」

突然スポットライトが俺に浴びせられる。

「さあ紳士淑女の皆さん！！吼太のコスプレタイムです！！」

うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！

「なんでだーーー!!?」

どこから聞こえてくるんだこの歓声は!?どうしてそんなに嬉しそうなんだ!?

「はい、このスイッチを押して」

「これは?」

「これを押したらランダムでコスプレが決まるの。目の前のモニターにそれが映るからね」

「どんなのがあるんだ?」

「ごく普通な男の普段着から全裸まで」

「全裸はコスプレじゃねぇ!!」

どうする。逃げる事はまず不可能。ならここは俺の運に任せるしかない。

「どうかマシなのを!!」

モニターに無数の文字がフラッシュするように映る。どうなる、どうなる?

『胴着』

「ヨッシャァァァ!!まだセーフ!!」

「良かったわね。トゥード、お願い」

「任されました」

「トゥードもそっち側かよ！！」

楔にトゥード、最悪の組み合わせじゃないか。とりあえずトゥードが持ってきた胴着を着るか。

「こちらになりま～す」

「普通な着替え室だな。隠しカメラからないよな」

「流石に大丈夫です」

それならいいか。一応確かめるけど。

何も問題なく、胴着も普通だったな。

「着替えたぞ。ってなんで楔まで」

「決まってるじゃない。胴着といえば柔道。柔道といえば」

「うわっ！？」

いきなり押し倒された。楔は胴着をしっかり掴んで俺を地面に押さえている。

「柔道といえば、寝技からのエロ展開よ！！」

「ないないない！！トゥード助け」

「カメラセット完了です」

「助けろよ！！」

「諦めなさい。本番はやらないから」

無理矢理胴着がはだけさせられ、いろいろ弄られる。その様子をトゥードが撮影を続ける。実際楔は一線を越えるような場所は触らなかったけど、十分恥ずかしかった。

「じゃあ次ね」

「……」

「早く押す」

「……はい」

次は一体何が出るんだ？普通なものでもあんな方面に進むならどんなものでも安心出来ない。

『Ｙシャツ』

「普通、なのか？」

「はいこれ」

「でかくね？」

渡されたのはどう見ても俺のサイズに合わない大きさにＹシャツ。しかも誰かが着たものっぽい。

「だって要のだもん」

「大丈夫か？」

「問題ないわ。クリーニングに出したのを持ってきたから」

勝手に持ってきて大丈夫か？という意味で聞いたんだが、まあＹシャツの一つくらいなくても大丈夫か。

「やっぱりブカブカ」

「これは、なかなか」

「小さな子がお父さんのを着ている感じですね」

「誰が小さな子だ」

「吼太に決まってるじゃない。トゥード、写真お願い」

「はい、マスター笑って」

「まあこれなら大分マシか」

笑う気にはならないが、ただでかいYシャツ着て写真撮られるくらいなら我慢してやるか。

「じゃあ次ね」

「もうか」

「この空間にも制限時間があるのよ」

そういうもんか。そうじゃなきゃこっちが困るけどな。ここまで順調（？）だったから次辺りは警戒しないとな。

「さあどうぞ！！」

「おう」

俺がスイッチを押してモニターに出てきた文字は

『セーラー服』

「くあぁぁぁ、遂にきてしまった」

「諦めなさい。スク水とかに比べたらマシでしょう。はい」

「どうしても着なきゃ駄目か？」

「この空間に取り残されるわよ」

さっきと言ってる事が矛盾しているような。

「我慢なさい」

「はいはい」

さっさと着替えてさっさと終わらせるか。

こういうものを着慣れてしまった自分が悲しいな。

「はいこれに入って」

「おとと」

箱っぽいものに押し込められてしまった。中は電車のような内装で、人形がいっぱいいた。まるで満員電車のような。

「ハッ！？」

今俺が着てるのはセーラー服。なんだか嫌な予感がプンプンしてたまらない。

もぞ

「ひっ！？」

突然尻を触られた。人形ばっかりの中に人が隠れていたか！？というか痴漢だろこれ！！

もぞもぞ

「うぅ……」

早く止めてくれ。ってなんで俺は声を抑えてるんだ！？これは本当の電車の中じゃないんだぞ！！

「おい止め「コータくん」……な、のは？」

「私もいるよ」

「フェイトまで」

いや、二人だけじゃない。俺とそういう関係にある女性陣が集まっているように見えるのは気のせいだろうか。

『吼太、痴漢プレイを存分に楽しんでいってね♪♪♪』

「楔！！貴様の仕業か！！」

どうなってしまうんだ俺は、ってそんなとこ触るな！！や、やめろーーーー！！！！

「ハッ！？……夢？」

なんだ夢か。そうだよな。あー良かった良かっ……

「なんでセーラー服着てるんだーーー！！！！？」

１００万アクセス記念企画　第十二回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「アリシャが嘘ついた！！」

椛「ほのぼのがコンセプトって、どこがほのぼのなのかしら？」

叶「嘘は駄目！！叶との約束だよ！！」

椛「今回は吼太さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

吼太「……」

椛「まだその格好なんですね」

叶「可愛いよ」

吼太「嬉しくない」

椛「まあまあ、泣かないで下さい」

叶「吼太お兄ちゃん、頑張ってね」

吼太「あぁ」

椛「吼太さんといえば、もう一人の自分であり、女性である詩音が

いますよね」

吼太「いるな。大分見た目、というか成長具合が違うが」

叶「吼太お兄ちゃんはちっちゃいもんね」

吼太「言わないでくれ」

椛「大変ですね」

吼太「どうしてこうなったんだろうな」

叶「カルシウム不足？」

吼太「違うと思う」

椛「さて次回は黎音様とのコラボ。お楽しみに」

１００万アクセス記念企画　第十三回（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「今回でコラボお終い」

シャ「長かったわね」

ア「次回からは武闘会ね」

シャ「作者は意外性を出したいそうだけど、どうなるやら」

ア「ではあらすじね。
・女装は文化
・痴漢プレイ
・吼太可愛いよ吼太」

シャ「最後は作者でしょ」

ア「歪みないわね」

シャ「では本編やるわよ。今回は黎音様とのコラボよ」

１００万アクセス記念企画　第十三回

要ｓｉｄｅ

そういえば最近まーくん達はどうしてるんだろうな？あの二人の店だから不人気って事はないだろうけど。

「要、どこ行くの？」

「まーくんの所。久遠も行くか？」

「うん！！」

「じゃあ行くか。おーい、ちょっとまーくんの所に出かけてくる」

「あ、待って」

「どうしたフェイト」

「ちょっとお花買ってきて」

花？いきなりどうして……あぁ、もうすぐプレシアの命日か。

フェイトは本当に律儀だな。

「わかった。買ってこよう」

おや?店が開いてない?今日は定休日ではなかったはずだが、まあ定休日だろうと裏から入るけどな。

ピンポーン

「すみません、今日は、って要さん」

「今日はどうしたんだ?まーくん」

「ハハハ、お父さんが来てるんですよ」

ゼフィリスか。それはそれは、会っておかないといけないな。

「邪魔しても?」

「要さんなら」

久しぶりだな。戦いたいが、今回は自重しよう。だけどゼフィリスだしな。ああ戦いたい。

「む、要も来たのか」

「ようゼフィリス」

「ゼフィリス、久しぶり!!」

「久遠、久しぶり。ほらおいで」

「うん」

久遠は俺の頭からゼフィリスの胸に飛び込む。あいつが久遠を抱いてる方が絵になるのがむかつくな。

「こんにちは要さん、お飲み物は何になさいます？」

「濃いめのブラックで頼むよ」

「わかりましたわ」

まーくん達が淹れたコーヒーは美味いんだよな。本人達は紅茶の方が得意みたいだが、俺はコーヒーが好きなんでね。

「しかし子供達の様子見か？いい加減子離れしたらどうだ？」

「要に言われなくはないな。娘にデレデレだというのに」

「まあ叶は可愛いからしょうがないな」

「……ほぅ、では私の子は可愛くないと」

「少なくとも、うちの子には負けてるな」

「「……」」

「お二人共、やめて下さいよ」

「そうですわよ。みっともない」

「喧嘩は駄目だよ！！」

ちっ、まーくん達が止めに入らなかったら殴りにかかってたぞ。

っといかんいかん、そんな事のために来たんじゃなかった。

「まーくん、最近店はどうだ？なんか困った事はないか？」

「お陰様で、ここいらで一番人気ですよ」

「流石だな。それと一つ頼みがあるんだが、今度プレシアの命日なんだ。花を少し頼めないか？」

「わかりました」

「要もそのような事をするのだな」

「フェイトの頼みだよ。俺はそういうのは、あんまりやらないんでな」

実際引っ張り出されなきゃそんなのに行かなかったからな。親父の命日なんて最初以外行かなかった。親不孝だな、俺。

「これでいいですか？」

「ああ、いくらだ？」

「千円でいいですよ」

「うい」

随分安いな。まあ安い方が俺の財布も助かるからいいけど。

「ゼフィリス、昼飯」

「何故お前に頼まれなければいかん」

「いいじゃないか。まーくん達も食べたいよな？」

「え、そうですね」

「私は食べたいですわ」

「久遠も食べたい！！」

「……しょうがないな。簡単な物なら作ってやる」

「構わん」

ゼフィリスの飯は確実に美味い。あいつが料理に手を抜く事は有り得ないからそれがどんな簡単な物でも美味いからな。

ゼフィリスｓｉｄｅ

全く、要の奴は変わらないというかふてぶてしくなったというか。

「ほら出来たぞ」

「……おいゼフィリス、なんで俺だけチャーハンで他はハンバーグなんだ？」

「簡単な物と言ったが、それは誰が、とは言ってないぞ」

「……」

反論せずに食い始めたな。少し意外だったな。

「美味いな。悔しいくらいに」

「そうか」

こんな言い方でも褒められて嫌な気はしないな。

「要もハンバーグ食べる？」

「んあ？結構だよ。久遠が食いいな」

さて、私も食事に参加するとしよう。

「まーちゃん、優との関係はどうなんだ？」

「最近あまり会えないですからなんとも。ただ好きな事には変わりありませんわ」

「そうか。まーくんはそういう色恋沙汰はないのか？」

「ハハハ、そんなのいませんよ」

そこはまーくんの自由だからいいんだが、もし彼女が出来たら早く教えて欲しいものだな。

「よく言う。叶をたぶらかしておいて」

「「「……え？」」」

久遠以外が目を点にする。どういう事だそれは？詳しく聞かないといけないな。

「ちょ、要さんどういう事ですか！？」

「最近よく叶が会いに行くだろう。その時の叶の様子がどう見ても好きな人に会いに行く少女の目なんだよ」

「えっと、本当に？」

「まーくんも大概鈍感だな。叶が膝に乗って本を読んでもらっている時なんてドキドキが止まらないって感じに見えたぞ」

「いつ見てたんですか？気づきませんでしたよ」

「娘関係の事で知らん事はない」

それは一種のストーカーと同じではないか？しかし要の娘がまーくんをか。これはなんというか、ややこしいな。

「でも叶ちゃんは近所のお兄さんみたいって本人が」

「それが恋心に発展する事が珍しい事でもないだろ。叶も恋愛経験のない子供なんだからな。本来ならここで潰すんだが、まーくんならしょうがない」

手は出さなかったか。もしここで要が手を出すようだったら私が戦っていたぞ。

「今は叶ちゃんの初々しい恋愛感情が冷めるのを待っている状態か？」

「流石ゼフィリス、よくわかってる」

「とにかく僕はいつも通りでいいと」

「そうしてくれ。もし変な事をして叶を悲しませたりしたら」

「しませんよ」

まーくんに限ってそれはないだろう。私の子だぞ。多少鈍感でもそういう心遣いは出来る。

「では私はそろそろ失礼するとしよう」

「もうですか？」

「お父様は泊まっていったら如何です？」

「いや、二人の元気な顔を見れたからもう十分だよ」

「じゃあ俺もドロンする」

「要、親父臭いよ」

「そうか？」

そうだろう。まーくんやまーちゃんも言わないだけでそう思っているはずだ。私もドロンは流石にないと思うぞ。

「さらばだ」

「また来て下さい」

「いつでもお待ちしておりますわ」

「またね、ゼフィリス」

「今度は、軽く喧嘩しようや」

「ああ」

私は軽く手を振ってこの世界を去った。しかし今回は面白い話が聞けたものだ。要の娘が、ねぇ。楽しみだ。

１００万アクセス記念企画　第十三回（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「もう、パパったら」

椛「大丈夫よ。叶ちゃんの気持ちは届くはずよ」

シャ「うん……」

椛「今回はゼフィリスさんの楽屋よ」

叶「お邪魔しまーす！！」

ゼフィリス「いらっしゃい」

椛「今回衝撃の事実が発覚しましたね」

ゼフィリス「そうだね。驚かされたよ」

叶「うぅ……」

ゼフィリス「叶ちゃんもいい子そうだから安心だよ」

叶「いいのかな？」

椛「要さんも認めてるからいいんじゃない？」

叶「そうかな」

ゼフィリス「まだ子供だからあまり気にする事はないと思うぞ」

椛「次回はようやく本編です。お待たせしました。では次回もお楽しみに」

まほら武道会予選会（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

シャ「婚活が上手くいきません」

ア「そんな事してたの！？」

シャ「誰でもいいから私を貰って！！そこのフラグ神の方々でもいいから！！」

ア「若くないって大変ね」

シャ「アリサちゃんだってすぐにこうなるわ」

ア「あっそ。じゃああらすじね。
・親バカ
・ゼフィリスの飯は美味い
・叶の初恋」

シャ「誰か私の旦那さんになって！！」

ア「無理無理、では本編スタート」

まほら武道会予選会

要ｓｉｄｅ

これから始まるのはまほら武道会の予選だ。形式としては数十人ずつＡ～Ｈブロックに別れて一斉に戦うものだ。そして残った二人が本戦出場。

「刹那はどこだった？」

「Ｃブロックです」

「俺はＥだ」

確かまーくんもＥだったな。Ｃには、明日菜ちゃんがいるな。これでこのブロックの二人はほぼ決定か。

「要の兄ちゃん！！」

「おう、元気だな小太郎。抽選やったか？」

「Ｈやったで。ネギはＢやった」

ＨにＢか……そうかそうか。他にもいろいろいるからどんな予選会になるか楽しみだ。

「おーい」

「あ、こっちこっち」
なのは達は観客席の中でも特等席っぽい場所を陣取っていた。いるのはうちの家族に木乃香、千雨、のどか、夕映だ。文は予選がAブロックだから先に行っている。

「始まるぞ」

『さあさあ皆さん!!まほら武道会予選会Aブロックのスタートです!!改めてルール説明です。刃物、投擲武器、詠唱の使用は禁止。それ以外ならなんでもOK!!では始めて下さい!!』

詠唱とか普通に言うなよ朝倉。だけどそういうルールならしょうがない。全員気にしてないし。

『おお!!文選手速い!!どんどん他の選手を蹴散らしていく!!』

「いい感じだね」

「文に勝てるのがあの場にいるとは思えないけどね。運良く残ったのが勝ちかな?」

「お前ら出場者見てないのか?」

「そうだけど」

そうかそうか。今は気配を消して大人しくしているが、動き出せば終わりだ。

『おっと！！高音選手が文選手に立ち向かっている！！』

「貴女には勝たせてもらいますわ！！この似非記者！！」

「あやや～、ちょっと記事にした程度でそんなに怒らなくても」

「あんなガセネタ載せられて怒らない人がいますか！！」

文の奴、また何かやったのか？いつもの事だからいいんだが、口喧嘩してる暇はないぞ。あいつが動き出した。

「いきますわよ！！」

「そんな熱くならくても……っ！？」

文が高速で横に跳んだ。もちろん高音の攻撃を避けるためではない。

『おぉっと！？高音選手突然吹き飛んだ！？吹き飛ばしたのは』

「射命丸、避けるな」

「無理言わないで下さいよ」

『桜咲刹那選手の父、天魔選手だーー！！』

文危なかったな。あと少し遅れたらやられてたぞ。とにかくAブロックの二人は決定か。次はBだな。

「そういえば鏡、よくお前が参加しなかったな」

「儂まで出たらつまらんじゃろ。ルールがある戦闘では手札の多い儂が強い」

これが自惚れでもなんでもなく事実だから嫌だよな。

ネギｓｉｄｅ

次は僕の番だ。お父さんも優勝したっていうこの大会で優勝したら僕だってお父さんに近づけるはず。

「やっ！！」

『ネギ選手、どんどん他の選手を倒していきます！！とても9歳とは思えません！！』

魔法は身体能力強化くらいだけど、中国拳法を習ってたおかげで戦いやすい。

『残り人数も少なくなってきました！！どうなるのでしょうか！？』

「よし次！！」

「ぐへっ！？」

「あれ？」

僕が殴りかかろうとした大柄の男性が突然倒れた。男性の後ろには志貴さんが立っていた。

「やあネギくん」

「あ、どうも」

志貴さんと今戦ってたら間違いなく分が悪い。他の人を倒さないと。

『Bブロックの勝者はネギ選手と志貴選手です！！』

「あ、あれ？」

志貴さんが全員倒しちゃった？僕の活躍がぁ～。

要ｓｉｄｅ

ＣとＤは大した事はなかったな。Ｃは刹那と明日菜ちゃんが、Ｄは古と真名が勝ったとだけ言っておこう。次は俺の番だ。

『全選手、準備はよろしいですか？』

えっとまーくんは、いた。こうやって舞台に立つとあれだな。

『始め！！』

おもいっきり戦いたくなる！！

バタバタッ

ん？なんか俺とまーくんを除いた全員が膝から崩れ落ちたぞ。

「要さん、闘気を出し過ぎです。全員動けなくなっちゃったじゃないですか」

「あー、まーくんとやれると思ってな。本戦までお預けか」

『え、えーと、試合終了、です？』

つまらんな。出るならもう少し根性というか何かしらが強い奴らが出ろよ。

「じゃな、まーくん」

「ええ」

のんびり残りの試合を見るとしよう。

舞人ｓｉｄｅ

全く要さんは。これじゃあ観客もつまらなかったでしょう。

「災難でしたわね」

「お疲れ様！！」

「まーちゃんに叶ちゃん、要さんのあれはどうにかならないのかな？」

「どうにもならないでしょう」

「うん」

娘にまでこう言われてますよ。どうします要さん。まあそんな事よりも。

「まーちゃん、要さんと戦う時は一緒にお願い」

「あら、本気ですわね」

「まあね」

要さんに当たるかも怪しいけど、もし当たったら全力でやらないとな。

「ねぇ、二人で出ちゃ駄目だよ」

「そういう意味じゃないんだよ」

「なんて言うんでしょう。簡単に言えば一つになるかしら」

「？」

僕らはもともと二人で一人、いや一つのオジギソウ。一つになった方が圧倒的に強い。だけど一つになるのは久しぶりだな。殺さないように注意しないと。

小太郎ｓｉｄｅ

要の兄ちゃんの闘気は凄まじかったな。ありゃ一般人は倒れるわ。
あの後のＦとＧでは楓の姉ちゃんにエヴァンジェリンの姉ちゃん、タカミチっつーおっちゃんが勝った。それとクラトスのおっちゃんもな。

「まあええ、次は俺が勝つ番や」

「小太郎くん、負けないでね」

「アホネギ、誰が負けるっちゅうねん」

「それフラグじゃない？」

フラグってなんやねん。

あんま実力者はおらへんな。あの箒持っとるんは魔法使いやな。他に面白そうなんわおるかな？

「……なんや、あれ」

般若の面を付けた男。どうみても目立つはずやけど、目を凝らしてようやく気づけた。何なんやあいつ。気配が薄すぎる。

『始め！！』

っといかん、ボケッとしとったわ。とりあえずあれには近づかんとこ。危ない雰囲気がプンプンしとる。

「よっ！ほっ！」

殆どが雑魚やから余裕を持って倒す事が出来る。気を使うようなのもおったけど、大した問題あらへん。

『終わりも近づいて参りました！！本戦への切符を手にするのは誰か！？』

般若の男、さっきからまともに動いとらん。そして誰も攻撃しようとせん。気配がそれだけないってのもあるかもしれへんけど、みんな強すぎるものから目を背けとるのかも。生物の本能みたいなもんかな。

『ここで小太郎選手と佐倉選手の二人が残った！！試合終了です！！』

二人？何言っとんねん。よう見てから判断しいや！！

「気功弾！！」

「え？きゃあ！？」

気の弾を佐倉とかいう姉ちゃんに当てて気絶させる。

『こ、小太郎選手!?反則ですよ!!試合はもう終了して「たわけ!!」要先生?』

「あそこに目立つ面を付けてるのがいるだろう」

『え?あ!本当です!!えっと、彼は一般参加の鬼人(おにひと)選手です!!確かにHブロック参加者です!!』

「助かったで、要の兄ちゃん」

俺はその鬼人とやらの前に立った。

「あんたが何者か知らんけどな。この大会、そんな突っ立って優勝出来るほど甘ないで」

「……肝に銘じておこう」

それだけ言って舞台から去っていきおった。俺も帰るとみんながおった。

「小太郎くん、凄かったね」

「ネギか、まだまだや。師匠」

「なんじゃ?」

「俺を一から鍛え直して下さい」

さっきあの男と面と向かって話しただけで、まだ心も体も震えとる。武者震いではない。恐怖でだ。

「良かろう。ただし、勝てる確率が数%上がるだけじゃ」

「わかっとる」

元々0に近い確率が少し上がるだけでも十分や。俺の底力、見せたるわ。

まほら武道会予選会（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「あの人は誰だろう」

椛「気付く人は気付くかも、って雨季さんが」

叶「よくわかんない」

椛「そうね。さて今回の楽屋は千草さん、小太郎くんの京都コンビです」

叶「お邪魔しまーす！！」

千草「いらっしゃい」

小太郎「おーす」

叶「その毛皮何？」

小太郎「次回の衣装や。かっこええやろ」

椛「小太郎くんは狗族だからなんだか私と近い気がするわ」

小太郎「姉ちゃんは白狼天狗やったっけ？まあ似とるわな」

千草「ちょい待ち、なんでうちを無視するん？」

椛「鏡さんの話しかしないでしょう」

千草「うっ」

小太郎「毎度の事や」

叶「ラブラブだね」

椛「では今回は此処まで。次回もお楽しみに」

幕間　鍛錬（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「なんでか今回は本戦じゃないわよ」

シャ「まあそれはいいわ。作者！！」

雨季「五月蝿い！！増弾のピアスゲットに忙しいんだ！！」

シャ「書きなさいよ！！それに前回の男についてヒントが無さ過ぎでしょ！！」

ア「まあ確かにあれじゃあわからないわよね」

雨季「ならヒント。鬼人という名前はとあるものから取りました。本人には関係あるけどあんまり関係ありません」

ア「他にヒントはないのかしら？」

雨季「出演してるキャラの関係者。そして非常に資料が少ない」

シャ「ＯＲＴといい、どうしてそんなに資料が少ないのを選ぶのかしら？」

雨季「いいからあらすじやれよ」

ア「はいはい。

・武道会予選

・いろいろ原作崩壊
・謎の男」

シャ「じゃあ本編どうぞ」

幕間　鍛錬

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

「茶々丸、おかわり！！」

「はい」

朝からアルク姉様は元気だな。しかし志貴兄様はまだ寝ているのか？低血圧とはいえそろそろ起きた方がいい。

「茶々丸、兄様を起こしてきてくれ」

「志貴さんでしたら早くから別荘に行っております」

珍しい事もあるものだな。あの兄様が朝から別荘に行くとは。普段でも別荘へ行く事なんてないのに。そういえばさっき一条鏡と犬上小太郎も別荘へ入っていったな。自分の家の別荘を使え。

ピンポーン

「今日は客が多いな」

「行って参ります」

茶々丸は朝から仕事が多いな。その仕事を作っているのは私達なんだが。

「おはようございます」

「なんだ坊や達か。別荘を使いたいなら勝手に使え」

「ありがとうございます」

坊やに長瀬楓に古菲か。……おや？神楽坂明日菜がいないな。

「坊や、神楽坂明日菜はどうした」

「アスナさんはクラトス先生と一緒に要先生のお家に行きました」

ふむ、アウリオンに鍛えてもらっているのか。無駄に個人練習をするよりかなり効率的だな。一条鏡と犬上小太郎は追い出されてこちらに来たのか。ようやく二人が来た理由がわかった。

「先客が三人いるからな」

「はい、わかりました」

私も飯を食ったら行くとしようか。

ネギｓｉｄｅ

武道会本戦の前にしっかり鍛えないと。目指すは優勝だからね。

「長瀬さん、古菲さん、今日はよろしくお願いします」

「よろしくでござるよ」

「頑張るヨ」

別荘の中に入ると誰かが戦っているのが見えた。

「ガアァァァァァァ！！！！」

「その程度かたわけが！！」

ドガッ

「グゥゥゥ」

あれって、小太郎くん？人じゃなくて獣みたいな姿になってるけど。

「流石に鏡殿は強いでござるな」

「そういう問題ですか？」

「とんでもない勝負アルな」

「なんじゃ、お主らも来たのか」

「あ、こんにち「グアァァァァ！！！！」うわっ！？」

「フンッ！！」

ズドン

「ガァッ！？」

鏡先生の蹴りがカウンター気味に小太郎くんの腹に入った。それでも小太郎くんにはあまり効いていないようだ。

「一体何があったんですか？」

「ちょっと小太郎の中の狗族の因子を強化して暴走させたのじゃよ。ここからは本人がそれを扱えるかの問題じゃ」

そんな無理をして小太郎くんは大丈夫なのかな。さっきから鏡先生に殴られてるし。

「お主らはお主らで修行をしておれ。儂はあれの相手をしなければならん」

「ではネギ坊主、邪魔をしないように移動するでござるよ」

「そう、ですね」

心配だけど、僕は手を出せないからな。鏡先生に任せるしかないか。

小太郎ｓｉｄｅ

……頭いた～。どこやここ。

「えっと確か、師匠に狗族の自分を倒せ言われたんやっけ？」

どうやんねん。まずここがどこかもわかっとらんのに。

「あ、映像」

そこら中に映像が映し出されている。自分が見た事あるものばっかりや。となると、ここは俺の頭の中か？

「ようわからん。とりあえず歩こ」

動かな始まらへんからな。しっかしごちゃごちゃしとるな。本当に俺の頭の中やとしたらもう少し整理整頓を考えなあかんかもしれん。物や映像は散乱しとるし道はぐちゃぐちゃや。

「ガアァァァァァァ！！！！」

「うおっ！？」

なんかが飛びかかってきたから巴投げの要領で投げたけど、クルリと回って着地された。あの黒い獣が俺の中の狗族か。

「ガアァァァァァ！！」

「よう吠えおる」

随分偉そうにしおって、どっちがここで上の立場か教えてやらんとかんな。

「行くで！！」

気を使って体を強化し、爪で斬りつける。しかし獣は辺りを飛び回りなかなか攻撃が当たらん。

「ガァッ！！」

「っと」

奇襲気味にどんどん攻撃されるけど、所詮は獣やな。

「俺がおらな使いもんにならへんなぁ！！」

バキィ

「キャイン！？」

昔の俺ならいざ知らず、師匠の修行を受けた俺にとってこんなの雑魚にすぎんわ。つか顎に一撃入れただけでダウンすな。

「大人しく俺に従っときや」

俺の力の一部が俺を超えるなんておこがましいんや。

鏡ｓｉｄｅ

む、様子が変わってきたな。どうやら中で決着が着いたようじゃな。

「グゥゥゥ……ふぁ～、終わった終わった」

「ご苦労。姿を戻せるな」

「ん……」

戻ったな。さて、どんな感じになったかの。

「どうじゃ？」

「あんな雑魚を屈服させただけで本当に強くなれたんかな？」

「問題ない。力が弱かろうとそれはピースの一つにすぎんからじゃ。そのピースが嵌った事によりお主という存在は完成されたはずじゃよ」

「ふーん」

まだ実感出来とらんようじゃな。それはおいおい実感するじゃろ。

「ではプレゼントじゃ」

「プレゼント？毛皮かこれ？」

「うむ、フェンリルの毛皮じゃ。お主にはよく馴染むじゃろ」

「そやね。なんかええ感じやわ」

「それでは修行を再開するぞ」

「おう！！」

しかしあれじゃな、自分の中の獣を雑魚呼ばわりとは。ちと強化がすぎたかの。

志貴ｓｉｄｅ

「……ふぅ」

ただあのお面の男のように気配を殺すだけなのにかなりきついな。やっぱりただ気配を殺すだけじゃあの境地に辿り着く事は出来ない。

「心も殺さないとな」

だけどそんな事簡単に出来る事ではない。もちろん出来ない事はない。俺だって殺し合いの時は心を殺す事だってある。だけどあの男は呼吸をするかの如くそれをしていた。あれは生粋の殺人鬼だ。

「何者なんだろうな、本当に」

殺人鬼なら殺しは御法度のあの大会に出るのはおかしい。考えがまるで読めない。まあ何かしたら俺らが止めないとな。

幕間　鍛錬（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「小太郎強化だね」

椛「叶ちゃんも頑張ってね」

叶「強くなるよ」

椛「今回の楽屋は超さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

超「どもネ」

椛「いろいろ大変でしたね」

超「いや本当に。まあロボットが貰えたから良しとするネ」

叶「あれでどうするの？」

超「いろいろと出来るヨ。その気になれば世界征服もネ」

椛「止めて下さいね。未来が崩壊します」

超「流石にそこまではしないから大丈夫ヨ」

叶「次回は武道会本戦だね」

椛「では次回もお楽しみに」

まほら武道会本戦　その1（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「彼氏が出来ました」

シャ「嘘!?」

ア「嘘」

シャ「……」

ア「そう睨まないでよ。ただ本当に彼氏が出来たらここは私と彼氏の世界になるって」

シャ「それは嫌ぁ!!」

ア「さてあらすじね。
・小太郎強化
・自分の中の獣は弱い
・鬼人に危機感を抱く志貴」

シャ「という事で鬼人のヒント」

ア「銀髪らしい」

シャ「らしいってなんなのかしら?」

ア「資料が少ないからで済ませましょう」

シャ「じゃあ本編どうぞ」

まほら武道会本戦　その１

要ｓｉｄｅ

ようやく本戦のスタートだな。ちょっくら対戦表を確認するか。

ーーーーーーーー

第一回戦
クラトス・アウリオン　ＶＳ　高畑・Ｔ・タカミチ

第二回戦
ネギ・スプリングフィールド　ＶＳ　犬上小太郎

第三回戦
桜咲刹那　ＶＳ　神楽坂明日菜

第四回戦
エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル　ＶＳ　天魔

第五回戦
鬼人　ＶＳ　射命丸文

第六回戦
志貴・Ｂ・マクダウェル　ＶＳ　長瀬楓

第七回戦
龍宮真名　ＶＳ　牧原舞人

第八回戦
古菲　ＶＳ　一条要
ーーーーーーーー
俺は最後かよ。まあその分いろいろと戦力を解析出来るからいいけどな。とにかく、楽しいのが見れればいいかな。

クラトスｓｉｄｅ
まずは高畑教諭とか。刃物は使えないが、これがあれば十分だな。
『では選手入場して下さい！！』
では行くとしよう。舞台の上には既に高畑教諭が待っていた。
「クラトスさん」
「何か？」
「何故野球のバットと鍋の蓋なんですか」

「剣が使えないからだ。鍋は盾の代わりだ」

昔はよく使っていた装備の一つなのだぞ。特にバットはな。これでモンスターを何度も倒したものだ。

『両者準備はよろしいですね？では試合開始！！』

「ま、まあやりますよ」

「来い」

「シッ！！」

高畑教諭はポケットに入れた手を高速で抜き出し拳圧を飛ばす。確か居合い拳とやらだったか。見えはしないが感じる事は出来る。

「真空破斬！！」

私は剣を横に振るい真空の刃で拳圧を斬る。高畑教諭は更に連続で拳圧を飛ばしてきたが、鍋の蓋で受け流す。

「……なんだか」

「ん？」

「なんだか自信も戦意も無くしますね。鍋の蓋でそうも防がれては」

「慣れだ。戦った事のある相手には今以上の猛攻をするのもいた」

「そうですか。ではそれを上回る猛攻をしましょう！！」

高畑教諭が右手と左手を合わせると、高畑教諭から力が噴き出してきた。

「咸卦法。それでどれほど強くなれるやら」

「ではお見せしましょう。豪殺居合い拳！！」

「むっ！？」

先ほどまでとは比べ物にならない一撃が飛んできた。咄嗟に避けて事なきを得たが、小さなクレーターが出来ていた。

『凄まじい一撃！！クラトス選手万事休すか！？』

魔術を使えばなんとかするのは容易い。しかしこの場では使えないな。鍋の蓋で防ごうにも技術だけでは防ぎきれない。

「まだまだぁ！！」

今は避け続けるしかないな。だが避けている間にあれは連射が出来ない事がわかった。だからといって撃たれた後に懐に飛び込めば先ほどまでの普通の居合い拳を浴びせられるだろう。ここはある程度の距離から威力のある攻撃をするしかない。いや、あの技を使えば……

「やる価値はあるか」

このままでは向こうのスタミナが尽きるのを待つしかない。なら攻めた方がいいだろう。

「ハァッ！！！！」

高畑教諭が豪殺居合い拳を避け、瞬動で懐に入る。

「掛かりましたね！！」

妙に隙があると思ったらやはり誘っていたか。そして高畑教諭が居合い拳を乱射してきた。ここだ！！

「飛葉翻歩！！」

「なっ！？」

流れるように高畑教諭の後ろに回る。瞬動のような直線的動きではなく、流水のような動きをそう簡単に捉える事は出来ん。

「翔破裂光閃！！！」

「うあぁぁぁぁ！？」

斜め上に切り上げ、無数の突きを放つ。高畑教諭は背中がボロボロになって地に落ちた。

「私の勝ちだ。まだやるならば付き合うぞ」

「ぐ……参りました」

要ｓｉｄｅ

妥当な結果だな。タカミチがクラトスをどう評価していたのか知らんが、過小評価が過ぎたようだな。

「要くん、あ～ん」

「あ～ん」

「どうかな？」

「美味いぞ。なのはの唐揚げだから当然だが」

「ありがと」

次はネギ坊主と小太郎の対決か。正直これの結果も見え見えだが、経過を楽しむとしよう。もしかしたら大どんでん返しなんてのがあるかもしれないからな。

小太郎ｓｉｄｅ

いきなりネギか。ちょっと楽しみにしとったんやけど、決まってもうたからしゃあない。

「小太郎よ」

「師匠、どうしました？」

「常に本気で行け。それだけじゃ」

「はい」

わかっとる事やけど、しっかり意識してやるのが一番やな。

『両選手、入場して下さい！！』

舞台に上がると物凄い声援が響いた。あー、耳が痛い。

「小太郎くん、よろしくね」

「ああ」

『小さな二人がどんな勝負を見せてくれるのでしょう！！それでは試合開始して下さい！！』

さて、まずは小手調べといくか。

「そらっ！！」

「くっ、やぁ！！」

「よっ」

俺が蹴りを入れるとネギがなんとか防ぎ、反撃で殴りかかってきた。しかし身を翻し、俺はそれを避けた。なんやひょろっちい攻撃やな。

「受け取りぃ！！裂破掌！！」

「うわっ！？」

手のひらに気を溜めてネギにぶつけるとネギが吹っ飛んだ。ただ障壁で防いだみたいやけど。

「この、魔法の射手・風の３矢！！」

魔法の矢か。遅いから避けるのは簡単やけど、相手の意表を突く行動をするのが一番やから。

「行くで！！」

突撃してやる。ネギはそれを見て勝ったような顔をしたが、世の中そう甘くないで。

「効かんわ！！」

「そんな！？」

魔法の矢が俺に当たる前に消滅した。理由は俺が着とるフェンリルの毛皮。魔法耐性が高いから魔法の矢程度の無効は楽や。じゃあ攻撃に移らせてもらうで。

「まずはその邪魔な障壁を消したる！！カイザーネイル（弱）！！」

「しまった！！」

左手で弱めのカイザーネイルを放って障壁を斬り裂いた。そして右手でネギの顔を鷲掴みにした。

「むぐっ！？」

「落ちや！！」

ドゴォ

ネギを鷲掴みにしたまま俺は飛び上がり、地面にネギを叩きつけた。ネギも体を強化しとるから大事には至らんやろ。ただ頭に強い衝撃を受けたからまともに動けんはず。

「ぁ……」

「しかし弱いなぁ。がっかりやわ」

僅かにしか動かないネギを見て会場もざわつく。ちとやりすぎたか？

「ま……だ……」

「んな血を流しながら何がまだや。止めとき」

「ハァ……ハァ……嫌だ、よ」

「そうかい」

ドカッ

「ぎゃっ!?」

立ち上がってきたネギを蹴り飛ばす。それでもネギは立とうとしていた。

「どうしてそこまでやるんや。チャンスはまだある」

「勝たな…いと……お父さん、に……近づけない」

「くだらん。親父の幻想にとらわれ続けるお前は俺には勝てん」

「勝つ!!!」

ネギから魔力が溢れ出す。いつぞやの暴走みたいな状態やな。制御は出来とるみたいやけど。

「収束・光の矢!!桜華崩拳!!!」

瞬動で近づいてきて掌底を放ってきた。魔法を腕に込めて打ち放つみたいな技か。ちょうどええ、同じような技を俺も作ったからな。

「うおぉぉぉぉぉぉ!!!」

「見せたる。狗狼（クロー）！！！」

俺の右手が黒く染まり、黒い爪が伸びる。ネギの掌底と俺の爪がぶつかり互いに弾け飛んだ。

「ぐあっ！？」

「い〝っ！？」

流石に溜めが足りなすぎた。本来ならあんなもん斬り裂くはずやったのに。

「ま、立っとるから俺の勝ちやな。いたた、爪割れた」

『勝者！小太郎せん……』

ん？どうして途中で止まるんや。

「コヒュー……コヒュー……」

「……」

そこまでして勝ちたいか。その根性は認めたる。せやけど今の状態では無謀でしかない。

「ネギ！！もう止めなさい！！」

「コヒュー……コヒュー……」

「聞こえとらんみたいやな。しゃあない」

俺は瞬動でネギの後ろに回って背中を押した。それだけでネギは倒れた。

『えっと、テンカウント！！今度こそ小太郎選手の勝利です！！』

医務室までは運んだるかな。

要ｓｉｄｅ

順当だな。鏡が様々な技術を叩き込んだ小太郎とエヴァンジェリンが片手間で鍛え、それ以外はほぼ独学のネギ坊主。こうなるのは明らかだったな。

「あの毛皮凄いね」

「聖骸布より抗魔力があるかもな」

あれも小太郎の勝利にかなり貢献したな。魔法の矢をあそこで消されるのでなく避けられていたらネギ坊主も動揺せずに致命傷は負わ

なかったはず。

「介入が過ぎるんじゃないか、鏡」

「ハッハッハ、気にするでない。もしエヴァンジェリンがネギをしっかり鍛えておれば毛皮があってもいい勝負になったはずじゃ」

「ネギ坊主は天才だからな。もしかしたらそうなったかもしれんな」

ただエヴァンジェリンが家族関係以外で真面目にやるなんて考えれないな。志貴達が言えばやりそうだけど。

「次からも波瀾万丈な試合を期待するか」

「オリジナルが負ければよかろう」

「その考えはなかった」

だが次は実に楽しみな試合だ。天魔の一人娘にして俺が鍛えた刹那。最近クラトスに師事してメキメキ実力を上げてる明日菜ちゃん。どうなるかな。

まほら武道会本戦　その1（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「今回は二試合。少なくてごめんね」

椛「次回からは三試合だそうです」

叶「楽しみにしてね」

椛「今回の楽屋は明日菜さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

明日菜「あ、よろしくお願いします」

椛「実はこの時点で比べると原作より強くなっているのに出演がない明日菜さんに質問です」

明日菜「ひどっ！！椛さんひどっ！！気にしてるのに！！」

叶「気にしたら明リシャになっちゃうよ」

明日菜「なにそれ怖い」

椛「地味ですね」

明日菜「それ質問じゃなくて指摘だから！！」

叶「いいツッコミ。流石は脳筋ツッコミヒロイン（笑）」

明日菜「一切褒めてない！！」

椛「では次回もお楽しみに」

明日菜「締めるなぁぁぁぁぁぁ！！！！」

監督「はいカット。三人共良かったよ」

椛「お疲れ様です。凄い台本でしたね」

叶「明日菜お姉ちゃんお疲れ様」

明日菜「はいお疲れ様。たまに本気でツッコミすると気分がいいわね」

椛「どうですこの後喫茶店にでも」

明日菜「それならいいお店……え？カメラ回ってる？」

叶「カメラさ～ん！！プライベート撮れちゃってるじゃん！！」

椛「まあ見られて困るものでもないけど」

明日菜「私達普通に話してたわね」

叶「そうだね。っていい加減カメラ止めてよ」

椛「ではでは～」

まほら武道会本戦　その２（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「特に話すネタがないわ」

シャ「だから私の婚活」

ア「しつこい！！マスターボールに閉じ込めるわよ！！」

シャ「酷い！！」

雨季「エスカドラシリーズを剣士とガンナー揃えた」

ア「帰れ！！」

雨季「酷いや」

ア「あらすじやるわよ。
・クラトス圧勝
・小太郎圧勝
・野菜しぶとい
本編スタート！！」

シャ「早過ぎ！！もっと喋りたい！！」

ア「五月蝿い！！ここでは私がルールだ！！」

シャ「いつから！？」

まほら武道会本戦　その２

刹那ｓｉｄｅ

明日菜さんとか。最近見てなかったけど要さんが言うには結構強なっとるみたいやから油断は出来んな。

「しかしこの衣装はどうにかならんかったんかな」

この、あの……バニーは。竹刀は人参みたいな見た目で作られとるし。誰が作った。

「うちやで！！」

「心読まんといて……ってこのちゃんかい！！」

「心を読んだのは私です」

「のどかさん、能力の無駄遣いやろ」

「気にしたら負けですよ」

「夕映さんまで。何しに来たん？」

「「「応援」」」

違う。絶対に違う。応援ってのはもっと志気を上げるためのもんや。これは嫌がらせでしかない。

「……行ってきます」

「あ、要兄ちゃんから伝言あるで」

「え、何々？」

「『負けても誰も気にしない』って」

……もうやる気がゼロ地点突破やわ。

うちが舞台に上がると同時に明日菜さんも上がってきたけど。

「……亀？」

「そっちは兎ね」

『今回のコンセプトは兎と亀だそうです』

「「童話か！！」」

『木乃香さんが一晩でやってくれました』

このちゃん……ええ加減怒るよ。明日菜さんもプルプル震えてるし。

「ねぇ刹那さん」

「わかっとるよ」

「「後でシメる！！」」

『お二人の何かが深まった所で試合開始です』

始まったからには本気でやらなかんな。明日菜さんはいつも通りハリセンか。あれ魔法とか消すから気をつけなかんな。

「セイッ！！」

「ヤッ！！」

明日菜さんが攻撃してきて私がそれを受け流す。流石にクラトス先生に指導してもらっただけあって太刀筋が鋭くなっている。

「いっけ！！魔神剣！！」

「無駄です！！断空閃！！」

明日菜さんは地を走る斬撃を。私は空を断つ斬撃を放つ。二つの斬撃が相殺すると同時に私達は飛び出し、ぶつかり合う。

『激しい剣舞！！されど獲物は人参とハリセン！！』

朝倉さんも後で黙らせんとな。しかし明日菜さんの成長の早さは目

を見張るものがある。

「そこっ！！」

「わっ！？」

隙を見つけて打ち込んでもギリギリ受け流されてしまう。時には会心の一撃を放っても避けたり受けられたりしてしまう。クラトス先生に指導してもらったとはいえここまで成長するものだろうか。

「虎牙破斬！！」

「遅い！！」

「くっそ～」

……攻撃はそこまででもないんやけどな。そういえば要さんが以前、明日菜さんは時々戦場を生き抜いた戦士のような動きをするって言ってたな。これがそうなんやろな。

明日菜ｓｉｄｅ

やっぱり刹那さんは強いわ。攻撃も簡単に弾かれちゃう。

『力を貸しましょうか？』

……幻聴かしら？頭の中に声が響いたけど。

『幻聴じゃありませんよ』

「誰よ」

勝手に人の考え読んで。戦いに集中したいのに。

『右手に気を、左手に魔力を集めて下さい。感覚は今教えましょう』

「……咸卦法でしょ」

『!?』

「そんなものもう使えるわよ」

『!?』

クラトス先生が試しにやってみろって言ったら出来たしね。

『なら何故』

「そんなもの使ったらつまらないじゃない」

本当はクラトス先生に使いこなせるまで使うなって言われてるんだけどね。使いこなせない技術が暴走して自滅するなんてよくある事だそうだし。

「明日菜さん、もういいですか?」

「あ、気づいてた?」

「何があったかは知りませんが、動きが突然止まったので」

「そう、ごめんね。待たせちゃって」

「いえ」

刹那さんは気が利いて助かるわ。そんな刹那さんにはとっておきをあげないとね。

「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「……」

「岩砕剣！！！！」

地面にハリセンを叩きつけると地面が吹き飛んで、岩が刹那さんに飛んでいった。散弾銃のように飛ぶから逃げ場なんてない。

「エアウォール」

だけど岩は刹那さんだけ避けるように飛んでいった。

「あっちゃ～、失敗」

「どうします？」

「もう少しやろう」

「いいですよ」

この後疲れきった私は刹那さんに軽くあしらわれて負けてしまった。だけど悪くなかったわ。

天魔ｓｉｄｅ

流石は我が娘。だが明日菜もよく頑張ったものだな。

「娘が勝ったのだ。私も勝たないとな」

『それでは選手入場して下さい』

では行くとしよう。相手はエヴァンジェリン。油断は出来んな。

『今回の戦いは刹那選手の父である天魔選手と、麻帆良二大エターナルロリの一人であり骨董屋『千年城』のアイドル！！好きなものは家族というエヴァンジェリン選手！！って解説の茶々丸さんが言

ってました』

「茶々丸ぅ！！」

『出番が少ないのでこういう所で稼がないと』

愉快な家族だな。刹那には家族という経験を殆どさせてやれず、情けない親だ。

『頑張って下さいマスター・エヴァ。勝ち目はあります』

「当然だ。優勝賞金は千年城の増築資金にするぞ」

「私も勝って娘と戦いたいのでな。悪いがお前は負けてくれ。なに、お前が負けても志貴がいる」

「兄様ばかりに負担は掛けられん」

『それでは、試合開始！！』

試合開始の合図と同時にエヴァンジェリンが何かしたようだ。目には見えぬとも大気を伝わり感じる事が出来る。何かはわからぬが、0にしておこう。

「ちっ、相変わらず厄介な能力だな。エーテライトを消すか」

「気づかなければ消せないがな」

先ほどのはエーテライトというのか。大気から感じた様子では見えない糸といったところか。もしそれだけなら楽だが。

「何かされる前に倒させてもらう」

エヴァンジェリンｓｉｄｅ

天魔の纏う空気が変わったな。そう、文字通り空気がな。

「今の私に近付くのは得策ではないぞ。斬り裂かれたいのならば止めはしないが」

「真空の鎧と言ったところか。流石は天狗の長だな」

「こういう場でそういう事は言うべきではないだろう、真祖の吸血鬼よ」

「貴様もな」

とにかく障壁を強化しよう。それとエーテライトで肉体のリミッターを外しておくか。擬似神経であるエーテライトの本来の使い方は戦闘ではない。糸としての性能もいいから戦闘でも十二分に使えるがな。

「斬り裂け！！」

ガキン

「なかなか速いな」

「そちらも硬いな」

正直私の爪を弾くとはな。もう少し魔力を籠めないとあの鎧は斬れないか。

「そら」

「くっ！？」

天魔がただ腕を振っただけで中級魔法クラスの暴風が巻き起こった。障壁を強化していなければ少々マズかったな。

「お返しだ。魔法の射手・闇の……」

「どうした？」

「いや、この試合中にあまり目に付く魔法は使わないと兄様と約束して」

「約束を破ると？」

「……怒られる」

「お主は子供か」

でも兄様は怖いんだもん。怒られたくないもん。……さて、あの鎧をどう消すか。そうだな、あの言葉を言ってみるか。

「そろそろ終わりにしようか」

「せっかちだな。吸血鬼ならばそう生き急ぐ必要もあるまい」

「試合には制限時間があるんだよ。一美ちゃ「小娘如きがその名で俺を呼ぶな！！！！」ガフッ！？」

「泣け！叫べ！！そして死ねぇ！！！」

「……っ！？」

一瞬で蹴り上げられ、連撃を入れられ叩き落とされた。ここまでキレるとは。骨や内臓が幾つか逝ったぞ。

「だが触れたぞ」

「……」

バタン

『あ、あれ？天魔選手ダウン』

『見事です。マスター・エヴァ』

「こちらも重傷だがな」

エーテライトを使って上手く気絶させる事が出来たが、代償がデカすぎるぞ。まあこれで兄様に褒められるな。

ーーーーーー

『ここでズェピア先生主催のハーフタイムショーです』

「こんにちわ。この度はこのような時間を頂き有り難く思う。では主演の「寝てろ！！」」

パンパンパン

「ギィヤァァァァァァ！！！？」

『撃たれたー！？』

「ゴム弾です。問題ありません」

「ゴム弾を舐めてはいけないよ、シオン。しかし衣装はどうしたのかね。主演だというのに」

「これが衣装ですか。この布切れが」

「布切れとは失礼な。立派な紐ビキニじゃないか」

「……ちょっと来なさい」

「ま、待ちたまえ！！マントを引っ張るな！！ぐ、ぐるじー！？」

『……朝倉さん、ハーフタイムショーは『ハーフタイムショーなどなかったのだよ茶々丸さん！！』えー』

ーーーーーー

文ｓｉｄｅ

まさか天魔様がやられるとは。名前にコンプレックスを持ちすぎです。さて私は今、鬼人とやらと試合をしているのですが……

『さあ試合が始まって5分。文選手の猛攻をなんとか避けている鬼人選手！！万事休すか！？』

なんとか？違う。これは必要最低限の動きで余裕を持って避けている。非常に緩慢だが捉える事が出来ない。

「本当に何者ですか。貴方のような存在は初めてです」

「……」

「黙りですか」

「……答える必要がない」

「そうですか」

蹴ろうが殴ろうが効かない。真空の刃を飛ばしても避けられる。本当に人だろうか。

「なら、もっと速く!!」

私は限界まで速度を上げる。だがそれでも捉えるに至らない。そして私が急転回するために地に足を着いた瞬間……

「え?」

鬼人が消えた。そして世界が反転し、頭から地面へと叩きつけられた。

「ガハッ!!?」

い、しき…が……

「！　此処は」

「医務室」

「要さん……」

私は……負けたのですか。まさか初戦落ちとは。

「何が起こったのですか？」

「投げられて頭から地面にドーン。本来なら首の骨が逝ってるよ」

「そうですか。天狗で良かったです」

「いや、手加減されたからだ」

手加減？あれでですか。つまり本気を出されたら一瞬で私を殺せたと。

「隠したつもりだろうが、あれで誰かわかったよ」

「本当ですか！？では正体は？」

「……や…りか。死者が……に会い……たか？」

「要さん？」

小声で何を言ってるのか聞き取れない。ただ、死者というのだけは聞き取れた。

「要さん、あれは死人なんですか？」

「……」

「要さん!!」

「！　すまん。なんだ?」

全く聞いていなかった。さっきのも独り言でしょうか。

「あの鬼人の正体は?」

「そうだな。今は秘密にしよう。そのうちあいつが暴くさ」

あいつ?誰でしょう。知り合いでしょうか。これは一波乱ありそうな匂いがしますね。

まほら武道会本戦　その２（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「鬼人は死人だったのだ」

椛「こんにちわ皆さん。いつもほのぼのかなもみ楽屋訪問の時間です」

叶「パパが鬼人の正体に気づいたみたいだね。他にも気づいた人がいるみたい」

椛「誰でしょうね。気になります。さて今回の楽屋は麻帆良のパパラッチこと朝倉さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

朝倉「同志！！その記事取って！！」

文「はいはい！！あ、印刷機が詰まった！？」

朝倉「こんな時に限って！！」

文「タイプライターでやるしかないですね！！」

朝倉「任せた！！」

叶「……忙しそう」

椛「よく文さんの手伝いをされていたからあの苦労はわかります」

叶「新聞一つでも苦労は多いんだ」

椛「ほぼガセですけど」

朝倉・文「「ガセじゃない!!誇大報告だ!!」」

椛「駄目じゃないですか」

叶「では次回もお楽しみに」

まほら武道会本戦　その3（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「彼氏が出来ました」

シャ「また嘘？」

ア「本当」

シャ「嘘～」

ア「ちょっと来て」

男「来たよアリサ」

シャ「あれ？スタッフさん……まさか！？」

ア「社内恋愛ね。ねえみっくん」

み「それはプライベートだけにしてくれよ」

ア「いいじゃない。あの行き遅れに見せ付けてやりましょう」

シャ「うわぁぁぁん！！アリサちゃんの馬鹿ぁ！！」

み「……行っちゃいましたね。後でちゃんと謝って下さいよ」

ア「そうね。ちょっと冗談が過ぎたわ」

み「いきなり呼ばれたと思ったらこんな悪戯に付き合わされるなんて」

ア「あら、でも私は貴方の事好きよ」

み「はい？」

ア「じゃああらすじね。
・兎と亀
・一美ちゃん
・文瞬殺
では本編どうぞ」

まほら武道会本戦　その３

志貴ｓｉｄｅ

次は俺の試合だな。ちゃんと勝ち上がらないと。

「志貴頑張ってね」

「ああ、勝ってくるよ。アルクェイドも応援頼むよ」

「任せなさい！！」

「兄様、決勝で会いましょう」

「そうだな」

相手は要の生徒みたいだけど、はっきり言って負けるつもりはない。

ここはただの通過点でしかないんだ。

『選手入場して下さい』

「行ってくるよ」

「行ってらっしゃい」

「では姉様、観客席まで行きますよ」

「ええ」

『麻帆良四天王の一人、我がクラスメートの長瀬楓選手対包帯を顔に巻く謎が多い男、志貴選手の戦いです。茶々丸さん、どうなると思います？』

『志貴さんが勝ちます。当然です。必然です。この世の真理です』

『はい聞くだけ無駄でした』

ハハハ……茶々丸の奴何を言ってんだか。相手に失礼だろ。

「すまないね長瀬さん」

「気にしてないでござるよ。それより早く始めるでござる」

「わかった」

獲物は七夜の短刀が使えないから金属の撥。神様に貰ってから結構使い込んだけど、やっぱり俺にはしっくりこない。親父だから使いこなせたんだろう。記憶には殆どないが、あの芸術にまで昇華した暗殺を忘れる事はない。

「変わった武器でござるな」

「親父のものさ」

「成る程、形見でござるか」

「そんな大層なものじゃない」

『それでは試合開始！！』

「シッ！！」

長瀬さんが瞬動を使って向かってくる。真っ直ぐにではなくジグザグに動くから多少捕捉がし辛いが、見えてるからマシだな。

「そらっ！！」

「ぬっ！？」

撥を振って長瀬さんの動きを止めた。そのまま連続で攻撃を仕掛けていく。長瀬さんはなんとか避けながらも反撃をしてくる。

「ハァッ！！」

「せいっ！！」

このままやってもいいんだけど、時間が掛かりそうだな。

「志貴殿」

「なんだい？」

「本気を出す気はござらんのか？」

そうだな。七夜の技を使うのは控えようと思ったけど、隠す必要はないか。

「じゃあ、少し見せてあげるよ」

「それは楽しみでござるな」

「寝てな！！」

閃鞘・八穿

「ぐっ！？」

一瞬で長瀬さんの上に跳び、首に撥を叩き込む。それで長瀬さんは地に沈んだ。初見で七夜の技を見切れるのはいない……と思う。

『一撃必殺！！志貴選手の勝利です！！』

『お見事でした！！流石志貴さん！！素敵です！！』

『茶々丸さんテンション高すぎ。性格変わってるよ』

さて、次の試合まで眠るとしよう。

舞人ｓｉｄｅ

僕の相手は真名ちゃんなんだよね。まあ今回の試合は真名ちゃんには不利なルールだから大変だね。

「まーくん、優勝してお店の増築資金を獲得してきて下さいね」

「頑張るよ」

次の要さんとの試合も楽しみだからここは勝ちたいね。

『さあ選手紹介です。麻帆良四天王の一人、保護者はクラトス先生、麻帆良祭では射的屋に出禁になってしまった孤高のガンマン！龍宮真名選手！！そして相手はあのモテモテ兄妹の兄！最強のお花屋さん！牧原舞人選手！！』

「真名ちゃん、よろしくね」

「ええ。初戦から貴方に当たるとは私も運が悪いな」

「後悔してね」

僕が使うのは鞭。これが便利なんだな。でも女の子の肌に傷を付けるのはちょっと嫌だな。適当に手加減するかな。

「鞭とは……Sか？」

「どちらかと言えば純愛S風味」

「それは何ともコメントし難いね」

「だろうね」

『お二人共、試合開始しても？』

「「どうぞ」」

『では試合開始！！』

試合が始まったのはいいけど、僕も真名ちゃんも動かない。向こうは警戒しているんだろう。僕はカウンター狙いなんだけど。

「来ないの？」

「貴方相手にまともに立ち向かえと？」

「……ならこっちから？」

「観客もそれを望んでいるのでは？」

「なら君から仕掛けたら？」

「それをしたらやられるって言ってるだろう」

むーん、ならしょうがない。ここは僕から仕掛けないと試合が始まらないもんね。

「そりゃそりゃそりゃそりゃ！！」

「！　見える！！私にも見えるぞ！！」

赤くないよね君。まあ結構なスピードで振ってるからそのセリフは合わないこともないけど、うん、ギャグだよね。

「連牙弾！飛燕連天脚！！鷹爪落爆蹴！！！」

「おぉう！？」

脚技の連続攻撃。連続で蹴りを放つ連牙弾で相手の動きを固め、飛燕連天脚で打ち上げ、鷹爪落爆蹴で叩き落とす。隙のない良い連撃だけど、僕には効かないな。

「遠距離武器が使えないなら、遠距離武器じゃないもので遠距離攻撃をすればいい！！」

「うわわ！？ボールペン！？」

投げナイフみたいにやってきたけど、これはいいの？

『茶々丸さん』

『大丈夫です』

「だそうだよ！！」

「ひゃー、ならこっちも。ていっ！！」

「キノコ？」

武器じゃないもので攻撃していいならこれでやってもいいよね。真名ちゃんは僕が投げたキノコを警戒しているのか蹴りで弾いた。

「気をつけてね」

「何かあるようだね」

「うん。即効性の麻痺キノコだから」

「……確かに」

真名ちゃんはさっきと比べて動きが鈍くなった。だけど全く動けない事もないみたいだね。他の毒に対して抗体を持っていてそれで対応しているのかもしれない。

「だけどもう君では勝てない」

「だね。まあもとより勝ち目のない戦いだからしょうがない」

「ここで諦めたら駄目でしょう」

「試合と戦場の区別は付けてるから大丈夫さ」

まあ真名ちゃんにとってこれは遊びみたいなもんだもんね。きっと要さんやクラトスさんも強い人が出るから出てるだけ。こんな終わりでもいいか。

「朝倉、私の負けだ」

『あ、じゃあ牧原選手の勝利です』

観客の反応が微妙だけどしょうがないしょうがない。

要ｓｉｄｅ

……次はまーくんか。

「要さん、ポカリいる？」

「ありがとうスバル」

「一気だったね」

「ああ」

……一撃だったな。中国二号に、古菲に悪い事したな。

「試合内容は適当にどうぞ」

「スバル、何言ってんだ？」

「聞いちゃ駄目ですよ」

ふむ、あれか、画面の前の皆さんのための配慮か。そりゃ聞いちゃ駄目だったな。

ーーーーーー

『一回戦最終試合！！麻帆良四天王最後の一人！古菲選手！！そして麻帆良の最終兵器！この人は本当によくわからない！チャームポイントは胃痛！一条要選手！！』

「朝倉減点」

『ええ！？』

「さあやるアルヨ！！」

『……では試合開始！！』

「オォォォォォォォォォォ！！！」

「ひゃあぁぁぁぁぁ！！？」

オーモーイーガー

『蹴り飛ばして星になった！？って何このＢＧＭ！？』

「演出だ」

ーーーーーー

あれは演出だから古菲は星になってないぞ。ホントダヨー。

「じゃあ軽食にしよう。なんかあるか？」

「いろいろとありますよ。唐揚げとかステーキとか」

「それ軽くないぞ」

とりあえず、次からは更に楽しい戦いが多そうだ。俺も楽しもう。

まほら武道会本戦　その３（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「古菲お姉ちゃんは星となったのだ」

椛「妊娠しました」

叶「え゛？」

椛「まだ３ヶ月だから頑張るよ」

叶「あ、うん。あんまり無理しないでね」（椛お姉ちゃんファンの人に殺されないかな）

椛「今日の楽屋は近右衛門さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

近右衛門「うむ、いらっしゃい」

椛「こんにちは」

叶「パパのお弟子さんなんだよね」

近右衛門「うむ、師匠は厳しかったのぉ。本当に……」

椛「某大型ＳＳ掲示板の検索板でまともな学園長として紹介されてましたね」

近右衛門「まともと言われても、あれが普通だと思うのじゃが」

叶「それが普通って言えるのが偉いと思うよ」

近右衛門「ほっほっほ、ありがとう」

椛「さて今回はここまで。次回もお楽しみに」

一周年記念座談会（前書き）

はい、突然ですが今日5月3日は私、雨季がこの小説家になろうにデビューして一周年となります。
なので今回は一周年記念企画としてコラボ座談会をさせて頂きます。
本編を楽しみにしていた方は申し訳ありません。
ではご覧下さい。
ちなみにコラボキャラのみならず『チートじゃ済まないシリーズ』のキャラがいろいろ登場します。

一周年記念座談会

雨季「はい始まりました。一周年記念座談会」

要「早いものだな。もう一年か」

雨季「ゲストも馬鹿みたいに多いよ。総勢５５人（？）。知らない人もいっぱい」

要「それは大丈夫か？そして（？）はなんだ」

雨季「人じゃないのもいるから。アリストテレス残念だけどエクスはいないよ」

アリストテレス《誰も残念がってなどいませんよ》

要「エクス可哀想に」

アリストテレス《主まで》

雨季「そんなのは置いといて『チートじゃ済まないシリーズ』の歴史はコラボと共にあり、今回はコラボをして下さった作者様。そして今回登場するその作者様のキャラの順にキャラ紹介をしたいと思う」

要「となるとまずはあいつらか」

雨季「最初の記念すべきコラボをして下さった秋代様。そしてそのキャラ、南武貴史、近衛薫、カスミ・ヴェネーラ。そして元は香崎

様のキャラである神崎ジェイル。更に貴史とジェイルの娘である神武乱です！！」

貴史「来たぜ」

要「いきなり多いな」

ジェイル「駄目だったかな？」

要「いんや、悪くはない。薫はあれだが」

薫「何でや！！」

カスミ「まあ、こっちでの扱いがあれだからな」

薫「胃痛にしたる」

乱「今は薫さんの方が胃痛リスクは高くないか？」

薫「ひどっ！！もうええ……」

貴史「そんな顔すんなよ。せっかくの美人が台無しだぞ」

薫「うちの味方は貴史だけや」

叶「ママに乱お姉ちゃんに貴史パパ！！」

ジェイル「叶か。大きくなったな。どれ、抱かせてくれ」

叶「うん！！」

要「乱も便乗して甘えたらどうだ？最近、というか甘えた事なんて殆どないだろ」

乱「俺は別に」

叶「乱お姉ちゃんも一緒に」

乱「あ、いや」

貴史「いいじゃないか。言うこと聞かないと叶が泣くぞ」

乱「うぅ……」

カスミ「相変わらず乱は叶の涙に弱いのだな」

貴史「全く」

カルタ「では貴史は僕の涙に弱いのかな？」

亜衣「かな？」

貴史「いきなり背後を取るな！！」

要「やっぱり来たか。ほの管組」

雨季「さてお次は、本当長いお付き合い、要も何度も世話になりましたライ様。そしてキャラであり、完結した作品の主人公、御剣一真です。落ちよ！！」

一真「よっと」

スタッ

要「よう、隠居中なのに悪いな」

一真「祝い事だ。気にするなよ」

マリア「ご苦労だったな旦那様」

一真「マリアも来たのか。真哉と聖哉は？」

マリア「二人はお留守番だ。二人共旦那様に会いたがってるぞ」

一真「なら今度行くとしようか」

要「ラブラブだな。なのは達の相手はいいのか？」

一真「普段一緒なんだ。それにあいつらは理解があるからな」

雨季「では次に参りましょう。この方も長い間支えてくれました。最初は名前が読めなかった黎音様。そのキャラ、ゼフィリス・エーデルフェルトと両儀志貴の登場です」

ゼフィリス「失礼する。この度は一周年おめでとう」

要「わざわざ花束を持ってくるとは」

ゼフィリス「お前ではなく舞人と舞花にだ」

要「そうかい」

舞人「ありがとうございます、お父さん」

舞花「大切にしますわ」

ゼフィリス「二人も立派になったものだな。あんな世界に送ったのは失敗したかと思ったが」

要「……その喧嘩買おうか」

ゼフィリス「決着を着けるか？」

志貴「おいおい、俺の前でそんな面白そうな事するなよ」

要「部外者が入るなよ。これは俺らの喧嘩なんだ」

志貴「ならそこのあんた。俺と殺し合うかい？あんたならなかなかいい殺し合いが出来そうだ」

一真「悪いな。もう引退してるんだ。他を当たってくれ」

雨季「次に行くからお前ら自重しろ。次もお世話になってます。この人が書くものは面白い。香崎　真琴様。そのキャラ、チート夫婦こと神北鈴、御神百合姫、そしてナンバーズのセインです！！」

鈴「要の胃は大丈夫か？」

要「まあ最近はな」

百合姫「良かったじゃない。ジェイルは久しぶり」

ジェイル「お久しぶり父上、母上。こういう場で会えるのはいいものだな」

セイン「要さんこんにちは」

要「大丈夫か？最近無理してないか？」

セイン「はい、お陰様で」

要「それは良かった。何かあったら相談に乗るからな」

鈴「完全にカウンセラーだな。胃痛の先輩は流石だな」

百合姫「これからもその調子で娘を頼むわよ」

要「自分の娘だろう。まあ胃痛仲間だからな。任されよう」

雨季「チート夫婦の登場は今回と同じ座談会なんだよね。お次も初コラボは座談会のバルディッシュ様。そのキャラで数少ない非オリキャラのヒスイ・ハーツ、シルフ、ウンディーネです」

ヒスイ「よう要」

シルフ「こんにちは」

ウンディーネ「余は初登場だな」

要「おう、何気にうちではヒスイより先にシルフが登場したんだよ

な」

ヒスイ「そうだったな」

シルフ「あの時の要さんは丁寧でしたのにね」

要「まああの時はまだ初対面には優しくってのが基本だったからな。今は気にしてない」

鈴「ああ、あれか。今思い出したら気持ち悪いな」

ウンディーネ「ほう、どのような感じだったのだ？」

要「初めまして。これからよろしくお願い致します。ってな具合だっけ？」

ウンディーネ「ゾッとするな」

ヒスイ「そんな要は嫌だな」

雨季「お前ら久遠やるから静かにしてて」

久遠「クー？」

シルフ「では私が」

ゼフィリス「そこは先輩である私に譲るべきだろう」

百合姫「久遠は私達のよ」

鈴「そうだぞ。久遠は簡単にはやれんな」

要「久遠は俺の家族なんだが」

一真「久遠も大変だな」

貴史「俺も参加するぞ」

雨季「久遠の人気は流石だね。では次に行こうか。意外と接点が多いです。１０００感想もやってくれました。海人様です。そしてそのキャラである飛翔とアリシアです」

飛翔「一周年おめでとう」

アリシア「みんな久しぶり」

要「珍しいな。二人だけか」

飛翔「作者が気を使ったんじゃないか？何人だっけ？」

要「５５人らしい」

アリシア「それは多いね。よくやるね」

雨季「えへん」

要「偉そうにするな。誰も褒めてない」

飛翔「そう言ってやるなよ。頑張ってるんだろ？」

要「褒めたらいかんぞ」

アリシア「一周年でも十分褒める理由になると思うんだけどな」

雨季「アリシアは優しいな。それじゃあ次に行こう。よくこんなチートを考えるもんだ。自分の名前と主人公が同じってどうなのと初めは思いました。八神カイト様。そしてそのキャラ、八神カイトと五行の黄宇、水薙、龍斗、紅蓮、更に俺が大好きショタっ子鋼牙です！！」

カイト「鋼牙に手を出すなよ」

黄宇「命が惜しくないならば別だがな」

雨季「流石に自重するよ」

要「おう紅蓮、弄られてるか？」

紅蓮「うるせぇ。燃やされてぇのか」

龍斗「今日は喧嘩に来たわけじゃないでしょう。全く、これだから熱血は」

紅蓮「んだと？」

龍斗「ふっ」

鋼牙「けんかはメッ！！」

紅蓮「……ちっ」

水薙「仲がいいのか悪いのか。ああじゃないとあの二人じゃないんだけどね。ねぇ黄宇姉」

黄宇「そうだが、こういう場では控えるべきだろう」

カイト「うちの家族が騒がしいのはいつもの事だ。それにここにはある意味俺ら以上に騒がしい」

鋼牙「楽しいね♪♪♪」

要「楽しいかどうかは別として、既にこの時点で騒がしいな」

雨季「えっと次は、そうそう、意外と長い付き合いのようで実は初コラボは前作終了記念のなっぺ様。今回は吉谷吼太、ベス、フォーティトゥードの登場です」

吼太「おお、やってるな」

トゥード「この世界は相変わらず人が集まりますね」

ベス「流石特異点。根の国なんか目じゃないね」

ゼウス「ベスだー。ただのスライムにしちゃえー」

スライム「色が!?って名前まで!?」

ゼウス「ぶははは!!雑魚だ!!雑魚に「マダンテ（怒）!!」ぐはぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

デデーン

吼太「流石のベスでもキレたか」

トゥード「くだらない神々の争いですね」

要「それくらいうちじゃあ普通なのが悲しいな。吼太、俺の代わりに一週間過ごさないか？」

吼太「断る」

トゥード「これ以上フラグを建てたら大変ですしね」

吼太「トゥード！？ってか俺はフラグを建ててない！！」

雨季「フラグ神達はみんなそう言う。酔っ払いみたいなものだね。次は早く更新頑張って。俺は待ってますよ、緋水様。そのキャラ、御門慧の登場」

御門「やぁ」

要「よう」

御門「……それだけ？」

要「だって交流殆どないだろ。お前が出てきたのネギまの座談会だし」

御門「それならこれから出る新人くん達だってそうじゃないか」

要「難しいな」

御門「そうだね。お兄さん困っちゃうね」

雨季「それはこっちも同じだよ。次は、この人との感想は毎度コラボ。でもそれもまたいい。七つ夜&夜つ七様。そのキャラ、如月刹那の登場です」

刹那「どうも、お久しぶりです」

要「誰か牛乳持って来い」

刹那「ちょっと待て！マジで牛乳拭いたボロ雑巾扱いする気か！？」

要「牛乳拭いたボロ雑巾扱いじゃない。牛乳拭いたボロ雑巾にするんだ」

刹那「ふざけるなよ！！」

要「真面目だ！！！！」

刹那「そんな力強く言うの！？雨季さん！何か言ってやってよ！！」

雨季「俺、刹那よりせつなが好きだから」

刹那「誰だよ！！」

雨季「次に参りましょう。えっと、うちの要が何度も世話になってます。初コラボは前作ラストの霊亀様。そのキャラであるライト・テスタロッサと華琳、サオリです。どうぞ」

ライト「お邪魔します」

要「おう、殴ったろか？」

ライト「嫌だよ！！」

要「冗談だよ。華琳も元気そうだな」

華琳「ええ、そこまで疲れる事がないもの。ただライトをあんまり弄らないであげてくれる？」

要「おっとすまない。いつも弄られる側だからついな」

ライト「ついでやられる方はたまったもんじゃない」

要「そういえばサオリは？」

ライト「さっき焦げたゼウスさんを連れてどっか行ったぞ」

華琳「どんなプレイをするのかしらね」

要「プレイとか言うな」

雨季「次からはｉｎネギまからのコラボだね。黎音様とリアルで知り合いらしい灰音様。そのキャラのゼロとリッゴー・トリニクル・スシェルス・グランセイス・ディレクトです。相変わらず名前が長い」

ゼロ「失礼します」

リッゴー「久しぶりー」

ゼフィリス「貴様らか」

ゼロ・リッゴー「「！？」」

舞人「お父さん、落ち着いて。僕らはお店の事は気にしてないから」

ゼフィリス「冗談だ。そう何度もやらんさ」

ゼロ「良かった」

リッゴー「心臓に悪いぜ」

要「ならこれからは転移に気を付けることだな。世界移動はほどほどに」

ゼロ「分かった」

リッゴー「でも楽しい事が多いからな。あんまり自重はしないかもしれないぞ」

雨季「えっと、次は交流は前作から。コラボは今作から。アルビオン様。そのキャラの流士と流夏海です」

士「ここまで多いとは」

夏海「うわ～、有名人がいっぱい」

御門「さてここで『い』を『お』に変えてみましょう」

夏海「え！？／／／／」

要「おっぱお」

夏海「え、あ、あはははは……」

士「あんまり夏海を苛めないでくれよ」

御門「ごめんね。お兄さん調子に乗っちゃった」

要「まあこのくらいは許してやれや。まだこれは可愛い方なんだから」

亜衣「これなぁに？」

カルタ「要くんのへそくりだな」

ジェイル「妻の私が許可する。使え」

多数『ヒャッハー！！金だー！！』

要「貴様らぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

士「……うん」

夏海「可愛い方だったね」

雨季「要のへそくりは置いといて、次に行こう。テイルズ好きだか

ら見てました。雪月花様。そのキャラ、シノン・ガラードとヴェルフグリントと美音です」

シノン「帰ろうかな」

ヴェルフグリント《早すぎます、マスター》

シノン「こんな所にいたら生命がいくつあっても足りない。サーヴァント達との修行より数千倍危険だ」

美音「あ、私とおんなじのがいる」

久遠「貴女も妖狐？」

美音「うん。美音だよ。よろしくね」

久遠「久遠だよ。よろしく～」

要「和むな。こういう光景はいいもんだ」

シノン「……へそくりは？」

要「聞くな」

雨季「はいはい、取られたのね。当然だな。次は、まあ、うん、パッとイメージは思い浮かばないけど絶対いい人。畏無様。そのキャラの安藤響介とスカイ、伊藤亮一、橘悠です」

要「多い！！」

響介「カイトさん達の方が多いよね！？」

スカイ《あんまりツッコんだらここでツッコミキャラとして使われますよ》

響介「まだ一回しかツッコミしてない！！」

亮一「またツッコんだ」

悠「こりゃ決定かな」

響介「俺の扱い酷くない！？」

要「そろそろ終わるぞ。霞が来るかもしれん」

スカイ・亮一・悠《「了解」》

カスミ「何か呼ばれた気がしたんだが」

要「あ、お前じゃない」

雨季「ツッコミは置いといて、次は初めて見た時は厨二病にしか見えなかった。激しく失礼ですね。ごめんなさいユタ様。そしてユタ様のキャラである哭堵優と哭堵裕緋、セイです」

優「邪魔するぞ」

裕緋「お兄ちゃん、もっと丁寧に」

セイ「こんにちは」

鏡「おお、同類ではないか。元気にしとるかのぉ」

セイ「え？あ、はぁ」

要「こら鏡。同じマテリアルでもいろいろ違うだろ」

優「そうだ要。勝負しようぜ」

要「お断りだ。哭堵とやるのは面倒だからな」

紅蓮「なら俺がやってやろうか？調子に乗ってるみたいだからな」

先生「君も調子に乗っていますね。紅蓮くん」

紅蓮「うげっ！？」

先生「ハッハッハ、少し来なさい」

紅蓮「あ、相棒！助けて！！」

カイト「流石にその人に喧嘩売る馬鹿はいない」

乱「……」

叶「どうしたの？乱お姉ちゃん」

要「喧嘩売る馬鹿、か」

乱「うぅ……」

鈴「落ち込むなや」

百合姫「そうよ」

サオリ「あの方と戦ったのが運の尽きですよ」

ライト「帰ってきたんだな」

吼太「うわっ！？何だこのミイラ！？」

サオリ「ゼウスさんですよ」

要「搾られたようだな。南無」

雨季「次は初めてコラボが来た時はいきなり過ぎて流石に驚いた。ぱっつぁん様。そのキャラ、シキ・K・アスタロトとティアレンス・バイシタルの登場です」

シキ「ここか」

ティア「よぉ」

要「また静かなのが来たな」

志貴「俺と同じ名前のか。あっちは両儀式に似てるな」

ヴィータ「おう、シキじゃねぇか」

シキ「ヴィータ閣下お久しぶりです」

ウンディーネ「あいつらはどういう関係なのだ？」

セイン「閣下？」

要「何やらヴィータの優しさにシキが感動したらしい。まあうちのヴィータの優しさは天元突破してるからな。セインも何か相談するといい」

セイン「はぁ、そうですか」

雨季「次は知り合ったのは最近。でも他のコラボで何度も会ってるという不思議。十六夜アミナ様。セレナ・アーヴェルンクスとマリア・アーヴェルンクスと八雲紫です」

セレナ「あ！ライトくんもいる！！」

マリア「初めまして」

紫「何というか、ここは生物的に危険を感じるわね」

要「妖怪なんて目じゃないのがいくらでもいるからな」

ライト「セレナ、くっつくなって」

セレナ「誰も気にしないから、ね？」

マリア「幸せそうですね。いい光景です」

要「そうか？」

雨季「次はエリオ伝でコラボが初。でも知り合ったのはかなり以前。俺のイメージはオカマキャラを作るのが上手い。モンハンリレーでも頑張ってる２４９様。そのキャラ、長瀬陽とファルチェ・ロッソです」

陽「おう、やってるな。ってババァいるじゃねぇか」

紫「だ・れ・がババァかしら？」

ファルチェ「教育が足りなかったようね。しっかり教育し直さないとね」

陽「お前ら、止めろーーー！！？」

要「めでたい席だ。やるのは俺がやる。ＯＲＴ解放！！」

陽「待て！！それは流石に、ぐあぁぁぁぁぁぁ！！？」

ファルチェ「飛んだわね」

マリア「そちらの方は男性ですよね。何故そのような口調を？」

ファルチェ「秘密よ。というか気付かれるとは思わなかったわ」

吼太「男がここまで女らしくなれる方法を知ってるという事は、その逆も！！」

ファルチェ「ないわ」

吼太「くそ……」

飛翔「しょうがないな」

鋼牙「可愛いと駄目なの？」

黄宇「彼はもっと、こう、ムキムキになりたいんだ」

吼太「間違ってはないけど、普通に細マッチョってな感じで」

ヒスイ「要みたいなのか？」

雨季「どうでもいいのは放っておこう。次の人はモンハンリレーで頑張ってくれてるけどコラボは初。登場キャラはレイト・Ｍ・テンリュウです」

レイト「初めましてだ。よろしく頼む」

要「ああ。これからどんな付き合いになるか分からんがな」

レイト「まあそうだな」

要「弄られないようにな、新人」

レイト「注意しよう。さっきのツッコミのようになりたくはない」

雨季「響介は新人じゃないんだけどね。次からうちでは殆ど初めての人。まずはＶＡＺＵ様。登場キャラはサキです」

サキ「ん」

要「女の子だな」

サキ「解ってくれて良かった」

要「男の娘勢をいっぱい見た事があるからな。あれとかオカマだぞ」

ファルチェ「あれとは失礼ね。ゼフィリスくんなんて天然物よ」

ゼフィリス「誰が天然物だ」

サキ「いっぱいいる」

雨季「次は、あんまり交流がないサーペント様。そのキャラの紅朱蓮です」

朱蓮「よろしく」

要「ああ」

朱蓮「……何を話せばいい？」

要「知らん。お前の事を知ってるわけじゃないからな」

雨季「あんまり上手く交流出来ないようだから次。次はたまに地道に感想を下さる橘　潤様。登場キャラは月影凛です」

凛「どうもです」

要「男の娘勢追加」

凛「誰が男の娘か！？」

吼太「……」（ポン）

凛「無言で肩に手を置かないでくれ。そしてその笑顔はなんだ」

要「仲間が増えたからだろ。ライトもフラグ神が増えたら嬉しいよな」

ライト「こっちに振るな」

雨季「はいこれで全員紹介したね。したよね？ともかく物凄い量だ」

要「これから自重しろよ。一作者一人とか」

雨季「そうだね。でもキャラ紹介だけでこんな量になるなんて思わなかったんだもん」

全員『適当にかき集めたあんたが悪い』

雨季「ですよねー」

要「さあ雑談タイムだ。このメンバーだと会話が出ないのもいるだろうが、頑張ってくれ」

雨季「主に薫とか」

薫「何でやねん！！！雷帝モードでビリビリやで！！！」

椛「皆さん、お茶ですよ～」

百合姫「妊婦が無理しちゃ駄目よ」

ファルチェ「そうよ。こういうのは私達がやるから」

椛「え、でも皆さんはお客様ですし」

ゼフィリス「客だろうと何だろうと関係ないよ」

ジェイル「さあ休んでなさい。ちゃんと安定期に入るまで無理はしない事だ」

水薙「綺麗でしょ？あの四人のうち半分は男なのよ」

ヒスイ「そうだけど今言う事じゃないだろ」

シルフ「鋼牙くんは可愛いですね～♪」

鋼牙「シルフお姉ちゃん風の薫りがする♪♪」

雨季「ちょっと混ぜて」

御門「奥さんが妊娠中は旦那さんがしっかり働かないとね」

雨季「うわぁー！！反論出来ねー！！」

アリシア「一応自覚はあるのね」

夏海「まあそうじゃないと椛さんも惚れないと思いますよ」

裕緋「こんな事に発展する前に別れてるよね。しかし椛さんも器が大きいよね」

セレナ「それが愛だよ。ねぇ、ライトくん。っていない！？」

マリア「シキさんと一緒にどこかへ行きましたよ」

セレナ「止めてよ！！」

シキ「良かったのか？」

ライト「まあ、のんびりしたいしな」

サキ「……」

ライト「ん？確か、サキちゃんだっけ？」

サキ「ん」

シキ「どうしたんだ？」

サキ「騒がしいの、得意じゃない」

龍斗「分からなくもないですね」

セイ「そうですね」

ライト「先客がいたか」

志貴「ここは比較的静かなのが集まってるな。殺し合いが禁止ならこういう場所にいるのが一番だ」

ウンディーネ「お主はその性格はどうにかならんのか？」

志貴「性分だ」

凛「凄い性分だな」

響介「俺は弱いと先に言っとく」

吼太「近寄らないでくれないか？」

レイト「完全に不審者扱いだな」

志貴「心外だなぁ、全く」

華琳「あら、随分と男の娘が集まってるのね」

凛「誰が」

吼太「男の娘だ！！」

サキ「……五月蝿くなってきた」

刹那「ハハハ、大変だな」

優「お前もせつなとやらになれば男の娘になるだろ。あれの同類だ」

刹那「だからせつなって誰だよ」

ヴェルグリント《どうも》

スカイ《初めまして、スカイと申します》

ヴェルグリント《ヴェルグリントです。以後お見知りおきを》

亮一「何デバイス同士で挨拶してるんだ？」

ゼロ「デバイス同士でも挨拶は大切だと思うぞ」

乱「そういう感じか？」

ティア「いいんじゃないか？人であれデバイスであれ名前ってのは

大切なもんだ」

カスミ「世にも珍しい俺っ娘が二人いるぞ」

薫「ホンマや」

カイト「意外といないよな、俺っ娘」

乱「……俺らの一人称に文句あるのか？」

ティア「よし乱、俺と共同戦線だ」

乱「ああ、やってやろう」

叶「乱お姉ちゃん！！胸量らせて！！」

乱「唐突過ぎるだろ！？しかもその字だと重さだ！！」

亜衣「そっちのお姉ちゃんも！！」

ティア「俺まで！？」

リッゴー「おいこら、素晴らしいじゃないか。もっとやれ」

士「止めろよ。煽ったら駄目だろう」

リッゴー「あれを止める自信はないな」

士「……確かに」

ベス「こういう場は気分が高揚しますね」

ゼウス「そりゃそうさ。あ、セインちゃん、お酒追加」

セイン「はいはい」

要「セイン、待ちなさい」

セイン「どうしました？」

要「いや、簡単な事だ」

ゴク

ゼウス・ベス「「お酒が！？」」

要「セインに迷惑掛けてんじゃない！！酒くらい自分で取りに行きなさい！！」

一真「セインの事を考えながら自分は酒にありつくか」

トゥード「汚いですね。しかもセインさんの事を考えながらですから怒りにくい」

悠「なんというタチの悪さ。これが一条要か」

朱蓮「あの人はそういう人なのか」

飛翔「変なイメージが要に植わってきてるな。まあ訂正の必要はないか」

貴史「いや必要だ。おいそこの二人!!」

悠「何?」

朱蓮「どうした?」

貴史「あれが要?違う!!あれは要の１%未満に過ぎない!!では残りの要とは何か。胃痛だ!!要の９９%をしめるのは胃痛なのだ!!」

飛翔「貴史、ちょっと自重しよう」

サオリ「ゼウスさん」

ゼウス「はひっ!?」

サオリ「お酒ばっかりで私の相手は無しですか?」

ゼウス「いや、それは、ってもう搾られたくない!!」

先生「君達、逃げてばかりではいけませんよ」

紅蓮「誰か助けてくれ！！」

陽「能力が何も使えねぇ！！」

先生「ほぉら、世界が圧縮されますよ」

紅蓮「抗えねぇ！！やっぱり反則だ！！」

陽「まだ、まだ死ぬには早いんだ！！」

紫「大変ね、彼らも。世界圧縮は私達には影響ないのかしら？」

黄宇「紅蓮は毎度の事だし。あの男は女性をババァなどと言ったからな。世界圧縮はあいつらの周りだけだろう」

鈴「目上に対する礼儀が足りなかったって事だ。しかしあの人は変わらずおかしいな」

美音「よく知らないけど凄いんだね」

シノン「みたいだな」

鈴「ちょっとそこな狐っ娘。膝に乗らないか？」

美音「シノンのがいい！！」

シノン「おっと、いきなり乗るなよ」

紫「ふふっ、負けたわね」

鈴「ちくせぅ」

シルフ「すぅ、すぅ」

鋼牙「むにゃ」

御門「抱いたまま寝てるね」

夏海「この子抱き心地良くて暖かそうだもんね」

水薙「鋼牙だもの。ここの作者が飛び付くのもしょうがないわ」

裕緋「あ、今笑った。可愛い」

御門「完全に癒やし空間だね」

ヒスイ「ふぅ」

アリシア「疲れたの？」

ヒスイ「いや、ここでの生き方は慣れてるから」

アリシア「古参だからね」

ゼフィリス「前作からの付き合いだ。慣れるのは当然だ」

久遠「ゼフィリス～」

ゼフィリス「おっと」

久遠「知り合いが多いと落ち着く」

貴史「何してるんだ？」

一真「椛の世話は終わったのか？」

飛翔「アリシアここにいたのか」

ヒスイ「本当に古参が集まってきたな」

ゼフィリス「久遠が寝たから静かにしてくれないか？」

一真「それは悪かった」

飛翔「新しいのと話すのもいいけど、知り合いと話すのもいいな」

貴史「多分ここが無ければ知り合わなかったのもいるだろうしな」

雨季「はい、これにて終了です。俺が動かしやすくて沢山出たキャラも、動かしにくくてあんまり出なかったキャラも、みんなお疲れ様でした」

要「不満があったら遠慮なく言ってくれ。修正するから」

レイト「質問だが、こういう時は土産は貰えるのか？賤しいようで悪いが」

雨季「当然あげるよ。ただみんな欲しい物は違うから困るんだよね」

朱蓮「人間だから当然だよな。料理好きなら包丁とかだろ？」

ジェイル「ではどうするのかね？」

雨季「いろいろ考えた結果、一人一枚このカードをあげます」

水薙「これは？」

雨季「願えば自分の欲しい物に変わるカード。ただ問題が一人」

一真「俺か？作者にやるから気にするな」

雨季「それは助かる。完結した作品の主人公である一真はどうしようかと思ったんだけど、それならいいね」

ファルチェ「しかし便利ねぇ」

ゼウス「頑張りました」

サオリ「流石です」

雨季「ではそろそろ終わりにしたいんだけど、何か言いたい事がある人はいる？」

薫「うちはもっとええ扱いでも問題ないと思う。ヒロインやで」

アリシャ「「こっちに来ない？」」

薫「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

悠「胃痛が見たい」

要「誰の入れ知恵だ」

志貴「こっちの志貴と殺し合いたいんだが」

雨季「早く帰れ」

要「一応今は客だから抑えろ」

雨季「では皆さん。本日は本当にありがとうございました。こんな駄作ですがこれからもよろしくお願いします」

一周年記念座談会（後書き）

皆さんご覧頂きありがとうございます。
これからも多分、そこそこ続いていくであろう『チートじゃ済まないシリーズ』をよろしくお願いします。

まほら武道会　その４（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「作者が口内炎でモチベーションだだ下がり」

シャ「駄目じゃない」

ア「前回は突然の一周年記念でごめんね」

シャ「本当にね。ただ今回は鬼人の正体がわかるから」

ア「では前回、というか前々回のあらすじね。
・自重しろ
・一瞬すぎる
・オーモーイーガー」

シャ「じゃあ本編どうぞ」

まほら武道会　その４

クラトスｓｉｄｅ

小太郎が相手か。先の試合では相手の隙を突いて倒したようなものだから全力ではなかったろうが、その実力は十分に伝わってきた。そう簡単には倒せないだろう。

『バッドでデスメガネこと高畑先生を軽く倒してしまったクラトス選手対圧倒的な力の差でネギ選手を打ち破った小太郎選手。勝利の女神はどちらに微笑むのか！！』

「おっちゃん、よろしゅう」

「胸を借りるつもりで来るといい」

「ほなそうするわ。今回は木刀なんやな」

「流石にな」

盾も今回は無しだ。動きの早い相手には邪魔だからな。

『では試合開始して下さい』

どのように攻めるか。小太郎のようなタイプにはカウンターがいいか。

「斬り裂く！！」

「甘い！！」

爪を振った小太郎の背中に木刀を振り下ろした。しかし弾かれてしまった。魔法障壁のようなものではなく気の鎧と言った感じだな。

「どうや」

「気の特性をよく理解している」

気というものは魔力とは違い、人の体内にしか存在しない。それ故放出といった面では魔力に劣るが、肉体の強化や小太郎の使ったような硬化は気の方が上だ。

「うおりゃ！！！」

「だが私には当たらんぞ」

小太郎の攻撃は真っ直ぐだ。速く鋭いが見切るのは容易い。しかし攻撃が通らなければ意味がないな。

「そこや！カイザーネイル！！！」

「ぬっ！」

先程より更に攻撃が速くなり、つい受け止めてしまった。

「カイザーネイルを木刀で受け止めるんかい。どないやったんや」

「力では無理だからな。技術で補っただけだ」

「そうかい！！」

小太郎が止まる事なく連撃を繰り出してくる。だが私が受けに回るだけと思うなよ。

「剛招来！！」

「おっちゃんも気の強化が出来るんかい」

「この程度はな。ではこちらのターンだ！！断空剣！！」

「うわっ！？」

風を巻き込み、宙へ飛び出すように木刀を振るう。小太郎は軽いせいか風に巻き込まれ体勢を崩した。

「そこだ！飛翔天駆！！」

「ぐぅ！？」

上空から小太郎に向かって、剣を突くように斜めに突進する。体勢を崩していた小太郎は踏ん張りきれず吹き飛んだ。

「魔神連牙斬！！」

吹き飛んだ小太郎に追撃するように三連続の魔神剣を放つ。

「当たるか！！」

だが小太郎は空中でなんとか体勢を整え、地に足を着けた瞬間に跳び、魔神連牙斬を避けた。

「見事だが、まだ攻撃は終わっていないぞ！！秋沙雨！！」

「ちぃ！！」

高速の連続突きを放つが、小太郎は急所を隠すようにして身を固め耐えしのいだ。

「お返しや！！獣王拳！！！」

「っ！？カウンターか！！」

避けは出来たものの、当たると少々マズかったな。

「もうあんまり余裕ないか」

「疲れたか？」

「せやな。あの連続攻撃は応えたわ。だから全力の一撃で倒す！！オォォォォォ！！！！」

「それは……」

前回の試合で見せた技、確か狗狼（クロウ）とやらだったか。だがあの時とは違い腕全体が黒くなっている。全力という事か。

「来るといい」

「後悔しても遅いで！！狗狼（クロウ）！！！！」

今までのどの一撃よりも速く、鋭い。当たれば致命傷は免れないだろう。木刀も気で強化してあるとはいえ、先程一撃を防いだ際に罅が入っている。防げば壊れるのは間違いない。

「オラァァァァァ！！！！」

「ここまでの戦いは見事だったが、お前の負けだ」

私は木刀を投げ捨て小太郎の腕を掴んだ。そしてそのまま関節技に持ち込んだ。

ミシミシ

「ぐぁっ！！？」

「どうする？このまま行けば骨が折れるぞ」

「ぐぅぅ……参った」

『決まったぁぁぁぁ！！クラトス選手の勝利です！！』

「あいたたた。剣だけやないんかい」

「当然だ」

数千もの時を生きたのだ。剣のみならずあらゆる武術を習得した。魂に刻まれたそれは、如何なる状況にも無意識に対応出来るようになってしまっていたのだから。

刹那ｓｉｄｅ

はぁ、エヴァンジェリンさんか。大変や。

「せっちゃ～ん」

「もう服はいらん」

「そんな！！？」

「そりゃそうだ」

「あ、千雨さん」

「よっ」

まともな人が来てくれて良かった。このちゃんは誰かおらんと止まらんからな。誰かがこのちゃんに手を貸したらうちが終わるけど。

「どうしたん？応援？」

「いや、エヴァンジェリンさんから伝言だ。『戦うのは心の中だ』だとさ」

？　心の中？ようわからんけど、なんか精神的なもんかな？
「ま、行けばわかるか。行ってきます」

「頑張ってな」

「楽しませてくれよ」

『永遠の幼女（エターナルロリ）ことエヴァンジェリン選手！！兎と亀の歴史を塗り替えてしまった刹那選手！！どちらが勝つのか！！』

「おい、茶々丸」

『畏まりました。朝倉さん、ちょっと』

『私はまだ司会がしたいんだぁぁぁぁぁ！！』

あーあ、当然やわ。どんな事されるんやろ。拷問かな？くすぐったりされるんかな。

「ではやるぞ。準備はいいな」

「はい」

『朝倉さんが落ちたので私が代わりに試合開始の合図を始めさせてもらいます。試合開始！！』

うちは長めの木刀を構えたけど、エヴァンジェリンさんは普通に近付いてきた。

「どうしました？」

「聞かなかったか？戦うのは心の中だと」

次の瞬間、エヴァンジェリンさんの眼が妖しく輝いたかと思うと、うちは夜の街にいた。ただ普通の街ではなく、全てのものが黒く、薄く、まるで影絵のようだった。

「ようこそ、私の世界へ」

「どういう事です？」

「私の心の中の世界、とは言っても兄様の記憶にあった世界を借りただけだから本当の私の心とは言えんのだが」

「うーん、つまり周りには見えていないと」

「そうだな。上位の魔法使いなら別だろうがな」

ならどんな事をしても大丈夫って事やな。思いっ切り力を使っても。

「桜咲刹那。お前の力を見せてみろ！！」

「言われなくとも!!ハアァァァァ!!!!」

うちの背中から一対の純白の翼が出てくる。それに伴い髪は白く、眼は赤くなる。

「いい力だ。何より美しい」

「ありがとうございます」

「なら私も力を見せてやろう」

エヴァンジェリンさんの姿が闇のように深く染まっていく。

「闇の魔法でしたっけ?」

「教えた事あったか?」

「前にアルクェイドさんがポロッと」

「そうか。まあ姉様ならよくあるか」

「では」

「ああ」

手に造り出すのは空気の太刀。それを持ってエヴァンジェリンさんに斬り掛かる。

「せやっ!!」

「ふんっ！！」

ガキン

太刀とエヴァンジェリンさんの闇の爪がぶつかる。それだけで私の太刀は砕け散る。

「エアマシンガン！！」

「温いわ！！」

両手の指先から空気の弾丸を大量に撃ち出すも、エヴァンジェリンさんの魔法障壁に傷一つ付ける事は出来ない。仕方なく翼を広げ空へ逃げる。

「速さは親譲りだな」

「どうも」

威力の低いのでは通じない。なら多少隙があっても威力が高く範囲が広い攻撃をするのが一番だ。

私は空を飛び、エヴァンジェリンさんから遠退いていく。

「ここまで離れれば「離れれば？」！！？」

近くの影絵の建物からエヴァンジェリンさんが出てきた。影を使った転移魔法。この影だらけの世界では逃げ場はないという事か。

「受け取れ、闇の吹雪」

「エアウォール！！」

様々な攻撃を防いできた空気の壁もエヴァンジェリンさんの魔法を流すのが精一杯だった。

「この、喰らえ！！」

「ん？おぉ！？」

私が腕を振るうと大気がずれ、元に戻ろうと周囲の空気ごとあらゆるものを飲み込み始めた。それに巻き込まれ、エヴァンジェリンさんは一瞬だがよろめいた。

「そこ！ダウンバースト！！」

「うがっ！？」

上空からの空気の塊には流石に耐えきれなかったのかエヴァンジェリンさんは地面に叩き付けられ、巨大なクレーターが出来た。

「まだまだ！エアロブラスト！！」

更に追撃するように空気の砲撃を叩き込む。

「ふぅ……」

「なかなかだったぞ」

「くっ、効いていないのですか？」

「いや、効いてはいる。だがこの程度ならよく喰らっていたからな」

真祖の吸血鬼は伊達ではないという事か。

「ほら」

「おっと」

突然投げられたのは私の愛刀の物干し竿。なんでエヴァンジェリンさんが、ってここは現実やないんやからあってもおかしくないか。

「それがないと本気が出せないだろう」

「そうですね。では、終わりです！！」

余分な空気抵抗は全てなくし、天狗としての力を最大限まで増加させる。

「一閃！！！！」

「！！？」

音より速く、エヴァンジェリンさんを袈裟懸けに斬り裂いた。エヴァンジェリンさんは文字通り真っ二つになった。

「……勝ったのか？」

「くくく、見事だ」

「まだ終わりませんか」

エヴァンジェリンさんの肉体はどんどん再生していく。今度こそ上手くいったと思ったのに。

「半妖の身でよくぞこの領域に辿り着いた。我が全力、披露しよう。『星の息吹よ』」

エヴァンジェリンさんの姿が変わっていく。白いドレスを着た美しい女性。本当にエヴァンジェリンさんか？

「それは……？」

「『究極の一』」

「！？　鎖が！？」

「肉片となるがよい」

エヴァンジェリンさんが爪を振っただけで私の体は引き裂かれた。

「ハァ…ハァ…！！」

『おっと何があったのか!?両選手が目を合わせたかと思うと刹那選手が膝を付いた!!』

どうやら現実では一瞬だったようだが、あの引き裂かれる感覚はしっかりと残っている。私は負け

ドサッ

『エヴァンジェリン選手が倒れた!!?』

「はい?」

ふらふらになりながらもエヴァンジェリンさんの様子を確かめると、気絶していた。

『よくわかりませんが刹那選手の勝利です』

こっちもようわからんわ。

志貴ｓｉｄｅ

学園長さんに魔法を使ってもらってみんなで観戦したけど、エヴァの奴、あれを使うなんてな。

「志貴、なんだあれは。まるで朱い月じゃないか。それ以前に何故エヴァンジェリンが空想具現化を使える」

「そうは言ってもな」

「私が教えてあげるわ、要。エヴァはね、私達の記憶を覗いた事があるの。その時私の中にある朱い月を見たみたい」

「成る程な。だから影絵の街も再現していたのか」

正直俺もあれを使うとは思わなかった。あそこにはいい思い出がないんだよな。

「空想具現化についての説明は？」

「エヴァの世界だからでいいんじゃない？流石に朱い月を空想するのはきつかったみたいだけど」

当然だよな。あれを真似するなんて気絶して当然だ。

「じゃあ俺は行ってくるよ」

「そういえば次は志貴だったね。頑張って」

「ああ」

今回の戦いは全力でやらないとな。ああ、本当に全力でな。

「……」

「レン、どうした？」

「……」

「ああ、武器を持ってきてくれたのか」

人の姿になったレンは撥と七夜の短刀を持ってきてくれた。

「……」

「ああ、頑張ってくるよ」

「ん」

撫でると気持ちよさそうにする。レンは全く喋らないけど、気持ちは伝わるから大丈夫。

「じゃあね」

「……」

『次の試合はまさに高速！！どちらも速さ自慢の志貴選手と鬼人選手です！！』

パチン

俺は七夜の短刀から刃を出す。それを見て周りがざわつき出す。

『志貴選手？刃物は禁止ですよ？』

「わかってる。失格でも構わないけど今回は戦わせてくれ」

俺が撥を投げると鬼人は掴んだ。かなりの速さで投げたが苦もなく取ったな。

「もうそんな変な面を取ったらどうだ？『親父』」

「……」

文ちゃんをあの技、閃鞘・一風で倒した時点で予想はついていたが、般若の面を取ったその顔を見て確信した。記憶にはうっすらとしか

なかったが、顔を見た瞬間に全てが思い出された。こいつは俺の親父、軋間紅摩に殺された七夜黄理だ。

「堕ちたな、志貴」

「俺が望んだ結果だ。死者は大人しく奈落へ帰るといい。一人で帰れないなら俺が送ってやる」

まほら武道会　その４（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「志貴お兄ちゃんのお父さんだったんだ」

椛「なんで鬼人って名前なんですか？雨季さん」

雨「歌月十夜で七夜黄理の話が出るののシナリオ名が『赤い鬼神』なんだよね。それから鬼神。でも人だから鬼人。読みを変えて鬼人（おにひと）」

叶「わかんないよ」

雨「まあね。銀髪ってのも本当か知らないし、なんたって公式絵がラフだから。文を倒した一風の描写も微妙だったしね。ただ志貴が意識してたのと、殺人鬼、死人でわかるかなって」

椛「わからないように書いてたんでしょう？」

雨「さあ？」

叶「じゃあいつも通りやろうか」

椛「今日の楽屋はラカンさんです」

叶「今更？最初はあれだったけど今は出番ないよね」

椛「これからもないでしょうから、まあいいですか」

ラカン「やれよ！！」

叶「五月蝿い」

椛「お腹の子供に悪い影響が出そうなんで帰って下さい」

ラカン「貴様ら……いい加減に」

要「うちの娘に何かようか？」

ラカン「てめぇの娘か！！道理で生意気な」

要「死んどけ！！」

ラカン「ぶはぁ！？」

叶「パパお疲れ様」

椛「ご苦労様です」

要「全く。今日は帰りに寿司でも奢ってやるよ」

叶「わーい！！」

椛「ありがとうございます。では次回もお楽しみに」

雨「なんかあったら教えて下さいね。質問にも答えます」

まほら武道会　その5（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「今日も今日でアリシャの部屋」

シャ「みんなよく見てくれてるわよね」

ア「本当に。これなんて何故か出来ちゃったからね」

シャ「いつもの思い付きだもの」

ア「じゃああらすじね。
・クラトス勝利。経験差が鍵か
・エヴァ自滅
・鬼人は黄理パパでした」

シャ「黄理はわからないわよ」

ア「マイナー過ぎるものね。では本編どうぞ」

まほら武道会　その5

志貴ｓｉｄｅ

「斬る！！」

「……」

閃鞘・七夜

試合が始まってからすぐに俺も親父も同じ技をぶつけ合う。これだけでも改めて親父の凄まじさがわかる。死徒になり、神様の所で修行し、この世界でも長年鍛えた俺の技とほぼ同等の質の技を放ってくる。

「シッ！！」

「……」

「くそっ！！」

その上七夜の技を俺以上に理解しているだけあって攻撃が当たらない。

「人外に堕ちたが、成長はしているようだな」

「うるせぇ！！」

閃鞘・八点衝

「だが未熟」

親父は無数の斬撃を上空に跳んで避け、空中から急速に突撃してきた。

「くっ！？」

バックステップでなんとか避けたが、俺が立っていた場所には三本の斬撃の跡が残っていた。

「何だ、今のは……」

「閃鞘・三鷹。貴様が知っている技は基礎でしかない」

「教えてもらう前に一族が滅んだからな」

マズい。これはマズいぞ。向こうはあらゆる技を完璧に使いこなせるのに俺は基礎しか使えない。俺が勝っている部分といえば魔術や魔法しかない。

「……狩る」

「！？　あぶ、ぐぁ！？」

閃鞘・七夜のように前から斬り掛かってきたかと思うと、次の瞬間には後ろから斬り掛かられた。傷口からは血が流れる。撥で人を斬るってのは本当だったんだな。

「……」

「この……舐めるな！！」

閃走・六魚

相手を蹴り上げ、そこから蹴り落とす技だが、蹴り上げる時点で親父は消えた。七夜の技独特の身を屈める構えもせずにだ。

「墜ちろ」

「がぁぁぁぁぁ！！？」

後ろからの攻撃のせいで何をされたかよくわからなかったが、傷をさらに抉られ、地に落とされた事だけは理解出来た。

「……弱いな」

「ハァ…ハァ…。あんた、地獄で鬼を狩り尽くして……追い出されたんじゃ、ないか？」

「……いい訓練だった」

おいおい本気か？流石に冗談だろ？……いや、神様がいるんだ。それにこの世界の魔法使いは鬼や悪魔を召喚出来るし。何より親父が冗談を言うとは思えない。

「そうかい。だけど死人が出てくるなんて胸くそ悪い。また地獄に堕ちろ」

「傷は癒えてきているようだが、貴様に出来るか？」

「やってやるよ！！」

俺は高速で親父の上に跳び、短刀を構える。前の試合で長瀬さんを倒した閃鞘・八穿の体勢だ。

「遅い」

閃走・六兎

親父は俺が斬るタイミングに合わせて蹴り上げてきたが、俺はそのまま親父の上を通り越した。

「むっ」

「掛かったな！！」

今の親父は無防備。俺が使うのは一度だけ先生に教えてもらった魔術。無詠唱で使えるけど、威力はベニヤ板を貫通する程度だった風の弾丸。だがこれも、魔術を知る者が殆どいないこの世界においては神秘が上昇し、人体を貫く弾丸となる。しかし神秘で威力は補えても範囲は補えない。致命傷を狙うには頭だが、親父は確実に防ぐ。なら……

「そこだ！！」

軋間紅摩に貫かれた胴体。あそこなら当たれば傷が開くはず。だが親父を甘く見過ぎていた事を思い知らされた。

「無意味」

「!?」

親父は宙を跳ぶようにして俺の後ろに降り立った。

「貴様の考えは視えている」

「ああそうだ。あんたの浄眼はそういう類だったな」

相手の考えを靄で視れるんだったか。にしたってさっきの動きはなんだ。魔術も無しに宙で跳ぶなんて。……まさか！

「無重力になった瞬間に跳んだのか？」

空中では頂点で一瞬無重力になる瞬間がある。その時強靭な脚力があればそういうのも出来るとか聞く。さっきの三鷹とかいう技もそれを使えば出来るし、今回のも可能だ。

「本当に人を辞めてるな」

「それは貴様だ。だというのに吾に一撃も当てれんとはな」

「そういう意味じゃない」

しかし勝ちが見えてこない。極死・七夜もきっと効かない。どうすればいい。

「……終わりだ」

あの構えは、駄目だ。構えからじゃ何をしてくるのかわからない。

だけど終わりって事は迷獄沙門並みの攻撃が来るはず。なら俺だって終わりにしてやる。

「決めてやる！！」

俺も親父も殆ど同時に踏み込んで、すれ違った瞬間に斬り合った。その時、俺の短刀は弾かれ親父の後ろに突き刺さり、俺の体は深く斬られた。

「あ゛、ぐぅ……」

「！？　これは、動けない？」

「はは……やっと、上手くいった」

短刀には影縫いの魔術が掛けてあった。上手く親父の影に刺さってくれてよかった。

「ハァ……ハァ……俺の…勝ち……だ」

「一太刀も受ける事なく敗北するのは初めてだ。だが確かにこれでは勝ち目がない。吾の負けだ」

それだけ言うと親父は撥を残して消えた。まるで修学旅行の時の四季のように。

「……あ」

これが一般人も観てる大会だった。流石に麻帆良でもやり過ぎだよな。

「志貴!!大丈夫なの!?」

「兄様、ご無事で?」

「ん、あぁ、アルクェイドにエヴァか。大丈夫だけど」

「兄様の心配はわかっています。でも観客には幻覚を見せてますから」

「そうなのか?助かったよ」

「しかし志貴のお父さん強かったわね」

「全くだ」

何だったんだろうな。いなくなった今じゃあ何もわからないけど。

舞人ｓｉｄｅ

さっきの凄かったな。一般人の観客には幻覚で両者失格ってのを見せたみたいだけど。

「まーくん、志貴さんのお見舞いに行きましょう」

「仮にも死徒だから大丈夫だと思うけど、行こうか」

みんなに言われて医務室に押し込められたけど、逃げ出してないか気になるからね。

コンコン

「志貴さん、います「ギャー!?茶々丸何を脱いで、ってアルクェイドもエヴァも脱ぐな!!俺仮にも怪我人、アッーーー!!!!!」健康だね」

「このために医務室に押し込められたのでは?」

僕は知らないよ。でも否定はしない。寧ろ肯定するよ。

「じゃあまーちゃん。試合の準備しよう」

「わかりましたわ。『アレ』ですわよね」

「うん」

僕とまーちゃんが手を合わせるとまーちゃんが光になって僕に取り込まれた。ああ、興奮してきた。

「『さあ、行こう』」

要ｓｉｄｅ

『先程の試合はまさかの両者失格！！つまり今回の試合の勝者が決勝行きです！！牧原舞人選手に一条要選手、どちらが勝利するのか！！！』

朝倉は元気だな。さっきの試合、あいつも関係者だから本当の結果を見たんだよな。感想を後で聞こう。

『舞人選手入場して下さい！！』

舞台に上がってきたまーくんは普段と雰囲気が違う。これは本人達から聞いた事があるな。

「『こんにちは、要さん』」

「まーくん、いや、オジギソウか」

「『はい。でもとりあえずまーくんでお願いします』」

「大変じゃないか？こんなに人がいると食べたくなるだろ」

「『僕（私）はそこまで節操なしじゃないですよ。食べたくなると

いうのは肯定しますけど』」

二人の声が被って聞こえるな。不思議な感じだ。でもそんな事よりあの二人が一つになったんだ。一体どれだけ強くなったんだろう。楽しみでならない。

『準備はよろしいですか？では……試合開始！！』

「来な」

「『はい』」

ビュッ

空気を切る音と同時に鞭が俺の腕に巻き付いてきた。

「これがどうした？引っ張ってやらぁ！！」

巻き付いた鞭を掴んでまーくんを引っ張る。だがまーくんはなかなか動かない。これはしぶといな。まあ力勝負なら俺が勝

「いっ！？」

いきなり噛みつかれた！？何が！？

「キキキキキキ」

「こいつ！！」

俺に噛みついてきたのは鞭の先端。魔界植物で作られた鞭だったか。俺はまーくんを引っ張るのを止めて鞭をぶっ千切った。

「キ…キキキ……」

「随分な小細工をしてくれるな」

「『即効性の神経毒を持ってる子なんですが、よく大丈夫ですね』」

「ただの毒が効くかよ」

「『ただの、ではないと思いますよ。魔界植物なんですから』」

それもそうだが、効かないから関係ないだろ。

「そろそろぶっ飛ばす！！」

「『おっと危ない』」

「軽々と避けてよく言う！！」

蹴りや拳打の嵐を浴びせるが、まーくんは避け続ける。たまに掠ったりするが決定打はない。まーくんも負けじと鞭を振り回す。

「『ふふふ、楽しいですね』」

「全くだ！！」

俺の脚払いを避けたまーくんが跳んで着地した瞬間に殴ろうとしたが、まーくんが消えた。

「『ふぅ、当たるところでした』」

俺の後ろ、かなり離れた場所にまーくんは立っていた。

「転移か？そんな事が出来たとはな」

「『僕（私）を誰の子と思ってるんですか？』」

「非常識の子だな」

「『貴方も非常識ですよ』」

そう言うとまーくんは再び消えた。今度はどこだ。後ろか、上か。

「『頂きます』」

「前か！！」

ガブッ

「くっ、なろぉ！！」

バキィ

「『うあっ！？』」

殴り飛ばしたが、左腕をちょっと食われたな。本性を丸出しできやがったな。

「『痛かった～』」

「人を食っておいて何を言いやがる。おー痛た」

「『美味しかったですよ』」

笑顔で言いやがる。口にケチャップ付いてるぞ、この野郎。周りから見たら口を切ったように見えるんだろうけど俺の血だぞ。

「……治った」

「『再生が早いですね』」

このくらいならすぐに再生するようになってしまったからな。しかし……

「何時仕込んだ」

「『？』」

「惚けた顔をするな。手足に僅かな痺れがある。何時毒を仕込んだ」

「『ああ、ようやく効きましたか。仕込んだのは試合前からですよ』」

「何？」

「『見渡して下さい。観客席にも司会席にも、いろいろな所に黄色い花があるでしょう？』」

確かにな。気にしなかったが見てみるとそこら中に黄色い花がある。だがあれがなんだというんだ。

「『あれは大量に花粉を出すんですよ。ＯＲＴ用の麻痺花粉を』」

「ＯＲＴ用？んな植物ないだろ」

「『普通はありませんね。だから作りました。そういうアーティファクトを持ってますから。成長させるのは自分の力でどうにかなりますし』」

「厄介だな」

「『ですね』」

「自分で同意するな、毒好きめ」

「『手を汚さず、簡単に勝つにはこれが楽なんです。綺麗な花には棘があるだけじゃないんですよ』」

どうしたもんかな。今のまーくん相手に麻痺が回り始めた状態で戦うのはキツい。力を使いたいけどそれじゃあ試合じゃなくなる。

「負けでいいか？」

「『えー、つまらないじゃないですか』」

「俺もつまらんが、試合でこれ以上やっても更につまらんぞ。つまらなくしたのはそっちの毒だし」

「『しょうがないか。まあこっちは賞金が貰えればいいですからね』」

「現金だな」

「『お店のためです』」

ともかく、今回は俺の負けだ。さっきまでは手足の先だけだったが、今は全体的に痺れてきた。もう試合は出来ない。これが死合ならどれだけ楽しかったか。残念だ。

まほら武道会　その5（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「舞人お兄ちゃんが勝って嬉しいけど、パパが負けたから複雑」

クララ「キュー？」

叶「大丈夫だよ、クララ」

クララ「キュー！！」

椛「楽しそうね。そういえば今回は楽屋訪問しないそうよ」

叶「題名に偽りあり？」

椛「今回は本編で出た技紹介をするみたい」

叶「いくつかオリジナル技があったもんね。舞人お兄ちゃんのアーティファクトも」

椛「じゃあ黄理さんの技紹介です。まずは閃鞘・三鷹から」

閃鞘・三鷹（みたか）…上空から斜めに向かって飛び込み、三つの斬撃を放つ技。本来は木の上からの強襲技だが、黄理は空中でも放てる。

叶「次は志貴お兄ちゃんを二連続で斬ったのだね」

閃鞘・二狗（にく）…相手を斬り裂きながら後ろに回り、更に後ろから追撃

する技。簡単に言えば閃鞘・七夜を二連続でやっているという事。

椛「次は構えもなく突然消えた技です」

閃走・無月(むげつ)…七夜の技独特の構えである身を屈めるような体勢無しに、あらゆる体勢でも高速移動する技。移動距離は短いが、相手の隙を作るのに使える。

叶「次のは最後の斬撃だね。志貴お兄ちゃんのはただの斬撃だけど黄理おじさんは技だったみたい」

閃鞘・五鮫(ごこう)…一瞬で相手に近付き、すれ違いざまに強力な斬撃を叩き込む技。強化版閃鞘・七夜。

椛「最後は舞人さん。正確には舞花さんのアーティファクトについてです。修学旅行編で優さんと契約したあれですね」

叶「ＯＲＴ用の花を作ったのだよね。どんなのだろ」

品種改良箱…名前通り植物の品種改良をする手のひらサイズの箱。種を二つ入れて魔力を込めると自分の欲しい植物の種が作れる。一度作った種は魔力を込めればいくつでも作る事が可能。

叶「どんなのでも作れるんだ。今度綺麗なお花作ってもらお」

椛「では今回はここまで。次回もお楽しみに」

まほら武道会　最終（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「一週間以上更新しなくてごめんなさい」

シャ「作者もいろいろあったという事にしてね」

雨「文句はアリシャにお願いします」

アリシャ「「ちょ！！」」

雨「ここの読者はノリがいいから大丈夫」

アリシャ「「それが問題！！」」

雨「早くあらすじやれよ」

ア「くっ、あらすじよ。
・黄理パパＴｕｅｅｅｅｅｅｅ
・でも志貴も頑張った
・主人公敗北」

シャ「じゃあ本編どうぞ」

まほら武道会　最終

刹那ｓｉｄｅ

「ふぅ……よし！！」

うちは瞑想を終えて立ち上がる。幸いエヴァンジェリンさんとの試合では肉体的疲労はなかったので精神を休めるだけで済んだ。次の試合はクラトスさんだ。同じ剣士としてその胸を借りよう。

「刹那」

「あ、要さん。どうしたん？」

「もし勝ったら刹那の言う事を何でもしてやるよ」

「……ええ！？」

そ、そ、それってつまり、あんな事や、こんな事も／／／／／／

「おーい刹那、準備出来てるか？って」

「あ……」

「へ？」

あれ？目の前に要さんがいるのに、また要さんが入ってきた。あれれ？

「……鏡か！！」

「バレてしまってはしょうがない！！さらばじゃー！！」

「ったく、何してんだよ」

うちは遊ばれたんかい！！もしかしたらさっきのをこのちゃん達に言って笑い話にするつもりか！？

「いや、木乃香に頼まれただけじゃ」

「まだいたんかい！！というか心読まんといて！！」

はぁ、瞑想した意味なくなった。

『準決勝！！ここでの勝者が舞人選手との勝負へ、決勝へと駒を進めます！！クラトス選手、刹那選手、お互い頑張って下さい！！』

「お願いします」

「ああ」

クラトスさんはさっきの試合と違い、木刀と木の盾を持っとる。うちのは長い木刀。リーチなら勝ってはいるけども、その程度でどうにかなる人なら予選落ちしてる。

「どこからでも来るといい」

そう言われても隙がないから困るわ～。僅かにある隙も多分餌やろうし、自分の攻撃で作るしかないか。

「斬空閃！！」

「ふん」

「まだまだ！！斬空連閃！！」

うちはとにかく斬空閃を連続で撃つ。弾かれても弾かれても弾かれても、クラトスさんに隙が出来るまで撃つ。

「ええ加減に……隙くらい……できぃや！！！！」

「むっ！？」

渾身の巨大斬空閃でようやく隙が出来た。それを見逃さず懐まで踏み込み、斬り掛かる。

「それがどうした！！」

ドカッ

「へぶっ！？」

盾で叩かれてもた。木刀ばっかりに目がいって盾を忘れてた。今は一歩下がろ。

「この戯け。熱くなりすぎだ」

「すみません……」

「技のキレも落ちてるようだが、精神世界での戦いは力を解放しなければ出来ないのか？」

「いえ、ある程度なら行けるかもしれませんが、その……疲れてしまったというか」

「まああの戦いでは疲れるのはしょうがないが、しっかり休んだのか？」

「それはもうしっかり瞑想をしてしっかり悪戯されました」

「……どうしようもないな」

「どうしようもないです」

本当にどうしてこうなるのやら。不幸や。

クラトスｓｉｄｅ

桜咲のモチベーションは最低だが、手加減するわけにもいかん。

「叩き斬る！虎牙破斬！！」

「くっ、重っ！」

「魔神拳！！」

「っとぉ！！」

虎牙破斬で動きを止めて魔神拳を入れるつもりだったが、逃げるのは速かったな。

「まだ行くぞ！獅子戦吼！！」

「百烈桜華斬！！」

獅子の形の闘気を放てば、桜咲は木刀を振り回し、桜の花弁のような気を周りに放って防ぐ。

「雷鳴剣！！」

「襲爪雷斬！！」

ドオォォォォン

私達は互いに雷撃を放つ斬撃をぶつけ合う。結果爆発が起こり、互いに吹き飛ばされた。

「やろうと思えばやれるではないか」

「自分の事ながら以外に行けますね……ハァァァ」

桜咲が抜刀の姿勢をとる。鞘もない木刀では大した抜刀は出来ないだろうが、考え無しにやるほど桜咲も馬鹿ではない。

「「……」」

辺りが静寂に包まれる。その中桜咲は静かに踏み込んできた。

「シッ！！！」

「速い！？」

鞘もなく、更に長い木刀という悪条件ながらもその抜刀は通常時となんら変わらぬ速度で私に向かってきた。咄嗟に盾を出すも、砕かれてしまった。

「だが！！」

「ガッ！！？」

私は身を反らし木刀を避け、更にそのままサマーソルトで桜咲の顎を蹴り上げた。

『決まったーー！！一瞬の攻防！！多分カウンターでクラトス選手が刹那選手を沈めました！！』

最後はヒヤリとしたが、これもいい経験だったな。

要ｓｉｄｅ

「せーつーなー！！！！」

「天魔様！止まって下さい！！」

「離せ射命丸！！！！」

親バカが五月蝿いな。どうしようか。

「すずか」

「はいは～い、えい！！」

ブスリ

「あひぃぃん！？」

すずかは巨大な注射器を天魔の尻にぶっ刺した。これは酷い光景だ。

「最後のは、どうやったんだ？」

「千雨にはちょっと速かったか。刹那が空気の鞘を作って抜刀。クラトスがサマーソルトで迎撃だ」

「ふーん、着いてけないな」

「千雨ちゃんはサポートだからいいんだよ」

「なのはの言う通り」

しかし刹那の能力は本当に万能だよな。妬まない。クラトスは何気に経験は俺らの中でトップクラスじゃないか？古代の英雄で、死後もこの世界に来るまで神様にこき使われてたらしいし。

『決勝までしばらく休憩を挟みますのでお待ち下さい』

流石に連戦はしないよな。どうしようか。決勝に出れなかったからやる事といったら刹那のお見舞いぐらいしか。

「そんで、せっちゃんの反応は？」

「それが実に愉快での」

うん、木乃香と鏡のお仕置きをしてやろう。

舞人ｓｉｄｅ

クラトスさんに決まったか。

「一緒にならなくて本当によろしいのですか？」

「ありがとう、まーちゃん。でも今回は小細工無しに僕だけでやりたいから」

確かに僕らは二人で一つだけど、まーちゃんに頼ってばっかりじゃあね。ちょっと男の子の意地ってのがあるし。

「そうですか。ならちゃんと優勝して下さいね」

「頑張るよ。でもそこまで優勝しないと駄目？」

ここまでで十分店の宣伝にもなったから無理に狙わなくてもいいと思うんだけど。

「資金はなくて困りますが、あって困るものでもありません」

「いつからそんな守銭奴になったのさ」

「まあ失礼な。でもいつからと言われると、お店を始めてからですわね」

「ハハハ、そうだよね。じゃあ勝ってくる」

「負けたらお仕置きですわよ」

「それは怖いね」

僕はごく普通な鞭を手に取る。植物とかで出来たものじゃないけど、かなり使い込んだものだ。さあ頑張ろう。

『決勝戦！！！！順当に勝ち上がってきたその実力は本物！！派手さはないがその堅実な戦いは圧倒的！！クラトス・アウリオン選手！！！！』

うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！

『鞭と植物を多彩に操る姿はまさに魔法使い！！優勝候補の一条要選手すら打ち倒し、ここに降り立つ最強の花屋！！牧原舞人選手！！！！』

キャアァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！

凄い歓声。これは少し五月蝿いな。でも決勝だからしょうがないか。

「クラトスさん、お願いします」

「全力でお相手しよう」

クラトスさんの装備はやっぱり木刀と盾か。これ以外ないか。

『それでは……試合開始！！』

試合開始と同時に僕は鞭を振るう。クラトスさんに向かってではなく、自分を中心に周囲を無差別に叩いた。とにかく近寄らせない。それが作戦だ。

「岩砕剣！！」

クラトスさんは明日菜ちゃんも使った岩を飛ばす技をやってくるけど、鞭の嵐に阻まれて届かない。その間にも僕はジリジリと近づいていく。

「さあさあさあ！！そろそろ下がれませんよ！！」

「……グレイブ！！」

「！　下か！」

僕の足元から岩が槍のように突き出してくる。後ろに下がって難を逃れたけど、油断してた。

「そういえば魔法使えましたね」

「器用貧乏なのでな」

下から攻撃がくるんじゃさっきまでの戦法は取れないな。守りが薄い鞭だと剣士相手はきついんだけど。

「そりゃ！！」

なら武器を奪えばいい。僕は鞭を使って木刀を弾こうとしたけど、逆に弾かれて縮地でクラトスさんが一気に間合いを縮めてきた。

「くっ！！」

苦し紛れに蹴りを出すけども、盾で流され、木刀を突き出された。

「瞬迅剣！！」

「ぐぅ……！？」

鳩尾に当たったものの、なんとか後ろに跳んでダメージは軽減出来た。

「惜しいな。今のが完全に入れば勝ったのだが」

「そう簡単にはやらせません」

「そうしてもらわないとな。せっかくの決勝なのだから」

間合いが縮まってからは完全にクラトスさんペースだ。僕も避けてはいるものの、これ以上は続かない。しかし鞭では対抗出来ない。仕方ない。

「そこだ！！風神剣！！」

「させない！！」

ガンッ

「木刀？持っていたのか」

「いいえ、作りました」

植物を操る力を使って即席の木刀を作ったのだ。これから先どう戦うか。

クラトスｓｉｄｅ

このまま接近戦で攻めれば私の勝ちだが、まだ終わらないだろう？

「ハァッ！！」

「セイッ！！」

わかっていた事だが、剣技では明らかにこちらが上。木刀は一時しのぎだったか？

「喰らえ！！」

私が木刀を振りかぶり叩き付ける。牧原は当然受け止めたのだが、先程まで鉄かと思うほどに硬かった木刀は私の木刀の威力を一切軽減する事なく砕けた。私はそのまま木刀を振り下ろしてしまい大きな隙を見せてしまった。

「掛かりましたね。吹き飛んで下さい！！！！」

「がはっ……！？」

牧原は私の胸辺りに強力な掌底を打ち込んできた。私は血を吐き、吹き飛ばされて地面を転がった。

「木刀を腐らせて正解でした」

通りであんなにあっさりと折れるはずだ。木刀は牧原の力で作ったものだから腐らせるのも簡単という事か。

「終わりにしましょう」

牧原が鞭を振りかぶる。勝負は一瞬。いけるか。

「ヤッ！！！！」

「ヘイスト！！」

神様の下で働いていた時に教えてもらった自分を速くする法術とやらだ。私は鞭を避け、更に術を使った。

「ディレイ！！」

「！？　体、が」

これは先程とは違い相手を遅くする法術。だがどちらも苦手な補助系で魔法とは違うもののため長くは続かない。故に一撃勝負だ。

「紅蓮剣！！！！」

渾身の力を篭め、炎を纏った木刀を牧原に投げつける。普段の火球

を撃ち出す紅蓮剣とは違い、獲物を投げてしまうのがこの紅蓮剣の欠点だが、一撃の威力は桁違いだ。

ゴオォォォォォ

「アァァァァァ！！？」

こちらの速くなった攻撃を動きが遅くなった牧原が避けられるはずもなく、牧原は炎に包まれた。

「うぅ……」

牧原は倒れて動く気配がない。そしてそのままテンカウント経ってしまった。

『試合終了！！！！！！！優勝はクラトス・アウリオン選手です！！！！！！』

終わったか。最後まで油断ならなかったな。

まほら武道会　最終（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「ショボーン」

椛「舞人さん負けちゃったわね」

叶「残念」

舞人「ちょ、まーちゃん!?負けたからって」

舞花「お仕置きですわよ」

舞人「やーーーーだーーーー!!!!」

叶「あわわわわ」

椛「大丈夫よ。今回の楽屋は相坂さよさんよ」

叶「お邪魔します」

さよ「どうもです」

椛「体が手に入ってから出番ありませんけど」

さよ「出番はありませんけど、体が手には入っただけ幸せですよ」

叶「謙虚な心は素晴らしいって誰かが言ってた」

椛「本当に？」

叶「よく覚えてないけど、いい言葉だと思う」

さよ「うん、そうね」

椛「これからも謙虚な心で出番を待って下さい」

叶「では次回もお楽しみに」

これはデートになりますか？（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「前回の更新が遅かったのは、私は悪くない」

シャ「私も悪くない」

ア「でもシャマルさんの方が不人気でしょう」

シャ「関係ないわよ。アリサちゃんだって出番がないからここにいるんでしょ」

ア「……出てってやる！！！」

シャ「え！？」

ア「もう帰ってこないんだからね！！」

シャ「そ、そんな事したら出番が」

ア「もう十分よ！！主人公並みに出たわよ！！でもこんな扱いはもうこりごり！！」

シャ「アリサちゃん待って！！」

ア「誰が待つもんですか！！頼まれても帰らないから！！」

シャ「あわわ、大変な事になっちゃったわ」

アリシャはどうなってしまうのか。次回へ続く。

これはデートになりますか？

要ｓｉｄｅ

学園祭最終日。今日は何事もなく進むといいな。

「それで二人は何で付いてきてるんだ？」

「気にしたらあかんよ。ねえ文さん」

「そうですよ。要さんは細かいですね」

「まあ初日が回れなかったからいいか」

本来なら刹那と文とは初日の午後一緒に見回りをする予定だったが、ちょいと近右衛門に呼ばれてそれが出来なかった。

「どうせやる事なんてないんですし、遊びましょう！！」

「文、一応仕事なんだぞ」

「でもやる事がないのは事実ですよね？」

「まあな」

「ならええやないですか」

「刹那さんは本当によくわかっていますね」

この天狗娘達は。仕方ない。仕事は完全にアリストテレスに任せて俺も楽しむとしよう。

文ｓｉｄｅ

最近出番がありませんでしたから楽しみますよ～。

「金魚すくいですよ！やりましょう！！」

「ああ、おやっさん。三人だ」

「あいよ。ポイは普通のとモナカがあるけど」

最中？あの最中ですか。金魚すくいに使われるとは、外の金魚すくいは随分贅沢ですね。

「せっかくですから私は最中でやってみましょうか」

最中なんて使えば簡単に取れるでしょうからね。紙と違って丈夫ですし。

「ならうちも」

「俺は普通ので」

「はい。しっかりやんな」

成る程。二本の針金で最中を刺しているのですか。さてさて、取りに行きますか。

「ほっ」

金魚をすくい上げ、お椀に移そうとしたら最中が水分を吸って重くなり、更に金魚も暴れたせいで簡単に割れてしまった。

「はい残念」

「くっ、騙された」

「あー、こっちも割れた」

刹那さんも割ってしまいましたか。最中は初見殺しですね。要さんはどうなったのでしょう。

「ほいほいほいほいっと」

「「おぉ」」

「兄ちゃんやるな」

要さんはどんどんと紙のポイで金魚をすくっていきます。本当に上手ですね。

「あ」

ポチャン

「残念。だけど十分取れたな兄ちゃん。何匹だい？」

「27だな。まあまあか」

「学園祭三日間でトップだよ。全く。金魚すくい屋泣かせだぜ」

「連れが取れなかったんだからしょうがない」

「あやや、要さんは本当に凄いですね。写真を一枚」

「ピース」

パシャ

うん、いい写真が撮れました。しかし勢いでやってしまった金魚すくい。この金魚はどうしましょうか。

「アリストテレス、いるか？」

「仕事を任せたと思ったら次は何ですか？」

突然現れたアリストテレスさん。相変わらず主である要さんの呼びかけには素早い行動をしますね。執事の鑑ですね。

「水槽とかポンプとか餌とか買ってこの金魚を家に置いてきてくれ」

「了解しました」

「文、刹那、次行くか」

「「はい」」

私は先に歩き出した要さんの腕に抱きつきました。

「おっと」

「あ！ずるい！！」

「早い者勝ちなのですよ」

「ハハハ、ほら刹那も、こっちが空いてるぞ」

「なら、えいっ」

私は右腕に、刹那さんは左腕に抱きつきます。両手に花と言ってもいいと思いますが、要さんはどう考えているのでしょうか。私の事を、どう思っているのでしょうか。

刹那ｓｉｄｅ

要さんの腕は暖かいな。とても立派やし。こうやって腕組んどったら周りからどう見えるんかな。あ、でも文さんもおるから彼女には見えんかも。

「や、モテモテだね」

「真名か。って何やってるんだ？」

「ご覧の通りさ」

ご覧の通りって、射的やな。本物のガンマンが射的やっとんのはどうなんや。

「真名さん、クラスの手伝いは？」

「わかってるだろう文さん。私は金になる仕事が好きなんだよ」

「あやや～」

「ちゃんと働け、龍宮」

「イチャイチャしている刹那には言われたくないな」

「五月蝿いな」

龍宮と文さんがいなければイチャイチャじゃなくて、もっと激しく……こほん。

「まあせっかく来たんだ。一発やってかないか？」

「あや～。一発やってかないかとは、とってもいやらしい響きですね」

「それは頭が腐ってるからだよ」

それは同感。でもすずかさんの方がもっと腐ってる気がする。

「弾は三発で１００円。商品は倒したら貰える。良心的だろう」

「そうですかね？本当に倒せますか？」

「文は疑い深いな。大丈夫だ。上手くやれば全て一発で倒せるようになっている」

このくらい、銃の空気圧を高めてしまえば簡単に……

「刹那、イカサマするなよ」

「な、なんの事やろな～」

「それじゃあ丸わかりだぞ」

うぅ、だって嘘は苦手なんやもん。

「では私から」

パン　パン　パン

コトッ

文さんが三発撃つと、一発がキャラメルの箱を倒した。

「おぉ！？本当に倒れましたね」

「……没収」

「じょ、冗談ですよ」

でもうちも正直接着剤かなんかでくっつけとると思っとった。

「こんな簡単に倒れて儲かるのか？」

「大丈夫だよ要さん。今回は文が一枚上手だっただけだ。倒れにくいように工夫はしてあるんだけどね」

「そうかい」

パン　パン　パン

コトッ　コトッ　ドサッ

「「「「……」」」」

「もう来るな！！」

「「「「いやいやいや」」」」

要さんは見事に三発全てを当てて商品を倒した。しかも最後の一発は大きめのぬいぐるみやった。倒れにくいようにやっとった龍宮からすれば悔しい事この上ないやろな。

「刹那もさっさとやれ！！」

「苛々しなさんな」

「要さんのせいだよ！！」

「皺増えるぞ」

「五月蝿い！！高いものばかり撃ち落として！！」

あ、全部高いのやったんや。要さんわかっててやったな。

「じゃあうちやるね」

パン　パン　パン

「はい外れ♪残念だったね♪」

「嬉しそうだな」

「嬉しそうですね」

「残念賞とかあるん？」

「ないよ♪」

うわー、ご機嫌や。イカサマすれば良かった。

「次頑張ろうな」

要さんが頭を撫でてくれた。もうこれだけで満足やわ～。

要ｓｉｄｅ

何だかんだで夕方まで遊んじまったな。

「楽しかったですね」

「だな。若い頃に戻った気分だ」

「年寄り臭いで」

「酷いな刹那は。気にしないけど」

そういや俺って実年齢いくつだっけ？肉体は２２くらいだけど、神様の修行のせいでかなり年齢がいっちゃったからな。まあわからんならそれでいいか。

「どうでもいい考えだな。さて、次はそこの二人も入れて五人で回ろうな」

「あ、バレとった」

「当然だろ。要さんだぞ」

「玉藻にヴラド、頑張ってぇな」

「私頑張ったわよ」

「彼に挑むなんて無謀だったのさ」

「このちゃんに千雨さん、付いてきとったんやな」

「お面や綿菓子を持って楽しみまくってるじゃないですか。そしてストーキングは記者の特権ですよ」

ストーキングは誰の特権でもねぇよ。

「祭りは今晩まであるんだ。楽しむぞ！！」

「「「「「「おーーー！！」」」」」」

「ただし玉藻とヴラド、てめぇらは駄目だ」

「「ひどっ！！」」

しかしこのまま平和だとつまらんな。ここは一つフラグを建ててみるか。

「このまま何事もなく終わるといいな」

なーんてな。

これはデートになりますか？（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「椛お姉ちゃんそろそろお休みしたら？」

椛「まだ大丈夫。そんな激しい仕事じゃないんだから。でも心配してくれてありがとう」

叶「ううん。気にしなくていいよ」

椛「今日はネギくんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

ネギ「あ、どうも」

椛「次回のアリシャ筆頭と言われていますがどうですか？」

ネギ「どうって言われても」

叶「というか楽屋訪問の必要あったの？」

ネギ「え！？」

椛「では次回もお楽しみに」

フラグが発動した（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「ぐすん」

スタッフ「あ、こんな所にいた。もう始まりますよ」

ア「スタッフのくせに生意気な！！」

スタッフ「何が！？」

シャ「駄目じゃない。スタッフさんに八つ当たりしたら」

ア「五月蝿い。もう私達は終わりなのよ。次回作になったら降板よ。読者だってこんな茶番望んでないわよ」

シャ「そうかもしれないわね。後書きが奪われてここにきたんだから次は降板かもね」

ア「だったらもう頑張るのなんてやめましょう」

シャ「でもそれでいいの？降板だとしたらこれが私達の最後の仕事なのよ」

ア「……」

シャ「私は知ってるわ。アリサちゃんはどんな事にだって全力で取り組む子だって。なのにこんなところで不貞腐れてていいの？」

ア「それは……」

シャ「頑張りましょう。私達最後の仕事になるかもしれないんだから」

ア「わかったわ。最後だもんね。全力でやってやるわ！！」

シャ「それでこそアリサちゃんよ」

雨「茶番乙。本編どうぞ」

アリシャ「「作者コノヤロー！！！」」

フラグが発動した

要ｓｉｄｅ

麻帆良祭の最後。三日目の夜になった。周りはドンチャン騒ぎ。俺も酒をちょびっと呑んでいる。

「要くん、楽しんでる？」

「おう、なのはか。お前も楽しんでるみたいだな」

「うん。でもフェイトちゃんなんて凄いよ」

「呼んだ？」

フェイトの格好は浴衣にお面に綿菓子に焼きそばに、麻帆良祭ってそこらの町の祭りだっけ？

「お祭りっていくつになっても興奮するよね」

「うん、そうだな」

フェイトは昔から日本の祭りに異常に興奮してたからな。それが今でもしっかり続いてるんだよな。

「要さん！」

「スバルか。食ってるな」

「断言！？」

スバルなんだから断言するに決まってるだろ。事実両手に大量の食いもん持ってるし。よくバランス崩さないな。

「そういやヴィータとすずかは？」

「あたしはここだぞ」

ヴィータは普段と変わらない格好だな。まあヴィータははしゃいでもいろいろと抑えるからな。

「いろいろと出し物があって良かったな。要のクラスのお化け屋敷も良かったぞ」

「そうか。あのクラスはやる時はやるからな。それですずかは？」

「さっき超ちゃんの所に行ったよ」

超のか。ロボットの説明にでも行ったか？というかそうしてもらわんと困る。あんなもん勝手に渡して。

「ねぇ要くん」

「ん？」

「あの四人はどうするの？」

四人、木乃香と刹那と千雨と文か。なのはが言ってるのは俺らがこの世界から去る時連れて行くか行かないかという事だろう。

「どうするか」

「決めてないの？」

「無理に連れて行ってもあれだし」

「あの四人なら無理にでもついて来ると思いますよ。私達みたいに」

「だよな」

俺としては連れて行くのはいいと思う。だがあいつらが俺の旅についてこれるかというと無理だろう。だから今ある考えとしては……

「あいつらには幻想郷で待機してもらおうと思う」

「幻想郷で。確かにそれならいつでも会えるね」

「文は元々幻想郷の住民だし、刹那は親が天魔だ。木乃香と千雨も馴染むのにそう時間は掛からないだろう」

「ちゃんと考えてるんだな」

「失礼だよヴィータ。要は魔法はあれだし脳筋だけど考えて行動するんだから」

「よしフェイト。その喧嘩買った」

「え？」

え？じゃないだろ。いくら家族だからって行っていい事と悪い事があるだろ。そこら辺の天然はいい加減直してくれ。

「要先生～」

「どうした朝倉」

「武道会の選手に取材してるんだよ。お願いね」

「了解だ。何を話そうか」

「じゃあ……」

木乃香ｓｉｄｅ

「うむむ」

『どうしたのよ木乃香』

『お嬢、眉間に皺が寄ってるよ』

玉藻もヴラドも少し静かにしてくれんかな？うちがサーチャーを使

って要兄ちゃん達の会話を聞いとんのに。要兄ちゃんがうちらの事を考えてくれとんのは嬉しいけど、やっぱりいつも一緒にいたいわな。

「「むむむ、む？」」

「千雨ちゃん」

「どうした木乃香。まさかお前も」

「多分同じ事やっとったな」

「このちゃん、千雨ちゃん、何しとんの？」

「何やら面白そうな匂いがしますが」

「せっちゃんに文さん。実はな、かくかくしかじかで」

「わからんよ！！」

「成る程」

「わかったん！？」

「いいえ」

「ズコーッ！！」

せっちゃんはほんまにおもろいな。文さんも上手く乗ってくれるし。とりあえず本当の事を話すとしよか。

「えっとな……」

志貴ｓｉｄｅ

「終わるな」

「そうね」

祭りの終わりはなんだか寂しさがあるよな。たとえそれが毎年来てる学園祭でも。

「兄様、姉様、お酒でもどうです？」

「ありがとー」

「おいおい、どこから持ってきたんだ？」

「私がお店の余りを頂いてきました。いけませんでしたか？」

「茶々丸か。まあ悪くなんてないけどさ」

「ケケケ、兄貴ハ固イナ」

「そうよ～、志貴はそのカチカチな頭を何とかしなさ～い」

なんだ？味方はいないのか？結構まともな事言ってるはずなんだが。
そういえば秋葉のやつも未成年で飲酒してたな。って関係ないな。

「なあ、四人共」

「なぁに？」

「何でしょう？」

「どうかされましたか？」

「ドウシタヨ」

「このまま終わるかな？」

「「「「ないない（ナイナイ）」」」」

一瞬で答えたな。でも俺もそう思う。それでもみんながいる。だから何かあってもきっと乗り越えられるさ。

クラトスｓｉｄｅ

「おじさん、お疲れ様」

「まだだぞ、真名」

「わかってる。だけど今くらいはのんびりしようじゃないか」

「ふっ、そうだな」

今だけは多少の息抜きとしよう。これから何が起こってもいいようにな。

「そういえばおじさん、武道会を優勝したんだからいろいろ取材とか大変じゃなかったかい？」

「ああ。慣れない事はすべきではないな」

人に囲まれてあれこれ話すのはどうも疲れる。これはやはり慣れの問題だろうな。

「真名、学校を卒業したらどうする？」

「傭兵として働くさ」

「コウキを捜すの間違いではないか？」

「五月蝿いな」

「くくっ、私も手伝おう」

「……いいのかい？」

「ああ」

長い付き合いなのだ。それくらいしてやらないとな。それに私も真名が卒業してはやる事がない。

「頼りにしてるよ」

「頼りにされよう」

舞花ｓｉｄｅ

今日は今まで何もありませんでしたわね。嵐の前の静けさといったところでしょうか。

「……」

「あらまーくん。そんなにげっそりしてどうしました？」

「わかってるくせに」

そうですわね。まーくんったら武道会準優勝のおかげで女の子のファンがいっぱい増えましたからね。追っかけられて大変でしょう。

「でもそんなだと未来のお嫁さんが怒りますわよ」

「未来のお嫁さん？」

「ジーッ」

「あれ？叶ちゃんどうしたの？」

「別に」

あらあら、可愛いヤキモチですこと。今度私も優さんに甘えてみましょうかしら？攻めてばかりでは飽きられるでしょうし。

「叶ちゃん、どうして不機嫌なのさ」

「不機嫌じゃないもん」

「おや、どうかしたのかの？」

「あら鏡さん。まーくんが乙女心を理解していないだけですわ」

「それはいかんのぉ」

「ほんまになぁ。うちらみたいに仲良うせんと」

鏡さんと千草さんはただのバカップルでしょう。元々鏡さんは要さんを倒すため。千草さんはスクナで魔法協会を叩き潰すためにいろいろやってきたのにどうしてこうなったのでしょう。

「叶ちゃ～ん」

「ふーんだ」

「まーくん、そろそろ終わりにしなさい。変態ですわよ」

「何が！？」

そうやって幼女を慰めようとしている姿がですわよ。

要ｓｉｄｅ

……何も起こらない。いや、いい事なんだが、何というか、こう、拍子抜けした感じ。

「そろそろ帰るか」

「要〜」

「お、久遠。今まで何してたんだ？」

「お買い物〜」

確かにその両手にはいろいろと物が入ったバッグがぶら下がっていた。

「重そうだな。持ってやるよ」

「ありがと」

俺が久遠のバッグを受け取ろうとしたその時、世界は灰色になった。

「なんだ？」

「結界。かなり強力な」

結界か。よく見ると灰色になっていないものもある。俺の知り合い達だ。

『要くん、聞こえるかな？』

「神様、何ですかこれは」

『どうやら君とその関係者を閉じ込めたみたいだね。無謀な事をする。君が暴れてもこのタイプの結界なら被害は出ない。存分に暴れなさい』

「了解」

俺が神様と話しているうちにみんなが俺の周りに集まってきた。

「要、なんだこれは」

「よくわからんが結界のようだ。作った奴を潰すぞ」

「その相手はどこにいるのだ」

クラトスの質問には答えれないな。わからないんだから。

「……あれは」

「どうした真名」

「あれは何だい？」

真名が見ている方向を全員が見る。そこには空中を飛ぶ人影があった。俺らもよく知るそれは……

「ズェピア先生？」

フラグが発動した（後書き）

〈かなもみ楽屋訪問〉

雨「いひゃい」

叶「顔ぼろぼろだよ」

雨「アリシャめ、本気で殴りやがって」

叶「仕方ないよ。そういえば椛お姉ちゃんは？」

雨「今日は椛の楽屋に行きます」

叶「前回不評だったもんね」

雨「ネギの不人気さに俺が笑った」

叶「じゃあ、お邪魔しまーす！！」

椛「！？」

雨「あ……それ」

叶「ハーゲンダッツだね」

椛「あ、いやこれは」

雨「俺のハーゲン……」

椛「そ、その、えっと」

雨「（，・ω・、）」

椛「あうう……」

叶「あ、まだあった。いただきまーす」

雨「！？」

椛「ほ、ほら雨季さんも一緒に食べましょう」

雨「騙されないぞチクショー！！！」

椛「ああ！！」

叶「では次回もお楽しみに。っと忘れるところだった。ＲａｉＮ様にパパ、一条要の絵を描いてもらいました。どうぞ」

＞ｉ２４５１１―２２９６＜

叶「ちゃんと貼れてるかな？ではでは～」

全員で潰す（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「もうすぐ完結なんですって」

シャ「みんな私達と会えなくなるのよ。寂しいでしょ？」

ア「でも悲しんでちゃ駄目よ。私達はみんなの心の中にいるんだから」

シャ「いい事言ったわ」

ア「じゃああらすじね。
・フラグビンビン
・ほのぼの？
・親方！空にズェピア先生が！！」

シャ「では本編どうぞ」

全員で潰す

要ｓｉｄｅ

どうして一般人のズェピア先生が空を飛んでいるのか。今は魔力を感じるが、隠していたって感じはしないんだよな。

「おい、あんた何者だ」

「おや、私を知らないのかね？ならばお答えしよう。私はワラキアの夜。悪夢を再現するタタリだ」

タタリ、なはずないだろ。それなら一番に気付く奴らがいる。

「ふざけろ。お前がワラキア？違う。ワラキアは狂っていたが、目的を見据えていた。お前みたいに空虚な目はしていなかった」

「志貴の言う通りね。あんた、少し調子に乗り過ぎよ！！」

アルクがワラキアモドキに向かって爪を振るう。ワラキアモドキは軽く避け、無邪気に、いやらしい笑みを浮かべた。

「やっぱり志貴とアルクにはバレちゃうか」

「で、何なんだ。お前は」

「僕は何だろう」

「言葉遊びか？それとも私達を馬鹿にしているのか？」

「そう怒らないでよクラトス。僕は僕が何か解ってないんだからさ」

自分が何か解ってない？本当に馬鹿か？自分が自分を解っていなければ自分という存在を確立する事が出来ない。

「僕が解ってるのは僕の力だけ。こんな感じのね」

ワラキアモドキがそう言うと二つの人影が出てきた。

「ミトス……」

「弓塚……」

「感動の再会だね」

「「黙れ」」

目に光はないが、本物のようだな。あいつらが間違えるはずもない。

「死者蘇生か？」

「さあ？知らない」

ヤバい。殴りたい。でもあの体がズェピア先生のものって可能性もあるし。

『みんな、聞いて』

お、神様。何か知らないがナイスタイミング。

『それの正体は転生者だったものの魂だよ』

「だったもの？」

『力を求めたんだろうね。他の魂を吸収し過ぎた結果、自分がなくなって、魂だけの存在になったんだろう。そしてあらゆる世界から死霊を召喚する力を手に入れた。推測だけどね』

「結構です」

「それが僕なのかな？」

「知らんよ。俺らはお前を叩き潰すだけだ」

「怖いね君は。どんどん喚ばないと」

一人、また一人とあいつが召喚する死者が増えていく。俺らの見知った顔が多い。中には修学旅行で戦った四季やユアン。こないだの黄理もいやがる。そういえばユアンって死んでたっけ？あらゆる世界だから並行世界の死んだユアンか？

「この世界にいるはずのない存在はお前が召喚したのか」

「うん。自我を持たせてね」

ムカつく野郎だな。だがさっきの神様の説明であいつは魂という事がわかった。つまりあれは本物のズェピア先生の体だ。殴れない。

『みんな、死者は倒せば還る。この世界の鬼や悪魔と同じだ。存分

にやってくれ』

「それを聞いて安心した。死者を愚弄するような真似は許さん。ここで断ち斬る！！！」

「クラトスの言う通りだ。お前みたいな奴は許さない」

「そうよね。ヘラヘラしてるし、なんかムカつくわ」

「茶々丸、準備はいいな。兄様と姉様の援護をするぞ」

「問題ありません。確実に殲滅しましょう」

「ケケケ、皆殺シダ！！」

「あややや、皆さんやる気のようで。私も性に合わず熱くなってきましたよ」

「射命丸が珍しいな。だがそれでいい！！この天魔も全力で参ろう！！」

「千草は下がっておれ、儂らで十分じゃ」

「そうはいきまへん。あん中には大戦の盟友もおるんや。うちの手で還したる」

「まーちゃん。最初から一つになっていくよ」

「わかりましたわ。力の違いを見せて差し上げましょう」

「久遠もやるよ。霊相手なら得意だからね」

「プレシア母さんまで……絶対倒す！！」

「フェイトちゃんたら殺る気満々だね。なるべくフォローするよ」

「熱くなりすぎんなよ。スバルも」

「わかってますよヴィータさん」

「私はロボットでも出そうか。いや、木乃香ちゃん達を守った方がいいかな？」

「舐めんといてやすずかさん。うちらだって戦える。玉藻！！ヴラド！！」

『木乃香！！早くオーバーソウルしましょう！！』

『おや、私が串刺しにしたのも沢山いるね。また串刺しの刑だよ！！』

「桜咲刹那。全力で参ります！！」

「私はすずかさんの手伝いでもしてるよ」

「これだけ多数の相手をして弾が持つか心配だね。終わったら学園長に請求しよう」

「俺も忘れたらアカンで。狗族の強さを見せつけたるわ」

みんながみんなやる気を出してるな。はっきり言って負ける気はしない。俺らが最強というわけじゃないが、寄せ集めの死者に比べたら圧倒的に有利だ。

「待って下さい！！僕もいます！！」

「私だっているわよ！！」

「ネギ坊主に明日菜ちゃん。邪魔にならないようにな」

「「はい！！」」

すっかり忘れてたけどこの二人もいたんだよな。っとまだまだ出てきそうだ。

「師匠、お供しますぞ。綾瀬くんと宮崎くんも連れてきましたぞ」

「微力ながら一緒に戦わせてもらうのですよ」

「頑張ります。頑張って優さんに褒めてもらいます」

近右衛門に、夕映とのどかも。向こうに比べたら数も少ないが、かなりの大所帯になったな。だけどいいじゃないか。面白い戦いになりそうだ。

「怖い人がいっぱいだ。みんな、やっちゃえ」

「やられるのはお前だ！！！！」

クラトスｓｉｄｅ

敵は数が多いが、その中でも強者と言えるものは数少ない。私達を舐めすぎたな。

「ハァッ！！！」

私が一度剣を振るえば何人も吹き飛ぶ。そんな中ミトスがこちらに向かってきた。目に光はないが確かにミトスだ。その動き、その技、その魔法。間違えるはずもない。だが……

「貴様はミトスだがミトスではない！！心無き抜け殻は天へ還れ！！！」

私はミトスを斬り捨てた。実に気分が悪い。やはりあやつは許せる存在ではないな。

「そして、お前達も大人しく還ってくれ」

振り向いた先にいたのはロイドやコレット、他にも共に旅をした仲間達。

「さらばだ。シャイニング・バインド！！！！」

私を中心に光が溢れ、周囲の敵は消えていった。自らの手で過去の仲間を葬るほど最悪な事はないな。

志貴ｓｉｄｅ

「やっぱりあんたが立ち塞がるか。親父」

「……」

やっぱりだんまりだよな。大会と戦った時と違って心が無いんだ。当然だよな。

「殺す」

目に巻いていた包帯を外す。世界中の死が俺の中に飛び込んでくる。予想通り、召喚された死者達は死徒と変わらない。俺の眼から視れば死の塊だ。少しナイフを当てれば簡単に死んでしまいそうだ。

「だけど親父はそう簡単にいかないよな」

「……」

操り人形となった親父が攻撃してくる。人形になっても親父は親父か。

「志貴！！後ろ！！」

アルクェイドの声が聞こえ、親父の攻撃を避けながら振り返ると、そこには今にも俺の胸を貫かんとせん弓塚がいた。

「ちっ！！エヴァ！！」

俺がエヴァを呼ぶ。これが作戦の合図だ。エヴァは影を使った転移魔法で俺を自分の影まで引き寄せ、茶々丸が俺のいた所へ煙幕を投げ込む。そして締めだ。

「星の息吹よ。月よ、落ちろ！！！」

アルクェイドが月落としを煙幕目掛けて決めた。悪いな。これだけの数だ。親父達ばっかりに時間はかけていられないんだよ。

「ケケケケ♪」

チャチャゼロは楽しそうだな。

刹那ｓｉｄｅ

「刹那、射命丸、やるぞ」

「はい、お父様！！断空閃！！」

「お任せを。幻想風靡！！」

うちが斬り裂き、文さんが高速で吹き飛ばしていく。その作業を何度も続け、敵を一つに纏めていく。

「では、『０』」

そして纏めた敵をお父様が空間ごと０にした。お父様の力はいつ見ても圧巻やわ。

「久しいね！！串刺しにするこの感覚！！最高だ！！」

「ヴラド、もうちっと声のボリューム落としてな」

『やよね、ああいう変人は』

「毒殺する狐に言われたくないね」

向こうではこのちゃん達が暴れてる。実体を持って血にまみれた槍の林を作るヴラドさん。玉藻さんを殺生石に入れ、相手を毒殺するこのちゃん。どっちも酷いね。

「吹き飛べぃ！！」

「『やりますね学園長。ユグドラシル』」

あっちでは若くなった学園長先生と舞人さんが暴れとった。学園長先生はトンファーと魔法で敵を圧倒し、舞人さんが巨大な樹を成長させて敵を飲み込んどった。こっちもこっちで凄い。

「刹那さん危ない！！」

ザンッ

「あ、明日菜さん。ありがとうございます」

「気にしない気にしない」

いつの間にか敵に後ろを取られたけど、明日菜さんが敵を斬って助けてくれた。斬っただけで敵が霧散したけど、明日菜さんの持っとる大剣は敵の弱点かなんかなんやろか。

「惨めだな、刹那」

「五月蝿いなぁ、龍宮。そっちだって油断したらあかんで」

「私は油断なぞせんよ」

「雷の暴風！！」

「うわっ！？ね、ネギ先生！！攻撃は周りを見てやれ！！そこは笑うな！！」

ネギ先生が撃った雷の暴風が龍宮の横すれすれを飛んでいき、ついついうちと明日菜さんは笑ってもうた。

「ネギはなっとらんなぁ。それでも俺のライバルになりたいんか？」

「別になりたくないよ。小太郎くんはいっぱい敵を倒す攻撃がないからこうならならないだけでしょ」

「言ったな。なら見せたる。狗狼（クロー）・最大出力（フルパワー）！！」

小太郎くんが力を使うとなんか全身が黒くなってきた。大丈夫なんかな？

「おぉぉぉぉぉ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！」

「ギャー！絶対暴走してるじゃない！！」

「このちゃ～ん」

「はいは～い」

「■■■■■ぉぉ…………」

「即死性の毒はよう効くな～」

『即死！？』

「冗談やて」

その冗談はあかんで。

なのはｓｉｄｅ

「ハアアアアアアアア！！！」

フェイトちゃん最初から飛ばしてるな。あんなに飛ばしたら持たなそうだけど。あ、私も攻撃しないと。

「ディバインバスター・ガトリング！！」

私は敵に向かってディバインバスターを乱射する。うーん、カ・イ・カ・ン♪

「なのは、もっと過激にやれ」

「ヴィータちゃん、いいの？」

「あたしが許す」

ヴィータちゃんに許されてもな。よくよく考えると灰色のこの世界は破壊しまくっても大丈夫なのかな？

「……神様がいるからいっか。スターライト・デストラクション！！！」

スターライト・ブレイカーより強くて、ビッグバン・ブレイカーより弱い砲撃を撃ち放つ。撃ち込まれた場所を中心に巨大なクレーターが出来た。

「うちの式達まで巻き込まんといて！！」

「千草さんごめんね」

でも混ざってるとよくわかんないもん。

「オラオラオラオラオラァ！！！ついでに、ディバインバスター！！！！」

おー、スバルもやってるね。でも一番はフェイトちゃんだね。一人でかなり蹴散らしてる。

『みんな、お待たせ』

「すずか、ちゃん……」

ロボット持ってきたんだね。それって確か多人数搭乗可能大型魔導戦術機『六華・新月』だっけ？

「またロボットかよ。千雨もそれの中か？」

『夕映とのどかもいるぜ』

『愚民を見下ろすのはいい気分ですね』

『クスクス、駄目だよ夕映。そんな事言っちゃ』

『じゃあ三人共、行くよ。せーの』

『『『ファイヤー！！！』』』

六華・新月のいろんな場所からミサイルやビーム兵器が飛んでいく。
酷い。世界観ぶち壊しなの。

「あたしもそろそろ、ギガントシュラーク・イグニッション！！！」

ヴィータちゃんが巨大なハンマーを打ち下ろすと、そのハンマーの大きさに比例したような巨大な爆発が起こった。もうこっちは大丈夫だね。要くんはどうなったかな。

要ｓｉｄｅ

めんどくせぇ。

「ニードルマシンガン！！」

「当たらないよ？」

「これはどうじゃ？スナイプシュート！！」

「どこを狙ってるの？」

こっちがズェピア先生の体を傷つけれないからって調子に乗りやがって。

「鏡！！引っ張り出せないのか！！」

「難しいのぉ。隙があれば久遠がなんとかしてくれるじゃろうが」

「クー、ごめんね」

「君達に僕は倒せないよ。倒したいならこの体ごと倒せばいいじゃないか」

「それが出来ないから困ってるんだろ。さっさとズェピア先生から離れろ」

「何で君の言う事聞かないといけないの？」

こいつ、マジでガキだな。最近の理屈っぽいムカつくガキだ。

「やるぞ、鏡」

「うむ」

「まだやるの？諦めたら？君達の攻撃で僕に隙は出来ない」

「なら私の攻撃ではどうです？烈閃咆（エルメキア・フレイム）」

「え？ぐぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？ぜ、ゼロスぅぅぅ！！君は、僕側だったはず」

「私は面白い方に付くんですよ」

「いい仕事をしたの。バインド」

「！！？」

「久遠、頼むぞ」

「任せて！！悪しき者よ！！彼の身より離れ、天へと還れ！！解！！」

「■■■！！！！！！！！！！！！？」

久遠がワラキアモドキに札を貼り付けると、ワラキアモドキは声にならない悲鳴をあげた。そしてズェピア先生の体から無数の霊が飛んでいき、最後に一人、黒髪の普通の青年の霊が出てきた。これが本体か。

「お前は遊びすぎたよ。武装・ＯＲＴ」

俺は腕をＯＲＴ化させて向かっていく。

「最後に何か遺言は？」

「僕、俺はお前が嫌いだ。力があって、友達が沢山いて、みんなに愛されて、人々の中心にいるような奴が大嫌いだ。…………………俺も、そんなのになりたかった。そんな輪に入りたかった」

「そうかい。来世は素晴らしい人生になるのを祈ろう」

ズドォォォォォォォォォン

俺は全力で。欠片も残さないようにそいつを殴った。そいつが消えると同時に召喚された死霊達は消えていった。

「終わったか？」

「多分の」

「いや～、ご苦労様です」

「どうしてゼロスがいるの？」

「久遠さん、それはヒ・ミ・ツですよ」

「大方修学旅行の時も今回もあいつに面白い事があるって誘われたんだろ。このゴキブリ」

「その通りです。ただゴキブリはやめて下さい」

「やだね」

さっきの攻撃もびっくりしたんだぞ。精神に直接ダメージを与える烈閃咆（エルメキア・フレイム）だったから許すけどな。

「さっさと帰れ」

「仕方ないですね。また来ます」

「もう来んな」

ゼロス、じゃなくてゴキブリも帰ったし、今日はみんなでパーティ

ーにするかな。全員そんな雰囲気だし。

『みんな。お疲れ様と言いたいけど、まだ終わってないよ。あの子、最後に大層な置き土産をしていったよ』

置き土産？一体何を……おいおいおい。

「え……何、あれ……」

「神様。俺と鏡以外を別の場所へ」

『いいよ。みんな、転移するからね』

神様は俺と鏡を除いた全員を有無を言わさず転移させた。有り難い。

「オリジナル。あれはお主の記憶が正しいなら」

「お前の思ってる通りだろうさ」

あいつの置き土産。死霊を召喚するんだからこれも召喚可能だったって事か。

騎士アド・エデムの魔剣・斬撃皇帝によって両断され消滅したもの。全長数十ｋｍはある黒い巨人。最も地球上の生物を殲滅した黒いアリストテレス。木星のアルティメット・ワン。

「タイプ・ジュピターだ」

全員で潰す（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「クライマックス！！」

椛「どうなるのかしらね」

叶「パパ頑張れ！！」

椛「正直こんな展開にする予定は雨季さんもなかったみたい」

叶「ズェピア先生に憑依してたのももっとおちゃらけたのだったみたい」

椛「今回はその雨季さんの楽屋です」

叶「お邪魔しまーす！！」

雨季「……あ」

叶「何してるの？」

雨季「ポケモン。使えるクチートを育ててる」

椛「もうすぐ終わりですね」

雨季「すぐ次回作だけど」

叶「その前にコラボはしないの？」

雨季「最近疲れてきたからな。要望があれば人数制限付きでやるよ」

椛「あんまり無理しないで下さいね。この前も熱を出したんですから」

雨季「気をつける。でもパンダ師匠といぬさくやさんのコラボ絵を部活ので描かないと」

叶「では次回もお楽しみ」

決戦（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

シャ「前回のあらすじ！！」

ア「やっぱり出たよアリストテレス！！」

シャ「今回は木星のアリストテレス。タイプ・ジュピター！！」

ア「要や鏡はどう戦うのか！！」

シャ「では本編どうぞ！！」

ア「何かあれば遠慮なく言ってね」

決戦

鏡ｓｉｄｅ

これはデカいの。ただ歩くだけで周りに被害が出そうじゃ。

「鏡、全開でやるぞ。星の枷解除。完全武装・ＯＲＴ」

「確かに全開でやらねばな。ＯＲＴよ」

オリジナルはその身にＯＲＴを纏い、儂はＯＲＴの脚を背中から出す。こうしてみると儂の力はなんと小さき事か。５０％しか再現出来んのじゃから当然なのじゃが。

「吹っ飛びな！！」

オリジナルが魔力を放出しタイプ・ジュピターに当てたが、多少よろめいた程度で傷一つ付いていなかった。

「儂も、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）！！」

後ろの空間が歪み、無数の武器が飛んでいった。そしてバビロンが空になるまで撃ったのじゃが……

「無傷か。ギルガメッシュも大号泣じゃな」

「当然だろ。傷という概念がないんだから」

「そうじゃったな」

むっ、腕をこっちに向けてきた。何をするつもりじゃ。

「！　気をつけろ、オリジナル」

「気をつけてるって。あれは何をする気だ？」

「磁力線とガスがこちらに向けられとる」

「つまり何だ？」

オリジナルよ……もうちっと学を磨いたらどうなんじゃ。

「つまり……来るぞ！！」

「！」

儂らに向かって巨大な炎が放たれた。紅炎（プロミネンス）。あやつにとっては大した大きさではないのかもしれんが、人間大の儂らにとってはあまりに巨大。

「じゃが、儂らを」

「舐めるなよ！！！！」

儂はＯＲＴの脚を、オリジナルは拳を振って炎を掻き消した。

「あちち、手が溶けた」

「儂のも溶けたが、再生出来るのじゃから問題ないじゃろ。それよ

り見てみよ。タイプ・ジュピターが驚いておるようじゃ」

「そうなのか？まあ小さな人程度に自慢の攻撃を消されたら驚きもするよな」

さて、どうするべきか。傷が付かん相手という面倒な事じゃが、ここはやはり儂らが最も得意とする戦いで行くとするかの。

「武装・ＯＲＴ」

「お、鏡も使えるのか」

「手足だけじゃがな」

「ならやるか。殴り合いを！！」

「うむ！！」

要ｓｉｄｅ

相手がどんなに巨大でも関係ない。俺らは俺らの戦い方であいつを倒す。俺はシールドを足場にし、タイプ・ジュピターの胸元辺りまで跳んだ。

「潰れろ！！」

ドガァ

全力で殴る。それでも傷は付かないが、数歩後退りしたようだ。

「ハァッ！！」

ズドォ

そこで鏡が顔面を蹴り上げた。だがこれでも倒れないのは流石だな。

「ん？ぐぁっ！？」

「ぬぅっ！？」

突如熱を感じたので何かと思ったら、次の瞬間には熱風によって地面に叩き付けられた。これは知ってるぞ。太陽風だったか。擬似太陽を核にしているだけある。

「オリジナル！！」

「！」

目の前に巨大な拳が迫ってきている。逃げ出そうにも体が地面に埋まっている。魔力を防御に回すしかない。

ドゴオォォォォォォォォォォォォォォ

「ガハァッ！！！！？」

巨大＝強力。まさにこの図式に合うような攻撃力。ただ殴られただけでここまで痛めつけられたのはいつぶりか。

「お返し、だ」

俺がタイプ・ジュピターの拳を触ると、拳からどんどんと水晶化していった。もしタイプ・ジュピターが声を出せたら叫んでたかもな。

「……くっ」

だが水晶化は腕一本で収まってしまった。流石にデカすぎる。

「大丈夫か、オリジナル」

「ああ……少し痛い」

「そうか。して、あれは何じゃ」

「固有結界の改造版」

侵蝕固有結界・水晶渓谷。これは今まで何度も破られてきた。固有結界同士の衝突や固有結界そのものの破壊。なら破られないためにはどうするか。そこで行き着いた答えが外に展開しないという事。外に出すから破られる。それならネロ・カオスのように体内に展開すればいい。俺の場合自分の体内ではなく相手の体内にだが。ただの固有結界でなく侵蝕固有結界だから出来る荒技だ。

「名付けるなら『水晶魔像』かな」

「面白いのぉ」

「さあ倒すぞ」

水晶魔像はそう頻繁に使えない。相手に固有結界を叩き込むのは疲れる。だからこいつはやっぱり殴り潰さないとな。

「しかしここまでしぶといと倒せる気がしなくなってくるの」

「やれるだろ。だからあいつをダウンさせろ」

「ほう、策があるようじゃな。良かろう。どのような策か聞こうか」

「ああ……でな……潰す」

「出来るのか？」

出来る出来ないじゃなくてやるしかないんだよな。はっきり言って今回の相手はふざけすぎだからな。まともにやれば勝ちもしないが負けもしない。

「ではやるかの」

鏡と俺はそれぞれ別の脚に向かっていった。こっちの動きについてこれないタイプ・ジュピターはさっきの太陽風を発動させた。

「二度も同じ技が効くかよ！！」

「温い温い！！この程度では儂は溶かせんぞ！！」

鏡はなんか障壁を張って、俺は力技で太陽風を切り抜けた。そしてタイプ・ジュピターの脚の後ろに回り、思いっきり跳んだ。

「デカいからよくわからんが、この辺りか？」

「そうじゃろな。では行くぞ！！」

「俺らの必殺！！」

「「膝かっくん！！！！！」」

そう、膝かっくん。ただ膝の裏を全力で殴るだけ。だがそれでもこのデカブツを転ばすには有効な手だ。思惑通りタイプ・ジュピターは仰向けに倒れだした。

「鏡！！」

「承知！！」

鏡は魔法で俺を引き寄せ、更に転移魔法でかなり上空まで転移した。

「やはりデカい」

「うむ。かなりの高度じゃというのにはっきりとその形が見て取れる。ここまで巨大な物体があるとは」

「世の中不思議でいっぱいだ。じゃあ最後、頼む」

「思いっきりやるぞ」

鏡は俺の脚を掴んでジャイアントスイングを始めた。

「飛べっ！！！！」

そしてタイプ・ジュピターに向かって俺を投げ飛ばした。俺らの作戦は単純明快。超強力な一撃であいつを潰す。鏡が投げたスピード

に重力、俺の全力パンチ。これらを合わせてあいつを潰す。あいつを初めて倒した魔剣・斬撃皇帝は相手の大きさに合わせて威力を上げる単純なものだから、俺らも単純な威力で倒す。

（……まだ、足りなさそうだ）

やるからにはオーバーキル。俺はさっき使った水晶魔像を自分の腕に掛けた。やっぱり他を侵蝕するより自分を侵蝕する方がやりやすく精度も高いな。俺は拳を振りかぶり、仰向けに倒れているタイプ・ジュピターに突き出した。

「潰れろ！！水晶魔拳！！！」

ドガアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

上手くいった。タイプ・ジュピターを中心に超巨大なクレーターが出来て、タイプ・ジュピターも核を残して体の殆どが吹き飛んだ。

「熱っ！！？」

小型で擬似といっても太陽は太陽か。数十ｋｍもある奴の核だからやっぱりデカい。おや？輝きが増しているような。そうか、原作に忠実に自爆か。

「ってやばいやばい！！！」

流石にこんな至近距離で自爆を喰らったら俺もやばい。

「…………あ？」

爆発しないな、と思ったら核が黒いものに包まれていた。これは…
…鏡だな。まさか吸収するつもりか？

「……おぉ」

核を包んでいた黒いのがどんどん小さくなり、鏡の形になった。

「無事か？」

「くくく……素晴らしい！！なんと甘美な！！これが完全にアリストテレス支配した感覚か！！！！」

「落ち着け」

ベシッ

「あたっ！？何をするんじゃ」

「大丈夫だな」

「失礼じゃの。儂が食われると思ったか。それより、せっかく新しい力が手には入ったのじゃから試合でもせんか？」

「断る。神様に言っていろいろ直してもらうぞ」

終わったばっかりで強化した鏡と喧嘩してられるかっての。今日は疲れた。最後まで見届けたら寝よう。

決戦（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

雨季「いえーい」

椛「今日は叶ちゃんの楽屋なので雨季さんと一緒です」

雨季「鏡はオリジナルより有能なマテリアル」

椛「本当ですよ。ＯＲＴも５０％持ってるのに更にタイプ・ジュピターまで手に入れて。他にもいろんな能力持ってて人徳もある」

雨季「主人公を間違えたかな。まあ今回要の新技『水晶魔像』が出来たし」

椛「説明いきます。

『水晶魔像』とは水晶渓谷の改造版です。敵に使えば敵を水晶の像にする事ができ、自分に使えば更なる強化が可能です。世界に展開するわけじゃないので修正力の影響も受けません」

雨季「固有結界は世界を創るという概念を捨てた結果がこれだね」

椛「じゃあ楽屋に行きましょう」

雨季「元気か～？」

叶「あれ？もう時間？」

椛「今日は叶ちゃんの楽屋訪問よ」

叶「……ドッキリ！？」

雨季「いや、間違いじゃないけど」

椛「叶ちゃん、これまでお疲れ様」

叶「椛お姉ちゃんも」

雨季「好評なら二人はまた別な形で次回作に出てもらう予定だが」

叶「それまでには椛お姉ちゃんの赤ちゃん産まれてるかな」

椛「そうしたら抱かせてあげるわね」

雨季「さて次回はエピローグ。その後は軽くコラボをして次回作へ。
では次回もお楽しみに」

エピローグ（前書き）

今回で一応は終了となります。かなり短いですし、自分でもちょっとどうかと思いましたが、ご勘弁を。
ではどうぞ。

エピローグ

要ｓｉｄｅ

あの思い出の学園祭からもう三年近く経った。主にネギ坊主関連でいろいろあったな。完全なる世界、だっけ？あれは全部鏡が食っちまったんだよな。あいつどんだけ成長する気だよ。まあ他にもネギ坊主が立派な魔法使い（マギステル・マギ）になったな。

「要さん、そろそろですよ」

「っと、すまんな詠春」

『卒業生入場です』

これから３－Ａだった奴らの高校の卒業式だ。ただ一部は中学卒業と共に旅だったのもいる。明日菜ちゃんはネギ坊主と旅に出て、真名は中学卒業してすぐに戦場へ帰った。超は学園祭の終了と同時に未来に姿を消したが、すずかと文通しているらしい。俺とクラトス、鏡は既に教師を辞め、俺は麻帆良でのんびりと働き、クラトスは真名と戦場へ、鏡は今は千草と旅行に行ってるな。

「綾瀬夕映さん」

「はい」

お、夕映か。あいつものどかもちんちくりんだったのに成長したよな。

ドスッ

「おぉぉ……」

「要さん!?」

魔法の射手が、頭に。のどかがニッコリしてやがる。アーティファクト無しで心を読むようになったか。女は怖い。そうそう、夕映とのどかは旅に出るそうだ。優に相応しい女になるんだとさ。あいつに会えるといいな。

「近衛木乃香さん」

「カメラ班!!しっかり撮りなさい!!」

『ハッ!!』

詠春……気持ちはわかるが自分でやろうぜ。しかし木乃香も美人になったな。

「桜咲刹那さん」

「はい」

おうおう、改めて見ると刹那も凛々しくなったもんだ。

「……!!……!!」

天魔が無言で叫んでるな。大方刹那が天魔の周りの空気振動を0にしたんだろ。昔もこんな事あったな。

「射名丸文さん」

「はい」

……うん。変わらない。天狗だから当然か。しかし変わらないと言ったら小太郎の恋人やってる千鶴も変わらないよな。昔から大学生みたいで。

ドスッ

「うあぁぁ……」

今度は鉛筆が刺さった。千鶴よ、卒業式に鉛筆は不要だぞ。

「長谷川千雨さん」

「はい」

千雨はすずかの弟子やってるからマッドになるかと思ったんだが、普通だったな。常識人は伊達じゃなかった。

「そうそう要さん。少しいいですか？」

「なんだ？」

「叶ちゃんが舞人さんと一緒にいましたが」

「いいんだよ。叶はまーくんに任せる」

恋愛関係まで親が首を突っ込んでいたらいかんからな。親はそういうのは見守るのが一番だ。だがそれは相手がまともな奴に限る。昔はどんな相手でも駄目だったがな。

「要兄ちゃ～ん!!お父様!!」

「おう木乃香」

「綺麗ですよ木乃香」

「こっちも忘れないで下さい」

刹那と千雨と文も来たな。これで一応メンバーが揃ったな。

「文はともかく、他の三人は本当にいいんだな?幻想郷に行くとこっちにはそう簡単に帰ってこれないぞ」

「大丈夫やで」

「うちは元々あっちの血も流れとるし」

「私も大丈夫。向こうでも一応科学はあるみたいだしな」

「木乃香……」

「お父様……お父様の気持ちもわかるよ。でもな、これはうちが決めた道なんや。要兄ちゃんと一緒に歩きたいんや」

「……大きくなりましたね。少し前までは子供でしたのに」

「子供ってのは親がいない所で成長するもんさ。そういえば千雨は親の許可は取ったのか？」

「うん？うちは親はいないよ。爺ちゃんと婆ちゃんはいるけど。言わなかったっけ？」

聞いてねぇよ。まあこの調子だと問題ないみたいだな。じゃあ呼ぶか。

「ゆか「は～い」お疲れ、紫」

「あらつまらない。もう少し面白い反応を期待してたのに」

「だったら俺を殺すんだな」

「血生臭いのは嫌いよ」

「ほざけ妖怪。じゃあ頼む。今度飯でも奢ろう」

「それは嬉しいわね。じゃあ幻想郷に来るのはスキマに入りなさい。なのはちゃん達は先に行ってるから」

くぱぁ

「変な効果音はやめい！！」

スパァン

「ああ！ツッコミはうちが」

「このちゃんはボケや」

「あややぁ、最後まで騒がしいですね」

「それがこのメンバーだろ」

「っと間に合ったな」

「見送りに来たわよ～」

「志貴にアルク。お疲れだな」

こいつらは麻帆良に残って店を続けるらしい。それがどれだけ続くかわからないが、こいつらはこいつらで幸せに暮らすだろう。

「さあ入った入った」

みんなどんどんと入っていき、最後は俺だけとなった。

「貴方は入らないの？」

「もちろん入るさ。その前に」

じゃあな麻帆良。機会があればまた会おう。

エピローグ（後書き）

どうでしたでしょうか。最後までグダってたのはしょうがないかな。次回からは三回のコラボをやって、そして次回作に入ります。知らない人のために伝えておきますが、次回作はスターオーシャン・セカンドストーリーが舞台となります。

では次回もお楽しみに。

弟子（？）です（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「ここでアンケート！！」

シャ「次のうち、好きなキャラを二人選んでね」

アリサ

シャマル

叶

椛

ア「私達が言いたいのはこれだけ！！」

シャ「今回のコラボは畏無様。ではどうぞ」

弟子（？）です

要ｓｉｄｅ

最近響介の奴が俺の技を使ったとかなんとかって神様から聞いたな。
どうせだからいろいろ教えてやろう。

「というわけで神様よろしく」

『任せたまへ』

目の前に黒い穴が開き、そこからペッと吐き出されるようにして響介が出てきた。より女らしくなったな。男のくせに。

「よう、元気か？」

「要さん！？いきなり何ですか！？」

「お前が許可料を払わずにシールドスライサーを使ったと聞いてな」

「許可料いるの！？」

「いや、いらん。今回はどんなもんか見てやろうと思ってな」

「あ、それはどうも」

俺の作った技なんだから俺が直接見て、直接教えた方がいいしな。

響介ｓｉｄｅ

要さんの別荘にまた来てしまった。前回の嫌な思い出が蘇る。

「じゃあ一発撃ってみろ。デバイスなくても出来るんだろ？」

「はい。じゃあ」

俺はシールドを作ってそれを加工していく。極力薄く、そして鋭くする。

「これでどうですか？」

「よく出来てるが、まだまだだな」

まあそう言われると思った。所詮見様見真似だもんな。

「じゃあオリジナルを見せてやるよ」

要さんがそう言って作ったシールドスライサーは自分のと大差なさそうに見えた。

「俺のとお前のの違いは切れ味と強度だ」

「そんなに違うんですか？」

「ああ。俺のシールドスライサーは非常によく斬れ」

要さんはシールドスライサーの刃を地面で滑らすと地面がさっくりと斬れ……

「非常に脆い」

シールドスライサーの面を要さんが軽く叩いただけで燁が入った。

「そんなに脆くていいんですか？」

「面を攻撃されなきゃ割れる事はないし、第一これは使い捨てだぞ」

「まあそうですね」

「お前のはまだまだ厚い。もっと薄くしろ。作る時間も短くな」

「はい」

薄く、そして早く。

パリン

「あ……」

割れてしまった。上手くいかないな。

「やっぱり」

「やっぱり？」

「最初からわかっていたが、お前のシールドスライサーが俺のシールドスライサーに近付くのは不可能なんだ」

「どうしてです。経験とかですか？」

「才能。俺のシールドスライサーはレアスキルで作ったものだからさ」

あ、そうか。どんなに技術を真似てもレアスキルまで真似る事は出来ない。これは決定的な差だ。

「仕方ない。シールドスライサーの発展系を教えよう。シールドスライサーが形だけでも作れるなら問題ないはずだ」

「わかりました。お願いします」

「まず、両手にシールドを二つ作れるか？」

「はい」

「よし。なら複数同時に作れるって事だな」

複数同時、つまりシールドスライサーを複数作るのかな？

「じゃあ次。小さなシールドを作れるか？」

小さなシールド？やった事がないな。シールドってあくまでも身を守るためのものだから大きくはしても小さくする理由がない。

「やってみろ」

「じゃあとりあえず……出来た」

俺の手のひらには十円玉サイズのシールドがあった。術式自体は変わらないから案外あっさりと出来た。

「よし。なら次は俺の真似をしろ」

要さんが手を開くと、指先に一つずつ小さなシールドが浮いていた。

「これがミニスライサー」

「へー」

「次はお前だぞ」

果たして出来るだろうか。シールドスライサーを同時に５つ。それも小さなもの。集中力がいりそうだ。

「……出来〈パリン〉あっ」

作れたもののすぐに割れてしまった。

「レアスキルがないと難しいか。まあミニスライサー自体は作れるようだな。それだけでも十分。次は操作に入ろう」

「操作だったらレアスキルは関係ないですね」

「ああ。まずシールドスライサーを作れ」

「はい」

俺は普通のシールドスライサーを作り出した。

「ならそれをその場に固定」

「こうですか？」

俺がシールドスライサーから離れてもシールドスライサーはその場に浮き続けている。これは魔力弾と同じ感覚だな。

「それじゃあ自由に動かせ」

「はい」

シールドスライサーを操って縦横無尽に飛ばす。やっぱり楽だ。

「魔法の基礎が出来てる分簡単にやってのけるな。これはミニスライサーの時に特に役に立つ」

確かに、あんな小さくて薄いのが設置されていても気付きにくいだろう。魔力探知には引っかかるかもしれないが。

「ミニスライサーは同時に５つは作れるように頑張れ。あの調子なら可能だ」

「はい、頑張ります」

「じゃあ解散！！」

「え？もうですか？」

「もうなんです。ベールシールド！！」

「！！？」

突然要さんが布みたいなシールドを作って俺に巻きつけた。シールドなだけあってバインドブレイクは効かない。

「さようならの大砲だ！！」

どこからともなく出てきた大砲に詰め込まれる。え？嘘だよね？流石にこんな事しないよね？

「また来いよ！！」

ドォーン

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…………！！」

弟子（？）です（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「前書きで何かやってるみたい」

椛「ほっときましょう」

叶「もう仕事ないね」

椛「ないならないで次回予告をしましょう」

叶「その夫婦は相変わらずぶっ飛んでる。そしてパパの胃痛仲間」

椛「次回は香崎様とのコラボ。お楽しみに」

家族です（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「中間発表！！」

シャ「アンケートは次回までだからね。では結果はこちら」

ア…4

シャ…3

椛…8

叶…7

雨季…1

アリシャ「「何故作者がある！？」」

雨「いや～」

アリシャ「「照れるな！！」」

雨「じゃあ本編どうぞ」

アリシャ「「進めるな！！」」

家族です

鈴ｓｉｄｅ

叶を愛でよう。突然そう思った。だから要の世界に行こう。

「ユリ～」

「いいわよ～」

何も言ってないが、以心伝心だから問題ない。そうだ。ついでだからセインも連れて行こう。あいつはあそこが好きだからな。

セインを連れて行くために天界まで来たんだが、また働いてるな。

「セイン、いいか？」

「あ、おとーさんにおかーさんだー」

「「えっ！？」」

なんか幼児退行してないか？これはこれでそそられるものがあるのは確かだが、一体何があった。

「お二人共いらっしゃい。ちょっとセインちゃんを預かって下さい」

「真琴、それはこちらからお願いしたいことだけど、セインどうしたの？」

「現実逃避ですね。少し休めば治りますよ。むしろ治して」

セインは頑張り過ぎだな。俺らが誠心誠意休ませてやろう。主に頑張るのは要だが。

「じゃあセイン、要おじちゃんの所に行きましょうね」

「うん、いくー」

「……鈴」

「もう録画中だ」

これは思わぬところで面白可愛い映像が撮れたな。

要ｓｉｄｅ

嫌な予感がした。なんというか、とにかくよろしくはない予感だ。

「オッスー」

「叶はいる～？」

「お前らか鈴、ユリ。それにセインまで。ってセインは何でそんなに赤いんだ？」

「……いえ」

いえ、じゃないだろう。顔が真っ赤だぞ。一体どうしたんだ。

「ちょっと可愛い映像を撮っただけよ。見る？」

「やめて下さい！！！」

「なにか知らんがセインが嫌がってるからやめておこう」

「ふぅ、ありがとうございます」

「気にするな。最近無理してないか？」

「そんなに「すっごいしてるわよ。ねえ鈴」「ああ、してるな。だから要頼む」」

嘘はいかんな。仕方ない。頑張って疲れを取ってやろう。

「叶は向こうの部屋にいるぞ」

「サンキュ、要」

「じゃあセインをよろしく」

……このまま送っていいものか。もし叶に変な事教えられてれても困るしな。ちょっと釘を刺しておくか。

「叶に変な事教えないで下さいよ。お義父さん、お義母さん」

「「うあぁぁぁぁぁぁぁ！！！？かゆいぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」」

ざまあみろ。

百合姫ｓｉｄｅ

要……あんな私達専用口撃を使うなんて。反則よ反則。うぅ、まだムズムズする。

「叶、元気？」

「グランパとグランマだ！！！」

「「何故英語に走った！？」」

「冗談だよ。こんにちは、おじいちゃん、おばあちゃん」

「この～、言うようになったな」

「うりうり、あんな事言う子にはオシオキよ～」

「きゃー♪」

本当に可愛いわ。こうやって甘えられるのはなんか癒されるのよね。

「叶、最近どう？」

「楽しいよ」

「まーくんは優しくしてくれるか？」

「……えへへ～♪♪♪」

いい調子みたいね。物凄い顔がだらしなくなってるもの。

「じゃあまーくんの所に行くか？」

「今日はいいかな」

「なんで？」

「二人と一緒にいたいから♪」

「「もう可愛いなぁ♪♪♪」」

セインｓｉｄｅ

要さんにある部屋へと連れてこられた。白くてベッドが一つだけある部屋だ。

「じゃあそこに寝て。マッサージするから」

「わかりました」

「音楽とかお香とかはいるか？」

「要さんにお任せします」

「了解」

少しするとゆったりした音楽が流れ、いい香りがしてきた。そして

要さんが私の背中を軽く触ってきた。

「デスクワークが多かったようだな。体にズレがあるぞ」

「わかりますか？」

「まずズレから治すぞ。抜骨」

「え？」

ゴキッ

「はぐっ！？」

「荒療治だが、これが一番だ。どんどん外すぞ。抜骨」

ゴキッ　ゴキッ　ゴキッ　ゴキッ　ゴキッ　ゴキッ

「……」

骨、そんなに……外し…て……いい、の？

「はめ直したが、悪い所は？」

「大丈夫です。ただこれからは一言言って下さい」

「それは悪かった。じゃあ次の治療に入るぞ。次は針とお灸、選ばせてやろう」

どっちがいいんだろう。この手の事はさっぱりわからない。

「じゃあ、針で」

「はいよ。ニードルガン」

それが針代わりなんだ。

「とんとんとんっと」

「頭？」

頭にやるんだ。痛くはないけど、ちょっと違和感がある感じかな。

「ツボは全身にあるんだ。頭にだってある」

「そうですか」

「……セイン。嫌なら嫌って言えよ」

「はい？」

「こんなになるまで仕事して。絶対にやらなきゃいけないわけじゃ

ないんだろ？」

「そうですけど……」

「お節介なのは知ってる。嫌いな仕事ならこんなになるまでやらないもんな」

「あはは……」

でも実際に嫌な事はあるんだよね。主にいろんな神様が押し付けてきた仕事とか。

「はい、お終い」

「ん～、すっきりしました」

「それは良かった」

要ｓｉｄｅ

あいつらが帰る時間になったんだが、もうだだをこねてしょうがない……夫婦が。

「いい加減にしろ！！」

「い～や～！！」

「要ばっかり叶を独占するな！！」

「うちの娘です！！ジェイルならともかくお義父さんとお義母さんに預ける義理はありません！！」

「「だからそれやめろおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

こいつら本当にどうしてくれようか。

「まあまあ、ここは叶ちゃんの意思を優先しましょう」

おぉ、流石セイン。いい事を言う。叶ならきっと俺を選んでくれるはず。

「セイン！味方したら映像データを消すわ！！」

「要さん。ちょっとしたお泊まり感覚じゃないですか」

「セイィィィィィィィン！！？」

まさかの裏切り。どうする、って勝手に連れて行こうとするなぁぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！！！

家族です（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

椛「叶ちゃんがお持ち帰りされたので私一人です」

叶「ただいま！！」

椛「あ、早かったわね」

叶「これがあるからね。そういえばアンケートで作者さんが入ったって？」

椛「私と雨季さんの二人のが見たいんですって」

叶「なら私は前書きかな？」

椛「そんな事考えなくていいのよ。では次回予告」

叶「仲がいいのか悪いのか。でも家族団欒はいい事です」

椛「次回は秋代様とのコラボ。お楽しみに」

家族です　パート2（前書き）

〈真・アリシャの部屋〉

ア「inネギま、ついに終わります」

シャ「まだ次回作があるからお楽しみに」

ア「それとアンケートはこちら」

ア…5

シャ…3

椛…8

叶…7

雨季…3

シャ「作者と同率……」

ア「今回のアンケートの上位三人が次回作に出演」

シャ「……え？つまり私は？」

ア「今までありがとう」

シャ「うわぁーん！！」

ア「では本編どうぞ」

家族です　パート2

要ｓｉｄｅ

今日は予定通りならそろそろあいつらが来るんだが。

「パパ、楽しみだね」

「そうだな」

「おい、来てやったぞ」

「何気に時間通りだな。よく来たな、貴史、ジェイル、乱」

今回は叶とこの三人と一緒にピクニックという予定だ。

「こういうのはいいよな」

「たまにはな。遠足を思い出す」

「だからこうしてバス停集合なんだろ」

目的地まではバスで行く事になっている。ピクニックや遠足といったらバスで行くのが定番だろ。

「あ、来たよ！」

「叶、そんなに焦らなくてもいいぞ」

「ふふふ、叶もまだまだ子供だからな。私達がある程度見守ってあげないと」

「そうだな。乱もあまり俺から離れるなよ」

「親父、いい加減にしてくれよ」

貴史も親らしくなったな。

乱ｓｉｄｅ

わざわざバスで行く必要あるのかな？それよりも……

「ポテチ食うか？」

「おう」

「私にも回してくれ」

さっきから要さんが席から身を乗り出してお菓子を回してくる。席は俺と親父、その前に要さんと叶、それで俺達の後ろには母さんがいる。

「乱は食ってるか？遠慮せずにほどほどに食べるのが遠足マナーだぞ」

「そうなの？」

「そうだよ。乱お姉ちゃんもこれから覚えてね」

「いや、覚えても遠足なんて行かないから」

そんな事してる暇があったら修行してるし。第一遠足なんて行くのは小学生とかだろ。年齢的に無理だ。

「年齢なら私の力でなんとかしてやるぞ」

「いいよ母さん。あと考え読まないで」

「そうだぞ。小さくなった乱を襲うのが出てくるかもしれないじゃないか」

「いや親父。そういう問題じゃないから」

「貴史、だからこその監視だろ」

「要さんも混じらないでよ」

もうやだ、この親ばか達。

「私は親ばかではないぞ」

「そうだね。母さんはまだいい。そして考え読まないで」

「娘の考えを知りたいのが親心だ」

「私も」

「もちろんだとも」

そんな事言われてもやっぱりやりにくいよな。というか母さんは知りたいじゃなくて知ってるじゃないか。

ジェイルｓｉｄｅ

どこに着くかと思えば、意外に普通な公園だったな。

「さあ昼まで遊ぶぞ」

「わーい！！」

「乱、あんまり遠くに行くなよ。それと叶もちゃんと見てやれよ」

「親父は心配し過ぎだって。叶は大丈夫。ちゃんと一緒にいるから」

「乱お姉ちゃん！！早く行こ！！」

「っとと、そんなに引っ張らなくてもいいって」

子供は元気だな。私は、そうだな。母親らしくお昼の準備でもしてみるか。

「貴史、ジェイル、バーベキューセット持ってきたから準備手伝ってくれ」

「バーベキューか。いいじゃんか。ピクニックらしい」

「ピクニックはどちらかと言えば弁当ではないかね？だがバーベキューはバーベキューで盛り上がるしな」

「そういう事。じゃあコンロとかは俺らで準備するから食材はジェイルが頼む」

要は食材やバーベキューコンロをバッグから次々と出していく。四次元、ではないな。空間屈折を利用したものか。使い勝手が良さそうだ。以前冷蔵庫を四次元にした時、干物が化石になって発見された事があったしな。

「牛、豚、鳥、ラム、野菜もいろいろあるな」

「バーベキューに合いそうなのを持ってきた」

「調味料もくれ」

「あいよ」

大きめの牛肉は軽く塩コショウをふってステーキにしよう。ラムは漬け汁を作ってしっかり臭みを取らないとな。野菜も火の通りが悪いものは薄めに切ってと。

「……母親だな」

自分でやってて思ったが、随分と母親らしい事をやっているな。まあ気にするような事でもないか。あの娘達が帰ってくる前に準備を済ませよう。

叶ｓｉｄｅ

久しぶりに乱お姉ちゃんといっぱい遊べた。長い滑り台滑ったり、ブランコで一周したり、登り棒駆け上がったり。楽しかった。

「お腹へった～」

「……そうだな。多分なんか用意して待っててくれてるよ」

「なら早く行こ！！」

「ちょっ!?急がなくても飯は残ってるって!!」

乱お姉ちゃんの動きがいつもより遅いけど、疲れたのかな?そんな事ないよね。乱お姉ちゃんは凄いもん。

「おーい」

「ただいま~!!バーベキューだ!!」

「いっぱい食べるんだぞ。ん?乱、疲れてるのか?」

「大丈夫、要さん。俺にも皿頂戴」

「ほい」

お肉お肉~♪いっぱい食べるよ。

「叶、野菜もしっかり取りなさい」

「は~い、ママ」

あんまり好きじゃないんだけど、ママが言うからしょうがないね。それに好き嫌いしてたら大きくなれないもん。主に胸が。

「乱、これもう焼けてるぞ」

「俺はもういいから親父が食べろよ」

「俺より娘優先だ」

お姉ちゃんも愛されてるね。でもちょっと貴史パパに釘を刺しておかないと。

「貴史パパ、乱お姉ちゃん嫌がってるよ。乱お姉ちゃんだって大人なんだから」

「いやいや、俺から見れば一生子供だよ。子供の世話は親がしないとな」

「放置してたのに？」

「だからこそ今その分を世話しないとな」

これは重症だ。私じゃあどうしようも出来ないよ。ごめんね、お姉ちゃん。

「叶、どの肉が欲しい？」

「牛！！」

お肉は牛が一番だと思います。

貴史ｓｉｄｅ

帰りのバスの中、乱と叶は寝ている。叶はともかく乱も疲れたんだな。

「乱は叶に振り回されてたみたいだな」

「それでは仕方あるまい。子供は遊んでいる時の体力は無尽蔵だからな。乱でも疲れるだろう」

「そもそも戦闘の疲れと遊びの疲れは別物だからな」

俺だって戦闘で疲れなくても遊びで疲れるのはある。ただその疲れはなんかいいんだよな。

「さて、貴史と要に言いたい事がある」

「どうしたジェイル」

「そうだぞ。そんなに改まって」

「二人共、少し過保護ではないか？」

ああ、そんな事か。俺も、多分要も自覚している。ただきっとこういうのは自覚してどうこうなる問題じゃないんだよ。

「俺らは娘を守りたい」

「例えそれで嫌われてもな」

「筋金入りだな。だが嫌われるのはないだろう。聞いてみろ」

聞いてみろって、寝てるのにか？

「パ…パ……えへっ」

「ん……おや、じ……んん」

「……寝言か」

「随分とはっきりした寝言だ。しかもいいタイミングで」

「それだけ二人は愛されているのだろう。私は出なかったが」

あーあ、ジェイルが拗ねちまった。どうにかならないか？

「……マ～マ♪」

「母さん……」

「……ああ二人共、愛しているぞ」

本当に空気を読んでくれるな。流石俺らの娘だ。本当に、よく出来た娘だ。

「あ、貴史。乱にプレゼントだ」

「んだこれ？」

「白いワンピース。女の子はお洒落しないとな」

「ありがとよ」

乱が着るかどうかは知らないが、乱に似合いそうだから貰っとこう。意外とセンスがあるな。

「また家族でピクニックしたいな」

「ならカルタと亜衣も連れてこないとな。カルタ繋がりでマリアと一真とその息子達もいるか」

「私の家族も忘れないでくれ」

「チート夫婦にナンバーズか。叶がまーくんと付き合ったらゼフィリスも必要だな。うちの妻達も連れてきた方がいいか？」

「なら一真の嫁達もな」

「それだと同一存在が集まって大変だろう。だが私は大歓迎だ」

もしもそうなったら賑やかどころじゃないな。だがそれがいい。そういうハチャメチャが人生には必要だ。それも楽しいがやっぱり……

「そうだ要。クロナが胃痛じゃない要は要じゃないからって今度攻めてくるそうだぞ」

「……ハハハ、冗談は止めろよ」

「それは私も聞いたな。気をつけた方がいい」

「……マジかよ」

「「冗談だよ」」

「お前らな。胃が痛んだぞ」

やっぱり要を胃痛にするのがこの世界で一番の楽しみだな。

家族です　パート2（後書き）

〈かなもみの楽屋訪問〉

叶「終わりました」

椛「意外と短かった気がしたそうです」

叶「次回作の世界では基本的にパパだけが出るようだよ」

椛「何かあれば奥さん達や鏡さんが登場って感じかしらね」

叶「では次回作もお楽しみに」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3879o/

チートじゃ済まないinネギま

2011年7月31日18時05分発行